バージョン **10** リリース **1**
2017 年 **10** 月

IBM Marketing Platform 管理者ガイド

注記

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、 719 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Marketing Platform バージョン 10、リリース 1、モディフィケーション 0、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： Version 10 Release 1
October 2017
IBM Marketing Platform Administrator's Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 1999, 2017.

目次

第 1 章 IBM Marketing Platform の概要 1

Marketing Platform のセキュリティー機能について 1
構成管理. 3
IBM Marketing Software のローカライズ 4
共通ユーザー・インターフェース 4
IBM Marketing Software へのログイン 4
Marketing Platform の資料とヘルプ 6

第 2 章 IBM Marketing Software ユーザー・アカウント管理 9

ユーザー・アカウントのタイプ: 内部および外部 . . 9
内部ユーザー・アカウントのプロパティー 10
内部ユーザー・アカウントの追加 11
内部ユーザー・アカウントの削除 11
内部ユーザーのパスワード有効期限の変更 11
内部ユーザー・パスワードのリセット 12
内部ユーザー・アカウントのプロパティーの変更 . . 12
内部ユーザーのシステムステータスの変更 13
内部ユーザーのデータ・ソースの追加 13
内部ユーザーのデータ・ソースの変更 14
内部ユーザーのデータ・ソースの削除 14
ユーザー管理ページ 14
ロケール設定. 17
ユーザーのロケール設定の指定. 17
外部ユーザーの同期 18
外部ユーザーの同期化の強制 18

第 3 章 セキュリティー管理 19

Marketing Platform でのセキュリティー管理者の権限とタスク 19
役割名とポリシー名での特殊文字 20
Marketing Platform および Campaign での役割と権限. 20
Marketing Platform でのユーザー・アプリケーションのアクセスの管理の概要 21
グループのタイプ: 内部および外部 21
パーティションおよびセキュリティーの管理 . . . 22
事前構成されたユーザーおよび役割 23
パーティション間管理特権 25
内部グループの追加 26
サブグループの追加 26
グループまたはサブグループの削除 27
グループまたはサブグループの説明の変更 27
パーティションへのグループの割り当て. 28
グループまたはサブグループへのユーザーの追加 . . 28
グループまたはサブグループからのユーザーの除去 29
ユーザー・グループ管理ページ. 29
役割の作成 31
役割の権限の変更 31
システムからの役割の除去 32
グループへの役割の割り当てまたはグループからの役割の除去 33
ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除. 33
権限の状態の定義 34
基本的な役割のみを使用する製品の権限. 35
Marketing Platform の権限. 36
Opportunity Detect の権限. 38

第 4 章 構成管理 41

プロパティー・カテゴリー 41
カテゴリー・タイプ 41
カテゴリーを複製するためのテンプレート . . . 42
カテゴリー命名上の制限 42
プロパティーの説明 43
最新表示の機能 43
デフォルトのユーザロケール設定 43
カテゴリの移動 44
プロパティ値の編集 44
テンプレートからのカテゴリーの作成 45
カテゴリの削除 45

第 5 章 ダッシュボードの管理 47

ダッシュボードの計画. 47
ダッシュボード・オーディエンス 47
ダッシュボードの表示に必要なユーザ権限 48
事前定義ポートレット. 48
事前定義ポートレットの使用可能性 48
Marketing Operations IBM Cognos レポート・ポートレット. 49
Marketing Operations リスト・ポートレット . . 50
Campaign の IBM Cognos レポート・ポートレット. 51
Campaign リスト・ポートレット 52
eMessage IBM Cognos レポート・ポートレット 52
Interact IBM Cognos レポート・ポートレット 53
Distributed Marketing リスト・ポートレット . . 53
Contact Optimization リスト・ポートレット . . 54
事前作成されたダッシュボード. 54
事前作成ダッシュボードの可用性 54
事前作成ダッシュボードのリスト 54
IBM Cognos レポートのパフォーマンス上の考慮事項 55
ダッシュボード・レポートのスケジュール . . . 57
ダッシュボードのセットアップ. 57
ダッシュボードの管理に必要な権限 57
ダッシュボードのレイアウト 58
ダッシュボードとパーティション 58
マルチパーティション環境でのダッシュボードの使用に関する概要 58
事前定義ポートレットの有効化または無効化 . . 59

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

事前作成されていないダッシュボードの作成 . . 60
事前作成されたダッシュボードの作成 61
ダッシュボードへの事前定義ポートレットの追加 61
ダッシュボードからのポートレットの削除 . . . 62
ポートレットの名前またはプロパティーの変更 . 62
ダッシュボードの名前またはプロパティーの変更 63
ダッシュボードの削除 63
ダッシュボード管理者の割り当てまたは変更 . . 63
「ポートレットの管理」ページ 64
クイック・リンク・ポートレット 65
クイック・リンク・ポートレットの作成 65
カスタム・ポートレット 66
カスタム・ポートレットのタイプおよび使用可能性 66
カスタム・ポートレットの認証に関する考慮事項 66
ポートレットの作成プロセスの概要 67
Digital Analytics for On Premises レポートからの URL の作成 68
IBM Cognos ダッシュボード・レポートからの URL の作成 69
Digital Analytics レポートからの URL の作成 69
イントラネットまたはインターネットのページからの URL の作成 70
ダッシュボードへのカスタム・ポートレットの追加 70
動的トークン 71
「カスタム・ポートレットの作成」ページ . . . 72
ダッシュボードのメンバーシップの管理 73
ダッシュボード管理者 73
ダッシュボード・メンバーシップの認可または削除 73

第 6 章 IBM Marketing Software スケジューラー 75

実行が正常に完了したときまたは失敗したときに送信される Scheduler のトリガー 76
複数の実行の完了に依存するスケジュール 77
外部スクリプトから送信されるトリガーのスケジュール 78
スケジューラーの繰り返しパターン 79
タイム・ゾーンのサポート 80
スケジューラーの制限 80
IBM Marketing Software スケジューラーのスロットルのセットアップ 81
外部タスクのホワイトリスト前提条件 (フィックスパック 10.0.0.1 の場合のみ). 82
ホワイトリストへのスクリプトの追加 82
ホワイトリストへの API の追加 83
スケジュールのセットアップに関するベスト・プラクティス 84
スケジュールの作成ウィザード 85
除外の実行 89
除外ルールの表示 89
除外ルールの追加 89
除外ルールの削除 91
除外ルールの有効化と無効化 91
除外ルールのインポート 91
Campaign とともにスケジューラーを使用する際の考慮事項 93
IBM Campaign スケジュール・プロセスと IBM Marketing Software Scheduler の相違点 . . . 93
フローチャートのスケジューリングに必要な権限 94
デフォルト・パラメーターを使用したフローチャート・スケジュールの作成 95
Campaign フローチャート実行スケジュールのデフォルト・パラメーターのオーバーライドについて 95
スケジュール通知 97
作成するスケジュールの通知のセットアップ . . 98
作成するスケジュールの通知の削除または変更 . 98
ユーザーのグループのスケジュール通知のセットアップ 98
「マイ・ジョブ通知」ページ 99
スケジュール管理 99
スケジュール管理のページ 101

第 7 章 SAML 2.0 ベースのフェデレーテッド認証 107

フェデレーテッド認証の実装方法. 110
データ・リポジトリーの作成 110
Web アプリケーション・サーバーでの IdP データ・ソースの構成 111
IBM IdP クライアント・ファサードのクラスパスのセットアップ 112
IdP サーバーの配置 112
IdP サーバーの構成 113
鍵ストアの取得と IdP サーバーへのインポート 115
「構成」ページでの構成プロパティーの設定 . . 115
サービス・プロバイダーとユーザーのオンボーディング. 116
IdP クライアント・ファサードを使用してトークンを生成してサービス・プロバイダーに渡す . 116
関連概念 118

第 8 章 SAML 2.0 シングル・サインオン 119

SAML 2.0 シングル・サインオン実装時の動作 . . 120
構成プロセスのロードマップ: SAML 2.0 シングル・サインオン. 121
メタデータ・ファイルのセットアップ 122
SAML 2.0 構成プロパティーの設定 122
SAML シングル・サインオンのためのデータ・ソースのセットアップ 122
サンプル SAML 2.0 IdP アサーション. 123
サンプル IdP メタデータ 125

第 9 章 アプリケーション間の JWT 認証の構成. 129

第 10 章 IBM Marketing Software と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオン 131
自動ユーザー・アカウント作成による IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ 132
手動ユーザー・アカウント作成による IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ 134
Digital Analytics と IBM Marketing Software の間のシングル・サインオンのための WebLogic の構成 136
Digital Analytics と IBM Marketing Software の間のシングル・サインオンのための WebSphere の構成 136
カスタム・プロキシーを使用した Digital Analytics と Websense の統合 137
WebSphere へのカスタム・プロキシーの配置 138
WebSphere にアウトバウンド・アクセスがない場合の Digital Analytics 証明書のインポート . 139
WebSphere にアウトバウンド・アクセスがある場合の Digital Analytics 証明書のインポート . 139
次のステップ 140

第 11 章 IBM Marketing Software と Windows Active Directory の統合 . . 141
Active Directory 統合機能 141
Active Directory 統合の前提条件 144
構成プロセスのロードマップ: Active Directory の統合 145
必要な情報の入手 146
グループ・メンバーシップ、マッピング、およびアプリケーション・アクセス 147
Marketing Platform でのディレクトリー・サーバーの資格情報の保管 148
IBM Marketing Software での LDAP ログイン方法の接続プロパティーの設定 149
LDAP 同期プロパティーの設定 150
ユーザー属性マップ・プロパティーの設定. . . 151
IBM Marketing Software グループへの LDAP グループのマップ 152
同期のテスト 152
PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザーのセットアップ 153
NTLMv2 認証を有効にするためのセキュリティー・モードの設定 153
Web アプリケーション・サーバーの再始動 . . 154
Active Directory ユーザーとしてのログインのテスト. 154

第 12 章 IBM Marketing Software および LDAP サーバー間の統合 155
LDAP 統合機能 155
LDAP 統合の前提条件 158
構成プロセスのロードマップ: LDAP の統合 . . . 158
必要な情報の入手 159
グループ・メンバーシップ、マッピング、およびアプリケーション・アクセス 161
Marketing Platform でのディレクトリー・サーバーの資格情報の保管 161
IBM Marketing Software での LDAP ログイン方法の接続プロパティーの設定 162
LDAP 同期プロパティーの設定 163
ユーザー属性マップ・プロパティーの設定. . . 164
IBM Marketing Software グループへの LDAP グループのマップ 165
同期のテスト 166
LDAP へのセキュリティー・モードの設定 . . 166
Web アプリケーション・サーバーの再始動 . . 166
LDAP ユーザーとしてのログインのテスト . . 166

第 13 章 Web アクセス制御プラットフォームとの統合 167
コンテキスト・ルートについて 168
SiteMinder との統合の前提条件 169
IBM Marketing Software 製品のための SiteMinder の構成 170
SiteMinder でのシングル・ログアウトの有効化 172
IBM Security Access Manager 統合の前提条件 173
IBM Marketing Software 製品対応 IBM Security Access Manager の構成. 174
構成プロセスのロードマップ: IBM Marketing Software と Web アクセス制御システムとの統合 . 177
LDAP 統合の実行. 177
IBM Marketing Software の Web アクセス制御接続プロパティーの設定. 177
Web アプリケーション・サーバーの再始動 . . 178
Web アクセス制御の同期化と IBM Marketing Software ログインのテスト 178
SSL タイプの WebSEAL ジャンクションを使用した統合の構成 179

第 14 章 アラートおよび通知の管理 181
アラートおよび通知のサブスクリプション. . . . 181
システム・アラートおよび通知サブスクリプションの設定 182
IBM Marketing Software での電子メールによる通知の構成 182

第 15 章 片方向 SSL の実装 185
SSL 証明書の概要 185
IBM Marketing Software でのクライアントおよびサーバーの役割. 186
IBM Marketing Software における SSL 187

構成プロセスのロードマップ: IBM Marketing Software での SSL の実装 189
SSL の証明書 189
証明書の作成と構成 190
クラスター環境用の証明書の作成と構成 . . . 192
SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成 195
Cookie のセキュリティーの確認 196
SSL 用の IBM Marketing Software の構成 . . . 197
Marketing Platform での SSL の構成 197
クラスター環境における Platform での SSL の構成 198
LDAP 統合を使った Marketing Platform での SSL の構成 198
データ・フィルターを使った Marketing Platform での SSL の構成 199
Marketing Operations での SSL の構成 . . . 200
Campaign での SSL の構成 201
クラスター環境における Campaign での SSL の構成. 202
IBM Campaign での SSL の構成と IBM Campaign リスナーでの非 SSL の構成 . . . 203
Contact Optimization での SSL の構成 . . . 206
Interact での SSL の構成 206
Distributed Marketing での SSL の構成 . . . 207
Reports での SSL の構成 207
Digital Analytics for On Premises での SSL の構成 207
SSL 構成の検証 208
SSL に関する有用なリンク 208
WebLogic の保護品質 (QoP) 設定 208
WebSphere の保護品質 (QoP) 設定. 209

第 16 章 IBM Marketing Software API のセキュリティー・フレームワーク. . . 211

第 17 章 データ・フィルターの作成および管理. 215
データ・フィルターの作成の概要. 215
ユーザー・アクセスを制限するデータ・フィルターの関連付け 215
データ・フィルターの 2 つの作成方法: 自動生成と手動指定 215
ユーザーおよびグループを割り当てるための 2 つの方法: ユーザー・インターフェースと XML . 216
データ・フィルターの概念 216
構成プロセスのロードマップ: データ・フィルターの作成. 217
データ・フィルター基準の計画: 自動生成 . . . 218
データ・フィルター基準の計画: 手動生成 . . . 219
ご使用のデータベース用の JDBC ドライバーの取得: 自動生成のみ 219
必要な情報の入手 220
データ・フィルターを指定する XML の作成 220
必須のデータ・フィルター構成プロパティーの設定 221
データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加 222
データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て 222
データ・フィルター XML のリファレンス . . . 223
XML の ID について 223
AddDataConfiguration | dataConfiguration 223
AddLogicalFields | logicalFields | LogicalField 224
GenerateDataFilters 224
GenerateDataFilters | fixedFields | FixedField 225
GenerateDataFilters | profileField | ProfileField 226
AddDataTable | dataTable 226
AddDataFilters | dataFilters | DataFilter . . 226
AddDataFilters | dataFilters | DataFilter | fieldConstraints | FieldConstraint 227
AddDataTable | dataTable | fields | TableField 227
AddAudience | audience 227
AddAudience | audience | fields | AudienceField 228
addAudienceTableAssociations | addAudienceTableAssociation | audienceTableAssociation 228
AddAssignments | assignments | AssignmentByName 229
例: データ・フィルターの手動指定 229
例: データ・フィルターのセットの自動生成 . . . 234
XML でのユーザーおよびグループの割り当てについて 239
ユーザー・インターフェースを介したユーザーおよびグループの割り当てについて 244
拡張検索 245
割り当て済みデータフィルタの表示 246
データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て 246
データフィルタ割り当ての削除 246
初期セットの作成後のデータ・フィルターの追加 247

第 18 章 IBM Marketing Software での監査イベントの追跡 249
監査イベントの追跡に対する制限. 249
既存の監査イベント 249
遡及的変更 250
マルチパーティション環境での監査イベント・レポートの表示に関する権限. 250
イベント監査の有効化と無効化 250
レポートに表示される監査イベントの構成. . . . 251
監査レポートの内容と表示の変更. 252
「レポート・パラメーター」ウィンドウのフィールド 253
監査イベント・レポートのフィールドとボタン . . 253
アーカイブ済みの監査イベント 254
監査バックアップ通知の構成 255
監査イベント・レポートのエクスポート 256

イベント・ボリュームが大きい場合の監査イベント・レポートのエクスポートの最適化 256

第 19 章 Marketing Platform システム・ログ. 259

システム・ログの構成 259
単一ユーザーのロギングの有効化. 261

第 20 章 IBM Marketing Platform のユーティリティーおよび SQL スクリプト 265

追加マシンでの Marketing Platform ユーティリティーのセットアップ 267
Marketing Platform ユーティリティー. 268
alertConfigTool. 268
configTool 268
datafilteringScriptTool 273
encryptPasswords 275
partitionTool 276
populateDb 278
restoreAccess 279
scheduler_console_client. 281
Marketing Platform SQL スクリプト 284
ManagerSchema_DeleteAll.sql. 284
ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql . . . 284
ManagerSchema_DropAll.sql 285
システム・テーブルを作成する SQL スクリプト 286

第 21 章 「構成」ページでのプロパティーの構成. 289

IBM Marketing Platform 構成プロパティー . . . 289
IBM Marketing Platform 289
IBM Marketing Software | 一般 | ナビゲーション 292
IBM Marketing Software | 一般 | データ・フィルタリング 293
IBM Marketing Software | 一般 | パスワード設定 294
IBM Marketing Software | 一般 | その他 . . 296
IBM Marketing Software | 一般 | 通信 | E メール. 297
IBM Marketing Platform | スケジューラー 299
IBM Marketing Platform | スケジューラー | 反復定義 300
IBM Marketing Platform | スケジューラー | スケジュール登録 | [製品] | [オブジェクト・タイプ] 302
IBM Marketing Platform | スケジューラー | スケジュール登録 | [製品] | [オブジェクト・タイプ] | [制限グループ] 303
IBM Marketing Platform | セキュリティー 303
IBM Marketing Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 304
IBM Marketing Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | Web アクセス制御 . . 307
IBM Marketing Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | SAML 2.0 308
IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP 同期 313
IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP 同期 | IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照 322
IBM Marketing Platform | セキュリティー | 統合認証 323
IBM Marketing Platform | セキュリティー | 統合認証 | partitions | partition[n] 324
IBM Marketing Platform | セキュリティー | API 管理 (API management) 324
IBM Marketing Platform | セキュリティー | API 管理 (API management) | [製品] | (API 構成テンプレート (API configuration template)) 325
IBM Marketing Platform | セキュリティー | JWT 認証 (JWT authentication) 326
IBM Marketing Platform | 通知. 327
IBM Marketing Platform | 監査イベント. . . 328
IBM Marketing Platform | 監査イベント | 監査イベントの構成 329
IBM Marketing Platform | 監査イベント | 監査イベント重大度構成 332
Digital Analytics 構成プロパティー. 332
Digital Analytics 332
Digital Analytics | 統合 | partitions | partition[n] 333
レポート作成の構成プロパティー. 333
レポート | 統合 | Cognos [バージョン] . . . 333
レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成. 337
レポート | スキーマ | Campaign 338
レポート | スキーマ | Campaign | オファー・パフォーマンス 339
レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [コンタクト・メトリック] および [レスポンス・メトリック] 340
レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・パフォーマンス 343
レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細 344
レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細 | 列 | [レスポンス・タイプ]. 344
レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [レスポンス・メトリック] 346
レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの詳細 347
レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの詳細 | 列 | [コンタクト・ステータス] 348
レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 349

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [キャンペーン・カスタム列]. 351
レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [コンタクト・メトリック] 352
レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [オファー・カスタム列] 353
レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [セル・カスタム列] 354
レポート | スキーマ | Interact 355
レポート | スキーマ | Interact | 対話実績 356
レポート | スキーマ | eMessage 357
IBM Marketing Operations 構成プロパティー . . 357
Marketing Operations 357
Marketing Operations | navigation. 358
Marketing Operations | about 360
Marketing Operations | umoConfiguration . . 361
Marketing Operations | umoConfiguration | 承認 366
Marketing Operations | umoConfiguration | templates. 368
Marketing Operations | umoConfiguration | attachmentFolders. 369
Marketing Operations | umoConfiguration | fileUpload 372
Marketing Operations | umoConfiguration | E メール 372
Marketing Operations | umoConfiguration | markup 373
Marketing Operations | umoConfiguration | grid 374
Marketing Operations | umoConfiguration | workflow. 376
Marketing Operations | umoConfiguration | integrationServices 377
Marketing Operations | umoConfiguration | campaignIntegration 378
Marketing Operations | umoConfiguration | reports 379
Marketing Operations | umoConfiguration | invoiceRollup 379
Marketing Operations | umoConfiguration | database 380
Marketing Operations | umoConfiguration | listingPages 384
Marketing Operations | umoConfiguration | objectCodeLocking 385
Marketing Operations | umoConfiguration | thumbnailGeneration. 386
Marketing Operations | umoConfiguration | スケジューラー | intraDay 388
Marketing Operations | umoConfiguration | スケジューラー | daily. 388
Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 388
Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | E メール 390
Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | project 392
Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | projectRequest 395
Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | program 395
Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | marketingObject. 396
Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | approval 396
Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | asset 397
Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | invoice 398
Campaign 構成プロパティー 399
キャンペーン 399
Campaign | collaborate 400
Campaign | navigation. 401
Campaign | caching. 405
Campaign | partitions 407
Campaign | partitions | partition[n] | eMessage. 408
Campaign | partitions | partition[n] | eMessage | contactAndResponseHistTracking . 409
Campaign | partitions | partition[n] | Engage 412
Campaign | partitions | partition[n] | Engage | contactAndResponseHistTracking . . 416
Campaign | partitions | partition[n] | UBX 417
Campaign | partitions | partition[n] | UBX | Event Download Schedule. 418
Campaign | partitions | partition[n] | Coremetrics 418
Campaign | partitions | partition[n] | reports 420
Campaign | partitions | partition[n] | validation 423
Campaign | partitions | partition[n] | audienceLevels | audienceLevel. 424
Campaign | partitions | partition[n] | audienceLevels | audienceLevel | field[n] . . 424
Campaign | partitions | partition[n] | dataSources 425
Campaign | partitions | partition[n] | systemTableMapping. 494
Campaign | partitions | partition[n] | server 494
Campaign | partitions | partition[n] | server | systemCodes. 494
Campaign | partitions | partition[n] | server | encoding 498
Campaign | partitions | partition[n] | server | timeout 499
Campaign | partitions | partition[n] | server | collaborate 500

Campaign | partitions | partition[n] | server | spss 501
Campaign | partitions | partition[n] | server | permissions 503
Campaign | partitions | partition[n] | server | flowchartConfig. 504
Campaign | partitions | partition[n] | server | flowchartSave 507
Campaign | partitions | partition[n] | server | dataProcessing 508
Campaign | partitions | partition[n] | server | optimization 514
Campaign | partitions | partition[n] | server | logging 517
Campaign | partitions | partition[n] | server | flowchartRun 523
Campaign | partitions | partition[n] | server | profile 524
Campaign | partitions | partition[n] | server | internal 525
Campaign | partitions | partition[n] | server | fileDialog 529
Campaign | partitions | partition[n] | offerCodeGenerator 530
Campaign | monitoring 531
Campaign | ProductReindex 533
Campaign | unicaACListener. 534
Campaign | unicaACListener | node [n] . . 542
Campaign | campaignClustering 545
Campaign | unicaACOOptAdmin 548
Campaign | server 549
Campaign | logging. 550
Campaign | proxy 550
eMessage 構成プロパティー 551
eMessage | serverComponentsAndLocations | hostedServices 551
eMessage | partition | partition[n] | hostedAccountInfo 552
eMessage | partition | partition[n] | dataSources | systemTables 553
eMessage | partition | partition[n] | recipientListUploader. 556
eMessage | partition | partition[n] | responseContactTracker 557
Interact 構成プロパティー 558
Interact ランタイム環境の構成プロパティー . . 559
Interact 設計環境の構成プロパティー 635
Contact Optimization 構成プロパティー 659
Campaign | unicaACOListener 659
Campaign | unicaACOOptAdmin 661
Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | sessionRunMonitor 663
Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | MemoryTuning 663
Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | AgentTemplateTables 664
Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | userTemplateTables 664
Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | TestRun 664
Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | AlgorithmTuning. 665
Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | Debug 670
Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | DatabaseTuning 670
Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | logging 672
Distributed Marketing 構成プロパティー 674
Collaborate | navigation 674
Collaborate | UDM Configuration Settings 676
Collaborate | UDM Configuration Settings | Attachment 678
Collaborate | UDM Configuration Settings | Attachment Folders 684
Collaborate | UDM Configuration Settings | Campaign Integration 685
Collaborate | UDM Configuration Settings | Datasource 685
Collaborate | UDM Configuration Settings | Flowchart 686
Collaborate | UDM Configuration Settings | History 689
Collaborate | UDM Configuration Settings | Integration Services 690
Collaborate | UDM Configuration Settings | Listing Pages 691
Collaborate | UDM Configuration Settings | List Manager 691
Collaborate | UDM Configuration Settings | Lookup Cleanup 694
Collaborate | UDM Configuration Settings | Notifications. 694
Collaborate | UDM Configuration Settings | Performance. 700
Collaborate | UDM Configuration Settings | Read Only Lookup Tables. 701
Collaborate | UDM Configuration Settings | Reports 701
Collaborate | UDM Configuration Settings | Siblings 702
Collaborate | UDM Configuration Settings | Templates 703
Collaborate | UDM Configuration Settings | Workflow 704
IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition 構成プロパティー 705
SPSS | 統合 706
SPSS | integration | partitions | partition [n] 707
SPSS | ナビゲーション 707
Opportunity Detect および Interact Advanced Patterns 構成プロパティー 708

IBM Opportunity Detect and Interact Advanced Patterns | ナビゲーション 708
IBM Opportunity Detect and Interact Advanced Patterns | システム | Streams リモート制御 Web サービス (Streams Remote Control Web Service) 710
IBM Opportunity Detect and Interact Advanced Patterns | システム | Real Time Connector 710
IBM Opportunity Detect and Interact Advanced Patterns | システム | Monitoring . 711
IBM Opportunity Detect and Interact Advanced Patterns | システム | 処理オプション (Processing Options). 711
IBM Opportunity Detect and Interact Advanced Patterns | ロギング 712
IBM Interact Advanced Patterns | システム | Interact Design Service 712

第 22 章 IBM Marketing Software ユーザー・インターフェースでのスタイル・シートおよびイメージのカスタマイズ 713
企業テーマの作成 713
企業テーマの適用 714

IBM 技術サポートへのお問い合わせの前に 717

特記事項. 719
商標 721
プライバシー・ポリシーおよび利用条件に関する考慮事項. 721

第 1 章 IBM Marketing Platform の概要

IBM® Marketing Platform は、IBM Marketing Software 製品用のセキュリティー、構成、通知、およびダッシュボードの各機能を提供します。

Marketing Platform は、IBM Marketing Software 製品の共通ユーザー・インターフェース、および以下の機能のインフラストラクチャーを提供します。

- IBM Marketing Software の多くの製品に関するレポート作成に対応。
- 認証および権限認可を含め、IBM アプリケーションのセキュリティーに対応。
- 構成管理。これには、ユーザーのロケール設定の指定、および一部の IBM Marketing Software アプリケーションの構成プロパティーを編集するためのインターフェースも含まれています。
- スケジューラー。これを使用して、定義した間隔で実行するようにプロセスを構成することができます。
- ダッシュボード・ページ。これを構成して、組織内でさまざまな役割を担当するユーザーのグループに役立つ情報を組み込むことができます。
- アラートおよび通知のサポートおよびユーザー・インターフェース。
- セキュリティー監査レポート。

Marketing Platform のセキュリティー機能について

Marketing Platform のセキュリティー機能は、中央リポジトリーと Web ベースのインターフェースで構成され、ここで IBM Marketing Software 内部ユーザーが定義され、IBM Marketing Software アプリケーション内の機能に対するさまざまなレベルのアクセス権限がユーザーに割り当てられます。

IBM Marketing Software アプリケーションは、Marketing Platform のセキュリティー機能を使用して、ユーザーを認証し、ユーザーのアプリケーション・アクセス権限を検査し、ユーザーのデータベース資格情報およびその他の必要な資格情報を格納します。

Marketing Platform で使用されているセキュリティー・テクノロジー

Marketing Platform では、業界標準の暗号化方式を採用して、認証を実行し、すべての IBM Marketing Software アプリケーションにわたってセキュリティーを適用しています。ユーザーおよびデータベースのパスワードは、多様な暗号化テクノロジーを使用して保護されています。

役割による権限管理

Marketing Platform では、ほとんどの IBM Marketing Software アプリケーション内部の機能に対するユーザーの基本アクセス権限を定義しています。さらに、Campaign および Marketing Platform の場合は、アプリケーション内部の機能およびオブジェクトに対するユーザーのアクセス権限を制御することができます。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

さまざまな権限を役割に割り当てることができます。その後は、以下のいずれかの方法で、ユーザーの権限を管理することができます。

- 個別ユーザーに役割を割り当てる
- グループに役割を割り当て、ユーザーをそのグループのメンバーにする。

Campaign のパーティションについて

Marketing Platform は、Campaign ファミリーの製品でパーティションに対するサポートを提供しています。パーティションは、異なるユーザー・グループに関連付けられたデータを保護する方法を提供します。 Campaign または関連の IBM Marketing Software アプリケーションをマルチパーティションを操作できるように構成すると、アプリケーション・ユーザーにとっては、各パーティションはアプリケーションの個別インスタンスとして表示され、同じシステムに他のパーティションが存在することはまったく表示されません。

グループについて

サブグループは、その親に割り当てられた役割を継承します。管理者は無限数のグループを定義でき、どのユーザーも複数のグループのメンバーになることができます。これによって、役割のさまざまな組み合わせを作成しやすくなります。例えば、1 人のユーザーは、eMessage 管理者であると同時に、管理権限を持たない Campaign ユーザーになることができます。

1 つのグループは、1 つのパーティションのみに所属することができます。

データ・ソース資格情報の管理

ユーザーと管理者の両方が、ユーザーのデータ・ソース資格情報を事前にセットアップすることができます。そのため、データ・ソースへのアクセスが必要な IBM アプリケーションで作業する際に、データ・ソース資格情報の入力を求めるプロンプトがユーザーに表示されることはありません。

外部のユーザーおよびグループ管理システムとの統合

Marketing Platform は、ユーザーおよびリソースを集中管理するために使用される外部システムと統合するように構成することができます。それらには、Windows Active Directory Server、サポートされる他の LDAP ディレクトリー・サーバー、および Netegrity SiteMinder や IBM Security Access Manager などの Web アクセス制御プラットフォームが含まれます。これによって、エラー、サポート・コスト、およびアプリケーションを実稼働環境に配置するために必要な時間が減少します。

SAML 2.0 サポート

Marketing Platform は、以下のために SAML (Security Assertion Markup Language) 2.0 をサポートしています。

- SAML 2.0 フェデレーテッド認証。これは、さまざまなアプリケーション間のシングル・サインオン・アクセスを可能にします。

フェデレーテッド認証を使用して、IBM Marketing Software アプリケーションと他の IBM アプリケーションまたはサード・パーティー・アプリケーションの間にシングル・サインオンを実装できます。

Marketing Platform インストールには、フェデレーテッド認証をサポートする以下のコンポーネントが含まれています。

- ID プロバイダー・サーバー WAR ファイル。
- Java™ アプリケーションで使用して SAML 2.0 アサーションを生成および解析できるクライアント JAR ファイル。IBM Marketing Software と統合する Java 製品は、アサーションを使用して ID プロバイダー・サーバーと通信します。

- SAML 2.0 シングル・サインオン

  この統合を行うには、完全に機能する SAML 2.0 IdP サーバーが前提条件になります。

  必要な構成プロパティーおよびメタデータ・ファイルをセットアップした後、Marketing Platform のログイン・ページでログインしようとしたユーザーは、組織の SAML 2.0 Identity Provider (IdP) サーバーによって認証されます。

  IdP サーバーで認証を行うアプリケーションにログインしたユーザーは、再びログインすることなく、IBM Marketing Software IBM Marketing Software を利用できます。

データ・フィルター

Marketing Platform は、IBM Marketing Software 製品でのデータ・アクセス制限を指定できる、構成可能なデータ・フィルターをサポートしています。データ・フィルターを使用すると、IBM Marketing Software ユーザーが IBM アプリケーションで表示して操作できる顧客データを制限することができます。

構成管理

「構成」ページから、IBM Marketing Software アプリケーションの中央構成プロパティーにアクセスすることができます。

Marketing Platform の管理者権限を持つユーザーは、「構成」ページを使用して以下のことができます。

- 構成プロパティーを表示する。構成プロパティーは、製品別にカテゴリーおよびサブカテゴリーの階層に編成されています。
- 構成プロパティーの値を編集する。
- 一部のカテゴリーを削除する (削除できるカテゴリーは、「設定」ページの「カテゴリーの削除」リンクに表示されます)。

Marketing Platform で提供される configTool ユーティリティーを使用して、「構成」ページで追加の変更を行うことができます。

関連資料:

268 ページの『configTool』

IBM Marketing Software のローカライズ

Marketing Platform は、文字セットのエンコード機能を備え、管理者が個別ユーザーまたは全ユーザーのロケール設定を指定できるようにすることで、ローカライズに対応しています。ユーザーが自分のロケール設定を指定することもできます。

管理者は、内部ユーザーおよび外部ユーザーの両方に対して、ユーザーごとに、またはこの機能をサポートする IBM アプリケーション全体にわかって、ロケール設定を指定することができます。この設定は、IBM Marketing Software アプリケーションの言語、時刻、数値、および日付の表示に影響を及ぼします。

Marketing Platform は、デフォルトの文字セット・エンコードとして UTF-8 をサポートしています。したがって、ユーザーは任意の言語 (例えば中国語や日本語) でデータを入力できます。ただし、Marketing Platform での文字セットの完全サポートは、以下の構成によっても異なることに注意してください。

- Marketing Platform システム・テーブル・データベース
- IBM Marketing Software にアクセスするために使用されるクライアント・マシンおよびブラウザー

共通ユーザー・インターフェース

Marketing Platform は、IBM Marketing Software アプリケーション用の共通のアクセス・ポイントとユーザー・インターフェースを備えています。

共通インターフェースには以下の機能があります。

- 複数の IBM Marketing Software 製品がインストールされている場合、新規ウィンドウを起動せずに製品間で移動できます。
- 「最新」メニューを使用して、最近訪問したページのリストを表示し、それらの任意のページに移動できます。
- IBM Marketing Software ページをホーム・ページ (ログインしたときに最初に表示されるページ) として設定でき、「ホーム」アイコンをクリックしていつでもそのページに戻ることができます。
- 「検索」フィールドを使用して、インストール済みの各製品の検索機能にアクセスできます。この検索機能のコンテキストは表示中のページです。例えば、Campaign 内部でキャンペーンのリストを表示している場合、検索はキャンペーン全体を対象に実行されます。特定の Marketing Operations プロジェクトを検索したい場合は、Marketing Operations プロジェクトのリストを表示しているときに検索を実行すればよいことになります。

IBM Marketing Software へのログイン

この手順を使用して、IBM Marketing Software にログインします。

始める前に

以下が必要です。

- IBM Marketing Software サーバーにアクセスするためのイントラネット (ネットワーク) 接続。
- コンピューターにインストールされた、サポートされているブラウザー。
- IBM Marketing Software にサインインするためのユーザー名およびパスワード。
- ネットワークで IBM Marketing Software にアクセスするための URL。

URL は次のとおりです。

`http://`*`host.domain.com:port`*`/unica`

ここで

`host` は、Marketing Platform がインストールされているマシンです。

`domain.com` は、ホスト・マシンが存在するドメインです。

`port` は、Marketing Platform アプリケーション・サーバーが listen しているポート番号です。

注: 以下の手順では、Marketing Platform に対する管理者権限を持つアカウントを使用してログインしているものとします。

手順

ブラウザーを使用して IBM Marketing Software URL にアクセスします。

- IBM Marketing Software が Windows Active Directory または Web アクセス制御プラットフォームと統合するように構成されている場合、そのシステムにログインすると、デフォルトのダッシュボード・ページが表示されます。ログインは完了しています。
- ログイン画面が表示されたら、デフォルトの管理者資格情報を使用してログインします。単一パーティション環境では、`asm_admin` とパスワードの `password` を使用します。複数パーティション環境では、`platform_admin` とパスワードの `password` を使用します。

  パスワードの変更を求めるプロンプトが出されます。既存のパスワードを入力することもできますが、セキュリティーのために新しいパスワードを選択してください。
- IBM Marketing Software が SSL を使用するように構成されている場合、初めてサインインするときに、デジタル・セキュリティー証明書を受け入れるように求めるプロンプトが出されることがあります。「はい」をクリックして証明書を受け入れます。

ログインが成功すると、IBM Marketing Software でデフォルトのダッシュボード・ページが表示されます。

タスクの結果

Marketing Platform 管理者アカウントに割り当てられたデフォルトの権限があれば、「設定」メニューの下にリストされたオプションを使用して、ユーザー・アカウントおよびセキュリティーを管理できます。 IBM Marketing Software ダッシュ

ボードに対してハイレベルな管理タスクを実行するには、**platform_admin** としてログインする必要があります。

Marketing Platform の資料とヘルプ

IBM Marketing Platform では、ユーザー、管理者、および開発者を対象とした資料とヘルプを用意しています。

表 *1.* 起動して稼働状態にする

タスク	資料
新機能、既知の問題、および回避策のリストを表示する	*IBM Marketing Platform* リリース・ノート
Marketing Platform データベースの構造について学習する	*IBM Marketing Platform* システム・テーブル
Marketing Platform をインストールまたはアップグレードし、Marketing Platform Web アプリケーションを配置する	以下のいずれかのガイド: • *IBM Marketing Platform* インストール・ガイド • *IBM Marketing Platform* アップグレード・ガイド
IBM Marketing Software に備わっている IBM Cognos® レポートを実装する	*IBM Marketing Software Reports* インストールおよび構成ガイド

表 *2. Marketing Platform* の構成と使用

タスク	資料
• IBM 製品の構成とセキュリティーの設定を調整する • LDAP などの外部システムと Web アクセス制御を統合する • SAML 2.0 ベースのフェデレーテッド認証またはシングル・サインオンを使用して、さまざまなアプリケーションにシングル・サインオンを実装する • ユーティリティーを実行して IBM 製品に対するメンテナンスを実行する • 監査イベントの追跡を構成して使用する • IBM Marketing Software オブジェクトの実行をスケジュールする	*IBM Marketing Platform* 管理者ガイド

表 *3.* ヘルプの取得

タスク	説明
オンライン・ヘルプを開く	1. コンテキスト・ヘルプのトピックを表示するには、「ヘルプ」>「このページのヘルプ」を選択します。 2. オンライン・ヘルプ全体を見るには、「ヘルプ」>「製品資料」を選択し、**Knowledge Center** の **IBM Marketing Platform**のリンクをクリックします。 オンラインのコンテキスト・ヘルプを表示するには、Web アクセスが必要です。オフライン資料として IBM Knowledge Center をローカルで利用する方法、およびインストールする方法について詳しくは、IBM サポートにお問い合わせください。

表 3. ヘルプの取得 (続き)

タスク	説明
PDF の取得	以下のいずれかの方法に従います: • 「ヘルプ」>「製品資料」と選択して、Marketing Platform の PDF およびヘルプにアクセスします。 • 全製品の資料にアクセスするには、「ヘルプ」>「**IBM Marketing Software** のすべての資料 **(All IBM Marketing Software Documentation)**」を選択します。
IBM Knowledge Center	IBM Knowledge Center にアクセスするには、「ヘルプ」>「この製品のサポート **(Support for this product)**」を選択します。
サポートを受ける	http://www.ibm.com/support に移動して IBM サポート・ポータルにアクセスします。

第 2 章 IBM Marketing Software ユーザー・アカウント管理

IBM Marketing Platform ユーザー・インターフェースを使用して作成されたユーザー・アカウント (内部アカウントと言います) の属性を管理することができます。これは、LDAP サーバーや Web アクセス制御システムなどの外部システムからインポートされた外部ユーザー・アカウントとは対照的なものです。

外部アカウントは外部システムで管理されます。

ユーザー・アカウントのタイプ: 内部および外部

IBM Marketing Software が外部サーバー (例えばサポートされている LDAP サーバーや Web アクセス制御システムなど) と統合されている場合、内部ユーザー・アカウントと外部ユーザー・アカウントの 2 つのタイプがサポートされます。

- 内部 - セキュリティー・ユーザー・インターフェースを使用して IBM Marketing Software 内部で作成されるユーザー・アカウント。これらのユーザーは IBM Marketing Software によって認証されます。
- 外部 - 外部サーバーとの同期化によって IBM Marketing Software にインポートされるユーザー・アカウント。この同期化が行われるのは、IBM Marketing Software が外部サーバーと統合されるよう構成されている場合のみです。これらのユーザーは、外部サーバーによって認証されます。外部サーバーの例は、LDAP サーバーおよび Web アクセス制御サーバーです。

ご使用の構成に応じて、内部ユーザーのみ、外部ユーザーのみ、または両方の組み合わせを使用することができます。IBM Marketing Software と Windows Active Directory を統合し、LDAP を有効にしている場合、外部ユーザーのみを使用することができます。

IBM Marketing Software と LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーとの統合について詳しくは、本書の関連セクションを参照してください。

外部ユーザーの管理

通常、外部ユーザー・アカウントの属性は、外部システムによって管理されます。IBM Marketing Software 内では、外部ユーザー・アカウントの以下の面を制御できます。すなわち、データ・ソース、通知設定、IBM Marketing Software アプリケーションのロケール設定、および内部グループのメンバーシップ (外部グループは不可) です。

IBM Marketing Software インターフェースでの内部ユーザーと外部ユーザーの識別

IBM Marketing Software のユーザー・セクションでは、内部ユーザーと外部ユーザーとでは、次のように別のアイコンを使用しています。

- 内部 -

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

- 外部 -

内部ユーザー・アカウントのプロパティー

管理者は、Marketing Platform ユーザー・インターフェースを使って作成したユーザー・アカウントのプロパティーを管理できます。

ユーザーがパスワードを忘れた場合

Marketing Platform は、内部ユーザー・パスワードをハッシュ形式で格納しており、これらの格納済みパスワードを平文に復元することはできません。内部アカウントを持つユーザーがパスワードを忘れた場合は、新規パスワードを割り当てる必要があります。

パスワードのリセット

内部アカウントを持つユーザーは、自分のパスワードを変更できます。それには、元のパスワードを入力し、新規パスワードを入力して確認します。 IBM Marketing Software 管理者も、必要な場合にはどのユーザーのパスワードでもリセットすることができます。

パスワード有効期限

すべてのユーザーに対するパスワード有効期限を「構成」ページで設定できます。ユーザーに対して (システム全体の有効期限が「満了なし」に設定されていない場合) ユーザーごとに有効期限を設定することもできます。

ユーザー・アカウントのシステムステータス

ユーザーのシステム・ステータスは、「有効」か「無効」のいずれかです。無効なアカウントのユーザーは、いずれの IBM Marketing Software アプリケーションにもログインできません。無効なユーザー・アカウントが以前には有効で、1 つ以上のグループのメンバーシップを持っている場合、そのアカウントを再びアクティブにできます。無効なユーザー・アカウントを有効にする際、グループ・メンバーシップはそのまま保持されます。

代替ログイン

任意のユーザー・アカウントについて、代替ログインを指定することができます。通常、代替ログインは、Campaign リスナーが UNIX タイプのシステムの root として実行される場合に必要です。

データ・ソース

ユーザーは、一部の IBM Marketing Software アプリケーションで使用されるデータ・ソースにアクセスする際には適切な資格情報が必要です。その場合、ユーザー・アカウント・プロパティーに資格情報をデータ・ソースとして入力することができます。

Campaign などの IBM Marketing Software アプリケーションで作業していて、データ・ソース情報を求めるプロンプトが表示された場合、IBM Marketing Software

アプリケーションは、この情報を Marketing Platform データ・ストアに格納します。これらのデータ・ソースは、IBM Marketing Software インターフェースを使用して作成されていない場合でも、Marketing Platform でユーザーのデータ・ソース・リストに表示されます。

内部ユーザー・アカウントの追加

この手順を使用して、内部ユーザー・アカウントを追加します。

手順

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。
2. 「新規ユーザー」をクリックします。
3. フォームに入力し、「変更を保存」をクリックします。

   ログイン名に特殊文字を使用する場合には注意が必要です。使用可能な特殊文字は「新規ユーザー」ページのリファレンスにリストされています。
4. 「**OK**」をクリックします。

   リストに新規ユーザー名が表示されます。

関連資料:

14 ページの『ユーザー管理ページ』

内部ユーザー・アカウントの削除

この手順を使用して、内部ユーザー・アカウントを削除します。

このタスクについて

重要**:** Campaign 権限が、Campaign オブジェクトに対する所有権またはアクセス権限を単一ユーザーに制限するようにセットアップされている場合、そのユーザーのアカウントを削除すると、オブジェクトにアクセスできなくなります。そのようなアカウントは削除するのではなく、代わりに無効に設定する必要があります。

手順

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。
2. 削除するアカウントのユーザ名をクリックします。
3. 「**OK**」をクリックします。

関連資料:

14 ページの『ユーザー管理ページ』

内部ユーザーのパスワード有効期限の変更

この手順を使用して、内部ユーザーのパスワード有効期限を変更します。

このタスクについて

制約事項**:** システム全体のパスワード有効期限プロパティー「一般 **|** パスワード設定 **|** 有効期間 **(**日数**)**」がゼロに設定されている場合は、どの内部ユーザーのパスワード有効期限も変更できません。

手順

1. 「設定」**>**「ユーザ」をクリックします。
2. ユーザー名をクリックします。
3. ページの下部にある「プロパティーの編集」リンクをクリックします。
4. 「パスワードの有効期限」フィールドの日付を変更します。
5. 「**OK**」をクリックします。

関連資料:

14 ページの『ユーザー管理ページ』

内部ユーザー・パスワードのリセット

この手順を使用して、内部ユーザー・パスワードをリセットします。

手順

1. 「設定」**>**「ユーザー」をクリックします。

   左のペインに「ユーザー」リストが表示されます。
2. 変更するユーザ名をクリックします。
3. ページの下部にある「パスワードのリセット」リンクをクリックします。
4. 「パスワード」フィールドに新規パスワードを入力します。
5. 「確認」フィールドに同じパスワードを入力します。
6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「**OK**」をクリックします。

   注**:** ユーザー・パスワードをリセットすると、ユーザーが次回 IBM Marketing Software アプリケーションにログインするときに、パスワードを変更するように求めるプロンプトが出されます。

関連資料:

14 ページの『ユーザー管理ページ』

内部ユーザー・アカウントのプロパティーの変更

この手順を使用して、内部ユーザー・アカウントのプロパティーを変更します。

手順

1. 「設定」**>**「ユーザ」をクリックします。
2. 変更するアカウントの名前をクリックします。

3. ページの下部にある「プロパティーの編集」リンクをクリックします。
4. 必要に応じてフィールドを編集します。
5. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
6. 「**OK**」をクリックします。

関連タスク:

12 ページの『内部ユーザー・パスワードのリセット』

関連資料:

14 ページの『ユーザー管理ページ』

内部ユーザーのシステムステータスの変更

この手順を使用して、内部ユーザーのシステム状況を変更します。

手順

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。
2. 変更するアカウントの名前をクリックします。
3. ページの下部にある「プロパティーの編集」リンクをクリックします。
4. 「ステータス」ドロップダウン・リストからステータスを選択します。オプションは「有効」および「無効」です。

   注**:** 「無効」を選択すると、ユーザーはすべての IBM Marketing Software アプリケーションにログインできなくなります。Marketing Platform に対する管理者権限を持つユーザー自体を使用不可にすることはできません。
5. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
6. 「**OK**」をクリックします。

関連資料:

14 ページの『ユーザー管理ページ』

内部ユーザーのデータ・ソースの追加

この手順を使用して、内部ユーザーのデータ・ソースを追加します。

手順

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。
2. 変更するアカウントの名前をクリックします。
3. ページの下部にある「データ・ソースの編集」リンクをクリックします。
4. 「新規追加」をクリックします。
5. フォームに入力し、「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
6. 「**OK**」をクリックします。

関連資料:

14 ページの『ユーザー管理ページ』

内部ユーザーのデータ・ソースの変更

この手順を使用して、データ・ソースのパスワードまたはログイン名を変更します。

手順

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。
2. 変更するアカウントの名前をクリックします。
3. ページの下部にある「データ・ソースの編集」リンクをクリックします。
4. 変更する「データ・ソース名」をクリックします。
5. フィールドを編集します。

   新規パスワードを設定しない場合は、元のパスワードが保持されます。
6. フォームに入力し、「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「**OK**」をクリックします。

関連タスク:

12 ページの『内部ユーザー・アカウントのプロパティーの変更』

関連資料:

『ユーザー管理ページ』

内部ユーザーのデータ・ソースの削除

この手順を使用して、内部ユーザー・データ・ソースを削除します。

手順

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。
2. 変更するアカウントの名前をクリックします。
3. ページの下部にある「データ・ソースの編集」リンクをクリックします。
4. 削除するデータソースの名前をクリックします。
5. 「削除」をクリックします。
6. 「**OK**」をクリックします。

関連資料:

『ユーザー管理ページ』

ユーザー管理ページ

「ユーザー」ページのフィールドを入力する際にヘルプが必要な場合は、この表を参照してください。

「新規ユーザー」ページ

表 4. 「新規ユーザー」ページのフィールド

フィールド	説明
名	ユーザーの名前。
姓	ユーザーの姓。
ログイン	ユーザーのログイン名。必須フィールドはこのフィールドだけです。ログイン名での使用が許可されているのは、以下の特殊文字だけです。 • 英字の大文字および小文字 (A から Z、a から z) • 数字 (0 から 9) • 単価記号 (@) • ハイフン (-) • アンダースコアー (_) • ドット (.) • 2 バイト文字 (漢字など) ログイン名では、その他の特殊文字 (スペースを含む) は使用しないでください。
パスワード	ユーザーのパスワード。パスワードを作成する場合は以下の規則に従ってください。 • パスワードには大/小文字の区別があります。例えば、`password` と `Password` は同じではありません。 • IBM Marketing Software でパスワードを作成またはリセットする場合は、任意の文字を使用することができます。 追加のパスワード要件は「構成」ページで設定します。IBM Marketing Software のインストール先のパスワード要件を表示するには、「パスワード」フィールドの横の「パスワード規則」リンクをクリックします。
パスワードの確認	「パスワード」フィールドに入力したものと同じパスワード。
タイトル	ユーザーの肩書き。
部門	ユーザーの部門。
会社	ユーザーの会社
国	ユーザーの国
アドレス	ユーザーの住所
電話 (会社)	ユーザーの電話番号 (会社)。
携帯電話	ユーザーの携帯電話番号。
電話 (自宅)	ユーザーの自宅の電話番号。
E メール・アドレス	ユーザーの E メールアドレス。このフィールドは、RFC 821 で定義されている E メール・アドレスに準拠していなければなりません。詳しくは、「RFC 821」を参照してください。
代替ログイン	ユーザーの UNIX ログイン名 (ある場合)。通常、代替ログインは、Campaign リスナーが UNIX タイプのシステムの root として実行される場合に必要です。

表 4. 「新規ユーザー」ページのフィールド (続き)

フィールド	説明
ステータス	ドロップダウンリストから「有効」または「無効」を選択します。デフォルトでは「有効」が選択されています。無効にされたユーザーは、すべての IBM Marketing Software アプリケーションにログインできなくなります。

「プロパティーの編集」ページ

フィールドは、次の表に示すものを除いて、「新規ユーザー」ページのフィールドと同じです。

表 5. 「プロパティーの編集」ページのフィールド

フィールド	説明
パスワード	このフィールドは、「プロパティーの編集」ページでは使用できません。
ログイン	このフィールドは、「プロパティーの編集」ページでは使用できません。
パスワード有効期限	ユーザーのロケールに適した形式の日付 (例えば、en_US の場合、形式は `MM, dd, yyyy` です)。システム全体の有効期限が「満了なし」に設定されている場合は、ユーザーの有効期限を変更することはできません。
IBM Digital Analytics ユーザー名	IBM Digital Analytics との統合が有効になっており、ユーザーを手動で作成する場合には、構成プロセスの一部としてユーザーの Digital Analytics ユーザー名をここに入力します。

「パスワードのリセット」ページ

表 6. 「パスワードのリセット」ページのフィールド

フィールド	説明
パスワード	新規パスワード
確認	「パスワード」フィールドに入力したものと同じパスワード。

「新規データ・ソース」ページと「データ・ソース・プロパティーの編集」ページ

表 7. 「データ・ソース」ページのフィールド

フィールド	説明
データ・ソース	ユーザーが IBM Marketing Software アプリケーションからアクセスできるようにするデータ・ソースの名前。IBM Marketing Software の名前は、表示のためには大/小文字の区別を維持していますが、比較および作成には大/小文字を区別しない規則を使用します (つまり、`customer` と `Customer` というデータ・ソース名を両方作成することはできません)。
データ・ソース・ログイン	このデータソースのログイン名。

表 7. 「データ・ソース」ページのフィールド (続き)

フィールド	説明
データ・ソース・パスワード	このデータソースのパスワード。データ・ソース・アカウントにパスワードが設定されていない場合には、このフィールドを空のままにできます。
パスワードの確認	パスワードの再入力 (「データ・ソース・パスワード」フィールドを空にした場合は、ここも空のままにしてください)。

ロケール設定

内部ユーザーと外部ユーザー両方のロケールを設定できます。この設定は、IBM Marketing Software アプリケーションの言語、時刻、数値、および日付の表示に影響を及ぼします。

Marketing Platform でロケールを設定する方法は 2 つあります。

グローバル
: 「設定」>「構成」ページの構成プロパティー「IBM Marketing Platform | 地域」は、グローバルにロケールを設定します。

ユーザー単位
: 「設定」>「ユーザー」ページの属性は、個々のユーザーのロケールを設定します。この設定は、グローバル設定をオーバーライドします。

ユーザー単位またはグローバルに設定できるロケールの使用可能性は IBM Marketing Software アプリケーションによって異なる場合があり、必ずしもすべての IBM Marketing Software アプリケーションが Marketing Platform のこのロケール設定をサポートしているわけではありません。「地域」プロパティーが使用可能でサポートされているかどうかについては、固有の製品資料を参照してください。

注: ユーザー単位またはグローバルに設定できるロケールの使用可能性は、 IBM Marketing Software アプリケーションによって異なる場合があります。すべての IBM Marketing Software アプリケーションがこのロケール設定をサポートしているわけではありません。 IBM Marketing Software でのロケール設定の可用性とサポートを判別するには、具体的な製品資料を参照してください。

関連概念:

43 ページの『デフォルトのユーザロケール設定』

ユーザーのロケール設定の指定

この手順は、ユーザー用のロケール設定を指定する際に使用します。

手順

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。
2. ロケール設定を設定するユーザー名をクリックします。
3. ページの下部にある「プリファレンスの編集」リンクをクリックします。

4. 左のペインで「**IBM Marketing Platform**」をクリックします。
5. 「地域」ドロップダウン・リストからオプションを選択します。
6. 「変更の保存」をクリックします。

外部ユーザーの同期

IBM Marketing Software を Windows Active Directory または LDAP サーバーと統合するように構成した場合は、ユーザーとグループが、事前に定義した間隔で自動的に同期化されます。

自動同期の機能は制限されています。

- 自動同期で更新されるのは、ユーザー属性のみです。グループ・メンバーの追加、削除、変更などのグループ・メンバーシップの変更は管理者が管理する必要があるため、それらの変更をインポートするには、デフォルトでは、手動同期プロセスを使用するしかありません。
- LDAP サーバーから削除されたユーザーは、自動同期では削除されません。

IBM Marketing Software の「ユーザー」領域で同期化機能を使用して、すべてのユーザーおよびグループの完全同期を強制することができます。

外部ユーザーの同期化の強制

この手順は、IBM Marketing Software が LDAP サーバーまたは Web アクセス制御システムと統合されている場合に、ユーザーの同期を強制する際に使用します。

手順

1. IBM Marketing Software にログインし、「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 「同期化」をクリックします。

   ユーザーおよびグループが同期化されます。

第 3 章 セキュリティー管理

IBM Marketing Platform は、IBM Marketing Software アプリケーション内のオブジェクトおよび機能へのユーザー・アクセスを制御するための役割および権限をサポートしています。

ほとんどの部分で、「ユーザーの役割と権限」ページを使ってユーザーのアプリケーション・アクセスを詳細に管理できるのは、Marketing Platform 自体および Campaign のみです。

その他の IBM Marketing Software 製品は、「ユーザーの役割と権限」ページで設定される一部の基本的なアプリケーション・アクセス役割を使用し、詳細なセキュリティー設定はなく、設定が「ユーザーの役割と権限」ページで管理されることもありません。

例えば、Marketing Operations の場合、「ユーザーの役割と権限」ページでの基本的な役割のセットアップは、カスタマイズされたセキュリティー・スキームを開発するための出発点にすぎません。Marketing Operations には、Marketing Operations ページのユーザー・インターフェースを使用して管理できる詳細なセキュリティー・スキームがあります。

本書では、「ユーザーの役割と権限」ページの機能の使い方を説明し、さまざまな製品のこのページに示される基本的なセキュリティー役割と権限について説明します。Marketing Platform 以外の製品では、必要なセキュリティー管理情報を本書で確認できない場合、製品の資料を参照してください。

Marketing Platform でのセキュリティー管理者の権限とタスク

Marketing Platform 内で AdminRole または PlatformAdminRole 役割を持つユーザーのみが、自分以外のユーザー・アカウントのセキュリティー管理機能にアクセスすることができます。

マルチパーティション環境では、PlatformAdminRole 役割を持つユーザーのみが、パーティションにまたがってユーザーを管理することができます。 AdminRole 役割を持つユーザーは、自分のパーティション内のユーザーのみを管理できます。

セキュリティー管理者は、「ユーザー・グループ」ページおよび「ユーザーの役割と権限」ページで以下のタスクを実行します。

- 内部グループを作成し、そのメンバーシップとパーティション割り当てを管理する。
- 必要に応じて、Marketing Platform および Campaign の役割を作成し、これらの役割に権限を割り当てる。
- 個別ユーザー、内部グループ、または外部グループのいずれかまたはすべてに役割を割り当てることによって、IBM Marketing Software アプリケーションに対するユーザー・アクセスを管理する。

この概説を読んで、以下の事項を理解してください。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

- 内部グループと外部グループの違い
- 内部グループを作成して役割および権限を割り当てるプロセス
- 内部グループのプロパティー
- Marketing Platform内で事前構成されているユーザー・アカウント、グループ、および役割

役割名とポリシー名での特殊文字

役割名とポリシー名を作成するときは以下の文字だけを使用できます。

- 英字の大文字および小文字 (A から Z)
- 数字 (0 から 9)
- 単一引用符 (')
- ハイフン (-)
- アンダースコアー (_)
- 単価記号 (@)
- スラッシュ (/)
- 小括弧
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- スペース (先頭文字以外)
- 2 バイト文字 (漢字など)

Marketing Platform および Campaign での役割と権限

Marketing Platform および Campaign での役割は、構成可能な権限の集合です。Marketing Platform および Campaign での役割ごとに、アプリケーションへのアクセスを制御する権限を指定できます。

デフォルトの役割を使用するか、新しい役割を作成することができます。使用可能な権限のセットは、システムによって定義されており、新しい権限を作成することはできません。

役割割り当てについて

一般に、ユーザーに与える役割は、そのユーザーが IBM Marketing Software を使用するときに組織内で実行する機能を反映した権限を持つ役割にしてください。役割は、グループに割り当てるか、個々のユーザーに割り当てることができます。グループによって役割を割り当てる利点は、役割の組み合わせをグループに割り当てることができ、後でその組み合わせを変更する場合は、複数のユーザーについて何度も変更を行う必要がなく、1 個所で変更できることです。グループによって役割を割り当てる場合は、グループにユーザーを追加または削除することによって、ユーザー・アクセスを制御します。

システムが役割を評価する方法

ユーザーが複数の役割を持つ場合、システムはそれらすべての役割をまとめたものから、権限を評価します。特定のオブジェクトに対して機能を実行する資格能力は、すべての役割から集約された権限に基づいて認可あるいは否定されます。Campaign の場合、特定のオブジェクトに対して機能を実行する資格能力は、そのオブジェクトのセキュリティー・ポリシーに基づいて認可あるいは否定されます。

Marketing Platform でのユーザー・アプリケーションのアクセスの管理の概要

Marketing Platform のセキュリティー管理機能を使用してユーザー・アプリケーションのアクセスを管理する操作は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、基本プロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

手順

1. IBM Marketing Software 製品へのユーザー・アクセスを制御するために使用する役割を計画します。役割とその権限を必要に応じて構成します。
2. セキュリティー要件の達成に必要なグループを計画します。システムをどのように構成するかに応じて、内部グループのみ、外部グループのみ、またはその両方の組み合わせが必要になります。
3. 必要な内部グループおよび外部グループを作成します。
4. グループを役割に割り当てます。
5. 内部ユーザー・アカウントのみを使用する場合は、内部ユーザー・アカウントを必要に応じて作成します。
6. ユーザーに許可したいアプリケーション・アクセスに基づいて、ユーザーをグループに割り当てるか、役割を個別ユーザーに割り当てます。

関連概念:

『グループのタイプ: 内部および外部』

22 ページの『パーティションおよびセキュリティーの管理』

23 ページの『事前構成されたユーザーおよび役割』

25 ページの『パーティション間管理特権』

グループのタイプ: 内部および外部

IBM Marketing Software が外部サーバー (サポートされている LDAP サーバーまたは Web アクセス制御システムなど) と統合されている場合は、内部および外部の 2 種類のグループをサポートします。

- 内部 - セキュリティユーザインタフェースを使用して IBM Marketing Software 内部で作成されるグループ。これらのユーザーは IBM Marketing Software によって認証されます。
- 外部 - 外部システムのグループにマップされる IBM Marketing Software グループ。外部サーバの例は、LDAP サーバおよび Web アクセス制御サーバです。

重要: 本書で外部グループと表記されているグループは、実際には IBM Marketing Software で作成されていて、外部システムにマップされているグループです。

ご使用の構成に応じて、内部グループのみ、外部グループのみ、または両方の組み合わせを使用することができます。

IBM Marketing Software と LDAP または Windows Active Directory サーバーとの統合について詳しくは、本書の関連セクションを参照してください。

外部グループの管理

外部グループのメンバーシップは、外部システムで管理されます。

内部グループと同じように、IBM Marketing Software 外部グループに役割を割り当てることができます。

内部グループおよびサブグループの管理

管理者は、内部グループをいくつでも無制限に定義することができます。また、どの内部ユーザも外部ユーザも、複数の内部グループおよびサブグループのメンバーになることができます。

サブグループは、その親に割り当てられているユーザー・メンバーを継承しませんが、親に割り当てられている役割は継承します。グループとそのサブグループは、常に 1 つのパーティションに所属します。

パーティションに割り当てることができるのは内部グループのみであり、マルチパーティション環境ですべてのパーティションにグループを作成できるのは、platform_admin ユーザーのみ、または PlatformAdminRole の役割を持つ別のアカウントのみです。

関連タスク:

21 ページの『Marketing Platform でのユーザー・アプリケーションのアクセスの管理の概要』

パーティションおよびセキュリティーの管理

Campaign および関連製品のパーティションは、異なるユーザー・グループに関連付けられたデータを保護する方法を提供します。区分化を使用すると、ユーザーのパーティションは別個に実行されている Campaign のインスタンスのように表示され、同じシステムで他のパーティションがまったく実行されていないように見えます。このセクションでは、マルチパーティション環境でのセキュリティー管理の特殊な考慮について説明します。

パーティションでのユーザー・メンバーシップ

ユーザーを、そのグループ・メンバーシップに基づいてパーティションに割り当てることができます。パーティションへのアクセス権限をユーザーに与えるには、まずグループをパーティションに割り当て、その後でユーザーをグループに割り当てます。

1 つのグループまたはサブグループは、1 つのパーティションのみに割り当てることができます。サブグループのパーティション割り当てを親グループが獲得することはありません。グループをパーティションに割り当てることができるのは、platform_admin ユーザーか、または PlatformAdminRole 役割を持つ別のアカウントだけです。

1 人のユーザーは 1 つのパーティションのみのメンバーにする必要があります。

役割とパーティションについて

パーティションとの関連では、必ず役割が存在します。単一パーティション環境では、すべての役割がデフォルトのパーティションである partition1 に自動的に作成されます。マルチパーティション環境では、役割は、パーティションを作成したユーザーのパーティション内に作成されます。例外は platform_admin ユーザーおよび PlatformAdminRole 役割を持つその他の任意のアカウントで、これらのアカウントはどのパーティションにでも役割を作成することができます。

パーティションについての詳細

このセクションでは、パーティションへのグループの割り当て、およびグループへのユーザーの割り当てについて説明します。パーティションの構成について詳しくは、Campaign のインストール文書を参照してください。

関連タスク:

21 ページの『Marketing Platform でのユーザー・アプリケーションのアクセスの管理の概要』

事前構成されたユーザーおよび役割

IBM Marketing Software が最初にインストールされた時点では、このセクションで説明するように、3 つのユーザーが事前構成され、Marketing Platform および Campaign のシステム定義の役割が割り当てられています。

これらの内部ユーザー・アカウントはすべて、デフォルト・パスワードとして「password」を使用しています。

platform_admin ユーザーアカウント

platform_admin ユーザー・アカウントは、IBM Marketing Software 管理者が、マルチパーティション環境内のすべてのパーティションにわたって製品構成、ユーザー、およびグループを管理でき、すべての Marketing Platform 機能を (専用の役割を持つレポート機能を除き) パーティションによるフィルタリングなしに使用で

きるように設計されています。デフォルトでは、このアカウントは Marketing Platform 内の以下の役割を持っています。

- Marketing Platform のデフォルト・パーティション partition1 での役割
  - AdminRole
  - UserRole
  - PlatformAdminRole

  これらの役割により、platform_admin ユーザーは、Marketing Platform 内部でレポート機能以外のすべての管理タスクを実行することができます。追加パーティションが作成された場合、platform_admin ユーザーは、追加パーティション内のユーザー、グループ、役割、および構成にアクセスして管理することができます。

  PlatformAdminRole 役割は、この役割の権限を変更できるユーザーはいないという点で特異であり、この役割を持つユーザーのみが別のユーザーに PlatformAdminRole 役割を割り当てることができます。
- Campaign のデフォルト・パーティション partition1 での役割
  - グローバル・ポリシーの管理者の役割

  この役割により、platform_admin ユーザーは Campaign 内部のすべてのタスクを実行することができます。

デフォルトでは、このユーザーには Marketing Platform および Campaign の外側の IBM Marketing Software 製品に対するアクセス権限はありません。

asm_admin ユーザー・アカウント

asm_admin ユーザー・アカウントは、IBM Marketing Software 管理者が、単一パーティション環境内のユーザーおよびグループを管理でき、すべての Marketing Platform 機能を (専用の役割を持つレポート機能を除き) 使用できるように設計されています。このアカウントには以下の役割があります。

- Marketing Platform のデフォルト・パーティション partition1 での役割
  - AdminRole
  - UserRole

  以下に示す例外を除き、これらの役割により、asm_admin ユーザーは、Marketing Platform 内の asm_admin が所属するパーティション (デフォルトでは partition1) の内部で、すべての管理タスクを実行することができます。

  このユーザーは、これらの役割により、「構成」ページを管理することができます。「構成」ページではパーティションによるユーザーのフィルタリングは行われません。このため、Marketing Platform で AdminRole 役割から管理者構成ページ権限を削除して、構成タスクを platform_admin ユーザー用にとっておく必要があります。

  例外は以下のとおりです。
  - レポート機能にアクセスするには、Reports System 役割を付与する必要があります。

– このユーザーは、PlatformAdminRole 役割をユーザーまたはグループに割り当てることはできません。

デモアカウント

デモアカウントには以下の役割があります。

- Marketing Platform のデフォルト・パーティション partition1 での役割
  - UserRole

  この役割により、デモ・ユーザーは、「ユーザー」ページで自分のアカウント属性を表示および変更できますが、自分のアカウントの役割またはパーティションを変更したり、Marketing Platform に含まれている他の機能にアクセスしたりすることはできません。デフォルトでは、このユーザーにはどの IBM Marketing Software 製品にもアクセスする権限はありません。
- Campaign のデフォルト・パーティション partition1 での役割
  - グローバル・ポリシーのレビュー担当者の役割

  この役割により、デモ・ユーザーはブックマークを作成し、Campaign でキャンペーン、セッション、オファー、セグメント、およびレポートを表示することができます。

関連タスク:

21 ページの『Marketing Platform でのユーザー・アプリケーションのアクセスの管理の概要』

パーティション間管理特権

マルチパーティション環境では、すべてのパーティションにわたって IBM Marketing Software ユーザーのセキュリティーを管理できるようにするために、Marketing Platform の PlatformAdminRole 役割を持つユーザー・アカウントが少なくとも 1 つは必要です。

platform_admin アカウントは、事前に構成済みで、PlatformAdminRole 役割を備えています。platform_admin アカウントは、IBM Marketing Software の「ユーザー」機能で削除したり無効にしたりできないスーパーユーザー・アカウントです。ただし、このアカウントには、他のユーザーと同じパスワード制限が適用されます。例えば、誰かが platform_admin としてログインしようとして誤ったパスワードを N 回続けて入力したとします。有効になっているパスワード規則によっては、システムで platform_admin アカウントが無効になる可能性があります。このアカウントを復元するには、以下のいずれかのアクションをとる必要があります。

- Marketing Platform の PlatformAdminRole 役割を持つ別のユーザーがいる場合は、そのユーザーとしてログインして、platform_admin ユーザーのパスワードをリセットするか、Marketing Platform の PlatformAdminRole 役割を持つ別のアカウントを作成します。
- Marketing Platform 内の PlatformAdminRole 役割を持つユーザーが 1 人だけ (例えば、platform_admin だけ) で、そのユーザーが使用不可になっている場合

は、Marketing Platform で提供される `restoreAccess` ユーティリティーを使って新規 platform_admin アカウントを作成できます。

`restoreAccess` ユーティリティーを使用して PlatformAdminRole アクセスを復元しなければならない状況を避けるために、PlatformAdminRole 特権を持つアカウントを複数作成することをお勧めします。

関連タスク:

21 ページの『Marketing Platform でのユーザー・アプリケーションのアクセスの管理の概要』

関連資料:

279 ページの『restoreAccess』

内部グループの追加

この手順を使用して、内部グループを追加します。

手順

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。
2. 「グループ階層」リストの上の「新規グループ」をクリックします。
3. 「グループ名」フィールドおよび「説明」フィールドに入力します。

   重要: グループには、システム定義の役割と同じ名前を付けないでください。例えば、"Admin" は Campaign で役割名として使用されているため、グループの名前として使用しないでください。同じ名前にすると、アップグレード時に問題が発生する原因になります。
4. 「変更の保存」をクリックします。

   「グループ階層」リストに新規グループの名前が表示されます。

関連資料:

29 ページの『ユーザー・グループ管理ページ』

サブグループの追加

この手順を使用して、内部サブグループを追加します。

手順

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。
2. サブグループを追加するグループの名前をクリックします。
3. 「新規サブグループ」をクリックします。
4. 「グループ名」フィールドおよび「説明」フィールドに入力します。

重要: サブグループには、システム定義の役割と同じ名前を付けないでください。例えば、"Admin" は Campaign で役割名として使用されているため、サブグループの名前として使用しないでください。同じ名前にすると、アップグレード時に問題が発生する原因になります。

5. 「変更の保存」をクリックします。

   「グループ階層」リストの該当のグループの下に新規サブグループが追加されます。

   ヒント: 親グループのフォルダー・アイコンが閉じている場合、リストを展開するには正符号 (+) をクリックします。

関連資料:

29 ページの『ユーザー・グループ管理ページ』

グループまたはサブグループの削除

グループまたはサブグループを削除すると、グループのメンバーはそのグループに割り当てられた役割を失うことになり、役割が明示的に親に割り当てられている場合を除き、グループの親もまた、それらの役割の割り当てを失うことを覚えておいてください。

手順

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。
2. 削除するグループまたはサブグループの名前をクリックします。

   注: 親グループのフォルダー・アイコンが閉じているときに、サブグループを選択するには、リストを展開する正符号 (+) をクリックします。
3. 右のペインの上部にある「グループの削除」ボタンをクリックします。
4. 「**OK**」をクリックします。

関連資料:

29 ページの『ユーザー・グループ管理ページ』

グループまたはサブグループの説明の変更

この手順を使用して、グループまたはサブグループの説明を変更します。

手順

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。
2. 説明を変更するグループまたはサブグループの名前をクリックします。

   注: 親グループのフォルダー・アイコンが閉じているときに、サブグループを選択するには、リストを展開する正符号 (+) をクリックします。
3. 「プロパティの編集」をクリックします。
4. 必要に応じて説明を編集します。

5. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
6. 「**OK**」をクリックします。

関連資料:

29 ページの『ユーザー・グループ管理ページ』

パーティションへのグループの割り当て

この手順は、Campaign に複数のパーティションが構成されている場合のみ必要です。このタスクを実行できるのは、PlatformAdminRole 役割を持つアカウントだけです (platform_admin ユーザーなど)。

手順

1. 各パーティションに割り当てるグループを決定します。必要に応じて、グループを作成します。
2. 「設定」**>**「ユーザー・グループ」をクリックします。
3. パーティションに割り当てるグループまたはサブグループの名前をクリックします。
4. 「プロパティの編集」をクリックします。
5. 「パーティション **ID**」ドロップダウン・リストから目的のパーティションを選択します。

   このフィールドは、複数のパーティションが構成されている場合のみ有効になります。
6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「**OK**」をクリックします。

関連資料:

29 ページの『ユーザー・グループ管理ページ』

グループまたはサブグループへのユーザーの追加

この手順を使用して、グループまたはサブグループにユーザーを追加します。

手順

1. 「設定」**>**「ユーザ」をクリックします。

   注**:** 「ユーザー・グループ」ページで、グループ名をクリックして「ユーザーの編集」をクリックすることで、同じタスクを実行することができます。
2. 変更するユーザ名をクリックします。
3. ページの下部にある「グループの編集」リンクをクリックします。
4. 「選択可能なグループ」ボックスのグループ名をクリックして選択します。
5. 「追加」ボタンをクリックします。

   グループ名が「グループ」ボックスに移動します。

6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「**OK**」をクリックします。

   ユーザー・アカウントの詳細が表示され、割り当てたグループまたはサブグループがリストされます。

関連資料:

『ユーザー・グループ管理ページ』

グループまたはサブグループからのユーザーの除去

この手順を使用して、グループまたはサブグループからユーザーを除去します。

このタスクについて

重要**:** グループまたはサブグループからユーザを除去すると、そのグループまたはサブグループに割り当てられている役割がユーザから除去されます。

手順

1. 「設定」**>**「ユーザ」をクリックします。
2. 変更するユーザ名をクリックします。
3. ページの下部にある「グループの編集」リンクをクリックします。
4. 「グループ」ボックスのグループ名をクリックして選択します。
5. 「除去」ボタンをクリックします。

   グループ名が「選択可能なグループ」ボックスに移動します。
6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「**OK**」をクリックします。
8. ページの下部にある「プロパティーの編集」リンクをクリックします。
9. 必要に応じて名前または説明を変更します。
10. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
11. 「**OK**」をクリックします。

関連資料:

『ユーザー・グループ管理ページ』

ユーザー・グループ管理ページ

ユーザー・グループを構成するために使用するフィールドがあります。

「新規グループ」ページ、「新規サブグループ」ページ、および「プロパティーの編集」ページのフィールド

表 *8.* 「新規グループ」ページ、「新規サブグループ」ページ、および「プロパティーの編集」ページのフィールド

フィールド	説明
グループ名	グループ名。上限は 64 文字です。 グループ名を作成するときは以下の文字を使用できます。 • 英字の大文字および小文字 (A から Z) • 数字 (0 から 9) • 単一引用符 (') • ハイフン (-) • アンダースコアー (_) • 単価記号 (@) • スラッシュ (/) • 小括弧 • コロン (:) • セミコロン (;) • スペース (先頭文字以外) • 2 バイト文字 (漢字など) グループまたはサブグループには、システム定義の役割と同じ名前を付けないでください。例えば、"Admin" は Campaign で役割名として使用されているため、グループの名前として使用しないでください。同じ名前にすると、アップグレード時に問題が発生する原因になります。 IBM Marketing Software 名では、表示の目的で大/小文字の区別が維持されますが、比較および作成には大/小文字を区別しない規則が使用されます (例えば、Admin と admin の両方を別個のグループ名として作成することはできません)。 サブグループを作成する場合は、親グループと関連のある名前をサブグループに付けることをお勧めします。
説明	グループの説明。上限は 256 文字です。 グループまたはサブグループに付与する計画の役割を説明に含めておくと役立ちます。そうすれば、グループ詳細ページを表示したときに、役割とユーザーの両方が一目でわかります。
パーティション ID	複数のパーティションが構成されている場合のみ、使用可能です。 グループにパーティションを割り当てると、そのブートのメンバーはそのパーティションのメンバーになります。1 人のユーザーは 1 つのパーティションのみのメンバーになることができます。

「ユーザーの編集」ページと「役割の編集」ページのフィールド

表 *9.* 「ユーザーの編集」ページと「役割の編集」ページのフィールド

フィールド	説明
選択可能なグループまたは選択可能な役割	ユーザーが割り当てられていないグループおよびサブグループまたは役割のリスト。
グループまたは役割	ユーザーが割り当てられているグループとサブグループまたは役割のリスト。

役割の作成

新規役割を作成する必要があるのは、細分化された権限が設定されている製品の場合のみです。レポート機能および一部の IBM Marketing Software 製品では基本的な権限しか使用できないものもあるので、そのような製品に対しては追加の役割を作成する必要はありません。

手順

1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限」をクリックします。
2. 左のリストにある製品名の隣の正符号をクリックしてから、役割を作成するパーティションの名前をクリックします。
3. Campaign の場合のみ、新規役割を「グローバル・ポリシー」の下に作成したい場合は、「グローバル・ポリシー」をクリックします。
4. 「役割の追加と権限の割り当て」をクリックします。
5. 「役割の追加」をクリックします。
6. 役割の名前と説明を入力します。
7. 「変更を保存」をクリックして役割を保存するか、「権限の保存および編集」をクリックし、「権限」ページに進んでリスト内のいずれかの役割について、権限を追加または変更します。

関連資料:

34 ページの『権限の状態の定義』
35 ページの『基本的な役割のみを使用する製品の権限』
36 ページの『Marketing Platform の権限』
38 ページの『Opportunity Detect の権限』

役割の権限の変更

この手順は、役割の権限を変更する際に使用します。

手順

1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限」をクリックします。
2. 左のリストにある製品の横の正符号をクリックして、役割を変更したいパーティションの名前をクリックします。

3. Campaign の場合のみ、新規役割を「グローバル・ポリシー」またはユーザー作成のポリシーの下に作成したい場合は、該当のポリシー名をクリックします。
4. 「役割の追加と権限の割り当て」をクリックします。
5. 「権限の保存および編集」をクリックします。
6. 役割グループの横にある正符号をクリックすると、それぞれの役割で選択可能なすべての権限とそれらの権限の状態が表示されます。
7. 権限を変更する役割の列で、権限の行のボックスをクリックして、状態を「認可」、「拒否」、または「不認可」に設定します。
8. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。

   「前回保存時の状態に戻す」をクリックして前回の保存時以降の変更を取り消して「権限」ページに残るか、「取り消し」をクリックし、前回の保存時以降の変更を破棄してパーティションまたはポリシーのページへ進みます。

関連資料:

34 ページの『権限の状態の定義』
35 ページの『基本的な役割のみを使用する製品の権限』
36 ページの『Marketing Platform の権限』
38 ページの『Opportunity Detect の権限』

システムからの役割の除去

この手順は、IBM Marketing Software から役割を除去する際に使用します。

このタスクについて

重要**:** 役割を除去すると、その役割が割り当てられていたすべてのユーザーおよびグループから役割が除去されます。

手順

1. 「設定」**>**「ユーザーの役割と権限」をクリックします。
2. 左のリストにある製品の隣の正符号をクリックしてから、役割を作成するパーティションの名前をクリックします。
3. Campaign の場合のみ、新規役割を「グローバル・ポリシー」の下に作成したい場合は、「グローバル・ポリシー」をクリックします。
4. 「役割の追加と権限の割り当て」をクリックします。
5. 削除する役割の「除去」リンクをクリックします。
6. 「変更の保存」をクリックします。

関連資料:

34 ページの『権限の状態の定義』
35 ページの『基本的な役割のみを使用する製品の権限』
36 ページの『Marketing Platform の権限』
38 ページの『Opportunity Detect の権限』

グループへの役割の割り当てまたはグループからの役割の除去

グループに役割を追加する場合またはグループから役割を除去する場合は、そのグループのメンバーが、その役割を獲得するかまたは失います。

手順

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。
2. 操作対象のグループの名前をクリックします。
3. 「役割の割り当て」をクリックします。

   グループに割り当てられていない役割が、左の「選択可能な役割」ボックスに表示されます。現在グループに割り当てられている役割は、右の「役割」ボックスに表示されます。
4. 「選択可能な役割」ボックスの役割名をクリックして選択します。
5. 「追加」または「除去」をクリックして、役割名を一方のボックスからもう一方のボックスに移動します。
6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「**OK**」をクリックします。

関連資料:

34 ページの『権限の状態の定義』
35 ページの『基本的な役割のみを使用する製品の権限』
36 ページの『Marketing Platform の権限』
38 ページの『Opportunity Detect の権限』

ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除

「役割の編集」ウィンドウは、ユーザーに役割を割り当てたり、ユーザーから役割を削除したりするために使用します。

手順

以下のタスクを実行して、ユーザーに役割を割り当てる、またはユーザーから役割を削除します。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 作業対象のユーザー・アカウントの名前をクリックします。
3. 「役割の編集」をクリックします。

   ユーザーに割り当てられていない役割が、左側の「選択可能な役割」ボックスに表示されます。ユーザーに現在割り当てられている役割が、右側の「選択した役割」ボックスに表示されます。
4. 「選択可能な役割」ボックスで役割を選択します。以下のいずれかのタスクを実行します。

- ユーザーに役割を割り当てる場合は、「選択可能な役割」ボックスで役割を選択して、「追加」をクリックします。
- ユーザーから役割を削除する場合は、「選択した役割」ボックスで役割を選択して、「削除」をクリックします。

5. 「変更の保存」をクリックしてから、「**OK**」をクリックします。

関連資料:

『権限の状態の定義』

35 ページの『基本的な役割のみを使用する製品の権限』

36 ページの『Marketing Platform の権限』

38 ページの『Opportunity Detect の権限』

権限の状態の定義

それぞれの役割について、どの権限を認可するか、認可しないか、または拒否するかを指定することができます。これらの権限は、「設定」>「ユーザーの役割と権限」ページで設定します。

これらの状態には以下の意味があります。

- 付与: チェック・マーク で表されます。ユーザーのその他の役割で明示的に権限が否定されない限り、この特定の機能を実行する権限が明示的に認可されます。
- 拒否: 「X」 で表されます。ユーザーの他の役割で権限が認可されているかどうかに関係なく、この特定の機能を実行する権限が明示的に拒否されます。
- 未付与: 円 で表されます。特定の機能を実行する権限を明示的に認可または拒否しません。ユーザーの役割のいずれかでこの権限が明示的に認可されていない場合、ユーザーはこの機能を実行することはできません。

関連タスク:

31 ページの『役割の作成』

31 ページの『役割の権限の変更』

32 ページの『システムからの役割の除去』

33 ページの『グループへの役割の割り当てまたはグループからの役割の除去』

33 ページの『ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除』

基本的な役割のみを使用する製品の権限

以下の表では、基本的な役割のみを使用する IBM Marketing Software 製品で利用できる役割の機能定義について説明しています。追加情報については、製品資料を参照してください。

表 *10.* 基本的な役割のみを使用する製品の権限

IBM アプリケーション	役割
Leads	Leads 役割は、将来の利用のために予約されています。
レポート	• ReportsSystem - `report_system` 権限を認可します。これによって、「設定」メニューの「レポート **SQL** ジェネレータ」オプションおよび「レポートフォルダの権限の同期」オプションにアクセスすることができます。 • ReportsUser – `report_user` 権限を認可します。これは、IBM Cognos 8 BI システムにインストールされた IBM 認証プロバイダーのみが使用します。 IBM Cognos 8 BI 統合の認証オプション、および IBM 認証プロバイダーがレポート権限を使用する方法については、*IBM Marketing Software*『*Reports* インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
eMessage	• eMessage_Admin - すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。 • eMessage_User - 将来の利用のために予約されています。 アクセス権限は、Campaign のセキュリティー・ポリシーによってさらに詳細に定義されます。詳しくは、「*IBM eMessage* 起動および管理者ガイド」を参照してください。
Interact	• InteractAdminRole - すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。
Distributed Marketing	• collab_admin - すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。 • corporate - Campaign および Distributed Marketing を使用して再使用可能な Lists およびオンデマンド・キャンペーン・テンプレートを開発することができます。企業キャンペーンを作成および変更できます。 • field - 企業キャンペーンに参加でき、Distributed Marketing で Lists およびオンデマンド・キャンペーンを作成および実行できます。

表 *10.* 基本的な役割のみを使用する製品の権限 *(*続き*)*

IBM アプリケーション	役割
Marketing Operations	• PlanUserRole - デフォルトでは、PlanUserRole 役割を持つユーザーには Marketing Operations で有効になっている権限はほとんどありません。これらのユーザーは、計画、プログラム、またはプロジェクトを作成することはできず、管理設定へのアクセス権限も限定されています。 • PlanAdminRole - デフォルトでは、PlanAdminRole 役割を持つユーザーには Marketing Operations で有効にされるほとんどの権限が備わっています。これには、すべての管理設定および構成設定へのアクセス権限も含まれ、広範囲のアクセス権限が許可されます。 アクセス権限は、Marketing Operations のセキュリティー・ポリシーによってさらに詳細に定義されます。
IBM SPSS® Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition	• SPSSUser - SPSSUser 役割を持つユーザーは、以下のことを行えます。 – レポートの実行 – コンテンツ・リポジトリーでの項目の表示 – スコア設定の実行 • SPSSAdmin - SPSSAdmin 役割を持つユーザーは、IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition で有効にされるすべての権限が備わっています。これには、すべての管理設定および構成設定へのアクセス権限が含まれます。

関連タスク:

31 ページの『役割の作成』
31 ページの『役割の権限の変更』
32 ページの『システムからの役割の除去』
33 ページの『グループへの役割の割り当てまたはグループからの役割の除去』
33 ページの『ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除』

Marketing Platform の権限

以下の表では、Marketing Platform で役割に割り当てることができる権限について説明します。

表 *11. Marketing Platform*権限

権限	説明
「ユーザー」ページの管理	ユーザーは、自分のパーティション内のユーザー・アカウントに関する「ユーザー」ページで、以下のすべてのユーザー管理タスクを実行することができます。内部ユーザー・アカウントの追加および削除。属性、データ・ソース、役割の割り当ての変更。

表 *11. Marketing Platform*権限 *(*続き*)*

権限	説明
「ユーザー」ページへのアクセス	ユーザーが「ユーザー」ページを表示できるようにします。
「ユーザー・グループ」ページの管理	ユーザーは、グループへのパーティションの割り当て (これを実行できるのは platform_admin ユーザーのみです) を除き、「ユーザー・グループ」ページですべてのアクションを実行することができます。この権限を持つユーザーは、グループの作成、変更、削除、グループ・メンバーシップの管理、グループに対する役割の割り当てを行うことができます。
「ユーザーの役割」ページの管理	ユーザーは、「ユーザーの役割と権限」ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。Marketing Platform および Campaign での役割の作成、変更、削除、およびリストされたすべての IBM Marketing Software 製品の役割に対するユーザーの割り当て。
「構成」ページの管理	ユーザーは、「構成」ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。プロパティー値の変更、テンプレートからの新規カテゴリーの作成、「カテゴリーの削除」リンクがあるカテゴリーの削除。
「データ・フィルター」ページの管理	ユーザーは、「データ・フィルター」ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。データ・フィルターの割り当て、および割り当ての除去。
「スケジュール済みタスク」ページの管理	ユーザーは、「スケジュール管理」ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。スケジュール定義の表示と変更、および実行の表示。
ダッシュボードの管理	ユーザーは、「ダッシュボード」ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。ダッシュボードの作成、表示、変更、削除、ダッシュボード管理者の割り当て、ダッシュボード・アクセス権限の管理。

関連タスク:

31 ページの『役割の作成』
31 ページの『役割の権限の変更』
32 ページの『システムからの役割の除去』
33 ページの『グループへの役割の割り当てまたはグループからの役割の除去』
33 ページの『ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除』

Opportunity Detect の権限

以下の表では、Opportunity Detect で役割に割り当てることができる権限について説明します。

「付与しない」ステータスを持つすべての権限は、「拒否」として処理されます。

表 12. *Opportunity Detect* での権限

権限	説明
表示のみ	すべてのユーザー・インターフェースに表示のみモードでアクセスできます。
トリガーの設計	• ワークスペースを作成し、トリガー・システムを設計できます。 • リソースに関連したすべてのトリガーを作成、変更、および削除できます。 • 「ワークスペース」、「コンポーネント」、「オーディエンス・レベル」、「データ・ソース」、および「指定された値のリスト」のページにアクセスできます。 • ワークスペースの「サーバー・グループ」ページと「配置」タブにアクセスできません。 • バッチ実行を起動できません。 • Opportunity Detect が Interact と統合されるときに Web サービスが作成するオブジェクトを管理できません。
テスト用に実行	• 実稼働用に指定されていないサーバー・グループで、デプロイメント構成をデプロイし、バッチのデプロイメント構成を実行します。 • ワークスペースの「サーバー・グループ」ページおよび「配置」タブにアクセスできますが、実稼働用のサーバー・グループを指定することはできません。 • 実稼働サーバー・グループを使用するデプロイメント構成をデプロイしたり、実行したりすることはできません。
実稼働用に実行	• 任意のサーバー・グループで、デプロイメント構成をデプロイし、バッチのデプロイメント構成を実行します。 • ワークスペースの「サーバー・グループ」ページ、「配置」タブ、および「バッチ実行」タブで、実稼働用のサーバー・グループの指定を含む、すべてのアクションを実行します。

表 12. *Opportunity Detect* での権限 (続き)

権限	説明
リアルタイムの管理	リアルタイム・モードを有効にするために Opportunity Detect が Interact と統合されるときに Web サービスが作成するオブジェクトを管理します。 以下を許可します。 • Web サービスによって作成されたワークスペースおよびコンポーネントを削除する。 • リアルタイムのデプロイメント構成を開始および停止し、それらのログ・レベルを更新する。 この権限のみを持つユーザーは、リアルタイムのデプロイメント構成の実行を開始できません。 この権限を持っている場合でも、以下を実行することはできません。 • Web サービスによって作成されたオーディエンス・レベル、データ・ソース、指定された値のリスト、サーバー・グループ、またはデプロイメント構成を削除および更新する。 • Web サービスによって作成されたデプロイメント構成を作成およびデプロイする。

関連タスク:

31 ページの『役割の作成』
31 ページの『役割の権限の変更』
32 ページの『システムからの役割の除去』
33 ページの『グループへの役割の割り当てまたはグループからの役割の除去』
33 ページの『ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除』

第 4 章 構成管理

IBM Marketing Software を初めてインストールするときは、「構成」ページに、IBM Marketing Platform の構成に使用されるプロパティーといくつかのグローバル構成プロパティーのみが表示されます。追加の IBM Marketing Software アプリケーションをインストールするときは、それらのアプリケーションの構成に使用されるプロパティーが Marketing Platform に登録されます。その後、それらのプロパティーが「構成」ページに表示され、そこで値の設定または変更ができるようになります。

アプリケーションによっては、中央リポジトリーに格納されない追加構成プロパティーがあることがあります。アプリケーションのすべての構成オプションについて詳しくは、アプリケーションの資料を参照してください。

関連概念:

289 ページの『第 21 章 「構成」ページでのプロパティーの構成』

プロパティー・カテゴリー

Marketing Platform を最初にインストールしたときには、「レポート」、「一般」、および「**IBM Marketing Platform**」のカテゴリーが表示されます。これらのカテゴリーには、スイートにインストールされるすべての IBM Marketing Software アプリケーションに適用される、プロパティーが含まれています。

- デフォルトのロケール設定
- ログイン・モードおよびモード固有の設定を指定するプロパティーが含まれた、セキュリティー・カテゴリーおよびサブカテゴリー
- パスワード設定
- データ・フィルターを構成するプロパティー
- スケジュールを構成するプロパティー
- レポート機能を構成するプロパティー
- アラートの処理方法を構成するプロパティー

インストールされる IBM Marketing Software アプリケーションに応じて、追加カテゴリーにはアプリケーション固有のカテゴリーおよびサブカテゴリーが含まれます。例えば、Campaign をインストールした後は、キャンペーン・カテゴリーに Campaign関連のプロパティーおよびサブカテゴリーが含まれています。

カテゴリー・タイプ

カテゴリーは 3 つのタイプのいずれかで、それぞれ別のアイコンによって識別されます。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

表 13. カテゴリー・タイプのアイコン

カテゴリタイプ	アイコン
構成可能なプロパティが含まれていないカテゴリ	
構成可能なプロパティが含まれているカテゴリ	
カテゴリーの作成に使用できるテンプレート・カテゴリー また、テンプレート・カテゴリーの名前はイタリックで示され、小括弧で囲まれています。	

カテゴリーを複製するためのテンプレート

IBM Marketing Software アプリケーションのプロパティーは、アプリケーションのインストール時に Marketing Platform に登録されます。構成のためにユーザーがアプリケーションで重複カテゴリーを作成する必要がある場合のために、カテゴリーのテンプレートが提供されています。

カテゴリーを作成するには、テンプレートを複製します。例えば、適切なテンプレートを複製することによって、新規のCampaignパーティションまたはデータ・ソースを作成することができます。

テンプレートから作成したカテゴリーを削除することもできます。

関連概念:

『カテゴリー命名上の制限』

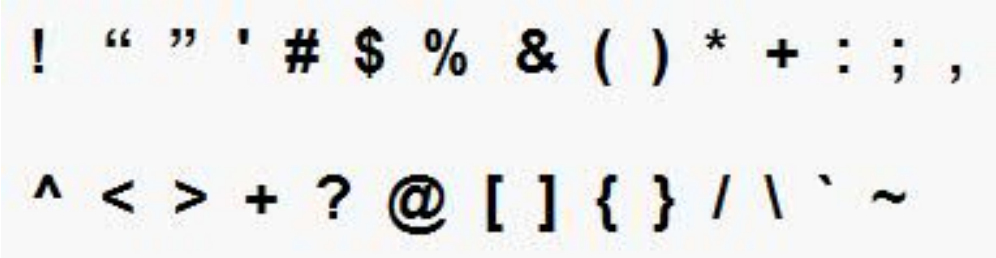
関連タスク:

45 ページの『テンプレートからのカテゴリーの作成』

カテゴリー命名上の制限

テンプレートから作成するカテゴリーに名前を付ける際には、以下の制限が適用されます。

- ツリー内で兄弟関係にあるカテゴリー間で (つまり同じ親カテゴリーを共有するカテゴリー間で) 固有の名前である必要があります。
- 以下の文字は、カテゴリ名には使用できません。



また、名前をピリオドで始めることはできません。

関連概念:

42 ページの『カテゴリーを複製するためのテンプレート』

関連タスク:

45 ページの『テンプレートからのカテゴリーの作成』

プロパティーの説明

プロパティーの説明には以下のいずれかの方法でアクセスできます。

- 「ヘルプ」>「このページのヘルプ」をクリックしてオンライン・ヘルプを起動し、表示中のページの全プロパティーについて説明しているトピックを表示します。
- 「ヘルプ」>「製品資料」をクリックすると、オンラインまたは PDF 形式のすべての製品資料にアクセスできるページが開きます。すべてのプロパティーの説明は、「*IBM Marketing Platform* 管理者ガイド」の付録に含まれています。

最新表示の機能

構成ナビゲーション・ツリーの上部にある最新表示ボタン には、以下の機能があります。

- ツリーの内容を最新表示します。これは、構成設定の最新情報を取得したい場合に役立ちます。ツリーを表示している間に設定が更新される場合があります (例えば、アプリケーションが登録または登録解除されたり、他のユーザーが設定を更新したりした可能性があります)。
- 必要に応じてツリーを縮小または展開して、最後にノードを選択したときの状態にナビゲーション・ツリーを戻します。

  重要**:** 編集モードになっているときに「最新表示」をクリックすると、ページは読み取りモードに戻ります。保存されていなかった変更はすべて失われます。

デフォルトのユーザロケール設定

Marketing Platform には、これを実装するすべての IBM Marketing Software アプリケーションに適用されるデフォルトのロケール属性があります。

このデフォルトを設定するには、「**Platform**」カテゴリーの「地域」プロパティーの値を設定します。

このプロパティーについて詳しくは、「構成」領域でオンライン・ヘルプを参照するか、「*Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。IBM Marketing Software アプリケーションにこの属性が実装されているかどうかを調べるには、そのアプリケーションの資料を参照してください。

ユーザーのアカウントでこのプロパティーの値を変更することによって、ユーザー単位でこれらのデフォルト値をオーバーライドすることができます。

関連概念:

17 ページの『ロケール設定』

カテゴリの移動

この手順は、「構成」ページでカテゴリーにナビゲートする際に使用します。

手順

1. IBM Marketing Software にログインします。
2. ツールバーの「設定」>「構成」をクリックします。

   「構成」ページに構成カテゴリー・ツリーが表示されます。
3. カテゴリの横にある正符号アイコンをクリックします。

   カテゴリーが開き、サブカテゴリーが表示されます。カテゴリーにプロパティーが含まれている場合は、プロパティーがその現行値と共に表示されます。

   カテゴリーの内部名は、ページ・タイトルの下に表示されます。この内部名は、`configTool` ユーティリティーを使ってカテゴリーおよびそのプロパティーを手動でインポートまたはエクスポートする際に使用します。
4. 編集するプロパティーが表示されるまで、カテゴリーおよびサブカテゴリーを展開します。

プロパティ値の編集

この手順は、「構成」ページでプロパティー値を変更する際に使用します。

手順

1. 設定するプロパティーが含まれているカテゴリーまで移動します。

   カテゴリーの「設定」ページには、対象のカテゴリーのすべてのプロパティーのリストと、その現行値が表示されます。
2. 「設定の編集」をクリックします。

   カテゴリーの「設定の編集」ページの編集可能フィールドにプロパティー値が表示されます。
3. 必要に応じて値を入力または編集します。

   UNIX では、すべてのファイル名およびディレクトリー名で大/小文字が区別されます。入力するファイル名およびフォルダー名の大/小文字は、UNIX マシン上のファイル名またはフォルダー名の大/小文字と一致する必要があります。
4. 変更を保存するには「変更を保存」をクリックし、保存せずにページを終了するには「キャンセル」をクリックします。

関連タスク:

『カテゴリの移動』

テンプレートからのカテゴリーの作成

この手順は、「構成」ページでテンプレートからカテゴリーを作成する際に使用します。

手順

1. 「構成」ページで、複製するテンプレート・カテゴリーまで移動します。

   他のカテゴリーと異なり、テンプレート・カテゴリーのラベルはイタリックで、小括弧で囲まれています。
2. テンプレートカテゴリをクリックします。
3. 「新しいカテゴリー名」フィールドに名前を入力します (必須)。
4. この時点で新規カテゴリーのプロパティーを編集できます。また、後で編集することもできます。
5. 「変更の保存」をクリックして、新しい構成を保存します。

タスクの結果

新規カテゴリがナビゲーションツリーに表示されます。

関連概念:

42 ページの『カテゴリーを複製するためのテンプレート』
42 ページの『カテゴリー命名上の制限』

カテゴリの削除

この手順は、「構成」ページでカテゴリーを削除する際に使用します。

このタスクについて

「構成」ページには、削除できるカテゴリーと削除できないカテゴリーがあります。テンプレートから作成したカテゴリーは、すべて削除できます。また、IBM Marketing Software 製品が登録されている場合、そのカテゴリー・セットには削除可能なカテゴリーが含まれている場合があります。

手順

1. 「構成」ページで、削除するカテゴリーまで移動し、それをクリックして選択して、その「設定」ページを開きます。

   選択したカテゴリーが削除可能な場合、「カテゴリーの削除」リンクが表示されます。
2. 「カテゴリーの削除」リンクをクリックします。

   「"*category name*" を削除してもよろしいですか」というメッセージがウィンドウに表示されます。
3. 「**OK**」をクリックします。

タスクの結果

そのカテゴリは、ナビゲーションツリーに表示されなくなります。

第 5 章 ダッシュボードの管理

ダッシュボードは、会社内部でさまざまな役割を果たすユーザーのグループにとって役立つ情報が含まれている、構成可能なページです。ダッシュボードを構成するコンポーネントは、ポートレットと呼ばれます。ダッシュボードには、事前定義のポートレット、または作成したポートレットを入れることができます。

ダッシュボードは自分で作成して構成することも、事前作成されたダッシュボードを使用することもできます。事前作成されたダッシュボードには、組織内のさまざまな役割でユーザーの役に立つように設計された組み合わせで、事前定義のポートレットを入れることができます。

IBM Marketing Software 製品ページ、会社のイントラネット上のページ、またはインターネット上のページから、独自のカスタム・ポートレットを作成することもできます。

関連概念:

66 ページの『カスタム・ポートレット』

ダッシュボードの計画

組織でダッシュボード機能をどのような方法で使用するかを計画する際は、マーケティング管理チームと一緒に作業して以下の詳細を決定する必要があります。

- ユーザーに必要なダッシュボードはどれか。
- どのユーザがどのダッシュボードへのアクセス権限を持つか。
- 各ダッシュボードにどのポートレットを入れるか。
- ダッシュボードのロールアウト後に、各ダッシュボードのダッシュボード管理者として誰を任命するか。ダッシュボード管理者は、ダッシュボードへのユーザー・アクセスを管理し、必要に応じて個々のダッシュボードの内容とレイアウトを変更します。

ダッシュボード・オーディエンス

ダッシュボードをグループに関連付けるか、個々のユーザーを割り当てることにより、ダッシュボードを表示するユーザーを制御することができます。グループのメンバーはそのグループに関連付けられているダッシュボードにアクセスすることができますが、非メンバーはそのダッシュボードを表示することができません。

また、1 つ以上のグローバル・ダッシュボードを作成できます。このダッシュボードは、グループのメンバーシップやユーザー個々の割り当てには関係なく、特定のパーティション内のすべての IBM Marketing Software ユーザーが表示できます。

グローバル・ダッシュボードを作成する際、できるだけ広範囲のユーザーの関心を引くポートレットを組み込む必要があります。例えば、Campaign をインストール

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

した場合、事前定義の IBM Marketing Software ポートレットの 1 つである「最近使ったカスタム・ブックマーク」ポートレットを入れることができます。

ダッシュボードの表示に必要なユーザ権限

ダッシュボードを使用すると、IBM Marketing Software ユーザーは、各製品内部でユーザーに対して構成されている権限に関係なく、複数の製品 (Marketing Operations や Campaign など) からのページを単一のページに表示することができます。

一部のダッシュボード・ポートレットでは、ポートレット内部のリンクをクリックして作業できるページを開くことによって、IBM Marketing Software 製品での作業を実行することができます。ユーザーにタスクを実行する権限がない場合は、ページが表示されません。

ポートレット内のコンテンツの一部はユーザー別にフィルタリングされます。 例えば、ユーザーがキャンペーンを直接操作できない場合は、「最近使ったキャンペーン」ポートレットにはリンクが何も表示されない可能性があります。

事前定義ポートレット

IBM Marketing Software には 2 つのタイプの事前定義ダッシュボード・ポートレットがあり、有効にすると、作成した任意のダッシュボードに追加することができます。

IBM Marketing Software 事前定義ポートレットでは、Marketing Platform シングル・サインオン・メカニズムを使用して IBM Marketing Software のコンテンツにアクセスします。ユーザーがこれらのポートレットが含まれているダッシュボードを表示する際、資格情報を求めるプロンプトは表示されません。

- リスト: ユーザーに固有の IBM Marketing Software 項目のリストです。リスト・ポートレットの例には、最近使ったキャンペーン (My Recent Campaigns)(Campaign), 自分のアラート (Marketing Operations)、およびコンテンツ・サマリー・レポート (Digital Analytics for On Premises) があります。
- IBM Cognos レポート: 特殊フォーマット・バージョンの IBM Marketing Software レポート。

また、独自のカスタム・ダッシュボード・ポートレットを作成することもできます。

関連概念:

66 ページの『カスタム・ポートレットのタイプおよび使用可能性』

事前定義ポートレットの使用可能性

IBM Marketing Software では、多くの製品で事前定義ポートレットが用意されています。事前定義ポートレットが使用可能かどうかは、インストールした IBM

Marketing Software 製品によって異なります。また、IBM Cognos ポートレットは、IBM Marketing Software のレポート機能が実装されている場合にのみ使用できます。

Marketing Platform で事前定義のポートレットを有効にしてからでないと、ダッシュボードでそれらのポートレットを使用することはできません。IBM Marketing Software ポートレットは、それが所属する製品がインストールされているかどうかに関係なく、Marketing Platform にリストされます。インストールされている製品に所属するポートレットだけを有効にすることをお勧めします。ダッシュボードに追加できるポートレットのリストには、有効になっているポートレットのみが表示されます。

Marketing Operations IBM Cognos レポート・ポートレット

以下の表では、Marketing Operations レポート・パッケージのインストール後に使用できる Marketing Operations ダッシュボード・ポートレットについて説明します。

表 *14.* 標準 *Marketing Operations IBM Cognos* レポート・ポートレット

レポート	説明
プロジェクトタイプ別の予算	現在の暦年における、プロジェクト・タイプ別の予算の 3 次元円グラフを示す IBM Cognos レポートの例。このレポートには、金融管理モジュールが必要です。
四半期別の完了プロジェクト	この四半期に期限前、期限どおり、期限後に完了したプロジェクトの数を示す 3 次元棒グラフを示す IBM Cognos レポートの例。
プロジェクトタイプ別の予測	現在の暦年における、プロジェクト・タイプ別の予測支出の 3 次元円グラフを示す IBM Cognos レポートの例。
マネージャ承認のサマリー	システム内のすべての進行中プロジェクトに関するアクティブな承認と完了した承認のデータを示す IBM Cognos レポートの例。
マネージャタスクのサマリー	すべての進行中プロジェクトに関するアクティブ・タスクと完了したタスクのデータを示す IBM Cognos レポートの例。
マーケティング財務状態	現在の暦年におけるすべての状態のすべての計画について、予算、予測、コミット済み、および実際の金額のタイムラインを示す IBM Cognos レポートの例。このレポートには、金融管理モジュールが必要です。
自分のタスクのサマリー	すべての進行中プロジェクトにおける、レポートを表示中のユーザーのすべてのアクティブ・タスクと完了したタスクに関するデータを示す IBM Cognos レポートの例。
自分の承認のサマリー	レポートを表示中のユーザーの、アクティブな承認と完了した承認に関するデータを示す IBM Cognos レポートの例。
プロジェクトタイプ別プロジェクト	システム内のすべての進行中プロジェクトをテンプレート・タイプ別に示す 3-D 円グラフを示す IBM Cognos レポートの例。
ステータス別プロジェクト	システム内のすべてのプロジェクトをステータス別 (ドラフト、進行中、保留、キャンセル、終了) に示す 3-D 棒グラフを示す IBM Cognos レポートの例。
要求および完了したプロジェクト	1 カ月あたりのプロジェクト要求の数と完了プロジェクトの数のタイムライン・グラフを示す IBM Cognos レポートの例。このレポートでは、送信済み、受け入れ済み、または差し戻しの状態のプロジェクト要求のみを数えます。

表 14. 標準 *Marketing Operations IBM Cognos* レポート・ポートレット (続き)

レポート	説明
プロジェクトタイプ別の金額	現在の暦年における、プロジェクト・タイプ別の実際の支出金額を示す 3 次元円グラフを示す IBM Cognos レポートの例。このレポートには、金融管理モジュールが必要です。

Marketing Operations リスト・ポートレット

Marketing Operations レポート・パッケージがインストールされていない場合でも、ダッシュボード上の使用可能な Marketing Operations リスト・ポートレットにアクセスできます。

表 15. 標準 *Marketing Operations* リスト・ポートレット

レポート	説明
アクション待ちの承認	アクション待ちの承認リスト。
マイ・タスクの管理	「保留中」と「有効」のタスク、および「開始前」と「進行中」の承認をリストします。各項目のステータスを変更するオプションが表示されます。 • タスクの場合、ステータスを「終了」または「スキップ」に変更できます。 • 「開始前」の承認の場合、ステータスを「送信」または「キャンセル」に変更できます。 • 所有している「進行中」の承認の場合、ステータスを「停止」、「終了」、「キャンセル」のいずれかに変更できます。 • 承認するように割り当てられている「進行中」の承認の場合には、ステータスは「承認」または「拒否」に変更できます。
自分のアクティブプロジェクト	アクティブなプロジェクトをリストします。
自分のアラート	自分の Marketing Operations アラートをリストします。

表 15. 標準 *Marketing Operations* リスト・ポートレット (続き)

レポート	説明
マイ・プロジェクトの正常性	自分が所有するプロジェクトごと、または自分がレビュー担当者またはメンバーとして含まれるプロジェクトごとに、名前、正常性ステータス、完了率、および自分に割り当てられているタスクの数をリストします。完了率は次のように計算されます。 (完了したタスクの数 + スキップされたタスクの数) ÷ ワークフロー・タスクの総数 • プロジェクトの正常性ステータスを再計算するには、 をクリックします。システムが正常性ステータスを再計算した結果を表示するのは、このポートレットだけです。 Marketing Operations 内の他の箇所では機能しません。 **注:** プロジェクトの正常性の計算は、5 分間隔でのみ行えます。 • 自分が所有するプロジェクトが 100 を超える場合、「すべて表示」をクリックして、リストを新規ダイアログで開きます。 • リストされているプロジェクト・データを .CSV ファイルにエクスポートするには、「エクスポート」をクリックします。 • 「サマリー」タブで、プロジェクトに関するサマリー情報を表示できます。プロジェクトの正常性に関するメトリックをさらに表示するには、完了率の指標をクリックします。「自分のタスク」リストを表示するには、「タスク」列の数値をクリックします。
自分の要求	自分が所有している要求をリストします。
自分のタスク	自分が所有しているタスクをリストします。
予算超過プロジェクト	暦年の予算を超過したすべてのプロジェクトをリストします。 **注:** このレポートには、金融管理モジュールが必要です。

Campaign の IBM Cognos レポート・ポートレット

IBM Cognos レポート・ポートレットは、Campaign レポート・パッケージで提供されています。レポート・ポートレットを使用して、レスポンス率およびキャンペーンの効率を分析します。

事前定義ダッシュボード・ポートレットを有効にした後、作成した任意のダッシュボードに追加することができます。ダッシュボードを管理し、ポートレットをそれらのダッシュボードに追加するには、「ダッシュボード」>「ダッシュボードの作成」をクリックします。

表 16. *Campaign* の *IBM Cognos* レポート・ポートレット

レポート	説明
Campaign 投資収益率の比較	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新されたキャンペーンについて、その ROI の概略を比較した IBM Cognos レポート。
Campaignレスポンス率の比較	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新された 1 つ以上のキャンペーンについて、それらのレスポンス率を比較した IBM Cognos レポート。

表 16. *Campaign* の *IBM Cognos* レポート・ポートレット (続き)

レポート	説明
Campaign オファー別の収益比較	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新されたオファーを含んでいるキャンペーンごとに、これまでに受け取った収益を比較した IBM Cognos レポート。
最終 7 日間のオファーレスポンス	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新された各オファーに基づいて、過去 7 日間に受け取ったレスポンスの数を比較した IBM Cognos レポート。
オファー・レスポンス率の比較	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新されたオファー別に、レスポンス率を比較した IBM Cognos レポート。
オファーのレスポンスの詳細	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新されたアクティブなオファーを、状況ごとに分けて示した IBM Cognos レポート。

Campaign リスト・ポートレット

標準 Campaign リスト・ポートレットは、Campaign レポート・パッケージがインストールされていない場合でもダッシュボードで使用できます。

表 17. *Campaign* リスト・ポートレット

レポート	説明
マイ・カスタムブックマーク	レポートを表示するユーザーによって作成された Web サイトまたはファイルへのリンクのリスト。
最近使ったキャンペーン	レポートを表示するユーザーによって作成された最新のキャンペーンのリスト。
最近使ったセッション	レポートを表示するユーザーによって作成された最新のセッションのリスト。
キャンペーン・モニター・ポートレット	レポートを表示するユーザーによって作成された、実行済みまたは現在実行中のキャンペーンのリスト。

eMessage IBM Cognos レポート・ポートレット

以下のダッシュボード・ポートレットは、eMessage レポート・パッケージで使用可能です。

レポート	説明
最近の E メール・バウンス応答	このダッシュボード・レポートは、さまざまなタイプの E メール・バウンスのデータを棒グラフで表します。そのグラフは、現在日よりも前に送信された直近の 5 件のメール配信に対する現在のバウンス応答を表します。
最近の送信済み E メール・キャンペーン	このダッシュボード・レポートは、最近のメール配信アクティビティーに関するサマリー表示を提供します。それには、現在日よりも前に送信された直近の 5 件のメール配信に関する、メッセージ送信数、受信者の応答数、および E メール・バウンス数の各合計がリストされます。

Interact IBM Cognos レポート・ポートレット

インタラクション・ポイント・パフォーマンス - 7 日間に 1 インタラクション・ポイントあたり受け入れたオファーの数を表示します。

このダッシュボード・レポートは、ID が 1 の対話式チャネルを指すように定義されています。このレポートの追加バージョンを作成する (そして追加の対話式チャネルに関する報告を取得する) か、このレポートが指示する対話式チャネルの ID を変更するには、『インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボード・ポートレットの構成方法』を参照してください。

インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボード・ポートレットの構成方法

Interact には、インタラクション・ポイント別サマリーという 1 つの IBM Cognos ダッシュボード・レポートがあります。ダッシュボード・レポートは、照会パラメーターについてのプロンプトをユーザーに出さないため、インタラクション・ポイント・パフォーマンス・レポートの対話式チャネルのチャネル ID は静的値です。デフォルトでは、このレポートのチャネル ID は 1 に設定されます。チャネル ID が実装環境に適していない場合は、レポートをカスタマイズして、レポートのフィルター式でチャネル ID を変更することができます。

IBM Cognos レポートをカスタマイズするには、IBM Cognos レポートのオーサリング・スキルが必要です。IBM Cognos BI レポートの作成および編集方法の詳細については、IBM Cognos BI の資料を参照してください。特に、使用している Cognos バージョン用の 「*IBM Cognos BI Report Authoring* プロフェッショナル ユーザー ガイド」を参照してください。

インタラクション・ポイント・パフォーマンス・レポートの照会およびデータ項目については、Interact レポート・パッケージに含まれている参考資料を参照してください。

複数の対話式チャネルのグラフをダッシュボードに表示するには、インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボードのコピーを作成してチャネル ID を変更してください。そして、新規レポート用の新規ポートレットを作成し、それをダッシュボードに追加します。

Distributed Marketing リスト・ポートレット

このセクションでは、ダッシュボードで使用できる標準 Distributed Marketing ポートレットについて説明します。

表 *18. Distributed Marketing* リスト・ポートレット

レポート	説明
リスト管理	レポートを使用するユーザーのアクティブなリストのリスト。
キャンペーン管理	レポートを表示するユーザーのアクティブな企業キャンペーンおよびオンデマンド・キャンペーンのリスト。
サブスクリプション管理	現行ユーザーの企業キャンペーンに対するサブスクリプションのリスト。
カレンダー	アクティブな企業キャンペーンおよびオンデマンド・キャンペーンのスケジュールを表示するカレンダー。

Contact Optimization リスト・ポートレット

ダッシュボードで使用できる標準 Contact Optimization ポートレットです。

表 19. *Contact Optimization* リスト・ポートレット

レポート	説明
最近使った Contact Optimization セッション	レポートを表示するユーザーが過去 30 日間に実行した最後の 10 個の Contact Optimization セッションのリスト。
最後に成功した Contact Optimization 実行インスタンス	過去 30 日間の正常に完了したレポートを表示するユーザーが実行した、最後の 10 個の Contact Optimization セッションのリスト。
最後に失敗した Contact Optimization 実行インスタンス	過去 30 日間の正常に完了しなかったレポートを表示するユーザーが実行した、最後の 10 個の Contact Optimization セッションのリスト。

事前作成されたダッシュボード

IBM Marketing Software には、さまざまな対象者に適したポートレットが含まれた、事前作成されたダッシュボードがあります。

事前作成ダッシュボードの可用性

事前作成されたダッシュボードは、Marketing Platform をインストールした時点で使用可能になります。ただし、それらのダッシュボードを完全に実装するには、ダッシュボードに含まれているポートレットのサポートに必要な製品をインストールし、ポートレットを使用可能にする必要があります。

事前作成ダッシュボードを使用可能にするには、事前作成ダッシュボードをサポートする製品が少なくとも 1 つインストールされている必要があります。例えば、事前作成ダッシュボードに Campaign および eMessage から取得したポートレットが含まれている場合は、これらいずれかの製品がインストールされている場合にダッシュボードが使用可能になります。いずれの製品もインストールされていない場合は、ユーザー・インターフェースにダッシュボードが表示されません。いずれかの製品がない場合、その製品に依存するポートレットは、使用できないことを示すメッセージとともにリストに表示されます。

事前作成ダッシュボードのリスト

以下の表で、事前作成ダッシュボードについて説明します。ダッシュボードの目的、ダッシュボードを構成するポートレット、必要となる製品を示します。

表 20. 事前作成ダッシュボードのリスト

事前作成ダッシュボード	目的	ポートレット	必要となる製品
キャンペーン管理	このダッシュボードには、キャンペーンの財務上の結果が表示されます。	• オファー別の収支サマリー • キャンペーン・パフォーマンス比較	• Campaign • Campaign レポート・パック

表 20. 事前作成ダッシュボードのリスト (続き)

事前作成ダッシュボード	目的	ポートレット	必要となる製品
プロジェクトおよびトラフィック管理	このダッシュボードには、プロジェクトの状況の更新が表示されます。	• 自分のタスク • 自分のアラート • 自分のアクティブプロジェクト • 自分のタスクのサマリー • 要求および完了したプロジェクト • アクション待ちの承認 • 自分の承認のサマリー • ステータス別プロジェクト	• Marketing Operations • Marketing Operations レポート・パック
プロジェクト・メンバー	このダッシュボードにはアクションを必要とするタスクが表示され、完了したタスクを閉じることができます。	• 自分のタスク • 自分のアクティブプロジェクト • 自分のアラート • 自分の要求	Marketing Operations
プロジェクト要求および承認	このダッシュボードには、アクションを必要とするタスク、プロジェクトの状況の更新、マーケティング財務状態の概要、資金の支出先が表示されます。	• アクション待ちの承認 • 自分のアラート • マーケティング財務状態 • プロジェクトタイプ別プロジェクト • プロジェクトタイプ別の予算 • プロジェクトタイプ別の金額 • 四半期別の完了プロジェクト	• Marketing Operations と財務管理モジュール • Marketing Operations レポート・パック
プロジェクトの財務	このダッシュボードには、マーケティング財務状態の概要、資金の支出先が表示されます。	• アクション待ちの承認 • マーケティング財務状態 • アラート • タイプ別のプロジェクト • 四半期別の完了プロジェクト	• Marketing Operations と財務管理モジュール • Marketing Operations レポート・パック

IBM Cognos レポートのパフォーマンス上の考慮事項

レポートは、視覚的要素が加わることで大量のデータがスキャンしやすくなるので、ダッシュボードに追加するには魅力的なコンポーネントです。しかし、レポートには追加の処理リソースが必要になるため、多数のレポートが含まれているダッシュボードに多数のユーザーが定期的にアクセスする場合には、パフォーマンスが問題になる可能性があります。

組織はその必要性に応じてデータを調整してさまざまな方法で使用しますが、このセクションでは、IBM Cognos レポートが含まれるダッシュボードのパフォーマンスを改善するうえで役立つ一般的なガイドラインを示します。これらのガイドラインはすべて、高度にリソース集約型である IBM Cognos レポート・ポートレットに適用されます。

IBM Cognos での実行のスケジューリング

一定間隔で実行されるように IBM Cognos レポートをスケジュールすることができます。レポートをスケジュールに入れると、そのレポートが含まれているダッシュボードにユーザーがアクセスするたびにレポートが実行されることはなくなります。その結果、レポートが含まれているダッシュボードのパフォーマンスが向上します。

Cognos でスケジュールできるのは、ユーザー ID パラメーターを含まない IBM Marketing Software レポートだけです。レポートに ID パラメーターがない場合は、すべてのユーザーが同じデータを表示できます。データは、ユーザーに基づいてフィルター操作されません。以下のポートレットをスケジュールに入れることはできません。

- すべての事前定義された Campaign ポートレット
- Marketing Operations の自分のタスク・サマリーおよび自分の承認サマリーの事前定義ポートレット

レポートのスケジューリングは、IBM Cognos で実行するタスクの 1 つです。スケジューリングに関する一般情報について、詳しくは Cognos 資料を参照してください。ダッシュボード・ポートレットの特殊なスケジューリング要件については、57 ページの『ダッシュボード・レポートのスケジュール』を参照してください。

データに関する考慮事項

レポートに含まれているデータに基づいてスケジュールされた実行を計画する必要があります。例えば、「過去 7 日間のオファー・レスポンス」ダッシュボードを毎晩実行して、現在日の前の 7 日間に関する情報がこのダッシュボードに入るようにすることができます。一方、「市場金融ポジション」ダッシュボード・レポートでは四半期ベースの金融指標が比較されるので、このダッシュボード・レポートを週 1 回実行するよう選択することもできます。

ユーザ期待値

追加のスケジュール要件は、レポートの対象ユーザーがどの程度の頻度のデータ更新を期待しているかということです。これについては、スケジュールを計画するときにユーザーと相談する必要があります。

ガイドライン

ここに示すのは、ダッシュボードの IBM Cognos レポートのスケジューリングを計画するうえで役立つ大まかなガイドラインです。

- ロールアップ情報を含むレポートは、一般に、毎晩実行するようにスケジュールします。
- 多数の計算を含むレポートは、1 つのスケジュールにまとめます。

ダッシュボード・レポートのスケジュール

ダッシュボード・レポート (事前定義ポートレットまたはユーザー作成ポートレット) をスケジュールに入れるには、まずビューを作成してそれをスケジュールに入れ、その後ここに説明する方法でポートレットを構成する必要があります。

このタスクについて

注**:** ユーザー別にフィルタリングされないレポートのみをスケジュールに入れることができます。

手順

1. Cognos でレポートをコピーして、新しい名前でそれを保存します。
2. Cognos で、コピー後のレポートを開き、元のレポートと同じ名前のビューとしてそれを保存します。 `Unica Dashboard/`*`Product`* フォルダーに保存してください。ここで、*`Product`* は、該当の製品フォルダーです。
3. Cognos で、ビューをスケジュールに入れます。
4. IBM Marketing Software で、レポートをダッシュボードに追加します (まだ追加していない場合)。
5. レポートが事前定義ポートレットである場合にのみ、IBM Marketing Software で以下を実行してください。
   - 「ダッシュボード管理」ページで、ポートレットの隣にある「ポートレットの編集」アイコンをクリックします。
   - 「このレポートはスケジュールが設定されていますか**?**」の隣にある「はい」を選択します。
   - 「保存」をクリックします。

関連タスク:

61 ページの『ダッシュボードへの事前定義ポートレットの追加』

70 ページの『ダッシュボードへのカスタム・ポートレットの追加』

ダッシュボードのセットアップ

このセクションのトピックでは、ダッシュボードのセットアップ方法について説明します。

ダッシュボードの管理に必要な権限

対象のパーティション内にあるすべてのダッシュボードを管理できるのは、そのパーティションで「ダッシュボードの管理」権限を持つユーザーだけです。デフォルトでは、Marketing Platform で AdminRole 役割を持つユーザーにこの権限が付与されます。

Marketing Platform を初めてインストールする際、事前定義されたユーザー asm_admin は、デフォルト・パーティションである partition1 に対するこの役割を持っています。ダッシュボード管理者の適切な資格情報については、管理者にご相談ください。

Marketing Platform で AdminRole 役割を持つユーザーは、ユーザーが属するパーティション内にある個々のダッシュボードを管理するために任意の IBM Marketing Software ユーザーを割り当てることができます。ダッシュボード管理は、Marketing Platform のダッシュボード管理領域で行われます。

ダッシュボードのレイアウト

新しいダッシュボードに最初にポートレットを追加すると、レイアウトを選択して保存するようプロンプト・ウィンドウが表示されます。ダッシュボードのレイアウトを後で変更するには、タブを選択して異なるレイアウトを選択します。

オプションは以下のとおりです。

- 3 列 (等幅)
- 2 列 (等幅)
- 2 列 (2/3-1/3 幅)
- 1 列 (全幅)
- カスタム

ダッシュボードとパーティション

マルチパーティション環境でダッシュボードを管理している場合、このセクションを参照して、マルチパーティションがダッシュボードにどのように影響を及ぼすかを理解してください。

マルチパーティション環境では、ユーザーが表示または管理可能なのは、ユーザーが属するパーティションと関連付けられているダッシュボードのみです。

ダッシュボード管理者がダッシュボードを作成すると、以下のパーティション関連の規則が適用されます。

- 作成されたダッシュボードを使用できるのは、それを作成したユーザーと同じパーティションのメンバーだけです。
- ダッシュボードで使用できるのは、管理者が属するパーティションで有効になっている事前定義されたポートレットだけです。
- ダッシュボードに割り当てることができるのは、管理者と同じパーティションに割り当てられたグループとユーザーだけです。

関連概念:

22 ページの『パーティションおよびセキュリティーの管理』

関連タスク:

『マルチパーティション環境でのダッシュボードの使用に関する概要』

マルチパーティション環境でのダッシュボードの使用に関する概要

複数のパーティションを構成した場合、ダッシュボードをセットアップする際に以下のガイドラインに従ってください。

手順

1. ダッシュボードで作業する前に、各パーティションに 1 つ以上のグループを関連付け、それぞれのグループに適切なユーザーを割り当てます。

   このタスクを実行できるのは、platform_admin ユーザー、または PlatformAdminRole 権限を持つユーザーだけです。
2. 各パーティションで、少なくとも 1 人のユーザーに「ダッシュボードの管理」権限があることを確認し、それらのユーザー名を控えてください。

   Marketing Platform AdminRole 役割にはデフォルトでこの権限がありますが、ダッシュボード管理者に対してより制限的なアクセス権限を持つ役割を作成することもできます。これらのダッシュボード管理者は、自身のパーティション内のすべてのダッシュボードを管理できます。
3. システム内で構成されている各パーティションで、以下を実行します。
   a. 対象パーティションのメンバーであり、IBM Marketing Software にサインインするパーティション内にあるすべてのダッシュボードを管理可能なアカウントを使用します。

      前述のステップで作成したユーザーのリストを参照します。
   b. 「設定」>「ダッシュボード・ポートレット」ページで、必要に応じて事前定義されたポートレットを有効にします。
   c. 「ダッシュボードの管理」ページで、必要なダッシュボードを作成し、ポートレットを追加します。
   d. 非グローバル・ダッシュボードの各々に対して、ダッシュボードを表示可能なユーザーを割り当てます。

      ダッシュボードに対して個々のユーザーまたはグループを割り当てられます。
   e. それぞれのダッシュボードに、1 人以上のユーザーをダッシュボード管理者として割り当てます。

関連概念:

58 ページの『ダッシュボードとパーティション』

関連タスク:

61 ページの『ダッシュボードへの事前定義ポートレットの追加』
『事前定義ポートレットの有効化または無効化』
60 ページの『事前作成されていないダッシュボードの作成』
61 ページの『事前作成されたダッシュボードの作成』

事前定義ポートレットの有効化または無効化

ダッシュボードを作成する前に、このタスクを実行してください。すでにインストール済みの IBM Marketing Software 製品を参照するポートレットのみを有効にする必要があります。

手順

1. IBM Marketing Software にログインして、「設定」>「ダッシュボード・ポートレット」を選択します。
2. ポートレット名の隣にあるチェック・ボックスをクリックして、ポートレットの有効と無効を切り替えます。

   チェック・マークを付けるとポートレットが有効になり、チェック・ボックスのチェックをはずすとポートレットが無効になります。

   選択したポートレットが有効になり、ダッシュボードへの組み込みに使用できるようになります。

関連タスク:

58 ページの『マルチパーティション環境でのダッシュボードの使用に関する概要』

関連資料:

64 ページの『「ポートレットの管理」ページ』

事前作成されていないダッシュボードの作成

この手順を使用して、事前作成されていないダッシュボードを作成します。

手順

1. IBM Marketing Software で、「ダッシュボード」を選択して、「ダッシュボード管理」ページを開きます。

   パーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示されます。
2. 「ダッシュボードの作成」をクリックして、「ダッシュボードの作成」ページを表示します。
3. 固有のタイトル (必須) と説明 (オプション) を入力します。
4. 基礎権限を選択します。
   - ダッシュボードに関連付けられているグループに属するユーザーにアクセスを制限する場合、「ユーザーまたはグループに固有のダッシュボード」を選択します。
   - パーティションのすべてのユーザーがダッシュボードを表示できるようにする場合、「全員を対象としたグローバル・ダッシュボード」を選択します。
5. 「タイプ」で、「ダッシュボードの作成」を選択します。
6. 「保存」をクリックします。

   新規ダッシュボードが「ダッシュボード管理」ページにタブとして表示され、「管理」タブにリストされます。

タスクの結果

これでポートレットを追加できます。

関連タスク:

58 ページの『マルチパーティション環境でのダッシュボードの使用に関する概要』

事前作成されたダッシュボードの作成

この手順は、事前作成されたダッシュボードを作成する際に使用します。

手順

1. 作成しようとしている、事前作成されたダッシュボードを構成するポートレットが有効になっていることを確認してください。
2. IBM Marketing Software で、「ダッシュボード」を選択して、「ダッシュボード管理」ページを開きます。
3. 「ダッシュボードの作成」をクリックします。
4. 「タイプ」には「事前に作成されたダッシュボードを使用する」を選択します。

   使用可能な、事前作成されたダッシュボードがリストされます。
5. 使用する事前作成されたダッシュボードを選択して、「次へ」をクリックします。

   選択した、事前作成されたダッシュボードを構成するポートレットのリストが表示されます。このリストにより、必要な製品がインストールされていないかポートレットが有効になっていないためにポートレットが使用できない場合、それを知ることができます。
6. 「保存」をクリックして、ダッシュボードの作成を終了します。

   新規ダッシュボードが「ダッシュボード管理」ページにタブとして表示され、「管理」タブにリストされます。これで、それに含まれるポートレットを必要な場合に変更できるようになりました。

関連タスク:

59 ページの『事前定義ポートレットの有効化または無効化』

58 ページの『マルチパーティション環境でのダッシュボードの使用に関する概要』

ダッシュボードへの事前定義ポートレットの追加

この手順を使用して、事前定義ポートレットをダッシュボードに追加します。

手順

1. IBM Marketing Software で、「ダッシュボード」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
2. 「ポートレットの管理」をクリックして、有効なポートレットのリストを表示します。

ダッシュボードの「ポートレットの管理」アイコンをクリックすることにより、「管理」タブから「ポートレットの管理」ページにアクセスすることもできます。

3. 1 つ以上のポートレットの横のチェック・ボックスを選択し、ダッシュボードへの追加用として選択します。

   ポートレットの選択を支援する以下の機能を使用します。

   - ポートレットのリストのフィルタリングを、名前か、ポートレットのソースである製品を基準にして行います。
   - すべてのポートレットを一度に表示するか、リストをページ送りします。
   - 列見出しをクリックして、ソースまたはポートレット名で、リストをアルファベット順に昇順または降順でソートします。

4. 「更新」をクリックします。

   選択したポートレットがダッシュボードに追加されます。

関連概念:

66 ページの『カスタム・ポートレットのタイプおよび使用可能性』

関連タスク:

58 ページの『マルチパーティション環境でのダッシュボードの使用に関する概要』

関連資料:

64 ページの『「ポートレットの管理」ページ』

ダッシュボードからのポートレットの削除

この手順を使用して、ポートレットをダッシュボードから削除します。

手順

1. IBM Marketing Software で、「ダッシュボード」を選択します。

   「ダッシュボード管理」ページが開きます。パーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示され、そのポートレットもリストされます。

2. ポートレットを削除するダッシュボードで、削除するポートレットの横の「削除」アイコンをクリックします。
3. プロンプトで、「はい、削除します」をクリックします。

   ポートレットがダッシュボードから削除されます。

ポートレットの名前またはプロパティーの変更

この手順を使用して、ポートレットの名前またはプロパティーを変更します。

手順

1. IBM Marketing Software で、「ダッシュボード」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。パーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示され、そのポートレットもリストされます。

2. 処理するダッシュボードで、名前を変更するポートレットの横の「ポートレットの編集」アイコンをクリックします。

   「ポートレットの編集」ウィンドウが開きます。

3. ポートレットの名前、説明、URL、または非表示変数を編集します。
4. 「保存」をクリックします。

ダッシュボードの名前またはプロパティーの変更

この手順を使用して、ダッシュボードの名前またはプロパティーを変更します。

手順

1. IBM Marketing Software で、「ダッシュボード」を選択します。

   「ダッシュボード管理」ページが開きます。パーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示されます。

2. 処理するダッシュボードの下部にある「設定の管理」アイコンをクリックします。

   「設定」タブが開きます。

3. 「ダッシュボードの編集」アイコンをクリックします。

   「ダッシュボードの編集」ウィンドウが開きます。

4. ダッシュボードのタイトル、説明、またはタイプを編集するか、それを有効または無効にするか、あるいはユーザーがレイアウトを変更できるかどうかを変更します。
5. 「保存」をクリックします。

ダッシュボードの削除

この手順を使用して、ダッシュボードを削除します。

手順

1. IBM Marketing Software で、「ダッシュボード」を選択します。

   「ダッシュボード管理」ページが開きます。パーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示されます。

2. 処理するダッシュボードの下部にある「ダッシュボードの削除」アイコンをクリックします。
3. プロンプトが出されたら、「はい、削除します」をクリックします。

   ダッシュボードが削除されます。

ダッシュボード管理者の割り当てまたは変更

この手順を使用して、ダッシュボード管理者の割り当てまたは変更を行います。

手順

1. IBM Marketing Software で、「ダッシュボード」を選択します。

   「ダッシュボード管理」ページが開きます。パーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示され、そのポートレットもリストされます。
2. 処理するダッシュボードの下部にある「権限の管理」アイコンをクリックします。 「権限の管理」タブが開きます。
3. 「ダッシュボード管理者の管理」アイコンをクリックします。 「ダッシュボード管理者の管理」ページが開きます。パーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示され、そのポートレットもリストされます。
4. 名前を選択または選択解除します。

   名前が選択されているユーザーが、ダッシュボードの管理権限を獲得します。

   ユーザーを検索するために以下を行うことができます。
   - ユーザー名すべてまたはその一部を「検索」フィールドに入力して、リストをフィルタリングします。
   - すべてのユーザー、または未割り当てのユーザーのみ、あるいは割り当て済みのユーザーのみを表示します。
   - 列見出しをクリックしてリストをソートします。
   - (フィルター基準に基づいて) すべてのユーザーを一度に表示するか、リストをページ送りします。
5. 「更新」をクリックします。

関連概念:

73 ページの『ダッシュボード管理者』

「ポートレットの管理」ページ

「ポートレットの管理」ページのフィールドを入力する際にヘルプが必要な場合は、この表を参照してください。

表 *21.* 「ポートレットの管理」ページのフィールド

フィールド	説明
フィルター	製品名またはポートレット名の一部または全体を入力して、レポートを提供する製品、またはポートレットの名前に基づいて、ポートレット・リストにフィルターを掛けます。
カスタム・ポートレットの作成	クリックすると、取得した URL を使用するポートレットを作成できるページが開きます。
クイック・リンク・ポートレットの作成	クリックすると、クイック・リンク・ポートレットを作成できるページが開きます。

関連タスク:

59 ページの『事前定義ポートレットの有効化または無効化』

61 ページの『ダッシュボードへの事前定義ポートレットの追加』

クイック・リンク・ポートレット

クイック・リンクは、IBM Marketing Software 製品への事前定義のリンクです。クイック・リンクには、製品にナビゲートしなくても、ダッシュボード内で IBM Marketing Software 製品の基本的な操作を可能にするものがあります。選択したクイック・リンクのセットが含まれたポートレットを構成することができます。

IBM Marketing Software 製品のクイック・リンクは、製品をインストールしたときにインストールされます。9.0.0 リリース以降は、クイック・リンクは Marketing Operations でのみ提供されます。クイック・リンクについては、事前定義のポートレットと同一のセキュリティーに関する考慮事項が適用されます。

以下の表に、Marketing Operations をインストールすると使用できるクイック・リンクを示します。

表 22. クイック・リンク・ポートレットのリスト

クイック・リンク	関数
新規プロジェクト要求の作成	ポップアップ・ウィンドウが開き、プロジェクト・テンプレートを選択してプロジェクト要求を作成できます。「続行」をクリックして、アプリケーションのプロジェクト要求ウィザードを開くこともできます。
新規プロジェクトの作成	ポップアップ・ウィンドウが開き、プロジェクト・テンプレートを選択してプロジェクトを作成できます。「続行」をクリックして、アプリケーションのプロジェクト・ウィザードを開くこともできます。
請求書の追加	アプリケーションの請求書の追加ウィザードが開きます。
プロジェクト	アプリケーションのプロジェクト・リスト・ページが開きます。
レポート	「分析」>「操作の分析」ページが開きます。
リソース・ライブラリー	アプリケーションの資産ライブラリー・ページが開きます。
承認	アプリケーションの承認リスト・ページが開きます。

関連タスク:

『クイック・リンク・ポートレットの作成』

クイック・リンク・ポートレットの作成

この手順を使用して、クイック・リンク・ポートレットを作成します。

手順

1. クイック・リンク・ポートレットを追加するダッシュボードで、「ポートレットの管理」をクリックします。

   「ポートレットの管理」ページが開き、事前定義されているポートレットがリストされます。
2. 「クイック・リンク・ポートレットの作成」をクリックします。

3. ポートレットの名前と説明を入力し、ポートレットに含めるクイック・リンクを選択します。
4. 「保存」をクリックしてポートレットの作成を終了し、ポートレットをダッシュボードに追加します。

関連概念:

65 ページの『クイック・リンク・ポートレット』

カスタム・ポートレット

このセクションのトピックでは、カスタム・ポートレットの作成と使用の方法について説明します。

カスタム・ポートレットのタイプおよび使用可能性

以下のタイプの IBM Marketing Software ページからポートレットを作成できます。

- 任意の IBM Marketing Software IBM Cognos レポート。これには、追加の対話式チャネルを指示するようカスタマイズされた Interact インタラクション・ポイント・パフォーマンス・レポートが含まれます。このガイドで説明するように、任意の既存のダッシュボード・レポートをカスタマイズすることも、ダッシュボード以外のレポートをカスタマイズすることもできます。ダッシュボード以外のレポートのカスタマイズについて詳しくは、『*IBM Marketing Software Reports* インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- IBM Marketing Software 製品への事前定義リンクを使用して構築できるクイック・リンク・ポートレット。
- 自動更新する Digital Analytics for On Premises または Digital Analytics for On Premises のオンデマンド・レポートまたはダッシュボード。
- 任意の IBM Digital Analytics レポート。

さらに、インターネットまたは会社のイントラネットのページからポートレットを作成することができます。

独自に作成するポートレットは、あらゆるダッシュボードで使用できます。独自に作成したカスタム・ポートレットは「ポートレットの管理」ウィンドウにリストされます。ここから、ダッシュボードへの追加を行えます。

カスタム・ポートレットの認証に関する考慮事項

ポートレットの作成を計画している場合、認証に関する以下の考慮事項に注意する必要があります。

- ポートレットが、Marketing Platform を認証に使用するか認証を何も使用しないように構成されたインストール済み環境からの Digital Analytics for On Premises レポートの場合、または Marketing Platform を認証に使用するその他の任意の IBM Marketing Software 製品からのダッシュボード・レポートの場合は、ユーザーがポートレットを表示する際に資格情報を求めるプロンプトは表示されません。

- ポートレットが、Marketing Platform を認証に使用するように構成されていないインストール済み環境からのDigital Analytics for On Premises レポートの場合、ユーザーはブラウザー・セッションごとにログイン資格情報を入力する必要があります。
- ポートレットが NetInsight OnDemand レポートである場合、あるいは認証を必要とするインターネット・ページまたはイントラネット・ページである場合、そのポートレットはブラウザーと同様の動作をします。ユーザーは、ブラウザー・セッションでページを最初に表示するときにページのコンテンツにログイン資格情報を入力する必要があり、Cookie を使用してユーザーのログイン状態が保持されます。
- 使用するポートレットが IBM Digital Analytics レポートの場合、ユーザーが表示できるのは、Digital Analytics で権限を持っているレポートだけです。また、Digital Analytics でシングル・サインオンが有効な場合には、ユーザーは資格情報を入力しないでも、Marketing Platform ダッシュボードで Digital Analytics レポートを表示できます。無効な場合には、Marketing Platformダッシュボードで Digital Analytics レポートを表示するには、ユーザーは Digital Analytics 資格情報を入力する必要があります。

ポートレットの作成プロセスの概要

このセクションでは、ポートレットの作成手順の概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

このタスクについて

この手順の実行に関する情報がさらに必要な場合は、関連した参照情報を参照してください。

手順

1. ポートレットとして使用するページの URL を取得して作成します。

   そのためには、URL を取得して、必要に応じて変更します。

   以下のソースからポートレットを作成できます。
   - Digital Analytics for On Premises レポート
   - IBM Cognos レポート
   - Digital Analytics レポート
   - NetInsight OnDemand レポート、およびインターネットまたは企業イントラネットのページ
2. URL を `Platform_Admin_URL.properties` ファイルに追加します。

   `Platform_Admin_URL.properties` ファイルは、Marketing Platform インストール済み環境の `conf` ディレクトリー内にあります。
3. Marketing Platform Web アプリケーションを停止して、再始動します。
4. ポートレットをダッシュボードに追加します。

関連タスク:

68 ページの『Digital Analytics for On Premises レポートからの URL の作成』

69 ページの『IBM Cognos ダッシュボード・レポートからの URL の作成』
69 ページの『Digital Analytics レポートからの URL の作成』
70 ページの『ダッシュボードへのカスタム・ポートレットの追加』

Digital Analytics for On Premises レポートからの URL の作成

この手順は、Digital Analytics for On Premises インストール済み環境のレポートに使用します。

手順

1. Digital Analytics for On Premises で、エクスポートするレポートを表示します。

   Digital Analytics for On Premises ダッシュボードを使用している場合は、ダッシュボードの左上にあるレポートのみがエクスポートされます。

2. レポートの右上のツールバーにある「エクスポート」アイコン をクリックします。

   「エクスポートオプション」ウィンドウが開きます。

3. 以下のように、フィールドに情報を入力します。
   - 「エクスポート・タイプ」ドロップダウンから「ポートレット **URL**」を選択します。
   - 「**レポートの形式**」ドロップダウンから「**Web** ブラウザー」を選択します。
   - レポートに組み込む値の数を指定します。
   - レポートグラフィックの幅をピクセルで指定します。パス・レポートは、指定した幅に関係なくサイズを自己調整します。積み重ね棒レポートでは、指定した幅が自動的に 30% 増加します。
   - ポートレットには編集可能なタイトルがあるので、レポート・ヘッダーを非表示にすることを選択してください。
4. 「エクスポート」をクリックします。

   レポートの URL がダイアログ・ボックスに表示されます。

5. その URL をコピーして、テキスト・エディターに貼り付けます。
6. レポート URL の先頭に以下の内容を追加します。

   Your_IBM_Marketing_Software_URL/suiteSignOn?target=

   ここで、*Your_IBM_Marketing_Software_URL* は、IBM Marketing Software のインストール用のログイン URL です。

   例えば、以下の情報があるとします。
   - レポート URL は MyReportURL

- IBM Marketing Software のインストールのログイン URL は `http://myHost.myDomain:7001/unica`

最終 URL は以下のようになります。 `http://myHost.myDomain:7001/unica/suiteSignOn?target=MyReportURL`

関連タスク:

67 ページの『ポートレットの作成プロセスの概要』

IBM Cognos ダッシュボード・レポートからの URL の作成

IBM Cognos ダッシュボード・ポートレット URL の形式は以下のとおりです。

このタスクについて

IBM Cognos でダッシュボード・レポートを作成する方法については、*IBM Marketing Software*『*Reports* インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

```
http(s)://HOST.DOMAIN:port/unica/reports/jsp/
dashboard_portlet.jsp?product=Product& report=ReportName
```

ここで

- *Product* は、IBM Cognos システムの「**Unica** ダッシュボード」フォルダーの中にある IBM Marketing Software アプリケーションのサブフォルダーの名前です。 つまり、`Campaign`、`Interact`、または Marketing Operations を表す `Plan` です。(Plan は Marketing Operations アプリケーションの以前の名前です。)
- *ReportName* は、ダッシュボード・レポートの名前です。例: キャンペーン・パフォーマンス比較

次に例を示します。

```
http://serverX.example.com:7001/unica/reports/jsp/
dashboard_portlet.jsp?product=Campaign&report=キャンペーン・パフォーマンス
比較
```

レポートをスケジュールに入れてある場合は、URL の末尾に以下を追加します。

```
&isView=true
```

関連タスク:

67 ページの『ポートレットの作成プロセスの概要』
57 ページの『ダッシュボード・レポートのスケジュール』

Digital Analytics レポートからの URL の作成

Digital Analytics レポートに対して以下の手順を使用します。

始める前に

ユーザーが Digital Analytics にログインしなくてもダッシュボードで Digital Analytics レポートを閲覧できるようにするには、IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンを有効にする必要があります。

手順

1. Digital Analytics にログインして、ポートレットとして追加するレポートにナビゲートします。
2. ブラウザーに表示される URL をコピーします。

   リンクがクリップボードにコピーされ、Marketing Platform の「カスタム・ポートレットの作成」ウィンドウの「IBM Digital Analytics の URL (IBM Digital Analytics URL)」フィールドへの貼り付けが可能になります。

   ポートレットの作成に使用する前に別のものをコピーしてその URL が上書きされないようにするには、テキスト・エディターに貼り付けてください。

関連概念:

185 ページの『第 15 章 片方向 SSL の実装』

関連タスク:

67 ページの『ポートレットの作成プロセスの概要』

関連資料:

131 ページの『第 10 章 IBM Marketing Software と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオン』

イントラネットまたはインターネットのページからの URL の作成

イントラネット・ページまたはインターネット・ページ (Digital Analytics for On Premises ページを含む) から作成されるポートレットでは、ブラウザーに目的のページを表示し、ブラウザーのアドレス・フィールドから URL をコピーします。

このタスクについて

カスタム・ポートレットを作成する際、コピーした URL を使用します。

ダッシュボードへのカスタム・ポートレットの追加

この手順を実行して、カスタム・ポートレットをダッシュボードに追加します。

始める前に

この手順を実行する前に、以下を実行しておく必要があります。

- このセクションの別の場所にある説明に従って URL を準備する
- URL を `Platform_Admin_URL.properties` ファイルに追加する。このファイルは、Marketing Platform インストール済み環境の `conf` ディレクトリー内にあります。
- Marketing Platform Web アプリケーションを停止してから再始動する。

手順

1. IBM Marketing Software で、「ダッシュボード」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
2. 「ポートレットの管理」をクリックします。

   「ポートレットの管理」ウィンドウが開きます。
3. 「カスタム・ポートレットの作成」をクリックします。

   「カスタム・ポートレットの作成」ウィンドウが開きます。
4. 追加するポートレットのタイプに応じて、以下のいずれかのステップのセットを実行します。

   Digital Analytics レポート・ポートレットではないポートレットを作成する場合には、以下の操作を実行します。
   - 「タイプ」で、「カスタム」を選択します。
   - 「名前」フィールドと「説明」フィールドに入力します。
   - クリップボードの内容 (先に取得した URL を含む) を「**URL**」フィールドに貼り付けます。

   Digital Analytics レポート・ポートレットを作成する場合は、以下の操作を実行します。
   - 「タイプ」で、「**IBM Digital Analytics**」を選択します。
   - 「名前」フィールドと「説明」フィールドに入力します。
   - クリップボードの内容 (先に取得した URL を含む) を「**IBM Digital Analytics URL**」フィールドに貼り付けます。
5. 「保存」をクリックします。

   ウィンドウが閉じ、「管理」タブに戻ります。新規ポートレットは左上隅に置かれます。そのため、前に追加されたポートレットがオーバーレイされる可能性があります。ポートレットの見出しをクリックしてドラッグし、ポートレットをダッシュボードの適切な位置に置いてください。

関連概念:

『動的トークン』

関連タスク:

67 ページの『ポートレットの作成プロセスの概要』

関連資料:

72 ページの『「カスタム・ポートレットの作成」ページ』

動的トークン

カスタム・ダッシュボード・ポートレットを定義する際、ポートレットが呼び出される際に現行ユーザーの Marketing Platform に格納されている値に置換される事前定義トークンを使用することができます。

Digital Analytics からのカスタム・ポートレットでは、この機能は使用できません。

以下のトークンがサポートされています。

- `<user_name>`
- `<user_first_name>`
- `<user_last_name>`
- `<user_email>`

URL が呼び出されます。その際、非表示の変数が要求パラメーターとして渡されます。

Marketing Platform のユーザーの詳細に値が存在している必要があります。また、ターゲットの Web サイトによって使用される変数の名前を知っている必要もあります。

これらのトークンを使用するには、「カスタム・ポートレットの作成」ページの「非表示の変数」フィールドに名前と値のペアを入力します。複数のトークンを使用する場合、セミコロンで区切ります。

例えば、ポートレット URL でユーザーの名と姓を送信するとします。この例では、受信側の Web サイトでは、`fname` と `lname` それぞれに、ユーザーの名と姓が格納されていると予期します。「**URL**」フィールドと「非表示の変数」フィールドに次のように入力します。

- **URL** - `www.example.com`
- 非表示の変数 - `fname=<user_first_name>;lname=<user_last_name>`

関連タスク:

70 ページの『ダッシュボードへのカスタム・ポートレットの追加』

関連資料:

『「カスタム・ポートレットの作成」ページ』

「カスタム・ポートレットの作成」ページ

「カスタム・ポートレット」ページのフィールドを入力する際にヘルプが必要な場合は、この表を参照してください。

表 23. 「カスタム・ポートレットの作成」ページのフィールド

フィールド	説明
タイプ	ポートレットのタイプとして、Digital Analytics からのポートレットではないか、または Digital Analytics からのポートレットであるかを選択します。
名前	適切なポートレットの名前を入力します。
説明	ポートレットの説明を入力します。これにより他の管理者は、このダッシュボードの一部になっている理由を知ることができます。
URL または Digital Analytics URL	作成した URL に貼り付けます。

表 23. 「カスタム・ポートレットの作成」ページのフィールド (続き)

フィールド	説明
非表示変数	ポートレットが Digital Analytics からのものでない場合のみ使用可能です。ポートレットでユーザーのログインが要求される場合、名前/値のペアを入力してこの資格情報をサイトに安全に送ることができます。予期される変数名を Web サイトから取得する必要があります。

関連概念:

71 ページの『動的トークン』

関連タスク:

70 ページの『ダッシュボードへのカスタム・ポートレットの追加』

ダッシュボードのメンバーシップの管理

このセクションのトピックでは、ダッシュボードのメンバーシップの管理方法について説明します。

ダッシュボード管理者

ダッシュボード管理者に任命された場合は、そのダッシュボードのメンバーシップ、レイアウト、およびコンテンツを管理する責任があります。このセクションでは、ダッシュボードのメンバーシップの管理方法について説明します。

関連タスク:

63 ページの『ダッシュボード管理者の割り当てまたは変更』
『ダッシュボード・メンバーシップの認可または削除』

ダッシュボード・メンバーシップの認可または削除

この手順を使用して、ダッシュボード・メンバーシップを認可または削除します。

手順

1. IBM Marketing Software で、「ダッシュボード」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
2. 処理するダッシュボードの下部にある「権限の管理」アイコンをクリックします。

   「権限の管理」タブが開きます。
3. 「ダッシュボード・ユーザーの管理」アイコンをクリックします。

   「ダッシュボード・ユーザーの管理」ページが開きます。
4. チェック・ボックスを選択または選択解除し、ダッシュボードへのアクセスを権限付与または削除します。

   名前が選択されているユーザーは、ダッシュボードを表示することができます。

ユーザーを検索するために以下を行うことができます。

- ユーザー名すべてまたはその一部を「検索」フィールドに入力して、リストをフィルタリングします。
- すべてのユーザー、または未割り当てのユーザーのみ、あるいは割り当て済みのユーザーのみを表示します。
- 列見出しをクリックしてリストをソートします。
- (フィルター基準に基づいて) すべてのユーザーを一度に表示するか、リストをページ送りします。

5. 「更新」をクリックします。

関連概念:

73 ページの『ダッシュボード管理者』

第 6 章 IBM Marketing Software スケジューラー

IBM Marketing Software スケジューラーを使用すると、定義する間隔でプロセスを実行するように構成することができます。

スケジューリングの可能な項目

スケジューリングが可能なものを以下に示します。

- Campaign フローチャートの実行

  注: IBM Marketing Software スケジューラーは、Campaign のスケジュール・プロセスとまったく関係がありません。
- Contact Optimization 最適化セッションおよび最適化後のフローチャート実行
- eMessage メール配信
- Marketing Operations 一括非アクティブ化
- 外部 API の呼び出し
- IBM Marketing Software のアラートと通知
- 外部バッチまたはシェル・スクリプト

スケジュールと実行

スケジューラでは、スケジュールと実行という 2 つの基本概念を使用します。

- スケジュールとは、1 回または繰り返しベースで実行したい任意のタスクです。スケジュールを定義するときには、IBM Marketing Software オブジェクト、開始日と終了日、およびオプションでタスクの実行頻度 (繰り返しパターン) を指定します。
- 実行とは、スケジュールの実行インスタンスです。

スケジュールのタイプ

3 つのタイプのスケジュールがあります。

- 時刻ベース - 実行は指定の時刻に発生します。
- トリガー・ベース - スケジュールが指定のトリガーを受け取ったとき (例えば、別のスケジュールがその実行の成功または失敗を示すトリガーを送信したとき、あるいはスケジューラー・ユーティリティーがトリガーを送信したとき) に、実行が発生します。
- 複数実行ベース - 実行は他のスケジュールに従属し、他の複数のスケジュールが実行を完了したときにのみ発生します。

スケジュール通知

ユーザーは、自分が作成するスケジュールに関する通知 (自分に送信される) をセットアップでき、管理者は、任意のユーザーによって作成されるスケジュールに関する通知 (ユーザーのグループに送信される) をセットアップできます。

関連概念:

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

93 ページの『IBM Campaign スケジュール・プロセスと IBM Marketing Software Scheduler の相違点』

実行が正常に完了したときまたは失敗したときに送信される Scheduler のトリガー

スケジュールを作成または編集する際、実行が成功したときまたは失敗したときにスケジュールが送信するトリガーを構成することができます。また、そのトリガーを 1 つ以上のスケジュールが listen するよう構成することもできます。

トリガーは複数の製品にわたって機能します。例えば、Campaign フローチャートは、 eMessage のメーリングを開始するトリガーを送信できます。

トリガーは、実行が正常に完了したとき、または実行が失敗したときに、IBM Marketing Software スケジューラーが送信できるテキスト・ストリングです。各スケジュールは、実行が正常に完了したときにトリガーを 1 つ送信し、実行が失敗したときにトリガーを 1 つ送信することができます。また、各スケジュールは成功したトリガーを 1 つ、失敗したトリガーを 1 つ listen することもできます。

トリガーを listen するよう設定されたすべてのスケジュールがすべての送信されたトリガーを受け取りますが、スケジュールが実行を開始するのは、listen 対象となっているトリガーを受け取る場合だけです。この方法で、無限数の依存関係がスケジュール間に作成できます。

トリガーを作成した後、Scheduler ユーザー・インターフェースでそのトリガーがドロップダウン・リストに表示されるので、再び使用しやすくなります。

トリガーの例

一組の Campaign フローチャートがすべて同じトリガーを listen するよう構成することによって、それらを同時に実行するようにスケジュールすることができます。そのトリガーは、他のいずれかのスケジュールまたは外部アプリケーションが 281 ページの『scheduler_console_client』 ユーティリティーを使って送信することができます。トリガーを使用して、一組のフローチャートを次々に順番に実行することもできます。

以下の例では、指定順序で実行する一連のフローチャートをセットアップする方法を示します。

- フローチャート 1 は、実行が正常に完了したときに送信される「フローチャート 1 実行完了」トリガーを指定してスケジュールされています。
- フローチャート 2 は、以下のようにスケジュールされます。
  - 「フローチャート 1 実行完了」トリガーを受信しときに開始する。
  - 実行が正常に完了したら、「フローチャート 2 完了」トリガーを送信する。
- フローチャート 3 は、「フローチャート 2 実行完了」トリガーを受信したときに開始するようにスケジュールされます。

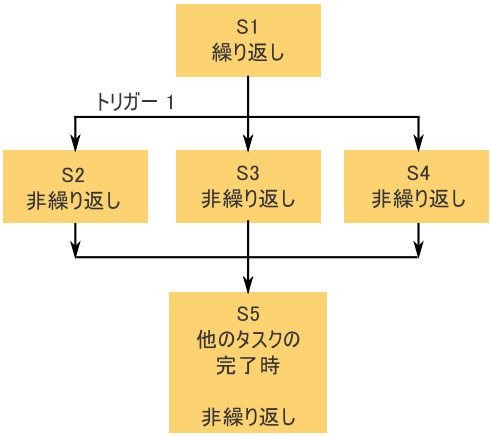
開始トリガーについて

開始トリガーを使用してセットアップしたスケジュールは、その開始日に関係なく、作成直後からトリガーを listen し始めます。ただし、トリガーが開始日をオーバーライドすることはありません。例えば、スケジュールの開始日が 2016 年 12 月 12 日の場合、2016 年 12 月 5 日に開始トリガーを受け取ったとしても、2016 年 12 月 12 日になるまでは実行を開始しません。

複数の実行の完了に依存するスケジュール

「開始時期」ドロップダウン・リストで「他のタスクの完了時」オプションを使用すると、他の複数のスケジュールの実行が完了した時点で初めてスケジュールを実行するように、スケジュールを構成できます。

例えば、反復パターンを持つスケジュール S1 をセットアップしたとします。S1 には、S1 の実行が正常終了するたびに送信されるトリガーがあります。S2、S3、S4 の 3 つのスケジュールは、S1 からの発信トリガーを受け取ると開始するように構成されています。さらにスケジュール S5 は、S2、S3、S4 が正常に終了すると実行するようにセットアップできます。S5 が実行されるのは、従属する 3 つの実行すべてが完了した場合のみです。次の図は、この例を示しています。



この例に示すようなシナリオをセットアップするには、「開始時期」ドロップダウン・リストの「他のタスクの完了時」オプションを使用して S5 を構成します。

このようにして他の実行に従属する実行を構成する場合には、以下の考慮事項に注意してください。

- 構成しているスケジュールが従属するスケジュールは、繰り返し実行されるスケジュールであってはなりません。先ほどの例の場合、S2、S3、S4 は繰り返し実行されないスケジュールである必要があります。 ただし、S1 が繰り返し実行されるので、S2、S3、S4 は S1 の実行に基づいて実際には繰り返されます。
- 他のスケジュールに従属するスケジュールも、繰り返し実行されるスケジュールであってはなりません。この例の場合、S5 は繰り返し実行されないスケジュールである必要があります。この場合も、S1 が繰り返されるので、S5 も同じように実際には繰り返されます。

- 他のスケジュールに従属するスケジュールを、他のスケジュールの「他のタスクの完了時」オプションの条件として使用することはできません。この例の場合、S5 を他のスケジュールの「他のタスクの完了時」オプションの条件として使用することはできません。
- 「他のタスクの完了時」オプションを使用して構成したスケジュールを削除する場合、最初に、「他のタスクの完了時」オプションを削除するために構成を変更する必要があります。その後、スケジュールを削除できます。

外部スクリプトから送信されるトリガーのスケジュール

IBM Marketing Software スケジューラーは、外部アプリケーションから送信されるトリガーに応答できます。この機能は `scheduler_console_client` ユーティリティーによって使用可能になります。このユーティリティーが発行するトリガーにより、そのトリガーを listen するようセットアップされた 1 つ以上のスケジュールを起動できます。

`scheduler_console_client` はバッチ・スクリプト・アプリケーションであるため、例えば別のバッチ・スクリプトを使用することにより、外部アプリケーションからこれを呼び出すことが可能です。

例えば、トリガー「T1」を listen するようにスケジュールをセットアップした場合、次のコマンドを使って `scheduler_console_client` ユーティリティーを実行することにより、T1 トリガーを送信できます。 `scheduler_console_client.bat -v -t T1`

このユーティリティーは、以下の情報を提供できます。

- 特定のトリガーを listen するよう構成されているスケジュールのリスト。
- 正常にトリガーが送信されたかどうか。ユーティリティーは、トリガーを listen しているスケジュールが正常に実行されたかどうかを報告することはできません。その情報は、スケジューラー管理ページから入手できます。

このユーティリティーを使用して、トリガーを listen するようスケジュールをセットアップしたり、このスケジュールで listen 対象になっているトリガーを変更したりすることはできません。これらのアクションは、スケジューラーのユーザー・インターフェースで実行する必要があります。

スクリプトの例

以下は、`scheduler_console_client` ユーティリティーがストリング「example_trigger」を発行するようにするスクリプトの例です。このトリガーは、「example_trigger」を listen するようにセットアップされたスケジュールの実行を起動します。

このようなスクリプトは、外部アプリケーションから、そのアプリケーションがイベントを生成するときに呼び出すことができます。

このスクリプト例は、スクリプトがユーティリティーと同じディレクトリーにあることを前提としています。

```
@rem*****************************************************
@rem This script is used to call the Marketing Platform
@rem scheduler_console_client.
@rem*****************************************************

echo Now starting scheduler trigger.
set JAVA_HOME=c:¥jdk15_12
call scheduler_console_client.bat -v -t example_trigger

@rem*****************************************************
```

セキュリティーに関する考慮事項

エンタープライズ・アプリケーション内でのスケジューリングは、管理者のアクティビティーと見なされます。ホスト・オペレーティング・システムで `scheduler_console_client` ユーティリティーの実行権限を持つすべてのユーザーには、トリガーを発行する権限もあると想定されます。

いずれかのユーザーがこのユーティリティーを使ってトリガーを発行することを防ぐために、そのユーザーが持つ、`scheduler_console_client` ユーティリティーの実行権限を取り消す必要があります。

関連資料:

281 ページの『scheduler_console_client』

スケジューラーの繰り返しパターン

反復パターンを構成することによって、反復実行するスケジュールをセットアップすることができます。設定した反復パターンは、指定の開始時刻後に開始されます。

いくつかの繰り返しパターンのオプションがあります。

- 事前定義 - 共通反復パターンのセットで、その中から選択できます。
- cron 表現 - 6 個から 7 個のフィールドで構成され、空白で区切られたストリングであり、時間のセットを表します。
- 単純なカスタム反復パターン - 多くの一般的な会議スケジューラーに似た反復パターンを作成するユーザー・インターフェース。

スケジューラーの反復パターンはすべて、cron 表現に基づいています。 Scheduler では、これらの cron 表現を作成しやすいように、ユーザー・インターフェース内に事前定義パターンを用意しています。独自のカスタム cron 表現を書く場合は、これらの式を読むことに慣れていないユーザーにもパターンが理解しやすいように、反復パターンのわかりやすい説明を作成することをお勧めします。

重要: 反復パターンはすべて、次回の長い間隔の終わりでリセットされます。例えばカスタム週次パターンを 3 週間ごとに実行するよう設定した場合、パターンは毎月の終わりにリセットされるので、このパターンは毎月 3 週目に実行されることになります。これはすべての cron 表現の特性です。第 3 週、第 6 週、第 9 週、第 12 週というように実際に実行されるスケジュールを設定するには、目的のそれぞれの実行日について個別にスケジュールを作成する必要があります。

タイム・ゾーンのサポート

世界中の数多くのタイム・ゾーンのいずれかのコンテキストで実行が行われるようにスケジュールすることが可能です。

スケジュールを作成する場合、デフォルトでは、Marketing Platform がインストールされているサーバーのタイム・ゾーンが常に使用されます。ただし、「タイム・ゾーンの選択」ドロップダウン・リストにリスト表示されている他のタイム・ゾーンも選択できます。これらのオプションは、GMT 時刻の後に、そのタイム・ゾーンに通常使用される用語が付されて表されます。例えば、(GMT-08:00) ピトケアン島、(GMT-08:00) 太平洋標準時間 (米国およびカナダ) などです。

選択したタイム・ゾーンが、以下を含め、スケジュールのすべての側面に適用されます。

- 「スケジュール」タブと「実行 (Runs)」タブに表示される情報
- 反復パターンおよびトリガー

スケジューラーの制限

多数のプロセスがシステムに大量の要求を送ると予想される場合は、制限を使用してパフォーマンスを管理します。制限は、「設定」>「構成」ページでセットアップするスケジューラー・グループに基づいています。グループに制限しきい値を割り当て、スケジュールをそのグループに関連付けます。

制限しきい値とは、そのグループに関連付けられた、同時実行が可能な実行の最大数です。サーバー上でのリソース消費量を削減するには、制限しきい値を小さい値に設定することができます。制限を適用できるのは、IBM Marketing Software スケジューラーで作成されたスケジュールのみです。

デフォルトグループの無制限しきい値

すべてのスケジュールは制限グループに所属していなければなりません。あるスケジュールについて制限を有効にしたくない場合は、そのスケジュールを「デフォルト」スケジューラー・グループ (スケジュールの作成時に「スケジューラー・グループ」フィールドでデフォルトで選択されているオプション) のメンバーにしてください。このグループの制限しきい値は高いので、事実上は制限がないのと同じ意味になります。

制限の例外

フローチャートを Campaign 内部で、または Campaign `unica_svradm` ユーティリティーを使用して実行する場合、これらの実行は制限しきい値にはカウントされず、即時に実行されます。

制限の例

- システム・リソースが心配な場合、制限を使用してサーバーへのロードを管理することができます。例えば、多数の複雑な Campaign フローチャートを実行しなければならない場合、同時に実行できるフローチャートの数を制限する制限グループにそれらを割り当てることができます。この制限は、Campaign サーバーまたはマーケティング・データベースへのロードを管理するのに役立ちます。

- 制限を使用して、スケジュールの優先順位を設定できます。制限しきい値の大きいグループに高優先順位のスケジュールを割り当てることによって、システム・リソースをできる限り効率的に使用してこれらのスケジュールが実行される状況を確保することができます。低優先順位のスケジュールは、制限しきい値の小さいグループに割り当ててください。
- 反復パターンを使用してスケジュールされたフローチャートがある場合は、制限を使用して、実行が重ならずに順序よく行われるようにすることができます。例えば、10 時間の間、毎時間実行されるように設定された反復パターンを持つフローチャートをスケジュールに入れたとします。そのフローチャートで、1 つの実行を完了するのに 1 時間以上かかる場合、直前の実行が完了する前に次の実行が開始しようとする可能性があります。この場合、まだ実行中のフローチャートがロックされるため、次の実行は失敗する結果になります。これが起こらないようにするには、しきい値 1 の制限グループを作成し、フローチャートのスケジュールをこのグループに割り当てることができます。

関連タスク:

『IBM Marketing Software スケジューラーのスロットルのセットアップ』

IBM Marketing Software スケジューラーのスロットルのセットアップ

スケジュール対象のオブジェクトの各タイプに対して、制限グループをセットアップする必要があります。

手順

1. 「構成」ページで、IBM Marketing Platform > **スケジューラー** > **スケジュール登録** > [製品] > [オブジェクト] > **制限グループ**の下のいずれかの制限グループ・テンプレートに移動します。
2. スロットル・グループのテンプレートからカテゴリーを作成します。

   「**制限しきい値**」プロパティーに設定する数値は、そのグループに関連付ける同時実行が可能な実行の最大数です。実行に適格なスケジュールのうち、制限しきい値を超えたスケジュールは、実行待ちのキューに入れられ、入れられた順序でスケジューラーは実行通知を受け取ります。

   構成済みのスケジューラー・グループは、スケジュールの作成および編集に使用できるように、スケジューラー・ユーザー・インターフェースの「スケジューラー・グループ」ドロップダウン・リストに表示されます。

   この方法で実行を制御したいオブジェクトのタイプごとに、制限グループを作成する必要があります。例えば、フローチャート制限グループは、フローチャートのスケジューリングのみに使用でき、メール配信制限グループはメール配信のスケジューリングのみに使用できます。
3. 必要に応じて、1 つ以上のスケジュールをグループに割り当ててください。

関連概念:

80 ページの『スケジューラーの制限』

関連タスク:

45 ページの『テンプレートからのカテゴリーの作成』

外部タスクのホワイトリスト前提条件 (フィックスパック 10.0.0.1 の場合のみ)

Marketing Platform フィックスパック 10.0.0.1 を適用した場合に限り、API 呼び出しまたはスクリプトをスケジュールするために作成する外部タスクに対して、ホワイトリスト前提条件が適用されます。

外部タスクをスケジュールするには、事前に対象の API またはスクリプトを、Marketing Platform インストール済み環境の `conf` ディレクトリーにあるホワイトリストに追加しておく必要があります。

関連タスク:

83 ページの『ホワイトリストへの API の追加』

『ホワイトリストへのスクリプトの追加』

関連資料:

85 ページの『スケジュールの作成ウィザード』

ホワイトリストへのスクリプトの追加

Marketing Platform フィックスパック 10.0.0.1 を適用した場合に限り、スクリプトをスケジュールする外部タスクを作成する前に、この手順を実行してください。

このタスクについて

スクリプトは、Marketing Platform が配置された Web アプリケーション・サーバーに置く必要があります。

手順

1. テキスト・エディターでスクリプトのホワイトリスト・ファイルを開きます。

   スクリプトのホワイトリスト・ファイルは `Platform_Admin_Scheduler_Scripts.properties` です。このファイルは、Marketing Platform インストール済み環境の `conf` ディレクトリーにあります。

2. スケジュールするバッチまたはシェル・スクリプトの絶対パスを入力し、そのスクリプトで使用するパラメーターの数を含めます。

   例えば、*username*、*password*、*db_table* という 3 つのパラメーターを取る `RunETLJobs.bat` という名前のスクリプトをスケジュールするとします。

   ホワイトリスト・ファイルに以下のエントリーを作成します。このエントリーでは、スクリプトの絶対パスの後にスペースを 1 つ空けて、使用するパラメータ

ーの数を指定します。パラメーターの数は、スケジュールするスクリプトで使用するパラメーターの数と完全に一致する必要があります。

```
C:¥Scripts¥RunETLJobs.bat 3
```

スケジュールを作成するときには、「実行パラメーター」フィールドで、次の例に示すように、パラメーター名を二重の番号記号 (##) で囲んで指定し、その後にスペースを入れます。

```
C:¥Scripts¥RunETLJobs.bat ##username## ##password## ##db_table##
```

3. ホワイトリスト・ファイルを保存して閉じます。

   これで、「設定」>「スケジュール管理」ページの「スケジュール」タブで、このスクリプトをスケジュールすることができます。

関連概念:

82 ページの『外部タスクのホワイトリスト前提条件 (フィックスパック 10.0.0.1 の場合のみ)』

関連資料:

85 ページの『スケジュールの作成ウィザード』

ホワイトリストへの API の追加

Marketing Platform フィックスパック 10.0.0.1 を適用した場合に限り、API 呼び出しをスケジュールする外部タスクを作成する前に、この手順を実行してください。

手順

1. テキスト・エディターで API のホワイトリスト・ファイルを開いて編集します。

   API のホワイトリスト・ファイルは `Platform_Admin_Scheduler_API.properties` です。このファイルは、Marketing Platform インストール済み環境の `conf` ディレクトリーにあります。

2. スケジュールする API の URI を入力し、照会パラメーターを使用する場合は、値は含めずにそれらのパラメーター名を含めます。

   例えば、以下の API 呼び出しを、ここに示しているすべての照会パラメーターを使用してスケジュールするとします。

   ```
   http://www.example.com/tickets?fields=id&state=open&sort=updated_at
   ```

   すべてのパラメーターをリストして、ホワイトリスト・ファイルに以下のエントリーを作成します。

   ```
   http://www.example.com/tickets?fields&state&sort
   ```

   このホワイトリストのエントリーによって、リストしたパラメーターの一部またはすべてを使用する API 呼び出しをスケジュールすることができます。以下に例を示します。

- http://www.example.com/tickets
- http://www.example.com/tickets?fields=id
- http://www.example.com/tickets?fields=id&state=open
- http://www.example.com/tickets?fields=id&state=open&sort=updated_at
- http://www.example.com/tickets?fields=id&sort=updated_at
- http://www.example.com/tickets?fields=id&state=open

リストされていない照会パラメーターを使用する API 呼び出しをスケジュールすることはできません。ホワイトリストに存在しないパラメーターが使用されると、スケジューラーの検証は失敗します。

3. ホワイトリスト・ファイルを保存して閉じます。

これで、「設定」>「スケジュール管理」ページの「スケジュール」タブで、この API 呼び出しをスケジュールすることができます。

関連概念:

82 ページの『外部タスクのホワイトリスト前提条件 (フィックスパック 10.0.0.1 の場合のみ)』

関連資料:

85 ページの『スケジュールの作成ウィザード』

スケジュールのセットアップに関するベスト・プラクティス

IBM Marketing Software オブジェクトのスケジュールされた実行の計画と構成について、ベスト・プラクティスがいくつかあります。

最良のパフォーマンスを発揮し、簡単に保守を行うために、このガイドラインに留意してください。

- スケジュールされた実行はクライアント製品がインストールされているシステムで実行されるため、クライアント・システムのスケーリング能力を考慮に入れてください。実行時間をずらすか、スロットルを使ってシステムを調整してください。
- 可能な場合は、重いジョブは、システム負荷が低い時間にスケジュールしてください。
- 実行の重複は避けてください。これは実行失敗の原因となります。
  - 同じオブジェクトを複数のスケジュールで使用する場合は注意してください。例えば、フローチャート F1 を 3 つのスケジュールで使用する場合、このスケジュール定義により、前の実行が完了する前に実行が開始され、実行失敗となる可能性があります。
  - 手動または外部スクリプトによってフローチャート実行が開始された場合、その後にいずれかの方法でフローチャートを実行しようとすると、直前の実行が完了していない場合にはロック・エラーにより失敗します。
- スケジューラーは、大量のデータを作成します。スケジューラーでパフォーマンスの問題が発生している場合、不要になったスケジュール定義の削除を検討してください。

重要: スケジュール定義を削除すると、それに関連付けられている実行履歴もデータベースから削除されます。

スケジュールの作成ウィザード

このセクションでは、スケジュールを作成する場合に使用するページについて詳しく説明します。

以下の表に、Campaign フローチャート、eMessage メーリング、Contact Optimization セッション、外部スクリプト、および API 呼び出しの実行をスケジューリングする際に使用するフィールドを示します。

表 24. スケジュールの作成ウィザードのフィールド

フィールド	説明
タスク・タイプの選択	スケジュールするオブジェクトのタイプ。以下のオプションがあります。 • 「外部タスク - スクリプト **(External task - script)**」 IBM Marketing Software の外部にあるバッチまたはシェル・スクリプトで定義されているタスクのスケジュール呼び出しを可能にします。 Marketing Platform フィックスパック 10.0.0.1 を適用した場合に限り、Marketing Platform インストール済み環境の下の `conf` ディレクトリーのホワイトリスト・ファイルに、対象のスクリプトをリストする必要があります。また、スクリプトは、Marketing Platform が配置された Web アプリケーション・サーバーに置く必要があります。 • 「外部タスク **- API (External task - API)**」 IBM Marketing Software の外部にある API のスケジュール呼び出しを可能にします。 Marketing Platform フィックスパック 10.0.0.1 を適用した場合に限り、Marketing Platform インストール済み環境の下の `conf` ディレクトリーのホワイトリスト・ファイルに、対象の API をリストする必要があります。 • **Campaign** フローチャート Campaign フローチャートのスケジュール呼び出しを可能にします。このオプションを選択すると、Campaign リスト・ページが表示されるので、そこでキャンペーンを選択し、オプションでフローチャート・オーバーライド・パラメーターを設定し、フローチャートの実行をスケジューリングします。 • **Contact Optimization** セッション Contact Optimization セッションのスケジュール呼び出しを可能にします。このオプションを選択すると、Contact Optimization セッション・リストのページが表示されるので、そこで、セッションを選択し、スケジューリングします。 • **eMessage** メール配信 eMessage のメール配信のスケジュール呼び出しを可能にします。このオプションを選択すると、eMessage メーリング・リストのページが表示されるので、そこで、メーリングを選択し、スケジューリングします。 • **Marketing Operations** 一括非アクティブ化 Marketing Operations 内のプロジェクトの一括非アクティブ化のスケジューリングを可能にします。このオプションを選択すると、Marketing Operations の管理設定ページが表示されるので、そこで「非アクティブ化管理 **(Deactivation Administration)**」をクリックし、一括非アクティブ化をスケジューリングします。 • アラート IBM Marketing Software のユーザーのアラートのスケジューリングを可能にします。このオプションを選択するとウィンドウが表示されるので、そこでメッセージのタイトル、メッセージの本文、および重大度を設定します。「このアラートのスケジュール **(Schedule this alert)**」をクリックした後、アラートのスケジュールを作成できます。 ユーザーは、重大度に応じて、通知サブスクリプションを管理することができます。 • 通知 IBM Marketing Software のユーザーのための通知のスケジューリングを可能にします。このオプションを選択するとウィンドウが表示されるので、そこでメッセージのタイトル、メッセージの本文、および重大度を設定します。「この通知のスケジュール **(Schedule this notification)**」をクリックした後、通知のスケジュールを作成できます。 ユーザーは、重大度に応じて、通知サブスクリプションを管理することができます。
スケジュール名	スケジュールの名前を入力してください。
スケジューラー・グループ	1 つ以上の制限グループを作成してある場合、このスケジュールをグループに関連付けて、同時に実行できるこのスケジュールの実行数を制限することができます。「構成」ページで構成されている制限グループがこのフィールドのオプションとして表示されます。
説明	スケジュールの説明を入力してください。

表 24. スケジュールの作成ウィザードのフィールド (続き)

フィールド	説明

実行パラメーター	API およびスクリプトをスケジュールするときに使用します。
	
	Marketing Platform フィックスパック 10.0.0.1 を適用した場合に限り、API 呼び出しまたはスクリプトをスケジュールするために作成する外部タスクに対して、ホワイトリスト前提条件が適用されます。外部タスクをスケジュールするには、事前に対象の API またはスクリプトを、Marketing Platform インストール済み環境の `conf` ディレクトリーにあるホワイトリストに追加しておく必要があります。
	• API をスケジュールする場合は、URI に加えてパラメーター (存在する場合) を次の例に示す形式で入力します。
	
	パラメーターなしの API: `http://example.com`
	
	パラメーターありの API: `http://www.example.com/tickets?fields=id&state=open&sort=updated_at`
	
	現在のところ、URI 内の Marketing Platform トークンのサポートはありません。
	• スクリプトをスケジュールする場合は、Marketing Platform サーバー上にあるスクリプトの絶対パスに加えて、パラメーター (存在する場合) を次の例に示す形式で入力します。パラメーター名を二重の番号記号 (##) で囲んで指定し、その後にスペースを入れます。
	– Windows の例
	
	パラメーターなしのスクリプト: `C:¥Scripts¥ExecuteDatabaseJob.bat`
	
	パラメーターありのスクリプト:
	
	`C:¥Scripts¥RunETLJobs.bat ##username## ##password## ##db_table##`
	– UNIX の例
	
	パラメーターなしのスクリプト: `/opt/ExecuteDatabaseJob.sh`
	
	パラメーターありのスクリプト:
	
	`/opt/RunETLJobs.sh ##username## ##password## ##db_table##`
	
	これらのタスクの実行は非同期です。 Marketing Platform では、スクリプトおよび API タスクが成功したか失敗したかを追跡しません。ステータスは、単に正常に起動したかどうかを示すだけです。

正常完了時にトリガーを送信する	このスケジュールの実行が正常に完了したときに、その実行がトリガーを送信するようにするには、トリガー・テキストをここに入力してください。その他のスケジュールがこのトリガーを listen するように設定することができます。
エラーの発生時にトリガーを送信する	このスケジュールの実行が失敗したときにその実行がトリガーを送信するようにするには、トリガー・テキストをここに入力してください。その他のスケジュールがこのトリガーを listen するように設定することができます。
検索タグ / キーワード (Search tags / keywords)	検索で使用するためにスケジュールに関連付けるタグを入力します。複数のエントリーを指定する場合は、コンマで区切ります。
スケジュール・ステータス (Schedule status)	スケジュールが有効か無効か。スケジュールを無効にした場合、そのスケジュールの将来の実行またはキューに入れられている実行にのみ適用されます。現在進行中の実行には影響しません。デフォルトのステータスは、「有効」です。
タイム・ゾーンの選択	サーバーのデフォルト以外のオプションを選択すると、スケジュール管理ページの「開始」、「終了」、および「最終更新」の各列に、サーバーのデフォルト時刻と選択したゾーンの時刻の両方が表示されます。

表 24. スケジュールの作成ウィザードのフィールド (続き)

フィールド	説明
開始時期	以下のいずれかのオプションを選択して、スケジュールを最初に実行する時刻を指定します。開始時刻は、最初の実行のみに適用されます。これは、スケジュールが実行に最初に適格になる時刻を定義します。以下のいずれかの状況では、実際の初回実行が、開始日より後になる可能性があります。 • トリガーを待機するようにスケジュールを構成する。 • スケジュールが制限グループのメンバーである。 • スケジュールで繰り返しパターンを使用する。 • 今すぐ **(Now)** • 指定日時に - 日時を選択してください。 • トリガー発生時に - 既存のトリガーを選択するか、新規トリガーを入力してください。新規トリガーを入力する場合は、この同じストリングを成功時または失敗時に送信するようにスケジュールを構成する必要があります。 • 指定日以後のトリガー発生時に - 既存のトリガーを選択するか新規トリガーを入力し、日時を選択してください。新しいトリガーを入力する場合は、この同じストリングを成功時または失敗時に送信するようにスケジュールを構成する必要があります。 • 他のタスクの完了時 - 既存のスケジュールのリストから選択します。選択した他のスケジュールの実行が終了した時点で初めて、このスケジュールが実行されます。
実行回数 (Number of runs)	以下のオプションの 1 つを選択して、実行の数を指定します。 • **1** 回だけ実行 **(Run once only)** - スケジュールは 1 回実行されます。指定する開始日時に実行を開始する場合に使用できます。 • **n** 回実行後に停止 - 指定の実行数が (成功か失敗かに関係なく) 発生した後か、または終了日に達するか、どちらか早い方の条件で実行が停止します。 • 指定日時に停止 - 指定の終了日時に達するまで、実行が定義された回数だけ開始されます。制限による制約によって実行が遅延した場合は、この日時の後で実行が発生することもあります。 • 他のタスクの完了時 - スケジュールは、このオプションで選択された他のすべてのタスクが正常に完了したときにのみ実行されます。 「反復のセットアップ」ボタンをクリックすると、以下のいずれかのオプションを選択できます。 • 定義済みの繰り返しパターンを使用 - リストからパターンを選択してください。Marketing Platform には事前定義されたパターンのセットが用意されています。また、「構成」ページでプロパティーを追加して、独自のパターンを作成することができます。 • 単純なカスタム繰り返しパターンを使用 - 間隔を選択してください。 • **cron** 繰り返し表現 - 有効な cron 式を入力してください。

関連概念:

82 ページの『外部タスクのホワイトリスト前提条件 (フィックスパック 10.0.0.1 の場合のみ)』

80 ページの『タイム・ゾーンのサポート』

77 ページの『複数の実行の完了に依存するスケジュール』

関連タスク:

83 ページの『ホワイトリストへの API の追加』

82 ページの『ホワイトリストへのスクリプトの追加』

関連資料:

101 ページの『スケジュール管理のページ』

除外の実行

10.0.0.2 10.0 フィックスパック 2 リリース以降、特定の日または時間だけスケジューラーの実行を除外する除外ルールを作成できるようになりました。さまざまなスケジュールに関する複数のルールを追加できます。

特定のスケジュールに関する除外ルールを作成したり、単一のルールを複数のスケジュールに適用したりできます。除外ルールを有効にしたり、無効にしたり、不要になったルールを削除したりできます。

10.0 フィックスパック 2 リリースにアップグレードすると、「除外の実行」機能が使用可能になります。

この機能に関する 2 つの新しいシステム・テーブルが導入されています。システム・テーブルの詳細については、「*IBM Marketing Platform System Tables*」ガイドを参照してください。

除外ルールの表示

「スケジュール管理」ページの「除外の実行」タブから、スケジュールに関する既に定義済みの除外ルールを表示できます。

このタスクについて

スケジューラー定義に従って、「前の **1** つおよび次の **2** つの実行」 フィールド内に情報が表示されます。現在は、除外ルールに対する妥当性検査は行われません。

手順

除外ルールを表示する手順は、次のとおり。

1. IBM Marketing Platform に管理者としてログインします。
2. 「設定」 > 「スケジュール管理」をクリックします。
3. 「除外の実行」をクリックします。

タスクの結果

除外ルールを表示し、そのルールに関するさまざまなタスクを完了できます。ルールの状況、ルールを適用できるさまざまなスケジュール、除外期間、ルールの除外タイプも表示できます。

「フィルター」テキスト・ボックスでワイルドカード検索を使用して、除外ルールを検索することもできます。

除外ルールの追加

スケジュールや実行に関する除外ルールを追加できます。絶対ルールか相対ルールを追加し、そのルールを適用できるスケジュールを選択できます。

このタスクについて

絶対除外ルールは、設定期間で設定します。相対除外ルールは 1 回だけ設定します。除外ルールは、有効にしたり、無効にしたり、複数のスケジュールに適用したりできます。

手順

除外ルールを追加する手順は、次のとおり。

1. IBM Marketing Platform に管理者としてログインします。
2. 「設定」 > 「スケジュール管理」をクリックします。
3. 「除外の実行」タブで、「除外ルールの追加」をクリックします。
4. 「ルール定義」タブで、「ルール名」を指定します。
5. オプション: 「説明」を指定します。
6. 「ルール・ステータス」として「有効」または「無効」を選択します。

   デフォルトでは「有効」が選択されています。
7. 「除外タイプ」を選択します。

   「絶対」を選択した場合は、以下のステップを実行します。
   a. 「タイム・ゾーン」を選択します。

      デフォルトでは「サーバーのデフォルト」タイム・ゾーンが選択されています。
   b. 「開始日時」を選択します。
   c. 「終了日時」を選択します。

   「相対」を選択した場合は、以下のステップを実行します。
   a. 頻度として「最初」、「二番目」、「三番目」、「四番目」、「五番目」、または「最後」を選択します。
   b. 日を選択します。
   c. 月を選択します。

   注**:** 現在の年の 1 日を選択できます。相対の場合は、日を選択すると、その日全体のスケジュールはスキップされます。
8. 「対象となるスケジュール」タブで、以下のステップを実行して、除外ルールの適用対象のスケジュールを選択します。
   a. 「フィルター」テキスト・ボックスにワイルドカード検索を入力して、使用可能なスケジュールを検索します。
   b. 「使用可能なスケジュール」から、スケジュールを選択します。
   c. をクリックします。

      選択したスケジュールが、「選択したスケジュール」表に移動されます。
   d. 「保存」をクリックします。
9. 「保存」をクリックします。

除外ルールの削除

システム内の使用可能な除外ルールを、スケジュールや実行に関連付けられていない場合に限り削除できます。

手順

除外ルールを削除するには、以下のステップに従います。

1. 「除外の実行」タブで、削除するルールを選択します。

   注: 削除しようとしている除外ルールが、スケジュールや実行に関連付けられていないことを確認してください。
2. 「削除」をクリックします。
3. 削除を確認します。

除外ルールの有効化と無効化

除外ルールの作成中または作成後に、そのルールを有効または無効にすることができます。デフォルトでは、新しく作成したルールは常に有効になります。

このタスクについて

スケジュールに適用している除外ルールを無効にすると、スケジュールの実行はすべて、ルールの適用前と同様に続行されます。除外ルールを有効にすると、そのルールがスケジュールに適用され、適用されている除外基準に従ってスケジュールが実行されます。

手順

除外ルールを有効または無効にする手順は、次のとおり。

1. 「除外の実行」タブで、無効になっているルールを選択します。
2. 「有効化」をクリックします。

   ルールの状況が「有効」に変更されます。
3. ルールを無効にするには、有効になっているルールを選択します。
4. 「無効化」をクリックします。

   ルールの状況が「無効」に変更されます。

除外ルールのインポート

除外ルールをインポートし、システム内のスケジュールや実行に適用できます。XML ファイルを使用してルールをインポートできます。

始める前に

除外ルールをインポートするには、特定の形式の XML ファイルが使用可能でなければなりません。UI で「除外ルールのインポート」をクリックすると、XML ファイルの形式を表示できます。

このタスクについて

サンプルの除外ルール・ファイルが、インストールの際に `<platform_home>¥conf¥` ディレクトリー内に `Exclusion_Rule.xml` ファイルとして提供されます。

手順

除外ルールをインポートする手順は、次のとおり。

1. 「除外の実行」タブで、「除外ルールのインポート」をクリックします。
2. 表示される形式を使用して、ルールをインポートするための XML ファイルを作成します。
3. 「参照」をクリックして、ファイルを選択します。
4. 「保存」をクリックします。

除外ルールをインポートする XML ファイルに関する基礎知識

除外ルールのインポートに使用できる XML ファイルには、除外ルールを定義するタグがあります。

XML ファイル内のタグ

以下の表に、除外ルールのインポートに使用できる XML ファイル内のタグがリストされています。

表 *25. XML* ファイル内のタグ

タグ	説明
ruleName	除外ルールの名前。
ruleDescription	除外ルールの説明。
ruleStartDate	除外ルールを開始する日付。日付の形式は MM/DD/YYYY でなければなりません。
ruleStartTime	除外ルールを開始する時刻。時刻の形式は HH:MM:SS でなければなりません。
ruleEndDate	除外ルールが終了する日付。日付の形式は MM/DD/YYYY でなければなりません。
ruleEndTime	除外ルールが終了する時刻。時刻の形式は HH:MM:SS でなければなりません。
SchedulerID	除外ルールを適用する必要があるスケジューラーの ID。複数のスケジューラー・タスク ID を指定できます。 スケジューラー・タスク ID は、データベース内の `USCH_TASK` テーブル内にあります。
ruleStatus	除外ルールの状況。値は `Enabled` または `Disabled` とすることができます。

このタグを使用して、複数の除外ルールを定義できます。複数のルールを定義するには、必要に応じてルールのタグを再利用して変更します。

除外ルールをインポートする XML ファイルの例

ユーザーがタグを再利用したり値を変更したりして、要件に従って新しい XML ファイルを作成できるように、除外ルールのインポートに使用する XML ファイルの例が提供されています。

以下の XML タグを使用して、除外ルールをインポートする XML ファイルを作成できます。

```
<rules>
 <rule>
  <ruleName>Rule1</ruleName><!-- specify rule name -->
  <ruleDescription>Rule for skipping 1/13 to 1/19.</ruleDescription><!-- specify rule description -->
  <ruleStartDate>1/13/2017</ruleStartDate><!-- specify exclusion start date. This should be of format MM/DD/YYYY -->
  <ruleStartTime>8:00:00</ruleStartTime><!-- specify exclusion start time. This should be of format HH:MM:SS-->
  <ruleEndDate>1/19/2017</ruleEndDate><!-- specify exclusion end date. This should be of format MM/DD/YYYY -->
  <ruleEndTime>18:15:00</ruleEndTime><!-- specify exclusion end time. This should be of format HH:MM:SS -->
  <SchedulerIDs>
   <SchedulerID>10</SchedulerID> <!-- specify scheduler task Ids, on which this rule should get applied. This needs to be obtained from database. -->
   <SchedulerID>15</SchedulerID>
  </SchedulerIDs>
  <ruleStatus>Enabled</ruleStatus> <!-- specify exclusion rule status. valid values Enabled/Disabled -->
 </rule>
</rules>
<rules>
 <rule>
  <ruleName>Rule2</ruleName><!-- specify rule name -->
  <ruleDescription>Rule for skipping 2/6 to 2/10</ruleDescription><!-- specify rule description -->
  <ruleStartDate>2/6/2017</ruleStartDate><!-- specify exclusion start date. This should be of format MM/DD/YYYY -->
  <ruleStartTime>00:00:00</ruleStartTime><!-- specify exclusion start time. This should be of format HH:MM:SS-->
  <ruleEndDate>2/10/2017</ruleEndDate><!-- specify exclusion end date. This should be of format MM/DD/YYYY -->
  <ruleEndTime>23:59:59</ruleEndTime><!-- specify exclusion end time. This should be of format HH:MM:SS -->
  <SchedulerIDs>
   <SchedulerID>45</SchedulerID> <!-- specify scheduler task Ids, on which this rule should get applied. This needs to be obtained from database. -->
   <SchedulerID>88</SchedulerID>
  </SchedulerIDs>
  <ruleStatus>Disabled</ruleStatus> <!-- specify exclusion rule status. valid values Enabled/Disabled -->
 </rule>
</rules>
```

Campaign とともにスケジューラーを使用する際の考慮事項

Campaign とともに IBM Marketing Software スケジューラーを使用するために適用される特別な構成がいくつかあります

- フローチャート実行を手動で開始する場合でもコマンド・ラインからフローチャート・コマンドを実行する場合でも、Scheduler に影響が出ることはなく、逆も同様です。ただし、1 つだけ例外があります。いずれかの方法でフローチャート実行が開始された場合、その後にいずれかの方法でフローチャートを実行しようとすると、直前の実行が完了していない場合にはロック・エラーにより失敗します。
- スケジューラー・トリガーは、どのような方法であっても Campaign フローチャート・トリガーと情報のやりとりをすることはありません。スケジュール・プロセスまたは Campaign トリガー・ユーティリティー `unica_actrg` によって送信されたトリガーが IBM Marketing Software スケジューラー内のスケジュールの実行を開始することはできず、逆も同様です。

IBM Campaign スケジュール・プロセスと IBM Marketing Software Scheduler の相違点

Marketing Platform の 8.0 リリースから、IBM Marketing Software スケジューラーは、フローチャート全体のスケジュール実行で Campaign スケジュールに代わるものとして意図されています。IBM Marketing Software スケジューラーは、フローチャートが実際に実行されていない場合、サーバー・システムのリソースを一切消費しないため、より効率的です。

IBM Marketing Software スケジューラーは、フローチャート内の Campaign スケジュール・プロセスがフローチャートの実行中にのみ機能するときは、たとえフローチャートが実行されていない場合でも、フローチャートを開始します。

Campaign スケジュール・プロセスは、旧バージョンとの完全な互換性を維持するために、また、 IBM Marketing Software スケジューラーでは処理されないその他のユースケースに備えて、保存されています。例えば、Campaign スケジュール・プロセスを使用して Campaign トリガーを送信したり、従属プロセスの実行を遅延させたりすることができます。

フローチャート実行を開始するトップレベルのプロセスとして Campaign スケジュール・プロセスを使用するフローチャートをスケジュールするときは、IBM Marketing Software スケジューラーを使用しないでください。一般に、どちらか 1 つあれば十分です。ただし、IBM Marketing Software スケジューラーによって開始されるフローチャート内にスケジュール・プロセスがある場合、そのプロセスは構成どおりに機能します。後続のプロセスが実行される前に、IBM Marketing Software スケジューラーとスケジュール・プロセスに必要な条件が満たされる必要があります。

IBM Marketing Software スケジューラーとは異なり、Campaign スケジュール・プロセスは外部トリガーを送信して、コマンド・ライン・スクリプトを呼び出すことができます。IBM Marketing Software スケジューラーは、それ自体のスケジュールにのみ、トリガーを送信できます。

フローチャートのスケジューリングに必要な権限

IBM Marketing Software スケジューラーを使用して Campaign フローチャートをスケジュールに入れるには、以下の権限が必要です。

表 *26.* スケジューリングに必要な権限

権限	説明
バッチ・フローチャートのスケジュール	デフォルトの実行パラメーターを使用してフローチャートのスケジューリングを実行できます。
バッチ・フローチャートのスケジュールのオーバーライド	フローチャートのスケジューリングのためのデフォルトの実行パラメーターをオーバーライドできます。
バッチ・フローチャートの実行	フローチャートを実行できます (スケジュール済みフローチャートを正常に実行するために必要です)。

注: スケジュール済みフローチャートを実行する場合、フローチャートはスケジュール済みタスクを作成した Marketing Platform ユーザーによって実行されます。このユーザー・アカウントが無効になっているか削除されていた場合、そのユーザーが以前にスケジュールに入れたフローチャートはすべて実行に失敗します。このユーザー・アカウントを非アクティブにしたいが、以前にスケジュールに入れられたフローチャートは実行できるようにしたいという場合は、そのユーザー・アカウントの状態を「アクティブ」に設定したままにし、「バッチ・フローチャートの実行」 権限のみを認可してください。

デフォルト・パラメーターを使用したフローチャート・スケジュールの作成

デフォルト・パラメーターを使用してフローチャートをスケジュールする手順は、以下のとおりです。

手順

1. 「表示」モードのフローチャート・タブで「**実行**」アイコンをクリックし、「スケジュール」を選択します。

   「フローチャートのスケジュール」ダイアログ・ボックスが開きます。
2. 「フローチャートのスケジュール」ダイアログ・ボックスの各フィールドに入力します。

   複数回の実行を選択する場合は、「反復のセットアップ」をクリックして反復パターンをセットアップします。
3. 「このスケジュールで実行」をクリックします。

次のタスク

重要**:** フローチャートをスケジュールする場合、スケジュールされたタスクはフローチャート名が基礎になります。スケジュールされたタスクの作成後にフローチャート名が変更されると、スケジュールされたタスクは失敗します。

Campaign フローチャート実行スケジュールのデフォルト・パラメーターのオーバーライドについて

フローチャート実行をスケジュールに入れる際に、デフォルトの実行パラメーターをオーバーライドすることができます。

Campaign フローチャート実行をスケジュールに入れた場合、スケジューラーは、フローチャート用に定義されているデフォルトの実行パラメーターを使用します。これらのパラメーターには、以下のものがあります。

- フローチャートが使用するテーブル・マッピングが含まれているテーブル・カタログ。
- フローチャート内部で定義されたユーザー変数値。
- フローチャートがアクセスするデータ・ソースのログイン情報。デフォルトは、フローチャートをスケジュールに入れるユーザーです。

Campaign では、これらのデフォルト値をオーバーライドして、異なるデータ・ソースに対して実行したり、異なる結果を得たりする、`unica_svradm` ユーティリティーが提供する機能に似た機能を利用できます。例えば、単一のフローチャートについて複数の実行をスケジュールに入れて、ユーザー変数の値の組み合わせをいろいろテストすることができます。実稼働データベースからこれらのテスト実行用のサンプル・データベースに切り替える、代替テーブル・カタログを指定することもできます。組織で、テスト実行と実稼働実行に異なるデータベース・ログインが必要な場合は、適切なログイン情報を指定することができます。

Campaign フローチャートのスケジュールのための実行パラメーター

Campaign フローチャートをスケジュールに入れると、フローチャートは、実行パラメーターが含まれたストリングを IBM Marketing Software スケジューラーに渡すことができます。このストリングは、実行が開始されたときに Campaign に返されます。

Campaign では、「フローチャート・パラメーターを上書きする」ダイアログ・ボックスで設定された値のすべてが単一のストリングとして Scheduler に渡されます。このストリングは、「実行パラメーター」フィールドに表示されます。

フローチャート・スケジュールの作成

フローチャートをスケジュールする手順は、以下のとおりです。

手順

1. 「表示」モードのフローチャート・タブで「スケジュール」アイコン をクリックし、「スケジュール」を選択します。

   「フローチャート・パラメーターを上書きする」ダイアログ・ボックスが開きます。
2. デフォルトのフローチャート・パラメーターをオーバーライドする場合、ダイアログ・ボックスの各フィールドに入力して、フローチャート・パラメーターを指定します。このステップはオプションです。

   「ユーザー変数の追加」と「データ・ソースの追加」リンクをクリックして、複数のユーザー変数とデータ・ソースを追加できます。

   これらのフィールドに入力するパラメーターの構文は、システムで検査されません。先へ進む前に、正しい値を入力してあることを再確認してください。

   デフォルトのフローチャート・パラメーターをオーバーライドしない場合、次のステップに進みます。
3. 「実行をスケジュール」をクリックして、「スケジュールの作成」ダイアログ・ボックスを開きます。

   スケジュールの実行時刻を定義でき、オプションで、繰り返し、トリガー、および制限をセットアップできます。
4. 「このスケジュールで実行」をクリックします。

次のタスク

重要**:** フローチャートをスケジュールする場合、スケジュールされたタスクはフローチャート名が基礎になります。スケジュールされたタスクの作成後にフローチャート名が変更されると、スケジュールされたタスクは失敗します。

「フローチャート・パラメーターを上書きする」ページ

次の表では、「フローチャート・パラメーターを上書きする」ダイアログのフィールドについて説明します。このダイアログの編集可能フィールドはすべてオプションです。これらのフィールドに入力するパラメーターの構文は、システムで検査されません。先へ進む前に、正しい値を入力してあることを再確認してください。

このダイアログに入力する値は、ウィザードの次のページで、「実行パラメーター」フィールドに表示されます。

表 27. 「フローチャート・パラメーターを上書きする」ページのフィールド

フィールド	説明
フローチャート ID	フローチャートの固有 ID。このフィールドは、自動的にデータが表示され、読み取り専用です。
キャンペーン - フローチャート名	キャンペーンの名前、キャンペーン・コード、およびフローチャート名。このフィールドは、自動的にデータが表示され、読み取り専用です。
カタログ・ファイル名	この実行に使用するテーブル・カタログ・ファイルを指定します。
ユーザー変数名	フローチャート内で定義されているユーザー変数の名前を入力します。
値	ユーザー変数の値を入力します。
データ・ソース名	フローチャートからアクセスするデータ・ソースの名前を入力します。
ログイン	このフィールドは、指定したデータ・ソースのデフォルトのログイン名をオーバーライドする場合に使用します。デフォルトは、スケジュールを作成しているユーザーのログイン名です。
パスワード	このフィールドは、指定したデータ・ソースのデフォルトのパスワードをオーバーライドする場合に使用します。デフォルトは、スケジュールを作成しているユーザーのパスワードです。

スケジュール通知

スケジュールされた実行のステータスについてアラートを出すよう、任意のスケジュールの通知をセットアップすることができます。加えて、Marketing Platform で管理者権限を持つユーザーは、通知送信先グループをセットアップすることができます。

個々のスケジュール通知

スケジュールの通知の作成は、スケジュールを作成して保存した後にのみ行えます。作成プロセス中には行えません。どのステータスが通知をトリガーするかを構成し、各スケジュールの通知を E メール・アカウントに送信するか、または通知受信箱に表示するか、あるいはその両方が行われるようにするかを構成できます。

グループのスケジュール通知

スケジュールの作成者以外のユーザーがスケジュール通知を受信するようにする場合、グループ・ベースの通知を有効にすることができます。グループ通知をセットアップするには、Marketing Platform の管理者権限が必要です。

構成プロパティーの「ジョブ通知を受信するグループ名」は、「設定」>「構成」ページの **IBM Marketing Platform** | スケジューラー | スケジュール登録 | **[**製品**]** | **[**オブジェクト**]** カテゴリーの下で予定されている各オブジェクト・タイプに含まれています。この構成プロパティーで指定されるグループのすべてのメンバーは、そのオブジェクト・タイプのすべてのスケジュールに関する通知を受信します (例えば、キャンペーンのフローチャート)。

グループ・メンバーは、「長い所要時間」ステータスまたは「開始前/キュー登録済み」ステータスのスケジュールされた実行に対してセットアップされた通知を受信

します。「失敗時」ステータス、「成功時」ステータス、または「不明/その他の問題」ステータスの実行の通知は受信しません。

グループでユーザーを追加または削除することにより、その通知受信者を制御できます。

関連概念:

181 ページの『第 14 章 アラートおよび通知の管理』

作成するスケジュールの通知のセットアップ

この手順を使用して、作成するスケジュールの通知をセットアップします。通知の作成は、スケジュールを作成して保存した後にのみ行えます。作成プロセス中は行えません。

手順

1. 「設定」>「スケジュール管理 **(Schedule management)**」を選択し、通知をセットアップするスケジュールの名前をクリックします。
2. 「ジョブ通知の編集」をクリックして「マイ・ジョブ通知」ウィンドウを開き、「新規」をクリックします。
3. フィールドに入力し、「保存」をクリックします。

作成するスケジュールの通知の削除または変更

通知を作成した場合、それを削除または変更することができます。

手順

1. 「設定」>「マイ・ジョブ通知」を選択し、「マイ・ジョブ通知」ウィンドウを開きます。
2. 通知を削除するには、削除する通知を選択し、「削除」をクリックします。
3. 通知を変更するには、変更する通知の名前をクリックし、「ジョブ通知の編集」ウィンドウを開きます。ここから、変更を行い、保存することができます。

ユーザーのグループのスケジュール通知のセットアップ

この手順を使用して、指定するユーザーのグループに送信されるすべてのスケジュールの通知をセットアップします。この手順を実行するには、Marketing Platform の管理者権限が必要です。

手順

1. 「設定」>「構成」ページで、「**IBM Marketing Platform** | スケジューラー |スケジュール登録 **(Scheduler registrations)**」のカテゴリーに移動します。
2. グループ・ベースの通知を有効にするオブジェクト・タイプごとに、「ジョブ通知を受信するグループ名」プロパティーの値に、このオブジェクト・タイプの通知を受信させるグループの名前を設定します。

   既存のグループを使用することも、これらの通知用にグループを作成することもできます。

グループ・ベースの通知を有効にするオブジェクト・タイプごとにグループを 1 つセットアップすることをお勧めします。

3. 必要に応じて、「ユーザー・グループ」ページで、前のステップで指定したグループにユーザーを割り当てます。

「マイ・ジョブ通知」ページ

「マイ・ジョブ通知」ページで、スケジュール通知を構成することができます。

表 *28.* 「マイ・ジョブ通知」ページのフィールド

フィールド	定義
通知タイトル	通知の名前の入力
条件	通知の送信が発生するステータス条件を選択します。 通知をトリガーするステータスごとに異なる通知を作成することができます。
通知の送信先	通知の受信方法を選択します。 通知は、IBM Marketing Software ユーザー・アカウントに関連付けられている E メール・アカウントに送信することも、ユーザー・インターフェースの通知に表示することもできます。あるいはその両方も可能です。
通知ステータス (Notification status)	この通知がアクティブか非アクティブかを選択します。非アクティブを選択すると、通知は送信されません。

スケジュール管理

「設定」**>**「スケジュール管理 **(Schedule management)**」ページから、すべてのスケジュールを管理できます。スケジュールを管理するには、Marketing Platform での「スケジュール済みタスクの管理」ページの権限が必要です。

「スケジュールされたタスク」ページには、以下のタブがあります。

- 「スケジュール」- このタブでは、スケジュールを作成したり、スケジュール定義を表示したり、削除したりできます。スケジュール名をクリックして定義を編集することができます例えば、通知を追加したり、スケジュールを有効/無効にしたりできます。
- 「実行 (Runs)」- このタブでは、すべてのスケジュールについて、キューに入れられた実行および完了した実行を表示したり、キューに入れられた実行をキャンセルしたり、実行を削除したりできます。スケジュール名をクリックして定義を編集することができます例えば、通知を追加したり、スケジュールを有効/無効にしたりできます。

スケジュールおよびパーティション

マルチパーティション環境では、自分が所属するパーティション内で作成されたスケジュールのみが表示されます。ただし、PlatformAdminRole 役割を持っている場合は、すべてのパーティションのすべてのスケジュールされた実行を表示することができます。

不明ステータス

ステータスが「不明」の実行が多数表示される場合、「設定」>「構成」ページで「**IBM Marketing Platform** | スケジューラー |不明状況の最大ポーリング数」プロパティーを設定することにより、スケジューラーのポーリング頻度を調整することができます。このプロパティーは、「不明」ステータスを報告する前に実行のステータスをスケジューラーがチェックする回数を指定します。

不明なステータスは、Marketing Platform がジョブがまだ実行中か、完了したか、または失敗したかどうかを判別できないことを示しています。

組織に多数のスケジュール済みジョブが存在する場合、ポーリング頻度を増やすと、パフォーマンスに影響が及ぶ可能性があります。

スケジュール・リスト・フィルター

「実行 (Runs)」タブおよび「スケジュール」タブでは、スケジュール・リストをフィルタリングできます。

リストの右上にあるボックスにテキストを入力してクイック・フィルターを実行できます。これにより、リスト内のすべての列の値と検索語が比較されます。検索ストリングを含む列がある場合は、そのスケジュールまたは実行が検索結果に含められます。

拡張検索では、「スケジュール・リスト・フィルターの編集 **(Edit the schedule list filter)**」をクリックし、表示されたウィンドウで、リストに含まれるスケジュールまたは実行の属性について評価する条件を設定することができます。

複数のスケジュールの有効化と無効化 (フィックスパック 10.0.0.1 の場合のみ)

Marketing Platform フィックスパック 10.0.0.1 を適用した場合は、「スケジュール」タブで複数のスケジュールを選択し、リスト上部の「無効化」または「有効化」ボタンをクリックして無効または有効にすることができます。

この無効化と有効化の一括機能を、無効/有効にするスケジュールのリストを取得するフィルターと一緒に使用することができます。例えば、スケジュールを作成したときに検索タグを追加した場合は、リストをフィルタリングして、特定のタグを持つスケジュールのみを表示できます。そして、それらのスケジュールをすべて選択し、シングルクリックで無効または有効にすることができます。

スケジュールされたタスクを無効にした場合に、その無効にしたタスクのトリガーに依存するスケジュールは無効になりません。ただし、トリガーを受け取らないので実行されることはありません。

関連資料:

101 ページの『スケジュール管理のページ』

スケジュール管理のページ

「設定」>「スケジュール管理」を選択するか、またはフローチャートの「実行」メニューから「スケジュール時に表示」を選択することにより、スケジューラー管理ページにアクセスすることができます。

「スケジュール」タブ

表 29. 「スケジュール」タブのフィールドとリンク

フィールドまたはリンク	説明
無効化	選択されている 1 つ以上のスケジュールを無効にします。 Marketing Platform フィックスパック 10.0.0.1 を適用した場合にのみ使用可能です。
有効化	選択されている 1 つ以上のスケジュールを有効にします。 Marketing Platform フィックスパック 10.0.0.1 を適用した場合にのみ使用可能です。
スケジュールの作成	クリックすると、スケジュールをセットアップするためのウィザードが表示されます。
スケジュール・リスト・フィルターの編集 (Edit the schedule list filter)	リストの拡張フィルターを作成する場合にクリックします。
削除	選択されている 1 つ以上のスケジュールを削除します。スケジュールを選択するには、スケジュールの左側の列をクリックします。すべてのスケジュールを選択するには、左側の列の先頭をクリックします。
最新表示	リストを最新表示する場合にクリックします。
フィルター	リストの簡易フィルターを作成する場合にクリックします。
スケジュール名	この実行がインスタンスとして含まれているスケジュール。
スケジュール状態 (Schedule state)	スケジュールが有効か無効か。
スケジュールされた項目	実行するオブジェクトの名前。
項目タイプ	実行するオブジェクトのタイプ。
作成者	スケジュールを作成したアカウントのユーザー名。
開始トリガー	スケジュールがトリガーに依存する場合、スケジュール実行を引き起こすトリガー。
開始	このタスクの初回実行がスケジュールされている日時。
繰り返しパターン	繰り返しパターンの説明。
終了	このタスクの最終実行がスケジュールされている日時。 **注:** 繰り返しスケジュールされたタスクにのみ適用されます。
前の 1 つおよび次の 2 つの実行	直前の実行および次の 2 つのスケジュールされた実行の日時。 **注:** 繰り返しスケジュールされたタスクにのみ適用されます。 前の 1 つと次の 2 つのスケジュールされた実行に関する情報は、スケジューラー定義に従って表示されます。現在は、除外ルールに対する妥当性検査は行われません。
依存関係	スケジュールされたオブジェクトが他のオブジェクトに依存する場合、それらがここでリストされます。
成功時にトリガー	このスケジュールの実行が正常に完了したことを製品が報告する場合に送信されるストリング。成功時トリガーが指定されていない場合、このフィールドはブランクです。
失敗時にトリガー	このスケジュールの実行が失敗したことを製品が報告する場合に送信されるストリング。失敗時トリガーが指定されていない場合、このフィールドはブランクです。

「実行 (Runs)」タブ

表 30. 「実行 (Runs)」タブのフィールドとリンク

フィールドまたはリンク	説明
スケジュール・リスト・フィルターの編集 (Edit the schedule list filter)	リストの拡張フィルターを作成する場合にクリックします。
削除	選択されている 1 つ以上のスケジュールを削除します。スケジュールを選択するには、スケジュールの左側の列をクリックします。すべてのスケジュールを選択するには、左側の列の先頭をクリックします。
キャンセル済みにする	選択されている 1 つ以上のスケジュールをキャンセルします。
最新表示	リストを最新表示する場合にクリックします。
フィルター	リストの簡易フィルターを作成する場合にクリックします。
実行 ID	Marketing Platform システム・テーブルで、この実行に割り当てられた識別番号。
スケジュール名	スケジュールの作成者が指定したスケジュールの名前。
スケジュールされた項目	実行するオブジェクトの名前。
項目タイプ	実行するオブジェクトのタイプ。
開始	実行が開始された日時。
最終更新日時	この実行の情報が更新された日時。
実行状態 (Execution state)	Scheduler に定義されている実行の状態で、以下のとおりです。 • 予定されています - 実行は開始されていません。 • キューに登録済み - Scheduler は実行を開始しましたが、制限による制約のため、IBM Marketing Software 製品はスケジュールされた実行の実行を開始していません。 • 完了 - 実行は完了し、「失敗」または「成功」の状態が返されました。 • キャンセル済み - ユーザーが「スケジュールされた実行」ページで「キャンセル済みにする」をクリックして、実行をキャンセルしました。ユーザーがキャンセル済みのマークを付けたときに実行がキューに入っていた場合、実行はされません。実行中だった場合、このアクションによって実行が停止するわけではありませんが、実行にキャンセル済みのマークが付けられ、この実行用に構成されたトリガーは送信されません。また、キャンセルされた実行に依存する実行は実行されません。 • 不明 - Marketing Platform がジョブがまだ実行中か、完了したか、または失敗したかどうかを判別できないことを示しています。
実行ステータス	実行している製品によって定義されたオブジェクトの実行のステータス。実行が「キャンセル済み」ステータスを送信し、その後その実行が再開されて別のステータスをスケジューラーに送信すると、ステータスがこのフィールドで更新されます。
詳細	製品によって提供される、実行に関する情報。例えば、フローチャート実行の場合、フローチャート名と ID が詳細に含まれ、実行が失敗した場合にはエラー、および実行が成功した場合には経過時間も含まれます。

スケジュール・リスト・フィルターの編集 (Edit the schedule list filter) - スケジュール

表 31. 「スケジュール」タブの「スケジュール・リスト・フィルターの編集 *(Edit the schedule list filter)*」

列	説明
検索タグ / キーワードでフィルター処理 (Filter by search tags / keywords)	検索タグまたはキーワードをフィルターに含める場合、このチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。スケジュール作成時に、ここに入力する文字列と、「検索タグ / キーワード **(Search tags / keywords)**」フィールドに入力した文字列の突き合わせが実行されます。
検索タグ / キーワード (Search tags / keywords)	フィルターで使用する検索タグまたはキーワードを入力します。
他の基準でフィルター処理 (Filter on other criteria)	追加の条件をフィルターに含める場合に、このチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
実行メタデータ (Run metadata)	以下のオプションのうち、ルールに含めるものを 1 つ選択します。 オプションは次のとおりです。 • スケジュール名 • スケジュール状態 **(Schedule state)** • 項目タイプ • 作成者 • スケジュールされた項目
条件	ルールの評価方法を決めるオプションとして、以下のうち 1 つを選択します。 • 次と一致 **(Matches)** • 次で始まる **(Starts with)** • 次で終わる **(Ends with)** • 次を含む **(Contains)**
値	ルールに適用する値を入力または選択します。オプションは、ルールのために選択するメタデータに応じて異なります。 • スケジュール名 任意の文字を入力します。 • スケジュール状態 **(Schedule state)** 値のオプションは、「有効」および「無効」です。 • 項目タイプ 値のオプションは、さまざまなスケジュール・タイプです。 • 作成者 任意の文字を入力します。この値がユーザー・ログイン名と比較されます。 • スケジュールされた項目 任意の文字を入力します。ここに入力する文字列が、「スケジュールされた項目」列のテキストと比較されます。
および / または	作成するルールごとに、これらの演算子のうちのいずれか 1 つを選択します。

スケジュール・リスト・フィルターの編集 (Edit the schedule list filter) - 実行 (Runs)

表 32. 「実行 *(Runs)*」タブの「スケジュール・リスト・フィルターの編集 *(Edit the schedule list filter)*」

列	説明
時刻を基準にフィルター処理 (Filter based on time)	指定した期間に行われた実行を表示する場合に、このチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
タイム・ゾーン (Time zone)	サーバーのデフォルト以外のオプションを選択すると、検索で、指定した日付範囲に含まれるスケジュールを算出する際に、選択したタイム・ゾーンが使用されます。
次の直近の実行を表示 n インスタンス(List runs for the last n instances)	繰り返し実行する場合に、リスト内に過去の実行を何回まで表示するかを指定します。
次の範囲の実行を表示(List runs from)	リストに表示する実行の期間を指定します。
他の基準でフィルター処理 (Filter on other criteria)	追加の条件をフィルターに含める場合に、このチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
実行メタデータ (Run metadata)	以下のオプションのうち、フィルターに含めるものを 1 つ選択します。 オプションは次のとおりです。 • スケジュール名 • 実行状態 **(Execution state)** • 実行ステータス • スケジュールされた項目
条件	条件の評価方法を決めるオプションとして、以下のうち 1 つを選択します。 • 次と一致 **(Matches)** • 次で始まる **(Starts with)** • 次で終わる **(Ends with)** • 次を含む **(Contains)**

表 32. 「実行 *(Runs)*」タブの「スケジュール・リスト・フィルターの編集 *(Edit the schedule list filter)*」 (続き)

列	説明
値	フィルターに適用する値を入力または選択します。オプションは、ルールのために選択するメタデータに応じて異なります。 • スケジュール名 任意の文字を入力します。 • 実行状態 **(Execution state)** 値のオプションは、以下のとおりです。 – キューに登録済み – 実行中 – 完了 – 不明 – キャンセル済み • 実行ステータス 値のオプションは、「正常に完了」、「実行中」、「キャンセル済み」、「失敗」、および「不明」です。 • スケジュールされた項目 任意の文字を入力します。ここに入力する文字列が、「スケジュールされた項目」列のテキストと比較されます。
および / または	作成するルールごとに、これらの演算子のうちのいずれか 1 つを選択します。

関連概念:

99 ページの『スケジュール管理』

関連資料:

85 ページの『スケジュールの作成ウィザード』

第 7 章 SAML 2.0 ベースのフェデレーテッド認証

IBM Marketing Platform は、SAML 2.0 ベースの ID プロバイダー (IdP) を実装しています。この IdP は、IBM Marketing Software 製品間のシングル・サインオン・フェデレーションや、IBM Marketing Software 製品とサード・パーティー・アプリケーションの間のシングル・サインオン・フェデレーションを可能にします。

フェデレーションとは、トラステッド環境内で連携する IdP とアプリケーションのグループであり、SAML 2.0 (Security Assertion Markup Language) ベースの規格を使用して相互にサービスを提供します。

フェデレーションのメンバーであるアプリケーションは、サービス・プロバイダー (SP) と呼ばれます。IdP サーバーと SP は、オンプレミスでもクラウドでもホストできます。

SAML 2.0 フェデレーションでは、シングル・サインオンにさまざまな認証メカニズムを使用できます。例えば、ある SP でそのアプリケーションの認証メカニズム (企業内、OAuth、OpenId、SAML、Kerberos など) を使用して認証されたユーザーは、フェデレーテッド・シングル・サインオンを使用して他の SP にもアクセスできます (それらのアプリケーションが同じフェデレーションに属し、ユーザーが適切にマップされている場合)。

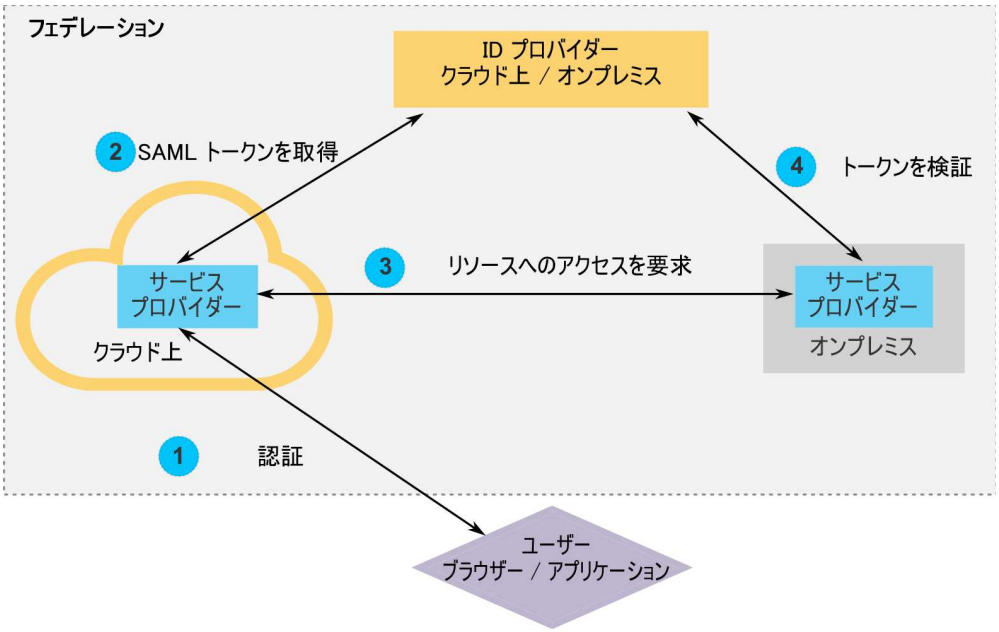
IdP サーバーは、ユーザー・マッピングに基づいてトークンを作成、検証、または削除します。サポート対象のデータベース・タイプ用にデータ・アクセス・オブジェクトが実装され、IdP サーバーに組み込まれています。

管理者が SP 間でユーザー ID をマップすると、マップされたユーザーは、シングル・サインオン・アクセスを利用できるようになります。例えば、SP_A と SP_B が両方ともフェデレーションのメンバーであるとします。User1 は SP_A のアカウントであり、User2 は SP_B のアカウントです。User1 アカウントは、フェデレーション内で User2 アカウントにマップされています。User1 の資格情報で SP_A にログインした場合、ユーザーは SP_B へのシングル・サインオン・アクセスが可能です。また、User2 の資格情報で SP_B にログインした場合は、SP_A へのシングル・サインオン・アクセスが可能です。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

図

次の図は、フェデレーションを示しています。



IBM 実装のコンポーネント

IBM が実装する SAML 2.0 ベースのフェデレーテッド・シングル・サインオンは、以下のコンポーネントで構成されています。

これらのコンポーネントは、Marketing Platform インストール済み環境の `tools/lib` ディレクトリーにあります。

- SAML 2.0 ベースの IdP サーバー (WAR ファイルとして配信): `idp-server.war`
- クライアント・ファサード: `idp-client.jar`

  IdP クライアント・ファサードは、セキュリティー・トークンを処理する API を使用して Java で実装します。これは JAR ファイルとして配信します。この API の Javadoc 資料は Marketing Platform Javadoc に含まれています。

  IdP クライアント・ファサードにより、Java SP は、迅速に IdP サーバーと統合してフェデレーションの一部になることができます。

サポートされるユース・ケース

現在の実装では、SP はセキュリティー・トークンを処理して、SP 間でシングル・サインオン認証を確立できます。

新しい **SAML** トークンの生成

この実装では、シングル・サインオン認証要求を開始したユーザーのために新しい SAML トークンを生成できます。このユーザーは IdP サーバーでマップされている必要があります。IdP サーバーは、トラステッド・パーティーの資格情報とユー

ザー・マッピングに基づいて新しいセキュリティー・トークンを作成し、SAML 2.0 アサーションを使用してそのセキュリティー・トークンを発行します。

例えば、IdP サーバーで SP_A の User1 が SP_B の User2 にマップされている場合、User1 が SP_B リソースにアクセスしようとすると、IdP サーバーはトラステッド・パーティーとして User1 のセキュリティー・トークンを生成します。

既存の **SAML** トークンの検証

この実装では、別の SP からユーザーのアクセス要求を受け取った SP が提示した既存の SAML トークンを検証できます。 SP は、まず、IdP サーバーと連携してセキュリティー・トークンとクライアント・マッピングを検証し、自身のドメイン内のマップされたユーザーを識別します。

例えば、SP_A が User1 のために SP_B リソースにアクセスしようとして IdP セキュリティー・トークンを提示すると、SP_B はこのトークンを IdP サーバーに渡します。トークンが有効で User1 が SP_B ユーザーにマップされていれば、IdP サーバーは SP_B ドメイン内の SP_B ユーザーを解決して、アサーションを返します。

既存の **SAML** トークンの削除

この実装では、ユーザーがシステムからログアウトしたときや、アクティブでないためにセッションがタイムアウトになったときに、SP ユーザーの既存の SAML トークンを削除できます。 IdP サーバーは、ログアウト要求を受け取ると、トラステッド・パーティーの資格情報とユーザー・マッピングに基づいてトークンを削除し、最終アクセスのタイム・スタンプをリセットします。ユーザーのマッピングが削除されることはありません。

制限

現在の実装は、以下のユース・ケースをサポートしていません。

- ユーザー・インターフェースまたは API を介して SP ユーザー間の新しいユーザー・マッピングを作成する
- ユーザー・インターフェースまたは API を介して SP ユーザー間の既存のユーザー・マッピングを更新する
- ユーザー・インターフェースまたは API を介して SP ユーザー間の既存のユーザー・マッピングを削除する

フェデレーテッド認証とパーティション

IBM Marketing Software 環境に複数のパーティションがある場合は、SAML 2.0 ベースのフェデレーテッド認証をパーティションごとに別々にセットアップできます。これを実装するには、「設定」>「構成」ページの **IBM Marketing Platform** | セキュリティー | 統合認証 **(Federated Authentication)** | **partitions** | **partition[n]** カテゴリーでパーティションごとに新しいプロパティー・セットを作成する必要があります。

関連概念:

211 ページの『第 16 章 IBM Marketing Software API のセキュリティー・フレームワーク』

フェデレーテッド認証の実装方法

IBM ExperienceOne 製品に SAML 2.0 ベースのフェデレーテッド認証を実装するには、このセクションに記載する手順を実行します。

データ・リポジトリーの作成

ユーザー・マッピングを保持するために、TP_MASTER と TP_MAPPING の 2 つのデータベース・テーブルを作成します。

このタスクについて

以下のサンプル SQL スクリプトが、scripts ディレクトリーの idp-server.war ファイルに用意されています。

- DatabaseScript_DB2.sql
- DatabaseScript_Oracle.sql
- DatabaseScript_SQL.sql

次の表に、これらのスクリプトが作成するデータベース・テーブルのフィールドを示します。

表 33. *TP_MASTER* テーブルのフィールド

フィールド	説明
TP_ID	1 次キー。登録済みサービス・プロバイダーの固有 ID。
TP_NAME	サービス・プロバイダー名。
TP_INFO	サービス・プロバイダーの説明。
KEY_ALIAS	固有キー。サービス・プロバイダーの鍵ストアの別名。 固有の別名を強制的に設定します。複数のサービス・プロバイダーに同じ鍵ストア別名を使用する場合は、UNIQUE 制約をドロップできます。

表 34. *TP_MAPPING* テーブルのフィールド

フィールド	説明
TP_CLIENT_ID	外部キー。要求側のサービス・プロバイダーの TP_ID。 このテーブルでマッピングが重複しないようにするための 4 つの列から成る複合 1 次キーの一部。
TP_FOR_USER_ID	要求側のサービス・プロバイダーから要求を行っているユーザーの ID。 このテーブルでマッピングが重複しないようにするための 4 つの列から成る複合 1 次キーの一部。 最小 4 文字、最大 24 文字の長さで、英数字、ハイフン、下線のみで構成されなければなりません ([a-zA-Z0-9_-])。

表 34. *TP_MAPPING* テーブルのフィールド (続き)

フィールド	説明
TP_SP_ID	外部キー。サービス提供側のサービス・プロバイダーの TP_ID。 このテーブルでマッピングが重複しないようにするための 4 つの列から成る複合 1 次キーの一部。 最小 4 文字、最大 24 文字の長さで、英数字、ハイフン、下線のみで構成されなければなりません ([a-zA-Z0-9_-])。
TP_MAPPED_USER_ID	サービス提供側のサービス・プロバイダーでのユーザーの ID。 このテーブルでマッピングが重複しないようにするための 4 つの列から成る複合 1 次キーの一部。
SAML_TOKEN	固有キー。SAML トークンの ID。 固有のトークンを強制的に生成します。複数のサービス・プロバイダーに同じトークンを使用する場合は、UNIQUE 制約をドロップできます。
LAST_REQUEST	最後に正常に完了した要求のタイム・スタンプ。

Web アプリケーション・サーバーでの IdP データ・ソースの構成

Tomcat、WebSphere®、および WebLogic が、IdP サーバーでサポートされる Web アプリケーション・サーバーです。Web アプリケーション・サーバーに IdP サーバーを配置したら、IdP サーバーをデータ・リポジトリーに接続するために JNDI データ・ソースを構成します。

このタスクについて

JNDI データ・ソースの構成方法について詳しくは、ご使用の Web アプリケーション・サーバーの資料を参照してください。

例えば、Tomcat サーバーに Oracle データベースのデータ・ソースを作成するには、次の構成が必要です。 Tomcat インストール済み環境にある conf/context.xml ファイルに、新しいリソースを定義します。

```
<Resource name="idp_datasource"
auth="Container"
type="javax.sql.DataSource"
maxActive="100" maxIdle="30" maxWait="10000"
username="your_username" password="your_password"
driverClassName="com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver"
url="jdbc:sqlserver://localhost:1433;DatabaseName=IdPServer"/>
```

このリソースを、Tomcat インストール済み環境にある conf/web.xml ファイルに登録します。

```
<resource-ref>
<description>SQL Server Datasource example</description>
<res-ref-name>idp_datasource</res-ref-name>
<res-type>javax.sql.DataSource</res-type>
<res-auth>Container</res-auth>
</resource-ref>
```

IBM IdP クライアント・ファサードのクラスパスのセットアップ

IBM IdP クライアント・ファサードを使用する場合は、IdP サーバーと SP のクラスパスに JAR ファイルを追加する必要があります。

手順

1. 下記のようにして必要な JAR ファイルを入手し、それらの JAR ファイルを IdP サーバー上と、SP のホスト・サーバー上に配置します。
   - Marketing Platform インストール・ディレクトリーにある `unica.war` ファイルを見つけます。 `unica.war` ファイルを解凍し、`WEB-INF¥lib` ディレクトリーにナビゲートし、以下の JAR をコピーします。
     - `bcprov-jdk15.jar`
     - `esapi-2.0.1.jar`
     - `jersey-core-1.17.jar`
     - `jersey-server-1.17.jar`
     - `jersey-servlet-1.17.jar`
     - `joda-time-2.2.jar`
     - `opensaml-2.6.1.jar`
     - `openws-1.5.1.jar`
     - `xmlsec-1.5.6.jar`
     - `xmltooling-1.4.1.jar`
   - `asm-3.1.jar`

     http://mvnrepository.com/artifact/asm/asm/3.1 からダウンロードします。
   - `jcl-over-slf4j-1.7.5.jar`

     http://mvnrepository.com/artifact/org.slf4j/jcl-over-slf4j/1.7.5 からダウンロードします。
   - `slf4j-api-1.7.5.jar`

     http://mvnrepository.com/artifact/org.slf4j/slf4j-api/1.7.5 からダウンロードします。
2. 前のステップで入手した JAR ファイルを、IdP サーバーのクラスパスおよび各 SP のクラスパスに追加します。
3. フェデレーションに含める SP ごとに、このクライアント・ファサードの JAR ファイル (`idp-client.jar`) もクラスパスに追加します。 この JAR ファイルは、Marketing Platform インストール済み環境に用意されています。

IdP サーバーの配置

`IdP-Server.war` ファイルは、Marketing Platform WAR ファイルと一緒に同じサーバーに配置することも、単独で配置することもできます。この 2 つの WAR ファイルの間に直接の依存関係はありません。

IdP サーバーの構成

SP から来る SAML トークンをアサートするために、IdP サーバーは鍵ストアを自身の構成に保管します。この構成は、IdP サーバーが配置された Web アプリケーション・サーバーの `conf` フォルダーの下の `IdPServerConfig.properties` ファイルに保管されます。

このタスクについて

このセクションに示している照会は汎用的なものです。ご使用のデータベース・タイプに合わせて照会を変更する必要がある場合は、以下の接尾部のいずれかをキーで使用し、新しい照会を値として入力してください。

- `Sql`
- `Oracle`
- `db2`

例えば、`com.ibm.ocm.idp.server.query.token.create` プロパティーの照会を DB2® 用にするには、プロパティーを次のように変更します。

```
com.ibm.ocm.idp.server.query.token.create.db2 = new query
```

注: 変更した照会の列の順序と数は、元の照会と同じでなければなりません。

リファレンス: IdPServerConfig.properties ファイル

このセクションには、構成ファイル内のプロパティーのデフォルト値と、プロパティーでサポートされるすべての値をリストしています。

com.ibm.ocm.idp.server.keystore.path
: Web アプリケーション・サーバーのホスト・マシン上の鍵ストア・ファイルの絶対パス。

デフォルト値: *path*/idp.jks

com.ibm.ocm.idp.server.keystore.passkey
: 鍵ストアのパス・キー。

デフォルト値: `idp001`

com.ibm.ocm.idp.server.keystore.alias
: 鍵ストアの別名。

デフォルト値: `idp`

com.ibm.ocm.idp.server.certificate.issuer
: 証明書発行者の URL。

デフォルト値: `http://localhost:8080/idp/`

com.ibm.ocm.idp.server.token.validity
: トークンの有効期間 (秒単位)。

デフォルト値: `3600`

com.ibm.ocm.idp.server.enable
: IdP サーバーのロガー。

デフォルト値: True

com.ibm.ocm.idp.server.dao.class

データベース固有のデータ・アクセス・オブジェクト実装。

サポートされる DAO は次のとおりです。

com.ibm.ocm.idp.server.dao.IdPServerSQLDAO

com.ibm.ocm.idp.server.dao.IdPServerOracleDAO

com.ibm.ocm.idp.server.dao.IdPServerDB2DAO

デフォルト値: com.ibm.ocm.idp.server.dao.IdPServerSQLDAO

com.ibm.ocm.idp.server.datasource.name

アプリケーション・サーバーで定義された JNDI データ・ソース名。

デフォルト値: idp_datasource

com.ibm.ocm.idp.server.query.token.create

トークンを作成するための照会。

デフォルト値:

```
UPDATE TP_MAPPING
SET SAML_TOKEN = ?, LAST_REQUEST = ?
WHERE TP_CLIENT_ID = ?
AND TP_FOR_USER_ID = ?
AND TP_SP_ID = ?
```

com.ibm.ocm.idp.server.query.token.get

トークンを取得するための照会。

デフォルト値:

```
SELECT SAML_TOKEN,
LAST_REQUEST FROM TP_MAPPING
WHERE TP_CLIENT_ID = ?
AND TP_FOR_USER_ID = ?
AND TP_SP_ID = ?
```

com.ibm.ocm.idp.server.query.mapping.validate

ユーザー・マッピングを検証するための照会。

デフォルト値:

```
SELECT TP_MAPPED_USER_ID FROM TP_MAPPING
WHERE TP_CLIENT_ID = ?
AND TP_FOR_USER_ID = ?
AND TP_SP_ID = ?
```

com.ibm.ocm.idp.server.query.token.delete

トークンを削除するための照会。

デフォルト値:

```
UPDATE TP_MAPPING SET SAML_TOKEN = null,
LAST_REQUEST = null
WHERE TP_CLIENT_ID = ?
AND TP_FOR_USER_ID = ?
AND TP_SP_ID = ?
```

com.ibm.ocm.idp.server.query.client.get

クライアントの詳細を取得するための照会。

デフォルト値:

```
SELECT TP_ID, TP_NAME, TP_INFO, KEY_ALIAS
FROM TP_MASTER
WHERE TP_ID = ?
```

鍵ストアの取得と IdP サーバーへのインポート

トラステッド・パーティー・アサーションを確立するためには、すべての統合アプリケーションと IdP サーバーのそれぞれに個別の鍵ストアが必要です。

このタスクについて

IdP サーバー用の鍵ストアと、フェデレーションに含めるすべての SP 用の鍵ストアを取得します。鍵ストアは、Java keytool ユーティリティーを使用して生成するか、認証局から入手することができます。

keytool ユーティリティーを使用して鍵ストアを生成する場合の標準的な作業のワークフローを、サンプル・コマンドとともに以下に示します。以下の例では、Java 6 keytool パスは `C:¥Program Files (x86)¥Java¥jre7¥bin¥keytool` です。

- IdP 管理者が IdP サーバー用の鍵ストアを生成し、証明書をエクスポートします。

  ```
  # Generate IdP JKS from keytool
  c:¥temp> "keytool_path¥keytool" -genkey -keyalg RSA -alias idp
  -keystore idp.jks -storepass idp001 -validity 360 -keysize 2048
  # Export IdP certificate from JKS
  c:¥temp> "keytool_path¥keytool" -export -alias idp -file idp.cer
  -keystore idp.jks
  ```

- SP 管理者が鍵ストアを生成してエクスポートします。

  ```
  # Generate Service Provider JKS from keytool
  c:¥temp> "keytool_path¥keytool" -genkey -keyalg RSA -alias SP_1
  -keystore SP_1.jks -storepass SP001 -validity 360 -keysize 2048
  # Export Service Provider certificate from JKS
  c:¥temp> "keytool_path¥keytool" -export -alias SP_1 -file SP_1.cer
  -keystore SP_1.jks
  ```

  次に、SP 管理者が証明書を IdP 管理者に送ります。

- IdP 管理者が SP 証明書を IdP サーバーにインポートします。

  ```
  # Import Service Provider certificate into IdP JKS
  c:¥temp> "keytool_path¥keytool" -import -alias SP_1
  -trustcacerts -file SP_1.cer -keystore idp.jks
  ```

「構成」ページでの構成プロパティーの設定

「設定」>「構成」ページで構成プロパティーを設定して、IBM Marketing Software にフェデレーテッド認証を構成します。

このタスクについて

次のカテゴリーで構成プロパティーを設定します。

- **IBM Marketing Platform** | セキュリティー |統合認証
- **IBM Marketing Platform** | セキュリティー |統合認証 | **partitions** | **partition[n]**

値の設定に関する説明については、各プロパティーのコンテキスト・ヘルプ、またはこのセクションの関連トピック・リンクを参照してください。

関連資料:

323 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | 統合認証』

324 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | 統合認証 | partitions | partition[n]』

サービス・プロバイダーとユーザーのオンボーディング

SP とユーザーをオンボーディングするには、IdP サーバー管理者が TP_MASTER テーブルに一時的なエントリーを作成する必要があります。

このタスクについて

SP をオンボーディングするためのサンプル SQL を以下に示します。

```
INSERT INTO TP_MASTER
 (TP_ID, TP_NAME, TP_INFO, KEY_ALIAS)
 VALUES
 ('SP_Id', 'SP display name', 'SP description', 'keystore alias name')
```

トラステッド・パーティーが IdP サーバーに登録された後、IdP サーバー管理者はフェデレーテッド・シングル・サインオンに参加するユーザーをマップすることができます。

ユーザー・マッピングは、2 つの SP 間で厳密に 1 対 1 でなければなりません。例えば、SP_A の User1 は、SP_B の 1 ユーザーのみにマップされなければなりません。ただし、この SP_A の User1 を、同じフェデレーションに含まれる SP_C の別のユーザーにマップすることはできます。

TP_MAPPING テーブルにユーザーを追加するための照会の例を以下に示します。

```
INSERT INTO TP_MAPPING
(TP_CLIENT_ID, TP_FOR_USER_ID, TP_SP_ID, TP_MAPPED_USER_ID, SAML_TOKEN)
VALUES
('SP1_Id', 'SP1_user_Id', 'SP2_Id', 'SP2_user_id','dummy1')
```

注: TP_SP_ID および TP_FOR_USER_ID のエントリーは、最小 4 文字、最大 24 文字の長さで、英数字、ハイフン、下線文字のみで構成されていなければなりません ([a-zA-Z0-9_-])。 SAML_TOKEN 列は null や重複を許さないため、この列には固有のダミー・エントリーを挿入してください。

IdP クライアント・ファサードを使用してトークンを生成してサービス・プロバイダーに渡す

ユーザーが認証された後に別の SP のサービスにアクセスする場合は、SP 側で次のコードを呼び出します。

このタスクについて

このコードはフェデレーテッド・トークンを生成します。

```
// One time properties to initialize the IdP client.
Properties properties = new Properties();
properties.put(IdPClient.IDP_SERVER_URL, "URL");
properties.put(IdPClient.IDP_CLIENT_CERTIFICATE_ISSUER, "URL");
properties.put(IdPClient.IDP_CLIENT_KEYSTORE_PATH, "JKS file path");
```

```
properties.put(IdPClient.IDP_CLIENT_KEYSTORE_PASSKEY, "JKS passkey");
properties.put(IdPClient.IDP_CLIENT_KEYSTORE_ALIAS, "Certificate alias");
// Get the IdP client factory singleton instance
//with the specified parameters.
IdPClientFactory clientFactory = IdPClientFactory.getInstance(properties);
// Get the partition specific client facade to do the assertion.
IdPClientFacade clientFacade = clientFactory.getIdPClientFacade(partition);
// Establish SSO Login with the IdP server
IdPClientToken token = clientFacade.doIdPLogin(clientId, forUserId, spId);
```

トークンが取得されたら、ターゲット SP に渡して、マップされたユーザーの役割と権限に基づいてターゲット SP のリソースにアクセスすることができます。

```
// Security token is validated at Service Provider side.
IdPClientAssertion assertion = spFacade.assertIdPToken(clientId, forUserId, spId,
token.getTokenId());
// Retrieve the principal from the assertion, if there is no exception.
String principal = assertion.getMappedUser();
```

クライアント・ファサードはマルチテナント対応なので、これを使用して各パーティションを別々に構成することができます。この機能を使用する場合は、各プロパティー名にクライアント ID を付加します。以下に例を示します。

```
properties.put(IdPClient.IDP_CLIENT_KEYSTORE_PATH +
".partition1", "JKS file path");
properties.put(IdPClient.IDP_CLIENT_KEYSTORE_PASSKEY +
".partition1", "JKS passkey");
properties.put(IdPClient.IDP_CLIENT_KEYSTORE_ALIAS +
".partition1", "Certificate alias");
```

リファレンス: RESTful サービス

この情報を、クライアント・ファサードの使用時に起こる問題のトラブルシューティングや、IBM が提供する IdP サーバーを使用した独自の SAML 2.0 実装の開発に利用してください。

REST API は XML データ・ペイロードを使用して実装されています。SAML アサーションは、デジタル署名付きで POST メソッドに直接渡されます。

XML ペイロードに基づいて、統一されたメソッド・アクセスを確保するため、およびセキュリティー・アサーションを実施するために、すべての verb で POST メソッドのみがサポートされます。 GET、PUT、DELETE などの他のメソッドは、エラー・メッセージを返します。次の表に、サポートされるユース・ケースを実装する verb を示します。

表 *35.* サポートされる *verb*

リソース	**POST**
`<idp>/saml/token/clientId/forUserId/spId/create`	新しい SAML トークンを生成します。
`<idp>/saml/token/clientId/forUserId/spId/validate`	既存の SAML トークンを検証します。
`<idp>/saml/token/clientId/forUserId/spId/delete`	既存の SAML トークンを削除します。

関連概念

このセクションには、SAML 2.0 ベースのフェデレーテッド・シングル・サインオンの IBM ExperienceOne 実装で使用されるテクノロジーに関する一般情報を記載しています。

Security Assertion Markup Language 2.0 (SAML 2.0)

SAML 2.0 は、セキュリティー・ドメイン間で認証データと許可データを交換するための SAML 規格の 1 つのバージョンです。SAML 2.0 は XML ベースのプロトコルであり、アサーションを含むセキュリティー・トークンを使用して、SAML 機関 (ID プロバイダー) と SAML 利用者 (SP) の間でプリンシパル (通常はエンド・ユーザー) に関する情報を受け渡します。 SAML 2.0 では、クロスドメインのシングル・サインオン (SSO) を含む、Web ベースの認証と許可のシナリオが可能です。これにより、複数の認証トークンをユーザーに配布することによる管理オーバーヘッドを減らすことができます。詳しくは、http://en.wikipedia.org/wiki/SAML_2.0 を参照してください。

ID プロバイダー (IdP)

ID アサーション・プロバイダーとも呼ばれる IdP は、システム内で対話したりサービスを提供したりするすべての SP のために ID 情報を発行します。この処理は、セキュリティー・レルム内でユーザーを明示的に認証する代わりにセキュリティー・トークンを検証する、認証モジュールによって実現されています。境界認証では、ユーザーは 1 回認証されるだけですみますが (シングル・サインオン)、アクセスする必要のあるシステムごとに、ID アサーション・プロバイダーで処理されるセキュリティー・トークンを渡す必要があります。詳しくは、http://en.wikipedia.org/wiki/Identity_provider を参照してください。

公開鍵暗号方式

非対称暗号方式とも呼ばれる暗号アルゴリズムであり、2 つの別々の鍵を必要とします。秘密鍵と公開鍵です。この鍵ペアの 2 つの部分は異なりますが、数学的にリンクされます。公開鍵は、非暗号化テキストを暗号化したりデジタル署名を検証したりするために使用されます。これに対して秘密鍵は、暗号文を暗号化解除したりデジタル署名を作成したりするために使用されます。詳しくは、http://en.wikipedia.org/wiki/Public-key_cryptography を参照してください。

第 8 章 SAML 2.0 シングル・サインオン

Marketing Platform は、SAML 2.0 ベースのシングル・サインオンをサポートしています。

このモードでは、標準の SAML 2.0 プロトコルに従っている社外および社内の任意の ID プロバイダーを使用して、IBM Marketing Software のユーザーを認証することができます。 ID プロバイダーが生成した SAML アサーションを使用して、Marketing Platform は、ユーザーにログインを許可します。したがって、この統合を行うためには、完全に機能する SAML 2.0 IdP サーバーが前提条件になります。

必要な構成プロパティーおよびメタデータ・ファイルをセットアップした後、Marketing Platform のログイン・ページでログインしようとしたユーザーは、組織の SAML 2.0 Identity Provider (IdP) サーバーによって認証されます。

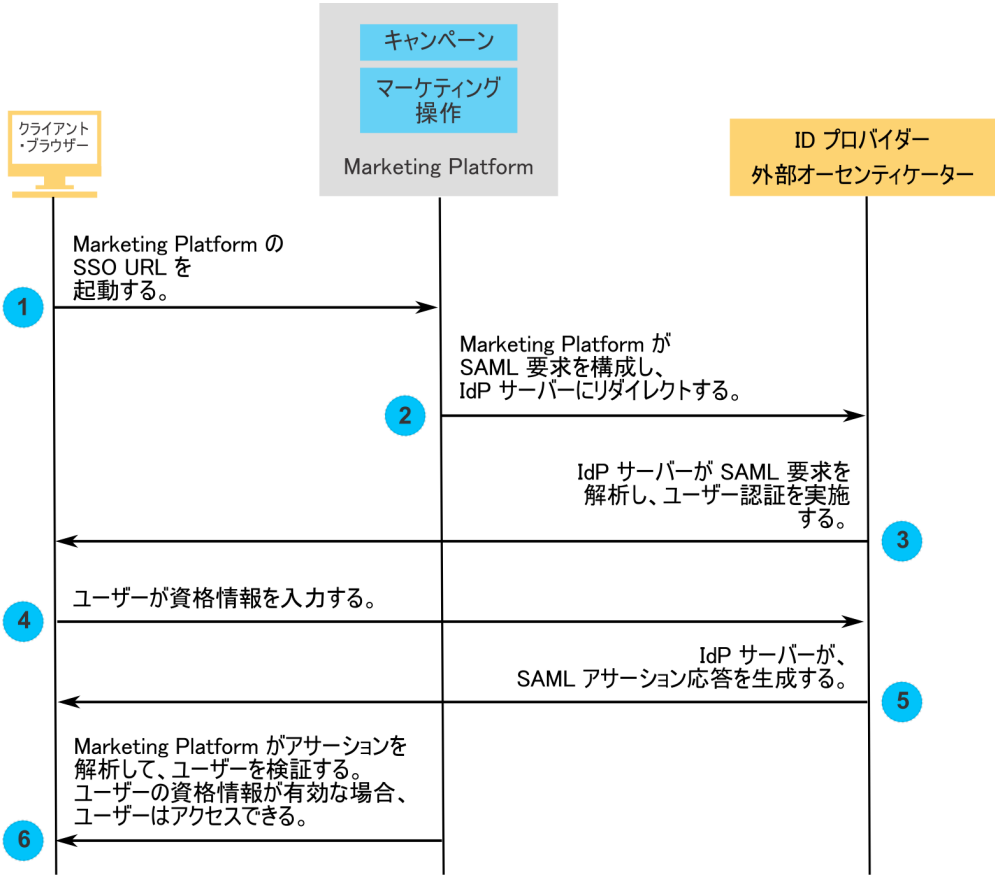
構成プロパティー「認証されたユーザーを **Marketing Platform** に追加する **(Add authenticated users to Marketing Platform)**」は、認証されたユーザーに Marketing Platform アカウントがない場合に、Marketing Platform アカウントを自動作成する機能を有効にします。それらのユーザーは、自動的にデフォルトのユーザー・グループ、**ExternalUsersGroup** に追加されます。このグループには最初は、**PlatformUser** 役割のみが割り当てられています。代わりに、ユーザーを追加するカスタム・グループを指定することもできます。

「認証されたユーザーを **Marketing Platform** に追加する **(Add authenticated users to Marketing Platform)**」プロパティーが有効でない場合、ユーザーがログインするためには、Marketing Platform アカウントが必要です。

Marketing Platform 管理者は、自動作成されたユーザーの IBM Marketing Software 製品に対するアクセス権限を、グループのメンバーシップと役割を管理することで構成できます。

IBM Marketing Software の SAML 2.0 ベースのシングル・サインオン・モードを、以下の図に示します。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017



SAML 2.0 シングル・サインオン実装時の動作

IBM Marketing Software における SAML 2.0 シングル・サインオンの実装は、次のような動作をします。

ログアウト

ログインしているユーザーがログアウトすると、IBM Marketing Software の標準ログアウト・ページにリダイレクトされます。ログアウト処理を完了させるために、ブラウザー・ウィンドウを閉じるようにユーザーに求めるメッセージが表示されます。

セッション・タイムアウト

ログインしたユーザーのアイドル状態が 30 分を超えた場合は、IBM Marketing Software の標準ログアウト・ページにリダイレクトされます。ログアウト処理を完了させるために、ブラウザー・ウィンドウを閉じるようにユーザーに求めるメッセージが表示されます。

このタイムアウト期間は、アプリケーション・サーバーで構成可能です。

正しくない SAML 構成

ユーザーがログインしようとしたときに、正しくない SAML 構成のためにエラーが発生した場合、ユーザーは、「ログイン失敗: 資格情報が誤っています。ブラウザー・ウィンドウを閉じて再試行してください。(Login Failed: Bad Credential. Please close the browser window and try again.)」というメッセージのエラー・ページにリダイレクトされます。

Platform でプロビジョンされていないが有効な IDP ユーザー

「認証されたユーザーを **Marketing Platform** に追加する **(Add authenticated users to Marketing Platform)**」プロパティーを無効にした場合、ユーザーがログインに使用した資格情報が IdP サーバーにとって有効であっても、そのユーザーの Marketing Platform アカウントが存在しない場合は、「ログイン失敗: 資格情報が誤っています。ブラウザー・ウィンドウを閉じて再試行してください。(Login Failed: Bad Credential. Please close the browser window and try again.)」という メッセージのエラー・ページにリダイレクトされます。

IDP と Marketing Platform の両方にユーザーが存在するが、その Marketing Platform パスワードが期限切れまたはリセットされている

Marketing Platform においてユーザー・パスワードが期限切れか、またはリセットされている場合、ユーザーは「ログイン失敗: 資格情報が誤っています。 ブラウザー・ウィンドウを閉じて再試行してください。(Login Failed: Bad Credential. Please close the browser window and try again.)」というメッセージのエラー・ページにリダイレクトされます。

構成プロセスのロードマップ: SAML 2.0 シングル・サインオン

この構成プロセス・ロードマップを使用して、IBM Marketing Software に SAML 2.0 シングル・サインオンを実装するために必要なタスクを大まかに確認してください。タスク列には、タスクの詳細が説明されているトピックへのリンク (ある場合) を示しています。

表 *36.* 構成プロセスのロードマップ*: SAML 2.0* シングル・サインオン

タスク	情報
Marketing Platform を、IdP サーバーのサービス・プロバイダーとして追加します。詳細については、IdP サーバーの資料を参照してください。	• IdP サーバーで Marketing Platform に割り当てられたアプリケーション ID をメモします。後で構成プロパティーの値として使用します。 • 鍵ストア・ファイルのパスワードをメモします。後で作成するデータ・ソースに含めるパスワードの値として使用します。
122 ページの『メタデータ・ファイルのセットアップ』	SAML 2.0 IdP サーバーによって生成された XML メタデータ・ファイルをセットアップします。
122 ページの『SAML 2.0 構成プロパティーの設定』	「設定」>「構成」ページで、必要な構成プロパティーを設定します。

表 36. 構成プロセスのロードマップ: *SAML 2.0* シングル・サインオン (続き)

タスク	情報
『SAML シングル・サインオンのためのデータ・ソースのセットアップ』	鍵ストア・ファイルのパスワードを保持するためのデータ・ソースをセットアップします。

メタデータ・ファイルのセットアップ

IdP サーバーは、SAML 2.0 シングル・サインオンの構成と統合の詳細情報を含むメタデータ・ファイルを生成します。

このタスクについて

IdP サーバーのメタデータ・ファイルをコピーし、Marketing Platform がインストールされているサーバー上に置いてください。構成プロパティーの値を設定する際に必要な以下の情報をメモしておきます。

- Marketing Platform サーバー上のメタデータ・ファイルの場所。
- メタデータ・ファイルの最初の XML 宣言に含まれている *entityID* の値。

SAML 2.0 構成プロパティーの設定

SAML 2.0 シングル・サインオンを構成するには、「構成」>「設定」ページで各プロパティーを設定します。

このタスクについて

以下のプロパティーを設定します。

- 「ログイン方法」プロパティーの値を「**SAML 2.0**」に設定します。

  このプロパティーは、「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー」ノードの下にあります。

  この変更を有効にするため、Marketing Platform Web アプリケーションを停止してから再始動します。
- 必要に応じて、「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | **SAML 2.0**」ノードの下にあるプロパティーを設定します。

  詳しくは、それらのプロパティーのコンテキスト・ヘルプを参照してください。

関連資料:

308 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | SAML 2.0』

SAML シングル・サインオンのためのデータ・ソースのセットアップ

鍵ストア・ファイルのパスワードを、Marketing Platform のデータ・ソースに保存します。

手順

1. 管理ユーザーとして IBM Marketing Software にログインし、「設定」>「ユーザー」ページに移動します。
2. ユーザーを選択または新規作成し、以下のようにそのユーザー用にデータ・ソースを構成します。
   - データ・ソース: 「設定」>「構成」ページの「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | **SAML 2.0**」で、「鍵ストア資格情報データ・ソース **(Key store credential data source)**」プロパティーに設定されている値を入力します。
   - データ・ソース・ログイン: 「設定」>「構成」ページの「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | **SAML 2.0**」で、「鍵ストア資格情報ホルダー **(Key store credential holder)**」プロパティーに設定されている値を入力します。
   - データ・ソース・パスワード: IdP サーバーで Marketing Platform のために使用する鍵ストア・ファイルのパスワードを入力します。

   複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。または、このステップで platform_admin ユーザー・アカウントを使用することもできます。このユーザーはすべてのパーティションのメンバーであるため、すべてのパーティションでデータ・ソースを使用できます。

サンプル SAML 2.0 IdP アサーション

このセクションでは、SAML 2.0 の要求と応答の例を示します。

Marketing Platform によって生成される SAML 2.0 要求の例

Marketing Platform は、このセクションに示す SAML 2.0 要求を生成し、OpenSAML Base64 API を使用してエンコードします。この要求は、標準的な他の Base64 デコーダーと互換性があります。エンコードされた要求は、IdP サーバーに送られます。

```
<saml2p:AuthnRequest
       xmlns:saml2p="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:protocol"
       AssertionConsumerServiceURL="http://example.com"
       Destination="http://example.com"
       ForceAuthn="false"
       ID="_0ff13d123291170422ff5e945e9a209e25f3404916451a4aaf"
       IsPassive="false"
       IssueInstant="2015-09-02T14:10:24.376Z"
       ProtocolBinding="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:bindings:HTTP-POST"
       Version="2.0">
              <saml2:Issuer xmlns:saml2="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:assertion">
                     IdP_ID
              </saml2:Issuer>
              <saml2p:NameIDPolicy
                     AllowCreate="true"
                     Format="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:nameid-format:transient"
                     SPNameQualifier="SERVICE_PROVIDER_ID"/>
              <saml2p:RequestedAuthnContext
                     Comparison="exact">
                     <saml2:AuthnContextClassRef
                            xmlns:saml2="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:assertion">
                            urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:ac:classes:
```

```
                        PasswordProtectedTransport
                    </saml2:AuthnContextClassRef>
                </saml2p:RequestedAuthnContext>
</saml2p:AuthnRequest>
```

IdP サーバーによって生成される SAML 2.0 応答の例

```
<samlp:Response
        xmlns:samlp="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:protocol"
        Destination="http://serviceprovider.com/location"
                ID="id-wmpfMj-fMh0ihGYJ73rXPTEq7o8-"
        InResponseTo="s2e211c5bfc0200fc48819f381f17d56ca0b5c780f"
        IssueInstant="2015-09-02T14:10:24.376Z"
        Version="2.0">
        <saml:Issuer xmlns:saml="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:assertion"
                Format="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:nameid-format:entity">
                Identity Provider
        </saml:Issuer>
        <samlp:Status>
                <samlp:StatusCode Value="urn:oasis:names:tc:
                        SAML:2.0:status:Success" />
        </samlp:Status>
        <saml:Assertion xmlns:saml="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:assertion"
                ID="idzQO7U5TzPLLL4dlqTqRt9VIOlYg-"
                IssueInstant="2015-09-02T14:10:24.376Z"
                Version="2.0">
                <saml:Issuer Format="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:
                        nameid-format:entity">
                                Identity Provider
                </saml:Issuer>
                <dsig:Signature xmlns:dsig="http://www.w3.org/2000/09/xmldsig#">
                        <dsig:SignedInfo>
                                <dsig:CanonicalizationMethod
                                   Algorithm="http://www.w3.org/2001/10/xmlexc-c14n#" />
                                <dsig:SignatureMethod
                                   Algorithm="http://www.w3.org/2000/09/xmldsig#
                                              rsa-sha1" />
                                <dsig:Reference URI=
                                       "#id-zQO7U5TzPLLL4dlqTqRt9VIOlYg-" />
                                      <dsig:Transforms>
                                          <dsig:Transform Algorithm=
                                             "http://www.w3.org/2000/09/xmldsig#
                                                     enveloped-signature" />
                                          <dsig:Transform Algorithm=
                                          "http://www.w3.org/2001/10/xml-exc-c14n#" />
                                      </dsig:Transforms>
                                      <dsig:DigestMethod Algorithm=
                                          "http://www.w3.org/2000/09/xmldsig#sha1" />
                                      <dsig:DigestValue>
                                              XXX=
                                      </dsig:DigestValue>
                                </dsig:Reference>
                        </dsig:SignedInfo>
                        <dsig:SignatureValue>xxx</dsig:SignatureValue>
                </dsig:Signature>
                <saml:Subject>
                        <saml:NameID Format=
                                "urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:nameid-format:
                                       transient"
                                NameQualifier="Test Identity Provider"
                                SPNameQualifier="TEST">
                                id-N2EIOvbwaVflUP-cKTzgv8dGYLg-
                        </saml:NameID>
                        <saml:SubjectConfirmation
                                Method="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:cm:bearer">
                                <saml:SubjectConfirmationData
                                  InResponseTo=
```

```
                                "s2e211c5bfc0200fc48819f381f17d56ca0b5c780f"
                        NotOnOrAfter="2015-09-02T14:10:24.376Z"
                        Recipient="http://serviceprovider.com/location" />
                </saml:SubjectConfirmation>
                </saml:Subject>
        <saml:Conditions
                NotBefore="2015-09-02T14:10:24.376Z"
                NotOnOrAfter="2015-09-02T14:10:49.376Z">
                <saml:AudienceRestriction>
                        <saml:Audience>TEST</saml:Audience>
                </saml:AudienceRestriction>
        </saml:Conditions>
        <saml:AuthnStatement
                AuthnInstant="2015-09-02T14:10:24.376Z"
                SessionIndex="id-1FTYalkjaVTWwHrFRkIRevHfAxk-"
                SessionNotOnOrAfter="2015-09-02T14:10:38.376Z">
                <saml:AuthnContext>
                        <saml:AuthnContextClassRef>
                        urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:ac:classes:
                         PasswordProtectedTransport
                        </saml:AuthnContextClassRef>
                </saml:AuthnContext>
        </saml:AuthnStatement>
        <saml:AttributeStatement xmlns:x500=
            "urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:profiles:
            attribute:X500"
            xmlns:xs="http://www.w3.org/2001/XMLSchema"
            xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance">
            <saml:Attribute
                    Name="UserIdentifier"
                    NameFormat="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:
                            attrnameformat:basic">
                  <saml:AttributeValue xsi:type="xs:string">
                            user@example.com
                    </saml:AttributeValue>
            </saml:Attribute>
        </saml:AttributeStatement>
    </saml:Assertion>
</samlp:Response>
```

サンプル IdP メタデータ

このセクションでは、IdP サーバーによって生成されるメタデータ・ファイルの例を示します。

IdP サーバーによって生成されるメタデータ・ファイルの例

IdP サーバーは、SAML 2.0 シングル・サインオンの構成と統合の詳細情報を含むメタデータ・ファイルを生成します。このファイルを、Marketing Platform で使用します。 IdP サーバーによって生成されたファイルのコピーを、Marketing Platform サーバー上に置いてください。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
    <md:EntityDescriptor xmlns:md="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:metadata"
        entityID="ENTITY_ID">
        <md:IDPSSODescriptor
            WantAuthnRequestsSigned="false"
            protocolSupportEnumeration="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:
                protocol">
            <md:KeyDescriptor use="signing">
                <KeyInfo xmlns="http://www.w3.org/2000/09/xmldsig#">
                    <X509Data>
                    <X509Certificate>
                        __certificate__
```

```
                        </X509Certificate>
                        </X509Data>
                </KeyInfo>
        </md:KeyDescriptor>
        <md:KeyDescriptor  use="encryption">
                <KeyInfo
                        xmlns="http://www.w3.org/2000/09/xmldsig#">
                        <X509Data>
                                <X509Certificate>
                                        __certificate__
                                </X509Certificate>
                        </X509Data>
                </KeyInfo>
                <md:EncryptionMethod
                        Algorithm=
                        "http://www.w3.org/2001/04/xmlenc#rsa-1_5"/>
        </md:KeyDescriptor>
        <md:ArtifactResolutionService
                Binding="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:bindings:SOAP"
                Location="__location__" index="0"
                isDefault="true"/>
        <md:ArtifactResolutionService
                Binding="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:bindings:SOAP"
                Location="__location__" index="1"/>
        <md:SingleLogoutService
                Binding="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:bindings:HTTP-POST"
                Location="__location__"/>
        <md:SingleLogoutService Binding=
                "urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:bindings:SOAP"
                Location="__location__"/>
        <md:ManageNameIDService
                Binding="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:bindings:HTTP-POST"
                Location="__location__"/>
        <md:ManageNameIDService
                Binding="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:bindings:SOAP"
                Location="__location__"/>
        <md:NameIDFormat>urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:
                nameid-format:persistent
        </md:NameIDFormat>
        <md:NameIDFormat>urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:
                nameid-format:transient
        </md:NameIDFormat>
        <md:NameIDFormat>
                urn:oasis:names:tc:SAML:1.1:
                nameid-format:emailAddress
        </md:NameIDFormat>
        <md:NameIDFormat>urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:
                nameid-format:encrypted</md:NameIDFormat>
        <md:SingleSignOnService Binding="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:
                bindings:HTTP-POST" Location="__location__"/>
</md:IDPSSODescriptor>
<md:Organization>
        <md:OrganizationName xml:lang="en">
                organization_name
        </md:OrganizationName>
        <md:OrganizationDisplayName xml:lang="en">
                organization_display_name
        </md:OrganizationDisplayName>
        <md:OrganizationURL xml:lang="en"/>
</md:Organization>
<md:ContactPerson contactType="technical">
        <md:Company>
                company
        </md:Company>
        <md:GivenName/>
        <md:SurName/>
```

```
                    <md:EmailAddress/>
                    <md:TelephoneNumber/>
            </md:ContactPerson>
</md:EntityDescriptor>
```

第 9 章 アプリケーション間の JWT 認証の構成

Journey Designer+Campaign では、JSON Web トークン (JWT) 認証が使用されます。 JWT 認証によって、アプリケーション間のシングル・サインオンが可能になります。

このタスクについて

呼び出し側のアプリケーションから出される要求には、JWT トークンが含まれています。 Marketing Platform は、公開鍵サービス (PKS) を呼び出してその要求を検証します。JWT トークンが検証された後、要求が認証され、許可されます。

この手順は、10.0.0.1 フィックスパックが適用されている場合にのみ当てはまります。バージョン 10.0.0.0 では、JWT 認証は PKS を使用しません。

JWT 認証を有効にするには、以下の手順に従って、証明書をインポートし、構成プロパティーを設定してください。

手順

1. 公開鍵サービス (PKS) サイトから証明書を取得します。
2. Java keytool を使用して、証明書をアプリケーション・サーバーの JVM にインポートします。別の JVM でアプリケーションを実行する場合は、各アプリケーション・サーバー JVM に証明書をインポートします。

   次に例を示します。

   ```
   /keytool -import -file PKS_Certificate.cer -alias PKS_alias -keystore
   AppServer_JRE_home/lib/security/cacerts
   ```

   パスワードを入力します。keytool のデフォルトのパスワードは `changeit` です。
3. 「設定」>「構成」ページの「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | **JWT** 認証」で、JWT 構成プロパティーを設定します。

関連資料:

326 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | JWT 認証 (JWT authentication)』

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

第 10 章 IBM Marketing Software と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオン

組織で IBM Digital Analytics を使用する場合、Digital Analytics と IBM Marketing Software との間でシングル・サインオンを有効にできます。

シングル・サインオンを使用すると、ユーザーは、IBM Marketing Software ユーザー・インターフェースから Digital Analytics レポートに移動する際に、ログインを求められることがなくなります。

また、IBM Marketing Software ダッシュボードで Digital Analytics レポートを参照する場合、シングル・サインオンでユーザーはこうしたレポートを表示できるようになります (Digital Analytics でレポートに対するアクセス権がある場合)。

IBM Marketing Software と IBM Digital Analytics との間でシングル・サインオンを有効にするための 2 つのオプション

シングル・サインオンを有効にするには、2 つのオプションのいずれかを選択できます。

- Digital Analytics を構成して、IBM Marketing Software ユーザーが初めて Digital Analytics にナビゲートするときに自動的に Digital Analytics ユーザー・アカウントが作成されるようにできます。

  すべての IBM Marketing Software ユーザーが Digital Analytics でシングル・サインオンを使用するようにしたい場合には、このオプションを選択することを推奨します。
- 既存の各ユーザーの Digital Analytics ログイン名を IBM Marketing Software のそれぞれの詳細ページに追加することで、IBM Marketing Software ユーザー・アカウントをシングル・サインオン用に構成できます。

  このオプションを選択する場合、Digital Analytics に対するアクセスを要求するユーザーには Digital Analytics アカウントがなければなりません。

  一部の IBM Marketing Software ユーザーだけに Digital Analytics でシングル・サインオンを使用させる場合には、このオプションを選択することを推奨します。

シングル・サインオン・ユーザーの Digital Analytics における権限

Digital Analytics で自動アカウント作成オプションを選択しない場合には、シングル・サインオン・ユーザーが Digital Analytics で持つ権限は、直接 Digital Analytics にログインした場合と同じです。

Digital Analytics で自動アカウント作成オプションを選択した場合には、シングル・サインオン・ユーザーが Digital Analytics で持つ権限は以下のとおりです。

- デフォルトでは、ユーザーは、管理者が自動作成されるすべてのユーザー用に構成した Digital Analytics グループに付与された権限を持ちます。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

管理者は、このグループに関連付けられた権限を変更できます。

- また管理者は、既に Digital Analytics アカウントを持つユーザーの自動アカウント作成をオーバーライドできます。特定のユーザーに関してオーバーライドが行われると、そのユーザーの権限は、Digital Analytics に直接ログインした場合と同じになります。

サーバー・クロックの調整

Marketing Platform が配置されているサーバー上のクロックは、Digital Analytics サーバー・クロックの時刻と一致しなければなりません。シングル・サインオンでは、Digital Analytics サーバーで許容されるサーバー・クロック時刻との誤差は最大で 15 分 (900 秒) までです。

ベスト・プラクティスとして、サーバー・クロックを同期してください。確実に同期するには、Network Time Protocol (NTP) を使用してください。

サーバー・クロックを同期できず、クロック間の誤差が 15 分以上になっている可能性がある場合には、Marketing Platform の「Coremetrics」カテゴリーの「クロック・スキュー調整 **(秒)**」構成プロパティーを、クロック間の誤差を反映する数値に設定できます。

自動ユーザー・アカウント作成による IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ

この手順は、自動ユーザー・アカウント作成を使用して IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンをセットアップする際に使用します。

手順

1. IBM Marketing Software と Digital Analytics との間でシングル・サインオンに使用する Digital Analytics クライアント ID を判別します。

   後のステップで必要となるので、このクライアント ID を控えておきます。
2. 先ほどのステップで選択したクライアント ID に対するアクセス権を持つ管理ユーザーとして Digital Analytics にログインし、「管理」リンクをクリックしてから、「グローバル・ユーザー認証」ページに移動します。
   - 「**IBM Enterprise Marketing Management** 共有秘密鍵」フィールドに、このフィールドの横の指示に記されている規則に準拠した文字列を入力します。

     後のステップで必要になるので、この文字列を控えておきます。
   - 「自動ユーザー・アカウント作成」の下にある「有効」をクリックします。
   - 自動作成したすべてのユーザーを入れるユーザー・グループを選択します。

     このグループは、少なくとも以下の Web Analytics 権限がなければなりません。
     - 「ダッシュボード」>「標準ダッシュボードの表示」
     - 「レポート」>「サイト指標」

– 「レポート」>「インサイト」

3. 管理ユーザーとして IBM Marketing Software にログインし、「設定」>「ユーザー」ページに移動します。
4. ユーザーを選択または新規作成し、以下のようにそのユーザー用にデータ・ソースを構成します。
   - 「データ・ソース」 - 名前を入力します。
   - 「データ・ソース・ログイン」 - ステップ 1 で控えたクライアント ID を入力します。
   - 「データ・ソース・パスワード」 - ステップ 2 で控えた共有秘密鍵を入力します。

   複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。

   または、このステップで platform_admin ユーザー・アカウントを使用することもできます。このユーザーはすべてのパーティションのメンバーであるため、すべてのパーティションでデータ・ソースを使用できます。
5. Marketing Platform で、「設定」>「ユーザー・グループ」ページに移動し、以下を実行します。
   - 新規グループを作成し、そのグループに CMUser 役割を追加します。
   - シングル・サインオンを使用する各ユーザーを、そのグループのメンバーにします。

   複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。
6. Marketing Platform で、「設定」>「構成」ページに移動し、以下のように構成プロパティーを設定します。

表 37. *Digital Analytics* でシングル・サインオンを有効にするための構成プロパティー

プロパティー	値
Digital Analytics | **IBM Digital Analytics** を使用可能にする	True
Digital Analytics | 統合 | **partitions** | **partition[n]** | **IBM Digital Analytics** アカウントの **Platform** ユーザー	ステップ 4 で使用した Marketing Platform ユーザー・アカウントのログイン名を入力します。
Digital Analytics | 統合 | **partitions** | **partition[n]** | **IBM Digital Analytics** アカウントのデータ・ソース	ステップ 4 で作成したデータ・ソースの名前を入力します。

複数のパーティションがある場合、「**Digital Analytics** \| 統合 \| **partition** \| **partitionTemplate**」を使用して、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれるパーティションごとに、一連の構成プロパティーを作成する必要があります。

テンプレートを使用して作成するカテゴリー名は、対応する Campaign パーティションの名前と正確に一致しなければなりません。

7. 自動アカウント作成をオーバーライドしたいユーザーに関しては、以下を実行します。
   - Marketing Platform で、「設定」>「ユーザー」ページに移動します。
   - ユーザーの Digital Analytics ログイン名を、ユーザーの詳細ページにある「**Digital Analytics** ユーザー名」フィールドに入力します。

   このフィールドが有効なのは、Digital Analytics アカウントを既に持っているユーザーのみです。

   注**:** このログイン名のアカウントが Digital Analytics に存在しない場合には、ユーザーの Marketing Platform ログイン名ではなく、ここで入力した名前でユーザーのアカウントが作成されます。
8. Digital Analytics でシングル・サインオンを行うために Web アプリケーション・サーバーを構成します。

関連概念:

332 ページの『Digital Analytics 構成プロパティー』

関連タスク:

136 ページの『Digital Analytics と IBM Marketing Software の間のシングル・サインオンのための WebLogic の構成』

136 ページの『Digital Analytics と IBM Marketing Software の間のシングル・サインオンのための WebSphere の構成』

手動ユーザー・アカウント作成による IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ

この手順は、手動ユーザー・アカウント作成を使用して IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンをセットアップする際に使用します。

手順

1. IBM Marketing Software と Digital Analytics との間でシングル・サインオンに使用する Digital Analytics クライアント ID を判別します。

   後のステップで必要となるので、このクライアント ID を控えておきます。
2. 先ほどのステップで選択したクライアント ID に対するアクセス権を持つ管理ユーザーとして Digital Analytics にログインし、「管理」リンクをクリックしてから、「グローバル・ユーザー認証」ページに移動します。
   - 「**IBM Enterprise Marketing Management** 共有秘密鍵」フィールドに、このフィールドの横の指示に記されている規則に準拠した文字列を入力します。

     後のステップで必要になるので、この文字列を控えておきます。
   - 「自動ユーザー・アカウント作成」の下にある「無効」をクリックします。
3. 管理ユーザーとして IBM Marketing Software にログインし、「設定」>「ユーザー」ページに移動します。

4. ユーザーを選択または新規作成し、以下のようにそのユーザー用にデータ・ソースを構成します。
   - 「データ・ソース」 - 名前を入力します。
   - 「データ・ソース・ログイン」 - ステップ 1 で控えたクライアント ID を入力します。
   - 「データ・ソース・パスワード」 - ステップ 2 で控えた共有秘密鍵を入力します。

   複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。

   または、このステップで platform_admin ユーザー・アカウントを使用することもできます。このユーザーはすべてのパーティションのメンバーであるため、すべてのパーティションでデータ・ソースを使用できます。
5. Marketing Platform で、「設定」>「ユーザー・グループ」ページに移動し、以下を実行します。
   - 新規グループを作成し、そのグループに DMUser 役割を追加します。
   - シングル・サインオンを使用する各ユーザーを、そのグループのメンバーにします。

   複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。
6. Marketing Platform で、「設定」>「構成」ページに移動し、以下のように構成プロパティーを設定します。

表 38. *Digital Analytics* でシングル・サインオンを有効にするための構成プロパティー

プロパティー	値
Digital Analytics | **IBM Digital Analytics** を使用可能にする	True
Digital Analytics | 統合 | **partitions** | **partition[n]** | **IBM Digital Analytics** アカウントの **Platform** ユーザー	ステップ 4 で使用した Marketing Platform ユーザー・アカウントのログイン名を入力します。
Digital Analytics | 統合 | **partitions** | **partition[n]** | **IBM Digital Analytics** アカウントのデータ・ソース	ステップ 4 で作成したデータ・ソースの名前を入力します。

   複数のパーティションがある場合、「**Digital Analytics** \| 統合 \| **partition** \| **partitionTemplate**」を使用して、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれるパーティションごとに、一連の構成プロパティーを作成する必要があります。

   テンプレートを使用して作成するカテゴリー名は、対応する Campaign パーティションの名前と正確に一致しなければなりません。
7. Marketing Platform で、「設定」>「ユーザー」ページに移動します。
8. シングル・サインオンを有効にするユーザーごとに、ユーザーの Digital Analytics ログイン名を、ユーザーの「プロパティーの編集」ページの「**IBM Digital Analytics** ユーザー名」フィールドに入力します。

注: IBM Marketing Software と Digital Analytics にまったく同じログイン名のユーザーが存在する場合、このステップは実行する必要はありません。

9. Digital Analytics でシングル・サインオンを行うために Web アプリケーション・サーバーを構成します。

関連概念:

332 ページの『Digital Analytics 構成プロパティー』

関連タスク:

『Digital Analytics と IBM Marketing Software の間のシングル・サインオンのための WebLogic の構成』

『Digital Analytics と IBM Marketing Software の間のシングル・サインオンのための WebSphere の構成』

Digital Analytics と IBM Marketing Software の間のシングル・サインオンのための WebLogic の構成

ログインしなくてもダッシュボード内の Digital Analytics レポートをユーザーが閲覧できるようにするには、Marketing Platform が配置された WebLogic ドメインで以下の手順を実行します。

手順

1. WebLogic ドメイン・ディレクトリーの下の `bin` ディレクトリーにある `setDomainEnv` スクリプトを、開きます。
2. `-Dweblogic.security.SSL.ignoreHostnameVerification=true` を `JAVA_OPTIONS` に追加します。

関連タスク:

132 ページの『自動ユーザー・アカウント作成による IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ』

134 ページの『手動ユーザー・アカウント作成による IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ』

Digital Analytics と IBM Marketing Software の間のシングル・サインオンのための WebSphere の構成

ログインしなくてもダッシュボード内の Digital Analytics レポートをユーザーが閲覧できるようにするには、Marketing Platform が配置された WebSphere のセルとノードで以下の手順を実行します。

手順

1. WebSphere 管理コンソールにログインします。
2. 「セキュリティー」を展開し、「**SSL** 証明書と鍵の管理」をクリックします。
3. 「構成設定」の「エンドポイント・セキュリティー構成の管理」をクリックします。

4. Marketing Platform が配置されたセルおよびノードに関するアウトバウンド設定に移動します。
5. 「関連項目」の下で、「鍵ストアおよび証明書」をクリックして、**NodeDefaultTrustStore** 鍵ストアをクリックします。
6. 「追加プロパティー」の下で、「署名者証明書」および「ポートから取得」をクリックします。

   以下のように、フィールドに情報を入力します。

   - ホスト名: `welcome.coremetrics.com`
   - ポート: `443`
   - 別名: `coremetrics_cert`

関連タスク:

132 ページの『自動ユーザー・アカウント作成による IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ』

134 ページの『手動ユーザー・アカウント作成による IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ』

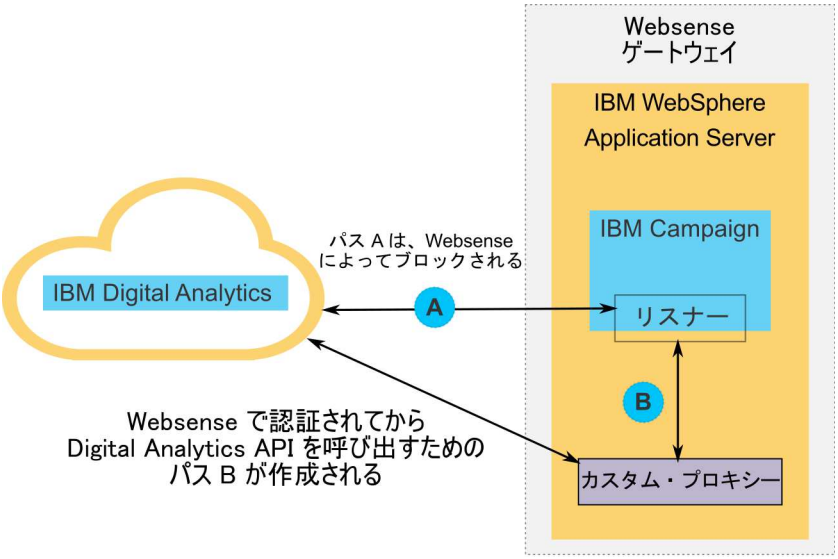
カスタム・プロキシーを使用した Digital Analytics と Websense の統合

Marketing Platform には、Websense が環境の必須コンポーネントである場合に、オンプレミスでホストされている Campaign をクラウドの Digital Analytics に統合するためのカスタム・プロキシーが用意されています。

カスタム・プロキシーは、WebSphere Application Server でのみサポートされます。

カスタム・プロキシーをインストールした後に、シングル・サインオンおよび Digital Analytics と Campaign の間の統合を構成できます。

カスタム・プロキシーは、フォワード・プロキシーとして動作する Java サーブレット実装です。これは、Campaign リスナーと Digital Analytics の間に投入されます。カスタム・プロキシーは、Campaign リスナーが Digital Analytics API を呼び出すためのエンドポイントとして動作します。内部的には、カスタム・プロキシーは、Websense コンテンツ・ゲートウェイで認証を受けた後に、ネットワーク外の API を安全に呼び出します。



WebSphere へのカスタム・プロキシーの配置

この手順は、カスタム・プロキシーをインストールする場合に実行します。このカスタム・プロキシーは、WebSphere Application Server でのみサポートされています。

このタスクについて

ProxyServer アプリケーションは、Campaign を配置したのと同じ WebSphere プロファイルに配置することも、別の WebSphere プロファイルを使用することもできます。

手順

1. `ProxyServer.war` ファイルを、WebSphere サーバーからアクセス可能な場所にコピーします。

   `ProxyServer.war` ファイルは、Marketing Platform インストール済み環境の `tools¥lib` ディレクトリー内にあります。
2. 以下のガイドラインに従って、`ProxyServer.war` ファイルを配置します。
   - 「詳細 - インストールのすべてのオプションおよびパラメーターを表示 **(Detailed - Show all installation options and parameters)**」のインストール・パスを選択します。
   - 任意のアプリケーション名を指定できます。
   - 「**JavaServer Pages** ファイルのプリコンパイル」を選択する必要はありません。
   - 「サーブレットのパラメーターの初期設定 (Initialize parameters for servlets)」ページで、以下のように各フィールドにデータを入力します。
     - **proxy_host**: WebSense サーバーのホスト URL または IP アドレス。
     - **proxy_port**: Websense サーバーのポート番号
     - **proxy_username**: Websense 認証のユーザー名
     - **Proxy_password**: Websense 認証のパスワード

– **target_url**: Campaign で既に構成した、Digital Analytics のエンドポイント URL

- 「Web モジュールのコンテキスト・ルートをマップ」ページで、コンテキスト・ルートを `proxy` に設定します。
- 配置が完了したら、ブラウザーで `http://WebSphere_host:Port/proxy` を指定して ProxyServer アプリケーションにアクセスします。

  「IBM OCM Secure Proxy Server V.x」というメッセージが表示されるはずです。

WebSphere にアウトバウンド・アクセスがない場合の Digital Analytics 証明書のインポート

この手順は、WebSphere に Digital Analytics サーバーへのアウトバウンド・アクセスがない場合に使用します。

手順

1. Digital Analytics サイトからデジタル証明書を取り出します。

   証明書を取り出すために、Digital Analytics URL に移動し、ブラウザーのアドレス・フィールドのロック・アイコンをクリックします。ブラウザーから、証明書をダウンロードできるウィンドウが開かれます。
2. java keytool を使用して、証明書を WebSphere JVM にインポートします。

   例 (改行を追加しています):

   ```
   /keytool -import -file DA_Certificate.cer
   -alias da_alias
   -keystore WebSphere_JRE_home/lib/security/cacerts
   ```

   パスワードを入力します。 keytool のデフォルトのパスワードは changeit です。
3. WebSphere 管理コンソールで、以下のカスタム・プロパティーを追加します。
   - javax.net.ssl.trustStore: *WebSphere_JRE_home*/lib/security/cacerts
   - javax.net.ssl.trustStorePassword: *your_password*
   - javax.net.ssl.trustStoreType: jks

WebSphere にアウトバウンド・アクセスがある場合の Digital Analytics 証明書のインポート

この手順は、WebSphere に Digital Analytics サーバーへのアウトバウンド・アクセスがある場合に使用します。

手順

1. WebSphere 管理コンソールで、「セキュリティー」を展開し、「**SSL** 証明書および鍵管理」をクリックします。
2. 「構成設定」の「エンドポイント・セキュリティー構成の管理」をクリックします。
3. 該当するアウトバウンド構成を選択して、**(**セル**):..Node0xCell:(**ノード**):..Node0x** 管理スコープに移動します。

4. 「関連項目」で、「鍵ストアおよび証明書」をクリックし、**NodeDefaultTrustStore** 鍵ストア (または WebSphere Application Server で使用した鍵ストア) をクリックします。
5. 「追加プロパティー」で、「署名者証明書」および「ポートから取得」をクリックします。
   a. 「ホスト」フィールドに、Digital Analytics サーバー名を入力します。

      例えば、`export.coremetrics.com` のようにします。
   b. 「ポート」フィールドに、`443` と入力します。
   c. 「別名」フィールドに別名を入力します。
6. 「署名者情報の取得」をクリックし、証明書情報が、信頼できる証明書のものであることを確認します。 .
7. 構成を適用し、保存します。

次のステップ

カスタム・プロキシー・サーバーをインストールして Digital Analytics 証明書をインポートしたら、次のステップは、シングル・サインオンを有効にし、Digital Analytics と Campaign の間の統合を構成することです。

このタスクについて

環境のセットアップを完了させるために、以下の手順を実行します。

- 「*IBM Marketing Platform* 管理者ガイド」の『*IBM Marketing Software* と *IBM Digital Analytics* の間のシングル・サインオン』の章 の説明に従って、シングル・サインオンをセットアップします。
- 「*IBM Campaign* 管理者ガイド」の『他の IBM 製品との IBM Campaign 統合』の章の説明に従って、統合をセットアップします。

  重要**:** 統合の手順には、「キャンペーン | パーティション | パーティション**[n]** | **Coremetrics**」の `ServiceURL` 構成プロパティーの設定も含まれます。カスタム・プロキシーを使用する場合は、このプロパティーを `http://`*`WebSphere_host:Port`*`/proxy` に設定し、Marketing Platform Web アプリケーションを再始動する必要があります。

関連資料:

418 ページの『Campaign | partitions | partition[n] | Coremetrics』

第 11 章 IBM Marketing Software と Windows Active Directory の統合

Marketing Platform は、Windows Active Directory サーバーまたは別の LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) サーバーと統合するように構成することができます。 IBM Marketing Software をディレクトリー・サーバーと統合することによって、ユーザーとグループを 1 つの集中化された場所に維持しておくことができます。統合は、企業の権限ポリシーを IBM Marketing Software アプリケーションに拡張するための柔軟なモデルを提供します。統合によって、サポート・コスト、およびアプリケーションを実稼働環境に配置するために必要な時間が減少します。

サポートされるディレクトリー・サーバーのリストについては、「*Recommended Software Environments and Minimum System Requirements*」という資料を参照してください。

Active Directory 統合機能

Marketing Platform は、Windows Active Directory との統合により、このセクションで説明する機能を提供します。

Active Directory 統合による認証

IBM Marketing Software アプリケーションは、ユーザー権限情報を得るために Marketing Platform への照会を実行します。

- Marketing Platform の旧バージョンでは、NTLMv1 ベースの Microsoft Windows 統合ログインがサポートされていました。 Microsoft Windows 2008 サーバーおよび Microsoft Windows 7 の登場により、デフォルトの最小標準が変更され、NTLMv2 プロトコルが必要になりました。 NTLMv2 は、Marketing Platform でネイティブにはサポートされていません。

  しかし、NTLMv2 認証を構成すると、企業ネットワークにログインしたユーザーは、すべての IBM Marketing Software アプリケーションで認証されるため、IBM Marketing Software アプリケーションにログインするためのパスワードが不要になります。ユーザーの認証は Windows ログインに基づいて行われ、アプリケーションのログイン画面はバイパスされます。

  NTLMv2 認証を構成するには、この章で説明する手順を実行し、さらに、以下の developerWorks の記事で説明されている追加の構成を行います。

  https://www.ibm.com/developerworks/community/wikis/home?lang=en#!/wiki/W3a9d2a3c495a_47b6_97a9_e2b8f68b2e88/page/NTLMv2%20authentication%20with%20IBM%20Unica%20Marketing%20Platform.

  この記事では、Microsoft Internet Information Services (IIS)、Microsoft Internet Information Services のアプリケーション・サーバー・プラグイン、お

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

よび ISAPI Rewrite Lite エディションなどの URL 再書き込みプログラムを使用して NTLMv2 認証を実装する方法について詳しく説明します。

- NTLMv2 認証を有効にしない場合は、通常どおり、ユーザーは自分の Windows 資格情報を使用して、IBM Marketing Software ログイン画面でログインする必要があります。

内部ユーザーと外部ユーザーの管理

NTLMv2 認証を有効にする場合は、すべてのユーザーを、Active Directory サーバーで作成し、保守します。 (本書で内部ユーザーと呼ぶ一部のユーザーを Marketing Platform に作成するオプションはありません。) 内部ユーザーを作成する機能が必要な場合は、NTLMv2 認証を有効にしないでください。

統合が構成されると、Marketing Platform で、インポートされたユーザー・アカウントの追加、変更、および削除ができなくなります。これらの管理タスクは LDAP 側で行って、同期が実行されるときに変更内容がインポートされるようにする必要があります。Marketing Platform でインポートされたユーザー・アカウントを変更すると、ユーザーの認証で問題が生じることがあります。

LDAP 側で削除するユーザー・アカウントは Marketing Platform からは削除されません。それらのアカウントは、Marketing Platform で手動で無効にする必要があります。それら削除されたユーザー・アカウントは、削除するよりも無効にする方が安全です。それは、ユーザーには Campaign でのフォルダーの所有特権があるため、フォルダーを所有するユーザー・アカウントを削除するとそのフォルダー内のオブジェクトが使用不可になるためです。

同期化

IBM Marketing Software を Active Directory サーバーと統合するように構成した場合、ユーザーおよびグループは事前定義された間隔で自動的に同期化されます。

自動同期の機能は制限されています。

- 自動同期で更新されるのは、ユーザー属性のみです。グループ・メンバーの追加、削除、変更などのグループ・メンバーシップの変更は管理者が管理する必要があるため、それらの変更をインポートするには、デフォルトでは、手動同期プロセスを使用するしかありません。
- LDAP サーバーから削除されたユーザーは、自動同期では削除されません。

IBM Marketing Software の「ユーザー」領域で同期化機能を使用して、すべてのユーザーおよびグループの完全同期を強制することができます。あるいは、IBM サービスに連絡を取り、自動同期で完全同期を実行するための隠し構成プロパティーを設定するように依頼することもできます。

グループまたは属性に基づくユーザーのインポート

2 つのタイプのフィルタリングのいずれかを選択して、LDAP サーバーから Marketing Platform にインポートされたユーザー・アカウントを選定できます。

グループに基づくインポートまたは属性に基づくインポートから選択する必要があります。複数の方式が同時にサポートされることはありません。

グループに基づくインポート

Marketing Platform は、ディレクトリー・サーバーから自動的に情報を取得する定期的な同期化タスクによって、ディレクトリー・サーバー・データベースからグループとそのユーザーをインポートします。Marketing Platform によってユーザーとグループがサーバー・データベースからインポートされる場合に、グループ・メンバーシップは変更されません。それらの変更を反映するには、手動同期を実行する必要があります。

Active Directory グループを IBM Marketing Software グループにマップすることによって、IBM Marketing Software の特権を割り当てることができます。このマッピングによって、マップされる Active Directory グループに追加された新規ユーザーは、対応する IBM Marketing Software グループに設定されている特権を引き継ぐことができます。

Marketing Platform 内のサブグループは、その親に割り当てられた Active Directory マッピングやユーザー・メンバーシップを継承しません。

グループに基づくインポートを構成する方法について詳しくは、本章の続く箇所を参照してください。

属性に基づくインポート

IBM Marketing Software 製品に固有のグループを Active Directory サーバー内に作成するのが適切でない場合は、属性を指定することによって、インポートされるユーザーを制御することが可能です。そうするには、設定プロセスの際に以下を行います。

1. Active Directory サーバーで、フィルター対象となる属性に使われている文字列を判別します。
2. 「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | **LDAP** 同期 | **LDAP** ユーザー参照属性名」プロパティーを `DN` に設定します。

   これにより、メンバー参照を伴うグループに基づく同期ではなく、組織単位または組織に基づいていることが Marketing Platform に対して示されます。
3. 「**LDAP** 参照マップ」プロパティーを構成するとき、値の「フィルター」部分を、検索対象となる属性に設定します。フィルターには、ステップ 1 で判別した文字列を使用します。

属性に基づく同期を使用する場合、定期的な同期は、グループに基づく同期で行われる部分同期ではなく、常に完全同期となります。属性に基づく同期では、「**LDAP** 同期間隔」プロパティーを高い値に設定する必要があります。または値を `0` に設定して自動同期をオフにし、ユーザーがディレクトリーに追加されるときの手動による完全同期に依存する必要があります。

本章の続く箇所に示されている手順に従って、構成プロパティーを設定した上記のステップの手順を使用しながら、統合を構成します。

Active Directory とパーティションについて

マルチパーティション環境では、ユーザーが属しているグループがパーティションに割り当てられている場合、ユーザーのパーティション・メンバーシップはそのグ

ループによって決定されます。1 人のユーザーは、1 つのパーティションにのみ属することができます。そのため、あるユーザーが複数の Active Directory グループに属していて、それらのグループが別のパーティションに割り当てられた IBM Marketing Software グループにマップされている場合、システムはそのユーザーのために 1 つのパーティションを選択する必要があります。

この状態を回避するよう努力する必要があります。しかし、この状態が生じた場合には、直前に Active Directory グループにマップされた IBM Marketing Software グループのパーティションが、ユーザーの所属先になります。直前にマップされた Active Directory グループを判別するには、「構成」領域に表示される LDAP グループ・マッピングを確認してください。これらのマッピングは日時順に表示されるので、最新マッピングが最後にリストされています。

ログイン名での特殊文字

ログイン名に使用できる特殊文字は、ドット (.)、アンダースコアー (_)、およびハイフン (-) の 3 つだけです。Active Directory サーバーから Marketing Platform にインポートする予定のユーザーのログイン名にその他の特殊文字 (スペースを含む) が使用されている場合、ユーザーがログアウトするときや管理タスクを実行するとき (ユーザーに管理特権がある場合) に問題が生じないように、ログイン名を変更する必要があります。

関連概念:

145 ページの『構成プロセスのロードマップ: Active Directory の統合』

関連タスク:

18 ページの『外部ユーザーの同期化の強制』

関連資料:

14 ページの『ユーザー管理ページ』

Active Directory 統合の前提条件

Windows Active Directory 統合機能を利用するには、サポートされるオペレーティング・システムに IBM Marketing Software アプリケーションをインストールする必要があります。

さらに、NTLMv2 認証を実装するためには、IBM Marketing Software アプリケーションにアクセスするユーザーが以下を満たす必要があります。

- サポートされる Windows オペレーティング・システムを実行中のシステムを使用する。
- IBM Marketing Software が認証される Windows Active Directory ドメインのメンバーとしてログインする。
- サポートされるブラウザーを使用する。

構成プロセスのロードマップ: Active Directory の統合

この構成プロセスのロードマップを使用して、IBM Marketing Software を Windows Active Directory に統合するために必要なタスクに目を通してください。「トピック」列には、タスクについて詳しく説明しているトピックへのリンクが記されています。

表 39. 構成プロセスのロードマップ: *Active Directory* の統合

トピック	情報
146 ページの『必要な情報の入手』	ご使用の Windows Active Directory サーバーについて、IBM Marketing Software との統合に必要な情報を入手します。
147 ページの『グループ・メンバーシップ、マッピング、およびアプリケーション・アクセス』	グループに基づく同期を使用する場合、Active Directory グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。
148 ページの『Marketing Platform でのディレクトリー・サーバーの資格情報の保管』	ご使用のディレクトリー・サーバーが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般的な構成) の場合、ディレクトリー・サーバー管理者のユーザー名とパスワードを持つ IBM Marketing Software ユーザー・アカウントを構成してください。
• 149 ページの『IBM Marketing Software での LDAP ログイン方法の接続プロパティーの設定』 • 150 ページの『LDAP 同期プロパティーの設定』 • 151 ページの『ユーザー属性マップ・プロパティーの設定』 • 152 ページの『IBM Marketing Software グループへの LDAP グループのマップ』	「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。
152 ページの『同期のテスト』	予定どおりにユーザーがインポートされたことを確認します。グループに基づく同期を使用している場合は、ユーザーおよびグループが適切に同期していることを確認します。
153 ページの『PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザーのセットアップ』	Marketing Platform の管理者権限をセットアップします。これは、NTLMv2 認証を有効にする場合に必要です。
153 ページの『NTLMv2 認証を有効にするためのセキュリティー・モードの設定』	「構成」ページでセキュリティー・モード値を設定します。
Internet Explorer の構成	IBM Marketing Software へのアクセスに使用する Internet Explorer のインスタンスごとに、カスタム・セキュリティー・レベルを設定してください。これは、NTLMv2 認証を使用する場合に、ユーザーに IBM Marketing Software ログイン画面を表示しないようにするために必要です。
154 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再始動』	このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。
154 ページの『Active Directory ユーザーとしてのログインのテスト』	Active Directory ユーザーとして IBM Marketing Software にログインできることを確認してください。

必要な情報の入手

統合するディレクトリー・サーバーについて、必要な情報を入手してください。構成プロセスの際にこの情報を使用して、ディレクトリー・サーバーの資格情報を保管し、構成プロパティーの値を設定します。

手順

以下の情報を入手してください。

- サーバー・ホストの名前とポートの入手。
- ディレクトリー・サーバーに対する検索権限を持っているユーザーを識別し、そのユーザーについて以下の情報を収集します。
  - ログイン名
  - パスワード
  - 識別名 (DN)
- ディレクトリー・サーバーについて、以下の情報を入手してください。
  - 完全修飾ホスト名または IP アドレス
  - サーバーが listen するポート
- ディレクトリー・サーバーがグループ・オブジェクト内のユーザー属性に使用するストリングを判別します。通常、この値は LDAP サーバーでは `uniquemember` となり、Windows Active Directory サーバーの場合には `member` になります。これは、ご使用のディレクトリー・サーバーで確認する必要があります。
- 以下の必須ユーザー属性を入手してください。
  - ディレクトリー・サーバーがユーザー・ログイン属性に使用するストリングを判別します。このストリングは、常に必須です。通常、この値は LDAP サーバーでは `uid` で、Windows Active Directory サーバーでは `sAMAccountName` です。ディレクトリー・サーバーでこのストリングを検証します。
  - Campaign が UNIX 環境にインストールされている場合のみ、ディレクトリー・サーバーで代替のログイン属性として使用されているストリングを調べます。
- 属性に基づく同期を使用する場合、この目的で使用するための、(1 つまたは複数の) 属性に使われる文字列を取得します。
- ディレクトリー・サーバーに格納されている追加 (オプションの) ユーザー属性を Marketing Platform でインポートするには、以下についてディレクトリー・サーバーが使用するストリングを判別してください。
  - 名
  - 姓
  - ユーザーの肩書き
  - 部門
  - 会社
  - 国
  - ユーザーの E メール
  - 住所 1

– 電話 (会社)
– 携帯電話
– 電話 (自宅)

関連概念:

『識別名について』

識別名について

ディレクトリー・サーバーを IBM Marketing Software に統合できるようにするには、ユーザーおよびグループの識別名 (DN) を決定する必要があります。ディレクトリー・サーバー上のオブジェクトの DN は、ディレクトリー・サーバーのツリー構造からそのオブジェクトへの絶対パスです。

DN は以下のコンポーネントで形成されます。

- 組織単位 (OU)。この属性は、組織構造に基づいて名前空間を指定するために使用されます。OU は、一般にユーザー作成のディレクトリー・サーバーのコンテナーまたはフォルダーに関連付けられます。
- 共通名 (CN)。この属性は、ディレクトリー・サーバー内部でのオブジェクト自体を表します。
- ドメイン・コンポーネント (DC)。DC 属性を使用する識別名には、root 下の各ドメイン・レベルに 1 つの DC があります。言い換えれば、ドメイン・ネーム内のドットで区切られた項目ごとに DC 属性があるということです。

ご使用のディレクトリー・サーバーの管理コンソールを使用して、オブジェクトの識別名を判別してください。

グループ・メンバーシップ、マッピング、およびアプリケーション・アクセス

ディレクトリー・サーバー・グループを Marketing Platform グループにマップする方法を計画する場合は、ここで説明するガイドラインに従ってください。

- メンバーを Marketing Platform にインポートするディレクトリー・サーバー・グループを識別または作成します。これらのグループが Marketing Platform グループにマップされると、これらのグループのメンバーは自動的に IBM Marketing Software ユーザーとして作成されます。

  ディレクトリー・サーバーのサブグループのメンバーは、自動的にはインポートされません。サブグループからユーザーをインポートするには、サブグループを Marketing Platform のグループまたはサブグループにマップする必要があります。

  静的ディレクトリー・サーバー・グループのみをマップする必要があります。動的グループまたは仮想グループはサポートされていません。
- ディレクトリー・サーバー・グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform で識別または作成します。
- マップを計画するグループに該当するアプリケーション・アクセスを割り当てます。

Marketing Platform でのディレクトリー・サーバーの資格情報の保管

ご使用のディレクトリー・サーバーが匿名アクセスを許可していない場合は、以下の手順に示すように、ディレクトリー・サーバー・ユーザーのユーザー名とパスワードを持つ IBM Marketing Software ユーザー・アカウントを構成する必要があります。

手順

1. 管理者権限を持つユーザーとして IBM Marketing Software にログインします。
2. LDAP サーバー内のユーザーおよびグループ情報のすべてに対して読み取り権限を持つ LDAP ユーザーのディレクトリー・サーバー資格情報を含める IBM Marketing Software ユーザー・アカウントを選択または作成します。以下のガイドラインに従ってください。
   - 後のステップで、「**LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー**」構成プロパティーの値を、この IBM Marketing Software ユーザー・アカウントのユーザー名に設定します。このプロパティーのデフォルト値は `asm_admin` で、個々の新規 Marketing Platform インストールに存在するユーザーです。`asm_admin` アカウントを、ディレクトリー・サーバー資格情報を保持するために使用できます。
   - この IBM Marketing Software ユーザー・アカウントのユーザー名は、どのディレクトリー・サーバー・ユーザーのユーザー名とも一致しない名前でなければなりません。
3. LDAP サーバーに接続するために Marketing Platform で使用される資格情報を保管するためのこの IBM Marketing Software ユーザー・アカウントのデータ・ソースを追加します。以下のガイドラインに従ってください。

表 *40.* 資格情報を保管するためのデータ・ソース・フィールド

フィールド	ガイドライン
データ・ソース名	任意の名前を入力できますが、後のステップで、「**LDAP 資格情報のデータ・ソース**」構成プロパティーの値を、使用するデータ・ソース名に一致させる必要があることに注意してください。値を設定しなくてもよいようにこのプロパティーのデフォルト値と一致させるには、データ・ソースに `LDAPServer` という名前を付けてください。

表 40. 資格情報を保管するためのデータ・ソース・フィールド (続き)

フィールド	ガイドライン

データソースログイン	IBM Marketing Software と同期化されるすべてのディレクトリー・サーバーのユーザーおよびグループ情報に対して読み取り権限を持つ管理ユーザーの識別名 (DN) を入力します。 DN は以下のようになります。
	
	`uidcn=user1,ou=someGroup,dc=systemName,dc=com`
	
	別の方法として、LDAP サーバー上のすべてのグループにアクセスできる root ユーザー・アカウントを使用することもできます。デフォルトの root ユーザー、およびサポートされているディレクトリー・サーバーでこのユーザーを指定する方法は、次のとおりです。
	• Active Directory サーバーの root ユーザーは Administrator です。このユーザーは次のように指定できます。
	
	`domain¥`*`ldap_admin_username`*
	• Oracle Directory Server の root ユーザーは Directory Manager です。このユーザーは次のように指定できます。
	
	`cn=Directory Manager`
	• IBM Security Directory Server の root ユーザーは root です。このユーザーは次のように指定できます。
	
	`cn=root`

データソースパスワード	「データ・ソース・ログイン」フィールドに入力したログイン名を持つ管理ユーザーのパスワードを入力します。

関連タスク:

13 ページの『内部ユーザーのデータ・ソースの追加』

IBM Marketing Software での LDAP ログイン方法の接続プロパティーの設定

LDAP ログイン方法のプロパティーは、ディレクトリー・サーバーに接続するためにシステムで使用する接続の詳細を指定します。

手順

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | **LDAP**」カテゴリーに移動します。
2. 以下の構成プロパティーの値を設定します。

   各プロパティーを設定する方法について詳しくは、関連した参照情報を参照してください。

   - LDAP サーバー・ホスト名
   - LDAP サーバー・ポート
   - ユーザー検索フィルター

- IBM Marketing Platform に格納された資格情報を使用
- LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー
- LDAP 資格情報のデータ・ソース
- ベース DN
- LDAP 接続に SSL が必要

関連資料:

304 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP』

LDAP 同期プロパティーの設定

LDAP 同期プロパティーは、システムがディレクトリー・サーバーへのログインやインポート対象のユーザーの識別に使用する詳細情報を指定します。これらのプロパティーの一部で、自動同期プロセスの頻度などの詳細な制御を行うこともできます。

手順

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | **LDAP** 同期」カテゴリーに移動します。
2. 「**LDAP** プロパティー」セクションで以下の構成プロパティーの値を設定します。

   値の設定に関する説明については、各プロパティーのコンテキスト・ヘルプ、またはこのセクションの関連トピック・リンクを参照してください。

   - LDAP 同期が有効
   - LDAP 同期間隔
   - LDAP 同期遅延
   - LDAP 同期タイムアウト
   - LDAP 同期スコープ
   - LDAP プロバイダー URL
   - LDAP 接続に SSL が必要 (オプション)
   - LDAP 構成 IBM Marketing Platform グループの区切り記号
   - LDAP 参照構成の区切り記号
   - LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー
   - LDAP 資格情報のデータ・ソース
   - LDAP ユーザー参照属性名
   - LDAP BaseDN 定期検索が有効
   - ユーザログイン
   - 部門や国、ユーザーの役職などのさまざまなユーザー属性 (オプション)

関連資料:

313 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP 同期』

ユーザー属性マップ・プロパティーの設定

これらのプロパティーは、ディレクトリー・サーバーからシステムがインポートするユーザー属性を指定します。

手順

1. 「設定」>「構成」をクリックし、>「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | **LDAP** 同期」カテゴリーに移動します。
2. 「ユーザー属性マップ」セクションの値を設定して、リストされている IBM Marketing Software ユーザー属性をディレクトリー・サーバーのユーザー属性にマップします。

   グループに基づく同期を使用する場合、マップする必要のあるプロパティーは「**ユーザー・ログイン**」のみです。通常、この値は LDAP サーバーでは `uid` で、Windows Active Directory サーバーでは `sAMAccountName` です。『必要な情報の入手』で説明されている確認済みの値を使用します。

   属性に基づく同期を使用する場合、検索の対象となる属性をマップします。

   次のことに注意してください。

   - ここでマップするプロパティーは、Marketing Platform がディレクトリー・サーバーと同期化するたびに、インポート済みのユーザーと置き換えられます。
   - Marketing Platform では、E メール・アドレスが、RFC 821 に記述された定義に準拠している必要があります。ご使用のディレクトリー・サーバー上の E メール・アドレスがこの標準に準拠していない場合、インポートする属性としてマップしないでください。
   - ご使用のディレクトリー・サーバー・データベースで、Marketing Platform システム・テーブル内で許可されている文字より多くの文字を属性に使用できる場合は、次の表に示すように、属性値が適合するように切り捨てられます。

表 *41.* ユーザー属性で使用できる文字数

属性	指定できる長さ
ユーザー・ログイン (必須)	256
名	128
姓	128
ユーザーの肩書き	128
部門	128
会社	128
国	128
ユーザーの E メール	128
アドレス 1	128
電話 (会社)	20
携帯電話	20

表 *41.* ユーザー属性で使用できる文字数 (続き)

属性	指定できる長さ
電話 (自宅)	20
代替ログイン (UNIX では必須)	256

関連資料:

313 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP 同期』

IBM Marketing Software グループへの LDAP グループのマップ

ここでマップするディレクトリー・サーバー・グループに所属するユーザーがインポートされ、ここに指定する 1 つ以上の Marketing Platform グループのメンバーになります。

このタスクについて

重要: `asm_admin` ユーザーをメンバーに持つグループをマップしないでください。

手順

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「**IBM Marketing Software | IBM Marketing Platform** | セキュリティー | **LDAP** 同期 | **IBM Marketing Platform** グループ・マップの **LDAP** 参照」カテゴリーに移動します。
2. Marketing Platform グループにマップするディレクトリー・サーバー・グループごとに、 *(IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照)* テンプレートを選択して、「**IBM Marketing Platform** グループ・マップの **LDAP** 参照」カテゴリーを作成します。以下のプロパティーを設定します。
   - 新しいカテゴリー名
   - `LDAP` 参照マップ
   - `IBM Marketing Platform` グループ

   例えば、以下の値は、LDAP `MarketingPlatformUsers` グループを Marketing Platform `marketingopsUsers` および `campaignUsers` グループにマップします (`FILTER` は省略されます)。
   - `LDAP reference: cn=MarketingPlatformUsers,cn=Users, dc=myCompany,dc=com`
   - `IBM Marketing Platform` グループ: `marketingopsUsers;campaignUsers`

関連資料:

322 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP 同期 | IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照』

同期のテスト

ユーザーとグループがサーバー間で正しく同期されていることを確認します。

手順

1. 管理特権を持つ IBM Marketing Software ユーザー (ディレクトリー・サーバー・ユーザーでない) で IBM Marketing Software にログインします。
2. 「設定」>「ユーザー」ページの「同期」をクリックして、同期を強制します。
3. 以下のチェックを実行します。
   - 予定どおりに LDAP サーバーからユーザーがインポートされていることを確認します。
   - グループに基づく同期を使用する場合、Marketing Platform グループのメンバーシップが、ディレクトリー・サーバー・グループへの予期されるマッピングに一致していることを確認します。

PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザーのセットアップ

NTLMv2 認証を有効にした場合は、`platform_admin` として IBM Marketing Software にログインすることはできません。そのため、Marketing Platform の管理者権限を取得するためには、以下の手順を実行する必要があります。

手順

1. IBM Marketing Software に、内部ユーザー (Active Directory からインポートされたユーザーでなく、Marketing Platform 内で作成されたユーザー) としてログインします。これは、Marketing Platform 内で PlatformAdminRole 権限を持つユーザーでなければなりません。
2. Marketing Platform グループを作成し、そのグループに PlatformAdminRole 役割を割り当てます。
3. 必ず、少なくとも 1 人の Windows Active Directory ユーザーがこのグループのメンバーに入るようにしてください。

関連タスク:

26 ページの『内部グループの追加』

33 ページの『グループへの役割の割り当てまたはグループからの役割の除去』

28 ページの『グループまたはサブグループへのユーザーの追加』

NTLMv2 認証を有効にするためのセキュリティー・モードの設定

NTLMv2 認証を有効にする場合にのみ、この手順の説明に従って構成プロパティーを設定してください。

始める前に

NTLMv2 認証を構成するには、developerWorks 記事 (https://www.ibm.com/developerworks/community/wikis/home?lang=en#!/wiki/W3a9d2a3c495a_47b6_97a9_e2b8f68b2e88/page/NTLMv2%20authentication%20with%20IBM%20Unica%20Marketing%20Platform) で説明されている手順を実行する必要があります

手順

「設定」>「構成」をクリックし、以下の表に示すように構成プロパティーを設定します。

表 *42. NTLMv2* の場合の構成プロパティーの値

プロパティー	値
IBM Marketing Platform	セキュリティー	ログイン方法	「Web **アクセス制御**」オプションを選択します。
IBM Marketing Platform	セキュリティー	ログイン方法の詳細	**Web** アクセス制御	**Web** アクセス制御ヘッダー変数	再書き込みルールで指定されている変数名を入力します。
IBM Marketing Platform	セキュリティー	ログイン方法の詳細	**Web** アクセス制御	ユーザー名パターン	¥w* と入力します
一般	ナビゲーション	**IBM Marketing Platform URL**	IIS サイトの URL を入力します。

関連資料:

307 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | Web アクセス制御』

Web アプリケーション・サーバーの再始動

構成変更を確実に適用するために、Web アプリケーション・サーバーを再始動してください。

Active Directory ユーザーとしてのログインのテスト

適切な Windows Active Directory ユーザー・アカウントで IBM Marketing Software にログインして、構成を検証します。

手順

1. Marketing Platform 内の役割を割り当てられた Marketing Platform グループにマップされた Active Directory グループのメンバーである Active Directory ユーザーとして、Windows にログインします。
2. ブラウザーで IBM Marketing Software URL を指示します。

   NTLMv2 認証を有効にした場合は、IBM Marketing Software ログイン画面が表示されず、IBM Marketing Software ユーザー・インターフェースにアクセスできます。

   NTLMv2 認証を有効にしていない場合は、Windows の資格情報でログインできます。

   ログインできない場合は、279 ページの『restoreAccess』を参照してください。

第 12 章 IBM Marketing Software および LDAP サーバー間の統合

Marketing Platform は、Windows Active Directory サーバーまたは別の LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) サーバーと統合するように構成することができます。 IBM Marketing Software をディレクトリー・サーバーと統合することによって、ユーザーとグループを 1 つの集中化された場所に維持しておくことができます。統合は、企業の権限ポリシーを IBM Marketing Software アプリケーションに拡張するための柔軟なモデルを提供します。統合によって、サポート・コスト、およびアプリケーションを実稼働環境に配置するために必要な時間が減少します。

サポートされるディレクトリー・サーバーのリストについては、「*Recommended Software Environments and Minimum System Requirements*」という資料を参照してください。

LDAP 統合機能

Marketing Platform は、LDAP との統合により、このセクションで攻めする機能を提供します。

LDAP 統合による認証

IBM Marketing Software アプリケーションは、ユーザー権限情報を得るために Marketing Platform への照会を実行します。LDAP 統合が実装されている場合、ユーザーは、有効な LDAP ユーザー名およびパスワードを認証のために IBM Marketing Software アプリケーションに入力します。

内部ユーザーと外部ユーザーの管理

統合が構成されると、Marketing Platform で、インポートされたユーザー・アカウントの追加、変更、および削除ができなくなります。これらの管理タスクは LDAP 側で行って、同期が実行されるときに変更内容がインポートされるようにする必要があります。 Marketing Platform でインポートされたユーザー・アカウントを変更すると、ユーザーの認証で問題が生じることがあります。

LDAP 側で削除するユーザー・アカウントは Marketing Platform からは削除されません。それらのアカウントは、Marketing Platform で手動で無効にする必要があります。それら削除されたユーザー・アカウントは、削除するよりも無効にする方が安全です。それは、ユーザーには Campaign でのフォルダーの所有特権があるため、フォルダーを所有するユーザー・アカウントを削除するとそのフォルダー内のオブジェクトが使用不可になるためです。

同期化

IBM Marketing Software を LDAP サーバーと統合するように構成した場合、ユーザーおよびグループは事前定義された間隔で自動的に同期化されます。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

自動同期の機能は制限されています。

- 自動同期で更新されるのは、ユーザー属性のみです。グループ・メンバーの追加、削除、変更などのグループ・メンバーシップの変更は管理者が管理する必要があるため、それらの変更をインポートするには、デフォルトでは、手動同期プロセスを使用するしかありません。
- LDAP サーバーから削除されたユーザーは、自動同期では削除されません。

IBM Marketing Software の「ユーザー」領域で同期化機能を使用して、すべてのユーザーおよびグループの完全同期を強制することができます。あるいは、IBM サービスに連絡を取り、自動同期で完全同期を実行するための隠し構成プロパティーを設定するように依頼することもできます。

グループまたは属性に基づくユーザーのインポート

2 つのタイプのフィルタリングのいずれかを選択して、LDAP サーバーから Marketing Platform にインポートされたユーザー・アカウントを選定できます。

グループに基づくインポートまたは属性に基づくインポートから選択する必要があります。複数の方式が同時にサポートされることはありません。

グループに基づくインポート

Marketing Platform は、ディレクトリー・サーバーから自動的に情報を取得する定期的な同期化タスクによって、ディレクトリー・サーバー・データベースからグループとそのユーザーをインポートします。Marketing Platform によってユーザーとグループがサーバー・データベースからインポートされる場合に、グループ・メンバーシップは変更されません。それらの変更を反映するには、手動同期を実行する必要があります。

注: LDAP グループは、たとえグループが別々のパーティション用に構成されていても、固有の名前を持っていなければなりません。

LDAP グループを IBM Marketing Software グループにマップすることによって、IBM Marketing Software の特権を割り当てることができます。このマッピングによって、マップされる LDAP グループに追加された新規ユーザーは、対応する IBM Marketing Software グループに指定されている特権を引き継ぐことができます。

Marketing Platform 内のサブグループは、その親に割り当てられた LDAP マッピングやユーザー・メンバーシップを継承しません。

グループに基づくインポートを構成する方法について詳しくは、本章の続く箇所を参照してください。

属性に基づくインポート

IBM Marketing Software 製品に固有のグループを LDAP サーバー内に作成するのが適切でない場合は、属性を指定することによって、インポートされるユーザーを制御することが可能です。そうするには、LDAP 設定プロセスの際に以下を行います。

1. LDAP サーバーで、フィルター対象となる属性に使われている文字列を判別します。
2. 「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | **LDAP** 同期 | **LDAP** ユーザー参照属性名」プロパティーを DN に設定します。

   これにより、メンバー参照を伴うグループに基づく同期ではなく、組織単位または組織に基づいていることが Marketing Platform に対して示されます。
3. 「**LDAP** 参照マップ」プロパティーを構成するとき、値の「フィルター」部分を、検索対象となる属性に設定します。フィルターには、ステップ 1 で判別した文字列を使用します。

属性に基づく同期を使用する場合、定期的な同期は、グループに基づく同期で行われる部分同期ではなく、常に完全同期となります。属性に基づく同期では、「**LDAP** 同期間隔」プロパティーを高い値に設定する必要があります。または値を 0 に設定して自動同期をオフにし、ユーザーがディレクトリーに追加されるときの手動による完全同期に依存する必要があります。

LDAP とパーティションについて

マルチパーティション環境では、ユーザーが属しているグループがパーティションに割り当てられている場合、ユーザーのパーティション・メンバーシップはそのグループによって決定されます。1 人のユーザーは、1 つのパーティションにのみ属することができます。したがって、1 人のユーザーが複数の LDAP グループに属していて、それらのグループが別のパーティションに割り当てられた IBM Marketing Software グループに割り当てられている場合、システムはそのユーザーに対して 1 つのパーティションを選択する必要があります。

この状態を回避するよう努力する必要があります。しかし、万一この状態が起こってしまった場合、直前に LDAP グループにマップされた IBM Marketing Software グループのパーティションが、ユーザーの所属先になります。直前にマップされたのがどの LDAP なのか判別するには、「構成」領域に表示される LDAP グループ・マッピングを見てください。これらのマッピングは日時順に表示されるので、最新マッピングが最後にリストされています。

内部ユーザーと外部ユーザーのサポート

IBM Marketing Software は、2 つのタイプのユーザー・アカウントおよびグループをサポートしています。

- 内部 - IBM Marketing Software セキュリティー・ユーザー・インターフェースを使用して IBM Marketing Software 内部で作成されるユーザー・アカウントおよびグループ。これらのユーザーは Marketing Platform によって認証されます。
- 外部 - サポートされる LDAP サーバーとの同期化によって IBM Marketing Software にインポートされるユーザー・アカウントおよびグループ。この同期化が行われるのは、IBM Marketing Software が LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみです。これらのユーザーは、LDAP サーバーによって認証されます。

例えば、顧客を LDAP サーバーに完全な企業ユーザーとして追加せずに IBM Marketing Software アプリケーションへのアクセス権限を顧客に与えたい場合、両方のタイプのユーザーおよびグループを作成することができます。

このハイブリッド認証モデルを使用する際は、純粋な LDAP 認証モデルの場合より多くのメンテナンスが必要になります。

ログイン名での特殊文字

ログイン名に使用できる特殊文字は、ドット (.)、アンダースコアー (_)、およびハイフン (-) の 3 つだけです。LDAP サーバーから Marketing Platform にインポートする予定のユーザーのログイン名にその他の特殊文字 (スペースを含む) が使用されている場合、ユーザーがログアウトするときや管理タスクを実行するとき (ユーザーに管理特権がある場合) に問題が生じないように、ログイン名を変更する必要があります

関連概念:

『構成プロセスのロードマップ: LDAP の統合』

関連タスク:

18 ページの『外部ユーザーの同期化の強制』

関連資料:

14 ページの『ユーザー管理ページ』

LDAP 統合の前提条件

LDAP 統合機能を利用するには、サポートされるオペレーティング・システムに IBM Marketing Software アプリケーションをインストールする必要があります。

構成プロセスのロードマップ: LDAP の統合

この構成プロセスのロードマップを使用して、IBM Marketing Software と LDAP を統合するために必要なタスクに目を通してください。「トピック」列には、タスクについて詳しく説明しているトピックへのリンクが記されています。

表 *43.* 構成プロセスのロードマップ*: LDAP* の統合

トピック	情報
146 ページの『必要な情報の入手』	ご使用の LDAP サーバーについて、IBM Marketing Software との統合に必要な情報を入手します。
147 ページの『グループ・メンバーシップ、マッピング、およびアプリケーション・アクセス』	グループに基づく同期を使用する場合、LDAP グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。
148 ページの『Marketing Platform でのディレクトリー・サーバーの資格情報の保管』	ご使用のディレクトリー・サーバーが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般的な構成) の場合、ディレクトリー・サーバー管理者のユーザー名とパスワードを持つ IBM Marketing Software ユーザー・アカウントを構成してください。

表 43. 構成プロセスのロードマップ: *LDAP* の統合 (続き)

トピック	情報
• 149 ページの『IBM Marketing Software での LDAP ログイン方法の接続プロパティーの設定』 • 150 ページの『LDAP 同期プロパティーの設定』 • 151 ページの『ユーザー属性マップ・プロパティーの設定』 • 152 ページの『IBM Marketing Software グループへの LDAP グループのマップ』	「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。
152 ページの『同期のテスト』	予定どおりにユーザーがインポートされたことを確認します。グループに基づく同期を使用している場合は、グループが適切に同期していることを確認します。
166 ページの『LDAP へのセキュリティー・モードの設定』	「構成」ページでセキュリティー・モード値を設定します。
154 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再始動』	このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。
166 ページの『LDAP ユーザーとしてのログインのテスト』	LDAP ユーザーとして IBM Marketing Software にログインできることを確認してください。

必要な情報の入手

統合するディレクトリー・サーバーについて、必要な情報を入手してください。構成プロセスの際にこの情報を使用して、ディレクトリー・サーバーの資格情報を保管し、構成プロパティーの値を設定します。

手順

以下の情報を入手してください。

- サーバー・ホストの名前とポートの入手。
- ディレクトリー・サーバーに対する検索権限を持っているユーザーを識別し、そのユーザーについて以下の情報を収集します。
  - ログイン名
  - パスワード
  - 識別名 (DN)
- ディレクトリー・サーバーについて、以下の情報を入手してください。
  - 完全修飾ホスト名または IP アドレス
  - サーバーが listen するポート
- ディレクトリー・サーバーがグループ・オブジェクト内のユーザー属性に使用するストリングを判別します。通常、この値は LDAP サーバーでは `uniquemember` となり、Windows Active Directory サーバーの場合には `member` になります。これは、ご使用のディレクトリー・サーバーで確認する必要があります。
- 以下の必須ユーザー属性を入手してください。
  - ディレクトリー・サーバーがユーザー・ログイン属性に使用するストリングを判別します。このストリングは、常に必須です。通常、この値は LDAP サ

ーバーでは uid で、Windows Active Directory サーバーでは sAMAccountName です。ディレクトリー・サーバーでこのストリングを検証します。
  - Campaign が UNIX 環境にインストールされている場合のみ、ディレクトリー・サーバーで代替のログイン属性として使用されているストリングを調べます。
- 属性に基づく同期を使用する場合、この目的で使用するための、(1 つまたは複数の) 属性に使われる文字列を取得します。
- ディレクトリー・サーバーに格納されている追加 (オプションの) ユーザー属性を Marketing Platform でインポートするには、以下についてディレクトリー・サーバーが使用するストリングを判別してください。
  - 名
  - 姓
  - ユーザーの肩書き
  - 部門
  - 会社
  - 国
  - ユーザーの E メール
  - 住所 1
  - 電話 (会社)
  - 携帯電話
  - 電話 (自宅)

関連概念:

147 ページの『識別名について』

識別名について

ディレクトリー・サーバーを IBM Marketing Software に統合できるようにするには、ユーザーおよびグループの識別名 (DN) を決定する必要があります。ディレクトリー・サーバー上のオブジェクトの DN は、ディレクトリー・サーバーのツリー構造からそのオブジェクトへの絶対パスです。

DN は以下のコンポーネントで形成されます。

- 組織単位 (OU)。この属性は、組織構造に基づいて名前空間を指定するために使用されます。OU は、一般にユーザー作成のディレクトリー・サーバーのコンテナーまたはフォルダーに関連付けられます。
- 共通名 (CN)。この属性は、ディレクトリー・サーバー内部でのオブジェクト自体を表します。
- ドメイン・コンポーネント (DC)。DC 属性を使用する識別名には、root 下の各ドメイン・レベルに 1 つの DC があります。言い換えれば、ドメイン・ネーム内のドットで区切られた項目ごとに DC 属性があるということです。

ご使用のディレクトリー・サーバーの管理コンソールを使用して、オブジェクトの識別名を判別してください。

グループ・メンバーシップ、マッピング、およびアプリケーション・アクセス

ディレクトリー・サーバー・グループを Marketing Platform グループにマップする方法を計画する場合は、ここで説明するガイドラインに従ってください。

- メンバーを Marketing Platform にインポートするディレクトリー・サーバー・グループを識別または作成します。これらのグループが Marketing Platform グループにマップされると、これらのグループのメンバーは自動的に IBM Marketing Software ユーザーとして作成されます。

  ディレクトリー・サーバーのサブグループのメンバーは、自動的にはインポートされません。サブグループからユーザーをインポートするには、サブグループを Marketing Platform のグループまたはサブグループにマップする必要があります。

  静的ディレクトリー・サーバー・グループのみをマップする必要があります。動的グループまたは仮想グループはサポートされていません。
- ディレクトリー・サーバー・グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform で識別または作成します。
- マップを計画するグループに該当するアプリケーション・アクセスを割り当てます。

Marketing Platform でのディレクトリー・サーバーの資格情報の保管

ご使用のディレクトリー・サーバーが匿名アクセスを許可していない場合は、以下の手順に示すように、ディレクトリー・サーバー・ユーザーのユーザー名とパスワードを持つ IBM Marketing Software ユーザー・アカウントを構成する必要があります。

手順

1. 管理者権限を持つユーザーとして IBM Marketing Software にログインします。
2. LDAP サーバー内のユーザーおよびグループ情報のすべてに対して読み取り権限を持つ LDAP ユーザーのディレクトリー・サーバー資格情報を含める IBM Marketing Software ユーザー・アカウントを選択または作成します。以下のガイドラインに従ってください。
   - 後のステップで、「`LDAP` **資格情報の** `IBM Marketing Platform` **ユーザー**」構成プロパティーの値を、この IBM Marketing Software ユーザー・アカウントのユーザー名に設定します。このプロパティーのデフォルト値は `asm_admin` で、個々の新規 Marketing Platform インストールに存在するユーザーです。`asm_admin` アカウントを、ディレクトリー・サーバー資格情報を保持するために使用できます。
   - この IBM Marketing Software ユーザー・アカウントのユーザー名は、どのディレクトリー・サーバー・ユーザーのユーザー名とも一致しない名前でなければなりません。

3. LDAP サーバーに接続するために Marketing Platform で使用される資格情報を保管するためのこの IBM Marketing Software ユーザー・アカウントのデータ・ソースを追加します。以下のガイドラインに従ってください。

表 44. 資格情報を保管するためのデータ・ソース・フィールド

フィールド	ガイドライン
データ・ソース名	任意の名前を入力できますが、後のステップで、「**LDAP 資格情報のデータ・ソース**」構成プロパティーの値を、使用するデータ・ソース名に一致させる必要があることに注意してください。値を設定しなくてもよいようにこのプロパティーのデフォルト値と一致させるには、データ・ソースに `LDAPServer` という名前を付けてください。

データソースログイン	IBM Marketing Software と同期化されるすべてのディレクトリー・サーバーのユーザーおよびグループ情報に対して読み取り権限を持つ管理ユーザーの識別名 (DN) を入力します。 DN は以下のようになります。
	
	`uidcn=user1,ou=someGroup,dc=systemName,dc=com`
	
	別の方法として、LDAP サーバー上のすべてのグループにアクセスできる root ユーザー・アカウントを使用することもできます。デフォルトの root ユーザー、およびサポートされているディレクトリー・サーバーでこのユーザーを指定する方法は、次のとおりです。
	• Active Directory サーバーの root ユーザーは Administrator です。このユーザーは次のように指定できます。
	
	`domain¥`*`ldap_admin_username`*
	• Oracle Directory Server の root ユーザーは Directory Manager です。このユーザーは次のように指定できます。
	
	`cn=Directory Manager`
	• IBM Security Directory Server の root ユーザーは root です。このユーザーは次のように指定できます。
	
	`cn=root`

データソースパスワード	「データ・ソース・ログイン」フィールドに入力したログイン名を持つ管理ユーザーのパスワードを入力します。

関連タスク:

13 ページの『内部ユーザーのデータ・ソースの追加』

IBM Marketing Software での LDAP ログイン方法の接続プロパティーの設定

LDAP ログイン方法のプロパティーは、ディレクトリー・サーバーに接続するためにシステムで使用する接続の詳細を指定します。

手順

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | **LDAP**」カテゴリーに移動します。
2. 以下の構成プロパティーの値を設定します。

   各プロパティーを設定する方法について詳しくは、関連した参照情報を参照してください。

   - LDAP サーバー・ホスト名
   - LDAP サーバー・ポート
   - ユーザー検索フィルター
   - IBM Marketing Platform に格納された資格情報を使用
   - LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー
   - LDAP 資格情報のデータ・ソース
   - ベース DN
   - LDAP 接続に SSL が必要

関連資料:

304 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP』

LDAP 同期プロパティーの設定

LDAP 同期プロパティーは、システムがディレクトリー・サーバーへのログインやインポート対象のユーザーの識別に使用する詳細情報を指定します。これらのプロパティーの一部で、自動同期プロセスの頻度などの詳細な制御を行うこともできます。

手順

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | **LDAP** 同期」カテゴリーに移動します。
2. 「**LDAP** プロパティー」セクションで以下の構成プロパティーの値を設定します。

   値の設定に関する説明については、各プロパティーのコンテキスト・ヘルプ、またはこのセクションの関連トピック・リンクを参照してください。

   - LDAP 同期が有効
   - LDAP 同期間隔
   - LDAP 同期遅延
   - LDAP 同期タイムアウト
   - LDAP 同期スコープ
   - LDAP プロバイダー URL
   - LDAP 接続に SSL が必要 (オプション)
   - LDAP 構成 IBM Marketing Platform グループの区切り記号
   - LDAP 参照構成の区切り記号

- LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー
- LDAP 資格情報のデータ・ソース
- LDAP ユーザー参照属性名
- LDAP BaseDN 定期検索が有効
- ユーザログイン
- 部門や国、ユーザーの役職などのさまざまなユーザー属性 (オプション)

関連資料:

313 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP 同期』

ユーザー属性マップ・プロパティーの設定

これらのプロパティーは、ディレクトリー・サーバーからシステムがインポートするユーザー属性を指定します。

手順

1. 「設定」>「構成」をクリックし、>「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | **LDAP** 同期」カテゴリーに移動します。
2. 「ユーザー属性マップ」セクションの値を設定して、リストされている IBM Marketing Software ユーザー属性をディレクトリー・サーバーのユーザー属性にマップします。

   グループに基づく同期を使用する場合、マップする必要のあるプロパティーは「**ユーザー・ログイン**」のみです。通常、この値は LDAP サーバーでは `uid` で、Windows Active Directory サーバーでは `sAMAccountName` です。『必要な情報の入手』で説明されている確認済みの値を使用します。

   属性に基づく同期を使用する場合、検索の対象となる属性をマップします。

   次のことに注意してください。

   - ここでマップするプロパティーは、Marketing Platform がディレクトリー・サーバーと同期化するたびに、インポート済みのユーザーと置き換えられます。
   - Marketing Platform では、E メール・アドレスが、RFC 821 に記述された定義に準拠している必要があります。ご使用のディレクトリー・サーバー上の E メール・アドレスがこの標準に準拠していない場合、インポートする属性としてマップしないでください。
   - ご使用のディレクトリー・サーバー・データベースで、Marketing Platform システム・テーブル内で許可されている文字より多くの文字を属性に使用できる場合は、次の表に示すように、属性値が適合するように切り捨てられます。

表 *45.* ユーザー属性で使用できる文字数

属性	指定できる長さ
ユーザー・ログイン (必須)	256
名	128

表 45. ユーザー属性で使用できる文字数 (続き)

属性	指定できる長さ
姓	128
ユーザーの肩書き	128
部門	128
会社	128
国	128
ユーザーの E メール	128
アドレス 1	128
電話 (会社)	20
携帯電話	20
電話 (自宅)	20
代替ログイン (UNIX では必須)	256

関連資料:

313 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP 同期』

IBM Marketing Software グループへの LDAP グループのマップ

ここでマップするディレクトリー・サーバー・グループに所属するユーザーがインポートされ、ここに指定する 1 つ以上の Marketing Platform グループのメンバーになります。

このタスクについて

重要: `asm_admin` ユーザーをメンバーに持つグループをマップしないでください。

手順

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「**IBM Marketing Software | IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP 同期 | IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照**」カテゴリーに移動します。
2. Marketing Platform グループにマップするディレクトリー・サーバー・グループごとに、 *(IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照)* テンプレートを選択して、「**IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照**」カテゴリーを作成します。以下のプロパティーを設定します。
   - 新しいカテゴリー名
   - `LDAP 参照マップ`
   - `IBM Marketing Platform グループ`

   例えば、以下の値は、LDAP `MarketingPlatformUsers` グループを Marketing Platform `marketingopsUsers` および `campaignUsers` グループにマップします (`FILTER` は省略されます)。
   - `LDAP reference: cn=MarketingPlatformUsers,cn=Users, dc=myCompany,dc=com`
   - `IBM Marketing Platform グループ: marketingopsUsers;campaignUsers`

関連資料:

322 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP 同期 | IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照』

同期のテスト

ユーザーとグループがサーバー間で正しく同期されていることを確認します。

手順

1. 管理特権を持つ IBM Marketing Software ユーザー (ディレクトリー・サーバー・ユーザーでない) で IBM Marketing Software にログインします。
2. 「設定」>「ユーザー」ページの「同期」をクリックして、同期を強制します。
3. 以下のチェックを実行します。
   - 予定どおりに LDAP サーバーからユーザーがインポートされていることを確認します。
   - グループに基づく同期を使用する場合、Marketing Platform グループのメンバーシップが、ディレクトリー・サーバー・グループへの予期されるマッピングに一致していることを確認します。

LDAP へのセキュリティー・モードの設定

LDAP ユーザーが IBM Marketing Software アプリケーションにログインできるようにセキュリティー・モードのプロパティーを設定します。

手順

1. IBM Marketing Software にログインして、「設定」>「構成」をクリックし、「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー」に移動します。
2. 「**ログイン方法**」プロパティーの値を「LDAP」に設定します。

Web アプリケーション・サーバーの再始動

構成変更を確実に適用するために、Web アプリケーション・サーバーを再始動してください。

LDAP ユーザーとしてのログインのテスト

構成をテストするために、Marketing Platform へのアクセス権限を割り当てられた Marketing Platform グループにマップされた LDAP グループのメンバーである LDAP ユーザーとして、IBM Marketing Software にログインします。

第 13 章 Web アクセス制御プラットフォームとの統合

組織では、Web アクセス制御プラットフォームを使用してセキュリティー・システムを統合し、それによって Web サイトへのユーザー・アクセスを調整するポータルを提供します。このセクションでは、Web アクセス制御プラットフォームとの IBM Marketing Software 統合の概要を示します。

認証

ユーザーが Web アクセス制御ポータルを介してアプリケーションにアクセスする場合、ユーザーの認証は Web アクセス制御システムによって管理されます。IBM Marketing Software と同期化された LDAP グループのメンバーでもある Web アクセス制御ユーザーは、Web アクセス制御システムにログインすると、すべての IBM Marketing Software アプリケーションに認証されます。これらのユーザーには IBM Marketing Software アプリケーションのログイン画面は表示されません。

権限

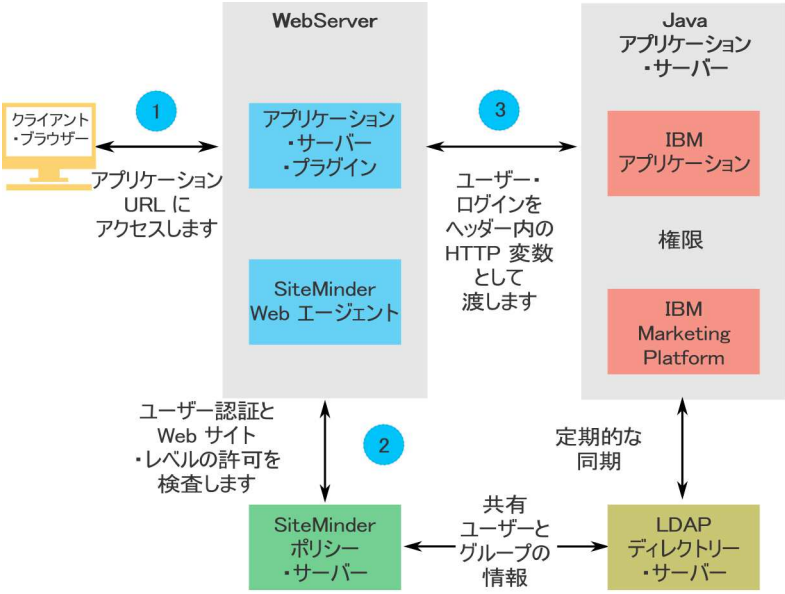
IBM Marketing Software アプリケーションは、ユーザー権限情報を得るために Marketing Platform への照会を実行します。Marketing Platform は、LDAP サーバーから自動的に情報を取得する定期的な同期化タスクによって、LDAP データベースからグループとそのユーザーをインポートします。Marketing Platform が LDAP データベースからユーザーとグループをインポートする際、グループ・メンバーシップは維持されます。これらの LDAP ユーザーは Web アクセス制御システムにも公開されているため、Web アクセス制御システムおよび IBM Marketing Software は、整合したユーザーのセットを参照します。

ユーザーがアクセスするアプリケーション URL に対する制御を含め、追加の権限制御も、ほとんどの Web アクセス制御システムを介して利用することができます。

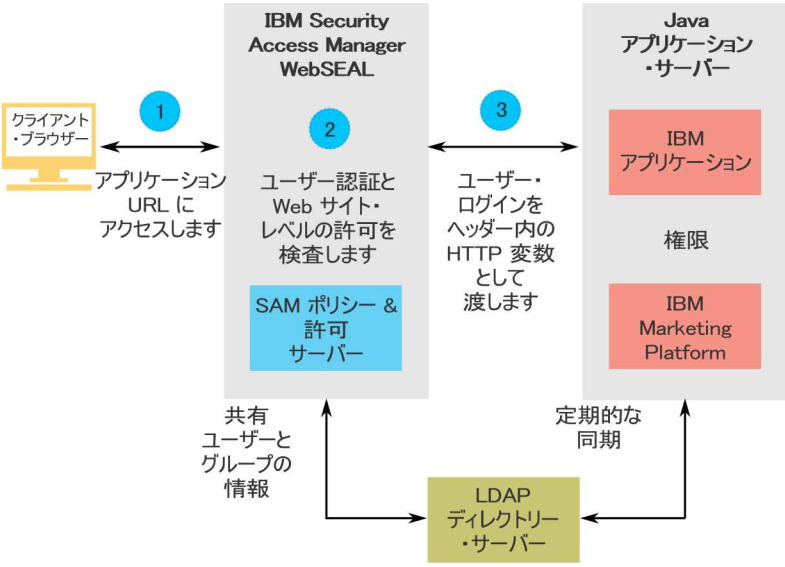
Web アクセス制御の統合図

次の図は、IBM Marketing Software が SiteMinder および LDAP ディレクトリー・サーバーと連携してしてユーザーの認証と権限付与を行う方法を示しています。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017



次の図は、IBM Marketing Software が IBM Security Access Manager および LDAP ディレクトリー・サーバーと連携してユーザーの認証と権限付与を行う方法を示しています。



コンテキスト・ルートについて

ご使用の Web アクセス制御システムの URL の保護を解除して、IBM Marketing Software 製品のさまざまな機能を使用可能にする必要があります。このタスクを実行するには、製品のコンテキスト・ルートを URL に組み込む必要があります。

以下の表は、この章で言及されている IBM Marketing Software 製品のデフォルト・コンテキスト・ルートのリストを示しています。ご使用のインストール済み環

境では非デフォルト・コンテキスト・ルートが使用されているかもしれませんが、通常、ほとんどのインストール済み環境では、デフォルトを使用できます。

この章の例では、デフォルト・コンテキスト・ルートを使用します。ご使用の環境で非標準コンテキスト・ルートを使用する場合は、例の URL で示されているコンテキスト・ルートを、ご使用の環境のコンテキスト・ルートに変更する必要があります。

表 *46. IBM Marketing Software* 製品のコンテキスト・ルート

製品	コンテキスト・ルート
Marketing Platform	unica
Campaign	キャンペーン
Contact Optimization	Campaign/optimize
Marketing Operations	plan
Distributed Marketing	collaborate
Interact	Campaign/interact

SiteMinder との統合の前提条件

IBM Marketing Software と Netegrity SiteMinder を統合するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- Web エージェントおよびポリシー・サーバーを使用するように、SiteMinder を構成する必要があります。
- IBM Marketing Software アプリケーションに対する URL 要求でログイン名を HTTP 変数として渡すように、SiteMinder を構成する必要があります。
- IBM Marketing Software プロパティーの「**Web** アクセス制御ヘッダー変数」を、SiteMinder がログイン名に使用する変数の名前に設定する必要があります。

  SiteMinder ログイン名の変数のデフォルト名は `sm_user` です。
- グループ・メンバーとユーザー・プロパティーを格納するためのリポジトリーとして LDAP を使用するように、SiteMinder ポリシー・サーバーを構成する必要があります。
- SiteMinder をホストする Web サーバーで提供される IBM Marketing Software アプリケーション URL と、IBM Marketing Software アプリケーションをホストする Java アプリケーション・サーバーは、同一のパスを参照していなければなりません。
- SiteMinder をホストする Web サーバーの構成では、Java アプリケーション・サーバーの IBM Marketing Software アプリケーション URL に要求をリダイレクトするように指定する必要があります。
- IBM Marketing Software アプリケーションにアクセスする必要があるすべてのユーザーに、SiteMinder を介した HTTP `GET` および `POST` 要求のために IBM Marketing Software Web アプリケーションにアクセスできる権限を SiteMinder 内で付与する必要があります。

特定の機能を有効にしたり、特定の IBM Marketing Software 製品をサポートしたりするために必要な設定については、このセクションの残りの部分を参照してください。

IBM Marketing Software 製品のための SiteMinder の構成

この手順の説明に従って SiteMinder 内のオブジェクトを無保護にし、IBM Marketing Software 製品が正しく機能できるようにします。

手順

1. SiteMinder の「ポリシー・サーバーの管理 **(Administer Policy Server)**」領域にログインし、「ドメイン」をクリックします。
2. IBM のインストール先に適用するレルムを選択し、「**unprotecturl**」を右クリックして「レルムのプロパティー **(Properties of Realm)**」を選択します。
3. 次の表に示した該当する URL のそれぞれについて、「リソース・フィルター **(Resource Filter)**」テキスト・ボックスに URL を入力し、「デフォルトのリソース保護 **(Default Resource Protection)**」で、「無保護 **(Unprotected)**」を選択します。

表 47. *IBM Marketing Software* 製品に必要な無保護オブジェクト

製品またはフィーチャー	オブジェクト
Campaign	• /Campaign/services/CampaignServices30Service • /Campaign/FlowchartNotifyScheduler • /Campaign/initOfferListResolution.udo • /Campaign/getOfferListResolutionStatus.udo • /Campaign/OperationMonitor • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/deepsearch/*partition* *partition* をパーティション名に置き換えてください。 Engage との統合が実装されているときは、以下が適用されます。 以下の URL では、*partition* をパーティション名に置き換えてください。 • http://*host:port*/Campaign/jsp/engage/engageHome.jsp • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/engage/offers • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/engage/offer • http://*host:port*/Campaign/servlet/EngageUpload • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/engageimportlist/*partition* • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/engageimportlist/*partition*/*jobid* この URL は、インポート・ジョブの状況の確認用です。*jobid* をジョブ ID に置き換えてください。 • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/engageimportlist/*partition*/schedule • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/engageimportlist/*partition*/*channel*/schedule この URL は、プッシュ・メッセージまたは SMS メッセージの送信用です。チャネルは sms かまたは push です。
Distributed Marketing	• /collaborate/affiniumcollaborate.jsp • /collaborate/services/CollaborateIntegrationServices1.0 • /collaborate/flowchartRunNotifyServlet • /collaborate/js/js_messages.jsp • /collaborate/js/format_symbols.jsp • /collaborate/alertsService
eMessage	/Campaign/emessage/eventSinkServlet

表 47. *IBM Marketing Software* 製品に必要な無保護オブジェクト (続き)

製品またはフィーチャー	オブジェクト
Interact	• /Campaign/interact/saveFlowchartAction.udo • /Campaign/interact/flowchartEventPatterns.udo • /Campaign/interact/testRunFlowchart.udo • /Campaign/interact/getProfileDataAction.udo • /Campaign/interact/manageIPB.udo • /Campaign/initOfferListResolution.udo • /Campaign/getOfferListResolutionStatus.udo
Marketing Operations	• /plan/errorPage.jsp • /plan/alertsService • /plan/services • /plan/services/collabService • /plan/services/PlanIntegrationServices/1.0 • /plan/affiniumplan.jsp • /plan/invalid_user.jsp • /plan/js/js_messages.jsp • /plan/js/format_symbols.jsp • /unica/servlet/AJAXProxy
Contact Optimization	• /Campaign/optimize/ext_runOptimizeSession.do • /Campaign/optimize/ext_optimizeSessionProgress.do • /Campaign/optimize/ext_doLogout.do
IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition	/unica/rest/spssUser
Marketing Platform データ・フィルター	/unica/servlet/DataFiltering
IBM Marketing Software 通知	• unica/servlet/alertAJAXProxy • unica/notification/alertsCount
IBM Marketing Software スケジューラー	/unica/servlet/SchedulerAPIServlet

関連タスク:

『SiteMinder でのシングル・ログアウトの有効化』

SiteMinder でのシングル・ログアウトの有効化

ユーザーが IBM Marketing Software アプリケーションからログアウトすると同時に SiteMinder からもログアウトできるようにするには、SiteMinder を以下のように構成します。

手順

1. SiteMinder の「ポリシー・サーバーの管理 **(Administer Policy Server)**」領域にログインし、「`logoffUri`」プロパティーを IBM Marketing Software ログアウト・ページの URI に設定します。

   例: `/`*`sm_realm`*`/unica/j_spring_security_logout`。ここで *`sm_realm`* は SiteMinder セキュリティー・レルムで、 `unica` は Marketing Platform コンテキスト・ルートです。

2. IBM Marketing Software ログアウト・ページ `/unica/jsp/frameworklogout.jsp` の保護を解除します。これは、ログアウト・ページを表示するときに SiteMinder がユーザーに再度のサインインを強制することがないようにするためです。

関連タスク:

170 ページの『IBM Marketing Software 製品のための SiteMinder の構成』

IBM Security Access Manager 統合の前提条件

IBM Marketing Software と IBM Security Access Manager を統合するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- IBM Security Access Manager WebSEAL ジャンクションを構成して、 IBM Marketing Software アプリケーションに対する URL 要求で、ユーザー名 (完全 DN ではなく短縮) を HTTP 変数として渡す必要があります。
- IBM Marketing Software プロパティーの「`Web` **アクセス制御ヘッダー変数**」を、Security Access Manager がログイン名に使用する変数の名前に設定する必要があります。

  Security Access Manager ログイン名の変数のデフォルト名は `iv-user` です。
- グループ・メンバーとユーザー属性を格納するためのリポジトリーとして LDAP を使用するように、IBM Security Access Manager ポリシー・サーバーを構成する必要があります。
- WebSEAL ジャンクションで定義されている IBM Marketing Software アプリケーション URL と IBM Marketing Software アプリケーションをホストする Java アプリケーション・サーバーは、同一のパスを参照しなければなりません。
- IBM Marketing Software アプリケーションにアクセスする必要があるユーザーはすべて、適切な権限でアクセス制御リスト (ACL) に追加されたグループに属している必要があります。Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーを指す WebSEAL ジャンクションを、この ACL に接続する必要があります。

注**:** ユーザーが IBM Marketing Software アプリケーションからログアウトしても、IBM Security Access Manager から自動的にログアウトされるわけではありません。IBM Security Access Manager からログアウトするには、IBM Marketing Software アプリケーションからログアウトした後で、ブラウザーを閉じる必要があります。

IBM Marketing Software 製品対応 IBM Security Access Manager の構成

この手順の説明に従って IBM Security Access Manager 内のオブジェクトを無保護にし、IBM Marketing Software 製品が正しく機能できるようにします。

手順

1. Web Portal Manager を使用して、ドメイン管理者としてドメインにログインします。
2. 「**ACL**」>「**ACL** の作成」をクリックし、「名前」および「説明」フィールドに入力して、「適用」をクリックします。
3. 「**ACL**」>「**ACL** のリスト表示 **(List ACL)**」をクリックして、「ACL の管理 (Manage ACLs)」ページから、使用する ACL ポリシーのリンクをクリックします。
4. 「ACL プロパティー」ページで「作成」をクリックして、次のようにして ACL 用の 2 つのエントリーを作成します。
   - 1 つ目のエントリーについては、項目タイプを「非認証」に設定し、「**Trx -** 全探索、読み取り、実行 **(Trx - Traverse, read, and execute)**」権限を付与します。
   - 2 つ目のエントリーについては、項目タイプを「その他 **(Any-other)**」に設定し、「**Trx -** 全探索、読み取り、実行 **(Trx - Traverse, read and execute)**」権限を付与します。
5. ACL の「ACL プロパティー」ページにある「付加」タブで、製品のインストール済み環境に必要な無保護オブジェクトを付加します。

   IBM Security Access Manager での完全パス (WebSEAL から始まるパス) を使用してください。

表 48. *IBM Marketing Software* 製品に必要な無保護オブジェクト

製品またはフィーチャー	オブジェクト
Campaign	• *WebSEAL junction*/Campaign/services/CampaignServices30Service • *WebSEAL junction*/Campaign/FlowchartNotifyScheduler • *WebSEAL junction*/Campaign/initOfferListResolution.udo • *WebSEAL junction*/Campaign/getOfferListResolutionStatus.udo • *WebSEAL junction*/Campaign/OperationMonitor • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/deepsearch/*partition* *partition* をパーティション名に置き換えてください。 Engage との統合が実装されているときは、以下が適用されます。 以下の URL では、*partition* をパーティション名に置き換えてください。 • http://*host:port*/Campaign/jsp/engage/engageHome.jsp • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/engage/offers • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/engage/offer • http://*host:port*/Campaign/servlet/EngageUpload • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/engageimportlist/*partition* • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/engageimportlist/*partition*/*jobid* この URL は、インポート・ジョブの状況の確認用です。*jobid* をジョブ ID に置き換えてください。 • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/engageimportlist/*partition*/schedule • http://*host:port*/Campaign/api/campaign/rest/engageimportlist/*partition*/*channel*/schedule この URL は、プッシュ・メッセージまたは SMS メッセージの送信用です。チャネルは sms かまたは push です。
Distributed Marketing	• *WebSEAL junction*/collaborate/affiniumcollaborate.jsp • *WebSEAL junction*/collaborate/services/CollaborateIntegrationServices1.0 • *WebSEAL junction*/collaborate/flowchartRunNotifyServlet • *WebSEAL junction*/collaborate/js/js_messages.jsp • *WebSEAL junction*/collaborate/js/format_symbols.jsp • *WebSEAL junction*/collaborate/alertsService
eMessage	*WebSEAL junction*/Campaign/emessage/eventSinkServlet

表 48. *IBM Marketing Software* 製品に必要な無保護オブジェクト (続き)

製品またはフィーチャー	オブジェクト
Interact	• *WebSEAL junction*/Campaign/interact/flowchartEventPatterns.udo • *WebSEAL junction*/Campaign/interact/saveFlowchartAction.udo • *WebSEAL junction*/Campaign/interact/testRunFlowchart.udo • *WebSEAL junction*/Campaign/interact/getProfileDataAction.udo • *WebSEAL junction*/Campaign/interact/manageIPB.udo • *WebSEAL junction*/Campaign/initOfferListResolution.udo • *WebSEAL junction*/Campaign/getOfferListResolutionStatus.udo
Marketing Operations	• *WebSEAL junction*/plan/services • *WebSEAL junction*/plan/errorPage.jsp • *WebSEAL junction*/plan/alertsService • *WebSEAL junction*/plan/services/collabService • *WebSEAL junction*/plan/services/PlanIntegrationServices/1.0 • *WebSEAL junction*/plan/affiniumplan.jsp • *WebSEAL junction*/plan/invalid_user.jsp • *WebSEAL junction*/plan/js/js_messages.jsp • *WebSEAL junction*/plan/js/format_symbols.jsp • *WebSEAL junction*/unica/servlet/AJAXProxy
Contact Optimization	• *WebSEAL junction*/Campaign/optimize/ext_runOptimizeSession.do • *WebSEAL junction*/Campaign/optimize/ext_optimizeSessionProgress.do • *WebSEAL junction*/Campaign/optimize/ext_doLogout.do
IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition	*WebSEAL junction*/unica/rest/spssUser
Marketing Platform データ・フィルター	*WebSEAL junction*/unica/servlet/DataFiltering。
IBM Marketing Software 通知	• *WebSEAL junction*/unica/servlet/DataFiltering • *WebSEAL junction*/unica/servlet/alertAJAXProxy • *WebSEAL junction*/unica/notification/alertsCount
IBM Marketing Software スケジューラー	*WebSEAL junction*/unica/servlet/SchedulerAPIServlet

表 48. *IBM Marketing Software* 製品に必要な無保護オブジェクト (続き)

製品またはフィーチャー	オブジェクト
ユーザーが IBM Marketing Software アプリケーションからログアウトしたら IBM Security Access Manager からもログアウトできるようにする	• *WebSEAL junction*/unica/j_spring_security_logout • *WebSEAL junction*/unica/jsp/frameworklogout.jsp

構成プロセスのロードマップ: IBM Marketing Software と Web アクセス制御システムとの統合

この構成プロセスのロードマップを使用して、IBM Marketing Software と Web アクセス制御システムを統合するために必要なタスクに目を通してください。「トピック」列には、タスクについて詳しく説明しているトピックへのリンクが記されています。

表 49. 構成プロセスのロードマップ: *IBM Marketing Software* と *Web* アクセス制御システムとの統合

トピック	情報
『LDAP 統合の実行』	「同期のテスト」のステップで中断して、LDAP 統合の指示に従ってください。
『IBM Marketing Software の Web アクセス制御接続プロパティーの設定』	「構成」ページで、Web アクセス制御統合のプロパティーを設定します。
154 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再始動』	このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。
178 ページの『Web アクセス制御の同期化と IBM Marketing Software ログインのテスト』	ユーザーとグループが Web アクセス制御システムで正しく同期していること、および IBM Marketing Software にログインできることを確認してください。

LDAP 統合の実行

LDAP 統合に必要なすべての手順を実行します。

IBM Marketing Software の Web アクセス制御接続プロパティーの設定

Web アクセス制御統合を構成するには、いくつかの構成プロパティーを設定します。

手順

次の表で説明されている方法で、「設定」&「構成」ページでプロパティーの値を設定します。
各プロパティーを設定する方法について詳しくは、関連した参照情報を参照してください。

表 *50. Web* アクセス制御統合を構成するためのプロパティー

プロパティー	値
IBM Marketing Software ｜ IBM Marketing Platform ｜ セキュリティー ｜ ログイン方法の詳細	「`Web アクセス制御`」を選択します。
IBM Marketing Software ｜ IBM Marketing Platform ｜ セキュリティー ｜ ログイン方法の詳細 ｜ Web アクセス制御 ｜ ユーザー名パターン	Web アクセス制御ソフトウェアの HTTP ヘッダー変数からユーザー・ログインを抽出するために使用する Java 正規表現です。正規表現の中に XML 文字があれば、それを XML エスケープする必要があります。SiteMinder および IBM Security Access Manager の推奨値は `¥w*` です。
IBM Marketing Software ｜ IBM Marketing Platform ｜ セキュリティー ｜ ログイン方法の詳細 ｜ Web アクセス制御 ｜ Web アクセス制御ヘッダー変数	Web アクセス制御ソフトウェアで構成されている HTTP ヘッダー変数。Web アプリケーション・サーバーに送信されます。デフォルトでは、SiteMinder は `sm_user` を使用し、IBM Security Access Manager は `iv-user` を使用します。IBM Security Access Manager の場合、この値を IBM HTTP ストリングではなく、IBM Raw ストリングのユーザー名コンポーネントに設定します。
IBM Marketing Software ｜ 一般 ｜ ナビゲーション ｜ IBM Marketing Platform URL	`http://`*`sm_host:sm_port`*`/`*`sm_realm`*`/unica` に設定します。 ここで • *`sm_host`* は、SiteMinder インストールされているマシンの名前 • *`sm_port`* は `SiteMinder のポート番号` • *`sm_realm`* は SiteMinder のレルム

関連資料:

307 ページの『IBM Marketing Platform ｜ セキュリティー ｜ ログイン方法の詳細 ｜ Web アクセス制御』

292 ページの『IBM Marketing Software ｜ 一般 ｜ ナビゲーション』

Web アプリケーション・サーバーの再始動

構成変更を確実に適用するために、Web アプリケーション・サーバーを再始動してください。

Web アクセス制御の同期化と IBM Marketing Software ログインのテスト

統合をテストするには、この手順に従います。

手順

1. Web アクセス制御システムに同期されていて Marketing Platform へのアクセス権限を持っている LDAP アカウントを使用して、Web アクセス制御システムにログインします。
2. 以下のことを確認してください。
   - ユーザーが予期したとおりにインポートされている。
   - グループが予期したとおりにインポートされている
   - IBM Marketing Software グループのメンバーシップが、予期される LDAP グループへのマッピングと一致している。
3. ブラウザーで Marketing Platform の URL にアクセスし、ログインします。

   IBM Marketing Software のログイン画面が表示されずに IBM Marketing Software にアクセスできるはずです。
4. Web アクセス制御ソフトウェアが Netegrity SiteMinder である場合は、以下のガイドラインに従って問題を解決してください。
   - IBM Marketing Software のログイン画面が表示される場合は、ログインに使用したユーザー・アカウントが SiteMinder に同期されていない可能性があります。
   - IBM Marketing Software にアクセスできない場合は、SiteMinder の構成が正しいことを確認してください。SiteMinder TestTool を使用して、ログインに使用したユーザー・アカウントが SiteMinder で認可されていて IBM Marketing Software の URL へのアクセス権限を付与されているかどうかを確認することができます。
   - IBM Marketing Software にアクセスはできるが、ナビゲーションが正常に機能しない場合、またはイメージが表示されない場合は、SiteMinder をホストする Web サーバーと Marketing Platform をホストする Java アプリケーション・サーバーが同一のパスを使用して Marketing Platform を参照しているかどうか確認してください。

SSL タイプの WebSEAL ジャンクションを使用した統合の構成

SSL タイプの WebSEAL ジャンクションを使用する IBM Security Access Manager との Marketing Platform の統合を構成する場合は、この手順に従ってください。

このタスクについて

これらの手順の詳細については、IBM Security Access Manager およびご使用の Web アプリケーション・サーバーの付属資料を参照してください。

手順

1. SSL 証明書を生成するか購入して、それを使用するように Web アプリケーション・サーバーを構成します。
2. webSEAL 証明書を作成し、それを使用するように IBM Security Access Manager を構成します。
3. webSEAL 証明書を Web アプリケーション・サーバーにインポートします。

4. Web アプリケーション・サーバー証明書を IBM Security Access Manager にインポートします。
5. IBM Security Access Manager に SSL タイプの WebSEAL ジャンクションを作成します。

   複数の IBM Marketing Software 製品をインストールした場合は、製品ごとに別々のジャンクションを作成してください。
6. インストールされた製品ごとに、「設定と構成 **(Settings & Configuration)**」ページでナビゲーション URL 構成プロパティーを設定します。

   値は、その製品に使用される webSEAL ジャンクションを反映していなければなりません。次のパターンを使用します。

   `https://`*`machine_name_or_IP_address.domain_name:port_number/webSEAL_junction/context-root`*

   IBM Marketing Software にアクセスするには、次のような URL を使用します。

   `https://`*`machine_name_or_IP_address.domain_name:port_number/webSEAL_junction`*`//unica`
7. このガイドの他の部分に記載されている説明に従って、IBM Security Access Manager 内の URL を無保護にします。

関連概念:

185 ページの『第 15 章 片方向 SSL の実装』

第 14 章 アラートおよび通知の管理

IBM Marketing Platform は、 IBM Marketing Software 製品によって送信されるシステム・アラートおよびユーザー通知をサポートします。

製品によって送信されるシステム・アラートおよびユーザー通知は、以下のようにユーザー・インターフェースに表示されます。

- アラートには、システム・イベントに関する情報が含まれています。アラートは、ユーザーがログインしたときにポップアップ・ウィンドウに表示されます。

  例としては、計画されたまたは計画外のサーバー・シャットダウンなどがあります。
- 通知には、ユーザーが関心を持つアイテムに対する変更、またはユーザーが実行する必要があるタスクに関する、ユーザー固有の情報が含まれています。ユーザーは、ウィンドウの右上にあるエンベロープ・アイコンをクリックして、それらを表示できます。

  例としては、フローチャートまたはメーリング・リストの更新、あるいは割り当てられたタスクの期限に関する覚え書などがあります。

Marketing Platform でアラートおよび通知が送信されるように構成されている場合、ユーザーはアラートおよび通知を E メールで受信するようサブスクライブすることもできます。

IBM Marketing Software スケジューラーは、Marketing Platform 内で、通知機能を使用します。

関連概念:

97 ページの『スケジュール通知』

関連タスク:

182 ページの『IBM Marketing Software での電子メールによる通知の構成』

アラートおよび通知のサブスクリプション

Marketing Platform でシステム・アラートおよび通知が送信されるように構成されている場合、ユーザーはシステム・アラートおよび通知を E メールで受信するように設定できます。また、サブスクライブのレベルを選択することもできます。

例えば、重要なシステム・アラートのみを受信したり、すべての通知を受信したりするように選択できます。サブスクリプション・レベルは、システム・アラートと通知を送信する製品によって異なります。

注: すべてのシステム・アラートは常に、ユーザーが IBM Marketing Software にログインしたときに、ポップアップ・ウィンドウに表示されます。ユーザーは、サブスクリプションを変更することでこれらを制御することはできません。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

ユーザーが IBM Marketing Software にログインすると、新規または未読のアラートがある場合にのみ、「システム・アラート」ウィンドウが表示されます。ユーザーは「システム・アラート」ウィンドウでアラートを選択し、「既読マークの付加」をクリックすることで、アラートに既読マークを付けることができます。

システム・アラートおよび通知サブスクリプションの設定

管理者権限を持たないユーザーは、この手順に従って、システム・アラートと通知のサブスクリプションを独自に設定することができます。

手順

1. IBM Marketing Software にログインして、「**設定**」>「**ユーザー**」を選択します。

   アカウントの詳細ページが開きます。
2. アカウントの詳細ページで、「通知サブスクリプション」をクリックします。
3. チェック・ボックスを使用して受信する通知のレベルと、通知をユーザー・インターフェース、E メール、またはその両方で受信するか、あるいはまったく受信しないかを選択します。
4. 「送信」をクリックして変更を保存します。

IBM Marketing Software での電子メールによる通知の構成

Marketing Platform を構成して、ユーザーにシステム・アラートと通知の E メールを送信するには、この手順に従います。開始する前に、E メール・サーバーをセットアップしておく必要があります。

始める前に

メール・サーバーについて、以下の情報を入手してください。

- メール・サーバーが使用するプロトコル
- メール・サーバーが listen するポート
- メール・サーバーをホストするマシンの名前
- メール・サーバーが認証を必要とするかどうか
- メール・サーバーが認証を必要とする場合、メール・サーバーのアカウント名とパスワード

このタスクについて

ヒント: この手順の実行に関する追加の詳細情報が必要な場合は、関連した参照情報を参照してください。

手順

1. メール・サーバーで認証が必要とされる場合は、メール・サーバーのアカウント名とパスワードをデータ・ソースとして Marketing Platform ユーザー・アカウントに保存します。

   LDAP サーバーからインポートしたユーザー・アカウントではなく、内部 Marketing Platform ユーザー・アカウントを使用します。

ステップ 3 で使用するため、Marketing Platform ユーザー名とデータ・ソース名をメモしておいてください。

2. Marketing Platform の管理者権限を持つユーザーとして IBM Marketing Software にログインします。
3. 「設定」>「構成」ページで、以下のカテゴリーの構成プロパティーを設定します。
   - **一般 | 通信 | E メール**
   - **IBM Marketing Platform | 通知**

   メール・サーバーについて取得した情報を使用して値を設定します。

関連概念:

181 ページの『第 14 章 アラートおよび通知の管理』

関連タスク:

13 ページの『内部ユーザーのデータ・ソースの追加』

関連資料:

297 ページの『IBM Marketing Software | 一般 | 通信 | E メール』
327 ページの『IBM Marketing Platform | 通知』

第 15 章 片方向 SSL の実装

このセクションでは、IBM Marketing Software における片方向 SSL について説明します。

ネットワークを介して接続する 2 つのアプリケーション間で保護する必要がある通信はすべて、Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルを使用して送信することができます。

SSL は、次のようにしてセキュア接続を提供します。

- アプリケーションが別のアプリケーションの ID を認証できるようにする
- 秘密鍵を使用して、SSL 接続を介して転送されたデータの暗号化および暗号化解除を行う

アプリケーションに SSL が構成されている場合は、URL にあるとおり、HTTP ではなく HTTPS が Web トラフィックに使用されます。

プロセスが相互に通信する場合、要求を出すプロセスはクライアントとして動作し、要求に応答するプロセスはサーバーとして動作します。完全なセキュリティーを目指すには、IBM Marketing Software 製品とのすべての形式の通信に SSL を実装する必要があります。

SSL は、片方向または両方向に構成できます。片方向 SSL では、サーバーはクライアントに対して証明書を提示する必要がありますが、クライアントはサーバーに対して証明書を提示する必要はありません。SSL 接続のネゴシエーションを成功させるには、クライアントがサーバーを認証する必要があります。サーバーは、すべてのクライアントからの接続を受け入れます。

関連タスク:

179 ページの『SSL タイプの WebSEAL ジャンクションを使用した統合の構成』

SSL 証明書の概要

SSL 証明書について全般的に理解するには、このセクションを読んでください。

証明書とは

証明書は、サーバーを何らかの名前付きエンティティーとして識別するデジタル署名です。証明書は、サーバーの ID を保証する認証局 (CA) によって署名されているか、または自己署名されています。 Verisign や Thawte は CA の例です。自己署名証明書とは、証明書が識別を主張するエンティティーが CS と同一である場合の証明書です。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

サーバー・サイドの証明書

SSL 通信の提供を目的としているすべてのサーバーは、アプリケーション・サーバーであるか Campaign リスナーなどの IBM Marketing Software アプリケーションであるかに関係なく、証明書を提供する必要があります。

クライアント・サイドのトラストストア

クライアントがサーバーの証明書を受け取った場合、証明書を信頼するかどうかはクライアントの判断によります。証明書がクライアントのトラストストアに存在する場合、クライアントは自動的にサーバーの証明書を信頼します。トラストストアは、信頼できる証明書のデータベースです。

最近のブラウザーには、CA が承認した共通の証明書がロードされているトラストストアを備えたものがあります。大手マーチャントの Web サイトで、保護されたサイトに入ったときにプロンプトが出ないのはこのためです。大手マーチャントでは、CA によって署名された証明書を使用しています。ただし、自己署名証明書を提供する IBM アプリケーションにログインした場合は、プロンプトが表示されます。

ブラウザーは、サーバーのホスト名が証明書の中のサブジェクト名と一致していることを確認します (サブジェクト名は、証明書を要求するときに提供する識別名に使用される共通名です)。この 2 つの名前が一致しない場合、ブラウザーから警告が出ることがあります。

ブラウザーが、認識できない証明書 (例えば、自己署名証明書) で保護された IBM アプリケーションにアクセスすると、ダイアログ・ウィンドウが開き、ユーザーに続行するかどうかを尋ねます。ユーザーがローカル側のトラストストアに証明書をインストールすることを選択すると、このプロンプトは表示されなくなります。

IBM Marketing Software でのクライアントおよびサーバーの役割

IBM Marketing Software アプリケーション・コンポーネントは、状況に応じて、通信時にクライアントまたはサーバーのどちらかとして動作することができます。

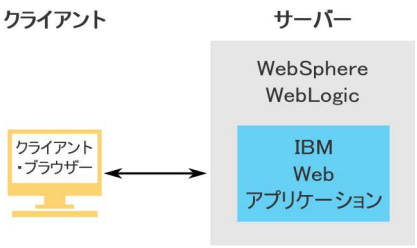
ほとんどの IBM Marketing Software アプリケーションは、2 つの部分から成っています。

- Web アプリケーション。Web アプリケーションは、ユーザーがブラウザー経由でアクセスするコンポーネントです。
- サーバー (Campaign リスナーおよび Marketing Platform API サーバーなど)。このコンポーネントにはプログラムでアクセスします。

次の例と図では、IBM コンポーネントが各種の通信で果たす役割を示しています。

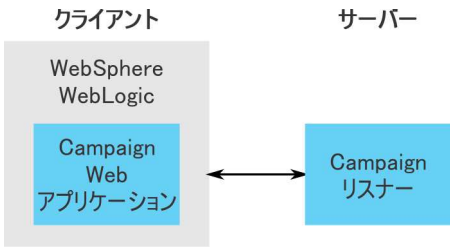
例 1 - ブラウザーと IBM Marketing Software Web アプリケーションの通信

ユーザーがブラウザーを介して IBM Marketing Software Web アプリケーションと通信する場合、ブラウザーはクライアントで、IBM Marketing Software Web アプリケーションはサーバーです。



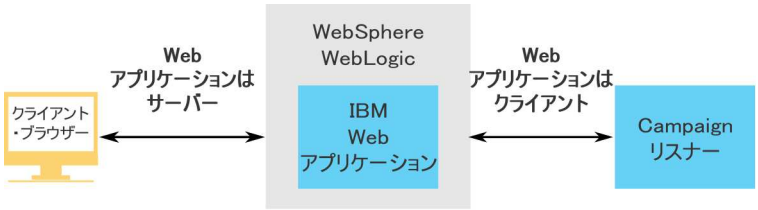
例 2 - 1 つの IBM Marketing Software アプリケーションのコンポーネント間の通信

単一の IBM Marketing Software アプリケーションの 2 つのコンポーネントも、プログラムで相互に通信できます。例えば、Campaign Web アプリケーションが Campaign リスナーに要求を送信する場合、Campaign Web アプリケーションはクライアントで、リスナーはサーバーです。



例 3 - 両方の役割を果たす IBM Marketing Software コンポーネント

IBM Marketing Software アプリケーション・コンポーネントは、一部の交換ではクライアントとして、別の交換ではサーバーとして通信できます。これらの関係の例を、以下の図に示します。



IBM Marketing Software における SSL

多くの IBM アプリケーション・コンポーネントは、通常の操作時にはサーバーとしてもクライアントとしても動作することができます。また、一部の IBM コンポーネントは Java で書かれ、一部は C++ で書かれています。これらの事項が、使用する証明書の形式を決定します。自己署名証明書を作成する場合も、CA から購入する場合も、形式を指定します。

IBM アプリケーションは、IBM サーバー・コンポーネントへの片方向 SSL 要求を行うクライアントとして機能する場合は、トラストストアを必要としません。

サーバーとして動作する Java コンポーネント

JSSE SSL の実装を使用して Java で作成され、アプリケーション・サーバーに配置された IBM アプリケーションの場合は、ご使用の証明書を使用するようにアプリケーション・サーバーを構成する必要があります。証明書は JKS 形式で格納する必要があります。

アプリケーション・サーバーに付属しているデフォルトの証明書を使用することはできません。

Java keytool を使用して Java アプリケーションの JKS 証明書を作成することができます。

サーバーとして動作する C++ コンポーネント

Campaign リスナーおよび Contact Optimization サーバー・コンポーネントは C++ で書かれており、GSKit で作成された .kdb 証明書を必要とします。

クライアントとして動作する Java コンポーネント

Java で書かれており、アプリケーション・サーバーに配置されている IBM アプリケーションについては、トラストストアは必要ありません。構成を簡単にするために、クライアントとして動作する IBM Java アプリケーションは、片方向 SSL 通信時にサーバーを認証しません。ただし、暗号化は行われます。

クライアントとして動作する C/C++ コンポーネント

C/C++ で書かれており、GSkit の実装を使用しているアプリケーションについては、トラストストアは必要ありません。Campaign リスナー、Contact Optimization サーバー・コンポーネント、および NetInsight は、このカテゴリーに該当します。

証明書の数

サーバーとして動作している IBM コンポーネントをホストするマシンごとに、別の証明書を使用するのが理想です。

複数の証明書を使用しない場合は、サーバーとして動作するすべての IBM コンポーネントに対して同じ証明書を使用できます。すべてのアプリケーションに対して一つの証明書を使用する場合、ユーザーが初めて IBM アプリケーションにアクセスするときに、ブラウザーによって証明書を受け入れるかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

関連タスク:

195 ページの『SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成』

構成プロセスのロードマップ: IBM Marketing Software での SSL の実装

この構成プロセスのロードマップを使用して、IBM Marketing Software で SSL を実装するために必要なタスクに目を通してください。「トピック」列には、タスクについて詳しく説明しているトピックへのリンクが記されています。

表 51. 構成プロセスのロードマップ: *IBM Marketing Software* での *SSL* の実装

トピック	情報
190 ページの『証明書の作成と構成』	証明書を取得または作成します。
195 ページの『SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成』	IBM アプリケーションが配置されているすべてのアプリケーション・サーバーで SSL ポートを有効にします。アプリケーション・サーバーのデフォルトの証明書を使用しない場合は、独自の証明書を使用するように構成します。
197 ページの『SSL 用の IBM Marketing Software の構成』	IBM Marketing Software で構成プロパティーを設定します。
208 ページの『SSL 構成の検証』	ご使用のそれぞれの IBM Marketing Software アプリケーションにログインします。

SSL の証明書

この手順は、独自の証明書を作成して構成する方法を示しています。SSL を使用するように構成する IBM Marketing Software ごとに、同様の手順を実行してください。Campaign と Engage の統合を構成する場合は、「*IBM Campaign and Engage Integration Guide for IBM Marketing Cloud*」を参照してください。

証明書を取得または作成するには、いくつかの方法があります。自己署名証明書を作成することもできますし、認証局 (CA) から証明書を取得することもできます。

自己署名証明書

自己署名証明書を作成する。

サーバーとして動作する C++ コンポーネントの場合は、GSKit を使用して `.kdb` 証明書を作成します。

Campaign リスナーは、IBM GSKit ライブラリーを使用して SSL を実装します。GSKit は Campaign とともにインストールされます。GSKit には、証明書ファイルを作成できる `gsk8capicmd_64` というコマンド・ライン・プログラムが入っています。サーバーとして動作する Java コンポーネントの場合は、Java keytool を使用して JKS 証明書を作成します。

認証局からの証明書

認証局 (CA) から証明書を取得する。

GS Kit を使用して要求を作成し、その要求を CA に送信して署名付き証明書を作成することができます。または、CA が全面的に提供する署名付き証明書を取得することができます。

署名付き証明書の取得方法に関する手順については、認証局の資料を参照してください。

証明書の作成と構成

この手順は、今回のセットアップのために独自の証明書を作成して構成する方法を記載しています。

このタスクについて

以下の手順は、Campaign および Marketing Platform の自己署名証明書を作成して構成する方法を示しています。

GSKit の使用について詳しくは、http://www.ibm.com/developerworks/security/tutorials/se-gskit/ を参照してください。他の IBM Marketing Software 製品の証明書を構成する場合も、これらのステップをガイドとして使用できます。

手順

1. GSKit を使用して、次のように SSL 証明書を生成します。
   a. 新しい鍵データベースを作成して初期化します。

      以下に例を示します。

      `gsk8capicmd_64 -keydb -create -populate -db Campaign.kdb -pw password -stash` Campaign の場合、`-stash` オプションは必須です。

   b. GSKit を使用して、次のように Campaign の自己署名証明書を生成し、それを鍵データベースに格納します。

      以下に例を示します。 `gsk8capicmd_64 -cert -create -db Campaign.kdb -dn "CN=example.com,O=domain,C=IN" -expire 3650 -pw password -size 1024 -label exampleLabel -default_cert yes`

   c. 証明書の公開部分をファイルに抽出します。

      クライアントが証明書を信頼するためには、その公開部分がクライアントに配布され、クライアントの鍵データベースに格納されなければなりません。このステップでは、Campaign 証明書の公開部分をエクスポートします。これを後のステップでインポートします。

      以下に例を示します。 `gsk8capicmd_64 -cert -extract -db Campaign.kdb -stashed -label exampleLabel -target Campaigncert.arm`

2. Campaign Web アプリケーションが配置されているアプリケーション・サーバーに `Campaigncert.arm` ファイルをインポートします。
   a. `Campaigncert.arm` ファイルを Campaign Web アプリケーション・サーバーにコピーします。
   b. 以下のステップを実行して、`Campaigncert.arm` ファイルを WebSphere Application Server の **`NodeDefaultTrustStore`** 内に追加します。
      1) 「セキュリティー」 > 「**SSL 証明書および鍵管理 (SSL Certificate and key management)**」 > 「鍵ストアおよび証明書 **(Key stores and certificates)**」をクリックします。

2) 「**NodeDefaultTrustStore**」 > 「署名者証明書」をクリックします。

3) 「追加」をクリックして、「別名」に別名を指定し、`Key.arm` ファイルのコピー場所のパスを指定します。

4) 「**OK**」をクリックします。

3. keytool を使用して、次のように Marketing Platform の Java ID 証明書を生成してインポートします。

   a. Marketing Platform ID 証明書を生成します。

      以下に例を示します。 `./keytool -genkey -alias PlatformClientIdentity -keyalg RSA -keystore PlatformClientIdentity.jks -keypass password -validity 3650 -dname "CN=example.com" -storepass password`

   b. 鍵ストア (この例では PlatformClientIdentity) にある証明書を、ファイル (この例では PlatformCertificate.cer) にエクスポートします。

      ```
      ./keytool -export -keystore PlatformClientIdentity.jks -storepass
      password -alias PlatformClientIdentity -file PlatformCertificate.cer
      ```

   c. エクスポートした証明書を Marketing Platform 鍵ストア (この例では PlatformTrust.jks) にインポートします。

      以下に例を示します。 `./keytool -import -alias PlatformClientIdentity -file PlatformCertificate.cer -keystore PlatformTrust.jks -storepass password`

4. IBM Campaign WebSphere Application Server から個人証明書と署名者証明書を抽出します。

   a. 「セキュリティー」 > 「**SSL 証明書および鍵管理 (SSL Certificate and key management)**」 > 「鍵ストアおよび証明書 **(Key stores and certificates)**」をクリックします。

   b. 「**NodeDefaultTrustStore**」 > 「個人証明書 **(Personal certificates)**」をクリックします。

   c. デフォルトの証明書を選択します。

   d. 「証明書ファイル名 **(Certificate file name)**」に証明書ファイル名を指定し、Campaign Web アプリケーション・サーバー内の有効なパスを指定して、「**OK**」をクリックします。

   e. 「**NodeDefaultTrustStore**」 > 「署名者証明書」をクリックします。

   f. デフォルトの証明書を選択します。

   g. 「証明書ファイル名 **(Certificate file name)**」に証明書ファイル名を指定し、Campaign Web アプリケーション・サーバー内の有効なパスを指定して、「**OK**」をクリックします。

5. 個人証明書と署名者証明書をリスナー鍵ストア・データベース内にインポートします。

   a. `ClientPersonal.cer` 証明書と `ClientSigner.cer` 証明書をリスナー・サーバーにコピーします。

   b. リスナー鍵ストア・データベース (`Campaigncert.kdb`) が作成された場所から **`gsk8capicmd_64`** コマンドを使用して、個人証明書と署名者証明書をリスナー鍵ストア・データベースにインポートします。

```
gsk8capicmd_64 -cert -add -db Campaigncert.kdb -stashed -label ClientPersonalKey -file ClientPersonal.cer
gsk8capicmd_64 -cert -add -db Key.kdb -stashed -label ClientSignerlKey -file ClientSigner.cer
```

6. Campaign と Marketing Platform の間で証明書を交換します。
   a. keytool を使用して、 Campaign 証明書を Marketing Platform ID および鍵ストアにインポートします。

      以下に例を示します。 `./keytool -import -file` *`PATH_TO_GSKit_certificate`*`/Campaigncert.arm -alias listenerkey2 -keystore` *`PATH_TO_JAVA_CERTIFICATE`*`/PlatformClientIdentity.jks ./keytool -import -file` *`PATH_TO_GSKit_certificate`*`/Campaigncert.arm -alias listenerkey2 -keystore` *`PATH_TO_JAVA_CERTIFICATE`*`/PlatformTrust.jks`

   b. GSKit を使用して、Marketing Platform 証明書を Campaign 鍵データベースにインポートします。

      以下に例を示します。 `gsk8capicmd_64 -cert -add -db Campaign.kdb -stashed -label PlatformClientIdentity -file` *`PATH_TO_JAVA_CERTIFICATE`*`/PlatformCertificate.cer`

7. keytool を使用して、Java 証明書と Campaign GSKit 証明書をアプリケーション・サーバーの Java 鍵ストアにインポートします。
   a. Marketing Platform Java 証明書をインポートします。

      以下に例を示します。 `./keytool -import -file` *`PATH_TO_JAVA_CERTIFICATE`*`/PlatformCertificate.cer -alias platformkey1 -keystore` *`APPLICATION_SERVER_HOME`*`/java/jre/lib/security/cacerts <Password: changeit>`

   b. Campaign GSKit 証明書をインポートします。

      以下に例を示します。 `keytool -import -file` *`PATH_TO_GSKit_certificate`*`/campaign.arm -alias CampaignListener -keystore` *`APPLICATION_SERVER_HOME`*`/java/jre/lib/security/cacerts`

8. Campaign リスナーで SSL が使用されている場合は、**unicaACListener** 設定で、**useSSL** を **TRUE** に設定します。使用されていない場合は、**FALSE** に設定します。
9. Campaign アプリケーション・サーバーと Campaign リスナーを再始動します。

クラスター環境用の証明書の作成と構成

この手順は、クラスター環境向けに独自の証明書を作成して構成する方法を記載しています。

始める前に

デフォルトの証明書を使用して、Campaign Web アプリケーションを SSL で構成する必要があります。

このタスクについて

以下の手順は、Campaign および Marketing Platform の自己署名証明書を作成して構成する方法を示しています。

IBM HTTP Server が Campaign Web アプリケーションおよび IBM Campaign リスナーの前に配置されているクラスター環境では、以下の手順に従って IBM Campaign リスナーを SSL で構成します。

GSKit の使用について詳しくは、http://www.ibm.com/developerworks/security/tutorials/se-gskit/ を参照してください。他の IBM Marketing Software 製品の証明書を構成する場合も、これらのステップをガイドとして使用できます。

この手順は、IBM WebSphere Application Server によって提供されるデフォルトの証明書の場合に適用できます。カスタム・セキュリティー証明書を使用する場合は、IBM WebSphere Application Server によって使用されるカスタム証明書の場合の手順に従う必要があります。

手順

IBM HTTP Server を SSL で構成するには、以下の手順を実行します。

1. GSKit を使用して、次のように SSL 証明書を生成します。
   a. 新しい鍵データベースを作成して初期化します。

      以下に例を示します。

      `gsk8capicmd_64 -keydb -create -populate -db IHS.kdb -pw password -stash` Campaign の場合、`-stash` オプションは必須です。

   b. GSKit を使用して、次のように Campaign の自己署名証明書を生成し、それを鍵データベースに格納します。

      以下に例を示します。 `gsk8capicmd_64 -cert -create -db IHS.kdb -dn "CN=*.in.ibm.com" -expire 3650 -pw password -size 1024 -label key -default_cert yes`

   c. 証明書の公開部分をファイルに抽出します。

      クライアントが証明書を信頼するためには、その公開部分がクライアントに配布され、クライアントの鍵データベースに格納されなければなりません。このステップでは、Campaign 証明書の公開部分をエクスポートします。これを後のステップでインポートします。

      以下に例を示します。 `gsk8capicmd_64 -cert -extract -db IHS.kdb -stashed -label key -target IHS.arm`

   d. `httpd.conf` ファイルで以下のモジュールを有効にします。

      以下に例を示します。

```
LoadModule ibm_ssl_module modules/mod_ibm_ssl.so

Listen 443
<VirtualHost *:443>
SSLEnable
```

```
</VirtualHost>
KeyFile /data/webservers/IBM/IHS/ssl/IHS.kdb
SSLStashFile /data/webservers/IBM/IHS/ssl/IHS.sth
SSLDisable
```

e. `httpd.conf` ファイルで鍵ファイル・パスを設定します。

f. IBM HTTP Server を再始動します。

2. IBM Campaign リスナーをホストするサーバーの鍵ストア・データベース・ファイルを生成します。

   a. IBM Campaign リスナーをホストするサーバーで、任意の場所から以下のコマンドを実行し、パスをメモしておきます。

```
gsk8capicmd_64 -keydb -create -populate -db Key.kdb -pw password -stash
gsk8capicmd_64 -cert -create -db Key.kdb -dn "CN=*.in.ibm.com" -expire 3650
  -pw password -size 1024
  -label key -default_cert yes
gsk8capicmd_64 -cert -extract -db Key.kdb -stashed -label key -target Key.arm
```

   b. 上記のコマンドを実行した場所に、以下のファイルが生成されていることを確認します。

      - `Key.arm`
      - `Key.crl`
      - `Key.kdb`
      - `Key.rdb`
      - `Key.sth`

3. `Key.arm` および `HIS.arm` ファイルを、Campaign Web アプリケーションが配置されているアプリケーション・サーバーにインポートします。

   a. `Key.arm` および `HIS.arm` ファイルを Campaign Web アプリケーション・サーバーにコピーします。

   b. 以下の手順を実行して、`Key.arm` および `HIS.arm` ファイルを WebSphere Application Server の **`NodeDefaultTrustStore`** 内に追加します。

      1) 「セキュリティー」 > 「**SSL** 証明書および鍵管理 **(SSL Certificate and key management)**」 > 「鍵ストアおよび証明書 **(Key stores and certificates)**」をクリックします。

      2) 「**NodeDefaultTrustStore**」 > 「署名者証明書」をクリックします。

      3) 「追加」をクリックして、「別名」を指定し、`Key.arm` および `HIS.arm` ファイルのコピー場所のパスを指定します。

      4) 「**OK**」をクリックします。

4. IBM WebSphere Application Server の個人証明書と署名者証明書を抽出します。

   a. 「セキュリティー」 > 「**SSL** 証明書および鍵管理 **(SSL Certificate and key management)**」 > 「鍵ストアおよび証明書 **(Key stores and certificates)**」をクリックします。

   b. 「**NodeDefaultTrustStore**」 > 「個人証明書」をクリックします。

   c. デフォルトの証明書を選択します。

   d. IBM Campaign Web アプリケーション・サーバー内の有効なパスを付けて個人証明書ファイル名を追加します。例: `/opt/IBM/IBMMS101/ClientPersonal.cer`。

e. 「**OK**」をクリックします。

f. 「**NodeDefaultTrustStore**」 > 「署名者証明書」をクリックします。

g. デフォルトの証明書を選択します。

h. IBM Campaign Web アプリケーション・サーバー内の有効なパスを付けて署名者証明書ファイル名を追加します。例: `/opt/IBM/IBMMS101/ClientSigner.cer`。

i. このフォルダーにナビゲートし、それらの証明書が両方ともフォルダー内にあることを確認します。

5. 個人証明書と署名者証明書を、IBM Campaign リスナーおよび IBM HTTP Server の鍵ストア・データベースにインポートします。

   a. `ClientPersonal.cer` 証明書と `ClientSigner.cer` 証明書をリスナー・サーバーにコピーします。 `key.kdb` ファイルを作成した場所と同じ場所を使用できます。

   b. リスナー鍵ストア・データベース (`key.kdb`) が作成された場所から **gsk8capicmd_64** コマンドを使用して、個人証明書と署名者証明書をリスナー鍵ストア・データベースにインポートします。

```
gsk8capicmd_64 -cert -add -db Key.kdb -stashed -label ClientPersonalKey -file ClientPersonal.cer
gsk8capicmd_64 -cert -add -db Key.kdb -stashed -label ClientSignerlKey -file ClientSigner.cer
```

   c. `ClientPersonal.cer` 証明書と `ClientSigner.cer` 証明書を IBM HTTP Server にコピーします。 `IHS.kdb` ファイルを作成した場所と同じ場所を使用できます。

   d. IBM HTTP Server 鍵ストア・データベース (`IHS.kdb`) が作成された場所から **gsk8capicmd_64** コマンドを使用して、個人証明書と署名者証明書をリスナー鍵ストア・データベースにインポートします。

6. Campaign リスナー鍵を IBM HTTP Server 鍵ストア・データベースにインポートし、IBM HTTP Server 鍵を Campaign 鍵ストア・データベースにインポートします。

   a. IBM HTTP Server 鍵 (`IHS.arm`) をリスナー・サーバーにコピーします。

   b. Campaign リスナー鍵ストア・データベース (`key.kdb`) が作成された場所から **gsk8capicmd_64** コマンドを使用して、IBM HTTP Server 鍵をリスナー鍵ストア・データベースにインポートします。

```
gsk8capicmd_64 -cert -add -db Key.kdb -stashed -label IHSKey -file IHS.arm
```

   c. Campaign リスナー鍵 (`Key.arm`) をリスナー・サーバーにコピーします。

   d. IBM HTTP Server 鍵ストア・データベース (`IHS.kdb`) が作成された場所から **gsk8capicmd_64** コマンドを使用して、Campaign リスナー鍵を IBM HTTP Server 鍵ストア・データベースにインポートします。

```
gsk8capicmd_64 -cert -add -db IHS.kdb -stashed -label IHSKey -file Key.arm
```

7. IBM Campaign アプリケーション・サーバーと IBM HTTP サーバーを再始動してから、IBM Campaign リスナーを開始します。

SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成

IBM Marketing Software アプリケーションが配置されているすべてのアプリケーション・サーバーで、採用を決定した証明書を使用するように Web アプリケーション・サーバーを構成します。

このタスクについて

これらの手順の実行について詳しくは、アプリケーション・サーバーの資料を参照してください。

関連概念:

187 ページの『IBM Marketing Software における SSL』

Cookie のセキュリティーの確認

いくつかの cookie は、クライアント・ブラウザーで適切に保護されない場合があります。cookies を保護しないと、アプリケーションは中間者攻撃およびセッション・ハイジャック攻撃に対してぜい弱なままになります。この問題を修正するには、以下の予防手段を取ります。

- 常に SSL の使用を強制して、ワイヤー上で代行受信されている cookie のリスクを減らします。
- Web アプリケーション・サーバーで、`secure` フラグおよび `httponly` フラグをすべての cookie に設定します。
  - `secure` フラグは、ブラウザーが HTTPS 接続のみを使用して cookie を送信するよう指示します。このフラグを設定する場合、相互に通信するすべてのアプリケーションで SSL を有効にする必要があります。
  - `httponly` フラグは、cookie がクライアント・サイドのスクリプトを介してアクセスされないようにします。

WebSphere での SSL のフラグの設定

WebSphere で `secure` フラグおよび `httponly` フラグを設定するには、以下の手順を使用します。

このタスクについて

`secure` フラグおよび `httponly` フラグを WebSphere 管理コンソールに設定します。

ヒント: 詳しくは、WebSphere の資料を参照してください。

手順

1. Marketing Platform のアプリケーション・レベルで、「セッション管理」にナビゲートし、「**Cookie** を有効にする」をクリックします。
2. 「**Cookie** を **HTTPS** セッションに制限」および「セッション **Cookie** を **HTTPOnly** に設定して、クロスサイト・スクリプティング・アタックを阻止します」にチェック・マークを付けます。
3. 変更を保存して、適用します。
4. Marketing Platform アプリケーションを停止して、再始動します。

WebLogic での SSL のフラグの設定

`secure` フラグおよび `httponly` フラグを設定するには、以下の手順を使用します。

このタスクについて

ヒント: 詳しくは、WebLogic の資料を参照してください。

手順

1. Marketing Platform がデプロイされ、実行されている場合、それを停止し、アンデプロイします。
2. Marketing Platform の WAR ファイルを抽出します。
3. `weblogic.xml` ファイルを編集して、`secure` フラグおよび `httponly` フラグを設定します。
4. Marketing Platform の WAR ファイルを再作成し、再デプロイ、および再始動します。

SSL 用の IBM Marketing Software の構成

SSL を使用するように IBM Marketing Software アプリケーションを構成するには、いくつかの構成プロパティーを設定する必要があります。このセクションに示す手順から、お客様のインストール環境に適した IBM Marketing Software 製品と SSL を使用して保護したい通信を選んで使用してください。

このタスクについて

セキュア接続で IBM Marketing Software インストールにアクセスする場合、また次の手順で説明されている方法でアプリケーション用のナビゲーション・プロパティーを設定する場合は、URL に `https` およびセキュア・ポート番号を使用する必要があります。デフォルトの SSL ポートは、WebLogic の場合は `7002`、WebSphere の場合は `8002` です。

Marketing Platform での SSL の構成

Marketing Platform で SSL を構成するには、この手順に従います。

手順

1. IBM Marketing Software にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。
2. 「一般 | ナビゲーション | `IBM Marketing Platform URL`」プロパティーの値を Marketing Platform URL に設定します。

   例: `https://`*`host.domain:SSL_port`*`/unica`

   ここで、

   - *`host`* は Marketing Platform がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
   - *`domain`* は IBM Marketing Software 製品がインストールされているお客様の企業ドメインです。
   - *`SSL_Port`* は Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーの SSL ポートです。

   URL が `https` で始まることに注意してください。

3. HTTP ポートおよび HTTPS ポートを設定するインストール済みの IBM Marketing Software 製品ごとに、「**ナビゲーション**」カテゴリーでプロパティーを見つけます。プロパティーの名前は製品によって異なる場合がありますが、その目的は明確なはずです。各製品について、製品が配置されているアプリケーション・サーバーの HTTP ポートおよび HTTPS ポートにこれらの値を設定します。
4. LDAP 統合を実装した場合は、『LDAP 統合を使った Marketing Platform での SSL の構成』で説明されている手順を実行してください。
5. データ・フィルター機能を使用する予定の場合は、『データ・フィルターを使った Marketing Platform での SSL の構成』で説明されている手順を実行してください。

関連タスク:

『LDAP 統合を使った Marketing Platform での SSL の構成』

199 ページの『データ・フィルターを使った Marketing Platform での SSL の構成』

クラスター環境における Platform での SSL の構成

クラスター環境にある IBM Platform で SSL を構成するには、この手順に従います。

手順

1. IBM Marketing Software にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。
2. `Affinium | Manager | Navigation` で、「**IBM Marketing Platform**」の URL に IBM Marketing Platform の URL を設定します。

   例: `https://<IHS_Host>/unica`。
3. `Affinium | Campaign | Navigation` で、「**serverURL**」に IBM Campaign の URL を設定します。

   例: `https://<IHS_Host>/Campaign`。
4. `Affinium | Campaign | server` で、「**fullContextPath**」に IBM Campaign の URL を設定します。

   例: `https://<IHS_Host>/Campaign`。
5. `Affinium | Campaign | unicaACListener` で、「**serverhost**」に `<IHS Host>` を設定し、「**useSSL**」に `True` を設定します。

LDAP 統合を使った Marketing Platform での SSL の構成

Marketing Platform で SSL を構成するには、この手順に従います。

手順

1. 『Marketing Platform での SSL の構成』で説明されている手順を実行します (まだ実行していない場合)。

2. IBM Marketing Software にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

   「構成」ページが表示されます。

3. 「IBM Marketing Software | IBM Marketing Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP」カテゴリーに移動し、「LDAP 接続に SSL が必要」プロパティーの値を true に設定します。

   この設定により、Marketing Platform は、ユーザーのログイン時に SSL を使用して LDAP サーバーに接続することが必要になります。

4. 「IBM Marketing Software | IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP 同期」カテゴリーに移動し、以下の値を設定します。
   - 「LDAP プロバイダー URL」プロパティーの値を ldaps://*host.domain*:*SSL_Port* に設定します。

     ここで、
     - *host* は、LDAP サーバーの名前または IP アドレスです。
     - *domain* は、LDAP サーバーのドメインです。
     - *SSL_Port* は、LDAP サーバーの SSL ポートです。

     例: ldaps://LDAPMachine.myCompany.com:636

     URL が ldaps で始まることに注意してください。

     LDAP サーバーのデフォルトの SSL ポートは、636 です。
   - 「LDAP 接続に SSL が必要」プロパティーの値を true に設定します。

     この設定により、Marketing Platform は、LDAP サーバーと同期する際に SSL を使用して LDAP サーバーに接続することが必要になります。

関連タスク:

197 ページの『Marketing Platform での SSL の構成』

データ・フィルターを使った Marketing Platform での SSL の構成

Marketing Platform が SSL で配置されており、データ・フィルター機能を使用する予定の場合は、この手順を実行して、ハンドシェークを実行する SSL オプションを追加する必要があります。

手順

1. 『Marketing Platform での SSL の構成』で説明されている手順を実行します (まだ実行していない場合)。
2. 以下を入手してください。
   - 証明書の取得または作成 で作成した証明書ファイルのコピー
   - 証明書のパスワード

3. 証明書ファイルを *JAVA_HOME*/jre/lib/security ディレクトリーに入れます。*JAVA_HOME* は Marketing Platform インストール環境の下で tools/bin/setenv スクリプトに指定された Java ディレクトリーです。

   setenv スクリプトは、Marketing Platform ユーティリティーで使用される Java インスタンスを指定します。
4. keytool プログラムを使用して、証明書を Java インスタンスの cacerts ファイルにインポートします。

   以下のコマンド例をガイドとして使用できます。

   ```
   keytool -import -trustcacerts -file name_of_your_certificate.cer
   -keystore cacerts
   ```

   プロンプトが出されたら、証明書のパスワードを入力します。

関連タスク:

197 ページの『Marketing Platform での SSL の構成』

Marketing Operations での SSL の構成

Marketing Operations で SSL を構成するには、この手順に従います。

手順

1. IBM Marketing Software にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。
2. 「Marketing Operations | navigation | serverURL」プロパティーの値を Marketing Operations Web アプリケーションの URL に設定します。

   例: serverURL=https://*host*:*SSL_port*/plan

   ここで、
   - *host* は Marketing Operations がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
   - *SSL_Port* は Marketing Operations Web アプリケーションの SSL ポートです。

   URL の中の https に注意してください。
3. テキスト・エディターまたは XML エディターで plan_config.xml ファイルを開きます。

   plan_config.xml ファイルは、Marketing Operations のインストール先の conf ディレクトリーにあります。
4. 「UAPInitParam notifyPlanBaseURL」プロパティーを SSL 接続用に設定します。

   例: <UAPInitParam notifyPlanBaseURL="https://*host*:*SSL_Port*/plan/affiniumplan.jsp"/>

ここで、

- *host* は Marketing Operations がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *SSL_Port* は Marketing Operations Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL の中の `https` に注意してください。

5. Adobe Acrobat Online Markup 機能を使用可能にして、HTTPS を介して Marketing Operations で作動させるには、「`markupServerURL`」プロパティーを SSL 接続用に設定します。

   例: `<UAPInitParam markupServerURL="https://host:SSLport/plan/services/collabService?WSDL">`

   ここで、

   - *host* は Marketing Operations がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
   - *SSL_Port* は Marketing Operations Web アプリケーションの SSL ポートです。

   URL の中の `https` に注意してください。

6. `plan_config.xml` ファイルを保存して閉じます。

Campaign での SSL の構成

Campaign で SSL を構成するには、この手順に従います。

このタスクについて

注**:** Campaign で SSL を構成する場合は、IBM Campaign リスナーも SSL で構成する必要があります。 IBM Campaign リスナーを SSL で設定しないと、スケジュール・フローチャートの状況が不明と表示される可能性があります。

手順

1. テキスト・エディターまたは XML エディターで `config.xml` ファイルを開きます。

   `config.xml` ファイルは、Campaign のインストール先の `conf` ディレクトリーにあります。

2. `config.xml` ファイルに以下の値を設定します。
   - `unicaClientKeystore =` *PATH_TO_JAVA_CERTIFICATE* `/PlatformClientIdentity.jks` を設定します。
   - `unicaClientKeystorePwd =` *PASSWORD_OF_THE_JAVA_CERTIFICATE_FILE*
   - `unicaServerSSLFile =` *PATH_TO_GSKIT_CERTIFICATE*`/campaign.kdb`
   - `unicaServerSSLFilePwd =` *PATH_TO_GSKIT_STH_FILE/campaign.sth*
3. `config.xml` ファイルを保存して閉じます。
4. Marketing Platform にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

5. 「Campaign | unicaACListener | useSSL」プロパティーの値を yes に設定します。
6. Web アプリケーションを SSL ポートに配置した場合は、「Campaign | navigation | serverURL」プロパティーの値を Web アプリケーション URL に設定します。以下に例を示します。

   ```
   serverURL=https://host:SSL_port/Campaign
   ```

   ここで、

   - host は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
   - SSL_Port は、Web アプリケーションの SSL ポートです。

   URL が https で始まることに注意してください。
7. 操作モニターを使用している場合は、「Campaign | monitoring | serverURL」プロパティーの値を、HTTPS を使用するように設定して、SSL 用に構成してください。以下に例を示します。

   ```
   serverURL=https://host:SSL_port/Campaign/OperationMonitor
   ```

   ここで、

   - host は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
   - SSL_Port は、Web アプリケーションの SSL ポートです。

   URL の中の https に注意してください。

クラスター環境における Campaign での SSL の構成

クラスター環境にある Campaign リスナー・サーバーで SSL を構成するには、この手順に従います。

手順

1. テキスト・エディターまたは XML エディターで、リスナー・サーバーの config.xml ファイルを開きます。

   config.xml ファイルは、Campaign のインストール先の conf ディレクトリーにあります。
2. config.xml ファイルに以下の値を設定します。
   - **configurationServerBaseURL** に Campaign の SSL URL を設定します。これは IBM HTTP Server の URL です。
   - **unicaServerSSLFile** に、Key.kdb ファイルの保存場所のパスを設定します。
   - **unicaServerSSLFilePwd** に、Key.sth ファイルの保存場所のパスを設定します。

   以下に例を示します。

   ```
   <configuration name="bootstrap">
      <category name="bootstrap">
         <property name="suiteName"><value>Affinium</value></property>
   ```

```
        <property name="clientType"><value>HTTP</value></property>
        <!-- configurationServerBaseURL value will be set by AffiniumSuite assembly installer -->
        <property name="configurationServerBaseURL"><value>https://<IHS_Host>/Campaign</value></property>
        <property name="trustedApplication"><value>false</value></property>
        <property name="unicaClientKeystore"><value></value></property>
        <property name="unicaClientKeystorePwd"><value></value></property>
        <property name="unicaServerSSLFile"><value>/opt/IBM/IBMMS101/Campaign/bin/certs/Key.kdb</value></property>
        <property name="unicaServerSSLFilePwd"><value>/opt/IBM/IBMMS101/Campaign/bin/certs/Key.sth</value></property>
    </category>
</configuration>
```

3. `config.xml` ファイルを保存して閉じます。

IBM Campaign での SSL の構成と IBM Campaign リスナーでの非 SSL の構成

IBM Campaign を SSL、IBM Campaign リスナーを非 SSL モードにセットアップする場合は、それらのアプリケーションがシームレスに動作するように設定を構成する必要があります。

始める前に

デフォルトの証明書を使用して、IBM Campaign Web アプリケーションを SSL で構成する必要があります。

このタスクについて

すべての構成は、IBM Campaign 用の WebSphere Application Server に適用可能です。 SSL および非 SSL のセットアップを構成するには、複数のステップを実行する必要があります。各ステップにさらに複数のサブステップがある場合もあります。

手順

IBM Campaign を SSL、IBM Campaign リスナーを非 SSL に構成するには、以下のステップを実行します。

以下のステップを実行します。

表 52. *IBM Campaign* での *SSL* の構成と *IBM Campaign* リスナーでの非 *SSL* の構成

#	ステップ	サブステップ

1	リスナー・サーバーの鍵ストア・データベース・ファイルを生成します。	任意の場所から以下のコマンドを実行し、パスをメモしておきます。
		`gsk8capicmd_64 -keydb -create -populate -db Key.kdb -pw password -stash`
		`gsk8capicmd_64 -cert -create -db Key.kdb -dn "CN=*.in.ibm.com" -expire 3650 -pw password -size 1024 -label key -default_cert yes`
		`gsk8capicmd_64 -cert -extract -db Key.kdb -stashed -label key -target Key.arm`
		
		コマンドを実行した場所に、以下のファイルが生成されます。
		`[root@zebra114 certs]# ll`
		`total 180`
		`-rw-r--r-- 1 root root 729 Feb 6 09:56 Key.arm`
		`-rw------- 1 root root 88 Feb 6 09:56 Key.crl`
		`-rw------- 1 root root 155088 Feb 6 10:09 Key.kdb`
		`-rw------- 1 root root 88 Feb 6 09:56 Key.rdb`
		`-rw------- 1 root root 129 Feb 6 09:56 Key.sth`

表 52. *IBM Campaign* での *SSL* の構成と *IBM Campaign* リスナーでの非 *SSL* の構成 (続き)

#	ステップ	サブステップ
2	Campaign Web アプリケーションが配置されているアプリケーション・サーバーに `Key.arm` ファイルをインポートします。	1. `Key.arm` ファイルを Campaign Web アプリケーション・サーバーにコピーします。 2. 以下のステップを実行して、`Key.arm` ファイルを WebSphere Application Server の **`NodeDefaultTrustStore`** 内に追加します。 a. 「セキュリティー」 > 「**SSL** 証明書および鍵管理 **(SSL Certificate and key management)**」 > 「鍵ストアおよび証明書 **(Key stores and certificates)**」をクリックします。 b. 「**NodeDefaultTrustStore**」 > 「署名者証明書」をクリックします。 c. 「追加」をクリックして、「別名」に別名を指定し、`Key.arm` ファイルのコピー場所のパスを指定します。 d. 「**OK**」をクリックします。 リスナー鍵がアプリケーション・サーバーに追加されます。
3.	IBM Campaign WebSphere Application Server から個人証明書と署名者証明書を抽出します。	1. 「セキュリティー」 > 「**SSL** 証明書および鍵管理 **(SSL Certificate and key management)**」 > 「鍵ストアおよび証明書 **(Key stores and certificates)**」をクリックします。 2. 「**NodeDefaultTrustStore**」 > 「個人証明書 **(Personal certificates)**」をクリックします。 3. デフォルトの証明書を選択します。 4. 「証明書ファイル名 **(Certificate file name)**」に証明書ファイル名を指定し、Campaign Web アプリケーション・サーバー内の有効なパスを指定して、「**OK**」をクリックします。 5. 「**NodeDefaultTrustStore**」 > 「署名者証明書」をクリックします。 6. デフォルトの証明書を選択します。 7. 「証明書ファイル名 **(Certificate file name)**」に証明書ファイル名を指定し、Campaign Web アプリケーション・サーバー内の有効なパスを指定して、「**OK**」をクリックします。 `ClientPersonal.cer` 証明書と `ClientSigner.cer` 証明書が、指定したパスに生成されます。

表 52. *IBM Campaign* での *SSL* の構成と *IBM Campaign* リスナーでの非 *SSL* の構成 (続き)

#	ステップ	サブステップ
4	個人証明書と署名者証明書をリスナー鍵ストア・データベース内にインポートします。	1. ClientPersonal.cer 証明書と ClientSigner.cer 証明書をリスナー・サーバーにコピーします。 /opt/IBM/IBMMS101/Campaign/bin/certs [root@zebra114 certs]# ll total 180 -rw-r--r-- 1 root root 1414 Feb 6 05:41 ClientPersonal.cer -rw-r--r-- 1 root root 1476 Feb 6 05:40 ClientSigner.cer -rw-r--r-- 1 root root 729 Feb 6 09:56 Key.arm -rw------- 1 root root 88 Feb 6 09:56 Key.crl -rw------- 1 root root 155088 Feb 6 10:09 Key.kdb -rw------- 1 root root 88 Feb 6 09:56 Key.rdb -rw------- 1 root root 129 Feb 6 09:56 Key.sth 2. リスナー鍵ストア・データベース (Key.kdb) が作成された場所から **gsk8capicmd_64** コマンドを使用して、個人証明書と署名者証明書をリスナー鍵ストア・データベースにインポートします。 gsk8capicmd_64 -cert -add -db Key.kdb -stashed -label ClientPersonalKey -file ClientPersonal.cer gsk8capicmd_64 -cert -add -db Key.kdb -stashed -label ClientSignerlKey -file ClientSigner.cer
5	リスナー・サーバーで config.xml ファイルに変更を加えます。	以下の情報を指定します。 • **configurationServerBaseURL**: Campaign の SSL URL を指定します。 • **unicaServerSSLFile**: .kdb のファイル・パスを指定します。 • **unicaServerSSLFilePwd**: 対応する .sth のファイル・パスを指定します。 <configuration name="bootstrap">… <category name="bootstrap">… <property name="suiteName"><value>Affinium</value></property> <property name="clientType"><value>HTTP</value></property> <!-- configurationServerBaseURL value will be set by AffiniumSuite assembly installer --> <property name="configurationServerBaseURL">… <value>https://eagle191.in.ibm.com:9447/Campaign</value> </property> <property name="trustedApplication"><value>false</value></property> <property name="unicaClientKeystore"><value></value></property> <property name="unicaClientKeystorePwd"><value></value></property> <property name="unicaServerSSLFile">… <value>/opt/IBM/IBMMS101/Campaign/bin/certs/Key.kdb</value> </property> <property name="unicaServerSSLFilePwd">… <value>/opt/IBM/IBMMS101/Campaign/bin/certs/Key.sth</value> </property> </category> </configuration>

表 52. *IBM Campaign* での *SSL* の構成と *IBM Campaign* リスナーでの非 *SSL* の構成 (続き)

#	ステップ	サブステップ
6	**unicaACListener** 設定で、**useSSL** を **TRUE** に設定します。	-
7	Campaign アプリケーション・サーバーと Campaign リスナーを再始動します。	-

Contact Optimization での SSL の構成

Contact Optimization で SSL を構成するには、この手順に従います。

手順

1. Contact Optimization インストール・ディレクトリーの `conf` ディレクトリーから検出される `config.xml` ファイルを、テキスト・エディターまたは XML エディターで開きます。
2. `unicaServerSSLFile` の値を、使用する証明書の絶対パスに設定します。
3. `config.xml` ファイルを保存して閉じます。
4. 「キャンペーン | `unicaACOListener` | `useSSL`」構成プロパティーの値を `yes` に設定します。
5. Contact Optimization コマンド行ツール `ACOOptAdmin` を使用している場合は、以下の手順を実行します。
   a. 以下を入手してください。
      - 証明書の取得または作成 で作成した証明書ファイルのコピー
      - 証明書のパスワード
   b. 証明書ファイルを *JAVA_HOME*`/jre/lib/security` ディレクトリーに入れます。 *JAVA_HOME* は `ACOOptAdmin` スクリプトに指定された Java ディレクトリーです。
   c. `keytool` プログラムを使用して、証明書を Java インスタンスの `cacerts` ファイルにインポートします。

      以下のコマンド例をガイドとして使用できます。

      ```
      keytool -import -trustcacerts -file name_of_your_certificate.cer
      -keystore cacerts
      ```

      プロンプトが出されたら、証明書のパスワードを入力します。

Interact での SSL の構成

Interact 用の SSL 通信は、3 つの領域で構成できます。ただし、これを行う場合は、かなりのパフォーマンス・コストが発生します。

このタスクについて

その領域では、SSL を次のように使用できます。

- 設計環境をクライアントにし、ランタイム環境をサーバーにする。

  Interact ランタイム・サーバーを参照する URL で https を使用します。例えば、「`Campaign | partition | partition[n] | Interact | ServerGroups | [serverGroup] | instanceURLs | [instanceURL] | instanceURL`」を `https://myserver.domain.com:7007/interact` に設定します。
- ランタイム環境をクライアントにし、Marketing Platform をサーバーにする。
- タッチポイントをクライアントにし、ランタイム環境をサーバーにする。

  `getInstance` メソッドを使用して HTTPS URL を指定します。ロード・バランサーを使用している場合は、ロード・バランサーも同様に SSL 用に構成することが必要な場合があります。
- Interact の設計サーバーとランタイム・サーバーが別々のホスト上に存在し、どちらも SSL を使用する場合、SSL ハンドシェークが行われるようにするには、この 2 つのサーバーにセキュリティー証明書をインポートします。

重要: Interact のいずれかの部分を SSL を使用して通信するように構成すると、パフォーマンス・コストが発生します。IBM では、Interact で SSL を使用するように構成しないことをお勧めします。

Distributed Marketing での SSL の構成

SSL を使用するように Campaign を構成した後は、Distributed Marketing を SSL 用に構成するための追加構成は必要ありません。

Reports での SSL の構成

Reports で SSL を構成するには、この手順に従います。

手順

1. Cognos の資料で説明されている方法で、SSL を指定して Cognos を構成します。
2. Apache の資料で説明されている方法で、SSL を指定して Apache を構成します。
3. Cognos の資料で説明されている方法で、IBM Marketing Software を指定して Cognos の証明書を登録します。
4. Cognos の資料で説明されている方法で、Cognos を指定して IBM Marketing Software 証明書を登録します。

Digital Analytics for On Premises での SSL の構成

Digital Analytics for On Premises は、要求を一切受け入れません。これは常に、HTTP および HTTPS 通信でクライアントとして機能し、分析される Web サイトのページ・タイトルを解決します。SSL を使用しているサイトのページ・タイトルを解決する必要がある場合、確認する必要があるのは、分析対象の Web サイトまたはクラスター・サーバーのプロファイル・オプションに入力された URL が正しいこと、および URL に HTTPS プロトコルが含まれていることだけです。

このタスクについて

Digital Analytics for On Premises は、Marketing Platform と通信しません。

SSL 構成の検証

SSL 構成を検証するには、この手順に従います。

手順

1. 個々の IBM Marketing Software アプリケーションを開始します。
2. IBM Marketing Software にログインして、インストール済みの個々の IBM Marketing Software Web アプリケーションにアクセスします。
3. Interact ランタイム・サーバーの場合のみ、URL `https://host:port/interact/jsp/admin.jsp` を使用して接続をテストします。
4. 自己署名証明書を使用している場合は、ブラウザーで 各 IBM Marketing Software サーバー・コンポーネントを指示して、受信した証明書の情報が期待どおりのものであることを確認します。

   例えば、Campaign リスナーが `campaignHost` という名前のホストのポート 4664 で実行中の場合は、ブラウザーで `https://campaignHost:4664` にアクセスします。

   ご使用のブラウザーによって、証明書を受け入れるかどうかを尋ねるウィンドウが開きます。また、証明書の詳細を表示することができます。

SSL に関する有用なリンク

ここに挙げるリンクでは、IBM Marketing Software で SSL を実装するために必要なタスクの詳細が示されています。

- GS Kit の資料 - http://www.ibm.com/developerworks/security/tutorials/se-gskit/
- Java keytool の資料 - http://docs.oracle.com/javase/7/docs/technotes/tools/solaris/keytool.html
- 認証局のリスト - http://www.dmoz.org/Computers/Security/Public_Key_Infrastructure/PKIX/Tools_and_Services/Third_Party_Certificate_Authorities/

WebLogic の保護品質 (QoP) 設定

SSL を使用するように IBM Marketing Software アプリケーションを構成する場合は、QoP 設定を行う必要があります。

このタスクについて

WebLogic の以下の QoP 設定がサポートされています。

- TLS11
- TLS12

手順

QoP 設定を変更するには、以下の手順を実行します。

次のオプションを JAVA_OPTIONS 変数に追加します。

- TLS11 の場合- -Dweblogic.security.SSL.protocolVersion=TLSv1.1
- TLS12 の場合- -Dweblogic.security.SSL.protocolVersion=TLSv1.2

WebSphere の保護品質 (QoP) 設定

SSL を使用するように IBM Marketing Software アプリケーションを構成する場合は、QoP 設定を行う必要があります。

このタスクについて

WebSphere の以下の QoP 設定がサポートされています。

- SSL_TLS
- SSL
- TLS
- TLSv1
- SSL_TLSv2
- TLSv1.1
- TLSv1.2

手順

QoP 設定を変更するには、以下の手順を実行します。

1. 「セキュリティー」 > 「**SSL** 証明書および鍵管理」 > 「**SSL** 構成」に移動します。
2. 必要な SSL 構成を選択します。
3. 「追加プロパティー」の下の「保護品質 **(QoP)** の設定 **(Quality of protection (QoP) settings)**」をクリックします。
4. 「保護品質 (QoP) の設定 (Quality of protection (QoP) settings)」ペインで、「プロトコル」のドロップダウン・リストから必要な QoP 設定を選択します。
5. 「保存」をクリックします。
6. WAS_install¥profiles¥AppSrv01¥properties フォルダーにある ssl.client.props ファイルで、以下を更新します。

   ```
   com.ibm.ssl.protocol=<Specify required QoP settings>
   ```

7. アプリケーション・サーバーを再始動します。

第 16 章 IBM Marketing Software API のセキュリティー・フレームワーク

Marketing Platform は、IBM Marketing Software 製品によって実装される API のセキュリティー・フレームワークを提供します。

「設定」>「構成」ページの構成プロパティーのセットにより、開発者は IBM Marketing Software 製品によって提供されている API の以下のセキュリティーを設定することができます。

- 特定の製品 API では、製品へのアクセスをブロックすることができます。
- 特定の製品 API では、指定された API と製品の間の通信に HTTPS を要求することができます。
- 特定の製品 API では、指定された API と製品の間の通信に認証を要求することができます。

API セキュリティーを制御する構成プロパティーは、**IBM Marketing Platform | セキュリティー | API 管理 (API management)** カテゴリーの下にあります。各製品には、製品ごとに提供されている API の新規セキュリティー設定を作成するために使用できる構成プロパティーのテンプレートがあります。

API のセキュリティー設定は、単体テストまたはデプロイメントごと、または API のライフサイクル全体で、必要に応じて設定および変更することができます。

セキュリティー・フレームワークは現在、Campaign の API のみをサポートしています。

Marketing Platform セキュリティー・フレームワークは、保護されている API にアクセスするための以下の 2 つの認証オプションをサポートしています。環境に応じていずれか 1 つを使用できます。

- Marketing Platform に登録されている内部ユーザーは、Marketing Platform ログイン資格情報を使用して認証し、セキュア・トークンを入手することができます。
- Marketing Platform を使用するようセットアップされているフェデレーションを構成する外部ユーザーは、ID プロバイダー・サーバーによって認証できます。

Marketing Platform ログイン API を使用した内部ユーザー認証

クライアント・アプリケーションで内部ユーザーを認証するには、Marketing Platform `login` API を使用して、セキュア・トークンを生成します。その後、API 自体で必要なパラメーターに加えて、要求ヘッダーに必要なパラメーターを渡すことにより、保護された API を呼び出すことができます。

セキュリティー・フィルターは、処理を行うために、保護された要求を代行受信、妥当性検査、およびパススルーします。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

Marketing Platform ユーザーが認証された後、Marketing Platform セキュリティー・フィルターは、処理のために製品に渡す前に、USER_NAME_STRING キーの属性としてユーザーのログイン名を要求に追加します。

セキュア・トークンには、15 秒というデフォルトのライフ・スパンがあります。トークンのライフ・スパンが満了した後、保護された API を呼び出すためにそのトークンを使用することはできなくなります。ユーザーに対して Marketing Platform login API が呼び出されるたびに、そのユーザーの以前のセキュリティー・トークンはすべて無効になります。

「設定」>「構成」ページにある一般 | その他カテゴリーの下の「トークンの存続時間」プロパティーの値を設定することにより、セキュア・トークンのライフ・スパンを変更することができます。

URL の例

http[s]://*host*:*port*/unica/api/manager/authentication/login/

ヘッダー・パラメーター

表 *53.* 内部ユーザーでのログイン *API* のヘッダー・パラメーター

パラメーター	説明
m_user_name	内部ユーザーの Marketing Platform ログイン名。
m_user_password	プレーン・テキストでの内部ユーザーの Marketing Platform パスワード。

応答

ログインに成功すると、応答 HTTP 200 が以下の JSON データとともに返されます。

- m_tokenId - ランダムに生成されるトークン
- m_user_name - ログイン・ユーザーのユーザー名
- createDate - 以下の例で示されている形式のタイム・スタンプ (タイム・ゾーンは IST)。

  Mon Jul 06 18:23:35 IST 2015

正しくない資格情報によってログインに失敗すると、応答 HTTP 401 (無許可) が返されます。ブロックされるよう login API が構成されている場合、応答 403 (禁止) が返されます。 HTTPS を使用するよう login API が構成されている場合に HTTP で呼び出されると、応答 403 (禁止) が返されます。

内部ユーザーをログアウトするには、Marketing Platform logout API を使用します。

Marketing Platform ログアウト API による内部ユーザーのログアウト

Marketing Platform logout API を使用して、内部ユーザーをログアウトし、セキュア・トークンを削除します。

logout API はデフォルトで保護されています。事前定義キーに対する要求ヘッダーには、認証パラメーターが必要です。

URL の例

http[s]://*host*:*port*/unica/api/manager/authentication/logout/

ヘッダー・パラメーター

表 *54.* ログアウト *API* のヘッダー・パラメーター

パラメーター	説明
m_user_name	内部ユーザーの Marketing Platform ログイン名。
m_tokenId	認証によって入手されるセキュア・トークン。
api_auth_mode	内部ユーザーに対して値 manager を使用します。

応答

認証に成功すると、応答 HTTP 200 が返され、セキュア・トークンが削除されます。応答が HTTP 200 である場合、クライアント・アプリケーションによってログアウトが確認されます。

認証に失敗すると、応答 HTTP 401 が返されます。

フェデレーションによる外部ユーザー認証とログアウト

サポートされているフェデレーションと Marketing Platform が統合されると、ユーザーは自分のシステムにログインすることが可能になり、クライアント・アプリケーションは Marketing Platform によって提供される ID プロバイダー (IdP) サーバーを介してトークンを取得します。

フェデレーテッド・ユーザーを認証した後、対応する Marketing Platform ログイン名が USER_NAME_STRING キーの属性として要求に追加されます。

IdP サーバーでログアウトを行う必要があります。

ヘッダー・パラメーター

以下の表では、Marketing Platform によって提供される IdP サーバーを介して認証するときに使用するヘッダー・パラメーターについて説明しています。

表 *55.* フェデレーションでのヘッダー・パラメーター

パラメーター	説明
f_userId	フェデレーションでのユーザー ID。
f_clientId	フェデレーションでのクライアント ID。
f_spId	フェデレーションでのサービス・プロバイダー ID。
f_tokenId	IdP サーバーからのシングル・サインオン・トークン。
api_auth_mode	フェデレーテッド認証に対して値 fsso を使用します。

応答

応答は `HTTP 200` です。これに加えて、API に応じた追加の項目が返されます。

関連概念:

107 ページの『第 7 章 SAML 2.0 ベースのフェデレーテッド認証』

関連資料:

325 ページの『IBM Marketing Platform | セキュリティー | API 管理 (API management) | [製品] | (API 構成テンプレート (API configuration template))』

第 17 章 データ・フィルターの作成および管理

データ・フィルターを使用すると、IBM Marketing Software ユーザーが IBM Marketing Software アプリケーションで表示して操作できる顧客データを制限することができます。データ・フィルターで保護するデータは、指定する顧客テーブル内のフィールドで定義されるデータ・セットと考えることができます。

さまざまな IBM Marketing Software アプリケーションで、データ・フィルター操作を異なる方法で使用します。個々の製品の資料を参照して、製品でデータ・フィルター操作を使用するかどうか、また使用する場合にはその製品でのデータ・フィルター操作方法の詳細を確認してください。

データ・フィルターの作成の概要

Marketing Platform には、IBM Marketing Software 管理者がデータ・フィルターをセットアップする際に使用する以下の機能があります。

- データ・フィルターを定義するユーティリティー
- ユーザーおよびグループをデータ・フィルターに割り当て、割り当て済みのデータ・フィルターを表示するユーザー・インターフェース。

ユーザー・アクセスを制限するデータ・フィルターの関連付け

個別ユーザーまたはユーザー・グループのデータ・アクセスを制限するには、それらのユーザーまたはユーザー・グループをデータ・フィルターに割り当てます。すべての IBM Marketing Software ユーザーおよびグループは、データ・フィルターへの割り当てに使用可能です。

複数のユーザーおよびグループを単一のデータ・フィルターに割り当てることも、1 つのユーザーまたはユーザー・グループを複数のデータ・フィルターに割り当てることもできます。

注: グループが、そのサブグループのデータ・フィルター割り当てを獲得することはありません。

複数のデータ・フィルターに割り当てられたユーザーは、それらのデータ・フィルターのすべてで許可されるレコードをすべて表示することができます。

データ・フィルターの 2 つの作成方法: 自動生成と手動指定

Marketing Platform 提供のユーティリティー `datafilteringScriptTool` は、XML を処理して、Marketing Platform システム・テーブルにデータ・フィルターを作成します。このユーティリティーは、XML の書き方に応じて、自動生成と手動指定の 2 つの方法で使用することができます。

自動生成

`datafilteringScriptTool` ユーティリティーでは、JDBC を使用してアクセスできるデータベース表またはビューから、データ・フィルターを自動的に生成すること

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

ができます。このユーティリティーは、XML に指定したフィールド内の値の固有の組み合わせに基づき、データ・フィルター (固有の組み合わせごとに 1 つのデータ・フィルター) を自動的に作成します。

さまざまなフィールドの値の固有の組み合わせに基づいてデータ・フィルターを多数作成する必要がある場合は、この方法を使用すると便利です。

手動指定

`datafilteringScriptTool` ユーティリティーでは、指定するフィールド値に基づき、データ・フィルターを 1 つずつ作成することができます。

フィールド値の固有の組み合わせをすべて組み込むわけではないデータ・フィルターのセットを作成する場合は、この方式を使用すると便利です。

関連概念:

229 ページの『例: データ・フィルターの手動指定』

234 ページの『例: データ・フィルターのセットの自動生成』

ユーザーおよびグループを割り当てるための 2 つの方法: ユーザー・インターフェースと XML

ユーザーおよびグループをデータ・フィルターに割り当てる方法は 2 つあります。ユーザー・インターフェースを使用する方法と、データ・フィルターの作成に使用する XML 内で割り当てる方法です。XML でユーザーを割り当てる方法は、ユーザー数が多く、ユーザーごとに別のフィルターが必要な場合に適しています。

XML でユーザーを割り当てる方法は、手動指定を使用してデータ・フィルターを作成する場合にのみ使用できます。XML でユーザーを割り当てる場合は、割り当てを指定するためにデータ・フィルター ID が必要です。これらの ID は、自動指定ではなく手動指定を使用してデータ・フィルターを指定する場合にのみ使用可能です。

ユーザーおよびグループを割り当てるための 2 つの方法の詳細については、本章に記載しています。

関連概念:

239 ページの『XML でのユーザーおよびグループの割り当てについて』

244 ページの『ユーザー・インターフェースを介したユーザーおよびグループの割り当てについて』

データ・フィルターの概念

データ・フィルターのセットアップ方法を理解するには、データ・フィルター機能、データベース一般、そして (Campaign ファミリーのアプリケーションで使用するデータ・フィルターをセットアップする場合は) 特に Campaign で使用されるある程度の概念について知っておく必要があります。

- データ構成 - データ構成により一連のデータ・フィルターをグループ化します。関連したデータを保護するすべてのデータ・フィルターは、同じデータ構成に関連付けられます。
- オーディエンス - オーディエンス・レベルとして Campaign に指定された顧客テーブルの中の 1 つ以上のフィールド。代表的なオーディエンス・レベルは、世帯および個人です。
- 物理フィールド名 - データベース表のフィールドの物理名は、データベース・クライアントでそのテーブルを直接表示したときに表示される名前です。データ・フィルターを使用中の場合、顧客データベースの照会時に物理名が使用されます。
- 論理フィールド名 - データ・フィルターを定義する際に、物理フィールドへの論理名を割り当てます。Campaign ファミリーのアプリケーションに使用されるデータ・フィルターをセットアップする場合は、これらの論理名は Campaign のフィールドに割り当てられた名前と同じものでなければなりません。この名前は、ユーティリティーがデータ・フィルターを生成するときに使用します。

構成プロセスのロードマップ: データ・フィルターの作成

この構成プロセスのロードマップを使用して、データ・フィルターの構成に必要なタスクに目を通してください。「トピック」列には、タスクについて詳しく説明しているトピックへのリンクが記されています。

表 *56.* データ・フィルター構成プロセスのロードマップ

トピック	情報
• 218 ページの『データ・フィルター基準の計画: 自動生成』 • 219 ページの『データ・フィルター基準の計画: 手動生成』	保護する顧客データを決定します。
219 ページの『ご使用のデータベース用の JDBC ドライバーの取得: 自動生成のみ』	自動生成の場合のみ: タイプ 4 JDBC ドライバーを入手します。このドライバーは、データ・フィルターのベースにするテーブルが含まれているデータベースに接続するためのものです。
220 ページの『必要な情報の入手』	必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリーのアプリケーションでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集してください。
220 ページの『データ・フィルターを指定する XML の作成』	各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。
221 ページの『必須のデータ・フィルター構成プロパティーの設定』	データ・フィルタリングを使用可能にする構成プロパティーを設定します。
222 ページの『データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加』	`datafilteringScriptToool` ユーティリティーを実行します。このユーティリティーは、XML ファイルを使用して、データ・フィルターに使用される Marketing Platform システム・テーブルにデータを設定します。
222 ページの『データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て』	XML 内でユーザーおよびグループをデータ・フィルターに割り当てない場合は、IBM Marketing Software データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用して、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、検索結果から項目を選択してそれらを割り当てます。

データ・フィルター基準の計画: 自動生成

データ・フィルター基準は、ご使用の顧客データに基づくものです。データ・フィルターを定義する前に、保護する顧客データを決定する必要があります。

このタスクについて

例えば、顧客が住んでいる国、都市、および州に基づいて、顧客データへのアクセスを制限したい場合があります。顧客データベースに国、都市、および州の各フィールドがある場合、これらのフィールドをベースにしてデータ・フィルターのグループを設定するという選択ができます。そして、データ・フィルターを指定するときにこれらの値を使用します。

自動生成を使用してデータ・フィルターを作成する場合は、以下の概念に注意する必要があります。

- プロファイル・フィールド - データ・フィルター生成ユーティリティーが値の固有の組み合わせを探すときに考慮に入れる値を持つフィールド。ユーティリティーは、値の固有の組み合わせごとにデータ・フィルターを作成します。データ・フィルターが IBM Marketing Software アプリケーションで有効になっている場合は、顧客レコードを照会する際に、この値が WHERE 節で使用されます。この節では等価かどうかをテストするため、個別値の有限セットをサポートするフィールドに対してプロファイル・フィールドを定義する必要があります。
- 固定フィールド - データ・フィルター生成ユーティリティーがプロファイル・フィールド値の固有の組み合わせの照会を実行する際に、検索対象になるレコードを制限するオプション・フィールド。指定する値は、生成された各データ・フィルターにも組み込まれます。データ・フィルターが IBM Marketing Software アプリケーションで有効になっている場合は、顧客レコードを照会する際に、この値が WHERE 節で使用されます。この節では等価かどうかをテストするため、個別値の有限セットをサポートするフィールドに対して固定フィールドを定義する必要があります。

上記の例では、国について固定フィールドを作成し、都市と州についてプロファイル・フィールドを作成することになるでしょう。データ・フィルター生成ユーティリティーは、これらのフィールドで検出した値の固有の組み合わせごとに、データ・フィルターを作成します。

1 つ以上のデータ・フィルターに割り当てられた IBM Marketing Software ユーザーは、割り当てられたデータ・フィルターによって表示される国、都市、および州に住む顧客に属しているデータのみを表示して処理することができます。

お使いの顧客テーブルに、データ・フィルターを作成したいと思う値がすべては含まれていないこともあります。例えば、すべての国と州に顧客がいるとは限らないが、将来に備えてすべての国と州に対してデータ・フィルターを作成しておきたいという場合があります。その場合、すべての国と州を組み込むテーブルを参照し、XML 仕様の GenerateDataFilters セクションでそのテーブルを使用します。ユーティリティーを使用してデータ・フィルターを作成し終わったら、この「ダミー」テーブルを破棄することができます。

データ・フィルター基準の計画: 手動生成

データ・フィルター基準は、ご使用の顧客データに基づくものです。データ・フィルターを定義する前に、保護する顧客データを決定する必要があります。

このタスクについて

例えば、IBM Marketing Software ユーザーが割り当てられている地理的な販売テリトリーに基づいて、顧客データへのアクセスを制限したい場合があります。顧客データベースの「地域」フィールドが販売テリトリーに関連付けられている場合、このフィールドをベースにしてデータ・フィルターのグループを設定するという選択ができます。

フィールド制約という概念に注意する必要があります。手動指定を使用してデータ・フィルターを作成する方法を計画する際は、この概念を理解しておく必要があります。フィールド制約は、データ・フィルターを指定するために使用されるフィールド/値のペアです。顧客レコードの照会を実行する際に、この値が WHERE 節で使用されます。この節では等価かどうかをテストするため、個別値の有限セットをサポートするフィールドに対してフィールド制約を定義する必要があります。

この例では、「地域」フィールドに入る可能性があるのは以下の値です。アジア、ヨーロッパ、中東、北アメリカ、および南アメリカ。データ・フィルターのフィールド制約を使用するときに、これらの値を使用します。顧客テーブルの「地域」フィールドの値をフィールド制約として使用して、販売テリトリーのそれぞれについて異なるデータ・フィルターをセットアップできます。

1 つ以上のデータ・フィルターに割り当てられた IBM Marketing Software ユーザーは、割り当てられたデータ・フィルターによって表示される販売テリトリー内に入る顧客に属しているデータのみを表示して処理することができます。

手動方式を使用して作成するデータ・フィルターは、XML で割り当てを行うことにより、ユーザー・インターフェースを介してユーザーに割り当てることができます。

ご使用のデータベース用の JDBC ドライバーの取得: 自動生成のみ

データ・フィルター生成ユーティリティー (`datafilteringScriptTool`) を使用してデータ・フィルターを自動的に生成する場合は、JDBC ドライバーが必要です。

手順

1. タイプ 4 の JDBC ドライバーを入手します。このドライバーを使用して、データ・フィルターのベースとなるテーブルが含まれているデータベースへの接続を提供します。
2. Marketing Platform がインストールされているマシンにドライバーを配置します。
3. クラス名とパスをメモしておいてください。

必要な情報の入手

データ・フィルターを作成するためには、データについての情報と、IBM Marketing Software 製品でデータがどのようにマップされるのかという情報を収集する必要があります。

このタスクについて

手動指定の場合のみ: 以下の情報を入手します。

- 使用するフィールドが含まれているテーブルの物理名。
- フィールド制約に使用するフィールド内の有限のデータ・セット。
- Campaign ファミリーのメンバーであるアプリケーションでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign で以下のフィールドに割り当てられている名前を入手してください。
  - オーディエンス・フィールド
  - フィールド制約に使用する予定のフィールド。

自動生成の場合のみ: 以下の情報を入手します。

- データ・フィルターを定義する際に使用するテーブルが含まれているデータベースについて、データベースのタイプ、名前または IP アドレス、およびポート。
- データベースへの接続に使用できるデータベース資格情報 (ユーザー名およびパスワード)。
- 使用するフィールドが含まれているテーブルの物理名。
- プロファイル・フィールドおよび固定フィールドに使用するフィールドの物理名 (固定フィールドはオプションです)。
- Campaign ファミリーのメンバーであるアプリケーションでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign で以下のフィールドに割り当てられている名前を入手してください。
  - オーディエンス・フィールド。
  - 固定フィールドおよびプロファイル・フィールドに使用する予定のフィールド。

注: 製品の Campaign ファミリーのメンバーであるアプリケーションで使用するデータ・フィルターを定義している場合は、データ・フィルターを定義する XML に指定するフィールドの論理名が、Campaign の対応フィールドに指定されている名前と一致する必要があります。

データ・フィルターを指定する XML の作成

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。次のステップで、システム・テーブルにこれらの指定を取り込むユーティリティーを実行します。

このタスクについて

データ・フィルターを作成するために、`datafilteringScriptTool` ユーティリティーは、XML 表記のデータを使用して Marketing Platform システム・テーブル・データベースにエントリーを挿入します。

作成する XML に含まれる要素の概要を以下に示します。

- `<Execute Batch>` - データ挿入プロセスを開始するコマンド。XML 内で複数回繰り返されます。
- `<AddDataConfiguration>` - 関連するデータ・フィルターのグループであるデータ構成を定義します。
- `<AddLogicalFields>` - フィルターに掛けるフィールドとフィルターのデータ型を定義します。
- `<AddDataFilter>` - 手動指定を使用する場合に、定義済み論理フィールドを参照し、フィールド制約を指定します。
- `<GenerateDataFilters>` - 自動指定を使用する場合に、データ・フィルターのセットを定義するために使用される値の固有の組み合わせの対象と見なされるレコードを制限するフィールドと値を参照します。
- `<AddDataTable>` - 論理フィールドとそれらの物理テーブルおよび列の間の関係を定義します。1 つの論理フィールドを複数の異なる物理テーブルに適用できます。これにより、1 つのフィルターを複数のテーブルに適用できることになります。
- `<addAudiences>` - 定義済み論理フィールドを参照し、Campaign で定義されているオーディエンス・レベルを指定します。
- `<addAudienceTableAssociations>` - オーディエンス・レベルと定義済みテーブルおよび定義済みデータ・フィルター構成の間の関係を定義します。
- `<AddAssignments>` - ユーザー・インターフェースを使用するのではなく **XML** 内で割り当てを作成する場合に、個々のユーザーまたはユーザーのグループを定義済みデータ・フィルターに関連付けます。

上記の要素内にネストされる追加要素の説明を含め、追加情報については、本章の以下のトピックを参照してください。

- XML 内の各要素についての詳細説明
- サンプル・シナリオの場合の XML

関連概念:

223 ページの『データ・フィルター XML のリファレンス』
229 ページの『例: データ・フィルターの手動指定』
234 ページの『例: データ・フィルターのセットの自動生成』

必須のデータ・フィルター構成プロパティーの設定

データ・フィルタリングを使用可能にするには、必須の構成プロパティーを設定します。

このタスクについて

「設定」**&**「構成」ページで、「一般」**|**「データ・フィルタリング」カテゴリーにナビゲートし、以下のプロパティーを設定します。

- デフォルトのテーブル名
- デフォルトのオーディエンス名

値の設定に関する説明については、各プロパティーのコンテキスト・ヘルプ、またはこのセクションの関連トピック・リンクを参照してください。

関連資料:

293 ページの『IBM Marketing Software | 一般 | データ・フィルタリング』

データ・フィルターのパフォーマンスを向上させるためのオプションの構成プロパティー

データ・フィルターのキャッシュをオンにすることで、パフォーマンスを向上させることができます。

パフォーマンスを向上させるには、「一般 | データ・フィルタリング | データ・フィルター・キャッシュの有効化」プロパティーの値を **true** に設定します。 。このプロパティーは、Marketing Platform がデータ・フィルター定義をデータベースまたはキャッシュから取り出すかどうかを指定します。この値が **true** である場合、データ・フィルター定義はキャッシュに保管され、データ・フィルター定義に変更が加えられるたびにキャッシュが更新されます。

このプロパティー値の変更を有効にするためには、変更後に Marketing Platform Web アプリケーションを再始動する必要があります。

関連資料:

293 ページの『IBM Marketing Software | 一般 | データ・フィルタリング』

データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加

`datafilteringScriptTool` ユーティリティーを実行します。このユーティリティーは、XML を使用してデータ・フィルター・システム・テーブルにデータを追加します。

このタスクについて

`datafilteringScriptTool` ユーティリティーの使用について詳しくは、本書の他の箇所に記載されている詳細な説明を参照してください。

注: データ・フィルターを削除する必要がある場合は、`ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql` スクリプトを実行してください。このスクリプトについては、本書の他の箇所で説明しています。

関連資料:

273 ページの『datafilteringScriptTool』

284 ページの『ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql』

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

作成する XML 内でユーザーまたはグループを割り当てない場合は、IBM Marketing Software データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用し

て、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、検索結果から項目を選択してそれらを割り当てます。

関連概念:

239 ページの『XML でのユーザーおよびグループの割り当てについて』

244 ページの『ユーザー・インターフェースを介したユーザーおよびグループの割り当てについて』

データ・フィルター XML のリファレンス

このセクションでは、値を指定する必要がある XML 要素について説明します。

XML の ID について

オブジェクトの中には、ID を必要とするものがあります。例えば、データ構成、論理フィールド、データ・テーブルなどはすべて、管理者が ID を指定する必要があります。指定する ID は、オブジェクトのカテゴリー内で固有のものでなければなりません。

一部のオブジェクトは、ID を使用して他のオブジェクトを参照します。例えば、テーブルは論理フィールドを参照します。別のオブジェクトを参照する必要がある場合は、そのオブジェクトに対して指定した ID を使用してください。

XML では、ID 要素名に以下の規則を使用します。この規則は、固有の ID を作成する必要がある場合、および XML 内の別の ID を参照する必要がある場合を理解する上で役立ちます。

- 固有の ID を作成する必要がある場合、要素の名前は `id` です。
- 別のオブジェクト ID を参照する必要がある場合、要素の名前はそのオブジェクトから取られます。例えば、論理フィールドを参照する ID 要素の名前は `logicalFieldId` です。

管理者がオブジェクトに割り当てる ID は、Marketing Platform がそのオブジェクトに割り当てる ID とは異なることに注意してください。管理者が割り当てる ID は、XML 内部でそのオブジェクトを参照するためにのみ使用されます。

AddDataConfiguration | dataConfiguration

この要素グループを使用して、関連するデータ・フィルターをグループ化するために使用するデータ構成を定義します。関連データ・フィルターのセットごとに、データ構成を作成する必要があります。

表 57. *AddDataConfiguration | dataConfiguration*

要素	説明	システム・テーブル
`id`	このデータ構成に割り当てる固有 ID。	該当なし
`name`	このデータ・フィルター・グループに割り当てる名前。	テーブル: df_config フィールド: config_name

AddLogicalFields | logicalFields | LogicalField

この要素グループを使用して、データ・フィルターを定義するために使用する顧客テーブルのフィールドに対応する論理フィールドを定義します。フィールド制約を作成するフィールドごとに 1 つの論理フィールドを作成し、オーディエンスごとに 1 つの論理フィールドを作成してください。

表 58. *AddLogicalFields | logicalFields | LogicalField*

要素	説明	システム・テーブル
`id`	この論理フィールドに割り当てる固有 ID。	該当なし
`name`	このフィールドまたはオーディエンスの論理名。Campaign ファミリーのアプリケーションで使用する場合は、Campaign で使用されているフィールド名またはオーディエンス名と同じでなければなりません。	テーブル: df_logical_field フィールド: logical_name
`type`	顧客テーブル内のこのフィールドのデータ型。指定可能な値は以下のとおりです。 • java.lang.String • java.lang.Long • java.lang.Double • java.lang.Boolean • java.lang.Date (日付形式は「月/日/年」で、月、日、年はすべて数字で表記します。)	テーブル: df_logical_field フィールド: type

GenerateDataFilters

この要素グループは、自動生成を使用する場合に、データ・フィルターを生成するために使用します。

表 59. *GenerateDataFilters*

要素	説明	システム・テーブル
`tableName`	データ・フィルターを生成する元となるテーブルの物理名 (データベース・スキーマ名を含む)。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table フィールド: table_name
`configurationName`	このデータ・フィルターのセットを関連付ける「`AddDataConfiguration	dataConfiguration`」要素内のデータ構成の名前。	該当なし

表 59. *GenerateDataFilters (続き)*

要素	説明	システム・テーブル
jdbcUrl	データ・フィルターのベースとなるテーブルが含まれている顧客データベースに対する URL 参照。	該当なし
jdbcUser	顧客データベースへのアクセス権限を持つアカウントのユーザー名。	該当なし
jdbcPassword	顧客データベースへのアクセス権限を持つアカウントのパスワード。	該当なし
jdbcDriverClass	顧客データベースへの接続を提供する JDBC ドライバーの名前。	該当なし
jdbcDriverClassPath | string	JDBC ドライバーのパス。	該当なし

GenerateDataFilters | fixedFields | FixedField

この要素グループを使用して、データ・フィルター生成ユーティリティーでデータ・フィルターのセットを定義する値の固有の組み合わせを探す際に対象レコードを制限する、オプションのフィールドおよび値を指定します。自動生成を使用する場合のみ使用します。

表 60. *GenerateDataFilters | fixedFields | FixedField*

要素	説明	システム・テーブル
expression	データ・フィルターを作成してこのフィルターに割り当てられたデータを取り出すときに WHERE 節で使用されるフィールド内のデータの 1 項目。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_field_constraint フィールド: expression
logicalFieldName	「AddLogicalFields | logicalFields | LogicalField」要素の中の論理フィールドの名前。この名前は、Marketing Platform のデータ・フィルター・ユーザー・インターフェースの拡張検索フィールドにラベルとして表示されます。	テーブル: df_logical_field フィールド: logical_name
physicalFieldName	フィールドの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	該当なし

GenerateDataFilters | profileField | ProfileField

この要素グループを使用して、データ・フィルターのセットを定義するために使用する値の固有の組み合わせが入っているフィールドを指定します。自動生成を使用する場合のみ使用します。

表 61. *GenerateDataFilters | profileField | ProfileField*

要素	説明	システム・テーブル
`logicalFieldName`	「`AddLogicalFields	logicalFields	LogicalField`」要素内の論理フィールドの名前。	テーブル: df_logical_field フィールド: logical_name
`physicalFieldName`	フィールドの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	該当なし

AddDataTable | dataTable

この要素グループを使用して、顧客テーブルに ID を割り当てます。

表 62. *AddDataTable | dataTable*

要素	説明	システム・テーブル
`id`	このテーブルに割り当てる固有 ID。	該当なし
`name`	保護する顧客テーブルの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table フィールド: table_name

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter

この要素グループは、手動指定を使用する場合に、データ・フィルターを作成するために使用します。

表 63. *AddDataFilters | dataFilters | DataFilter*

要素	説明	システム・テーブル
`configId`	このフィルターを関連付ける「AddDataConfiguration	dataConfiguration」要素内のデータ構成の ID。	該当なし
`id`	割り当てる固有 ID。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter | fieldConstraints | FieldConstraint

この要素グループは、手動指定を使用する場合に、データ・フィルターを定義するためのフィールドのデータを指定するために使用します。

表 64. *AddDataFilters | dataFilters | DataFilter | fieldConstraints | FieldConstraint*

要素	説明	システム・テーブル
`logicalFieldId`	「`AddLogicalFields	logicalFields	LogicalField`」要素内の論理フィールドの ID。	該当なし
`expression`	このフィルターに割り当てられるユーザーのデータを取り出すときに `WHERE` 節で使用されるフィールド内のデータの 1 項目。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_fieldconstraint フィールド: expression

AddDataTable | dataTable | fields | TableField

この要素グループを使用して、顧客テーブルの物理フィールドを定義した論理フィールドにマップします。

表 65. *AddDataTable | dataTable | fields | TableField*

要素	説明	システム・テーブル
`name`	顧客テーブルのフィールドの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table_field フィールド: physical_name
`logicalFieldId`	「`AddLogicalFields	logicalFields	LogicalField`」要素内の論理フィールドの ID。	該当なし

AddAudience | audience

この要素グループを使用して、Campaign ファミリーの製品で使用されるオーディエンス・レベルに Campaign で割り当てる名前を指定します。

表 66. *AddAudience | audience*

要素	説明	システム・テーブル
`id`	このオーディエンスに割り当てる固有 ID。	該当なし
`name`	Campaign で指定されているオーディエンスの名前。	テーブル: df_audience フィールド: audience_name

AddAudience | audience | fields | AudienceField

この要素グループを使用して、オーディエンス・フィールドとして使用される顧客テーブルのフィールド (1 つ以上) を指定します。

表 67. *AddAudience | audience | fields | AudienceField*

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldId	「AddLogicalFields | logicalFields | LogicalField」要素内の論理フィールドの ID。Campaign ファミリーのアプリケーションを使用している場合は、Campaign で使用されているものと同じ論理名でなければなりません。	該当なし
fieldOrder	将来使用される予定です。 値を 0 に設定してください。	該当なし

addAudienceTableAssociations | addAudienceTableAssociation | audienceTableAssociation

この要素グループを使用して、オーディエンス・フィールドとテーブルのペアをデータ構成と関連付けます。オーディエンス・フィールドごとに関連付けを作成します。

表 68. *addAudienceTableAssociations | addAudienceTableAssociation | audienceTableAssociation*

要素	説明	システム・テーブル
audienceId	この関連付けで使用されるオーディエンスの ID。「AddAudience | audience」要素内の ID 値でなければなりません。	該当なし
tableId	この関連付けで使用されるテーブルの ID。「AddDataTable | dataTable」要素内の ID 値でなければなりません。テーブルは、audienceID 要素に指定されたオーディエンスに含まれているものでなければなりません。オーディエンスが複数のテーブルに含まれている場合は、複数の関連付けを作成してください。	該当なし
configId	この関連付けで使用されるデータ構成の ID。「AddDataConfiguration | dataConfiguration」要素内の ID 値でなければなりません。	該当なし

AddAssignments | assignments | AssignmentByName

この要素グループを使用して、ユーザーまたはグループをデータ・フィルターに関連付けることができます。オプション。これらの割り当ては、ユーザー・インターフェースを介して行うこともできます。

表 69. *AddAssignments | assignments | AssignmentByName*

要素	説明	システム・テーブル
namespaceId	このデータ・フィルターのセットを関連付ける「AddDataConfiguration | dataConfiguration」要素内のデータ構成の名前。	該当なし
dataObjectId	この関連付けで使用するフィルターの ID。DataFilter 要素の ID 値でなければなりません。	該当なし
principalType	割り当てのタイプ。 • 1 は、個々のユーザーにデータ・フィルターを割り当てる場合に使用します。 • 2 は、ユーザーのグループにデータ・フィルターを割り当てる場合に使用します。	テーブル: ols_assignment フィールド: principal_type
principalName	• principalType に使用する値が 1 の場合、この値には、参照するデータ・フィルターに割り当てるユーザーの Marketing Platform ログインを設定します。 • principalType に使用する値が 2 の場合、この値には、参照するデータ・フィルターにメンバーを割り当てる Marketing Platform グループの名前を設定します。	テーブル: ols_assignment フィールド: principal_id

例: データ・フィルターの手動指定

Jim は、販売区域に基づくデータ・フィルターのセットを作成する必要があります。

Campaign では、すでに顧客テーブルがマップされ、オーディエンス・レベルが定義されています。

情報の入手

そこで、データ・フィルター用のフィールド制限を指定するために必要なフィールドをテリトリー・テーブルに入れることにしました。

以下の表は、顧客のフィールドについて Jim が入手する情報と、その Campaign マッピングを示します。

表 70. テリトリー・テーブル・フィールド

フィールド (物理名)	フィールド (Campaign での名前)	データ	データ型
cust_region	CustomerRegion	• Africa • Asia • Europe • Middle East • North America	java.lang.String
hh_id	HouseholdID	該当なし	java.lang.Long
indiv_id	IndividualID	該当なし	java.lang.Long

Jim は、Campaign で使用されているオーディエンス名が、世帯 (household) と個人 (individual) であることを知ります。 彼は、テリトリー・テーブルに 2 つのオーディエンス・フィールドが含まれることをメモに記録します。hh_id フィールドは世帯オーディエンスに対応します。テリトリー・テーブルの indiv_id フィールドは、個人オーディエンスに対応します。

各オーディエンスに 1 つずつ、およびフィールド制限フィールドに 1 つの論理フィールドを作成する筆があるので、Jim には合計 3 つの論理フィールドが必要であることがわかります。

また、データ・フィルターをデータ構成にグループ化しなければならないことも知っています。彼は、データ構成に Territory という名前を付けることにしました。

これで Jim が XML を作成する準備ができました。

XML の作成

Jim が作成する XML は以下のとおりです。彼が入手した情報に基づく値は、 **太字** で示されています。

```
<ExecuteBatch>
                <!-- ********************************** -->
                <!--          Data configuration        -->
                <!-- ********************************** -->
  <name>SeedData</name>
  <operations>
      <ExecuteBatch>
        <name>DataFilters</name>
        <operations>
          <AddDataConfiguration>
            <dataConfiguration>
                <id>1</id>
                <name>Territory</name>
            </dataConfiguration>
           </AddDataConfiguration>
         </operations>
       </ExecuteBatch>
```

```
        <!-- ********************************** -->
        <!--         Logical fields             -->
        <!-- ********************************** -->
<AddLogicalFields>
  <logicalFields>
      <LogicalField>
          <id>1</id>
          <name>CustomerRegion</name>
          <type>java.lang.String</type>
      </LogicalField>
      <LogicalField>
          <id>2</id>
          <name>HouseholdID</name>
          <type>java.lang.Long</type>
      </LogicalField>
      <LogicalField>
          <id>3</id>
          <name>IndividualID</name>
          <type>java.lang.Long</type>
      </LogicalField>
      </logicalFields>
 </AddLogicalFields>
        <!-- ********************************** -->
        <!--    Territory field constraints     -->
        <!-- ********************************** -->
<AddDataFilters>
  <dataFilters>
    <DataFilter>
      <configId>1</configId>
      <id>1</id>
      <fieldConstraints>
        <FieldConstraint>
          <logicalFieldId>1</logicalFieldId>
          <expression>Africa</expression>
        </FieldConstraint>
      </fieldConstraints>
    </DataFilter>
    <DataFilter>
      <configId>1</configId>
      <id>2</id>
      <fieldConstraints>
        <FieldConstraint>
          <logicalFieldId>1</logicalFieldId>
          <expression>Asia</expression>
        </FieldConstraint>
      </fieldConstraints>
    </DataFilter>
    <DataFilter>
      <configId>1</configId>
      <id>3</id>
      <fieldConstraints>
        <FieldConstraint>
          <logicalFieldId>1</logicalFieldId>
          <expression>Europe</expression>
        </FieldConstraint>
      </fieldConstraints>
    </DataFilter>
    <DataFilter>
      <configId>1</configId>
      <id>4</id>
      <fieldConstraints>
        <FieldConstraint>
          <logicalFieldId>1</logicalFieldId>
          <expression>Middle East</expression>
        </FieldConstraint>
      </fieldConstraints>
    </DataFilter>
```

```
    <DataFilter>
      <configId>1</configId>
      <id>5</id>
      <fieldConstraints>
        <FieldConstraint>
          <logicalFieldId>1</logicalFieldId>
          <expression>North America</expression>
        </FieldConstraint>
      </fieldConstraints>
    </DataFilter>
  </dataFilters>
</AddDataFilters>
          <!-- ********************************** -->
          <!-- 物理フィールドを論理フィールドにマップする -->
          <!-- ********************************** -->
<ExecuteBatch>
  <name>addTables</name>
  <operations>
    <AddDataTable>
      <dataTable>
      <id>1</id>
      <name>Territory</name>
      <fields>
        <TableField>
          <name>cust_region</name>
          <logicalFieldId>1</logicalFieldId>
        </TableField>
        <TableField>
          <name>hh_id</name>
          <logicalFieldId>2</logicalFieldId>
        </TableField>
        <TableField>
          <name>indiv_id</name>
          <logicalFieldId>3</logicalFieldId>
        </TableField>
      </fields>
      </dataTable>
    </AddDataTable>
  </operations>
</ExecuteBatch>
          <!-- ******************************************************** -->
          <!--              Audience table associations                 -->
          <!-- ******************************************************** -->
 <ExecuteBatch>
        <name>addAudiences</name>
        <operations>
        <AddAudience>
          <audience>
          <id>1</id>
          <name>household</name>
          <fields>
            <AudienceField>
              <logicalFieldId>2</logicalFieldId>
              <fieldOrder>0</fieldOrder>
            </AudienceField>
          </fields>
        </audience>
      </AddAudience>
      <AddAudience>
          <audience>
          <id>2</id>
          <name>individual</name>
          <fields>
            <AudienceField>
              <logicalFieldId>3</logicalFieldId>
              <fieldOrder>0</fieldOrder>
            </AudienceField>
```

```
                </fields>
                </audience>
              </AddAudience>
              </operations>
        </ExecuteBatch>
                <!-- ******************************************************* -->
                <!--            Associate table-audience pairs               -->
                <!--               with data configuration                   -->
                <!-- ******************************************************* -->
        <ExecuteBatch>
              <name>addAudienceTableAssociations</name>
              <operations>
              <AddAudienceTableAssociation>
                  <audienceTableAssociation>
                    <audienceId>1</audienceId>
                    <tableId>1</tableId>
                    <configId>1</configId>
                </audienceTableAssociation>
              </AddAudienceTableAssociation>
              <AddAudienceTableAssociation>
                  <audienceTableAssociation>
                    <audienceId>2</audienceId>
                    <tableId>1</tableId>
                    <configId>1</configId>
                  </audienceTableAssociation>
              </AddAudienceTableAssociation>
              </operations>
        </ExecuteBatch>
    </operations>
</ExecuteBatch>
```

システム・テーブルへのデータの追加

Jim は、データ・フィルター XML ファイルに `regionDataFilters.xml` という名前を付け、自分の Marketing Platform インストール環境の `tools/bin` ディレクトリーに保存します。そして、コマンド・プロンプトを開き、datafilteringScriptTool ユーティリティーを使用してデータ・フィルター・システム・テーブルにデータを追加します。

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

最後に、Jim は Marketing Platform.での管理者権限を持つアカウントを使用して IBM Marketing Software にログインします。

グループがすでに IBM Marketing Software にセットアップされ、地域別にユーザーが割り当てられていることはわかっています。

そこで、「データ・フィルター」セクションに進み、自分のデータ・フィルターからのフィールド制限がデータ・フィルターの拡張検索で使用可能であることを確認します。そして、Africa を検索基準として使用して、データ・フィルターの検索を実行します。彼が Africa 地域にセットアップしたデータ・フィルターが検索結果に表示されます。

次に、Jim は Africa ユーザー・グループの検索を実行します。このグループは、Africa の顧客のマーケティングを担当するすべての現場マーケティング担当者を入れるために、IBM Marketing Software にセットアップ済みです。Africa グループが検索結果に表示されます。

次に、検索結果のグループとデータ・フィルターを選択し、「割り当て」ボタンをクリックして、グループをデータ・フィルターに割り当てます。

こうして、すべての割り当てが完了するまで、データ・フィルターとグループの検索を続行します。

関連概念:

244 ページの『ユーザー・インターフェースを介したユーザーおよびグループの割り当てについて』

例: データ・フィルターのセットの自動生成

Jim は、国、都市、および州に基づくデータ・フィルターのセットを作成する必要があります。

Campaign では、すでに顧客テーブルがマップされ、オーディエンス・レベルが定義されています。

JDBC ドライバーの入手

Jim は、会社の顧客データベースが Microsoft SQL サーバーであることを知っています。彼は、適切なタイプ 4 のドライバーをダウンロードして、Marketing Platform がインストールされているマシンに配置し、ドライバーの名前とパスをメモに記録します。

- JDBC ドライバーのクラス名 - `com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver`
- JDBC ドライバーのパス - `C:¥tools¥Java¥MsJdbc¥sqljdbc.jar`

情報の入手

Jim は、顧客データベースの名前、ホスト、およびポートの情報と、そのデータベースに接続するために必要な資格情報を入手します。

- データベース名 - 顧客
- データベース・ホスト名 - companyHost
- データベース・ポート - 1433
- ユーザー名 - sa
- パスワード - myPassword

Jim が会社の顧客データベースのデータを調べたところ、データ・フィルターを作成したいすべての国、都市、および州に顧客が存在していることがわかりました。そこで、データ・フィルター用の固定フィールドおよびプロファイル・フィールドを指定するために必要なフィールドを地理テーブルに入れることにしました。

以下の表は、顧客のフィールドについて Jim が入手する情報と、その Campaign マッピングを示します。

表 *71.* 地理テーブル・フィールド

フィールド (物理名)	フィールド (**Campaign** での名前)	データ	データ型
country	国	• USA • France • Britain	java.lang.String
city	City	個別の都市の有限セット	java.lang.String
state	State	個別の州 (または国に応じて他の方法で名前が付けられた地域) の有限セット	java.lang.String
hh_id	HouseholdID	該当なし	java.lang.Long
indiv_id	IndividualID	該当なし	java.lang.Long

Jim は、Campaign で使用されているオーディエンス名が、世帯 (household) と個人 (individual) であることを知ります。 彼は、地理テーブルに 2 つのオーディエンス・フィールドが含まれることをメモに記録します。

- `hh_id` フィールド は、世帯オーディエンスに対応します。
- 地理テーブルの `indiv_id` フィールドは、個人オーディエンスに対応します。

各オーディエンスに 1 つずつ、およびそれぞれの固定フィールドとプロファイル・フィールドに 1 つずつの論理フィールドを作成する必要があるので、Jim には合計 5 つの論理フィールドが必要なことがわかります。

また、データ・フィルターをデータ構成にグループ化しなければならないことも知っています。彼は、データ構成に Geographic という名前を付けることにしました。

これで Jim が XML を作成する準備ができました。

XML の作成

Jim が作成する XML は以下のとおりです。彼が入手した情報または使用を決定した情報に基づく値は、 **太字**で示されています。

```
<ExecuteBatch>
                <!-- ********************************** -->
                <!--          Data configuration        -->
                <!-- ********************************** -->
  <name>SeedData</name>
  <operations>
      <ExecuteBatch>
        <name>DataFilters</name>
        <operations>
            <AddDataConfiguration>
                <dataConfiguration>
                    <id>1</id>
                    <name>Geographic</name>
                </dataConfiguration>
                </AddDataConfiguration>
```

```
  </operations>
</ExecuteBatch>
          <!-- ********************************** -->
          <!--         Logical fields             -->
          <!-- ********************************** -->
<AddLogicalFields>
  <logicalFields>
      <LogicalField>
          <id>1</id>
          <name>Country</name>
          <type>java.lang.String</type>
      </LogicalField>
      <LogicalField>
          <id>2</id>
          <name>City</name>
          <type>java.lang.String</type>
      </LogicalField>
      <LogicalField>
          <id>3</id>
          <name>State</name>
          <type>java.lang.String</type>
      </LogicalField>
      <LogicalField>
          <id>4</id>
          <name>HouseholdID</name>
          <type>java.lang.Long</type>
      </LogicalField>
      <LogicalField>
          <id>5</id>
          <name>IndividualID</name>
          <type>java.lang.Long</type>
      </LogicalField>
      </logicalFields>
</AddLogicalFields>
          <!-- ********************************** -->
          <!--       Generate data filters        -->
          <!-- ********************************** -->
<GenerateDataFilters>
          <!-- ******************************************************** -->
          <!-- Specify the table to be scanned for unique combinations -->
          <!-- of values  from which data filters will be defined.     -->
          <!-- ******************************************************** -->
        <tableName>Geographic</tableName>
          <!-- ******************************************************** -->
          <!-- Identify the data configuration  with which             -->
          <!-- generated data filters will be associated.              -->
          <!-- ******************************************************** -->
       <configurationName>Geographic</configurationName>
        <!-- データ・ソース接続情報を指定する-->
       <jdbcUrl>
         jdbc:sqlserver://localhost:1433;databaseName=Customers
       </jdbcUrl>
       <jdbcUser>sa</jdbcUser>
       <jdbcPassword>myPassword</jdbcPassword>
       <jdbcDriverClass>
              com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver</jdbcDriverClass>
       <jdbcDriverClassPath>
              <string>C:¥tools¥Java¥MsJdbc¥sqljdbc.jar</string>
       </jdbcDriverClassPath>
          <!-- ********************************** -->
          <!--      Specify the fixed fields      -->
          <!-- ********************************** -->
        <fixedFields>
            <FixedField>
               <expression>USA</expression>
               <logicalFieldName>Country</logicalFieldName>
               <physicalFieldName>country</physicalFieldName>
```

```
            </FixedField>
            <FixedField>
               <expression>France</expression>
               <logicalFieldName>Country</logicalFieldName>
               <physicalFieldName>country</physicalFieldName>
            </FixedField>
            <FixedField>
               <expression>Britain</expression>
               <logicalFieldName>Country</logicalFieldName>
               <physicalFieldName>country</physicalFieldName>
            </FixedField>
        </fixedFields>
        <!-- プロファイル・フィールドを指定する -->
        <profileFields>
            <ProfileField>
               <logicalFieldName>State</logicalFieldName>
               <physicalFieldName>state</physicalFieldName>
            </ProfileField>
            <ProfileField>
               <logicalFieldName>City</logicalFieldName>
               <physicalFieldName>city</physicalFieldName>
            </ProfileField>
        </profileFields>
</GenerateDataFilters>
          <!-- ********************************** -->
          <!-- 物理フィールドを論理フィールドにマップする -->
          <!-- ********************************** -->
<ExecuteBatch>
        <name>addTables</name>
        <operations>
        <AddDataTable>
            <dataTable>
            <id>1</id>
            <name>Geographic</name>
            <fields>
               <TableField>
                      <name>country</name>
                      <logicalFieldId>1</logicalFieldId>
               </TableField>
               <TableField>
                      <name>city</name>
                      <logicalFieldId>2</logicalFieldId>
               </TableField>
               <TableField>
                      <name>state</name>
                      <logicalFieldId>3</logicalFieldId>
               </TableField>
               <TableField>
                      <name>hh_id</name>
                      <logicalFieldId>4</logicalFieldId>
               </TableField>
               <TableField>
                      <name>indiv_id</name>
                      <logicalFieldId>5</logicalFieldId>
               </TableField>
            </fields>
            </dataTable>
            </AddDataTable>
        </operations>
</ExecuteBatch>
          <!-- ******************************************************** -->
          <!--              Audience table associations                 -->
          <!-- ******************************************************** -->
<ExecuteBatch>
        <name>addAudiences</name>
        <operations>
        <AddAudience>
```

```
                <audience>
                <id>1</id>
                <name>household</name>
                <fields>
                   <AudienceField>
                      <logicalFieldId>4</logicalFieldId>
                      <fieldOrder>0</fieldOrder>
                   </AudienceField>
                </fields>
                </audience>
            </AddAudience>
            <AddAudience>
                <audience>
                <id>2</id>
                <name>individual</name>
                <fields>
                   <AudienceField>
                     <logicalFieldId>5</logicalFieldId>
                     <fieldOrder>0</fieldOrder>
                   </AudienceField>
                </fields>
                </audience>
            </AddAudience>
            </operations>
    </ExecuteBatch>
             <!-- ******************************************************* -->
             <!--            Associate table-audience pairs               -->
             <!--               with data configuration                   -->
             <!-- ******************************************************* -->
    <ExecuteBatch>
            <name>addAudienceTableAssociations</name>
            <operations>
            <AddAudienceTableAssociation>
               <audienceTableAssociation>
                   <audienceId>1</audienceId>
                   <tableId>1</tableId>
                   <configId>1</configId>
               </audienceTableAssociation>
            </AddAudienceTableAssociation>
            <AddAudienceTableAssociation>
               <audienceTableAssociation>
                   <audienceId>2</audienceId>
                   <tableId>1</tableId>
                   <configId>1</configId>
               </audienceTableAssociation>
            </AddAudienceTableAssociation>
            </operations>
    </ExecuteBatch>
  </operations>
</ExecuteBatch>
```

システム・テーブルへのデータの追加

Jim は、データ・フィルター XML ファイルに geographicDataFilters.xml という名前を付け、自分の Marketing Platform インストール環境の tools/bin ディレクトリーに保存します。そして、コマンド・プロンプトを開き、datafilteringScriptTool ユーティリティーを使用してデータ・フィルター・システム・テーブルにデータを追加します。

このユーティリティーは、多数のデータ・フィルターを作成します。各データ・フィルターで基準となるのは、ユーティリティーが固定フィールド値を含むレコードをデータベースに照会して取得する国 (固定フィールド)、および都市と州の固有の

組み合わせです。固定フィールドとして指定された国ごとに、都市と州の固有の組み合わせがすべて使用されます。

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

最後に、Jim は Marketing Platform での管理者権限を持つアカウントを使用して Marketing Platform にログインします。

グループがすでに Marketing Platform にセットアップされ、都市別にユーザーが割り当てられていることはわかっています。

そこで、「データ・フィルター」セクションに進み、自分のデータ・フィルターの国、都市、州の値がデータ・フィルターの拡張検索で使用可能であることを確認します。そして、合衆国の都市の 1 つ Boston を検索基準として使用して、データ・フィルターの検索を実行します。Boston のデータ・フィルターが検索結果に表示されます。

次に、Jim は Boston ユーザー・グループの検索を実行します。このグループは、Boston の顧客のマーケティングを担当するすべての現場マーケティング担当者を入れるために、Marketing Platform にセットアップ済みです。Boston グループが検索結果に表示されます。

次に、検索結果のグループとデータ・フィルターを選択し、「割り当て」ボタンをクリックして、グループをデータ・フィルターに割り当てます。

こうして、すべての割り当てが完了するまで、データ・フィルターとグループの検索を続行します。

関連概念:

244 ページの『ユーザー・インターフェースを介したユーザーおよびグループの割り当てについて』

XML でのユーザーおよびグループの割り当てについて

ユーザーまたはグループのデータ・フィルターへの割り当ては、ユーザー・インターフェースを使用する代わりに XML で行うこともできます。XML でユーザーおよびグループをデータ・フィルターに割り当て可能なのは、手動指定を使用してデータ・フィルターを作成する場合のみです。

ワイルドカードの `#user_login#` を使用できます。このワイルドカードは、ユーザーの Marketing Platform ログイン名に基づいてデータ・フィルターを自動的に作成します。

ユーザーまたはグループをデータ・フィルターに関連付けるには、`AddAssignments` XML 要素ブロックを使用します。

例で使用するシナリオ

例では、次のシナリオを使用します。

ある組織が Distributed Marketing を使用していて、フィールド・マーケティング担当者が自分の担当地域の顧客のみを表示できるように、データ・フィルターを作成したいと考えています。したがって、データ・フィルターはユーザーごとに必要になります。

Distributed Marketing で、地域に基づいてリスト表示とフォーム・テンプレートをセットアップします。この構成については、「*IBM Distributed Marketing* 管理者ガイド」で詳しく説明しています。

オーディエンス・レベルは「顧客」です。

次の表に示すように、exampleSchema データベースの 4 つのテーブルに対してデータ・フィルターが作成されます。

表 72. 例で使用するテーブルとフィールド

テーブル	フィールド
exampleSchema.Corporate_Lists	UserID、State、および RegionID これは、Distributed Marketing でセットアップされたリスト表示テーブルです。UserID 列には、フィールド・マーケティング担当者の Marketing Platform ログイン名が入ります。このテーブルにより、フィールド・マーケティング担当者の Marketing Platform ログイン名と担当地域が関連付けられます。
exampleSchema.customer_contact	顧客の Indiv_ID、Region_ID、および State フィールド
exampleSchema.lkup_state	state_name フィールドのルックアップ・テーブル
exampleSchema.lkup_region	region_id フィールドのルックアップ・テーブル

例: ワイルドカードを使用してグループ・メンバーをデータ・フィルターに割り当てる

指定したグループのメンバーごとに別々のデータ・フィルターを作成するには、以下のようにします。

- 通常どおり論理フィールドを作成します。
- expression 要素でワイルドカード #user_login# を使用して、単一のデータ・フィルターを作成します。
- AssignmentByName 要素の下で、principalType に 2 を、principalName 要素にグループ名を、dataObjectId 要素にワイルドカード・データ・フィルターの ID をそれぞれ設定します。
- 通常どおりオーディエンス関連付けを作成します。

以下の XML は、この方法を上記のシナリオを使用して示しています。

```
<ExecuteBatch>
                <!-- ********************************** -->
                <!--          Data configuration        -->
                <!-- ********************************** -->
    <name>SeedData</name>
```

```
<operations>
    <ExecuteBatch>
        <name>DataFiltering</name>
        <operations>
            <AddDataConfiguration>
                <dataConfiguration>
                    <id>1</id>
                    <name>collaborate</name>
                </dataConfiguration>
            </AddDataConfiguration>
        </operations>
    </ExecuteBatch>
            <!-- ********************************** -->
            <!--         Logical fields             -->
            <!-- ********************************** -->
    <AddLogicalFields>
        <logicalFields>
            <LogicalField>
                <id>1</id>
                <name>Customer_ID</name>
                <type>java.lang.String</type>
            </LogicalField>

            <LogicalField>
                <id>2</id>
                <name>AudienceLevel</name>
                <type>java.lang.String</type>
            </LogicalField>

            <LogicalField>
                <id>3</id>
                <name>UserID</name>
                <type>java.lang.String</type>
            </LogicalField>

            <LogicalField>
                <id>4</id>
                <name>State_code</name>
                <type>java.lang.String</type>
            </LogicalField>

            <LogicalField>
                <id>5</id>
                <name>Region</name>
                <type>java.lang.Long</type>
            </LogicalField>
        </logicalFields>
    </AddLogicalFields>
            <!-- ********************************** -->
            <!--       Wild card data filter        -->
            <!-- ********************************** -->
    <AddDataFilters>
        <dataFilters>
            <DataFilter><
                <configId>1</configId>
                <id>1</id>
                <fieldConstraints>
                    <FieldConstraint>
                        <logicalFieldId>3</logicalFieldId>
                        <expression>#user_login#</expression>
                    </FieldConstraint>
                </fieldConstraints>
            </DataFilter>
        </dataFilters>
    </AddDataFilters>
            <!-- ********************************************************** -->
            <!--                     Add data tables                        -->
```

```
        <!-- ******************************************************** -->

<ExecuteBatch>
    <name>addTables</name>
    <operations>
        <!-- ******************************************************** -->
        <!--           Table exampleSchema.Corporate_Lists            -->
        <!-- ******************************************************** -->
         <AddDataTable>
            <dataTable>
                <id>1</id>
                <name>exampleSchema.Corporate_Lists</name>
                <fields>
                    <TableField>
                        <tableId>1</tableId>
                        <name>UserID</name>
                        <logicalFieldId>3</logicalFieldId>
                    </TableField>
                    <TableField>
                        <tableId>1</tableId>
                        <name>State</name>
                        <logicalFieldId>4</logicalFieldId>
                    </TableField>
                    <TableField>
                        <tableId>1</tableId>
                        <name>Region_ID</name>
                        <logicalFieldId>5</logicalFieldId>
                    </TableField>
                </fields>
            </dataTable>
        </AddDataTable>
        <!-- ******************************************************** -->
        <!--           Table exampleSchema.customer_contact           -->
        <!-- ******************************************************** -->
        <AddDataTable>
            <dataTable>
                <id>2</id>
                <name>exampleSchema.customer_contact</name>
                <fields>
                    <TableField>
                        <tableId>2</tableId>
                        <name>Indiv_ID</name>
                        <logicalFieldId>1</logicalFieldId>
                    </TableField>
                    <TableField>
                        <tableId>2</tableId>
                        <name>Region_ID</name>
                        <logicalFieldId>5</logicalFieldId>
                    </TableField>
                    <TableField>
                        <tableId>2</tableId>
                        <name>State</name>
                        <logicalFieldId>4</logicalFieldId>
                    </TableField>
                </fields>
            </dataTable>
        </AddDataTable>
        <!-- ******************************************************** -->
        <!--              Table exampleSchema.lkup_state              -->
        <!-- ******************************************************** -->
        <AddDataTable>
            <dataTable>
                <id>3</id>
                <name>example.schema.lkup_state</name>
                <fields>
                    <TableField>
                        <tableId>3</tableId>
```

```
                        <name>state_name</name>
                        <logicalFieldId>4</logicalFieldId>
                    </TableField>
                </fields>
            </dataTable>
        </AddDataTable>
        <!-- ******************************************************** -->
        <!--              Table exampleSchema.lkup_region             -->
        <!-- ******************************************************** -->
        <AddDataTable>
            <dataTable>
                <id>4</id>
                <name>exampleSchema.lkup_region</name>
                <fields>
                    <TableField>
                        <tableId>4</tableId>
                        <name>Region_ID</name>
                        <logicalFieldId>5</logicalFieldId>
                    </TableField>
                </fields>
            </dataTable>
        </AddDataTable>
    </operations>
</ExecuteBatch>
        <!-- ******************************************************** -->
        <!--              Audience table associations                 -->
        <!-- ******************************************************** -->
<ExecuteBatch>
    <name>addAudiences</name>
    <operations>
        <AddAudience>
            <audience>
                <id>1</id>
                <name>Customer</name>
                <fields>
                    <AudienceField>
                        <logicalFieldId>2</logicalFieldId>
                        <fieldOrder>0</fieldOrder>
                    </AudienceField>
                </fields>
            </audience>
        </AddAudience>

        <AddAudience>
            <audience>
                <id>2</id>
                <name>default</name>
                <fields>
                    <AudienceField>
                        <logicalFieldId>2</logicalFieldId>
                        <fieldOrder>0</fieldOrder>
                    </AudienceField>
                </fields>
            </audience>
        </AddAudience>
    </operations>
</ExecuteBatch>

<ExecuteBatch>
    <name>addAudienceTableAssociations</name>
    <operations>
        <AddAudienceTableAssociation>
            <audienceTableAssociation>
                <audienceId>1</audienceId>
                <tableId>1</tableId>
                <configId>1</configId>
            </audienceTableAssociation>
```

```
                </AddAudienceTableAssociation>

                <AddAudienceTableAssociation>
                    <audienceTableAssociation>
                        <audienceId>1</audienceId>
                        <tableId>2</tableId>
                        <configId>1</configId>
                    </audienceTableAssociation>
                </AddAudienceTableAssociation>

                <AddAudienceTableAssociation>
                    <audienceTableAssociation>
                        <audienceId>2</audienceId>
                        <tableId>3</tableId>
                        <configId>1</configId>
                    </audienceTableAssociation>
                </AddAudienceTableAssociation>

                <AddAudienceTableAssociation>
                    <audienceTableAssociation>
                        <audienceId>2</audienceId>
                        <tableId>4</tableId>
                        <configId>1</configId>
                    </audienceTableAssociation>
                </AddAudienceTableAssociation>

            </operations>
        </ExecuteBatch>
                <!-- ******************************************************** -->
                <!--           Link filters (dataObjectId) to group           -->
                <!-- ******************************************************** -->
        <AddAssignments>
            <assignments>
                 <AssignmentByName>
                    <namespaceId>1</namespaceId>
                    <dataObjectId>1</dataObjectId>
                    <principalType>2</principalType>
                    <principalName>FieldMarketer</principalName>
                </AssignmentByName>
            </assignments>
        </AddAssignments>
    </operations>
</ExecuteBatch>
```

ユーザー・インターフェースを介したユーザーおよびグループの割り当てについて

「設定」>「データ・フィルター」ページで、ユーザーおよびグループをデータ・フィルターに割り当てることができます。

「設定」>「データ・フィルター」 ページでデータ・フィルターを操作するには、以下に該当していなければなりません。

- データ・フィルターは、Marketing Platform システム・テーブルにセットアップする必要があります。
- 「データ・フィルターの管理ページ」の Marketing Platform 権限を持つユーザーとしてログインする必要があります。事前に構成された Marketing Platform「**AdminRole**」役割がこの権限を持っています。

拡張検索

Marketing Platform には、ユーザーおよびグループをデータ・フィルターに割り当てるためのユーザー・インターフェースがあります。このユーザー・インターフェースは、拡張検索機能を使用してユーザー、グループ、およびデータ・フィルターのリストを取得します。これらのリストからユーザーおよびグループを選択し、選択したデータ・フィルターをそれらのユーザーやグループに割り当てることができます。

データ・フィルター検索

データ・フィルターの検索機能は、データ・フィルターがセットアップされたときに指定された基準と同じ検索基準を提供します。例えば、販売区域に関係する以下のデータが含まれているフィールドに基づく一連のデータ・フィルターがあるとします。

- Africa
- Asia
- Europe
- Middle East
- North America

データ・フィルター拡張検索では、このデータがドロップダウン・リストに表示されるので、ユーザーはデータ・フィルターの検索時にそのリンクから選択することができます。

ユーザーおよびグループ検索

ユーザーおよびグループの拡張検索機能にはテキスト・フィールドがあり、そこにテキストを入力して一致するものを検索することができます。

ユーザーおよびグループ拡張検索を含むタブが初めてロードされたときは、「ユーザー」と「グループ」の両方のテキスト・フィールドにワイルドカード (*) が表示されています。このワイルドカードを使用して検索を実行すると、すべてのレコードが返されます。

ワイルドカードを削除し、他のテキストを入力せずにフィールドをブランクのままにすると、レコードは何も返されません。例えば、「ユーザー」テキスト・フィールドをブランクにし、「グループ」テキスト・フィールドにアスタリスクを入れて検索を実行すると、その結果としてグループのみがリストされます。

「ビューの割り当て (View Assignments)」タブで、「ユーザー」と「グループ」の両テキスト・フィールドをブランクのままにすると、選択されているデータ・フィルター基準に関係なく、レコードは何も返されません。

フィールドにテキストを入力すると、テキスト・フィールドに入力した文字に入力した順序で一致する検索が実行されます。例えば、「North America」という名前のグループを検索するには、この名前に出てくる文字または文字グループを (出てくる順序で) 入力します。「north」または「h」を入力した場合は「North America」を取得できる可能性がありますが、「htron」と入力した場合は取得できません。

この検索では大/小文字を区別しません。つまり、"North" と "north" は同等です。

割り当て済みデータフィルタの表示

この手順を使用して、割り当て済みデータ・フィルターを表示します。

手順

1. Marketing Platform AdminRole 役割を持つユーザーとして IBM Marketing Software にログインし、「データのフィルタリング」をクリックします。

   「データ・フィルター」ページが表示されます。
2. 「割り当てられたデータ・フィルターの表示」をクリックします。
3. 割り当て済みデータ・フィルターの拡張検索を実行して、検索結果を取得します。

タスクの結果

基準を満たすデータ・フィルターのリストが表示されます。

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

この手順を使用して、ユーザーおよびグループをデータ・フィルターに割り当てます。

手順

1. Marketing Platform AdminRole 役割を持つユーザーとして IBM Marketing Software にログインし、「設定」>「データ・フィルター」をクリックします。

   「データ・フィルター」ページが表示されます。
2. 「ユーザーまたはグループの割り当て」をクリックします。
3. データ・フィルターの拡張検索を実行して、データ・フィルターのリストを取得します。
4. ユーザーまたはグループ (あるいはその両方) の拡張検索を実行して、ユーザーおよびグループのリストを取得します。
5. 検索結果のリストからデータ・フィルターと、それに割り当てるユーザーおよびグループを選択します。
6. 「割り当て」をクリックします。

タスクの結果

選択したユーザーおよびグループが、選択したデータ・フィルターに割り当てられます。

データフィルタ割り当ての削除

この手順を使用して、データ・フィルター割り当てを削除します。

手順

1. Marketing Platform AdminRole 役割を持つユーザーとして IBM Marketing Software にログインし、「設定」>「データ・フィルター」をクリックします。

「データ・フィルター」ページが表示されます。

2. 「割り当てられたデータ・フィルターの表示」をクリックします。
3. 割り当て済みデータ・フィルターの拡張検索を実行して、選択に使用できる検索結果を取得します。
4. 検索結果のリストから、割り当てを削除するデータ・フィルターを選択します。
5. 「割り当て解除」をクリックします。

タスクの結果

選択した割り当てが削除されます。データ・フィルター自体は削除されません。

初期セットの作成後のデータ・フィルターの追加

初期セットを作成した後で、データ・フィルターの追加を続けることができます。例えば、国とその都市/州の組み合わせに基づくデータ・フィルターのセットを作成し、後になって郵便番号に基づく別のセットを作成する場合があります。

このタスクについて

追加のデータ・フィルターの XML は、以下のいずれかの方法で取得できます。

- 元の XML ファイルを変更して新規フィルターを追加する。`dataFilteringScriptTool` ユーティリティーを使用してデータベースにデータを入れた場合、Marketing Platform では新規データ・フィルターのみが作成されます。
- XML ファイルを作成して新規データ・フィルターを指定する。`dataFilteringScriptTool` ユーティリティーを使用してデータベースにデータを入れた場合、既存のデータ・フィルターは削除されません。

XML を作成したら、データ・フィルター・テーブルにデータを追加して、本書の説明に従ってユーザーおよびグループを割り当ててください。

第 18 章 IBM Marketing Software での監査イベントの追跡

どの監査イベントを追跡するか構成し、追跡する各イベントに重大度レベルを割り当てることができます。

以下の 2 種類の監査イベントが追跡されます。

- ユーザー状況、グループ・メンバーシップ、権限に対する変更などのセキュリティー関連のイベント
- 「設定」>「構成」ページで管理する、IBM Marketing Software 構成プロパティーに対する変更

監査イベントの情報はシステム・ログとは無関係で、システム・ログ用に構成を実行しても監査イベントの追跡には影響しません。

追跡したイベントを表示するには、監査イベント・レポートが便利です。このレポートの内容を構成したり、このレポートに表示される情報をフィルター処理したり、レポート・データをエクスポートしたりできます。

監査イベント・レポートや監査バックアップを構成したりレポートを表示したりするには、Marketing Platform に AdminRole 役割または PlatformAdminRole 役割がなければなりません。

監査イベントの追跡に対する制限

構成プロパティーの監査イベント用に追跡を構成する場合、「設定」>「構成」ページを使用して実行した変更のみ追跡されます。

例えば、以下の構成プロパティーの変更は追跡されません。

- Marketing Platform ユーティリティー `configTool` を使用して加えた変更
- IBM Marketing Software 製品のインストール時やアップグレード時に加えた変更

また、Marketing Platform `populateDB` ユーティリティーを使用して、Marketing Platform や Campaign に関するデフォルト・ユーザー、役割、および権限を手動で追加する場合も、これらの変更は追跡されません。

既存の監査イベント

旧リリースの Marketing Platform では、使用できるレポートがない場合でも、Marketing Platform システム・テーブルに監査イベントを保存していました。9.1.1 より前のバージョンからアップグレードする場合、監査イベント・レポートにこれらの既存のイベントが組み込まれます。

既存の監査イベントは以下のようにレポートに表示されます。

- 「重大度」列に「重大度なし **(**レガシー**)**」が表示されます。これは、監査レポートが使用可能になる前にこれらの監査レコードが保管されたことを示します。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

- パーティションが 1 つしかない環境では、「パーティション」列にデフォルト・パーティションの ID が表示されます。
- マルチパーティション環境では、「パーティション」列に「**-1 (**レガシー**)**」が表示されます。これは、イベントが属するパーティションを判別できないことを示します。

アップグレード後に以下の既存のイベントが表示されることがあります。

- ユーザー認証に成功しました。
- ユーザー認証に失敗しました。
- ユーザーがログイン試行時に使用した並行セッションの数が多すぎるので、認証に失敗しました。
- ユーザーがログオフし、対応するセッションが終了しました。
- ユーザーのパスワードが変更されました。

既存の監査イベントは、Marketing Platform で PlatformAdminRole 役割を持つアカウントでレポートにアクセスする場合のみレポートに表示されます。事前定義済みの platform_admin ユーザーがこの役割を持っています。

遡及的変更

ユーザー・アカウントの名、姓、または E メール・アドレスが変更される場合、このユーザーに関して追跡されるすべての監査イベントにその変更が反映されます。このことは、ユーザー・プロファイルの変更が行われる前に追跡されたイベントについても当てはまります。

マルチパーティション環境での監査イベント・レポートの表示に関する権限

マルチパーティション環境で、監査イベント・レポートを表示する管理者のパーティション・メンバーシップは、管理者がレポートを表示する際に組み込まれるイベントに影響します。

構成イベントを除くすべての監査イベントにおいて、レポートを表示する管理者のパーティションで発生したイベントのみレポートに表示されます。その他のパーティションで発生したイベントはレポートに表示されません。

PlatformAdminRole 役割を持つ管理者は例外で、すべてのパーティションで発生するイベントを表示できます。

レポートを表示できるすべての管理者は、すべての構成イベントを表示できます。

イベント監査の有効化と無効化

デフォルトでは、イベント監査は無効になっています。イベント監査を有効にするには、**IBM Marketing Platform** | 監査イベント | イベント監査を有効にしますか**?**構成プロパティーを True に設定します。

このタスクについて

この構成プロパティーは、「構成」ページ上の **IBM Marketing Platform** | 監査イベントの下にリストされる監査イベントのみに影響します。システム・ログで追跡されるイベントには影響しません。

「イベント監査を有効にしますか**?**」構成プロパティーの値を False に設定すると、いつでもイベント監査を無効にすることができます。

「イベント監査を有効にしますか**?**」プロパティーを **False** に設定した場合は、このプロパティーで制御されるイベントは、発生した時点にかかわらず監査イベント・レポートには含まれません。

レポートに表示される監査イベントの構成

監査レポートに表示される監査イベントとその重大度を指定するには、「設定」**>**「構成」ページでプロパティーを設定します。

手順

1. 「設定」**>**「構成」ページに進み、「**IBM Marketing Platform** | 監査イベント | 監査イベント構成」カテゴリーを展開します。
2. 追跡するイベントを選択します。

   追跡されるイベントは、監査レポートに含めることができます。
3. 「**IBM Marketing Platform** | 監査イベント | 監査イベント重大度の構成」カテゴリーを展開し、「設定の編集」をクリックします。
4. 追跡する各イベントに割り当てる重大度レベルを指定します。

   以下のオプションから選択します。
   - 重大度なし
   - 通知
   - 警告
   - 重大

   指定した重大度は監査レポートに示され、レポートのフィルター処理に使用できます。

次のタスク

ユーザー・セッション・イベント「**HighSeverityAccounts** グループのメンバーのログイン**/**ログアウト・イベントを記録する」を追跡する場合は、ログイン・イベントとログアウト・イベントの追跡対象ユーザーを **highSeverityAccounts** グループに追加します。この作業は、「設定」**>**「ユーザー・グループ」ページで行います。

このグループは、インストール中にデフォルトのパーティション内に自動的に作成されます。マルチパーティション環境では、Marketing Platform `partitionTool` ユーティリティーを使用して新しいパーティションを作成する際に、このグループが自動的に作成されます。

関連タスク:

28 ページの『グループまたはサブグループへのユーザーの追加』

関連資料:

328 ページの『IBM Marketing Platform | 監査イベント』

329 ページの『IBM Marketing Platform | 監査イベント | 監査イベントの構成』

332 ページの『IBM Marketing Platform | 監査イベント | 監査イベント重大度構成』

監査レポートの内容と表示の変更

イベントや列の追加や削除を行ったり、列の再整列やソートを行ったり、期間を設定したり、レポートに表示する追跡済みイベントを指定したり、情報をフィルター処理したりできます。

このタスクについて

レポート・パラメーターを設定せずに監査レポートを開くと、以下のデフォルト設定が使用されます。

- 「設定」>「構成」ページの「**IBM Marketing Platform | 監査イベント | 監査イベント構成**」カテゴリーの下で選択したすべてのイベントが表示されます。これは、必要に応じて複数のページになります。
- 日付基準は適用されません。
- イベントは、イベント日時 (降順)、ログイン名 (昇順)、重大度レベル (昇順) でソートされます。

これらの設定を変更するには、次の手順を使用します。

手順

1. 「分析」>「**Marketing Platform**」へ移動します。
2. レポートの内容を変更する場合は、以下の操作を実行します。
   a. 「レポート・パラメーター」ボタンをクリックします。

      「レポート・パラメーター」ウィンドウが開きます。

   b. フィールドに必要事項を入力します。

      レポート内のソート順を設定するには、このウィンドウ内の事前定義済みのソート順から選択できます。レポート内の列ヘッダーをクリックして、これらの列に対するソートを実行することもできます。

   c. 「次へ」をクリックして、レポートに表示するイベントを選択できるページに移動します。
   d. 「保存して閉じる」をクリックして、選択項目をレポートに適用します。
3. レポートをフィルター処理するには、「フィルター」フィールドにテキストか数値を入力し、「フィルター」ボタンをクリックします。

レポートに表示されるいずれかの列にフィルター文字が含まれるイベントだけが、レポートに表示されます。

フィルターをクリアするには、「フィルター」フィールドで「**X**」をクリックします。

関連資料:

『「レポート・パラメーター」ウィンドウのフィールド』

「レポート・パラメーター」ウィンドウのフィールド

「レポート・パラメーター」ページのフィールドを使用して、監査レポートの表示方法を構成します。

表 *73.* 「レポート・パラメーター」ウィンドウのフィールド

フィールド	説明
ソート	ドロップダウン・メニューからソート順を選択します。列のソートのさまざまな組み合わせがリストされ、ソートが降順か昇順かが示されます。 レポートのページ上のコントロールを使用して列をソートすることもできます。
期間	ドロップダウン・リスト内の事前定義済みの期間から選択するか、カスタム範囲の開始日と終了日を入力します。
イベント	レポートに含めるオプションのイベントを選択します。イベントをレポートに表示されるようにするには、「設定」>「構成」ページの「**IBM Marketing Platform**	監査イベント	監査イベント構成」カテゴリー内で選択する必要があります。
列	「追加」ボタンと「削除」ボタンを使用して、レポートに表示するオプションの列を指定します。

関連タスク:

252 ページの『監査レポートの内容と表示の変更』

監査イベント・レポートのフィールドとボタン

監査イベント・レポートのフィールドには、IBM Marketing Software でのシステム・イベントとユーザー・イベントに関する詳細情報が示されます。

表 *74.* 監査イベント・レポートのフィールドとボタン

フィールドまたはボタン	説明
フィルター	レポートをフィルター処理するには、「フィルター」フィールドにテキストか数値を入力し、ボタンをクリックします。レポートに表示されるいずれかの列にフィルター文字が含まれるイベントだけが、レポートに表示されます。

表 74. 監査イベント・レポートのフィールドとボタン (続き)

フィールドまたはボタン	説明
レポート・パラメーター	クリックするとウィンドウが開き、レポートに表示される列を変更したり、期間を設定したり、事前定義済みのソート順から選択したりできます。
エクスポート	クリックするウィンドウが開き、CSV 形式かテキスト形式でレポートをエクスポートできます。
最新表示	レポート・データを最新表示する場合にクリックします。
デフォルトのフィールド	
イベント日付/時刻 (短)	Marketing Platform が配置されているサーバー上のイベントの日時。
イベント名	追跡されるイベント。追跡されるイベントは、「設定」>「構成」ページで指定します。
イベント詳細	追跡されたイベントに関する詳細情報。リンクがある場合は、クリックして完全な詳細情報を参照できます。
ログイン名	アクションを実行したユーザーのログイン名。
姓、名	アクションを実行したユーザーの姓と名。
重大度	**IBM Marketing Platform** | 監査イベント | 監査イベント重大度の構成ページ上でイベントに割り当てられた重大度。
「レポート・パラメーター」ウィンドウで設定されるオプション・フィールド	
ブラウザー	アクションを実行したユーザーが使用したブラウザー。
ホスト名	アクションを実行したマシンの名前または IP アドレス。
要求元	HTTP 要求が発信された URI。
イベント日付/時刻 (長)	Marketing Platform が配置されているサーバー上のイベントの日時。タイム・ゾーンが含まれます。
ユーザーの E メール	アクションを実行したユーザーの E メール・アドレス。
パーティション	アクションを実行したユーザーのパーティション・メンバーシップ。

アーカイブ済みの監査イベント

「設定」>「構成」ページで「**IBM Marketing Platform** | 監査イベント | 監査イベント構成」カテゴリーの構成プロパティーの値を設定することによって、監査イベントのバックアップを構成できます。

アーカイブされるデータは、`USM_AUDIT_BACKUP` テーブルに保管され、アーカイブからのデータが含まれるカスタムの日付範囲を設定するときに監査イベント・レポー

トに組み込むことができます。アーカイブ済みのデータが含まれているレポートのロードは、アーカイブ済みのデータが含まれていないレポートのロードより時間がかかる場合があります。

監査バックアップ処理が完了すると、システムから通知が送られます。これらの通知を E メールで受信するユーザーのグループを構成することもできます。

監査イベントのバックアップを構成するには、以下のプロパティーを設定します。

- 監査バックアップを有効にする
- 指定した日数が経過したらデータをアーカイブに保管する
- 指定した日数で監査レコードをプライマリーに保管する
- アーカイブ開始時刻
- 監査バックアップ通知を受信するグループ名

関連タスク:

『監査バックアップ通知の構成』

関連資料:

329 ページの『IBM Marketing Platform | 監査イベント | 監査イベントの構成』

監査バックアップ通知の構成

監査イベント・バックアップの状況をユーザーに通知するには、そのユーザーを、構成プロパティーで指定したグループのメンバーにします。

手順

1. 監査データ・バックアップの E メール通知を受信するメンバーが所属するグループを決定します。

   既存のグループを使用するか、「設定」>「ユーザー・グループ」ページで新しいグループを作成できます。

   通知を受け取るグループは 1 つしか指定できません。
2. 「設定」>「構成」ページに進み、「**IBM Marketing Platform** | 監査イベント | 監査イベント構成」カテゴリーを展開します。
3. 「監査バックアップ通知を受信するグループ名」プロパティーの値を、選択したグループの名前に設定します。
4. 通知を受け取るユーザーをグループに追加します。
5. グループに追加したユーザーは、「設定」>「ユーザー」ページ上で通知にサブスクライブする必要があります。

   この作業は、ユーザーごとに管理者が行うこともできますし、ユーザーに連絡して操作を実行してもらうことができます。つまり、アカウントに進んでから「通知の配信登録」をクリックし、「監査バックアップ」通知にサブスクライブするという操作です。

タスクの結果

指定したグループのメンバーが監査イベント通知にサブスクライブしていれば、システムで監査データがバックアップされるたびに、そのメンバー用に E メール通知とユーザー・インターフェース通知が生成されます。

関連概念:

254 ページの『アーカイブ済みの監査イベント』

監査イベント・レポートのエクスポート

セキュリティー監査レポートをテキストかコンマ区切りファイルにエクスポートできます。

手順

1. 「分析」>「**Marketing Platform**」へ移動します。
2. 「エクスポート」ボタンをクリックします。
3. 「監査レポートのエクスポート (Audit Report Export)」ウィンドウで、エクスポートするレポートの名前を入力し、エクスポート形式を選択します。

   形式のオプションは次のとおりです。

   - **CSV** (Microsoft Excel で開くことができるコンマ区切りリスト)
   - **TXT** (テキスト)

     テキスト形式を選択すると、分離文字も選択できます。オプションは次のとおりです。

     – **#**
     – **|**
     – タブ
4. 「エクスポート」をクリックし、エクスポートしたレポートを開くか保存するかを指定してから、エクスポート・ウィンドウを閉じます。

イベント・ボリュームが大きい場合の監査イベント・レポートのエクスポートの最適化

監査イベント・レポートのフィルター基準に合致するレコードが 65,000 を超えるレポートなどの大規模な監査イベント・レポートをエクスポートしようとすると、エクスポートがタイムアウトになることがあります。この問題を避けるには、以下の手順を実行します。

このタスクについて

この手順は、Internet Explorer を使用して監査イベント・レポートにアクセスする場合に適用されます。

手順

1. 以下のように Windows レジストリーを編集します。

a. Windows レジストリー・エディターを開き、`HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Internet Settings` にナビゲートします。

b. `ReceiveTimeout` という名前の DWORD エントリーがない場合は作成します。

   新しい DWORD エントリーを作成するには、次のようにします。

   - `Internet Settings` を右クリックして、「新規」>「**DWORD (32** ビット**)** 値」を選択します。
   - 新しいエントリーの名前として `ReceiveTimeout` と入力します。

c. 以下のように、既存または新規の `ReceiveTimeout` エントリーに値を指定します。

   - `ReceiveTimeout` エントリーを右クリックし、「修正」を選択します。
   - 「ベース」で「**10** 進数」を選択します。
   - タイムアウト間隔をミリ秒で指定します。

     例えば、3 時間を指定するには 10800000 と入力します。これは 180 分 * 60 秒 * 1000 です。

2. 次のように Internet Explorer を構成します。

   a. 「ツール」>「インターネット オプション」を選択し、「セキュリティ」タブをクリックします。

   b. Marketing Platform にアクセスするゾーンを選択します。例えば、「信頼済みサイト」を選択します。

   c. 「レベルのカスタマイズ」をクリックします。

   d. 「ダウンロード」の下の「ファイルのダウンロード時に自動的にダイアログを表示」を有効にします。

   e. Internet Explorer を再始動します。

第 19 章 Marketing Platform システム・ログ

Marketing Platform アプリケーションが誤動作をした場合、まずシステム・ログを確認する必要があります。システム・ログは、セキュリティー監査情報 (システム・テーブルに保管される) に依存しません。システム・ログはセキュリティー監査レポートに含まれている情報と同じ情報のいくつかを追跡しますが、Marketing Platform のトラブルシューティングに役立つ情報も含まれています。

システム・ログには、以下の情報が入っています。

- Marketing Platform の構成情報およびすべてのエラー情報とデバッグ情報
- Marketing Platform サーバーで発生した重要イベント (要求、権限認可、取り消し、および失敗) の記録

システム・ログに表示される構成設定について

注: システムは、システム・ログ・ファイルに書き込もうとした際に問題が発生すると、ファイルの代わりに標準出力 (コマンド・ライン) に書き込みます。

システム・ログ項目の形式

システム・ログ項目の形式は以下のとおりです。

タイム・スタンプ | イベント重大度レベル | メッセージ

- タイム・スタンプ – イベントが発生した時刻。
- イベント重大度レベル – イベントのロギング・レベル。
- メッセージ – イベントの説明。項目がサーバーに対する要求の場合、メッセージには一般に、その要求によって呼び出される機能が含まれています。レスポンス・エントリーには要求の結果が記録されます。

システム・ログの構成

システム・ログを構成するには `log4j.properties` ファイルを使用します。デフォルトでは、このファイルは、Marketing Platform のインストール先の下位の `conf` ディレクトリーに入っています。このファイルに対する変更は、ファイルの格納後 30 秒以内に有効になります。

システム・ログで実行する構成は、セキュリティー監査レポートに影響を与えません。

デフォルトのシステム・ログ設定

デフォルトでは、システム・ログは以下のように構成されます。

- ログ・ファイル名: `platform.log`
- ログ・ディレクトリー: `Unica/Platform/logs`
- ログ・レベル: `WARN`
- バックアップの数: 1

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

- ログ・ファイルの最大サイズ: 10MB

次のことに注意してください。

- バックアップの数またはログ・ファイルのサイズを大きくする場合は、ログの格納先のマシンに十分なメモリーがあることを確認してください。
- ロギング・レベルをデフォルト値より高くすると、パフォーマンスに影響が出る可能性があります。

システム・ログのロギング・レベル

システム・ログで使用可能なロギング・レベルは、以下のとおりです (昇順に示してあります)。

- ERROR
- WARN
- INFO
- DEBUG
- TRACE

高位のレベルには、低位のレベルの情報がすべて含まれています。例えば、レベルを DEBUG に設定すると、DEBUG、INFO、WARN、および ERROR トレースが含まれます。

ロギング・レベルを DEBUG に設定した場合、応答メッセージには、Marketing Platform データ・ストアに対して実行されたすべての SQL 照会が含まれます。

Marketing Platform システム全体のロギング・レベルの設定

ファイルの「Examples」セクションの目的の行をアンコメントすることによって、Marketing Platform のすべてのコンポーネントのロギング・レベルを変更することができます。行をアンコメントするには、その行の先頭にある # 文字を削除します。この変更を行う場合、以前のロギング・レベルを指定した行の先頭に、必ず # 記号を追加してください。

Marketing Platform コンポーネントのロギング・レベルの設定

Marketing Platform の特定のコンポーネントのシステム・ログで、ロギング・レベルを設定することができます。これらのコンポーネントには以下のものがあります。

- ローカライズ
- ユーザーおよびグループ処理
- データ・マイグレーション
- LDAP 統合
- 認証 (サーバー・サイド処理)
- 「構成」ページ
- データベース・アクセス
- 各種のサード・パーティー・ライブラリー (例: ibatis)

デフォルトでは、コンポーネント・レベルのロギングはオフになっています。特定のモジュールをデバッグするには、log4j.properties ファイルで、そのモジュールの各行の先頭にある # 文字を削除します。

log4j に関する詳細の参照先

log4j に関する追加情報は以下の方法で見つけることができます。

- log4j.properties ファイルの中のコメントを参照する。
- http://logging.apache.org/log4j/docs/documentation.html を参照する。

単一ユーザーのロギングの有効化

XML ファイルを使用するようにロギングを構成してから XML ファイルを編集することによって、単一ユーザーのロギングを有効にすることができます。

このタスクについて

ロギングは、log4j.properties と log4j.xml の 2 つのファイルのいずれかを使用して構成されます。デフォルトでは、log4j.properties ファイルが使用されます。

XML ファイルを使用するようにロギングを構成してから XML ファイルを編集することによって、ユーザー単位のロギングを有効にすることができます。Marketing Platform をクラスターの配置で構成している場合は、XML ファイルを全ノードにコピーしてください。

注: XML ロギングを有効にすると、XML 構成ファイルの作成または変更が行われていないかを定期的に検査するスレッドが生成されます。変更またはファイルの作成が検出されると、log4j を構成するために XML ファイルが読み取られます。このポーリング間隔は 60 秒です。

手順

1. 以下の JVM パラメーターを設定して、log4j.xml を使用するようにロギングを構成します。

   ```
   -DENABLE_PLATFORM_LOG4J_XML_LOGGING=true
   ```

   ユーザー単位のロギングを有効にするには、この値を true に設定する必要があります。

   Marketing Platform をクラスターの配置で構成している場合は、クラスターの全ノードでこの JVM パラメーターを設定します。
2. ユーザー単位のロギングで記録するユーザー・アカウントを指定するには、log4j.xml ファイルを編集し、filter タグにユーザーを追加します。 filter タグに追加されたユーザーのログが、指定されたファイルに保存されます。 filter タグなしで appender を作成することもできます。
   - 複数のタグを log4j.xml ファイルに追加して、特定のユーザーごとに別々のログ・ファイルを作成することができます。新しいユーザーに固有のログ・ファイルごとに、新しい appender を追加する必要があります。
   - デフォルトでログ・ファイルは Platform_Home /Platform/logs フォルダーに作成され、platform.log という名前が付けられます。これとは異なる有効

なパスとファイル名を指定することもできます。それぞれのフォルダーでログ・ファイルを生成するために、絶対パスまたは完全パスを指定する必要があります。

- ユーザー固有のログと全ユーザーのログの両方が必要な場合は、filter タグを定義しないで、新規名を付けた appender タグを追加します。 appender には固有の名前を付ける必要があります。
- この新しい appender のルート・タグの下に、対応する項目を追加します。

3. Marketing Platform をクラスターの配置で構成している場合は、編集した XML ファイルをクラスターの全ノードにコピーします。

   以下の例に示すようなコマンドを使用できます。
   `-DPLATFORM_LOG4J_XML_FILE=log4j_node1.xml`

   `log4j_node1.xml` ファイルは、`log4j.xml` ファイルのコピーです。コピーしたファイルには、任意の名前を使用できます。

例

以下の例を検討してください。この例では、ユーザー `asm_admin` のログと、その他のすべてのユーザーのログが収集されます。

```
<appender name="Console" class="org.apache.log4j.ConsoleAppender">
  <param name="ImmediateFlush" value="true"/>
  <layout class="org.apache.log4j.PatternLayout">
    <param name="ConversionPattern" value="%-5p %c - %m%n"/>
  </layout>
  <filter class="com.unica.manager.logger.UserMatchFilter">
    <param name="StringToMatch" value="asm_admin" />
  </filter>
</appender>

<!-- The following section is for user specific logs for the user asm_admin -->
<appender name="System" class="org.apache.log4j.RollingFileAppender">
  <param name="File" value="${UNICA_PLATFORM_LOG_FILE}"/>
  <!-- <param name="Encoding" value="utf-8"/>
  <param name="Append" value="true"/>
  <param name="ImmediateFlush" value="false"/>
  -->
  <param name="MaxBackupIndex" value="1"/>
  <param name="MaxFileSize" value="10MB"/>
  <layout class="org.apache.log4j.PatternLayout">
    <param name="ConversionPattern" value="%d{DATE} - %-5p - %m%n"/>
  </layout>
  <filter class="com.unica.manager.logger.UserMatchFilter">
    <param name="StringToMatch" value="asm_admin" />
  </filter>
</appender>

<!-- The following section is for logs for all the users -->
<appender name="SystemAllUsers" class="org.apache.log4j.RollingFileAppender">
  <param name="File" value="<LOG_FILE_PATH>"/><!--the absolute path for the log file-->
  <!-- <param name="Encoding" value="utf-8"/>
  <param name="Append" value="true"/>
  <param name="ImmediateFlush" value="false"/>
  -->
  <param name="MaxBackupIndex" value="1"/>
  <param name="MaxFileSize" value="10MB"/>
  <layout class="org.apache.log4j.PatternLayout">
    <param name="ConversionPattern" value="%d{DATE} - %-5p - %m%n"/>
  </layout>
</appender>
```

```
<!-- <logger name="com.unica.manager.configuration.ConfigurationManager">
    <level value="TRACE"/>
  </logger>
  <logger name="com.unica.suite.scheduler.server.manager.TaskManager">
    <level value="DEBUG"/>
  </logger>
  <logger name="org.hibernate.util.JDBCExceptionReporter">
    <level value="ERROR"/>
  </logger>
-->
<root>
  <level value="WARN"/>
    <appender-ref ref="System"/>
    <appender-ref ref="Console"/>
    <appender-ref ref="SystemAllUsers"/>
</root>
```

第 20 章 IBM Marketing Platform のユーティリティーおよび SQL スクリプト

このセクションでは、Marketing Platform の概要を示します。これには、すべてのユーティリティーに当てはまり、個別のユーティリティーの説明では扱われていない詳細が含まれます。

ユーティリティーの場所

Marketing Platform ユーティリティーは、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにあります。

ユーティリティーのリストと説明

Marketing Platform は、以下のユーティリティーを提供します。

- 268 ページの『alertConfigTool』 - IBM Marketing Software 製品のアラートと構成を登録します。
- 268 ページの『configTool』 - 構成設定 (製品の登録を含む) のインポート、エクスポート、および削除を行います。
- 273 ページの『datafilteringScriptTool』 - データ・フィルターを作成します。
- 275 ページの『encryptPasswords』 - パスワードを暗号化および保管します。
- 276 ページの『partitionTool』 - パーティションのデータベース・エントリーを作成します。
- 278 ページの『populateDb』 - Marketing Platform データベースにデータを設定します。
- 279 ページの『restoreAccess』 - ユーザーに platformAdminRole 役割を復元します。
- 281 ページの『scheduler_console_client』 - トリガーを listen するように構成されている IBM Marketing Software のスケジューラー・ジョブをリストまたは開始します。

Marketing Platform ユーティリティーを実行するための前提条件

以下は、すべての Marketing Platform ユーティリティーを実行するための前提条件です。

- すべてのユーティリティーは、それらが存在するディレクトリー (デフォルトでは、Marketing Platform インストールの下の `tools/bin` ディレクトリー) から実行します。
- UNIX では、ベスト・プラクティスは、Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーを実行するユーザー・アカウントと同じユーザー・アカウントでユーティリティーを実行することです。異なるユーザー・アカウントでユーティリティーを実行する場合、`platform.log` ファイルの権限を調整して、そのユーザー・アカウントがこのファイルに書き込めるようにします。権限

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

を調整しないと、ユーティリティーはログ・ファイルに書き込むことができず、ツールは正しく機能しているのにエラー・メッセージが表示される可能性があります。

ユーティリティーの認証

例えば configTool などの IBM Marketing Software バックエンド・ユーティリティーのようなユーティリティーは、システム管理者が使用するように設計されており、起動するためにはホスト・サーバーへの物理アクセスを必要とします。そのため、これらのユーティリティーの認証は、UI 認証メカニズムから独立して設計されています。これらのユーティリティーへのアクセスは、Marketing Platform 管理者特権のあるユーザーが行えます。これらのユーティリティーに対するアクセスは Marketing Platform でローカルに定義され、その同じ定義に基づいて認証されることになっています。

接続の問題のトラブルシューティング

encryptPasswords を除くすべての Marketing Platform ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルと対話します。システム・テーブル・データベースに接続するために、これらのユーティリティーは以下の接続情報を使用します。この情報は、Marketing Platform のインストール時に提供される情報を使ってインストーラーによって設定されます。この情報は、Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーにある jdbc.properties ファイルに保管されます。

- JDBC ドライバー名
- JDBC 接続 URL (ホスト、ポート、およびデータベース名を含む)
- データ・ソース・ログイン
- データ・ソース・パスワード (暗号化)

さらに、これらのユーティリティーは、Marketing Platform のインストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプトまたはコマンド行で設定された、JAVA_HOME 環境変数に依存しています。この変数は Marketing Platform インストーラーによって setenv スクリプトで自動的に設定されるはずですが、ユーティリティーの実行に問題がある場合は JAVA_HOME 変数が設定されていることを確認することをお勧めします。 JDK は Sun バージョンでなければなりません (例えば WebLogic で入手できる JRockit JDK は不可です)。

特殊文字

オペレーティング・システムで予約文字として指定されている文字は、エスケープする必要があります。予約文字のリストおよびそれをエスケープする方法については、オペレーティング・システムの資料を参照してください。

Marketing Platform ユーティリティーの標準オプション

すべての Marketing Platform ユーティリティーで、以下のオプションを使用できます。

```
-l logLevel
```

コンソールに表示されるログ情報のレベルを設定します。オプションは、high、medium、および low です。デフォルトは low です。

-L

コンソール・メッセージのロケールを設定します。デフォルト・ロケールは en_US です。使用可能なオプション値は、Marketing Platform が翻訳されている言語に依存します。 ISO 639-1 および ISO 3166 に応じて、ICU ロケール ID を使ってロケールを指定します。

-h

使用法に関する簡潔なメッセージをコンソールに表示します。

-m

このユーティリティーのマニュアル・ページをコンソールに表示します。

-v

実行の詳細をコンソールに表示します。

追加マシンでの Marketing Platform ユーティリティーのセットアップ

Marketing Platform がインストールされているマシンでは、追加の構成を行わずに Marketing Platform ユーティリティーを実行することができます。しかし、ユーティリティーをネットワーク上の別のマシンから実行することもできます。この手順では、それを行うために必要なステップについて説明します。

始める前に

この手順を実行するマシンが以下の前提条件を満たしていることを確認してください。

- 正しい JDBC ドライバーがマシンに存在しているか、マシンからアクセス可能でなければなりません。
- マシンに Marketing Platform システム・テーブルへのネットワーク・アクセスがなければなりません。
- マシンに Java ランタイム環境がインストールされているか、マシンからアクセス可能でなければなりません。

手順

1. Marketing Platform システム・テーブルに関する以下の情報を収集します。
   - JDBC ドライバー・ファイルのシステム上の完全修飾パス。
   - Java ランタイム環境のインストール先への完全修飾パス。

     インストーラーでのデフォルト値は、IBM Marketing Software のインストール・ディレクトリーの下にインストーラーが置いた、サポートされるバージョンの JRE へのパスです。このデフォルトを受け入れることも、別のパスを指定することもできます。
   - データベース・タイプ

- データベース・ホスト
- データベースのポート
- データベース名/システム ID
- データベース・ユーザー名
- データベースのパスワード

2. IBM Marketing Software インストーラーを実行して、Marketing Platform をインストールします。

   Marketing Platform システム・テーブルに関して収集したデータベース接続情報を入力します。 IBM Marketing Software インストーラーに精通していない場合は、「Campaign インストール・ガイド」または「Marketing Operations インストール・ガイド」を参照してください。

   ユーティリティーのみをインストールする場合、Marketing Platform Web アプリケーションを配置する必要ありません。

Marketing Platform ユーティリティー

このセクションでは、Marketing Platform ユーティリティーに関する機能詳細、構文、例について説明します。

alertConfigTool

通知タイプは、さまざまな IBM Marketing Software 製品に固有のものです。インストール時またはアップグレード時にインストーラーが自動的に通知タイプを登録しなかった場合は、`alertConfigTool` ユーティリティーを使用して登録してください。

構文

```
alertConfigTool -i -f importFile
```

コマンド

`-i -f importFile`

指定した XML ファイルからアラートと通知のタイプをインポートします。

例

- Marketing Platform インストール済み環境の `tools¥bin` ディレクトリーにある `Platform_alerts_configuration.xml` という名前のファイルからアラートと通知のタイプをインポートします。

  ```
  alertConfigTool -i -f Platform_alerts_configuration.xml
  ```

configTool

「構成」ページのプロパティーと値は、Marketing Platform システム・テーブルに保管されます。`configTool` ユーティリティーを使用して、構成設定をシステム・テーブルにインポートしたり、システム・テーブルからエクスポートしたりできます。

configTool をいつ使用するか

configTool は、次のような目的で使用できます。

- Campaign に備わっているパーティションおよびデータ・ソースのテンプレートをインポートする。その後、構成ページを使って、それの変更および複製を行うことができます。
- 製品インストーラーがプロパティーをデータベースに自動的に追加できない場合に IBM Marketing Software 製品を登録する (その構成プロパティーをインポートする)。
- バックアップ用の構成設定の XML バージョンをエクスポートし、IBM Marketing Software の別のインストールにインポートする。
- 「カテゴリーの削除 **(Delete Category)**」リンクを持たないカテゴリーを削除する。これを行うには、configTool を使用して構成をエクスポートし、カテゴリーを作成する XML を手動で削除し、configTool を使用して、編集された XML をインポートします。

重要**:** このユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブル・データベース (構成プロパティーとその値が含まれている) の usm_configuration テーブルと usm_configuration_values テーブルを変更します。最良の結果を得るために、それらのテーブルのバックアップ・コピーを作成するか、configTool を使って既存の構成をエクスポートし、生成されるファイルをバックアップしてください。そうすることで、configTool を使ったインポートに失敗した場合に構成を復元することができます。

構文

configTool -d -p "*elementPath*" [-o]

configTool -i -p "*parent ElementPath*" -f *importFile* [-o]

configTool -x -p "*elementPath*" -f *exportFile*

configTool -vp -p "*elementPath*" -f *importFile* [-d]

configTool -r *productName* -f *registrationFile* [-o] configTool -u *productName*

コマンド

-d -p "*elementPath*" [o]

構成プロパティー階層内のパスを指定して、構成プロパティーとその設定を削除します。

エレメント・パスには、カテゴリーおよびプロパティーの内部名が使用されている必要があります。それらを得るには、「構成」ページの目的のカテゴリーまたはプロパティーを選択して、右のペインにある括弧内に示されているパスを確認します。| 文字を使って構成プロパティー階層のパスを区切り、パスを二重引用符で囲みます。

次のことに注意してください。

- このコマンドで削除できるのは、アプリケーション内のカテゴリーおよびプロパティーのみで、アプリケーション全体は削除できません。アプリケーション全体を登録解除するには、-u コマンドを使用します。
- 「構成」ページに「カテゴリーの削除」リンクがないカテゴリーを削除するには、-o オプションを使用します。

-d を指定した -vp コマンドを使用する場合、configTool はユーザーが指定するパスにあるすべての下位ノードを削除します (これらのノードが、ユーザーの指定する XML ファイルに含まれていない場合)。

-i -p "*parentElementPath*" -f *importFile* [o]

指定された XML ファイルから構成プロパティーとその設定をインポートします。

インポートするには、カテゴリーのインポート先の親要素へのパスを指定します。configTool ユーティリティーは、パス内で指定するカテゴリーの下にプロパティーをインポートします。

カテゴリーは最上位の下のどのレベルにでも追加することができますが、最上位カテゴリーと同じレベルにカテゴリーを追加することはできません。

親エレメント・パスには、カテゴリーおよびプロパティーの内部名が使用されている必要があります。これらの内部名は、「構成」ページに移動して、必要なカテゴリーまたはプロパティーを選択し、右側のペインの括弧内に表示されるパスを調べることによって得ることができます。 | 文字を使って構成プロパティー階層のパスを区切り、パスを二重引用符で囲みます。

tools/bin ディレクトリーからの相対的なインポート・ファイル場所を指定するか、ディレクトリーの絶対パスを指定することができます。相対パスを指定した場合、またはパスを指定しない場合、configTool は tools/bin ディレクトリーから相対的な場所にあるファイルを最初に探します。

デフォルトでこのコマンドは既存のカテゴリーを上書きしませんが、-o オプションを使用して上書きを強制することができます。

-x -p "*elementPath*" -f *exportFile*

指定された名前の XML ファイルに構成プロパティーとその設定をエクスポートします。

すべての構成プロパティーをエクスポートすることも、構成プロパティー階層内のパスを指定することによって特定のカテゴリーにエクスポートを制限することもできます。

要素パスにはカテゴリーおよびプロパティーの内部名を使用する必要があります。これは、「構成」ページに移動し、必要なカテゴリーまたはプロパティーを選択して、右側のペインで括弧付きで表示されるパスを見ると分かります。| 文字を使って構成プロパティー階層のパスを区切り、パスを二重引用符で囲みます。

現行ディレクトリーからの相対的なエクスポート・ファイル場所を指定するか、ディレクトリーの絶対パスを指定することができます。ファイル指定に区切り記号 (UNIX の場合は /、 Windows の場合は / または ¥) が含まれていない場合、

configTool はファイルを Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーの下に作成します。 xml 拡張子を付けない場合、configTool によってそれが追加されます。

-vp -p "*elementPath*" -f *importFile* [-d]

このコマンドは、主に手動アップグレードにおける構成プロパティーのインポートに使用されます。新しい構成プロパティーが含まれるフィックスパックを適用し、その後にアップグレードする場合、手動アップグレード・プロセスの一部として構成ファイルをインポートすると、フィックスパックを適用したときに設定された値がオーバーライドされる場合があります。-vp コマンドを使用すると、インポートを行っても、それ以前に設定された構成値はオーバーライドされません。

重要: configTool ユーティリティーを -vp オプションを指定して使用したら、変更が適用されるように、Marketing Platform がデプロイされている Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

-d を指定した -vp コマンドを使用する場合、configTool はユーザーが指定するパスにあるすべての下位ノードを削除します (これらのノードが、ユーザーの指定する XML ファイルに含まれていない場合)。

-r *productName* -f *registrationFile*

アプリケーションを登録します。 tools/bin ディレクトリーに相対する登録ファイルの場所を指定することも、絶対パスを指定することもできます。デフォルトでこのコマンドは既存の構成を上書きしませんが、-o オプションを使用して上書きを強制することができます。 *productName* パラメーターは、上記にリストされている名前のいずれかでなければなりません。

次のことに注意してください。

- -r コマンドを使用する際、登録ファイルには XML 内の最初のタグとして <application> を指定する必要があります。

  Marketing Platform データベースに構成プロパティーを挿入するために使用できる他のファイルが、製品と一緒に提供されることがあります。それらのファイルについては、-i コマンドを使用します。最初のタグとして <application> タグがあるファイルだけを -r コマンドとともに使用できます。
- Marketing Platform の登録ファイルの名前は Manager_config.xml で、最初のタグは <Suite> です。新規インストールでこのファイルを登録するには、populateDb ユーティリティーを使用するか、「*IBM Marketing Platform* インストール・ガイド」にある説明に従って Marketing Platform インストーラーを再実行します。
- 最初のインストールの後、Marketing Platform 以外の製品を再登録するには、configTool を -r コマンドおよび -o を指定して実行して、既存のプロパティーを上書きします。

configTool ユーティリティーは、製品の登録または登録解除を行うコマンドのパラメーターとして製品名を使用します。 IBM Marketing Software 8.5.0 リリースで

は、多くの製品名が変更されました。ただし、configTool によって認識される名前は変更されていません。configTool で使用できる有効な製品名を、現在の製品名とともに以下にリストします。

表 75. *configTool* 登録および登録解除で使用する製品名

製品名	**configTool** で使用する名前
Marketing Platform	管理者
Campaign	Campaign
Distributed Marketing	Collaborate
eMessage	emessage
Interact	interact
Contact Optimization	Optimize
Marketing Operations	Plan
Opportunity Detect	Detect
IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition	SPSS
Digital Analytics	Coremetrics

-u *productName*

productName によって指定されたアプリケーションを登録解除します。製品カテゴリーにパスを含める必要はありません。製品名は必須で、それのみで十分です。このプロセスで、製品のすべてのプロパティーと構成設定が削除されます。

オプション

-o

-i または -r と共に使用すると、既存のカテゴリーまたは製品登録 (ノード) を上書きします。

-d と共に使用すると、「構成」ページに「カテゴリーの削除」リンクがないカテゴリー (ノード) を削除することができます。

例

- Marketing Platform インストール済み環境の下の conf ディレクトリーの Product_config.xml という名前のファイルから構成設定をインポートします。

  ```
  configTool -i -p "Affinium" -f Product_config.xml
  ```

- 提供されている Campaign データ・ソース・テンプレートの 1 つをデフォルトの Campaign パーティションである partition1 にインポートします。この例では、Oracle データ・ソース・テンプレート OracleTemplate.xml が Marketing Platform インストールの tools/bin ディレクトリーにあることを前提としています。

  ```
  configTool -i -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1|dataSources"
  -f OracleTemplate.xml
  ```

- すべての構成設定を D:¥backups ディレクトリーの myConfig.xml という名前のファイルにエクスポートします。

  ```
  configTool -x -f D:¥backups¥myConfig.xml
  ```

- 既存の Campaign パーティション (データ・ソース・エントリーが完備されている) をエクスポートし、それを partitionTemplate.xml という名前のファイルに保存し、Marketing Platform インストールのデフォルトの tools/bin ディレクトリーに保管します。

  ```
  configTool -x -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1" -f
  partitionTemplate.xml
  ```

- Marketing Platform インストール済み環境の下のデフォルトの tools/bin ディレクトリーにある app_config.xml という名前のファイルを使用して、productName という名前のアプリケーションを手動で登録して、このアプリケーションの既存の登録を上書きするように強制します。

  ```
  configTool -r product Name -f app_config.xml -o
  ```

- productName という名前のアプリケーションを登録解除します。

  ```
  configTool -u productName
  ```

関連概念:

3 ページの『構成管理』

関連資料:

284 ページの『ManagerSchema_DeleteAll.sql』
285 ページの『ManagerSchema_DropAll.sql』

datafilteringScriptTool

datafilteringScriptTool ユーティリティーは、XML ファイルを読み取って、Marketing Platform システム・テーブル・データベースのデータ・フィルター・テーブルにデータを設定します。

XML をどのように書くかに応じて、このユーティリティーには使用方法が 2 とおりあります。

- XML 要素の 1 つのセットを使用して、フィールド値の一意の組み合わせに基づいてデータ・フィルター (一意の組み合わせごとに 1 つのデータ・フィルター) を自動生成します。
- XML 要素の若干異なるセットを使用して、ユーティリティーによって作成される各データ・フィルターを指定することができます。

XML の作成について詳しくは、「*IBM Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。

datafilteringScriptTool を使用する場合

datafilteringScriptTool は、新規データ・フィルターを作成するときに使用する必要があります。

前提条件

Marketing Platform を配置し、実行しておく必要があります。

SSL との datafilteringScriptTool の使用

片方向 SSL を使用して Marketing Platform を配置している場合、datafilteringScriptTool スクリプトを変更し、ハンドシェークを実行する SSL オプションを追加する必要があります。スクリプトを変更するには、以下の情報が必要です。

- トラストストア・ファイル名とパス
- トラストストア・パスワード

テキスト・エディターで、datafilteringScriptTool スクリプト (`.bat` または `.sh`) を開き、次のような行を見つけます (例は Windows バージョンの場合)。

```
:callexec

"%JAVA_HOME%¥bin¥java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"

com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

この行を次のように編集します (新規テキストが太字で示します)。
`myTrustStore.jks` および `myPassword` は、ご自分のトラストストア・パスとファイル名およびトラストストア・パスワードに置き換えてください。

```
:callexec

SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"

-Djavax.net.ssl.trustStore="C:¥security¥myTrustStore.jks"

-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=myPassword

"%JAVA_HOME%¥bin¥java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"
%SSL_OPTIONS%

com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

構文

`datafilteringScriptTool -r` *`path`*`file`

コマンド

`-r` *`path`*`_file`

指定された XML ファイルからデータ・フィルターの仕様をインポートします。インストールの下の `tools/bin` ディレクトリーにファイルがない場合、パスを指定し、*`path`*`_file` パラメーターを二重引用符で囲みます。

例

- C:¥unica¥xml ディレクトリーにあるファイル collaborateDataFilters.xml を使用して、データ・フィルター・システム・テーブルにデータを設定します。

```
datafilteringScriptTool -r "C:¥unica¥xml¥collaborateDataFilters.xml"
```

関連タスク:

222 ページの『データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加』

encryptPasswords

encryptPasswords ユーティリティーは、Marketing Platform が内部的に使用する 2 つのパスワードのいずれかを暗号化して保管するために使用します。

ユーティリティーは、以下の 2 つのパスワードを暗号化できます。

- Marketing Platform がシステム・テーブルにアクセスするために使用するパスワード。このユーティリティーは、既存の暗号化パスワード (Marketing Platform インストールの下の tools¥bin ディレクトリーにある jdbc,properties ファイルに保管されている) を新規パスワードで置き換えます。
- Marketing Platform または Web アプリケーション・サーバーによって提供されるデフォルトの証明書以外の証明書で SSL を一緒に使用するように構成されたときに、Marketing Platform によって使用される鍵ストア・パスワード。証明書は、自己署名証明書か認証局からの証明書のいずれかになります。

encryptPasswords を使用する場合

encryptPasswords は、以下の理由で使用します。

- Marketing Platform システム・テーブル・データベースにアクセスするために使用されるアカウントのパスワードを変更する場合。
- 自己署名証明書を作成したとき、または認証局から証明書を取得した場合。

前提条件

- encryptPasswords を実行して新規データベース・パスワードを暗号化して保管する前に、Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーにある jdbc.properties ファイルのバックアップ・コピーを作成しておきます。
- encryptPasswords を実行して鍵ストア・パスワードを暗号化して保管する前に、デジタル証明書を作成または取得し、鍵ストア・パスワードを覚えておく必要があります。

構文

encryptPasswords -d *databasePassword*

encryptPasswords -k *keystorePassword*

コマンド

-d *databasePassword*

データベース・パスワードを暗号化します。

-k *keystorePassword*

鍵ストア・パスワードを暗号化し、ファイル `pfile` に保管します。

例

- Marketing Platform をインストールした時に、システム・テーブル・データベース・アカウントのログインが `myLogin` に設定されています。インストール後のある時に、このアカウントのパスワードを `newPassword` に変更します。`encryptPasswords` を以下のように実行し、データベース・パスワードを暗号化して保管します。

  ```
  encryptPasswords -d newPassword
  ```

- SSL を使用するように IBM Marketing Software アプリケーションを構成し、デジタル証明書を作成または取得しました。 `encryptPasswords` を以下のように実行し、鍵ストア・パスワードを暗号化および保管します。

  ```
  encryptPasswords -k myPassword
  ```

関連概念:

265 ページの『第 20 章 IBM Marketing Platform のユーティリティーおよび SQL スクリプト』

partitionTool

パーティションは Campaign ポリシーおよび役割と関連付けられます。これらのポリシーおよび役割、およびそのパーティションとの関連付けは Marketing Platform システム・テーブルに保管されます。 `partitionTool` ユーティリティーは、パーティションの基本ポリシーおよび役割情報で Marketing Platform システム・テーブルをシードします。

partitionTool を使用する場合

作成するパーティションごとに、`partitionTool` を使用して、基本ポリシーおよび役割情報で Marketing Platform システム・テーブルをシードする必要があります。

Campaign での複数パーティションの設定について詳しくは、ご使用のバージョンの Campaign に該当するインストール・ガイドを参照してください。

特殊文字とスペース

パーティションの説明、またはユーザー、グループ、あるいはパーティションの名前にスペースが含まれる場合、それらを二重引用符で囲む必要があります。

構文

partitionTool -c -s *sourcePartition* -n *newPartitionName* [-u *admin_user_name*] [-d *partitionDescription*] [-g *groupName*]

コマンド

partitionTool ユーティリティーでは、以下のコマンドを使用できます。

-c

-s オプションを使用して指定する既存のパーティションのポリシーおよび役割を複製 (クローンを作成) し、-n オプションを使用して指定する名前を使用します。これらのオプションはどちらも c で必要です。このコマンドは、以下を行います。

- Campaign で、管理役割ポリシーとグローバル・ポリシーの両方に管理者の役割を持つ新規 IBM Marketing Software ユーザーを作成します。指定するパーティション名が、自動的にこのユーザーのパスワードとして設定されます。
- 新規 Marketing Platform グループを作成し、新規管理ユーザーをそのグループのメンバーにします。
- 新規パーティション・オブジェクトを作成します。
- ソース・パーティションに関連付けられているすべてのポリシーを複製し、それらを新規パーティションに関連付けます。
- 複製されるポリシーごとに、そのポリシーに関連付けられているすべての役割を複製します。
- 複製される役割ごとに、ソース役割でマップされた方法と同じ方法ですべての機能をマップします。
- 新規 Marketing Platform グループを、役割の複製時に作成される最後のシステム定義の管理役割に割り当てます。デフォルト・パーティション partition1 を複製する場合、この役割はデフォルトの管理役割 (管理) になります。

オプション

-d *partitionDescription*

オプション。-c と共にのみ使用されます。 -list コマンドからの出力に表示される説明を指定します。 256 文字以下でなければなりません。説明にスペースが含まれる場合は二重引用符で囲みます。

-g *groupName*

オプション。-c と共にのみ使用されます。ユーティリティーによって作成される Marketing Platform 管理グループの名前を指定します。名前は、Marketing Platform のこのインスタンス内で一意でなければなりません。

定義されない場合、名前はデフォルトの partition_nameAdminGroup になります。

-n *partitionName*

-list ではオプションで、-c では必須です。 32 文字以下でなければなりません。

-list と共に使用する場合、情報をリストするパーティションを指定します。

-c と共に使用する場合、新規パーティションの名前を指定します。指定するパーティション名は、管理ユーザーのパスワードとして使用されます。パーティション名は、(「構成」ページでパーティション・テンプレートを使用して) パーティションを構成したときに付けた名前と一致する必要があります。

-s *sourcePartition*

必須。-c とのみ使用されます。複製されるソース・パーティションの名前。

-u *adminUserName*

オプション。-c と共にのみ使用されます。複製されるパーティションの管理ユーザーのユーザー名を指定します。名前は、Marketing Platform のこのインスタンス内で一意でなければなりません。

定義されない場合、名前はデフォルトの *partitionName*AdminUser になります。

パーティション名が、自動的にこのユーザーのパスワードとして設定されます。

例

- 以下の特性を持つパーティションを作成します。
  - partition1 から複製
  - パーティション名は myPartition
  - デフォルト名 (myPartitionAdminUser) およびパスワード (myPartition) を使用
  - デフォルト・グループ名 (myPartitionAdminGroup) を使用
  - 説明を「ClonedFromPartition1」にする。

  ```
  partitionTool -c -s partition1 -n myPartition -d "ClonedFromPartition1"
  ```
- 以下の特性を持つパーティションを作成します。
  - partition1 から複製
  - パーティション名は partition2
  - ユーザー名 customerA を指定し、自動的に割り当てられるパスワード partition2 を使用
  - グループ名 customerAGroup を指定
  - 説明を「PartitionForCustomerAGroup」にする。

  ```
  partitionTool -c -s partition1 -n partition2 -u customerA -g
  customerAGroup -d "PartitionForCustomerAGroup"
  ```

関連概念:

265 ページの『第 20 章 IBM Marketing Platform のユーティリティーおよび SQL スクリプト』

populateDb

populateDb ユーティリティーは、デフォルト (シード) データを Marketing Platform システム・テーブルに挿入します。

IBM Marketing Software インストーラーは、Marketing Platform システム・テーブルに Marketing Platform および Campaign のデフォルト・データを追加できます。しかし、会社の方針でインストーラーによるデータベースの変更が許可されていない場合、またはインストーラーが Marketing Platform システム・テーブルに接続できない場合、このユーティリティーを使用して Marketing Platform システム・テーブルにデフォルト・データを挿入する必要があります。

Campaign の場合、このデータには、デフォルト・パーティションのセキュリティー役割および権限が含まれます。 Marketing Platform の場合、このデータには、デフォルトのユーザーとグループ、およびデフォルト・パーティションのセキュリティーの役割および権限が含まれます。

構文

```
populateDb -n productName
```

コマンド

```
-n productName
```

デフォルト・データを Marketing Platform システム・テーブルに挿入します。有効な製品名は `Manager` (Marketing Platform の場合) および `Campaign` (Campaign の場合) です。

例

- Marketing Platform デフォルト・データを手動で挿入します。

  ```
  populateDb -n Manager
  ```

- Campaign デフォルト・データを手動で挿入します。

  ```
  populateDb -n Campaign
  ```

関連資料:

284 ページの『ManagerSchema_DeleteAll.sql』
285 ページの『ManagerSchema_DropAll.sql』

restoreAccess

PlatformAdminRole 特権を持つすべてのユーザーが誤ってロックアウトされた場合、または Marketing Platform にログインするすべての機能が失われた場合には、`restoreAccess` ユーティリティーを使用して、Marketing Platform へのアクセスを復元できます。

restoreAccess を使用する場合

`restoreAccess` は、このセクションで説明されている 2 つの状況下で使用できます。

PlatformAdminRole ユーザーが無効になっている

Marketing Platform で PlatformAdminRole 特権を持つすべてのユーザーが、システム内で無効にされる可能性があります。以下に、platform_admin ユーザー・アカウントがどのように無効になるかを示す例を示します。 PlatformAdminRole 権限を持つユーザーが 1 人 (platform_admin ユーザー) だけであるとします。「構成」ページの「一般 | パスワード設定」カテゴリーの「**許可されるログイン再試行の最大回数**」プロパティーが 3 に設定されており、platform_admin としてログインを試みているユーザーが間違ったパスワードを連続 3 回入力するとします。このログイン試行の失敗が原因で、platform_admin アカウントはシステム内で無効になります。

この場合、`restoreAccess` を使用すると、Web インターフェースにアクセスせずに、PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを Marketing Platform システム・テーブルに追加することができます。

このように `restoreAccess` を実行すると、このユーティリティーは、指定したログイン名とパスワードおよび PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。

指定したユーザー・ログイン名が、Marketing Platform 内に内部ユーザーとして存在する場合、そのユーザーのパスワードは変更されます。

ログイン名 PlatformAdmin および PlatformAdminRole 権限を持つユーザーだけが、例外なくすべてのダッシュボードを管理することができます。そのため、platform_admin ユーザーが無効になっていて、`restoreAccess` によってユーザーを作成する場合、ログインとして platform_admin を持つユーザーを作成する必要があります。

不適切な **NTLMv2** 認証構成

構成が不適切な NTLMv2 認証を実装してログインできなくなった場合は、`restoreAccess` を使用して、ログインできるように復元します。

このように `restoreAccess` を実行すると、このユーティリティーは、「`Platform` | **セキュリティー** | **ログイン方法**」プロパティーの値を `Marketing Platform` に変更します。この変更により、ロックアウトされる前に存在していたユーザー・アカウントを使ってログインできるようになります。オプションで、新規ログイン名およびパスワードを指定することもできます。このように `restoreAccess` ユーティリティーを使用する場合は、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

パスワードに関する考慮事項

`restoreAccess` を使用する際は、パスワードに関する以下の点に注意してください。

- `restoreAccess` ユーティリティーでは空のパスワードがサポートされておらず、パスワード規則は適用されません。
- 使用中のユーザー名を指定すると、そのユーザーのパスワードはユーティリティーによってリセットされます。

構文

```
restoreAccess -u loginName -p password
```

```
restoreAccess -r
```

コマンド

-r

-u *loginName* オプションを指定せずに使用した場合は、「IBM Marketing Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細」プロパティーの値を Marketing Platform にリセットします。有効にするには Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

-u *loginName* オプションとともに使用すると、PlatformAdminRole ユーザーが作成されます。

オプション

-u *loginNname*

PlatformAdminRole 権限を持ち、指定されたログイン名のユーザーを作成します。-p オプションとともに使用する必要があります。

-p *password*

作成するユーザーのパスワードを指定します。 -u で必要です。

例

- PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

  ```
  restoreAccess -u tempUser -p tempPassword
  ```

- ログイン方法の値を「IBM Marketing Platform」に変更し、PlatformAdminRole 特権を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

  ```
  restoreAccess -r -u tempUser -p tempPassword
  ```

関連概念:

25 ページの『パーティション間管理特権』

scheduler_console_client

IBM Marketing Software スケジューラーで構成されるジョブがトリガーを listen するようにセットアップされている場合、このユーティリティーによってジョブをリストし、開始することができます。

SSL が有効な場合の実行内容

SSL を使用するように Marketing Platform Web アプリケーションが構成されている場合、scheduler_console_client ユーティリティーが使用する JVM は、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーが使用する SSL 証明書と同じ SSL 証明書を使用する必要があります。

SSL 証明書をインポートするには以下の手順を実行します。

- scheduler_console_client によって使用される JRE の場所を判別します。
  - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されている場合、それが指す JRE が、scheduler_console_client ユーティリティーによって使用される JRE です。
  - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されていない場合、scheduler_console_client ユーティリティーは、Marketing Platform インストールの tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプトかコマンド・ラインのいずれかで設定される JRE を使用します。
- Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーが使用する SSL 証明書を scheduler_console_client が使用する JRE にインポートします。

  Sun JDK には、証明書のインポートに使用できる keytool というプログラムが含まれています。このプログラムについて詳しくは、Java の資料を参照してください。あるいは、プログラムを実行するときに -help を入力してヘルプにアクセスしてください。
- テキスト・エディターで tools/bin/schedulerconsoleclient ファイルを開いて、以下のプロパティーを追加します。これらは、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーに応じて異なります。
  - WebSphere の場合、以下のプロパティーをファイルに追加します。

    -Djavax.net.ssl.keyStoreType=JKS

    -Djavax.net.ssl.keyStore="鍵ストア *JKS* ファイルへのパス"

    -Djavax.net.ssl.keyStorePassword="鍵ストア・パスワード"

    -Djavax.net.ssl.trustStore="トラストストア *JKS* ファイルへのパス"

    -Djavax.net.ssl.trustStorePassword="トラストストア・パスワード"

    -DisUseIBMSSLSocketFactory=false
  - WebLogic の場合、以下のプロパティーをファイルに追加します。

    -Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"

    -Djavax.net.ssl.trustStore="トラストストア *JKS* ファイルへのパス"

    -Djavax.net.ssl.trustStorePassword="トラストストア・パスワード"

証明書が一致しない場合、Marketing Platform ログ・ファイルに以下のようなエラーが入ります。

原因: sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException: 要求されているターゲットへの有効な証明書パスが見つかりません (Caused by: sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException: unable to find valid certification path to requested target)

前提条件

Marketing Platform がインストール、配置、および実行されている必要があります。

構文

scheduler_console_client -v -t *trigger_name user_name*

scheduler_console_client -s -t *trigger_name user_name*

コマンド

-v

指定されたトリガーを listen するように構成されているスケジューラー・ジョブをリストします。

-t オプションとともに使用する必要があります。

-s

指定されたトリガーを送信します。

-t オプションとともに使用する必要があります。

オプション

-t *trigger_name*

スケジューラーで構成されるトリガーの名前。

例

- トリガー trigger1 を listen するように構成されているジョブをリストします。

  ```
  scheduler_console_client -v -t trigger1 myLogin
  ```

- トリガー trigger1 を listen するように構成されているジョブを実行します。

  ```
  scheduler_console_client -s -t trigger1 myLogin
  ```

関連概念:

78 ページの『外部スクリプトから送信されるトリガーのスケジュール』

Marketing Platform SQL スクリプト

このセクションでは、Marketing Platform システム・テーブルに関係する各種タスクを実行するための Marketing Platform で提供されている SQL スクリプトについて説明します。

Marketing Platform SQL スクリプトは、Marketing Platform インストールの下の db ディレクトリーにあります。

それらのスクリプトは、データベース・クライアントを使用して Marketing Platform システム・テーブルに対して実行されるように設計されています。

ManagerSchema_DeleteAll.sql

Manager_Schema_DeleteAll.sql スクリプトは、テーブルそのものは削除せずに Marketing Platform システム・テーブルからすべてのデータを削除します。このスクリプトは、すべてのユーザー、グループ、セキュリティー資格情報、データ・フィルター、および構成設定を Marketing Platform から削除します。

ManagerSchema_DeleteAll.sql を使用する場合

破損データによって Marketing Platform のインスタンスが使用できない場合に、ManagerSchema_DeleteAll.sql を使用することもできます。

追加要件

ManagerSchema_DeleteAll.sql の実行後に Marketing Platform を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

- populateDB ユーティリティーを実行します。 populateDB ユーティリティーは、デフォルトの構成プロパティー、ユーザー、役割、およびグループを復元しますが、初期インストール後に作成またはインポートしたユーザー、役割、およびグループは復元しません。
- config_navigation.xml ファイルとともに configTool ユーティリティーを使用してメニュー項目をインポートします。
- いずれかのインストール後構成 (データ・フィルターの作成や LDAP サーバーまたは Web アクセス制御プラットフォームとの統合など) を実行している場合、これらの構成を再実行する必要があります。
- 既存のデータ・フィルターを復元する場合、最初に作成された XML を使用してデータ・フィルターを指定し、datafilteringScriptTool ユーティリティーを実行します。

関連資料:

278 ページの『populateDb』

268 ページの『configTool』

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトは、データ・フィルター・テーブルそのものは削除せずに Marketing Platform システム・テーブルからすべての

データ・フィルター・データを削除します。このスクリプトは、すべてのデータ・フィルター、データ・フィルター構成、オーディエンス、およびデータ・フィルターの割り当てを Marketing Platform から削除します。

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql を使用する場合

Marketing Platform システム・テーブルから他のデータは削除せずにすべてのデータ・フィルターを削除する場合に、`ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql` を使用することもできます。

重要: 「デフォルトのテーブル名」および「デフォルトのオーディエンス名」 という 2 つのデータ・フィルター・プロパティーの値は `ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql` スクリプトによって再設定されません。使用するデータ・フィルターでこれらの値が無効になった場合、「構成」ページでこれらの値を手動で設定する必要があります。

関連タスク:

222 ページの『データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加』

ManagerSchema_DropAll.sql

`ManagerSchema_DropAll.sql` スクリプトは、すべての Marketing Platform システム・テーブルをデータベースから削除します。このスクリプトは、すべてのテーブル、ユーザー、グループ、セキュリティー資格情報、および構成設定を Marketing Platform から削除します。

注: 以前のバージョンの Marketing Platform システム・テーブルが含まれているデータベースに対してこのスクリプトを実行する場合、制約が存在しないことを示すエラー・メッセージをデータベース・クライアントで受け取る可能性があります。これらのメッセージは無視してかまいません。

ManagerSchema_DropAll.sql を使用する場合

引き続き使用するテーブルが他に含まれているデータベースにシステム・テーブルがある Marketing Platform のインスタンスをアンインストールした場合に、`ManagerSchema_DropAll.sql` を使用することができます。

追加要件

このスクリプトの実行後に Marketing Platform を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

- 適切な SQL スクリプトを実行し、システム・テーブルを再作成します。
- `populateDB` ユーティリティーを実行します。 `populateDB` ユーティリティーを実行すると、デフォルトの構成プロパティー、ユーザー、役割、およびグループが復元されますが、初期インストール後に作成またはインポートしたユーザー、役割、およびグループは復元されません。
- `config_navigation.xml` ファイルとともに `configTool` ユーティリティーを使用してメニュー項目をインポートします。

- いずれかのインストール後構成 (データ・フィルターの作成や LDAP サーバーまたは Web アクセス制御プラットフォームとの統合など) を実行している場合、これらの構成を再実行する必要があります。

関連資料:

『システム・テーブルを作成する SQL スクリプト』

278 ページの『populateDb』

268 ページの『configTool』

システム・テーブルを作成する SQL スクリプト

会社の方針でインストーラーを使用して Marketing Platform システム・テーブルを自動で作成することが許可されていない場合、以下の表で説明されているスクリプトを使用して手動で作成します。

スクリプトは、示されている順序で実行する必要があります。

表 *76.* システム・テーブルを作成するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	• `ManagerSchema_DB2.sql` マルチバイト文字 (例えば、中国語、日本語、または韓国語) をサポートする予定の場合、`ManagerSchema_DB2_unicode.sql` スクリプトを使用します。 • `ManagerSchema__DB2_CeateFKConstraints.sql` • `active_portlets.sql`
Microsoft SQL Server	• `ManagerSchema_SqlServer.sql` • `ManagerSchema__SqlServer_CeateFKConstraints.sql` • `active_portlets.sql`
Oracle	• `ManagerSchema_Oracle.sql` • `ManagerSchema__Oracle_CeateFKConstraints.sql` • `active_portlets.sql`

スケジューラー機能 (事前に定義された間隔でフローチャートを実行するように構成することができる) を使用する予定の場合、この機能をサポートするテーブルを作成する必要もあります。スケジューラー・テーブルを作成するには、以下の表の説明に従って、該当するスクリプトを実行します。

表 *77. IBM Marketing Software* スケジューラーを使用可能化するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	`quartz_db2.sql`
Microsoft SQL Server	`quartz_sqlServer.sql`
Oracle	`quartz_oracle.sql`

システム・テーブル作成スクリプトを使用する場合

インストーラーによるシステム・テーブルの自動作成を可能にしていない場合、または `ManagerSchema_DropAll.sql` を使用してすべての Marketing Platform システム・テーブルをデータベースから削除した場合、Marketing Platform をインストールまたはアップグレードするときに、これらのスクリプトを使用する必要があります。

関連資料:

285 ページの『ManagerSchema_DropAll.sql』

第 21 章 「構成」ページでのプロパティーの構成

このセクションでは、「設定」&「構成」ページにある構成プロパティーについて説明します。

関連概念:

41 ページの『第 4 章 構成管理』

IBM Marketing Platform 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Marketing Platform 構成プロパティーについて取り上げます。

IBM Marketing Platform

このカテゴリーのプロパティーを使用すると、デフォルト・ロケールを設定したり、Marketing Platform のインストール済み環境をクラスター化するかどうか、Marketing Operations を Campaign と統合するかどうか、統合時にオファー統合を有効にするかどうかを示すフラグを設定したりできます。

地域

説明

IBM Marketing Software ユーザーのロケール設定を指定します。「構成」ページでこのプロパティーを設定すると、その適用する設定が IBM Marketing Software のすべてのユーザーのデフォルトの設定となります。ただし、Marketing Platform の「ユーザー」ページで個別にロケール設定を指定するユーザーは例外です。個別のユーザーにこのプロパティーを設定する場合には、そのユーザーに適用する設定がデフォルト設定よりも優先されます。

この設定は、IBM Marketing Software アプリケーションの言語、時間、数値、日付の表示に影響を及ぼします。

ロケールの使用可能性は IBM Marketing Software アプリケーションによって異なる場合があり、すべての IBM アプリケーションが Marketing Platform のロケール設定をサポートしているわけではありません。 **「地域設定」**プロパティーが使用可能でサポートされているかどうかについては、固有の製品資料を参照してください。

デフォルト値

英語（米国）

ヘルプ・サーバー

説明

IBM ホスト・オンライン・ヘルプがインストールされているサーバーの URL です。IBM Marketing Software ユーザーがインターネットにアクセ

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

スできる場合、デフォルト値を変更しないでください。デフォルト値は、IBM が保守/更新しているオンライン・ヘルプ・サーバーを指しています。

デフォルト値

ホステッド・ヘルプ・サーバーの URL。

有効な値

IBM ホスト・ヘルプがインストールされているサーバー。

IBM Marketing Operations - Campaign 統合

説明

Marketing Operations と Campaign を一緒にインストールして統合するかどうかを示すフラグです。この統合の構成について詳しくは、「*IBM Marketing Operations and Campaign* 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

IBM Marketing Operations - オファー統合

説明

Marketing Operations と Campaign を統合するシステムの場合、このフラグは、オファー統合も有効かどうかを示します。オファー統合を使用すると、Marketing Operations を使用して、オファー・ライフサイクル管理タスクを実行できるようになります。この統合の構成について詳しくは、「*IBM Marketing Operations and Campaign* 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

開始ページ

説明

ユーザーが IBM Marketing Software にログインする際に表示されるページの URL です。デフォルトは、デフォルトのダッシュボードです。

デフォルト値

デフォルトのダッシュボード。

有効な値

任意の IBM Marketing Software URL。フォーム送信ページ、編集ページ、検索結果ページは除きます。

ドメイン・ネーム

説明

IBM Marketing Software がインストールされているドメインの名前です。この値は、インストール時に設定されます。ドメイン・ネームを変更した場合以外、これは変更しないでください。

ユーザーが Chrome ブラウザーを使用して IBM Marketing Software 製品にアクセスする場合は、完全修飾ドメイン・ネーム (FQDN) を使用します。FQDN を使用しない場合は、Chrome ブラウザーで製品 URL にアクセスできません。

デフォルト値
定義されていません

ページのタグ付けを無効にする

説明

デフォルト値の `False` に設定すると、IBM は Marketing Platform のインストール時に入力したサイト ID コードを使用して、製品全体の使用傾向を追跡する基本的な統計を収集します。こうした統計は、IBM 製品の開発や向上に使用されます。 IBM は、HTTP を介して情報を `http://pt200201.unica.com` に送ります。

そのような情報を収集しない場合は、このプロパティーを `True` に設定します。

デフォルト値
`False`

有効な値

`True | False`

この配置をクラスター化する

説明

クラスター化されたデプロイメントに Marketing Platform をインストールする場合、このプロパティーを `True` に設定します。それ以外の場合、デフォルト値の `False` のままにします。

Marketing Platform の実行中にこのプロパティーを変更する場合、Marketing Platform を再始動して変更を適用する必要があります。

デフォルト値
`False`

有効な値

`True | False`

すべてのアプリケーションの静的コンテンツにセキュリティーを適用する (Apply security on static content for all applications)

説明

この値を `Yes` に設定すると、認証されたユーザーが画像などの静的コンテンツに直接アクセスしようとした場合に、ユーザーの真正性を確認するための検査が実行されます。ユーザーが認証された場合は、コンテンツがレンダ

リングされます。ユーザーが認証されなかった場合、ユーザーはログイン・ページに送られます。この設定は、すべての IBM Marketing Software 製品にわたって適用されます。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

IBM Marketing Software | 一般 | ナビゲーション

このカテゴリー内のプロパティーは、IBM Marketing Software 製品間をナビゲートするのに内部的に使用する値を指定します。

セキュア接続の TCP ポート

説明

Marketing Platform が配置される Web アプリケーション・サーバーの SSL ポートを指定します。このプロパティーは、IBM Marketing Software 製品間での通信に内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

標準接続の TCP ポート

説明

Marketing Platform が配置される Web アプリケーション・サーバーの HTTP ポートを指定します。このプロパティーは、IBM Marketing Software 製品間での通信に内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

IBM Marketing Platform URL

説明

Marketing Platform で使用する URL を指定します。インストール時に設定され、通常は変更すべきではありません。この URL には、以下の例に示されているようにドメイン・ネームを含めます。

```
protocol://machine_name_or_IP_address.domain_name:port_number/
context-root
```

マシン名は `localhost` にしないでください。

ユーザーが Chrome ブラウザーを使用して IBM Marketing Software 製品にアクセスする場合は、URL に完全修飾ドメイン・ネーム (FQDN) を使用します。 FQDN を使用しない場合は、Chrome ブラウザーで製品 URL にアクセスできません。

重要**:** IBM Marketing Software 製品が分散環境にインストールされている場合、スイートに属するすべてのアプリケーションのナビゲーション URL

では IP アドレスではなく、マシン名を使用する必要があります。また、クラスター環境において、配置にデフォルトのポート 80 または 443 とは異なるポートを使用する場合は、このプロパティーの値にポート番号を使用しないでください。

デフォルト値

定義されていません

例

SSL が構成されている環境では、URL は次のようになります。

https://machineName.companyDomain.com:8080/unica

関連タスク:

177 ページの『IBM Marketing Software の Web アクセス制御接続プロパティーの設定』

IBM Marketing Software | 一般 | データ・フィルタリング

このカテゴリーのプロパティーは、データのフィルター操作の実装時に使用する値を指定します。

デフォルトのテーブル名

説明

データ・フィルターを使用可能にするためには、この構成プロパティーが必要です。

このプロパティーの値は、データ・フィルターを作成するための XML 内の addTables | AddDataTable | dataTable | name 要素に使用される名前と完全に一致するように設定します。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

最大 50 文字の varchar 型の文字。

デフォルトのオーディエンス名

説明

データ・フィルターを使用可能にするためには、この構成プロパティーが必要です。

このプロパティーの値は、データ・フィルターを作成するための XML 内の AddAudience | audience | name 要素に使用される名前と完全に一致するように設定します。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

最大 50 文字の varchar 型の文字。

データ・フィルター・キャッシュの有効化

説明

このプロパティーはオプションであり、データ・フィルターのパフォーマンスを上げる場合に設定できます。

このプロパティーは、Marketing Platform がデータ・フィルター定義をデータベースまたはキャッシュから取り出すかどうかを指定します。この値が **true** である場合、データ・フィルター定義はキャッシュに保管され、データ・フィルター定義に変更が加えられるたびにキャッシュが更新されます。

このプロパティー値の変更を有効にするためには、変更後に Marketing Platform Web アプリケーションを再始動する必要があります。

デフォルト値

`False`

関連概念:

222 ページの『データ・フィルターのパフォーマンスを向上させるためのオプションの構成プロパティー』

関連タスク:

221 ページの『必須のデータ・フィルター構成プロパティーの設定』

IBM Marketing Software | 一般 | パスワード設定

「一般 | パスワード設定」カテゴリーのプロパティーは、IBM Marketing Software パスワードに適用されるポリシーを指定します。これらのパスワード・オプションのほとんどは、(Marketing Platform 内で作成された) 内部ユーザーのパスワードにのみ適用され、外部システムからインポートされた外部ユーザーには適用されません。

例外は、**許可されるログイン再試行の最大回数**」プロパティーで、これは内部ユーザーと外部ユーザーの両方に適用されます。またこのプロパティーは、外部システムの同様の制約事項を無効にするわけではありません。

許可されるログイン再試行の最大回数

説明

ユーザーの 1 回のログインにつき、無効なパスワードの入力が許される最大回数を指定します。最大回数になると、ユーザーは IBM Marketing Software システムを利用できなくなり、そのユーザーとしてだれもログインできなくなります。

ゼロ以下に設定した場合、システムは連続した失敗を何回でも許可します。

デフォルト値

`3`

有効な値

任意の整数

パスワード履歴の数

説明

あるユーザーについて、システムが保存する古いパスワードの数を指定します。そのユーザーは、この古いパスワードのリスト内にあるパスワードの再利用を許可されません。値をゼロ以下に設定した場合、履歴は保存されず、ユーザーは同じパスワードを繰り返し再利用できます。このパスワード履歴数には、ユーザー・アカウントの作成時に初期値として割り当てられたパスワードは含まれません。

デフォルト値

`0`

有効な値

任意の整数

有効期間 (日数)

説明

ユーザーのパスワードが失効するまでの日数を指定します。

値がゼロ以下の場合、パスワードの有効期限はありません。

値がゼロより大きい場合、ユーザーは最初にログインしたときにパスワードの変更を求められ、その最初のログインの日付から有効期限がカウントされます。

ユーザーとパスワードが作成された後に、この値を変更すると、既存のユーザーに対する新しい有効期限は、既存のユーザが次回にパスワードを変更したときに有効になります。

デフォルト値

`30`

有効な値

任意の整数

空白のパスワードを許可

説明

空白のパスワードを許可するかどうかを指定します。これを true に設定した場合は、**最小文字長** `=0` も設定してください。

デフォルト値

`true`

有効な値

`true | false`

ユーザー名と同じパスワードを許可

説明

ユーザーのパスワードをユーザーのログイン名と同じものにすることを許可するかどうかを指定します。

デフォルト値

`false`

有効な値

`true | false`

最小限必要な数字の数

説明

パスワード内に必要な数字の最小数を指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はありません。

デフォルト値

`0`

有効な値

任意の整数

最小限必要な英字の数

説明

パスワード内に必要な英字の最小数を指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はありません。

デフォルト値

`0`

有効な値

任意の整数

最小限必要なパスワードの長さ

説明

パスワードの最小の長さを指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はありません。値を `0` より大きく設定した場合は、**空白のパスワードを許可の** `false` も設定してください。

デフォルト値

`4`

有効な値

任意の整数

IBM Marketing Software | 一般 | その他

このカテゴリーのプロパティーは、内部で使用される値、およびロケール用に設定することが必要な場合がある値を指定します。

トークンの存続期間

説明

Marketing Platform が生成するトークンが有効な期間を秒単位で指定します。これは、スイートのサインオン実装の一部です。この値は変更しないでください。

デフォルト値

15

有効な値

任意の正の整数

デフォルトの言語

説明

Marketing Platform のデフォルトの言語を指定します。Campaign をインストールする場合、この値は、 Campaign の defaultLocale プロパティーで Campaign に対して設定したロケールに一致するように設定する必要があります。

デフォルト値

英語

有効な値

サポートされるロケール

IBM Marketing Software | 一般 | 通信 | E メール

このカテゴリーのプロパティーは、システム・アラートおよび通知のための E メールがユーザーに送信されるように、Marketing Platform を構成するために使用します。

E メール通信を有効にする

説明

True に設定すると、Marketing Platform はシステム・アラートおよび通知のための E メールをユーザーに送信することを試みます。この機能を有効にするには、このカテゴリーの他のプロパティーも設定する必要があります。

デフォルト値

False

E メール・サーバー・プロトコル

説明

ユーザーにシステム・アラートおよび通知を送信するメール・サーバーのプロトコルを指定します。これは E メール通知で必須です。

デフォルト値

smtp

E メール・サーバー・ホスト

説明

ユーザーにシステム・アラートおよび通知を送信するメール・サーバーの名前を指定します。これは E メール通知で必須です。

デフォルト値

localhost

E メール・サーバー・ポート

説明

ユーザーにシステム・アラートおよび通知を送信するメール・サーバーのポートを指定します。これは E メール通知で必須です。

デフォルト値

25

E メールの「差出人」アドレス

説明

システム・アラートおよび通知の E メールの送信元になるアカウントを指定します。メール・サーバーで認証が必要とされる場合は、メール・サーバーのアカウント名とパスワードをデータ・ソースとして Marketing Platform ユーザー・アカウントに保存するために使用したアカウントの E メール・アドレスを使用します。これは E メール通知で必須です。

デフォルト値

定義されていません

メール・サーバーに認証が必要

説明

メール・サーバーが認証を必要とするかどうかを指定します。

デフォルト値

False

E メール・アカウントの IBM Marketing Software ユーザー

説明

E メールの資格情報がデータ・ソースとして保管される Marketing Platform アカウントのユーザー名を指定します。

メール・サーバーで認証が必要である場合のみ通知で必要になります。

デフォルト値

asm_admin

E メール・アカウントのデータ・ソース

説明

E メールの資格情報が保管される Marketing Platform アカウントのデータ・ソースの名前を指定します。

メール・サーバーで認証が必要である場合のみ通知で必要になります。

デフォルト値

emailDS

関連タスク:

182 ページの『IBM Marketing Software での電子メールによる通知の構成』

IBM Marketing Platform | スケジューラー

このカテゴリー内のプロパティーは、IBM Marketing Software スケジューラーのパフォーマンスを有効にし、チューニングできるようにします。

クライアント・ポーリング間隔 (ミリ秒)

構成カテゴリー

Platform|スケジューラー

説明

IBM Campaign は、ミリ秒単位で指定されたこの値が示す周期的間隔で、ジョブについて IBM Marketing Software スケジューラーをポーリングします。デフォルト値は 60 秒です。このプロパティーを 10000 (10 秒) 未満の値に設定しないでください。キャンペーンのパフォーマンスが低下する可能性があるためです。

デフォルト値

60000

クライアント初期化遅延 (ミリ秒)

説明

IBM Campaign が最初に始動した際に、Campaign スケジューラー・スレッドがジョブに関して IBM Marketing Software スケジューラーをポーリングするまでに待機するミリ秒単位の期間です。この値は、少なくとも、ご使用のシステム上で IBM Campaign が始動するための十分な時間を確保できる長さに設定してください。デフォルト値は 5 分です。

デフォルト値

300000

有効な値

任意の整数

不明状況の最大ポーリング数

説明

そのステータスを判別できない、スケジュールされた実行のステータスをスケジューラーがチェックする回数を指定します。この制限に達すると、実行ステータスが「設定」>「スケジュール管理 **(Schedule management)**」ページに「不明」としてリストされます。

デフォルト値

5

有効な値

任意の整数

スケジューラーの有効

説明

スケジューラーを有効にするかどうかを指定します。ユーザーがスケジューラーを使用できないようにする場合、このプロパティーを False に設定します。 False に設定することで、スケジューラーを使用するすべての製品のスケジューラーがオフになります。

スケジューラーを有効または無効にする場合は、Marketing Platform Web アプリケーションを再始動する必要があります。

デフォルト値

`True`

有効な値

`True | False`

IBM Marketing Platform | スケジューラー | 反復定義

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Marketing Software スケジューラーの反復パターンを設定します。反復パターンは、スケジュールを作成する際に反復パターンを設定する場合に使用するダイアログ・ボックスに表示されます。反復テンプレートを使用すると、有効な任意の Cron 式により独自の反復パターンを作成できます。

毎時

説明

ジョブは 1 時間ごとにトリガーされます。

デフォルト値

`0 0 0/1 * * ?`

毎日

説明

ジョブは、24 時間ごとにトリガーされます。

デフォルト値

`0 0 0 * * ?`

毎週 [曜日] 深夜 0 時

説明

ジョブは、指定された曜日の午前 0 時にトリガーされます。

デフォルト値

- 月 - `0 0 0 ? * MON`
- 火 - `0 0 0 ? * TUE`

- 水 - 0 0 0 ? * WED
- 木 - 0 0 0 ? * THU
- 金 - 0 0 0 ? * FRI
- 土 - 0 0 0 ? * SAT
- 日 - 0 0 0 ? * SUN

毎月の [初日|最終日] の深夜 0 時

説明

ジョブは、毎月の指定された日 (初日または最終日) の午前 0 時にトリガーされます。

デフォルト値

- 毎月の初日 - 0 0 0 1 * ?
- 毎月の最終日 - 0 0 0 L * ?

毎四半期の [初日|最終日] の深夜 0 時

説明

ジョブは、カレンダーの四半期における指定された日 (初日または最終日) の午前 0 時にトリガーされます。

デフォルト値

- 毎四半期の初日 - 0 0 0 1 * JAN,APR,JUL,OCT
- 毎四半期の最終日 - 0 0 0 L * MAR,JUN,SEP,DEC

毎年の [初日|最終日] の深夜 0 時

説明

ジョブは、毎年の指定された日 (初日または最終日) の午前 0 時にトリガーされます。

デフォルト値

- 毎年の初日 - 0 0 0 1 ? JAN *
- 毎年の最終日 - 0 0 0 L ? DEC *

毎年 [月] の深夜 0 時

説明

ジョブは、指定された月の初日の午前 0 時にトリガーされます。

デフォルト値

- 毎年 1 月 - 0 0 0 1 ? JAN *
- 毎年 2 月 - 0 0 0 1 ? FEB *
- 毎年 3 月 - 0 0 0 1 ? MAR *
- 毎年 4 月 - 0 0 0 1 ? APR *
- 毎年 5 月 - 0 0 0 1 ? MAY *
- 毎年 6 月 - 0 0 0 1 ? JUN *
- 毎年 7 月 - 0 0 0 1 ? JUL *

- 毎年 8 月 - 0 0 0 1 ? AUG *
- 毎年 9 月 - 0 0 0 1 ? SEP *
- 毎年 10 月 - 0 0 0 1 ? OCT *
- 毎年 11 月 - 0 0 0 1 ? NOV *
- 毎年 12 月 - 0 0 0 1 ? DEC *

IBM Marketing Platform | スケジューラー | スケジュール登録 | [製品] | [オブジェクト・タイプ]

IBM Marketing Software スケジューラーでスケジュール可能なオブジェクト・タイプごとに、異なるカテゴリーが存在します。これらのカテゴリーのプロパティーを、通常は変更すべきではありません。

Executor クラス名

説明

フローチャートまたはメール配信の実行をトリガーするために IBM Marketing Software スケジューラーが使用するクラスです。

デフォルト値

ステータス・ポーリング間隔

構成カテゴリー

Platform|スケジューラー|スケジュール登録|[製品]|[オブジェクト・タイプ]

IBM Campaign フローチャートの場合、このプロパティーのパスは、Platform|スケジューラー|スケジュール登録|キャンペーン|フローチャートです。

説明

IBM Marketing Software スケジューラーは、定期的な間隔で製品をポーリングし、状況が報告されていないスケジュール・オブジェクト (フローチャートやメール配信など) の実行状況を入手します。間隔はミリ秒単位で指定します。デフォルト値は 10 分です。ポーリング間隔が頻繁になる (値を小さくする) ほど、システムのパフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性があります。ポーリング間隔の頻度が少なくなる (値を大きくする) ほど、システムへのロードが減少します。 IBM Campaign の場合、完了までに 10 分を超える時間を必要とする Campaign フローチャートが大量にある場合には、ポーリング間隔の頻度を少なく設定してください。

デフォルト値

600000

ジョブ通知を受信するグループ名

説明

各オブジェクト・タイプのすべてのスケジュールに関する通知を、ここで指定するグループのすべてのメンバーに送信できます。

IBM Marketing Platform | スケジューラー | スケジュール登録 | [製品] | [オブジェクト・タイプ] | [制限グループ]

IBM Marketing Software スケジューラーでスケジュール可能なオブジェクト・タイプごとに、デフォルトの制限グループが存在します。これらのデフォルトのグループは、「ユーザー・グループ」ページに表示されません。「制限グループ」テンプレートを使用して、追加グループを作成できます。

制限しきい値

説明

同時に実行できる、このグループに関連付けられているスケジュールの最大数。ここで指定するグループは、スケジュールの作成および編集に使用できるように、スケジューラー・ユーザー・インターフェースの「スケジューラー・グループ」ドロップダウン・リストに表示されます。デフォルトの制限グループは、事実上無制限の `999` に設定されます。すべてのスケジュールが 1 つの制限グループに属している必要があるので、この値は変更せずに残し、制限したくないスケジュールをこのグループに割り当てることができるようにしてください。

デフォルト値

有効な値

任意の正の整数。

IBM Marketing Platform | セキュリティー

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Marketing Software 製品のログイン・モードを指定します。

ログイン方法

説明

一緒にインストールおよび構成されているすべての IBM Marketing Software 製品の認証モードを、次のように指定します。

- 値を`IBM Marketing Platform` に設定した場合、IBM Marketing Software 製品は認証と許可に Marketing Platform を使用します。
- 値を `LDAP` に設定すると、IBM Marketing Software 製品では認証に LDAP サーバーが使用されます。
- 値を `Web アクセス制御` に設定すると、IBM Marketing Software 製品では認証に Web アクセス制御ソフトウェアが使用されます。
- 値を `SAML 2.0` に設定した場合、IBM Marketing Software 製品は認証に IdP サーバーを使用します。

この設定を変更した場合は、変更を有効にするために Marketing Platform Web アプリケーションを停止してから再始動してください。

デフォルト値

`IBM Marketing Platform`

有効な値

IBM Marketing Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP

このカテゴリーのプロパティーは、LDAP 統合の構成に使用されます。

LDAP サーバー・ホスト名

説明

LDAP サーバーの名前または IP アドレスを指定します。この値は、LDAP サーバーのマシン名または IP アドレスに指定してください。例: `machineName.companyDomain.com`

Windows Active Directory と統合する場合、DNS 名ではなくサーバー名を使用します。

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP サーバー・ポート

説明

LDAP サーバーが listen するポートを指定します。適切なポート番号にこの値を設定してください。通常、ポート番号は `389` になります (SSL を使用する場合には `636`)。

デフォルト値

`389`

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ユーザー検索フィルター

説明

ユーザーを検索するために使用するフィルタを指定します。任意の有効な LDAP 検索フィルター (RFC 2254 を参照) が有効な値です。この値の XML 文字に関しては XML エスケープ処理を行う必要があります。

通常、ユーザー・ログイン属性の値は LDAP サーバーでは `uid` で、Windows Active Directory サーバーの場合には `sAMAccountName` です。LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーにおけるこの値を確認する必要があります。LDAP サーバーが Windows Active Directory の場合には、このプロパティーのデフォルト値を `uid` ではなく `sAMAccountName` に変更しなければなりません。以下に例を示します。

(&(|(objectClass=user)(objectClass=person))(sAMAccountName={0}))

デフォルト値

(&(|(objectClass=user)(objectClass=person))(uid={0}))

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

IBM Marketing Platformに格納された資格情報を使用

説明

(ログイン時の) ユーザー認証中に LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーを検索する際、Marketing Platform が Marketing Platform データベースの資格情報を使用するかどうかを指定します。

この値が true の場合、Marketing Platform は Marketing Platform データベースからの資格情報を使用するため、このカテゴリーの LDAP 資格情報のIBM Marketing Platform ユーザーおよび LDAP 資格情報のデータソース・プロパティーに適切な値を設定する必要があります。

LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーで匿名アクセスが許可されない場合には、この値を true に設定してください。

この値が false の場合、Marketing Platform は LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーを匿名で介して接続します。LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーで匿名アクセスが許可される場合には、この値を false に設定できます。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー

説明

LDAP 管理者ログイン資格情報が付与された IBM Marketing Software ユーザーの名前を指定します。このカテゴリーの IBM Marketing Platformに格納された資格情報を使用プロパティーを true に設定した場合には、この値を設定します。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM Marketing Software ユーザーに作成したユーザー名に、このプロパティーの値を設定してください。このプロパティーは、このカテゴリーの LDAP 資格情報のデータ・ソース プロパティーと連動しています。

デフォルト値

asm_admin

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 資格情報のデータ・ソース

説明

LDAP 管理者資格情報の Marketing Platform データ・ソースを指定します。このカテゴリーの IBM Marketing Platformに格納された資格情報を使用プロパティーを true に設定した場合には、この値を設定します。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM Marketing Software ユーザーに作成したデータ・ソース名に、このプロパティーの値を設定してください。このプロパティーは、このカテゴリーの LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザープロパティーと連動して機能します。

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ベース DN

説明

LDAP ディレクトリー構造のルートを示す基本識別名 (DN) を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

任意の有効な DN (RFC 1779、RFC 2253 を参照)

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 接続に SSL が必要

パス

IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP

説明

Marketing Platform が LDAP サーバーに接続してユーザーを認証する際に SSL を使用するかどうかを指定します。値を `true` に設定すると、接続は SSL を使用して保護されます。

デフォルト値

`false`

有効な値

`true | false`

関連タスク:

149 ページの『IBM Marketing Software での LDAP ログイン方法の接続プロパティーの設定』

IBM Marketing Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | Web アクセス制御

このカテゴリーのプロパティーは、Web アクセス制御ソフトウェアとの統合の構成に使用されます。

ユーザ名パターン

説明

Web アクセス制御ソフトウェアの HTTP ヘッダー変数からユーザー・ログインを抽出するために使用する Java 正規表現です。この正規表現の XML 文字に関しては XML エスケープ処理を行う必要があります。SiteMinder および IBM Security Access Manager の推奨値は `¥w*` です。

オンプレミスでホストされている Campaign とクラウドの Digital Analytics を統合するためにカスタム・プロキシーを使用する場合も、この値を使用する必要があります。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

任意の Java 正規表現。

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Web アクセス制御ソフトウェアと統合するように構成されている場合にのみ使用されます。

Web アクセス制御ヘッダー変数

説明

Web アクセス制御ソフトウェアで構成されている HTTP ヘッダー変数を指定します。これは、Web アプリケーション・サーバーに送信されます。デフォルトでは、SiteMinder は `sm_user` を使用し、IBM Security Access

Manager (SAM) は iv-user を使用します。 SAM の場合、この値を IBM HTTP ストリングではなく、IBM Raw ストリングのユーザー名コンポーネントに設定します。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

任意のストリング

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Web アクセス制御ソフトウェアと統合するように構成されている場合にのみ使用されます。

関連タスク:

153 ページの『NTLMv2 認証を有効にするためのセキュリティー・モードの設定』

177 ページの『IBM Marketing Software の Web アクセス制御接続プロパティーの設定』

IBM Marketing Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | SAML 2.0

このカテゴリーのプロパティーは、SAML 2.0 IdP サーバーによるシングル・サインオンを構成します。

シングル・サインインの IdP サーバー URL (IdP server URL for single sign-in)

説明　ユーザーが IBM Marketing Software へのシングル・サインオン URL を開いたときに表示されるページの URL です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

シングル・サインアウトの IdP サーバー URL (IdP server URL for single sign-out)

説明　オプション。ユーザーがログアウトした場合に、ここで設定したページにユーザーをリダイレクトして、IdP サーバーからもログアウトさせることができます。 IdP サーバーが、この目的のための URL を渡す場合もあります。

デフォルト値

[CHANGE ME]

SSO エラーのエラー・ページ URL (Error page URL for SSO error)

説明　構成または統合に関する問題のためにシングル・サインオン中にエラーが発生した場合に、ユーザーを、ここで指定したページにリダイレクトすること

ができます。この設定は、Marketing Platform に用意されているデフォルトのエラー・ページをオーバーライドします。

デフォルト値

[CHANGE ME]

宛先 URL

説明　IdP サーバーで認証に成功した場合にユーザーをリダイレクトするサービス・プロバイダー (アプリケーション) の URL。この URL は、すべての SAML 要求の <AuthnRequest Destination> タグの下に現れます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

コンシューマー・サービス URL (Consumer service URL)

説明　SAML アサーションでサービス・プロバイダー (アプリケーション) が使用および構文解析する Assertion Consumer Service URL。この URL は、すべての SAML 要求の <AuthnRequest AssertionConsumerServiceURL> タグの下に現れます。この値は、「宛先 **URL**」プロパティーと同じ値にすることができます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

アプリケーション ID (Application ID)

説明　IdP サーバーの Marketing Platform に割り当てられたアプリケーション ID。この ID は、IdP サーバーへのすべての SAML 要求に組み込まれます。この ID は、すべての SAML 要求の <Issuer> タグの下に現れます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

サービス・プロバイダーの名前修飾子 (Service provider name qualifier)

説明　サービス・プロバイダーの名前修飾子。この名前修飾子は、すべての SAML 要求の <NameIDPolicy SPNameQualifier> タグの下に現れます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

メタデータ・パス (Metadata path)

説明　Marketing Platform サーバー上のメタデータ・ファイルの場所。

デフォルト値

[CHANGE ME]

エンティティー ID (Entity ID)

説明　IdP サーバーのエンティティー ID。このプロパティーには、IdP サーバーによって生成されたメタデータ・ファイルの最初の XML 宣言に含まれている *entityID* の値を設定してください。

Marketing Platform は、アサーション検証時に、この ID を使用して IdP 構成とデジタル証明書をロードします。

デフォルト値

[CHANGE ME]

応答構文解析の属性 NVP (Attributes NVP for response parsing)

説明

IdP サーバーは、ユーザー・アカウント属性を Marketing Platform に送信します。「認証されたユーザーを **Marketing Platform** に追加する **(Add authenticated users to Marketing Platform)**」プロパティーを有効にした場合は、この構成プロパティーを使用して、Marketing Platform に自動作成されるユーザーの属性を取り込むことができます。

IdP サーバーで使用されている属性名は、Marketing Platform で使用されているものとは異なる場合があります。このプロパティーを使用すると、IdP の属性を Marketing Platform の対応する属性にマップできます。これにより、コードを変更する必要がなくなります。

例えば、Marketing Platform の **Email** という属性に対して、IdP サーバーでは **emailAddress** という名前が使用されている場合があります。この属性をマップするには、このプロパティーの値として **Email=emailAddress** と入力します。

Marketing Platform では、ユーザー属性に以下の値を使用します。

- FirstName
- LastName
- 部門
- Organization
- 国
- E メール
- Address1
- Address2
- Phone1

  職場の電話に使用します。
- Phone2

  携帯電話に使用します。
- Phone3

  自宅の電話に使用します。
- AltLogin
- ExternalUsersGroup

  「認証されたユーザーを **Marketing Platform** に追加する **(Add authenticated users to Marketing Platform)**」プロパティーを有効にすると、IdP サーバーから認証されたユーザーの Marketing Platform アカウントがまだ存在しない場合に、そのユーザーが Marketing Platform に作成されます。それらのユーザーは、デフォルトのユーザー・グルー

プ **ExternalUsersGroup** に自動的に追加されます。ただし、ユーザーを追加するカスタム・グループを指定することもできます。このオプションを実装する場合は、「**ExternalUsersGroup**」属性の値にカスタム・ユーザー・グループの名前を設定します。例えば、MyGroup というグループにユーザーを追加する場合は、この値に `ExternalUserGroup=MyGroup` を設定します。

複数の名前と値のペアは、セミコロンで区切ります。

デフォルト値

`omit-xml-declaration=yes;`

暗号化された IdP レスポンスの処理 (Process encrypted IdP response)

説明　暗号化されたレスポンスを送信するように IdP サーバーが構成されている場合は、このプロパティーを有効にして、IdP サーバーからの SAML レスポンスを Marketing Platform で処理する前に、構成されている共有鍵を使用して暗号化解除する必要があることを示します。

このプロパティーを有効にする場合は、「共有秘密鍵 **(Shared secret key)**」の値に、レスポンスの暗号化解除に使用する秘密鍵を設定する必要もあります。

デフォルト値

無効

共有秘密鍵 (Shared secret key)

説明　「暗号化された **IdP** レスポンスの処理 **(Process encrypted IdP response)**」オプションを有効にする場合は、このプロパティー値に鍵ストア・ファイルのパスを設定します。

デフォルト値

`[CHANGE ME]`

鍵ストア資格情報ホルダー (Key store credential holder)

説明　この値には、データ・ソースに SAML 共有秘密鍵を保持している IBM Marketing Software ユーザー・アカウントのログイン名を設定します。

デフォルト値

`[CHANGE ME]`

鍵ストア資格情報データ・ソース (Key store credential data source)

説明　この値には、暗号化解除のために使用する共有秘密鍵を保持するために作成されたデータ・ソースの名前を設定します。データ・ソースのパスワードは、鍵ストア・ファイルのパスワードです。

デフォルト値

`[CHANGE ME]`

証明書別名 (Certificate alias)

説明　「暗号化された **IdP** レスポンスの処理 **(Process encrypted IdP**

response)」オプションを有効にする場合は、このプロパティー値に、鍵ストア・ファイルに保管されている秘密鍵の証明書別名を設定します。これが、IDP サーバーから送信された、暗号化された SAML レスポンスを暗号化解除するときに使用されます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

認証済みユーザーの**Marketing Platform** への追加 **(Add authenticated users to Marketing Platform)**

説明　このオプションを有効にすると、IdP サーバーから認証されたユーザーの Marketing Platform アカウントがまだ存在しない場合に、そのユーザーが Marketing Platform に作成されます。

新たに作成されたユーザーは、デフォルトのグループ **ExternalUsersGroup** に自動的に追加されます。

ExternalUsersGroup には Marketing Platform **UserRole** しかありません。新たに作成されたユーザーが IBM Marketing Software 製品にアクセスして使用するためには、管理者が追加の権限を付与する必要があります。管理者は、さまざまなアプリケーション・アクセス・レベルのグループにユーザーをメンバーとして追加することで、追加の権限を付与できます。

あるいは、SAML レスポンスにカスタム・ユーザー・グループ名を含めることもできます。そうすると、新たに作成されたユーザーはそのグループに追加されます。

このオプションが無効になっていると、 IdP サーバーから認証されたユーザーのアカウントが Marketing Platform に存在しない場合、そのユーザーは Marketing Platform にアクセスできません。

デフォルト値

無効

SSO にリダイレクト **(Redirect to SSO)**

説明　この値が **True** になっている場合:

- IBM Marketing Software にログインするユーザーは、IdP シングル・サインオン・ページにリダイレクトされます。
- ユーザーがログインすると、通常の Marketing Platform ランディング・ページに移動します。
- 通常の Marketing Platform ログイン画面は使用できなくなります。

関連概念:

119 ページの『第 8 章 SAML 2.0 シングル・サインオン』

関連タスク:

122 ページの『SAML 2.0 構成プロパティーの設定』

IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP 同期

LDAP 同期プロパティーは、システムがディレクトリー・サーバーへのログインやインポート対象のユーザーの識別に使用する詳細情報を指定します。これらのプロパティーの一部で、自動同期プロセスの頻度などの詳細な制御を行うこともできます。

LDAP 同期が有効

説明

LDAP または Active Directory 同期を有効にするには、`true` に設定します。

デフォルト値

`false`

有効な値

`true | false`

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 同期間隔

説明

ここで指定する秒数の周期的間隔で、Marketing Platform が LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーと同期します。値がゼロ以下の場合、 Marketing Platform は同期しません。値が正整数の場合、新しい値は再始動しなくても 10 分以内に有効になります。その後に変更した場合は、構成された間隔内に有効になります。

デフォルト値

`600` (10 分)

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 同期遅延

説明

これは、Marketing Platform の開始後に、LDAP サーバーとの周期的同期が開始される時刻 (24 時形式) です。例えば、`LDAP` **同期遅延** (`LDAP sync delay`) が 23:00 で `LDAP` **同期間隔** (`LDAP sync interval`) が 600 の場合、Marketing Platform が開始されると、周期的同期は午後 11:00 に実行を開始され、その後 10 分 (600 秒) ごとに実行されます。

デフォルト値

`23:00` (午後 11:00)

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 同期タイムアウト

説明

LDAP 同期タイムアウト・プロパティーは、同期の開始後、Marketing Platform がプロセスに終了済みのマークを付けるまでの最大時間を分単位で指定します。Platform で実行できるのは、一度に 1 つの同期プロセスだけです。同期が失敗すると、正常に完了したかどうかに関係なく、終了済みのマークが付けられます。

クラスター環境では、これがとても役立ちます。例えば、Marketing Platform が 1 つのクラスターでデプロイされている場合、そのクラスターにあるサーバーが LDAP 同期を開始して、その後プロセスが終了済みのマークが付けられる前にダウンしてしまう可能性があります。その場合、Marketing Platform はこのプロパティーで指定された期間待機してから、スケジュールされている次の同期を開始します。

デフォルト値

`600` (600 分、つまり 10 時間)

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 同期スコープ

説明

一群のユーザーを取り出すための初期照会のスコープを制御します。ほとんどの LDAP サーバーとの同期の場合、デフォルトの `SUBTREE` のままにしてください。

デフォルト値

`SUBTREE`

有効な値

値は、標準的な LDAP 検索スコープの用語です。

- `OBJECT` - ベース DN でのみ項目を検索し、結果的にその項目だけを返します。
- `ONE_LEVEL` - ベース DN の 1 レベル下にあるすべての項目を検索しますが、ベース DN は含まれません。
- `SUBTREE` - 指定されたベース DN とその下のすべてのレベルにあるすべての項目を検索します。

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP プロバイダー URL

説明

ほとんどの実装の場合、以下のいずれかの書式で LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーの LDAP URL に設定します。

- `ldap://IP_address:port_number`
- `ldap://machineName.domain.com:port_number`

LDAP サーバーの場合、ポート番号は通常 `389` になります (SSL を使用している場合には `636`)。

IBM Marketing Software を Active Directory サーバーと統合する場合、Active Directory 実装環境でサーバー未使用のバインドが使用されているときには、このプロパティーの値を Active Directory サーバーの URL に設定してください。その際、次の形式を使用します。

`ldap:///dc=example,dc=com`

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 接続に SSL が必要

パス

`IBM Marketing Platform` | セキュリティー | `LDAP` 同期

説明

Marketing Platform が LDAP サーバーに接続してユーザーを同期する際に SSL を使用するかどうかを指定します。値を `true` に設定すると、接続は SSL を使用して保護されます。

デフォルト値

`false`

有効な値

`true` | `false`

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 構成 IBM Marketing Platform グループの区切り文字

説明

IBM Marketing Platform グループ・マップへの LDAP 参照カテゴリーでは、1 つの LDAP または Active Directory グループを複数の Marketing Platform グループにマップする場合は、ここで指定した区切り文字を使用します。名前の分離に使用されていない任意の単一文字にできます。

デフォルト値

; (セミコロン)

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 参照構成の区切り記号 (LDAP reference config delimiter)

説明

LDAP または Active Directory 参照を構成する SEARCHBASE コンポーネントと FILTER コンポーネントを分離する区切り文字を指定します (IBM Marketing Platform ユーザー作成の LDAP 参照カテゴリーに記述されている方法で構成)。

FILTER はオプションで、省略すると、LDAP ユーザー参照属性名 プロパティーの値に基づいて Marketing Platform サーバーによって動的にフィルターが作成されます。

デフォルト値

; (セミコロン)

有効な値

区切られる名前の中に出現しない任意の 1 文字。

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー

説明

LDAP 管理者ログイン資格情報が付与された IBM Marketing Software ユーザーの名前を指定します。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM Marketing Software ユーザーに作成したユーザー名に、このプロパティーの値を設定してください。このプロパティーは、このカテゴリーの LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials) プロパティーと連動しています。

デフォルト値

asm_admin

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 資格情報のデータ・ソース

説明

LDAP 管理者資格情報の Marketing Platform データ・ソースを指定します。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM Marketing Software ユーザーに作成したデータ・ソース名に、このプロパティーの値を設定してください。このプロパティーは、このカテゴリーの「`LDAP` **資格情報の** `IBM Marketing Platform` **ユーザー**」プロパティーと連動して機能します。

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP ユーザー参照属性名 (LDAP user reference attribute name)

説明

ユーザーのグループ・ベースのインポートの場合、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーがグループ・オブジェクトのユーザー属性に使用する名前に設定します。通常、この値は LDAP サーバーでは `uniquemember` となり、Windows Active Directory サーバーの場合には `member` になります。

ユーザーの属性ベースのインポートの場合、このプロパティーを `DN` に設定し、「**LDAP** 参照マップ」プロパティーを構成するときには、値の FILTER 部分を、LDAP サーバーで使用される検索対象の属性のストリングに設定してください。

デフォルト値

`member`

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP BaseDN 定期検索が有効

説明

このプロパティーを `True` に設定した場合、Marketing Platform によって、「**IBM Marketing Platform** | セキュリティー | **LDAP**」カテゴリーの `Base DN` プロパティーで設定されている識別名を使用して、LDAP 同期

検索が実行されます。このプロパティーを `False` に設定した場合、「**IBM Marketing Platform** グループ・マップの **LDAP** 参照」の LDAP グループにマップされているグループを使用して、Marketing Platform によって LDAP 同期検索が実行されます。

以下の表では、このプロパティーの設定値に応じて、定期的な同期で変更が選出されるかどうかを説明しています。

表 *78.* 定期的な同期の動作に対するこのプロパティーの影響

変更	値が **True** に設定されている場合に変更が選出されるか	値が **False** に設定されている場合に変更が選出されるか
Marketing Platform で、LDAP サーバーから同期されるユーザーを削除する。	はい	いいえ
Marketing Platform グループにマップされた LDAP グループからユーザーを削除する。	いいえ	いいえ
Marketing Platform で、LDAP グループにマップされた Marketing Platform グループからユーザーを削除する。	いいえ	いいえ
新しいユーザーを LDAP サーバーに追加する。	はい	はい
Marketing Platform グループにマップされた LDAP グループにユーザーを追加する。	はい	いいえ
LDAP サーバー上のユーザー属性を変更する。	はい	はい

デフォルト値

`True`

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ユーザー・ログイン

説明

IBM Marketing Software ユーザーのログインを、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。**ユーザー・ログイン** (`User login`) は唯一の必須マッピングです。通常、この属性の値は LDAP サーバーでは `uid` で、Windows Active Directory サーバーの場合には `sAMAccountName` です。LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーにおけるこの値を確認する必要があります。

デフォルト値

`uid`

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

名

説明

Marketing Platform における名 (First Name) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

`givenName`

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

姓

説明

Marketing Platform における姓 (Last Name) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

`sn`

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ユーザーの肩書き

説明

Marketing Platform におけるタイトル (Title) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

`title`

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

部門

説明

Marketing Platform における部門 (Department) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

会社

説明

Marketing Platform における会社 (Company) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

国

説明

Marketing Platform における国ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ユーザーの E メール

説明

Marketing Platform における E メール・アドレス (Email Address) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

`mail`

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

アドレス 1

説明

Marketing Platform におけるアドレス・ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

電話 (会社)

説明

Marketing Platform における勤務先電話 (Work Phone) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

`telephoneNumber`

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

携帯電話

説明

Marketing Platform における携帯電話 (Mobile Phone) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

電話 (自宅)

説明

Marketing Platform における自宅電話 (Home Phone) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

代替ログイン

説明

Marketing Platform における代替ログイン (Alternate Login) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

関連タスク:

150 ページの『LDAP 同期プロパティーの設定』

151 ページの『ユーザー属性マップ・プロパティーの設定』

IBM Marketing Platform | セキュリティー | LDAP 同期 | IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照

このカテゴリーのプロパティーは、LDAP 統合の構成に使用されます。

LDAP 参照マップ

説明

ここで指定された LDAP または Active Directory グループのメンバーであるユーザーは、IBM Marketing Platform グループ・プロパティーで指定された Marketing Platform グループにインポートされます。

次の構文を使用して、このプロパティーの値を設定します。SEARCHBASE DELIMITER FILTER ここで、

SEARCHBASE は、オブジェクトの識別名 (DN) です。

DELIMITER は、LDAP config AM グループ区切り文字 プロパティーの値です。

FILTER は、LDAP または Active Directory の属性フィルターです。グループ・ベースのインポートを使用する場合は FILTER はオプションで、省略すると、「LDAP **ユーザー参照属性名**」プロパティーの値に基づいて Marketing Platform サーバーによって動的にフィルターが作成されます。

属性ベースのインポートを使用する場合は、FILTER の値を、LDAP サーバーで使用される検索対象の属性のストリングに設定してください。また、「**LDAP** ユーザー参照属性名」プロパティーの値を DN に設定する必要もあります。

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

IBM Marketing Platform グループ

説明

LDAP **参照グループ** プロパティーで指定された LDAP グループまたは Active Directory グループのメンバーのユーザーは、ここで指定する Marketing Platform グループにインポートされます。

デフォルト値

定義されていません

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

関連タスク:

152 ページの『IBM Marketing Software グループへの LDAP グループのマップ』

IBM Marketing Platform | セキュリティー | 統合認証

このカテゴリーのプロパティーは、SAML (Security Assertion Markup Language) 2.0 ベースのフェデレーテッド認証の実装に使用されます。この認証により、多様なアプリケーション間でのシングル・サインオンを有効にすることができます。

統合ログイン許可

説明　このプロパティー内のチェック・ボックスを選択すると、統合環境内でフェデレーテッド認証を有効にすることができます。

デフォルト値

無効

ID プロバイダー URL

説明　ID プロバイダー・サーバーの URL。

証明書発行者

説明　ID プロバイダー・サーバー上で証明書を発行した認証局の URL。 Java keytool ユーティリティーを使用して独自の証明書を生成する場合は、この値に IdP サーバーの URL を設定してください。

関連タスク:

115 ページの『「構成」ページでの構成プロパティーの設定』

IBM Marketing Platform | セキュリティー | 統合認証 | partitions | partition[n]

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Marketing Software アプリケーションと他の IBM アプリケーションおよびサード・パーティー・アプリケーションの間で行われる SAML (Security Assertion Markup Language) 2.0 ベースのフェデレーテッド認証の実装で使用されます。

鍵ストア・パス (Keystore path)

説明　Web アプリケーション・サーバー内のトラステッド鍵ストア・ファイルの場所。

鍵ストア・パス・キー

説明　Web アプリケーション・サーバー内の鍵ストアのパス・キー。

鍵ストア別名 (Keystore alias)

説明　Web アプリケーション・サーバー内の鍵ストアの別名。

関連タスク:

115 ページの『「構成」ページでの構成プロパティーの設定』

IBM Marketing Platform | セキュリティー | API 管理 (API management)

このカテゴリーのプロパティーは、すべての IBM Marketing Software API に適用される認証動作を構成します。

セッション・ベースの API 認証の有効化 (Enable session-based API authentication)

説明

チェック・ボックスを選択してこのプロパティーを有効にした場合、IBM Marketing Software にログインして認証されたユーザーは、認証されたセッションの中で IBM Marketing Software アプリケーションからセキュア API にアクセスするときに再ログインを求められません。

例えば、このプロパティーが有効になっている場合、認証された Interact ユーザーがセッションの中で Campaign API を呼び出すときに再びログインする必要はありません。

デフォルト値

無効

一度使用した後にセキュリティー・トークンを削除する (Delete security token after a single use)

説明

チェック・ボックスを選択してこのプロパティーを有効にした場合、認証ユーザーに対して生成されたトークンは、セキュア API にアクセスするために初めて使用されたときに破棄されます。トークンをそれ以上使用できなくすることで、セキュリティーを強化します。

デフォルト値

有効

IBM Marketing Platform | セキュリティー | API 管理 (API management) | [製品] | (API 構成テンプレート (API configuration template))

IBM Marketing Software API の認証を構成するには、このカテゴリーのテンプレートを使用します。アクセスのブロック、HTTPS の要求、または API の認証の要求を行うことができます。

API URI

説明

次のように、各製品の URI の最初の部分は、セキュリティー・フレームワークによって解決されます。 `http[s]://host:port/context root/api/product`

したがって、このフィールドには、構成する API のリソース名のみを入力してください。入力に必要なストリングを、製品の API 資料から入手できます。

このプロパティーに使用される値の先頭文字は、/ (スラッシュ) にする必要があります。そうしないと、構成はセキュリティー・フレームワークで無視されます。

このプロパティーは、構成された API に対して、URL の完全一致突き合わせ、およびパターンの突き合わせをサポートしています。

- 完全一致突き合わせの場合、URI の末尾はスラッシュ (/) またはリソース名にすることができます。
- パターンの突き合わせの場合、URI の末尾はアスタリスク (*) にする必要があります。

このプロパティーの値を /* に設定する場合、カテゴリー内の他のプロパティーに使用する設定は、製品のすべての API に適用されます。

注: Marketing Platform `login` API の場合、この構成プロパティーは読み取り専用です。

デフォルト値

定義されていません

API アクセスのブロック

説明

API が製品にアクセスできないようにする場合、このオプションを選択します。このオプションは、デフォルトでは選択されません。

API がブロックされると、セキュリティー・フィルターによって HTTP 状況コード 403 (禁止) が返されます。

HTTPS を介した API アクセスの保護

説明

API が HTTPS のみを介して製品にアクセスできるようにするには、このオプションを選択します。このオプションはデフォルトで選択されています。

このプロパティーを有効にした API に、HTTPS ではなく HTTP を介してアクセスすると、セキュリティー・フィルターによって HTTP 状況コード 403 (禁止) が返されます。

API アクセスには認証が必要

説明

API が製品にアクセスする前に API の認証を要求する場合、このオプションを選択します。このオプションはデフォルトで選択されています。

このプロパティーを有効にした API に、無効な資格情報を使用してアクセスすると、セキュリティー・フィルターによって HTTP 状況コード 401 (無許可) が返されます。

注: Marketing Platform `login` API の場合、この構成プロパティーは無効になります。この API は API 認証で最初に呼び出されるためです。

関連概念:

211 ページの『第 16 章 IBM Marketing Software API のセキュリティー・フレームワーク』

IBM Marketing Platform | セキュリティー | JWT 認証 (JWT authentication)

Journey Designer+Campaign では、JWT 認証が使用されます。 JWT 認証によって、アプリケーション間のシングル・サインオンが可能になります。

JWT 認証を有効にする(Enable JWT authentication)

説明　このプロパティーのチェック・ボックスを選択すると、JWT 認証が有効になります。

このプロパティーは、Journey Designer を Campaign と統合した環境でのみ使用します。

デフォルト値

`disabled`

JWT サービス URL (JWT service URL)

説明　JWT サービスの URL。この値は、Marketing Platform フィックスパック 10.0.0.1 を適用したかどうかによって異なります。以下の例を参照してください。

- フィックスパック 10.0.0.1 を適用していない場合:

  `http://IP_ADDRESS/jwt/api/v1/tokens`

- フィックスパック 10.0.0.1 を適用した場合:

  `http://IP_ADDRESS/api/v1/keys`

このプロパティーは、Journey Designer を Campaign と統合した環境でのみ使用します。

JWT 共有秘密鍵

説明　認証のために Marketing Platform から JWT サービスに送られる共有秘密鍵。この鍵は、Marketing Platform と Journey Designer の間で共有されます。 JWT サービスによって、JWT 発行者は JWT 共有秘密鍵にマップされます。

このプロパティーは、Journey Designer が Campaign と統合されていて、Marketing Platform がバージョン 10.0.0.0 である (つまり、Marketing Platform フィックスパック 10.0.0.1 が適用されていない) 環境にのみ適用されます。

JWT 発行者 (JWT issuer)

説明　認証のために Marketing Platform から JWT サービスに送られる発行者名およびバージョン。

このプロパティーは、Journey Designer を Campaign と統合した環境でのみ使用します。

関連タスク:

129 ページの『第 9 章 アプリケーション間の JWT 認証の構成』

IBM Marketing Platform | 通知

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Marketing Software 製品からユーザーに送信できる通知に関するシステムの動作を制御します。

アラートを保存する日数

説明

アラートの送信元のアプリケーションによって指定された有効期限日付の後に、履歴目的でシステム内でシステム・アラートが保持される時間を日数で指定します。指定された日数より古いアラートはシステムから削除されます。

デフォルト値

`90`

E メールを送信する頻度 (分)

説明

新しい通知 E メールを送信するまでにシステムが待機する分数を指定します。

デフォルト値

`30`

E メールを送信する最大再試行数

説明

通知 E メールの初回送信が失敗した場合に、システムが送信を再試行する回数を指定します。

デフォルト値

`1`

関連タスク:

182 ページの『IBM Marketing Software での電子メールによる通知の構成』

IBM Marketing Platform | 監査イベント

このページのプロパティーは、監査イベントが追跡されるかどうかを決定します。

イベント監査を有効にしますか?

説明

監査イベントが追跡されるかどうかを指定します。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

関連タスク:

251 ページの『レポートに表示される監査イベントの構成』

IBM Marketing Platform | 監査イベント | 監査イベントの構成

このページで選択したイベントは、セキュリティー監査レポートで参照できます。

すべてのアカウントのログイン/ログアウト・イベントを記録する

説明

すべてのユーザー・アカウントにおいて、ログイン・イベントとログアウト・イベントのユーザー名と日時を追跡するかどうかを指定します。

すべてのアカウントのユーザー・セッション・タイムアウトを記録する

説明

自動的にタイムアウトになったセッションのアカウント・ユーザー名と日時を追跡するかどうかを指定します。

HighSeverityAccounts グループのメンバーのログイン/ログアウト・イベントを記録する

説明

Marketing Platform 内の **highSeverityAccounts** グループのメンバーであるアカウントにおいて、ログイン・イベントとログアウト・イベントのユーザー名と日時を追跡するかどうかを指定します。この機能を有効にするには、この構成プロパティーの重大度レベルを設定し、ユーザーを highSeverityAccounts グループに追加する必要があります。

LDAP のグループ・メンバーシップの変更を記録する

説明

LDAP サーバーから同期されるユーザー・アカウントにおいて、アカウントの追加や削除を、ユーザー名やそれらのアクションの日時と共に記録するかどうかを指定します。このプロパティーは、Marketing Platform を、IBM Security Directory サーバーや Windows Active Directory などのサポートされている LDAP サーバーと統合した場合にのみ使用します。

アカウントの有効化/無効化を記録する

説明

ユーザー・アカウントが有効または無効に設定された際に、アカウント・ユーザー名と日時を記録するかどうかを指定します。

アカウント・パスワードの変更を記録する

説明

ユーザー・パスワードが変更された際に、アカウント・ユーザー名と日時を記録するかどうかを指定します。

アカウント・パスワードのロックを記録する

説明

正しくないログインが多数試行されたためにパスワードがロックアウトされた際に、アカウント・ユーザー名と日時を記録するかどうかを指定します。

Marketing Platform のグループの作成/削除を記録する

説明

グループが追加されたり削除されたりした際に記録するかどうかを指定します。

Marketing Platform のグループ・メンバーシップの変更を記録する

説明

ユーザー・アカウントがグループに追加されたりグループから削除されたりした際に記録するかどうかを指定します。

Marketing Platform グループ許可の変更を記録する

説明

グループ権限に対する変更を記録するかどうかを指定します。

役割の作成/削除を記録する

説明

役割が追加されたり削除されたりした際に記録するかどうかを指定します。「設定」>「ユーザーの役割と権限」ページに表示される役割のみ追跡されます。

役割のメンバーシップの変更を記録する

説明

役割のメンバーシップの変更を記録するかどうかを指定します。「設定」>「ユーザーの役割と権限」ページに表示される役割のみ追跡されます。

役割の許可の変更を記録する

説明

役割の権限の変更を記録するかどうかを指定します。「設定」>「ユーザーの役割と権限」ページに表示される役割のみ追跡されます。

構成ページのプロパティーの変更を記録する

説明

「設定」>「構成」ページ上での構成プロパティーの変更を記録するかどうかを指定します。ユーザーが「構成」ページで加えた変更や、configTool を実行しているユーザーが加えた変更が追跡されます。インストール時やアップグレード時にインストーラーによって加えられた構成変更は追跡されません。

監査バックアップを有効にする

説明

監査データを USM_AUDIT_BACKUP テーブルに保存するかどうかを指定します。

重要: これは Marketing Platform Web アプリケーションの開始時に読み取られるブートストラップ・プロパティーであるので、このプロパティー値を変更する際には Marketing Platform Web アプリケーションを停止してから再始動しなければなりません。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

指定した日数が経過したらデータをアーカイブに保管する

説明

監査バックアップを行う間隔を日数で指定します。アーカイブされるデータは、`USM_AUDIT_BACKUP` テーブルに保管され、アーカイブからのデータが含まれるカスタムの日付範囲を設定するときに監査イベント・レポートに組み込むことができます。

重要: これは Marketing Platform Web アプリケーションの開始時に読み取られるブートストラップ・プロパティーであるので、このプロパティー値を変更する際には Marketing Platform Web アプリケーションを停止してから再始動しなければなりません。

指定した日数で監査レコードをプライマリーに保管する

説明

監査イベント・レポート用に `USM_AUDIT` テーブルに何日分のデータを保持するかを指定します。監査イベント・レポートのデフォルト設定が有効な場合、`USM_AUDIT` テーブル内のデータのみレポートに表示されます。

重要: これは Marketing Platform Web アプリケーションの開始時に読み取られるブートストラップ・プロパティーであるので、このプロパティー値を変更する際には Marketing Platform Web アプリケーションを停止してから再始動しなければなりません。

アーカイブ開始時刻

説明

システムが監査データをアーカイブに移動する時刻を指定します。この値には 24 時間形式を使用します。

重要: これは Marketing Platform Web アプリケーションの開始時に読み取られるブートストラップ・プロパティーであるので、このプロパティー値を変更する際には Marketing Platform Web アプリケーションを停止してから再始動しなければなりません。

監査バックアップ通知を受信するグループ名

説明

アーカイブ・バックアップの通知を受け取るメンバーが属する IBM Marketing Software グループを指定します。このプロパティーには 1 つの

グループしか指定できません。このグループのユーザーは、「設定」>「ユーザー」ページに進んで「通知の配信登録」をクリックすると、この通知のサブスクリプションを管理できます。

関連概念:

254 ページの『アーカイブ済みの監査イベント』

関連タスク:

251 ページの『レポートに表示される監査イベントの構成』

IBM Marketing Platform | 監査イベント | 監査イベント重大度構成

このページ上のイベントごとに指定する重大度レベルは、監査イベント・レポートに表示されます。重大度レベルを使用して、レポート・データをソートしたりフィルター操作したりできます。このイベントは、「**IBM Marketing Platform** | 監査イベント | 監査イベント構成」カテゴリーのイベントと同じです。

関連タスク:

251 ページの『レポートに表示される監査イベントの構成』

Digital Analytics 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Digital Analytics 構成プロパティーについて取り上げます。

これらの構成プロパティーは、Digital Analytics と IBM Marketing Software 間におけるシングル・サインオンを構成する際に使用します。この統合の詳細については、「*IBM Marketing Platform* 管理者ガイド 」を参照してください。

関連タスク:

132 ページの『自動ユーザー・アカウント作成による IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ』

134 ページの『手動ユーザー・アカウント作成による IBM Marketing Software と Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ』

Digital Analytics

このカテゴリーのプロパティーは、Digital Analytics と IBM Marketing Software との間のシングル・サインオンを有効にするための構成の一部です。

Coremetrics Analytics の有効

説明

これは、Digital Analytics と IBM Marketing Software との間のシングル・サインオンを有効にするための構成の一部です。

シングル・サインオンを有効にするための 1 つのステップとして `true` に設定します。

この統合の詳細については、「*IBM Marketing Platform* 管理者ガイド 」を参照してください。

デフォルト値

`false`

Digital Analytics | 統合 | partitions | partition[n]

このカテゴリーのプロパティーは、Digital Analytics と IBM Marketing Software との間のシングル・サインオンを有効にするための構成の一部です。

Coremetrics アカウントの Platform ユーザー

説明

データ・ソースに Digital Analytics 共有秘密鍵を保持する IBM Marketing Software ユーザー・アカウントのログイン名を指定します。

これは、Digital Analytics と IBM Marketing Software との間のシングル・サインオンを有効にするための構成の一部です。この統合の詳細については、「*IBM Marketing Platform* 管理者ガイド 」を参照してください。

デフォルト値

`asm_admin`

Coremetrics アカウントのデータ・ソース

説明

Digital Analytics 共有秘密鍵を保持するために作成されたデータ・ソースの名前を指定します。

これは、Digital Analytics と IBM Marketing Software との間のシングル・サインオンを有効にするための構成の一部です。この統合の詳細については、「*IBM Marketing Platform* 管理者ガイド 」を参照してください。

デフォルト値

`CoremetricsDS`

レポート作成の構成プロパティー

IBM Marketing Software のレポート作成の構成プロパティーは、「設定」 > 「構成」 > 「レポート」にあります。

レポートを生成するために、IBM Marketing Software スイートを、ビジネス・インテリジェンス・アプリケーション IBM Cognos と統合できます。「統合」 > 「**Cognos**」プロパティーを使用して、IBM Cognos システムを識別します。また、Campaign、eMessage、Interact で追加のプロパティーを構成して、レポート作成スキーマをセットアップし、カスタマイズする必要があります。

レポート | 統合 | Cognos [バージョン]

IBM Marketing Software スイートは、IBM Cognos と統合してレポートを生成します。

このページには、この IBM システムで使用される URL などのパラメーターを指定するプロパティーが表示されます。

統合名

説明

読み取り専用です。レポートを表示するために IBM Marketing Software によって使用されるサード・パーティーのレポート作成/分析ツールが IBM Cognos となるように指定します。

デフォルト値

`Cognos`

ベンダー

説明

読み取り専用です。IBM Cognos が、「統合名」プロパティーで指定したアプリケーションを提供する会社名であることを示します。

デフォルト値

`Cognos`

バージョン

説明

読み取り専用です。「統合名」プロパティーによって指定されるアプリケーションの製品バージョンを示します。

デフォルト値

`<version>`

有効

説明

Suite で IBM Cognos を有効にするかどうかを指定します。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

統合クラス名

説明

読み取り専用です。「**統合名**」プロパティーで指定されたアプリケーションに接続する際に使用する統合インターフェースを作成する Java クラスの完全修飾名を示します。

デフォルト値

`com.unica.report.integration.cognos.CognosIntegration`

ドメイン

説明

Cognos サーバーが実行されている、完全修飾の会社ドメイン・ネームを示します。例: `myCompanyDomain.com`

会社でサブドメインを使用している場合には、このフィールドの値には該当するサブドメインも含める必要があります。

デフォルト値

`[CHANGE ME]`

有効な値

1024 文字未満のストリング。

ポータル URL

説明

IBM Cognos Connection ポータルの URL を指定します。「ドメイン」プロパティーで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例: `http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com/cognos<version>/cgi-bin/cognos.cgi`

この URL は、IBM Cognos Configuration の「ローカル構成 **(Local Configuration)**」>「環境 **(Environment)**」で確認できます。

デフォルト値

`http://[CHANGE ME]/cognos<バージョン>/cgi-bin/cognos.cgi`

有効な値

適切な形式の URL。

ディスパッチ URL

説明

IBM Cognos Content Manager の URL を指定します。「ドメイン」プロパティーで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例: `http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com:9300/p2pd/servlet/dispatch`

この URL は Cognos Configuration の「ローカル構成 **(Local Configuration)**」>「環境 **(Environment)**」で表示できます。

デフォルト値

`http://[CHANGE ME]:9300/p2pd/servlet/dispatch`

Cognos Content Manager のデフォルトのポート番号は 9300 です。指定したポート番号が、Cognos インストール済み環境で使用されているポート番号と同じであることを確認してください。

有効な値

適切な形式の URL。

認証モード

説明

IBM Cognos アプリケーションで IBM Authentication Provider を使用するかどうか、つまり認証を Marketing Platform で行うかどうかを指定します。

デフォルト値

匿名

有効な値

- **匿名**: 認証が無効であることを意味します。
- **認証済み**: IBM システムと Cognos システムとの間の通信はマシン・レベルで保護されます。1 人のシステム・ユーザーを構成し、そのユーザーが適切なアクセス権限を持つように構成します。慣例的に、このユーザーには「cognos_admin」という名前が付きます。
- **ユーザーごとに認証済み**: システムによって、個別のユーザー資格情報が評価されます。

認証名前空間

説明

読み取り専用です。IBM Authentication Provider の名前空間です。

デフォルト値

`UNICA`

認証ユーザー名 (Authentication user name)

説明

レポート作成システム・ユーザーのログイン名を指定します。IBM アプリケーション、Cognos が Unica Authentication Provider を使用するよう構成されている場合に、このユーザーとして Cognos にログインします。このユーザーは、IBM Marketing Software へのアクセス権も持っています。

この設定は、「認証モード」プロパティーが 認証済み に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

`cognos_admin`

認証データ・ソース名 (Authentication datasource name)

説明

Cognos ログイン資格情報を保持するレポート作成システム・ユーザーのデータ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

`Cognos`

フォーム認証を有効にする

説明

フォームに基づく認証を有効にするかどうかを指定します。次のいずれかの条件に当てはまる場合に、このプロパティーを `True` に設定します。

- IBM Marketing Software が IBM Cognos アプリケーションと同じドメインにインストールされていない。
- IBM Marketing Software アプリケーションと IBM Cognos の両方が同じマシンにインストールされている場合であっても、IBM Cognos が (IBM Marketing Software アプリケーションへのアクセスに使用されている) 完全修飾ホスト名の代わりに、(同じネットワーク・ドメイン内の) IP アドレスを使用してアクセスされている場合。

ただし、値が `True` の場合には、Cognos Connection へのログイン・プロセスによってログイン名とパスワードが平文で渡されるため、IBM Cognos と IBM Marketing Software で SSL 通信を使用するように構成されていないと、機密保護機能がない状態になってしまいます。

SSL が構成されている場合であっても、表示されたレポートでソースを表示すると、ユーザー名とパスワードが HTML ソース・コードに平文として表示されます。このため、IBM Cognos と IBM Marketing Software は、同じドメインにインストールする必要があります。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成

SQL スクリプトは、レポート・スキーマに関するビューやテーブルを作成します。「**レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成**」プロパティーは、ビューやテーブルの名前に関する情報を提供します。

テーブル/ビューの名前

説明

このレポート作成スキーマに生成される SQL スクリプトによって作成されることになるビューまたはテーブルの名前を指定します。標準またはデフォルトのテーブル名/ビュー名を変更しないのが、ベスト・プラクティスとなります。変更する場合には、IBM Cognos Framework Manager の Cognos モデルにあるビューの名前も変更する必要があります。

新しいオーディエンス・レベルに新しいレポート作成スキーマを作成する場合には、新しいレポート作成テーブル/ビューすべての名前を指定しなければなりません。

デフォルト値

スキーマによって異なります。

有効な値

以下の制約事項を満たすストリング。

- 18 文字より長くすることはできません。

- すべて大文字を使用する必要があります。

以下の命名規則を使用する必要があります。

- 名前の先頭は「UAR」でなければなりません。
- IBM Marketing Software アプリケーションを表す 1 文字のコードを追加します。コードのリストについては、後続部分を参照してください。
- 下線文字を追加します。
- テーブル名を追加します。テーブル名には、オーディエンス・レベルを示す 1 つ以上の文字コードを含めます。
- 末尾は、下線文字にします。

SQL ジェネレーターは、適切な場合には時間ディメンション・コードを追加します。以下のコードのリストを参照してください。

例えば、`UARC_COPERF_DY` は Campaign のオファー・パフォーマンスの日単位のレポート作成ビューまたはテーブルの名前です。

以下に、IBM Marketing Software アプリケーション・コードのリストを示します。

- Campaign: C
- eMessage: E
- Interact: I
- Distributed Marketing: X
- Marketing Operations: P
- Leads: L

以下に、ジェネレーターによって追加される時間ディメンション・コードのリストを示します。

- 時間: HR
- 日: DY
- 週: WK
- 月: MO
- 四半期: QU
- 年: YR

レポート | スキーマ | Campaign

「**レポート | スキーマ |Campaign**」プロパティーは、Campaign データベースを識別するデータ・ソースに関する情報を提供します。

入力データ・ソース (JNDI)

説明

Campaign データベース、特にシステム・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。SQL 生成ツールを使用してレポート作成テーブルを作成するスクリプトを生成する場合には、このデータ・ソースがなければなりません。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくてもレポート作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を実行できません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、Campaign ビューまたはレポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと同じでなければなりません。

デフォルト値

campaignPartition1DS

レポート | スキーマ | Campaign | オファー・パフォーマンス

オファー・パフォーマンス・スキーマでは、すべてのオファーに関する、およびキャンペーンごとのオファーに関するコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。デフォルトでは、このスキーマは、すべての期間における「サマリー」ビュー (またはテーブル) を生成するように構成されています。

オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例 : ColumnX,ColumnY

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細なコンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [コンタクト・メトリック] および [レスポンス・メトリック]

これらのプロパティーを使用して、キャンペーン・パフォーマンスまたはオファー・パフォーマンスのレポート・スキーマにコンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックを追加することができます。

列名

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [コンタクト・メトリック]

説明

「入力列名」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

関数

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [コンタクト・メトリック]

説明

コンタクト指標の判別または計算の方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count、count distinct、sum、min、max、average

入力列名

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [コンタクト・メトリック]

説明

このレポート作成スキーマに追加するコンタクト指標が入っている列の名前です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルの列の名前。

制御処理フラグ

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [コンタクト・メトリック]

説明

サンプルの IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのコンタクト指標には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのメトリックを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのメトリックを表します。「制御処理フラグ」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

列名

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [レスポンス・メトリック]

説明

「入力列名」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

関数

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [レスポンス・メトリック]

説明

レスポンス指標の判別または計算の方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count、count distinct、sum、min、max、average

入力列名

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [レスポンス・メトリック]

説明

このレポート作成スキーマに追加するレスポンス指標が入っている列の名前です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

レスポンス履歴テーブルの列の名前。

制御処理フラグ

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [レスポンス・メトリック]

説明

標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス指標には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのレスポンスを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのレスポンスを表します。「制御処理フラグ」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・パフォーマンス

キャンペーン・パフォーマンス・スキーマでは、キャンペーン、キャンペーン・オファー、キャンペーン・セルの各レベルにおけるコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。

オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例: ColumnX,ColumnY

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細なコンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細

キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細スキーマは、キャンペーン詳細レスポンスをレスポンス・タイプとオファー・データごとに詳細化した、レポート作成をサポートしています。このスキーマ・テンプレートでは、カスタムのレスポンス・タイプごとに、キャンペーンと、キャンペーンによってグループ化されたオファーに関して別々のレスポンス数が提供されます。

このスキーマ

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細 | 列 | [レスポンス・タイプ]

レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細 | 列 | [レスポンス・タイプ] プロパティーは、レポートに含めるカスタム・レスポンス・タイプをレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

列名

説明

「レスポンス・タイプ・コード」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

レスポンス・タイプ・コード

説明

指定したレスポンス・タイプのレスポンス・タイプ・コードです。この値は、UA_UsrResponseType テーブルの ResponseTypeCode 列で保持されます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

レスポンス・タイプ・コードの例を次に示します。

- EXP (調査)
- CON (考慮)
- CMT (コミット)
- FFL (実行)
- USE (使用)
- USB (アンサブスクライブ)
- UKN (不明)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのレスポンス・タイプ・コードもさらに使用できます。

制御処理フラグ

説明

IBM Marketing Software Reports Pack で提供されている標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを使用する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス・タイプには 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのレスポンス・タイプを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのレスポンス・タイプを表します。「制御処理フラグ」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [レスポンス・メトリック]

レポート | スキーマ | **Campaign** | [スキーマ名] | 列 | [レスポンス・メトリック] プロパティーは、レポートに含めるレスポンス・メトリックをキャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオファー・パフォーマンス・レポート作成スキーマに追加する場合に使用します。

列名

説明

「入力列名」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

`[CHANGE ME]`

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

関数

説明

レスポンス指標の判別または計算の方法を指定します。

デフォルト値

`count`

有効な値

`count`、`count distinct`、`sum`、`min`、`max`、`average`

入力列名

説明

このレポート作成スキーマに追加するレスポンス指標が入っている列の名前です。

デフォルト値

`[CHANGE ME]`

有効な値

レスポンス履歴テーブルの列の名前。

制御処理フラグ

説明

標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス指標には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのレスポンスを表し、もう 1 つの列はタ

ーゲット・グループのレスポンスを表します。「制御処理フラグ」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの詳細

「キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの詳細」スキーマは、キャンペーン詳細コンタクトをコンタクト・ステータスのタイプとオファー・データごとに詳細化した、レポート作成をサポートしています。このスキーマ・テンプレートでは、カスタムのコンタクト・ステータス・タイプごとに、キャンペーンと、キャンペーンによってグループ化されたオファーに関して別々のコンタクト数が提供されます。

デフォルトでは、このスキーマを使用する Campaign レポートのサンプルは存在しません。

オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例 : ColumnX,ColumnY

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細なコンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの詳細 | 列 | [コンタクト・ステータス]

レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの詳細 | 列 | **[コンタクト・ステータス]** は、レポートに含めるコンタクト・ステータスをレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

列名

説明

「コンタクト・ステータス」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

コンタクト・ステータス・コード

説明

コンタクト・ステータス・コードの名前です。この値は、UA_ContactStatus テーブルの ContactStatusCode 列で保持されます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

コンタクト・ステータス・タイプの例を次に示します。

- CSD (キャンペーン送信)
- DLV (配信済み)
- UNDLV (未配信)
- CTR (制御)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのコンタクト・ステータス・タイプもさらに使用できます。

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列

これらのプロパティーは、レポートに含めるカスタム・オファー属性をレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

列名

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [キャンペーン・カスタム列]

説明

「属性 **ID**」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

属性 ID

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [キャンペーン・カスタム列]

説明

UA_CampAttribute テーブルの属性の AttributeID 列の値です。

デフォルト値

0

値タイプ

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [キャンペーン・カスタム列]

説明

キャンペーン属性のデータ型です。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

このキャンペーン属性に通貨値を入れる場合、NumberValue を選択してください。

このキャンペーン属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。

列名

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [セル・カスタム列]

説明

「属性 **ID**」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

属性 ID

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [セル・カスタム列]

説明

「**UA_CellAttribute**」テーブルの属性の「AttributeID」列の値です。

デフォルト値

0

値タイプ

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [セル・カスタム列]

説明

セル属性のデータ型です。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

列名

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [オファー・カスタム列]

説明

「属性 **ID**」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

属性 ID

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [オファー・カスタム列]

説明

UA_OfferAttribute テーブルの属性の AttributeID 列の値です。

デフォルト値

0

値タイプ

構成カテゴリー

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [オファー・カスタム列]

説明

オファー属性のデータ型です。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

このオファー属性に通貨値を入れる場合、NumberValue を選択してください。

このオファー属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [キャンペーン・カスタム列]

レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [キャンペーン・カスタム列] プロパティーは、レポートに含めるカスタム・キャンペーン属性をレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

列名

説明

「属性 **ID**」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

属性 ID

説明

UA_CampAttribute テーブルの属性の `AttributeID` 列の値です。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

キャンペーン属性のデータ型です。

デフォルト値

`StringValue`

有効な値

`StringValue`、`NumberValue`、`DatetimeValue`

このキャンペーン属性に通貨値を入れる場合、`NumberValue` を選択してください。

このキャンペーン属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「**選択ボックス - 文字列**」に設定した場合、`StringValue` を選択します。

レポート | スキーマ | Campaign | [スキーマ名] | 列 | [コンタクト・メトリック]

レポート | スキーマ | **Campaign** | [スキーマ名] | 列 | [コンタクト・メトリック] プロパティーは、キャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオファー・パフォーマンス・レポート作成スキーマにコンタクト・メトリックを追加する場合に使用します。

列名

説明

「入力列名」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

`[CHANGE ME]`

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

関数

説明

コンタクト指標の判別または計算の方法を指定します。

デフォルト値

`count`

有効な値

`count`、`count distinct`、`sum`、`min`、`max`、`average`

入力列名

説明

このレポート作成スキーマに追加するコンタクト指標が入っている列の名前です。

デフォルト値

`[CHANGE ME]`

有効な値

コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルの列の名前。

制御処理フラグ

説明

サンプルの IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのコンタクト指標には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのメトリックを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのメトリックを表します。「制御処理フラグ」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

`0`

有効な値

- `0`: ターゲット・グループを表す列
- `1`: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [オファー・カスタム列]

レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [オファー・カスタム列] プロパティーは、レポートに含めるカスタム・オファー属性をレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

追加するために使用するフォーム

列名

説明

「属性 **ID**」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

`[CHANGE ME]`

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

属性 ID

説明

UA_OfferAttribute テーブルの属性の `AttributeID` 列の値です。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

オファー属性のデータ型です。

デフォルト値

`StringValue`

有効な値

`StringValue`、`NumberValue`、`DatetimeValue`

このオファー属性に通貨値を入れる場合、`NumberValue` を選択してください。

このオファー属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「**選択ボックス - 文字列**」に設定した場合、`StringValue` を選択します。

レポート | スキーマ | Campaign | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | [セル・カスタム列]

レポート | スキーマ | **Campaign** | キャンペーン・カスタム属性 | 列 | **[**セル・カスタム列**]** プロパティーは、レポートに含めるカスタム・セル属性をレポート・スキーマに追加する場合に使用します。

列名

説明

「属性 **ID**」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

`[CHANGE ME]`

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

属性 ID

説明

「**UA_CellAttribute**」テーブルの属性の「`AttributeID`」列の値です。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

セル属性のデータ型です。

デフォルト値

`StringValue`

有効な値

`StringValue`、`NumberValue`、`DatetimeValue`

レポート | スキーマ | Interact

Interact レポート作成スキーマは、設計時、実行時、学習の 3 つの異なるデータベースを参照します。「レポート | スキーマ |**Interact**」プロパティーは、これらのデータベースのデータ・ソースの JNDI 名を指定する場合に使用します。

SQL レポート生成ツールを使用してレポート作成テーブルを作成するスクリプトを生成する場合には、このページで指定するデータ・ソースがなければなりません。SQL 生成ツールは、こうしたデータ・ソースがなくともレポート作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を実行できません。

データ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと一致しなければなりません。

対話設計データ・ソース

説明

Interact 設計時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。このデータベースは、Campaign システム・テーブルでもあります。

デフォルト値

`campaignPartition1DS`

対話ランタイム・データ・ソース

説明

Interact 実行時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractRTDS

対話学習データ・ソース

説明

Interact 学習データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractLearningDS

レポート | スキーマ | Interact | 対話実績

対話実績スキーマは、チャネル、チャネル・オファー、チャネル・セグメント、チャネル・インタラクション・ポイント、対話式セル、対話式セル・オファー、対話式セル・インタラクション・ポイント、対話式オファー、対話式オファー・セル、対話式オファー・インタラクション・ポイントの各レベルにおいて、コンタクトとレスポンスの履歴指標を生成します。

オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例 : ColumnX,ColumnY

詳細なコンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

時間、日

有効な値

時間、日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | eMessage

レポート | スキーマ | **eMessage** プロパティーは、eMessage トラッキング・テーブルを示すデータ・ソースの名前を指定します。このトラッキング・テーブルは、Campaign システム・テーブル内にあります。

eMessage トラッキング・データ・ソース (JNDI)

説明

eMessage トラッキング・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。このトラッキング・テーブルは、Campaign システム・テーブル内にあります。SQL レポート生成ツールを使用して、レポート作成テーブルを作成するスクリプトを検証する場合には、このデータ・ソースがなければなりません。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくてもレポート作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を実行できません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと同じでなければなりません。

デフォルト値

`campaignPartition1DS`

IBM Marketing Operations 構成プロパティー

このセクションでは、「設定」>「構成」ページの IBM Marketing Operations 構成プロパティーについて説明します。

Marketing Operations

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Marketing Operations インストール済み環境のデフォルトとサポート対象のロケールを指定します。

supportedLocales

説明

IBM Marketing Operations のインストール済み環境で使用できるロケールを指定します。使用しているロケールだけをリストしてください。リストす

るロケールごとにサーバー上のメモリーが使用されます。使用されるメモリーの量は、テンプレートのサイズと数によって異なります。

初期インストールまたはアップグレード後にロケールを追加する場合は、アップグレード・サーブレットを再実行する必要があります。詳しくは、アップグレードの資料を参照してください。

この値を変更した場合、その変更を有効にするには、Marketing Operations 配置を停止し、再始動する必要があります。

デフォルト値

en_US

defaultLocale

説明

IBM Marketing Operations において、Marketing Operations 管理者が特定のユーザーについて明示的にオーバーライドしない限り、すべてのユーザーに対して表示されるサポート・ロケールを指定します。

この値を変更した場合、その変更を有効にするには、Marketing Operations 配置を停止し、再始動する必要があります。

デフォルト値

en_US

Marketing Operations | navigation

このカテゴリーのプロパティーは、Uniform Resource Identifier、URL、ポートなどのナビゲーション用のオプションを指定します。

welcomePageURI

説明

IBM Marketing Operations 索引ページの Uniform Resource Identifier。この値は、IBM Marketing Software アプリケーションによって内部的に使用されます。この値を変更することは勧められていません。

デフォルト値

affiniumPlan.jsp?cat=projectlist

projectDetailpageURI

説明

IBM Marketing Operations 詳細設定ページの Uniform Resource Identifier。この値は、IBM Marketing Software アプリケーションによって内部的に使用されます。この値を変更することは勧められていません。

デフォルト値

ブランク

seedName

説明

IBM Marketing Software アプリケーションによって内部的に使用されます。この値を変更することは勧められていません。

デフォルト値

`Plan`

type

説明

IBM Marketing Software アプリケーションによって内部的に使用されます。この値を変更することは勧められていません。

デフォルト値

`Plan`

httpPort

説明

アプリケーション・サーバーで IBM Marketing Operations アプリケーションとの接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

`7001`

httpsPort

説明

アプリケーション・サーバーで IBM Marketing Operations アプリケーションとのセキュア接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

`7001`

serverURL

説明

IBM Marketing Operations インストールの URL。HTTP または HTTPS プロトコルのロケーターを受け入れます。

ユーザーが Chrome ブラウザーを使用して Marketing Operations にアクセスする場合は、URL に完全修飾ドメイン・ネーム (FQDN) を使用します。FQDN を使用しない場合は、Chrome ブラウザーで製品 URL にアクセスできません。

デフォルト値

`http://<server>:<port>/plan`

注: <server> は小文字にする必要があります。

logoutURL

説明

内部的に使用されます。この値を変更することは勧められていません。

IBM Marketing Platform は、ユーザーがスイートでログアウト・リンクをクリックしたときに、この値を使用して、それぞれの登録済みアプリケーションのログアウト・ハンドラーを呼び出します。

デフォルト値

`/uapsysservlet?cat=sysmodules&func=logout`

displayName

説明

内部的に使用されます。

デフォルト値

`Marketing Operations`

Marketing Operations | about

このセクションの構成プロパティーは、IBM Marketing Operations インストール済み環境に関する情報をリストします。これらのプロパティーは編集できません。

displayName

説明

製品の表示名。

値

IBM Marketing Operations

releaseNumber

説明

現在インストールされているリリース。

値

<version>.<release>.<modification>

copyright

説明

著作権の年。

値

<year>

os

説明

IBM Marketing Operations がインストールされているオペレーティング・システム。

値 *<operating system and version>*

java

説明

Java の現在のバージョン。

値 *<version>*

support

説明

文書を読み取り、サービス要求を出します。

値

`http://www-947.ibm.com/support/entry/portal/open_service_request`

appServer

説明

IBM Marketing Operations がインストールされているアプリケーション・サーバーのアドレス。

値

<IP address>

otherString

説明

値

ブランク

Marketing Operations | umoConfiguration

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operations の基本構成についての情報を指定します。

serverType

説明

アプリケーション・サーバー・タイプ。カレンダーのエクスポートに使用されます。

有効な値

`WEBLOGIC` または `WEBSPHERE`

デフォルト値

<server type>

usermanagerSyncTime

説明

スケジュール設定された IBM Marketing Platform との同期化の時間間隔 (ミリ秒)。

デフォルト値

10800000 (ミリ秒: 3 時間)

firstMonthInFiscalYear

説明

会計年度が開始する月を設定します。アカウントの「サマリー」タブには、そのアカウントの各会計年度の月別予算情報をリストした表示専用テーブルがあります。このテーブルの最初の月は、このパラメーターによって決まります。

1 月は 0 で表されます。会計年度が 4 月に始まるようにするには、**firstMonthInFiscalYear** を 3 に設定します。

有効な値

0 から 11 の整数

デフォルト値

0

maximumItemsToBeRetainedInRecentVisits

説明

「最近使用した項目」メニューに表示する、最近表示したページへのリンクの最大数。

デフォルト値

10 (リンク)

maxLimitForTitleString

説明

ページ・タイトルに表示できる最大文字数。指定された文字数よりもタイトルが長い場合、IBM Marketing Operations はタイトルを切り取って短くします。

デフォルト値

40 (文字)

maximumLimitForBulkUploadItems

説明

同時にアップロードできる添付ファイルの最大数。

デフォルト値

5 (添付ファイル)

workingDaysCalculation

説明

IBM Marketing Operations が期間を計算する方法を制御します。

有効な値

- bus: 営業日のみ、営業日のみを含みます。休日も週末も含まれません。

- wkd: 営業日 + 週末、営業日と週末を含みます。休日は含まれません。
- off: 営業日 + 休日。すべての営業日と休日を含みます。週末は含まれません。
- すべて: カレンダーのすべての日が含まれます。

デフォルト値

all

validateAllWizardSteps

説明

ユーザーがウィザードを使用してプログラム、プロジェクト、または要求を作成するときに、IBM Marketing Operations によって、現行ページの必須フィールドに値が設定されているかどうかが自動的に検証されます。このパラメーターは、ユーザーが「終了」をクリックしたときに、Marketing Operations がすべてのページ (タブ) の必須フィールドを検証するかどうかを制御します。

有効な値

- True: Marketing Operations は、ユーザーが表示しなかったページの必須フィールドを検査します (ワークフロー、トラッキング、添付ファイルを除く)。必須フィールドがブランクの場合、ウィザードはそのページを開き、エラー・メッセージを表示します。
- False: Marketing Operations は、ユーザーが表示しなかったページの必須フィールドを検証しません。

デフォルト値

True

enableRevisionHistoryPrompt

説明

ユーザーがプロジェクト、要求、または承認を保存するときに変更コメントを追加するよう求めるプロンプトが出るようにします。

有効な値

True | False

デフォルト値

False

useForecastDatesInTaskCalendar

説明

タスクがカレンダー・ビューに表示されるときに使用される日付のタイプを指定します。

有効な値

- True: 予測/実際の日付を使用してタスクを表示します。
- False: ターゲット日を使用してタスクを表示します。

デフォルト値

False

copyRequestProjectCode

説明

プロジェクト・コード (PID) を要求からプロジェクトに引き継ぐかどうかを制御します。このパラメーターを False に設定した場合、プロジェクトと要求は、異なるコードを使用します。

有効な値

True | False

デフォルト値

True

projectTemplateMonthlyView

説明

プロジェクト・テンプレートのワークフローで月次ビューが許可されるかどうかを制御します。

有効な値

True | False

デフォルト値

False

disableAssignmentForUnassignedReviewers

説明

承認のために作業を役割別に割り当てる方法を指定します。**disableAssignmentForUnassignedReviewers** パラメーターは、「スタッフ」タブにある「役割別に作業を割り当て」の、ワークフロー承認における承認者の割り当てに関する動作を制御します。

有効な値

- True: 「スタッフ」タブにおいて未割り当てのレビュー担当者は、新しいステップとして承認に追加されません。
  - 追加オプション: 所有者によって割り当てられた既存の承認者で、割り当てられた役割を持たないものは、変更されません。「スタッフ」タブに役割が「未割り当て」のレビュー担当者が存在しても、新しい承認者ステップは追加されません。
  - 置換オプション: 所有者によって割り当てられた既存の承認者で、役割を持たないものは、ブランクに置き換えられます。「スタッフ」タブに役割が「未割り当て」のレビュー担当者が存在しても、新しい承認者ステップは追加されません。
- False: 未割り当てのレビュー担当者は、承認に追加されます。
  - 追加オプション: 定義された役割がない所有者割り当てステップが承認に存在する場合は、役割を持たないすべてのレビュー担当者が、レビュー担当者として承認に追加されます。

– 置換オプション: 承認における既存の承認者は、「スタッフ」タブの未割り当て承認者に置き換えられます。

デフォルト値

`False`

enableApplicationLevelCaching

説明

アプリケーション・レベルのキャッシングを有効にするかどうかを示します。キャッシング・メッセージのマルチキャストが有効になっていないクラスター環境で最良の結果を得るには、Marketing Operations のアプリケーション・レベルのキャッシングをオフにすることを検討してください。

有効な値

`True | False`

デフォルト値

`True`

customAccessLevelEnabled

説明

カスタム・アクセス・レベル (プロジェクトの役割) を IBM Marketing Operations で使用するかどうかを決定します。

有効な値

- `True`: プロジェクトおよび要求に対するユーザー・アクセスは、オブジェクト・アクセス・レベルおよびカスタム・アクセス・レベル (プロジェクトの役割) に従って評価されます。カスタム・タブのタブ・セキュリティーが有効になります
- `False`: プロジェクトおよび要求へのユーザー・アクセスは、オブジェクト・アクセス・レベル (オブジェクトの暗黙の役割) のみに従って評価され、カスタム・タブのタブ・セキュリティーは無効になります。

デフォルト値

`True`

enableUniqueIdsAcrossTemplatizableObjects

説明

プログラム、プロジェクト、計画、請求書を含むテンプレートから作成されたすべてのオブジェクトにおいて、固有の内部 ID を使用するかどうかを決定します。

有効な値

- `True` に設定すると、テンプレートから作成されたすべてのオブジェクトにおいて固有の内部 ID を使用できます。この構成を使用すると、オブジェクト・タイプが異なる場合でも、同じテーブルをシステムが使用できるようになるため、オブジェクトをまたがるレポート作成が簡単になります。

- False に設定すると、テンプレートから作成されたすべてのオブジェクトにおいて固有の内部 ID を使用できなくなります。

デフォルト値

True

FMEnabled

説明

財務管理モジュールを有効または無効にします。これにより、製品に「アカウント」、「請求書」、および「予算」のタブが表示されるかどうかが決まります。

有効な値

True | False

デフォルト値

False

FMProjVendorEnabled

説明

プロジェクト明細項目のベンダー列の表示/非表示を指定するためのパラメーター。

有効な値

True | False

デフォルト値

False

FMPrgmVendorEnabled

説明

プログラム明細項目のベンダー列の表示/非表示を指定するためのパラメーター。

有効な値

True | False

デフォルト値

False

Marketing Operations | umoConfiguration | 承認

これらのプロパティーは、承認に関するオプションを指定します。

specifyDenyReasons

説明

承認を拒否する理由のカスタマイズ可能なリストを有効にします。有効にされると、管理者は「承認拒否理由」リストにオプションを設定してから、拒否理由を各ワークフロー・テンプレートおよびワークフローを定義する各プ

ロジェクト・テンプレートに関連付けます。承認または承認に含まれる項目を拒否するユーザーは、事前定義されたこれらの理由のいずれかを選択する必要があります。

有効な値

`True | False`

デフォルト値

`False`

10.0.0.2

approveWithChanges

説明

承認に関する「変更付きで承認」オプションを有効にします。有効にすると、ユーザーがプロジェクト・テンプレート、プロジェクト、または独立した承認で承認をセットアップする際に、デフォルトで 「承認者が変更付きで承認することを許可する」オプションが選択されます。**overrideApproveWithChanges** プロパティーを`True` に設定すると、「承認者が変更付きで承認することを許可する」オプションを編集できます。

承認のセットアップ時に「承認者が変更付きで承認することを許可する」オプションを選択すると、承認者は「変更付きで承認」オプションを選択してタスクを承認できます。

有効な値

`True | False`

デフォルト値

`True`

10.0.0.2

overrideApproveWithChanges

説明

ユーザーがプロジェクト・テンプレート、プロジェクト、または独立した承認で承認をセットアップする際に「承認者が変更付きで承認することを許可する」オプションのデフォルト設定を編集できるようにするには、`True` に設定します。デフォルト設定は、**approveWithChanges** プロパティーによって決まります。

有効な値

`True | False`

デフォルト値

`True`

Marketing Operations | umoConfiguration | templates

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operations におけるテンプレートについての情報を指定します。最良の結果を得るには、これらのパラメーターのデフォルト値を変更しないでください。

templatesDir

説明

すべてのプロジェクト・テンプレート定義を格納する XML ファイルを入れるためのディレクトリーを指定します。

絶対パスを使用してください。

デフォルト値

<IBM_IMS_Home>/*<MarketingOperations_Home>*/templates

assetTemplatesFile

説明

資産のテンプレートを定義する XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリー内にあることが必要です。

デフォルト値

asset_templates.xml

planTemplatesFile

説明

計画のテンプレートを定義する XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリー内にあることが必要です。

デフォルト値

plan_templates.xml

programTemplatesFile

説明

プログラムのテンプレートを定義する XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリー内にあることが必要です。

デフォルト値

program_templates.xml

projectTemplatesFile

説明

プロジェクトのテンプレートを定義する XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリー内にあることが必要です。

デフォルト値

project_templates.xml

invoiceTemplatesFile

説明

請求書のテンプレートを定義する XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリー内にあることが必要です。

デフォルト値

invoice_templates.xml

componentTemplatesFile

説明

カスタム・マーケティング・オブジェクト・タイプのテンプレートを定義する XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリー内にあることが必要です。

デフォルト値

component_templates.xml

metricsTemplateFile

説明

メトリックのテンプレートを定義する XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリー内にあることが必要です。

デフォルト値

metric_definition.xml

teamTemplatesFile

説明

チームのテンプレートを定義する XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリー内にあることが必要です。

デフォルト値

team_templates.xml

offerTemplatesFile

説明

オファーのテンプレートを定義する XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリー内にあることが必要です。

デフォルト値

uap_sys_default_offer_comp_type_templates.xml

Marketing Operations | umoConfiguration | attachmentFolders

これらのプロパティーは、添付ファイルのアップロードと保管に使用するディレクトリーを指定します。

uploadDir

説明

プロジェクトの添付ファイルが保管されるアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/projectattachments

planUploadDir

説明

計画の添付ファイルが保管されるアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/planattachments

programUploadDir

説明

プログラムの添付ファイルが保管されるアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/programattachments

componentUploadDir

説明

マーケティング・オブジェクトの添付ファイルが保管されるアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/componentattachments

taskUploadDir

説明

タスクの添付ファイルが保管されるアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/taskattachments

approvalUploadDir

説明

承認項目が保管されるアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/approvalitems

assetUploadDir

説明

資産が保管されるアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/assets

accountUploadDir

説明

アカウントの添付ファイルが保管されるアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/accountattachments

invoiceUploadDir

説明

請求書の添付ファイルが保管されるアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/invoiceattachments

graphicalRefUploadDir

説明

属性イメージが保管されるアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/graphicalrefimages

templateImageDir

説明

テンプレート・イメージが保管されるアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/images

recentDataDir

説明

各ユーザーの最近のデータ (直列化済み) を保管する一時ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/recentdata

workingAreaDir

説明

グリッドのインポート時にアップロードされた CSV ファイルを保管する一時ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/umotemp

managedListDir

説明

管理対象のリスト定義が保管されるアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/managedList

Marketing Operations | umoConfiguration | fileUpload

このカテゴリーのプロパティーは、ファイルのアップロードに関するオプションを指定します。

validateFileUpload

説明

アップロードされるファイルを検証する場合は True を選択し、アップロードされるファイルを検証しない場合は False を選択します。

allowedFileTypes

説明

アップロードを許可するファイルのタイプ。ファイルのタイプには、.doc、.ppt、.xls、.pdf、 .gif、.jpeg、.png、 .mpp を指定できます。

fileMaxSize

説明

アップロードできるファイルのサイズの上限。

Marketing Operations | umoConfiguration | E メール

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operations における E メール通知の送信に関する情報を指定します。

notifyEMailMonitorJavaMailHost

説明

E メール通知メール・サーバーの DNS ホスト名またはそのドット形式の IP アドレスのいずれかを指定するストリング (オプション)。 SMTP サーバーのマシン名または IP アドレスに設定されます。

セッション・パラメーターを使用する既存の JavaMail セッションを IBM Marketing Operations に提供しておらず、委任が「完了」とマークされている場合は、このパラメーターが必要です。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

notifyDefaultSenderEmailAddress

説明

有効な E メール・アドレスを設定します。システムは、通知 E メール・メッセージを送信するための有効な E メール・アドレスがない場合には、このアドレスに E メール・メッセージを送信します。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

notifySenderAddressOverride

説明

このパラメーターを使用して、通知における「返信」および「差出人」の E メール・アドレスの標準値を指定します。デフォルトでは、これらのアドレスには、イベント所有者の E メール・アドレスが設定されます。

デフォルト値

ブランク

Marketing Operations | umoConfiguration | markup

これらのプロパティーは、マークアップ・オプションを指定します。IBM Marketing Operations には、添付ファイルのコメントを作成するためのマークアップ・ツールが用意されています。Adobe Acrobat マークアップまたはネイティブ Marketing Operations マークアップのいずれかを使用できます。使用するオプションを構成するには、このカテゴリーのプロパティーを使用します。

markupServerType

説明

使用するマークアップ・オプションを決定します。

有効な値

- SOAP を指定すると、ユーザーは PDF 文書のマークアップを編集および表示できます。マークアップには Adobe Acrobat Professional が必要です。これを指定した場合、ユーザーはネイティブ Marketing Operations メソッドを使用して Web ブラウザーで以前に作成されたマークアップを表示できません。

  SOAP を指定する場合は、**markupServerURL** パラメーターも構成する必要があります。

  SOAP を指定する場合、Adobe Acrobat がインストールされているディレクトリーの JavaScripts サブディレクトリーにコピーされたカスタマイズ済み UMO_Markup_Collaboration.js を削除する必要があります。例: C:¥Program files (x86)¥Adobe¥Acrobat 10.0¥Acrobat¥Javascripts¥UMO_Markup_Collaboration.js。このファイルは不要になりました。
- MCM を指定すると、ユーザーが Web ブラウザーでマークアップを編集および表示できるネイティブ Marketing Operations マークアップ・メソッドを使用できます。これを指定した場合、ユーザーは、以前に Adobe Acrobat を使用して PDF で作成されたマークアップを編集することも表示することもできません。

- ブランクの場合、マークアップ機能は無効になり、「マークアップの表示/追加」リンクは表示されません。

デフォルト値

MCM

markupServerURL

説明

markupServerType = SOAP に依存します。

マークアップ・サーバーをホストするコンピューターの URL を設定します (Web アプリケーション・サーバーが listen に使用するポートの番号を含みます)。この URL には、完全修飾ホスト名が含まれていなければなりません。

HTTP または HTTPS プロトコルのロケーターを受け入れます。

デフォルト値

http://<*server*>:<*port*>/plan/services/collabService?wsdl

instantMarkupFileConversion

説明

True の場合、IBM Marketing Operations は、ユーザーがマークアップの項目を初めて開くときに PDF 添付資料からイメージへの変換を実行するのではなく、PDF 添付資料がアップロードされるとすぐにこの変換を実行します。

有効な値

True | False

デフォルト値

False

Marketing Operations | umoConfiguration | grid

これらのプロパティーは、グリッドに関するオプションを指定します。

gridmaxrow

説明

グリッドで取得される最大行数を定義する整数 (オプション)。デフォルトの -1 の場合は、すべての行が取得されます。

デフォルト値

-1

reloadRuleFile

説明

グリッド検証プラグインを再ロードする必要があるかどうかを示すブール・パラメーター (オプション)。

有効な値

`True | False`

デフォルト値

`True`

gridDataValidationClass

説明

カスタム・グリッド・データ検証クラスを指定するパラメーター (オプション)。指定しない場合は、デフォルトの組み込みプラグインがグリッド・データ検証に使用されます。

デフォルト値

ブランク

tvcDataImportFieldDelimiterCSV

説明

グリッドにインポートされたデータの解析に使用する区切り文字。デフォルトはコンマ (,) です。

デフォルト値

`,` (コンマ)

maximumFileSizeToImportCSVFile

説明

TVC のコンマ区切りデータをインポートするときにアップロードできる最大ファイル・サイズ (MB) を表します。

デフォルト値

`0` (無制限)

maximumRowsToBeDisplayedPerPageInGridView

説明

グリッド・ビューの 1 ページ当たりの表示行数を指定します。

有効な値

正整数

デフォルト値

`100`

griddataxsd

説明

グリッド・データ XSD ファイルの名前。

デフォルト値

`griddataschema.xsd`

gridpluginxsd

説明

グリッド・プラグイン XSD ファイルの名前。

デフォルト値

`gridplugin.xsd`

gridrulesxsd

説明

グリッド・ルール XSD ファイルの名前。

デフォルト値

`gridrules.xsd`

Marketing Operations | umoConfiguration | workflow

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operations におけるワークフローについてのオプションを指定します。

hideDetailedDateTime

説明

タスク・ページにおける詳細な日時のパラメーターの表示/非表示パラメーター (オプション)。

有効な値

`True | False`

デフォルト値

`False`

daysInPastRecentTask

説明

このパラメーターは、タスクが「最新」と見なされる期間を決めます。タスクが「アクティブ」であり、開始されてからの期間がこの日数未満であるか、またはタスクの「ターゲット終了日」が現在日付とこの日数前の日付との間にある場合、そのタスクは最新のタスクとして表示されます。

有効な値

正整数

デフォルト値

14 (日)

daysInFutureUpcomingTasks

説明

このパラメーターは、将来の何日間について次回のタスクを検索するかを決定します。タスクが次の **daysInFutureUpcomingTasks** の期間に開始する場合、または現在日付の前に終了しない場合、そのタスクは次回のタスクとなります。

有効な値

正整数

デフォルト値

14 (日)

beginningOfDay

説明

営業日の始業時間。このパラメーターは、小数形式の期間を使用したワークフローの日時の計算に使用されます。

有効な値

0 から 12 の整数

デフォルト値

9 (9 AM)

numberOfHoursPerDay

説明

1 日当たりの時間数。このパラメーターは、小数形式の期間を使用したワークフローの日時の計算に使用されます。

有効な値

1 から 24 の整数

デフォルト値

8 (時間)

mileStoneRowBGColor

説明

ワークフロー・タスクの背景色を定義します。この値を指定するには、色を表す 6 文字の 16 進コードの前に # 文字を挿入します。例えば、#0099CC と指定します。

デフォルト値

#DDDDDD

Marketing Operations | umoConfiguration | integrationServices

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operations 統合サービス・モジュールについての情報を指定します。統合サービス・モジュールは、Marketing Operations の機能を Web サービスとトリガーを使用して拡張します。

enableIntegrationServices

説明

統合サービス・モジュールを有効および無効にします。

有効な値

`True | False`

デフォルト値

`False`

integrationProcedureDefinitionPath

説明

カスタム・プロシージャー定義 XML ファイルへの絶対ファイル・パス (オプション)。

デフォルト値

[plan-home]/devkits/integration/examples/src/procedure/procedure-plugins.xml

integrationProcedureClasspathURL

説明

カスタム・プロシージャーのクラスパスへの URL。

デフォルト値

file:///*[plan-home]*/devkits/integration/examples/classes/

Marketing Operations | umoConfiguration | campaignIntegration

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign 統合用のオプションを指定します。

defaultCampaignPartition

説明

IBM Marketing Operations が IBM Campaign と統合されていると、このパラメーターは、プロジェクト・テンプレートに campaign-partition-id が定義されていない場合にデフォルトの Campaign パーティションを指定します。

デフォルト値

partition1

webServiceTimeoutInMilliseconds

説明

Web サービス統合 API 呼び出しに追加されます。このパラメーターは、Web サービス API 呼び出しのタイムアウトとして使用されます。

デフォルト値

1800000 ミリ秒 (30 分)

Marketing Operations | umoConfiguration | reports

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operations が使用するレポートについての情報を指定します。

reportsAnalysisSectionHome

説明

分析セクション・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

`/content/folder[@name='Affinium Plan']`

reportsAnalysisTabHome

説明

分析タブ・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

`/content/folder[@name='Affinium Plan - Object Specific Reports']`

cacheListOfReports

説明

このパラメーターは、オブジェクト・インスタンスの分析ページにおけるレポート・リストのキャッシングを有効にします。

有効な値

`True | False`

デフォルト値

`False`

Marketing Operations | umoConfiguration | invoiceRollup

このカテゴリーのプロパティーは、請求書ロールアップ用のオプションを指定します。

invoiceRollupMode

説明

ロールアップがどのように発生するかを指定します。許容値は以下のとおりです。

有効な値

- `immediate`: 請求書が支払い済みとマークされるたびに、ロールアップが発生します。
- `schedule`: スケジュールに基づいてロールアップが発生します。

  このパラメーターが `schedule` に設定されると、システムは以下のパラメーターを使用して、ロールアップ発生のタイミングを決定します。

  - `invoiceRollupScheduledStartTime`
  - `invoiceRollupScheduledPollPeriod`

デフォルト値

immediate

invoiceRollupScheduledStartTime

説明

invoiceRollupMode が schedule である場合、このパラメーターは以下のように使用されます。

- このパラメーターに値 (例えば、11:00 pm) が含まれている場合、その値は、スケジュールが開始するための開始時刻となります。
- このパラメーターが未定義の場合は、サーバーの始動時にロールアップ・スケジュールが開始します。

invoiceRollupMode が immediate である場合、このパラメーターは使用されません。

デフォルト値

11:00 pm

invoiceRollupScheduledPollPeriod

説明

invoiceRollupMode が schedule である場合、このパラメーターは、ロールアップが発生するためのポーリング期間 (秒) を指定します。

invoiceRollupMode が immediate である場合、このパラメーターは使用されません。

デフォルト値

3600 (1 時間)

Marketing Operations | umoConfiguration | database

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operations に使用するデータベースについての情報を指定します。

fileName

説明

JNDI 検索を使用してデータ・ソースをロードするためのファイルへのパス。

デフォルト値

plan_datasources.xml

sqlServerSchemaName

説明

使用するデータベース・スキーマを指定します。このパラメーターは、IBM Marketing Operations データベースに SQL Server を使用している場合にのみ適用されます。

デフォルト値

dbo

db2ServerSchemaName

重要: このパラメーター用に提供されたデフォルト値を変更することは勧められていません。

説明

IBM Marketing Software アプリケーションによって内部的に使用されます。

デフォルト値

ブランク

thresholdForUseOfSubSelects

説明

ここで指定したレコード数を超えると、(リスト・ページの) SQL の IN 節で、IN 節内の実際のエンティティー ID の代わりに副照会を使用する必要があります。このパラメーターを設定すると、大規模なアプリケーション・データ・セットが含まれる IBM Marketing Operations インストール済み環境のパフォーマンスが向上します。ベスト・プラクティスとして、パフォーマンスの問題が発生しない限りこの値を変更しないでください。このパラメーターがないか、あるいはコメント化されている場合、データベースは、しきい値が大きな値に設定されるかのように動作します。

デフォルト値

3000 (レコード)

commonDataAccessLayerFetchSize

説明

このパラメーターは、パフォーマンスに影響されやすい特定の重要な照会について、結果セットの取り出しサイズを指定します。

デフォルト値

0

commonDataAccessLayerMaxResultSetSize

説明

このパラメーターは、パフォーマンスに影響されやすい特定の重要な照会について、結果セットの最大サイズを指定します。

デフォルト値

-1

useDBSortForAllList

説明

このパラメーターは、すべての IBM Marketing Operations リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。特定のリストのページング動作をオーバーライドするには、別の **useDBSortFor<module>List** パラメーターを使用します。

有効な値

- True: データベースから一度に 1 ページのリスト・データを取得します。
- False: すべてのリスト・データをキャッシュに入れます。

デフォルト値

True

useDBSortForPlanList

説明

このパラメーターは、計画リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効な値

- True: データベースから一度に 1 ページのリスト・データを取得します。
- False: すべてのリスト・データをキャッシュに入れます。

デフォルト値

True

useDBSortForProjectList

説明

このパラメーターは、プロジェクト・リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効な値

- True: データベースから一度に 1 ページのリスト・データを取得します。
- False: すべてのリスト・データをキャッシュに入れます。

デフォルト値

True

useDBSortForTaskList

説明

このパラメーターは、タスク・リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効な値

- True: データベースから一度に 1 ページのリスト・データを取得します。
- False: すべてのリスト・データをキャッシュに入れます。

デフォルト値

True

useDBSortForProgramList

説明

このパラメーターは、プログラム・リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効な値

- True: データベースから一度に 1 ページのリスト・データを取得します。
- False: すべてのリスト・データをキャッシュに入れます。

デフォルト値

True

useDBSortForApprovalList

説明

このパラメーターは、承認リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効な値

- True: データベースから一度に 1 ページのリスト・データを取得します。
- False: すべてのリスト・データをキャッシュに入れます。

デフォルト値

True

useDBSortForInvoiceList

説明

このパラメーターは、請求書リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効な値

- True: データベースから一度に 1 ページのリスト・データを取得します。
- False: すべてのリスト・データをキャッシュに入れます。

デフォルト値

True

useDBSortForAlerts

説明

このパラメーターは、アラート・リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効な値

- True: データベースから一度に 1 ページのリスト・データを取得します。
- False: すべてのリスト・データをキャッシュに入れます。

デフォルト値

True

Marketing Operations | umoConfiguration | listingPages

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operations のページ上におけるマーケティング・オブジェクトやマーケティング・プロジェクトなどのリスト項目についての情報を指定します。

listItemsPerPage

説明

1 つのリスト・ページに表示される項目 (行) の数を指定します。この値は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

10

listPageGroupSize

説明

リスト・ページのリスト・ナビゲーターに表示されるページ番号のサイズを指定します。例えば、ページ 1 - 5 は、ページ・グループです。この値は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

5

maximumItemsToBeDisplayedInCalendar

説明

カレンダーに表示されるオブジェクト (計画、プログラム、プロジェクト、またはタスク) の最大数。このパラメーターは、ユーザーがカレンダー・ビューを選択した場合に表示するオブジェクトの数を制限します。数値 0 は、制限がないことを示します。

デフォルト値

0

listDisplayShowAll

説明

リスト・ページに「すべて表示」リンクを表示します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Marketing Operations | umoConfiguration | objectCodeLocking

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operations における計画、プログラム、プロジェクト、資産、およびマーケティング・オブジェクトのオブジェクト・ロックについての情報を指定します。

enablePersistentObjectLock

説明

IBM Marketing Operations がクラスター環境に配置されている場合は、このパラメーターを True に設定する必要があります。データベースにおいてオブジェクト・ロック情報は永続的です。

有効な値

True | False

デフォルト値

False

lockProjectCode

説明

ユーザーがプロジェクトの「サマリー」タブでプロジェクト・コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

有効な値

- True: ロックを有効にします。
- False: ロックを無効にします。

デフォルト値

True

lockProgramCode

説明

ユーザーがプログラムの「サマリー」タブでプログラム・コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

有効な値

- True: ロックを有効にします。
- False: ロックを無効にします。

デフォルト値

True

lockPlanCode

説明

ユーザーが計画の「計画サマリー」タブで計画コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

有効な値

- True: ロックを有効にします。
- False: ロックを無効にします。

デフォルト値

True

lockMarketingObjectCode

説明

ユーザーがマーケティング・オブジェクトの「サマリー」タブでマーケティング・オブジェクト・コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

有効な値

- True: ロックを有効にします。
- False: ロックを無効にします。

デフォルト値

True

lockAssetCode

説明

ユーザーが資産の「サマリー」タブで資産コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

有効な値

- True: ロックを有効にします。
- False: ロックを無効にします。

デフォルト値

True

Marketing Operations | umoConfiguration | thumbnailGeneration

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operations がサムネールを生成する方法とタイミングについての情報を指定します。

trueTypeFontDir

説明

True Type フォントが存在するディレクトリーを指定します。このパラメーターは、Aspose を使用する非 Windows オペレーティング・システムでサムネールを生成する場合には必須です。 Windows インストール済み環境の場合、このパラメーターはオプションです。

デフォルト値

ブランク

coreThreadPoolSize

説明

サムネール・ジェネレーター・スレッドのスレッド・プールに保持される永続スレッド数を指定します。

デフォルト値

5

maxThreadPoolSize

説明

サムネール・ジェネレーター・スレッドのスレッド・プールで許可される最大スレッド数を指定します。

デフォルト値

10

threadKeepAliveTime

説明

サムネール・ジェネレーター・スレッドのキープアライブ時間を構成するためのパラメーター。

デフォルト値

60

threadQueueSize

説明

サムネール・ジェネレーター・スレッドのスレッド・キュー・サイズを構成するためのパラメーター。

デフォルト値

20

disableThumbnailGeneration

説明

アップロードされた文書のためにサムネール・イメージを生成するかどうかを決めます。値 `True` は、サムネールの生成を有効にします。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

markupImgQuality

説明

レンダリングされるページに適用される拡大率またはズーム係数。

デフォルト値

1

Marketing Operations | umoConfiguration | スケジューラー | intraDay

このプロパティーは、対象日におけるスケジューラーの実行頻度を指定します。

schedulerPollPeriod

説明

バッチ・ジョブが、プロジェクトの正常性ステータスの実行を毎日計算する際の頻度を秒数で定義します。

注: 日次のバッチ・ジョブだけが、レポートで使用されるプロジェクトの正常性ステータスの履歴を更新します。

デフォルト値

60 (秒)

Marketing Operations | umoConfiguration | スケジューラー | daily

このプロパティーは、スケジューラーの毎日の開始時刻を指定します。

schedulerStartTime

説明

プロジェクトの正常性ステータスを計算するバッチ・ジョブの開始時刻を定義します。このジョブは、以下のことも行います。

- レポートで使用されるプロジェクトの正常性ステータスの履歴を更新します。
- E メール通知を配信登録しているユーザーへの配布を開始します。

注: システムがこのバッチ・ジョブを開始するのは、計算がまだ実行されていない場合だけです。ジョブが **intraDay** パラメーターとは異なる時刻に、そしてユーザーがこの計算を手動で要求する可能性の低い時刻に開始するように、このパラメーターを定義してください。

デフォルト値

11:00 pm

Marketing Operations | umoConfiguration | 通知

これらのプロパティーは、イベント・モニターについての情報を含む、IBM Marketing Operationsにおける通知に関する情報を指定します。

notifyPlanBaseURL

説明

IBM Marketing Operations 配置の URL (ホスト名とポート番号を含む)。Marketing Operations では、Marketing Operations 内の他の情報へのリンクを含む通知に、この URL が組み込まれます。

注: メール・クライアントと IBM Marketing Operations サーバーを同じサーバー上で実行している場合以外は、「localhost」をサーバー名として使用しないでください。

デフォルト値

`http://<server>:<port>/plan/affiniumplan.jsp`

notifyDelegateClassName

説明

サービスによってインスタンス化される委任実装の完全修飾 Java クラス名。このクラスは、`com.unicacorp.afc.service.IServiceImpl` インターフェースを実装する必要があります。指定しない場合は、デフォルトでローカル実装になります。

デフォルト値

ブランク

notifyIsDelegateComplete

説明

委任実装が完了したかどうかを示すブール・ストリング (オプション)。指定しない場合は、デフォルトで `True` に設定されます。

デフォルト値

`True`

有効な値

`True | False`

notifyEventMonitorStartTime

説明

IBM Marketing Operations の始動後、初めてイベント通知モニターの処理が開始される時刻を指定します。値の形式は、現行ロケールの `java.text.DateFormat` クラスのショート・バージョンに従ってください。例えば、米国英語ロケールの場合、有効なストリングとしては `11:45 pm` などが考えられます。

デフォルト値

ブランク (Marketing Operations の始動直後)。

notifyEventMonitorPollPeriod

説明

イベント・モニターがポーリングとポーリングの間にスリープするおおよその時間 (秒) を定義します。ポーリング期間とポーリング期間の間、イベントはイベントキューに累積されます。ポーリング期間が短いほど通知の処理が早く行われますが、システムのオーバーヘッドが大きくなる場合があります。既定値を削除して値をブランクのままにすると、ポーリング期間はデフォルトで短時間 (通常は 1 分未満) に設定されます。

デフォルト値

5 (秒)

notifyEventMonitorRemoveSize

説明

1 回でキューから削除するイベント数を指定します。 イベント・モニターは、イベント・キューからイベントを、この値で指定された数ずつキューが空になるまで削除します。

注: イベント処理のパフォーマンスを向上させるために、この値を 1 以外の数に設定することもできます。ただし、削除されたイベントが処理される前にサービス・ホストがダウンした場合にイベントが失われる恐れがあります。

デフォルト値

10

alertCountRefreshPeriodInSeconds

説明

アラート数に関するシステム全体のアラート数リフレッシュ期間 (秒) を指定します。この数は、ユーザーのログイン後にナビゲーション・バーの上部付近に表示されます。

注: マルチユーザー環境では、リフレッシュ期間を変更してポーリングを高速にすると、パフォーマンスに影響が出る場合があります。

デフォルト値

180 (3 分)

Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | E メール

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operationsにおける E メール通知についての情報を指定します。

notifyEMailMonitorStartTime

説明

IBM Marketing Operations の始動後、初めて E メール・モニターが処理を開始する時刻を指定します。値の形式は、現行ロケールの `java.text.DateFormat` クラスのショート・バージョンに従ってください。例えば、米国英語ロケールの場合、有効なストリングとしては `11:59 pm` などが考えられます。

デフォルト値

ブランク (IBM Marketing Operationsの始動直後)。

notifyEMailMonitorPollPeriod

説明

E メール・モニターがポーリングとポーリングの間にスリープするおおよその時間 (秒) を定義します。

注: イベントと同様に、ポーリング期間とポーリング期間の間、E メール・メッセージはキューに累積されます。ポーリング時間が短いほど E メール・メッセージが早く送信されますが、システムのオーバーヘッドが大きくなる場合があります。

デフォルト値

60 (秒)

notifyEMailMonitorJavaMailSession

説明

E メール通知に使用する、既存の初期化済み JavaMail セッションの JNDI 名。これが未指定であり、委任が「完了」とマークされている場合は、IBM Marketing Operations がセッションを作成できるように JavaMail ホスト・パラメーターを指定する必要があります。

デフォルト値

ブランク

notifyEMailMonitorJavaMailProtocol

説明

E メール通知に使用するメール・サーバー・トランスポート・プロトコルを指定します。

デフォルト値

smtp

notifyEMailMonitorRemoveSize

説明

1 回にキューから削除する E メール・メッセージ数を指定します。E メール・モニターは、E メール・キューからメッセージを、この値で指定された数ずつ削除し、これをキューが空になるまで続けます。

注: E メール処理のパフォーマンスを向上させるために、この値を 1 以外の数に設定することもできます。ただし、削除された E メール・メッセージが処理される前にサービス・ホストがダウンした場合、メッセージが失われる恐れがあります。

デフォルト値

10 (メッセージ)

notifyEMailMonitorMaximumResends

説明

最初の送信試行が失敗した E メール・メッセージの送信を試行する最大回数を指定します。送信が失敗した場合、E メールは、このパラメーターで許可される最大試行回数に到達するまでキューに戻されます。

例えば、**notifyEMailMonitorPollPeriod** が 60 秒ごとにポーリングするよう設定されているとします。 **notifyEMailMonitorMaximumResends** プロパティーを試行回数 60 に設定すると、E メール・モニターは失敗したメッセージをポーリングごと (つまり毎分) に 1 回、最大 1 時間、再試行を試みます。値 1440 (24x60) を設定した場合、E メール・モニターは、1 分間隔で最大 24 時間試行します。

デフォルト値

1 (試行)

showUserNameInEmailNotificationTitle

説明

IBM Marketing Operations 通知およびアラート・システムで、E メール通知の「差出人」フィールドにユーザー名を入れるかどうかを指定します。

注**:** この設定は、IBM Marketing Operations の通知およびアラート・システムによって送信される E メール・メッセージにのみ適用されます。

有効な値

- `True` : Marketing Operations はメッセージ・タイトルの後ろにユーザー名を追加し、その両方を E メールの「差出人」フィールドに表示します。
- `False` : Marketing Operations はメッセージ・タイトルのみを「差出人」フィールドに表示します。

デフォルト値

`False`

notifyEMailMonitorJavaMailDebug

説明

JavaMail デバッグ・モードを設定するかどうかを指定します。

有効な値

- `True`: JavaMail デバッグを有効にします。
- `False` : デバッグ・トレースを無効にします。

デフォルト値

`False`

Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | project

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operationsにおけるプロジェクト・アラームについての情報を指定します。

notifyProjectAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Marketing Operations の始動後、初めてプロジェクト・アラーム・モニターが実行される時刻を指定します。値の形式は、現行ロケールの `java.text.DateFormat` クラスのショート・バージョンに従ってください。例えば、米国英語ロケールの場合、有効なストリングとしては `11:59 pm` などが考えられます。デフォルトを削除し、値をブランクのままにすると、このモニターは、作成された直後に開始します。

デフォルト値

`10:00 pm`

notifyProjectAlarmMonitorPollPeriod

説明

プロジェクト・アラーム・モニターおよびプログラム・アラーム・モニターがポーリングとポーリングの間にスリープするおおよその時間 (秒) を定義します。

デフォルト値

ブランク (60 秒)

notifyProjectAlarmMonitorScheduledStartCondition

説明

プロジェクトの開始日の何日前に、 IBM Marketing Operations がユーザーに通知を送信するかを定義します。

注: この値が `-1` の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

`1` (日)

notifyProjectAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

プロジェクトの終了日の何日前に、 IBM Marketing Operations がユーザーに終了通知を送信するかを定義します。

注: この値が `-1` の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

`3` (日)

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledStartCondition

説明

タスクの開始日の何日前に、 IBM Marketing Operations がユーザー開始通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1 (日)

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledEndCondition

説明

タスクの終了日の何日前に、 IBM Marketing Operations がユーザーに終了通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日)

notifyProjectAlarmMonitorTaskLateCondition

説明

タスクの開始日の何日後に、IBM Marketing Operations がユーザーに、タスクが開始しなかったことを示す通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日)

notifyProjectAlarmMonitorTaskOverdueCondition

説明

タスクの終了日の何日後に、IBM Marketing Operations がユーザーに、タスクが終了しなかったことを示す通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日)

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledMilestoneCondition

説明

マイルストーン・タスクの開始日の何日前に、 IBM Marketing Operations が通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1 (日)

Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | projectRequest

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operationsにおけるプロジェクト要求アラームについての情報を指定します。

notifyRequestAlarmMonitorLateCondition

説明

要求が遅れているという通知を IBM Marketing Operations が送信する日数を定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日)

notifyRequestAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

要求の終了日の何日前に、 IBM Marketing Operations がユーザーに終了通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1 (日)

Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | program

このカテゴリーのプロパティーは、プログラム通知スケジュール用のオプションを指定します。

notifyProgramAlarmMonitorScheduledStartCondition

説明

プログラムの開始日の何日前に、 IBM Marketing Operations がユーザーに開始通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1 (日)

notifyProgramAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

プログラムの終了日の何日前に、 IBM Marketing Operations がユーザーに終了通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日)

Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | marketingObject

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operationsにおけるマーケティング・オブジェクト・アラームについての情報を指定します。

notifyComponentAlarmMonitorScheduledStartCondition

説明

マーケティング・オブジェクトの開始日の何日前に、 IBM Marketing Operations がユーザーに開始通知を送信するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1 (日)

notifyComponentAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

マーケティング・オブジェクトの終了日の何日前に、 IBM Marketing Operations がユーザーに終了通知を送信するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日)

Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | approval

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operationsにおける承認アラームについての情報を指定します。

notifyApprovalAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Marketing Operations の始動後、初めて承認アラーム・モニターが処理を開始する時刻を指定します。値の形式は、現行ロケールの `java.text.DateFormat` クラスのショート・バージョンに従ってください。例えば、米国英語ロケールの場合、有効なストリングとしては `11:59 pm` などが考えられます。デフォルトを削除し、この値をブランクのままにすると、モニターは、作成された直後に開始します。

注: 最良の結果を得るためには、アラーム・モニターの開始をオフピーク時間帯にし、それぞれのモニターの開始時刻をずらすように構成して、データ処理のロードを分散します。

デフォルト値

9:00 pm

notifyApprovalAlarmMonitorPollPeriod

説明

承認アラーム・モニターがポーリングとポーリングの間にスリープするおおよその時間 (秒) を指定します。

デフォルト値

ブランク (60 秒)

notifyApprovalAlarmMonitorLateCondition

説明

承認の開始日の何日後に、システムがユーザーに承認が遅れていることを通知し始めるかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日)

notifyApprovalAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

承認の終了日の何日前に、システムが終了通知をユーザーに送信し始めるかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1 (日)

Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | asset

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operations における資産アラームについての情報を指定します。

notifyAssetAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Marketing Operations の始動後、初めて資産アラーム・モニターが処理を開始する時刻を指定します。値の形式は、現行ロケールの java.text.DateFormat クラスのショート・バージョンに従ってください。例えば、米国英語ロケールの場合、有効なストリングとしては 11:59 pm な

どが考えられます。デフォルトを削除し、この値をブランクのままにすると、モニターは、作成された直後に開始します。

注: 最良の結果を得るためには、アラーム・モニターの開始をオフピーク時間帯にし、それぞれのモニターの開始時刻をずらすように構成して、データ処理のロードを分散します。

デフォルト値

`11:00 pm`

notifyAssetAlarmMonitorPollPeriod

説明

資産アラーム・モニターがポーリングとポーリングの間にスリープする時間 (秒) を指定します。

デフォルト値

ブランク (60 秒)

notifyAssetAlarmMonitorExpirationCondition

説明

資産が期限切れになる何日前に、IBM Marketing Operations がユーザーに対して資産がもうすぐ期限切れになることを通知するかを指定します。

注: この値が `-1` の場合、Marketing Operations は有効期限をチェックしません。

デフォルト値

`5` (日)

Marketing Operations | umoConfiguration | 通知 | invoice

これらのプロパティーは、IBM Marketing Operationsにおける請求書アラームについての情報を指定します。

notifyInvoiceAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Marketing Operations の始動後、初めて請求書アラーム・モニターが処理を開始する時刻を指定します。値の形式は、現行ロケールの `java.text.DateFormat` クラスのショート・バージョンに従ってください。例えば、米国英語ロケールの場合、有効なストリングとしては `11:59 pm` などが考えられます。デフォルトを削除し、値をブランクのままにすると、モニターは、作成された直後に開始します。

注: 最良の結果を得るためには、アラーム・モニターの開始をオフピーク時間帯にし、それぞれのモニターの開始時刻をずらすように構成して、データ処理のロードを分散します。

デフォルト値

`9:00 pm`

notifyInvoiceAlarmMonitorDueCondition

説明

期日の何日前に、IBM Marketing Operations がユーザーに対して請求書の期日が近づいていることを通知するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

5 (日)

Campaign 構成プロパティー

IBM Campaign の構成プロパティーは、「設定」 > 「構成」にあります。

キャンペーン

インストール環境でサポートされるロケールとコンポーネント・アプリケーションを指定するには、「設定」 > 「構成」を選択してから Campaign カテゴリーをクリックします。

currencyLocale

説明

currencyLocale プロパティーは、表示ロケールに関係なく Campaign Web アプリケーションでの通貨表示方法を制御するグローバル設定です。

重要: (複数ロケール機能が実装されていて、ユーザー指定のロケールに基づいて表示ロケールの変更が行われる場合など) 表示ロケールが変更されても、Campaign では通貨変換は行われません。ロケールを切り替える場合には注意が必要です。例えば、通貨額が US$10.00 などと表記される「英語 (米国)」から「フランス語」ロケールに変更する場合、ロケールと一緒に通貨記号を変更しても通貨額 (10,00) は変更されません。

デフォルト値

en_US

supportedLocales

説明

supportedLocales プロパティーは、Campaign でサポートするロケールまたは言語ロケールのペアを指定します。このプロパティーの値は、ユーザーが Campaign をインストールする際にインストーラーによって設定されます。例: de,en,fr,ja,es,ko,pt,it,zh,ru

デフォルト値

Campaign がローカライズされているすべての言語/ロケール。

defaultLocale

説明

defaultLocale プロパティーは、supportedLocales プロパティーで指定されたロケールのうち、Campaign のデフォルトの表示ロケールとするロケールを指定します。このプロパティーの値は、ユーザーが Campaign をインストールする際にインストーラーによって設定されます。

デフォルト値

en

acoInstalled

パス

説明

acoInstalled プロパティーは、Contact Optimization がインストールされているかどうかを指定します。

Contact Optimization がインストールされて構成されている場合には、この値を「**はい**」に設定し、Contact Optimization プロセスがフローチャートで表示されるようにします。値が「true」で Contact Optimization がインストールも構成もされていないと、プロセスは表示されますが、使用できません (ぼかし表示)。

デフォルト値

false

有効な値

false および true

collaborateInstalled

説明

collaborateInstalled プロパティーは、Distributed Marketing がインストールされているかどうかを指定します。Distributed Marketing がインストールされて構成されている場合、この値を「true」に設定し、Distributed Marketing 機能が Campaign ユーザー・インターフェースで表示されるようにします。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Campaign | collaborate

このカテゴリーのプロパティーは、Distributed Marketing 構成に関連します。

CollaborateIntegrationServicesURL

説明

CollaborateIntegrationServicesURL プロパティーは、Distributed Marketing のサーバーとポート番号を指定します。この URL は、ユーザーがフローチャートを Distributed Marketing に公開する際に Campaign によって使用されます。

デフォルト値

http://localhost:7001/collaborate/services/CollaborateIntegrationServices1.0

Campaign | navigation

このカテゴリーのプロパティーの中には内部的に使用されるため、変更すべきでないものがあります。

welcomePageURI

構成カテゴリー

Campaign|navigation

説明

welcomePageURI プロパティーは、IBM アプリケーションによって内部的に使用されます。Campaign 索引ページの Uniform Resource Identifier (URI) を指定します。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

seedName

構成カテゴリー

Campaign|navigation

説明

seedName プロパティーは、IBM アプリケーションによって内部的に使用されます。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

type

構成カテゴリー

Campaign|navigation

説明

type プロパティーは、IBM アプリケーションが内部的に使用します。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

httpPort

構成カテゴリー

`Campaign|navigation`

説明

このプロパティーは、Campaign Web アプリケーション・サーバーが使用するポートを指定します。Campaign インストールでデフォルト以外のポートを使用する場合、このプロパティーの値を編集する必要があります。

デフォルト値

7001

httpsPort

構成カテゴリー

`Campaign|navigation`

説明

SSL が構成されている場合、このプロパティーは、Campaign Web アプリケーション・サーバーがセキュア接続のために使用するポートを指定します。Campaign インストールでデフォルト以外のセキュア・ポートを使用する場合、このプロパティーの値を編集する必要があります。

デフォルト値

`7001`

serverURL

構成カテゴリー

`Campaign|navigation`

説明

`serverURL` プロパティーは、Campaign が使用する URL を指定します。Campaign インストールでデフォルト以外の URL を使用する場合、この値を次のように編集しなければなりません。

`http://`*`machine_name_or_IP_address:port_number/context-root`*

ユーザーが Chrome ブラウザーを使用して Campaign にアクセスする場合は、完全修飾ドメイン・ネーム (FQDN) を使用します。FQDN を使用しない場合は、Chrome ブラウザーで製品 URL にアクセスできません。

デフォルト値

`http://localhost:7001/Campaign`

logoutURL

構成カテゴリー

`Campaign|navigation`

説明

`logoutURL` プロパティーは、ユーザーがログアウト・リンクをクリックした場合に、登録されているアプリケーションのログアウト・ハンドラーを呼び出すために内部的に使用されます。この値は変更しないでください。

serverURLInternal

構成カテゴリー

`Campaign|navigation`

説明

`serverURLInternal` プロパティーは、SiteMinder を使用する場合の Campaign Web アプリケーションの URL を指定します。このプロパティーは、eMessage や Interact などの、他の IBM Marketing Software アプリケーションとの内部通信用にも使用されます。このプロパティーが空の場合、`serverURL` プロパティーの値が使用されます。内部アプリケーション通信を HTTP にして、外部通信を HTTPS にする必要がある場合には、このプロパティーを変更します。 SiteMinder を使用する場合には、この値を、Campaign Web アプリケーション・サーバーの URL に設定する必要があります。次のようにフォーマット設定します。

`http://`*`machine_name_or_IP_address:port_number/context-root`*

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

campaignDetailPageURI

構成カテゴリー

`Campaign|navigation`

説明

`campaignDetailPageURI` プロパティーは、IBM アプリケーションが内部的に使用します。Campaign 詳細設定ページの Uniform Resource Identifier (URI) を指定します。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

campaignDetails.do?id=

flowchartDetailPageURI

構成カテゴリー

`Campaign|navigation`

説明

`flowchartDetailPageURI` プロパティーは、特定のキャンペーンにあるフローチャートの詳細情報にナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

flowchartDetails.do?campaignID=&id=

schedulerEditPageURI

構成カテゴリー

`Campaign|navigation`

説明

このプロパティーは、「スケジューラー」ページにナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更しないでください。

デフォルト値

jsp/flowchart/scheduleOverride.jsp?taskID=

offerDetailPageURI

構成カテゴリー

`Campaign|navigation`

説明

`offerDetailPageURI` プロパティーは、特定のオファーの詳細情報にナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

offerDetails.do?id=

offerlistDetailPageURI

構成カテゴリー

`Campaign|navigation`

説明

`offerlistDetailPageURI` プロパティーは、特定のオファー・リストの詳細情報にナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

displayOfferList.do?offerListId=

mailingDetailPageURI

構成カテゴリー

`Campaign|navigation`

説明

このプロパティーは、eMessage のメーリングの詳細ページにナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

view/MailingDetails.do?mailingId=

optimizeDetailPageURI

構成カテゴリー

`Campaign|navigation`

説明

このプロパティーは、IBM Contact Optimization の詳細ページにナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更しないでください。

デフォルト値

optimize/sessionLinkClicked.do?optimizeSessionID=

optimizeSchedulerEditPageURI

構成カテゴリー

Campaign|navigation

説明

このプロパティーは、IBM Contact Optimization スケジューラー編集ページにナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

optimize/editOptimizeSchedule.do?taskID=

displayName

構成カテゴリー

Campaign|navigation

説明

displayName プロパティーは、それぞれの IBM 製品の GUI に表示されるドロップダウン・メニューの Campaign リンクに使用されるリンク・テキストを指定します。

デフォルト値

Campaign

Campaign | caching

IBM Campaign ユーザー・インターフェースでの応答時間を向上させるために、オファーなどの特定のオブジェクトは Web アプリケーション・サーバーでキャッシュされます。 Campaign|キャッシング (caching) 構成プロパティーは、キャッシュに入れられたデータが保持される時間の長さを指定します。値が小さいほど、キャッシュが更新される頻度が高くなりますが、Web サーバーとデータベースの両方の処理リソースを消費するので、パフォーマンスに悪影響が及ぶ可能性があります。

offerTemplateDataTTLSeconds

構成カテゴリー

Campaign|キャッシング (caching)

説明

offerTemplateDataTTLSeconds プロパティーは、システムがオファー・テンプレートのキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

campaignDataTTLSeconds

構成カテゴリー

Campaign|キャッシング (caching)

説明

campaignDataTTLSeconds プロパティーは、システムが Campaign キャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

sessionDataTTLSeconds

構成カテゴリー

Campaign|キャッシング (caching)

説明

sessionDataTTLSeconds プロパティーは、システムがセッション・キャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

folderTreeDataTTLSeconds

構成カテゴリー

Campaign|キャッシング (caching)

説明

folderTreeDataTTLSeconds プロパティーは、システムがフォルダー・ツリーのキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

attributeDataTTLSeconds

構成カテゴリー

Campaign|キャッシング (caching)

説明

attributeDataTTLSeconds プロパティーは、システムがオファー属性のキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

initiativeDataTTLSeconds

構成カテゴリー

Campaign|キャッシング (caching)

説明

initiativeDataTTLSeconds プロパティーは、システムがイニシアチブ・キャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

offerDataTTLSeconds

構成カテゴリー

Campaign|キャッシング (caching)

説明

offerDataTTLSeconds プロパティーは、システムがオファーのキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

segmentDataTTLSeconds

構成カテゴリー

Campaign|キャッシング (caching)

説明

segmentDataTTLSeconds プロパティーは、システムがセグメントのキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

Campaign | partitions

このカテゴリーには、IBM Campaign パーティション (パーティション 1 という名前のデフォルトのパーティションも含みます) を構成するためのプロパティーが含まれています。

それぞれの Campaign パーティションに対して 1 つのカテゴリーを作成する必要があります。このセクションでは、partition[n] カテゴリーのプロパティーについて取り上げます。このカテゴリーは、Campaign で構成するすべてのパーティションに適用されます。

Campaign | partitions | partition[n] | eMessage

このカテゴリーのプロパティーを定義することで、宛先リストの特性を定義し、IBM Marketing Software Hosted Services にリストをアップロードするリソースの場所を指定します。

eMessagePluginJarFile

説明

宛先リスト・アップローダー (RLU) として作動するファイルの場所の絶対パスです。 Campaign に対するこのプラグインによって、IBM がホストするリモート・サービスに OLT データと関連メタデータがアップロードされます。指定する場所は、Campaign Web アプリケーション・サーバーをホストするコンピューターのファイル・システムにあるローカル・ディレクトリーの絶対パスでなければなりません。

IBM インストーラーを実行すると、デフォルトのパーティション用のこの設定がインストーラーによって自動的に取り込まれます。その他のパーティションの場合、このプロパティーは手動で構成しなければなりません。eMessage のインストールごとに RLU は 1 つしか存在しないので、すべてのパーティションに関して RLU に同じ場所を指定する必要があります。

IBM で指示されない限り、この設定は変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

Campaign Web サーバーをインストールした場所のローカル・ディレクトリーの絶対パスです。

defaultSeedInterval

説明

`defaultSeedType` が `Distribute list` の場合におけるシード・メッセージ間のメッセージ数。

デフォルト値

`1000`

defaultSeedType

説明

eMessage がシード・アドレスを宛先リストに挿入するために使用するデフォルトのメソッドです。

デフォルト値

`Distribute IDS`

有効な値

- `Distribute IDS` - 宛先リストのサイズと有効なシード・アドレスの数に基づいて ID を均等に配布し、シード・アドレスを宛先リスト全体で均等な間隔に挿入します。

- `Distribute list` - メイン・リストの `defaultSeedInterval` ID すべてにシード・アドレスを挿入します。宛先リストに指定の間隔で、有効なシード・アドレスのリスト全体を挿入します。挿入点の間隔を指定する必要があります。

oltTableNamePrefix

説明

出力リスト表の生成済みスキーマで使用します。このパラメーターを定義する必要があります。

デフォルト値

OLT

有効な値

接頭部に含めることができるのは 8 文字までの英数字または下線文字で、先頭は文字でなければなりません。

oltDimTableSupport

説明

この構成パラメーターによって制御される機能は、eMessage スキーマで作成された出力リスト表 (OLT) にディメンション表を追加する機能です。ディメンション表は、E メールの E メール・メッセージにデータ表を作成する拡張スクリプトを使用するのに必要となります。

デフォルトの設定は、`False` です。マーケティング担当者が eMessage プロセスを使用して宛先リストを定義する際にディメンション表を作成できるように、このプロパティーを `True` に設定する必要があります。データ・テーブルの作成と、E メールの拡張スクリプトの処理に関して詳しくは、「*IBM eMessage* ユーザー・ガイド」を参照してください。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Campaign | partitions | partition[n] | eMessage | contactAndResponseHistTracking

このカテゴリーのプロパティーを使用して、現行パーティションに対して IBM Campaign との eMessage オファー統合を構成します。

etlEnabled

説明

Campaign は独自の ETL プロセスを使用して、eMessage トラッキング・テーブルから Campaign コンタクト履歴テーブルおよびレスポンス履歴テーブルへのオファー・レスポンス・データの抽出、変換、ロードを行います。

ETL プロセスは必要なテーブル全体にわたって情報を調整します。これには、UA_UsrResponseType (Campaign レスポンス・タイプ) および UA_RespTypeMapping (Campaign と eMessage の間のレスポンス・タイプのマッピング) が含まれます。

値を Yes に設定することで、eMessage オファー・コンタクトおよびレスポンス履歴に関する情報が Campaign と eMessage の間で確実に調整されます。例えば、E メール・レスポンス・データは Campaign レポートに組み込まれます。

注: このパーティションまたは ETL プロセスが実行されないようにするには、Campaign | partitions | partition[n] | server | internal | eMessageInstalled を Yes に設定する必要もあります。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

runOnceADay

説明

ETL プロセスを 1 日に 1 回のみ実行するかどうかを示します。

値が Yes の場合: **startTime** を指定する必要があります。これにより、すべてのレコードが処理されるまで ETL ジョブが実行されます。そして **sleepIntervalInMinutes** は無視されます。

値が No の場合: Campaign Web サーバーが始動するとすぐに ETL ジョブが開始されます。すべてのレコードの処理が完了した後、ETL ジョブは停止し、**sleepIntervalInMinutes** で指定した時間待機します。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

batchSize

説明

ETL プロセスはこのパラメーターを使用して、RCT からローカル eMessage システム・テーブルにダウンロードされたレコードを取り出します。値が大きいとパフォーマンスに影響を与える可能性があるため、使用可能な値のリストは、以下に示す有効な値に制限されています。大量のレコードを事前に予期している場合、**sleepIntervalInMinutes** とともに **batchSize** を調整して、定期的な間隔でレコードを処理するようにしてください。

デフォルト値

100

有効な値

100 | 200 | 500 | 1000

sleepIntervalInMinutes

説明

ETL ジョブ間の間隔を分単位で指定します。このオプションにより、ジョブ完了後の待機時間が決まります。 ETL プロセスは、次のジョブを開始する前に、この時間待機します。複数のジョブを同期的に実行することができ、1 つのパーティションに複数の ETL ジョブを置くこともできます。

runOnceADay が `Yes` の場合、スリープ間隔を設定できません。

デフォルト値

`60`

有効な値

正整数

startTime

説明

ETL ジョブを開始する時刻を指定します。開始時刻の指定には、英語ロケールの形式を使用する必要があります。

デフォルト値

`12:00:00 AM`

有効な値

`hh:mm:ss AM/PM` という形式の、任意の有効な時刻

notificationScript

説明

ETL ジョブが実行された後に毎回実行される、オプションの実行可能ファイルまたはスクリプト・ファイル。例えば、モニター目的で、ETL ジョブが実行されるたびに、その成功または失敗が通知されるようにすることもできます。特定のパーティションの ETL ジョブが実行を完了するたびに、通知スクリプトが実行されます。

このスクリプトに渡されるパラメーターは固定されており、変更できません。スクリプトでは、以下のパラメーターを使用できます。

- etlStart: ETL の開始時刻 (ミリ秒単位)。
- etlEnd ETL の終了時刻 (ミリ秒単位)。
- totalCHRecords: 処理されたコンタクト・レコードの総数。
- totalRHRecords: 処理されたレスポンス履歴レコードの総数。
- executionStatus: ETL の実行状況。値は 1 (失敗) または 0 (成功) のいずれか。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

Campaign サーバーが読み取り権限または実行権限でアクセスできる任意の有効なパス。例: `D:¥myscripts¥scriptname.exe`

Campaign | partitions | partition[n] | Engage

これらのプロパティーは、IBM Campaign と IBM Engage を統合した場合に、両製品の間の認証とデータ交換を制御します。

これらのプロパティーを使用するには、「設定」 > 「構成」を選択します。Campaign のインストール済み環境に複数のパーティションがある場合は、統合を使用するパーティションごとにこれらのプロパティーを設定します。

Service URL

構成カテゴリー

Campaign | partitions | partition[n] | Engage

説明

「サービス URL (Service URL)」は、Campaign が IBM Engage アプリケーションにアクセスできる URL を示します。この値は、Engage 組織の管理者から提供してもらう必要があります。

デフォルト値

<none>

例 `https://engageapi.abc01.com/`

OAuth URL Suffix

構成カテゴリー

Campaign | partitions | partition[n] | Engage

説明

「OAuth URL Suffix」は、Engage API の認証トークンを指定します。

デフォルト値

oauth/token

API URL Suffix

構成カテゴリー

Campaign | partitions | partition[n] | Engage

説明

この「API URL Suffix」に XMLAPI を設定すると、Campaign が Engage XML API を使用するようになります。これは、デフォルト値の設定にしておくことがベスト・プラクティスです。

デフォルト値

XMLAPI

Platform User with Data Sources for Engage Credentials

構成カテゴリー

Campaign | partitions | partition[n] | Engage

説明

「Platform User with Data Sources for Engage Credentials」は、IBM Engage サーバーへの接続が許可されている IBM Marketing Platform ユーザー・アカウントの名前を示します。このユーザー・アカウントは、Engage 資格情報を提供するデータ・ソースを持っています。通常は、asm_admin を使用します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

Engage 統合のための資格情報のデータ・ソースを持つ IBM Marketing Platform ユーザー・アカウント。

Data Source for Client ID

構成カテゴリー

Campaign | partitions | partition[n] | Engage

説明

「Data Source for Client ID」値は、IBM Engage サーバーに接続するユーザー・アカウント (**Platform User with Data Sources for Engage Credentials**) 用に作成された Engage クライアント ID のデータ・ソース名と正確に一致する必要があります。言い換えると、この値は、IBM Marketing Platform ユーザーのデータ・ソースとしてセットアップされたものと一致する必要があります。これは、デフォルト値の設定にしておくことがベスト・プラクティスです。

デフォルト値

ENGAGE_CLIENT_ID_DS

クライアント秘密鍵のデータ・ソース (Data Source for Client Secret)

構成カテゴリー

Campaign | partitions | partition[n] | Engage

説明

「Data Source for Client Secret」の値は、IBM Engage サーバーに接続するユーザー・アカウント (**Platform User with Data Sources for Engage Credentials**) 用に作成された Engage クライアント秘密鍵のデータ・ソース名と正確に一致する必要があります。これは、デフォルト値の設定にしておくことがベスト・プラクティスです。

デフォルト値

ENGAGE_CLIENT_SECRET_DS

Data Source for Client Refresh Token

構成カテゴリー

Campaign | partitions | partition[n] | Engage

説明

「Data Source for Client Refresh Token」 値は、IBM Engage サーバーに接続するユーザー・アカウント(**Platform User with Data Sources for Engage Credentials**) 用に作成された Engage クライアント・リフレッシュ・トークンのデータ・ソース名と正確に一致する必要があります。これは、デフォルト値の設定にしておくことがベスト・プラクティスです。

デフォルト値

ENGAGE_CLIENT_REF_TOK_DS

Data Source for File Transfer Credentials

構成カテゴリー

Campaign | partitions | partition[n] | Engage

説明

「Data Source for File Transfer Credentials」は、Campaign と Engage の間の FTP 通信用の資格情報を提供するデータ・ソースの名前を示します。この値は、IBM Engage サーバーに接続するユーザー・アカウント (**Platform User with Data Sources for Engage Credentials**) 用に作成された Engage FTP データ・ソースの名前と正確に一致する必要があります。これは、デフォルト値の設定にしておくことがベスト・プラクティスです。

デフォルト値

ENGAGE_FTP_DS

Host Name for File Transfer

構成カテゴリー

Campaign | partitions | partition[n] | Engage

説明

「Host Name for File Transfer」は、Campaign がコンタクト・リストを TSV 形式でアップロードする Engage FTP サーバーのホスト名を示します。このファイルは、コンタクト・リストにアップロードされた後、自動的に削除されます。

デフォルト値

<none>

有効な値

IBM Marketing Cloud の FTP アドレスのリストに含まれている有効なアドレス: http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSTSRG/Setting_up_an_FTP_or_SFTP_account.html?lang=en。例: `transfer2.silverpop.com`

Port Number for File Transfer

構成カテゴリー

Campaign | partitions | partition[n] | Engage

説明

「Port Number for File Transfer」は、「**Host Name for File Transfer**」で指定した FTP サーバーのポート番号を示します。

デフォルト値
22

有効な値
有効な FTP ポート番号

Use proxy for ServiceURL

説明 ServiceURL にプロキシーを使用するかどうかを決定します。 「はい」を選択すると、接続でプロキシー・サーバーが使用されます。プロキシー・サーバーの詳細は、「Campaign」>「proxy」の下で構成できます。 「いいえ」を選択すると、Engage への接続にプロキシー・サーバーは使用されません。

デフォルト値
いいえ

有効な値
はい、いいえ

Use proxy for FTP

説明 FTP にプロキシーを使用するかどうかを決定します。 「はい」を選択すると、Engage FTP サーバーへの接続でプロキシー・サーバーが使用されます。プロキシー・サーバーの詳細は、「Campaign」>「proxy」の下で構成できます。 「いいえ」を選択すると、Engage FTP サーバーへの接続にプロキシー・サーバーは使用されません。

デフォルト値
いいえ

有効な値
はい、いいえ

allowableFailurePercentage

説明

キャンペーン・コンタクト・リストが Engage で処理されるときに何らかの理由でコンタクトの処理に失敗すると、Campaign にエラーが返されます。 `allowableFailurePercentage` プロパティーを使用すると、キャンペーン・プロセスが失敗になるまでにレコード処理の失敗が許容されるパーセンテージを指定できます。失敗したレコードのパーセンテージが、構成した `allowableFailurePercentage` を超えると、プロセスは失敗します。

失敗したレコードのパーセンテージが、構成した `allowableFailurePercentage` 以下の場合、プロセスは失敗しません。重複したレコードは、有効なレコードと見なされるため、プロセス・ボックスの `allowableFailurePercentage` に影響を与えません。有効なレコードはすべて Engage にインポートされます。

失敗したレコードのパーセンテージは、`([TOTAL_ROWS - TOTAL_VALID]/TOTAL_ROWS) *100` として計算されます。

プロセスの警告とエラーは、`ImportErrors` ログ・ファイルに記録されます。このファイルは定期的に削除できます。 `ImportErrors` ログ・ファイルは `<Campaign_home>/logs` フォルダーにあります。

デフォルト値
0

有効な値
0 から 100 までの整数。

Campaign | partitions | partition[n] | Engage | contactAndResponseHistTracking

これらのプロパティーは、UBX からダウンロードされたイベントを Campaign 履歴テーブルに ETL する処理を指定します。

これらのプロパティーを使用するには、「設定」 > 「構成」を選択します。Campaign のインストール済み環境に複数のパーティションがある場合は、統合を使用するパーティションごとにこれらのプロパティーを設定します。

etlEnabled

説明
イベント・テーブルから Campaign 履歴テーブルへの ETL データ転送を有効にするかどうかを決定します。

デフォルト値
いいえ

有効な値
はい、いいえ

runOnceADay

説明
ETL を 1 日に 1 回実行するかどうかを決定します。sleepIntervalInMinutes プロパティーを指定すると、繰り返し実行することができます。 *runOnceADay* を「はい」に設定した場合は、ETL が 1 日に 1 回、指定した時刻に実行されます。

有効な値
はい、いいえ

batchSize

説明
1 回の ETL サイクルで処理されるレコード数。

デフォルト値
100

有効な値
100、200、500、1000、10000、100000

sleepIntervalInMinutes

説明
もう一度 ETL を実行するまで待機する分数を指定します。この値は、runOnceADay を「いいえ」に設定した場合に使用します。

デフォルト値
60

有効な値
正整数。

startTime

説明　runOnceADay を「はい」に設定した場合は、このプロパティーで ETL の実行開始時刻を指定します。

デフォルト値

`12:00:00 AM`

有効な値

`hh:mm:ss AM/PM` という形式の、任意の有効な時刻。

notificationScript

説明　ETL の実行が完了した後に実行する任意のスクリプトを入力します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

Campaign サーバーが読み取り権限または実行権限でアクセスできる任意の有効なパス。例: `D:¥myscripts¥scriptname.exe`

Campaign | partitions | partition[n] | UBX

これらのプロパティーは、IBM Campaign、IBM Engage、および IBM UBX が統合されている場合に、それらの製品間の認証とデータ交換を制御します。

これらのプロパティーを使用するには、「設定」 > 「構成」を選択します。Campaign のインストール済み環境に複数のパーティションがある場合は、統合を使用するパーティションごとにこれらのプロパティーを設定します。

API URL

説明　UBX サーバー API URL を指定します。

UBX エンドポイント許可キーのデータ・ソース (Data Source for UBX Endpoint Authorization key)

説明　Campaign の登録済みエンドポイントの許可キーが含まれているデータ・ソース名を指定します。例えば、`UBX_DS`。

Platform User with Data Sources for UBX Credentials

説明　構成プロパティー「**Data Source for UBX Endpoint Authorization key**」で指定した名前のデータ・ソースが含まれている Marketing Platform ユーザー名を指定します。

Use proxy for API URL

説明　UBX 接続にプロキシー・サーバーを使用する場合に決めます。 「はい」を選択した場合は、プロキシー・サーバーの詳細を「Campaign」>「proxy」の下で構成します。

Campaign | partitions | partition[n] | UBX | Event Download Schedule

これらのプロパティーは、イベントを UBX から Campaign にダウンロードする時刻を指定します。

これらのプロパティーを使用するには、「設定」 > 「構成」を選択します。Campaign のインストール済み環境に複数のパーティションがある場合は、統合を使用するパーティションごとにこれらのプロパティーを設定します。

Event Download Enabled

説明　UBX のイベントを Campaign システム・スキーマのイベント・テーブルにダウンロードするかどうかを決定します。

デフォルト値
　いいえ

有効な値
　はい、いいえ

runOnceADay

説明　ダウンロードを日次で行うかどうかを決定します。 sleepIntervalInMinutes プロパティーを指定すると、繰り返し実行することができます。

sleepIntervalInMinutes

説明　もう一度ダウンロードを実行するまで待機する分数を指定します。この値は、runOnceADay を「いいえ」に設定した場合に使用します。

startTime

説明　runOnceADay を「はい」に設定した場合は、このプロパティーでイベントのダウンロードの開始時刻を指定します。

Campaign | partitions | partition[n] | Coremetrics

このカテゴリーのプロパティーは、選択したパーティションの Digital Analytics と Campaign の統合設定を指定します。

Campaign インストール済み環境に複数のパーティションが存在する場合、影響が及ぶようにするパーティションごとにこれらのプロパティーを設定します。これらのプロパティーを有効にするには、 (`partition | partition[n] | server | internal` の下で) そのパーティションの `UC_CM_integration` を `Yes` に設定する必要があります。

ServiceURL

説明

　`ServiceURL` は、Digital Analytics と Campaign の間の統合点となる Digital Analytics 統合サービスの場所を指定します。 https のデフォルトのポートは 443 である点にご注意ください。

デフォルト値

`https://export.coremetrics.com/eb/segmentapi/1.0/api.do`

有効な値

このリリースでサポートされる値は、上記のデフォルト値のみです。

CoremetricsKey

説明

Campaign では、`CoreMetricsKey` を使用して、Digital Analytics からエクスポートされた ID を、Campaign の対応するオーディエンス ID にマップします。このプロパティーに定義される値は、変換テーブルで使用される値と厳密に一致する必要があります。

デフォルト値

`registrationid`

有効な値

このリリースでサポートされる値は、`registrationid` のみです。

ClientID

説明

この値を、お客様の会社に割り当てられる固有の Digital Analytics クライアント ID に設定します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

TranslationTableName

説明

Digital Analytics キーを Campaign オーディエンス ID に変換するために使用される変換テーブルの名前を指定します。例えば、`Cam_CM_Trans_Table` のようにします。テーブル名を指定しない場合、入力として Digital Analytics セグメントを使用するフローチャートをユーザーが実行すると、エラーが発生します。テーブル名がなければ、Campaign は製品同士の間で ID をマップする方法が分からないためです。

注: 変換テーブルをマップまたは再マップするとき、テーブル定義ダイアログで割り当てられる「**IBM** テーブル名」は、ここで定義された `TranslationTableName` と厳密に (大/小文字も含めて) 一致する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

ASMUserForCredentials

説明

`ASMUserForCredentials` プロパティーは、どの IBM Marketing Software アカウントが Digital Analytics 統合サービスにアクセスできるかを指定します。追加情報については、下記を参照してください。

値が指定されない場合、Campaign は、データ・ソースとして ASMDatasourceForCredentials の値が指定されているかどうかを確認するために、現在ログインしているユーザーのアカウントを検査します。指定されている場合には、アクセスが許可されます。指定されていない場合には、アクセスは拒否されます。

デフォルト値

asm_admin

ASMDataSourceForCredentials

説明

ASMDataSourceForCredentials プロパティーは、**ASMUserForCredentials** 設定で指定された Marketing Platform アカウントに割り当てられるデータ・ソースを指定します。デフォルトは UC_CM_ACCESS です。この「資格情報のデータ・ソース」は、統合サービスにアクセスできるようにする資格情報を格納するために Marketing Platform が使用するメカニズムです。

UC_CM_ACCESS のデフォルト値は指定されていますが、その名前のデータ・ソースは提供されていませんし、その名前を使用する必要があるわけでもありません。

重要: 「設定」>「ユーザー」を選択し、ASMUserForCredentials で指定されたユーザーを選択し、「データ・ソースの編集」リンクをクリックしてから、ここで定義された値と名前が厳密に一致する新しいデータ・ソース (UC_CM_ACCESS など) を追加する必要があります。「データ・ソース・ログイン」と「データ・ソース・パスワード」には、Digital Analytics クライアント ID に関連付けされた資格情報を使用します。データ・ソース、ユーザー・アカウント、およびセキュリティーについては、「*IBM Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。

デフォルト値

UC_CM_ACCESS

関連タスク:

140 ページの『次のステップ』

Campaign | partitions | partition[n] | reports

Campaign | partitions | partition[n] | reports プロパティーは、さまざまなタイプのレポートのフォルダーを定義します。

offerAnalysisTabCachedFolder

説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上にリストされる満杯の (拡張された) オファー・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific
Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']
```

segmentAnalysisTabOnDemandFolder

説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、セグメントの「分析」タブにリストされるセグメント・レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific
Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']
```

offerAnalysisTabOnDemandFolder

説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、オファーの「分析」タブにリストされるオファー・レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific
Reports']/folder[@name='offer']
```

segmentAnalysisTabCachedFolder

説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上にリストされる満杯の (拡張された) セグメント・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific
Reports']/folder[@name='segment']
```

analysisSectionFolder

説明

analysisSectionFolder プロパティーは、レポート仕様を格納するルート・フォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']
```

campaignAnalysisTabOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、キャンペーンの「分析」タブにリストされるキャンペーン・レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']

campaignAnalysisTabCachedFolder

説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上にリストされる満杯の (拡張された) キャンペーン・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティーは、キャンペーンの「分析」タブにリストされる eMessage レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage Reports']

campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

Interact レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールする場合のみ適用可能です。

interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

説明

「対話式チャネル」分析タブ・レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='interactive channel']

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールする場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | validation

Campaign に同梱されている検証プラグイン開発キット (PDK) を使用すると、サード・パーティーはカスタム検証ロジックを開発し、Campaign で使用することができます。 partition[n] > validation カテゴリーのプロパティーは、カスタム検証プログラムのクラスパスとクラス名、さらにはオプションの構成ストリングを指定します。

validationClass

説明

`validationClass` プロパティーは、Campaign における検証で使用するクラス名を指定します。クラスのパスは、`validationClasspath` プロパティーで指定します。クラスは、パッケージ名で完全修飾する必要があります。

以下に例を示します。

`com.unica.campaign.core.validation.samples.SimpleCampaignValidator`

サンプル・コードの `SimpleCampaignValidator` クラスであることを示しています。

このプロパティーはデフォルトでは未定義で、Campaign ではカスタム検証は行われません。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

validationConfigString

説明

`validationConfigString` プロパティーは、Campaign が検証プラグインをロードする際にそのプラグインに渡す構成ストリングを指定します。使用する構成ストリングは、使用するプラグインによって異なる可能性があります。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

validationClasspath

説明

`validationClasspath` プロパティーは、Campaign におけるカスタム検証で使用するクラスのパスを指定します。

- 絶対パスか相対パスのいずれかを使用します。相対パスである場合、Campaign を実行しているアプリケーション・サーバーによって動作が

異なります。 WebLogic では、ドメイン作業ディレクトリーへのパスが使用されます。このパスは、デフォルトでは `c:¥bea¥user_projects¥domains¥mydomain` です。

- パスの末尾がスラッシュ (UNIX の場合には /、Windows の場合には円記号 ¥) になっていると、Campaign では、使用する必要のある Java プラグイン・クラスの場所を指すと見なされます。
- パスの末尾がスラッシュでないと、Campaign では、Java クラスが含まれる .jar ファイルの名前と見なされます。例えば、`/<CAMPAIGN_HOME>/devkits/validation/lib/validator.jar` という値は、UNIX プラットフォーム上のパスで、プラグイン開発者キットにある JAR ファイルを指します。

このプロパティーはデフォルトでは未定義で、このプロパティーは無視されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | audienceLevels | audienceLevel

このカテゴリーのプロパティーは編集しないでください。これらのプロパティーは、ユーザーが Campaign の「管理」ページでオーディエンス・レベルを作成する時に、作成され、設定されます。

numFields

説明

オーディエンス・レベルのフィールド数を示すプロパティーです。このプロパティーは編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

audienceName

説明

オーディエンス名を示すプロパティーです。このプロパティーは編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | audienceLevels | audienceLevel | field[n]

このカテゴリーのプロパティーは、オーディエンス・レベル・フィールドを定義します。これらのプロパティーは、Campaign の「管理」ページでユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このカテゴリーのプロパティーは編集しないようにしてください。

type

説明

partition[n] > audienceLevels > audienceLevel > field[n] > type プロパティーは、Campaign の「管理」ページでユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパティーは編集しないようにしてください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

名前

説明

partition[n] > audienceLevels > audienceLevel > field[n] > name プロパティーは、Campaign の「管理」ページでユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパティーは編集しないようにしてください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | dataSources

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources のプロパティーは、IBM Campaign がデータベース (指定されたパーティションの独自のシステム表も含む) と対話する方法を決定します。

これらのプロパティーは、IBM Campaign からアクセス可能なデータベース、および照会の構成方法に関する多くの面を制御します。

IBM Campaign で追加する各データ・ソースのカテゴリーが Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|<data-source-name> に表示されます。

注**:** IBM Campaign において、各パーティションの IBM Marketing Platform システム・テーブル・データ・ソースの名前は UA_SYSTEM_TABLES でなければならず、IBM Campaign のどのパーティションについても「構成」ページに **dataSources | UA_SYSTEM_TABLES** のカテゴリーが存在していなければなりません。

新しいカテゴリー名

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

データ・ソースを作成する際には、提供されているテンプレートのいずれかをクリックして、「新しいカテゴリー名」フィールドを使用します。提供されているテンプレートは、*(DB2 Template)* などのようにイタリックと小括弧で示されます。データ・ソースを指定するには、DB2_Customers などのカテゴリー名を入力します。新しいカテゴリーを保存すると、ナビゲーション・ツリーに表示されるようになります。このプロパティーは、必要に応じ

て変更できます。使用できるプロパティーは、選択したテンプレートによって異なります。いずれかのテンプレートで使用されるプロパティーすべてを以下にアルファベット順でリストします。

AccessLibrary

説明

IBM Campaign は、データ・ソースのタイプに従ってデータ・ソース・アクセス・ライブラリーを選択します。例えば、Oracle の接続には `libora4d.so` が使用され、DB2 の接続には `libdb24d.so` が使用されます。ほとんどの場合、デフォルトの選択内容が適切です。しかし、IBM Campaign の実際の環境においてデフォルト値が適切でないという場合には、`AccessLibrary` プロパティーを変更することが可能です。例えば、64 ビット IBM Campaign には 2 つの ODBC アクセス・ライブラリーが提供されています。1 つは unixODBC 実装 (`libodb4d.so`) と互換の ODBC データ・ソースに適したもの、もう 1 つは、DataDirect 実装 (Teradata などへのアクセスのために IBM Campaign が使用する `libodb4dDD.so`) と互換のものです。

AliasPrefix

説明

`AliasPrefix` プロパティーは、ディメンション・テーブルを使用していて新しいテーブルに書き込む際に、IBM Campaign により自動的に作成される別名を、IBM Campaign がどのように生成するかを指定します。

各データベースには、それぞれ ID の最大長があります。使用しているデータベースの文書を調べて、設定する値がデータベースの最大 ID 長を超えないものであることを確認してください。

デフォルト値

`A`

AIX 用の追加ライブラリー

説明

IBM Campaign には、ODBC Unicode API ではなく ODBC ANSI API をサポートする AIX ODBC ドライバー・マネージャーのための 2 つの追加ライブラリーが含まれています。

- libodb4dAO.so (32 ビットおよび 64 ビット): unixODBC 互換実装用の ANSI 専用ライブラリー
- libodb4dDDAO.so (64 ビットのみ): DataDirect 互換実装用の ANSI 専用ライブラリー

デフォルトのアクセス・ライブラリーをオーバーライドする必要があると判断した場合は、このパラメーターを設定してください (例えば、デフォルトの選択項目である `libodb4d.so` をオーバーライドして `libodb4dDD.so` に設定します)。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

AllowBaseJoinsInSelect

説明

このプロパティーは、選択プロセスにおいて使用される (同じデータ・ソースからの) ベース・テーブルの SQL 結合の実行を IBM Campaign が試みるかどうかを決定します。それをしない場合、それに相当する結合は Campaign サーバーにおいて実行されます。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

AllowSegmentUsingSQLCase

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、Segment プロセスにおいて、構成に関する特定の条件が満たされた場合に、複数の SQL ステートメントを統合して単一の SQL ステートメントにするかどうかを指定します。

このプロパティーを TRUE に設定すると、以下の条件のすべてが満たされた場合に、パフォーマンスが大幅に改善されます。

- セグメントが相互に排他的である。
- すべてのセグメントが単一のテーブルに由来するものである。
- 各セグメントの基準が IBM マクロ言語に基づくものである。

この場合、IBM Campaign は、セグメンテーションを実行した後、フィールドごとのセグメント処理を Campaign アプリケーション・サーバー上で実行するための単一の SQL CASE ステートメントを生成します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

AllowTempTables

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、IBM Campaign がデータベース中に一時テーブルを作成するかどうかを指定します。一時テーブルを作成すると、キャンペーンのパフォーマンスが大幅に改善されることがあります。

値が TRUE の場合、一時テーブルが有効です。 (例えば、Segment プロセスによって) データベースに対して照会が発行されるごとに、結果として生成される ID がデータベース内の一時テーブルに書き込まれます。追加の照会

が発行されると、IBM Campaign は、データベースから行を取り出すために、その一時テーブルを使用できます。

useInDbOptimization のような一部の IBM Campaign 操作は、一時テーブルを作成する機能に依存しています。一時テーブルが有効ではない場合、IBM Campaign は選択された ID を IBM Campaign サーバー・メモリーに保存します。追加の照会では、データベースから ID を取り出して、サーバー・メモリー中の ID との突き合わせが実行されます。これは、パフォーマンスに悪影響を及ぼす可能性があります。

一時テーブルを使用するには、データベースへの書き込むための適切な特権が付与されていなければなりません。特権は、データベースへの接続時に入力するデータベース・ログインによって決まります。

デフォルト値

TRUE

注: 通常、**AllowTempTables** は TRUE に設定します。特定のフローチャートの値をオーバーライドするには、フローチャートを編集モードで開き、「管理」

> 「詳細設定」を選択して、「サーバー最適化」タブをクリックし、「このフローチャートでは一時テーブルを使用しない」を選択します。

ASMSaveDBAuthentication

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

ASMSaveDBAuthentication プロパティーは、Campaign にログインし、それまでにログインしていないデータ・ソース中のテーブルをマップする際に、IBM Campaign がユーザー名とパスワードを IBM Marketing Software に保存するかどうかを指定します。

このプロパティーを TRUE に設定した場合、Campaign は、データ・ソースへのログイン時にユーザー名とパスワードを入力するためのプロンプトを表示しません。このプロパティーを FALSE に設定した場合、データ・ソースにログインするたびに、毎回ユーザー名とパスワードを入力するためのプロンプトが Campaign によって表示されます。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

ASMUserForDBCredentials

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

ASMUserForDBCredentials プロパティーでは、IBM Campaign のシステム・ユーザーに割り当てられている IBM Marketing Software ユーザー名を指定します (Campaign のシステム・テーブルにアクセスするために必要です)。

このプロパティーでは、インストール時に Campaign のシステム・ユーザーとして作成されたユーザーを指定する必要があります。このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

BulkInsertBlockSize

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、Campaign がデータベースに一度に渡すデータ・ブロックの最大サイズを、レコード数として定義します。

デフォルト値

100

BulkInsertRequiresColumnType

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

BulkInsertRequiresColumnType プロパティーは、DataDirect ODBC データ・ソースのサポートのためにのみ必要です。DataDirect ODBC データ・ソースにおいて、バルク (配列) 挿入機能を使用する場合、このプロパティーを TRUE に設定します。その他のほとんどの ODBC ドライバーと互換にするには、このプロパティーを FALSE に設定します。

デフォルト値

FALSE

BulkReaderBlockSize

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

BulkReaderBlockSize プロパティーは、Campaign がデータベースから一度に読むデータ・ブロックのサイズを、レコード数として定義します。

デフォルト値

2500

ConditionalSQLCloseBracket

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

ConditionalSQLCloseBracket プロパティーは、未加工 SQL カスタム・マクロ内で、条件付きセグメントの終わりを示すために使用されるブラケットのタイプを指定します。指定された左大括弧タイプと右大括弧タイプで囲まれた条件付きセグメントは、一時テーブルが存在する場合にのみ使用されます。一時テーブルが存在しない場合は無視されます。

デフォルト値

} (閉じ中括弧)

ConditionalSQLOpenBracket

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

ConditionalSQLOpenBracket プロパティーは、未加工 SQL カスタム・マクロ内で、条件付セグメントの開始を示すために使用されるブラケットのタイプを指定します。 ConditionalSQLOpenBracket プロパティーと ConditionalSQLCloseBracket プロパティーによって指定されるブラケットで囲まれた条件付きセグメントは、一時テーブルが存在する場合にのみ使用され、一時テーブルがない場合は無視されます。

デフォルト値

{ (開き中括弧)

ConnectionCacheSize

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

ConnectionCacheSize プロパティーは、Campaign においてデータ・ソースごとにキャッシュ中に維持する接続の数を指定します。

デフォルトでは N=0 であり、その場合 Campaign は、1 つの操作ごとにデータ・ソースとの新しい接続を 1 つ確立します。 Campaign で接続キャッシュが維持されていて、接続の再利用が可能なら、Campaign は、新しい接続を確立するのではなく、キャッシュに含まれる接続を使用します。

設定値が 0 でない場合、接続を利用して実行されるプロセスについて、Campaign は、指定された数の接続を、InactiveConnectionTimeout プロパティーによって指定される時間にわたって、開かれた状態に維持します。その時間の満了後、キャッシュから接続が除去され、閉じられます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

DateFormat

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|dataSourcename`

説明

Campaign は、Campaign マクロ言語を使用する際、または日付列からのデータを解釈する際に、`DateFormat` プロパティーの値を使用することにより、さまざまな日付形式のデータの解析方法を決定します。

`DateFormat` プロパティーの値は、Campaign において、このデータ・ソースから受け取る日付について予期されている形式に設定します。その値は、select において日付表示のためにデータベースによって使用される形式と一致するものでなければなりません。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は、`DateOutputFormatString` プロパティーの設定値と同じです。

注: 複数ロケールのフィーチャーを使用する場合は、3 文字で表わされる月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用しないでください。代わりに、月を表す数値が含まれる区切り形式または固定形式を使用してください。

データベースで使用する日付形式を判別するには、データベースから日付を選択します。追加情報については、以下の表を参照してください。

表 *79.* 日付形式

データベース	正しい設定値を判別する方法
DB2	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースに接続します。 `Campaign¥bin` ディレクトリーにある `db2test` を使用して接続してから、以下のコマンドを発行します。 `values current date` ご使用のオペレーティング・システムに `db2test` ユーティリティーがない場合、`cxntest` ユーティリティーを使用してターゲット・データベースへの接続をテストしてください。
Hive ベースの Hadoop ビッグデータ	すべての日付ストリング (Date、DateFormat、DateTimeFormat、DateTimeOutputFormatString) の日付書式でダッシュ「-」文字を使用する必要があります。 Hive は日付の書式として他の文字に対応していません。例えば、%Y-%m-%d %H:%M:%S のようにします。

Netezza®	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースに接続します。 `Campaign¥bin` ディレクトリーにある `odbctest` を使用して接続してから、以下のコマンドを発行します。
	
	`CREATE TABLE date_test (f1 DATE);`
	`INSERT INTO date_test values (current_date);`
	`SELECT f1 FROM date_test;`
	
	日付形式を選択する別の方法は、以下のコマンドを実行することです。
	
	`SELECT current_date FROM ANY_TABLE limit 1;`
	
	ANY_TABLE は、既存のテーブルの名前です。

表 79. 日付形式 (続き)

データベース	正しい設定値を判別する方法
Oracle	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースにログインします。 SQL *Plus を使用して接続し、以下のコマンドを発行します。 `SELECT sysdate FROM dual` 現在日付が、そのクライアントの NLS_DATE_FORMAT で返されます。
SQL Server	Campaign リスナーの実行されているマシンからデータベースに接続します。 `Campaign¥bin` ディレクトリーにある `odbctest` を使用して接続してから、以下のコマンドを発行します。 `SELECT getdate()` ODBC データ・ソースの構成の中で、「通貨、数値日付、および時刻の出力時に地域設定値を使用する」オプションにチェックが付いていない場合、日付形式をリセットすることはできません。一般に、この設定値をクリアした状態のままにして、日付形式の構成が言語ごとに変わらないようにしておくほうが簡単です。
Teradata	Teradata では、列ごとに日付形式を定義できます。 `dateFormat` と `dateOutputFormatString` に加えて、`SuffixOnCreateDateField` を設定する必要があります。システム・テーブルの設定値と整合させるには、以下の値を使用します。 • SuffixOnCreateDateField = `FORMAT 'YYYY-MM-DD'` • DateFormat = `DELIM_Y_M_D` • DateOutputFormatString = `%Y-%m-%d`

デフォルト値

`DELIM_Y_M_D`

有効な値

`DATE` マクロの中で指定される形式のいずれか

DateOutputFormatString

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

`DateOutputFormatString` プロパティーは、Campaign が日付 (キャンペーンの開始日付や終了日付など) をデータベースに書き込む際に使用される日付データ型の形式を指定します。 `DateOutputFormatString` プロパティーの値は、データ・ソースにおいてタイプ `date` の列について予期されている形式に設定します。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は `[data_source_name] >「DateFormat」` プロパティーの設定値と同じです。

`DateOutputFormatString` プロパティーは、`DATE_FORMAT` マクロの中で、`format_str` について指定されている形式のいずれかに設定することができます。 `DATE_FORMAT` マクロは、2 つの異なる種類の形式を受け付けます。

1 つは ID (DELIM_M_D_Y や DDMMMYYYY など、DATE マクロで受け付けられるのと同じ)、そしてもう 1 つは書式ストリングです。DateOutputFormatString プロパティーの値は書式ストリングでなければなりません。 DATE マクロ ID の 1 つにすることはできません。多くの場合、区切り形式の 1 つを使用します。

以下に説明されている手順に従ってテーブルを作成し、選択した形式で日付を挿入することにより、正しい形式が選択されているかどうかを検証できます。

DateOutputFormatString を検証する方法

1. 「データベースによる日付の選択」の表で説明されているようにして、適切なツールを使用してデータベースに接続します。

   日付がデータベースに正しく送信されていることを確認するために、データベース付属の照会ツール (SQL Server の Query Analyzer など) は使用しないでください。それらの照会ツールは、日付形式を、Campaign が実際にデータベースに送信するものとは異なる形式に変換する可能性があります。

2. テーブルを作成し、選択した形式で日付を挿入します。例えば、%m/%d/%Y を選択した場合、

   ```
   CREATE TABLE date_test (F1 DATE)
   INSERT INTO date_test VALUES ('03/31/2004')
   ```

   INSERT コマンドがデータベースにより正常に完了した場合、選択した形式は正しいということです。

デフォルト値

%Y/%m/%d

DateTimeFormat

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

<data-source-name> DateTimeFormat プロパティーの値は、Campaign がデータベースから日時/タイム・スタンプ・データを受け取る際に予期されている形式を指定します。これは、select において日時/タイム・スタンプ・データの表示のためにデータベースによって使用される形式に一致していなければなりません。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は、DateTimeOutputFormatString の設定値と同じです。

通常、DateTimeFormat には、前述の方法で DateFormat の値を判別してから、その DateFormat の値の前に DT_ を付けた値を設定します。

注: 複数ロケールのフィーチャーを使用する場合は、3 文字で表わされる月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用しないでください。代わりに、月を表す数値が含まれる区切り形式または固定形式を使用してください。

デフォルト値

DT_DELIM_Y_M_D

有効な値

以下の区切り形式のみサポートされています。

- DT_DELIM_M_D
- DT_DELIM_M_D_Y
- DT_DELIM_Y_M
- DT_DELIM_Y_M_D
- DT_DELIM_M_Y
- DT_DELIM_D_M
- DT_DELIM_D_M_Y

DateTimeOutputFormatString

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

DateTimeOutputFormatString プロパティーは、Campaign が、キャンペーンの開始日時や終了日実行などの日時データをデータベースに書き込む際に使用する日時データ型の形式を指定します。 DateTimeOutputFormatString プロパティーの値は、データ・ソースにおいてタイプ datetime の列について予期されている形式に設定します。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は、[data_source_name] >「DateTimeFormat」プロパティーの設定値と同じです。

選択する形式が正しいものであることを検証する方法については、DateOutputFormatString の説明を参照してください。

デフォルト値

%Y/%m/%d %H:%M:%S

DB2NotLoggedInitially

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、DB2 の一時テーブルのデータを設定する際に、IBM Campaign が not logged initially SQL 構文を使用するかどうかを決定します。

値を TRUE にすると、一時テーブルへの挿入のロギングが無効になり、その結果、パフォーマンスが向上し、データベース・リソースの消費量が少なくなります。 TRUE に設定した場合、一時テーブル・トランザクションが何らかの理由で失敗すると、そのテーブルは破損した状態になり、ドロップしなければならなくなります。それまでにそのテーブルに含まれていたデータは、すべて失われます。

not logged initially 構文がサポートされていないバージョンの DB2 を使用している場合、このプロパティーは FALSE に設定します。

z/OS® で DB2 11 ユーザー・データベースを使用している場合は、このプロパティーを FALSE に設定してください。ユーザー・データベースにおいて BLU フィーチャーを ON にして DB2 10.5 を使用している場合は、**DB2NotLoggedInitially** と **DB2NotLoggedInitiallyUserTables** の両方を FALSE に設定してください。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

DB2NotLoggedInitiallyUserTables

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

DB2NotLoggedInitiallyUserTables プロパティーは、DB2 のユーザー・テーブルへの挿入操作で、IBM Campaign が not logged initially SQL 構文を使用するかどうかを決定します。

値を TRUE にすると、ユーザー・テーブルへの挿入のロギングが無効になり、その結果、パフォーマンスが向上し、データベース・リソースの消費量が少なくなります。 TRUE に設定した場合、ユーザー・テーブル・トランザクションが何らかの理由で失敗すると、そのテーブルは破損した状態になり、ドロップしなければならなくなります。それまでにそのテーブルに含まれていたデータは、すべて失われます。

ユーザー・データベースにおいて BLU フィーチャーを ON にして DB2 10.5 を使用している場合は、**DB2NotLoggedInitially** と **DB2NotLoggedInitiallyUserTables** の両方を FALSE に設定してください。

注**: DB2NotLoggedInitiallyUserTables** プロパティーは IBM Campaign システム・テーブルに使用されません。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

DefaultScale

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

DefaultScale プロパティーは、スナップショットまたはエクスポート・プロセスの使用時に、フラット・ファイルかユーザー定義フィールドからの数値を保管するために Campaign がデータベース・フィールドを作成するときに使われます。

このプロパティーは、データベース・フィールドで精度とスケールに関する情報が省略されている場合を除いて、データベース表から得られる数値には使用されません。(精度はフィールドに使用できる総桁数を示します。スケールは小数点以下に使用できる桁数を示します。例えば、6.789 の精度は 4 で、スケールは 3 です。データベース表から取得した値には、Campaign がフィールドを作成するときに使用する精度とスケールに関する情報が含まれます。)

例: フラット・ファイルは精度とスケールを示さないので、作成されるフィールドに定義する小数点以下の桁数を指定するには、以下のように `DefaultScale` を使用できます。

- `DefaultScale=0` は、小数点以下がないフィールドを作成します (整数部のみを保存できます)。
- `DefaultScale=5` は、小数点以下が最大 5 桁のフィールドを作成します。

`DefaultScale` に対して設定された値がフィールドの精度を超えた場合は、それらのフィールドに対して `DefaultScale=0` が使用されます。例えば、精度が 5 で、`DefaultScale=6` の場合、値ゼロが使用されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

DefaultTextType

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

`DefaultTextType` プロパティーは ODBC データ・ソースのためのものです。このプロパティーは、ソース・テキスト・フィールドのデータ・ソース・タイプが異なる場合に、宛先データ・ソース内にテキスト・フィールドを作成する方法を Campaign に指示します。例えば、フラット・ファイルか別のタイプの DBMS からのソース・テキスト・フィールドである可能性があります。同じタイプの DBMS からのソース・テキスト・フィールドである場合は、このプロパティーは無視され、ソース・テキスト・フィールドのデータ型を使用してテキスト・フィールドが宛先データ・ソース内に作成されます。

デフォルト値

`VARCHAR`

有効な値

`VARCHAR | NVARCHAR`

DeleteAsRecreate

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

DeleteAsRecreate プロパティーは、TRUNCATE がサポートされておらず、REPLACE TABLE を実行するように出力処理が構成されている場合に、Campaign がテーブルをドロップしてから再作成するのか、それとも単にそのテーブルから削除するのみかを指定します。

値が TRUE の場合、Campaign はテーブルをドロップしてから再作成します。

値が FALSE の場合、Campaign はテーブルからの DELETE FROM を実行します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

DeleteAsTruncate

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

DeleteAsTruncate プロパティーは、REPLACE TABLE を実行するように出力プロセスが構成されている場合に、Campaign が TRUNCATE TABLE を使用するのか、それともテーブルから削除するのかを指定します。

値が TRUE の場合、Campaign はテーブルからの TRUNCATE TABLE を実行します。

値が FALSE の場合、Campaign はテーブルからの DELETE FROM を実行します。

デフォルト値は、データベースのタイプに応じて異なります。

デフォルト値

- TRUE (Netezza、Oracle、および SQLServer の場合)
- FALSE (その他のデータベース・タイプの場合)

有効な値

TRUE | FALSE

DisallowTempTableDirectCreate

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、Oracle、Netezza、および SQL Server のデータ・ソースで使用され、それ以外のすべてのデータ・ソースでは無視されます。

このプロパティーは、Campaign がデータを一時テーブルに追加する方法を指定します。

FALSE に設定すると、Campaign は 1 つのコマンドを使用して、直接的な作成およびデータ設定 SQL 構文を実行します。例: CREATE TABLE

<table_name> AS ... (Oracle および Netezza の場合) および SELECT <field_names> INTO <table_name> ... (SQL サーバーの場合)。

TRUE に設定されている場合、Campaign は、一時テーブルを作成した後、複数の別個のコマンドを使用することにより、テーブルからテーブルにデータを直接設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

DSN

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、ODBC 構成の中で、この Campaign データ・ソースについて割り当てられているデータ・ソース名 (DSN) に設定します。SQL Server の場合、このプロパティーには、インストール時に作成した DSN (データ・ソース名) を設定します。 Oracle および DB2 の場合、このプロパティーにはデータベース名または SID (サービス) 名を設定します。デフォルトでは、この値は未定義になっています。

Campaign データ・ソース構成プロパティーを使用することにより、同じ物理データ・ソースを参照する複数の論理データ・ソースを指定できます。例えば、同じデータ・ソースについて 2 つのデータ・ソース・プロパティー・セットを作成し、1 つは AllowTempTables = TRUE、もう 1 つは AllowTempTables = FALSE とすることが可能です。これらのデータ・ソースの名前は、Campaign 内でそれぞれ異なりますが、同じ物理データ・ソースを参照している場合は、同じ DSN 値になります。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

DSNUsingOSAuthentication

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

DSNUsingOSAuthentication プロパティーは、Campaign データ・ソースが SQL Server である場合にのみ適用されます。 Windows の認証モードを使用するように DSN が構成されている場合、値を TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

EnableBaseDimSelfJoin

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|dataSourcename`

説明

`EnableBaseDimSelfJoin` プロパティーは、ベース・テーブルとディメンション・テーブルが同じ物理テーブルにマップされ、ベース・テーブルの ID フィールド上でディメンションがベース・テーブルに関連付けられていない場合、Campaign データベースの動作として自己結合操作を実行するかどうかを指定します。

このプロパティーのデフォルトは `FALSE` であり、Base テーブルとディメンション・テーブルが同じデータベース表で、かつ関係フィールドが同じ (AcctID から AcctID へ、など) であるなら、Campaign は、結合を実行しないということを想定します。

デフォルト値

`FALSE`

EnableSelectDistinct

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|dataSourcename`

説明

`EnableSelectDistinct` プロパティーは、Campaign の ID の内部リストに対する重複解消を Campaign サーバーで実行するか、それともデータベースで実行するかを指定します。

値が `TRUE` の場合、データベースによって重複解消が実行され、データベースに対して生成される SQL 照会は以下の形になります (該当する場合)。

```
SELECT DISTINCT key FROM table
```

値が `FALSE` の場合、Campaign サーバーによって重複解消が実行され、データベースに対して生成される SQL 照会は以下の形になります。

```
SELECT key FROM table
```

以下の場合には、デフォルト値 `FALSE` のままにしてください。 if:

- ユニーク ID (ベース・テーブルの 1 次キー) に重複がないことが既に保証済みとなるように、データベースが構成されている場合。
- Campaign アプリケーション・サーバーで重複解消を実行することにより、データベースのリソース消費量/負荷を軽減する場合。

このプロパティーにどんな値を指定するかには関係なく、Campaign では、必要に応じてキーの重複解消が実行されることが自動的に保証されています。このプロパティーは、単に重複解消がどの場所で実行されるか (データベース上か、それとも Campaign サーバー上か) を制御するだけです。

デフォルト値

`TRUE`

有効な値

TRUE | FALSE

EnableSelectOrderBy

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

EnableSelectOrderBy プロパティーは、Campaign の ID の内部リストのソートを、Campaign サーバーで実行するか、それともデータベースで実行するかを指定します。

値が TRUE の場合、データベースによってソートが実行され、そのデータベースに対して生成される SQL 照会は以下の形になります。

SELECT <*key*> FROM <*table*> ORDER BY <*key*>

値が FALSE の場合、Campaign サーバーによってソートが実行され、データベースに対して生成される SQL 照会は以下の形になります。

SELECT <*key*> FROM <*table*>

注: 使用されるオーディエンス・レベルが英語以外のデータベースでのテキスト・ストリングである場合、このプロパティーは FALSE にのみ設定してください。その他のすべてのシナリオでは、デフォルト TRUE を使用できます。

デフォルト値

TRUE

有効な値

True | False

ExcludeFromTableDisplay

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

ExcludeFromTableDisplay パラメーターを使用すると、IBM Campaign におけるテーブル・マッピングにおいて、表示されるデータベース表を制限することができます。データベースから取り出されるテーブル名の数を少なくするわけではありません。指定されたパターンに一致するテーブル名は表示されません。このパラメーターの値では、大/小文字が区別されます。

例: 値を sys.* に設定すると、すべて小文字の sys. で始まる名前のテーブルは表示されません。

例: UAC_* (SQL Server データ・ソースの場合のデフォルト値) は、ExtractTablePrefix プロパティーの値がデフォルト値の場合に、一時テーブルと抽出テーブルを除外します。

例: ユーザー・データの処理時に IBM Marketing Platform システム・テーブルが関係ないので除外するときには、以下のようにします。

DF_*,USM_*,OLS_*,QRTZ*,USCH_*,UAR_*

例として、Oracle の使用時には、値全体は次のようになります。

UAC_*,PUBLIC.*,SYS.*,SYSTEM.*,DF_*,USM_*,OLS_*,QRTZ*,USCH_*,UAR_*

デフォルト値

UAC_*,PUBLIC.*,SYS.*,SYSTEM.* (Oracle データ・ソースの場合)

UAC_* (SQL Server データ・ソースの場合)

UAC_*,SYSCAT.*,SYSIBM.*,SYSSTAT.* (DB2 データ・ソースの場合)

ExtractTablePostExecutionSQL

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

`ExtractTablePostExecutionSQL` プロパティーは、抽出テーブルの作成とデータ設定の直後に実行される、完成された 1 個以上の SQL ステートメントを指定するために使用します。

`ExtractTablePostExecutionSQL` で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、抽出テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL ステートメント

ExtractTablePrefix

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

ExtractTablePrefix プロパティーは、Campaign におけるすべての抽出テーブル名の前に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティーは、複数のデータ・ソースが同じデータベースを指す場合に便利です。詳しくは、TempTablePrefix の説明を参照してください。

デフォルト値

UAC_EX

ForceNumeric

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

ForceNumeric プロパティーは、Campaign が数値をデータ型 double として取り出すかどうかを指定します。値が TRUE に設定されている場合、Campaign は、すべての数値をデータ型 double として取り出します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

HiveQueryMode

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、Hive ベースの Hadoop データ・ソース (BigDataODBCHiveTemplate) でのみ使用します。このプロパティーで、DataDirect と Cloudera のドライバーを切り替えます。 DataDirect の場合は Native を選択します。 Cloudera の場合は SQL を選択します。

有効な値

Native | SQL

InactiveConnectionTimeout

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

InactiveConnectionTimeout プロパティーは、非アクティブの Campaign データベース接続を開いたままにしておく秒数を指定します。指定した時間

が経過した後、その接続は閉じられます。この値を 0 に設定するとタイムアウトは無効になり、接続は開いたままにされます。

デフォルト値

120

InsertLogSize

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

InsertLogSize プロパティーは、Campaign のスナップショット・プロセスの実行中、ログ・ファイルに新しいエントリーがいつ入力されるかを指定します。スナップショット・プロセスによって書き込まれるレコード数が、InsertLogSize プロパティーで指定される数の倍数に達するたびに、ログ・エントリーが書き込まれます。それらのログ・エントリーは、実行中のスナップショット・プロセスの進行状況を判別するのに役立ちます。この値の設定値が低すぎると、作成されるログ・ファイルが大きくなる場合があります。

デフォルト値

100000 (10 万レコード)

有効な値

正整数

JndiName

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

JndiName プロパティーは、Campaign システム・テーブルを構成する際にのみ使用されます (その他のユーザー・データ・ソースでは使用されません)。その値として、アプリケーション・サーバー (WebSphere または WebLogic) で作成した Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを設定し、そのデータ・ソースに接続します。

デフォルト値

campaignPartition1DS

LoaderCommand

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、IBM Campaign においてデータベース・ロード・ユーティリティーを呼び出すために発行されるコマンドを指定します。このプロパティーを設定すると、「全レコード置換」の設定で使用されたスナップショット・プロセスのすべての出力ファイルについて、IBM Campaign はデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードを開始します。また、

このプロパティーは、IBM Campaign が ID リストを一時テーブル中にアップロードする際に、データベース・ローダー・ユーティリティー・モードを呼び出します。

このプロパティーの有効な値は、データベース・ロード・ユーティリティーを起動するデータベース・ロード・ユーティリティー実行可能ファイルまたはスクリプトの絶対パス名です。スクリプトを使用することで、ロード・ユーティリティーを呼び出す前に、追加のセットアップを実行することができます。

注: IBM Contact Optimization を使用していて、UA_SYSTEM_TABLES データ・ソース用にローダー設定を構成している場合は、重要な考慮事項があります。例えば、**LoaderCommand** と **LoaderCommandForAppend** には絶対パスを使用しなければなりません。データベース・ロード・ユーティリティーを使用するように Campaign をセットアップする方法については、「*IBM Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

ほとんどのデータベース・ロード・ユーティリティーでは、正常に起動するために複数の引数が必要です。その中には、ロード元となるデータ・ファイルと制御ファイル、およびロード先となるデータベースおよびテーブルを指定するための引数が含まれることがあります。 IBM Campaign では、以下のトークンがサポートされています。コマンド実行時に、これらは、指定された要素に置換されます。データベース・ロード・ユーティリティー呼び出しで使用する正しい構文については、データベース・ロード・ユーティリティーの文書を参照してください。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

LoaderCommand で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、フローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CONTROLFILE>	このトークンは、**LoaderControlFileTemplate** プロパティーで指定されるテンプレートに従って IBM Campaign によって生成される一時制御ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。
<DATABASE>	このトークンは、IBM Campaign がデータをロードする先のデータ・ソースの名前に置換されます。これは、このデータ・ソースのカテゴリー名で使用されるのと同じデータ・ソース名です。

トークン	説明
<DATAFILE>	このトークンは、ロード・プロセスで IBM Campaign によって作成される一時データ・ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。このファイルは、IBM Campaign 一時ディレクトリー UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<DBUSER>	このトークンは、データベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<DSN>	このトークンは、DSN プロパティーの値に置換されます。 DSN プロパティーが設定されていない場合、<DSN> トークンは、このデータ・ソースのカテゴリー名で使用されるデータ・ソース名に置換されます (<DATABASE> トークンの置換に使用されるのと同じ値)。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、実行中のフローチャートの名前に置換されます。
<NUMFIELDS>	このトークンは、テーブル中のフィールドの数に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<TABLE>	このトークンは廃止されています。代わりに、<TABLENAME> を使用してください。
<TABLENAME>	このトークンは、IBM Campaign がデータをロードする先のデータベース表名に置換されます。これは、スナップショット・プロセスからのターゲット・テーブルまたは IBM Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。
<USER>	このトークンは、現在のフローチャート接続からデータ・ソースへのデータベース・ユーザーに置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

データベース・ロード・ユーティリティーの実行可能ファイルまたはデータベース・ロード・ユーティリティーを起動するスクリプトのいずれかの絶対パス名。

LoaderCommandForAppend

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、IBM Campaign 内のデータベース・テーブルにレコードを付加するデータベース・ロード・ユーティリティーを起動するために発行するコマンドを指定します。このプロパティーを設定すると、スナップショット・プロセスの出力ファイルのうち、「レコード付加」設定値で使用されるものすべてについて、IBM Campaign はデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードに入ります。

このプロパティーは、データベース・ロード・ユーティリティーの実行可能ファイルまたはデータベース・ロード・ユーティリティーを起動するスクリプトの絶対パス名として指定します。スクリプトを使用することで、ロード・ユーティリティーを呼び出す前に、追加のセットアップを実行することができます。

ほとんどのデータベース・ロード・ユーティリティーでは、正常に起動するために複数の引数が必要です。その中には、ロード元となるデータ・ファイルと制御ファイル、およびロード先となるデータベースとテーブルを指定するものが含まれることがあります。コマンドが実行されると、指定された要素によってトークンが置換されます。

データベース・ロード・ユーティリティー呼び出しで使用する正しい構文については、データベース・ロード・ユーティリティーの文書を参照してください。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

LoaderCommandForAppend で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CONTROLFILE>	このトークンは、**LoaderControlFileTemplate** プロパティーで指定されるテンプレートに従って Campaign によって生成される一時制御ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。
<DATABASE>	このトークンは、IBM Campaign がデータをロードする先のデータ・ソースの名前に置換されます。これは、このデータ・ソースのカテゴリー名で使用されるのと同じデータ・ソース名です。

トークン	説明
<DATAFILE>	このトークンは、ロード・プロセスで IBM Campaign によって作成される一時データ・ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。このファイルは、Campaign 一時ディレクトリー UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<DSN>	このトークンは、DSN プロパティーの値に置換されます。 DSN プロパティーが設定されていない場合、<DSN> トークンは、このデータ・ソースのカテゴリー名で使用されるデータ・ソース名に置換されます (<DATABASE> トークンの置換に使用されるのと同じ値)。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<NUMFIELDS>	このトークンは、テーブル中のフィールドの数に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<TABLE>	このトークンは廃止されています。代わりに、<TABLENAME> を使用してください。
<TABLENAME>	このトークンは、IBM Campaign がデータをロードする先のデータベース表名に置換されます。このは、スナップショット・プロセスからのターゲット・テーブルまたは IBM Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。
<USER>	このトークンは、現在のフローチャート接続からデータ・ソースへのデータベース・ユーザーに置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

LoaderControlFileTemplate

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーは、IBM Campaign 用に構成されている制御ファイル・テンプレートの絶対パスとファイル名を指定します。テンプレートへのパスは、現行パーティションに対して相対的です。例えば、loadscript.db2 です。

このプロパティーが設定されている場合、IBM Campaign は、指定されたテンプレートに基づいて、一時制御ファイルを動的に作成します。この一時制御ファイルのパスおよび名前は、**LoaderCommand** プロパティーから利用可能な <CONTROLFILE> トークンから利用可能です。

IBM Campaign をデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードで使用するには、その前に、このパラメーターによって指定される制御ファイル・テンプレートを構成することが必要です。制御ファイル・テンプレートでは、以下のトークンがサポートされています。それらは、IBM Campaign によって一時制御ファイルが作成される際に動的に置換されます。

制御ファイルで必要な正しい構文については、データベース・ローダー・ユーティリティーの文書を参照してください。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

LoaderControlFileTemplate で利用可能なトークンとしては、**LoaderCommand** プロパティーについて説明されているのと同じものに加えて、アウトバウンド・テーブル内のフィールドごとに 1 回ずつ反復される以下の特殊トークンがあります。

トークン	説明
<DBCOLUMNNUMBER>	このトークンは、データベース中の列順序に置換されます。
<FIELDLENGTH>	このトークンは、データベース中にロードされているフィールドの長さに置換されます。
<FIELDNAME>	このトークンは、データベース中にロードされているフィールドの名前に置換されます。
<FIELDNUMBER>	このトークンは、データベース中にロードされているフィールドの番号に置換されます。
<FIELDTYPE>	このトークンは、リテラル CHAR( ) に置換されます。このフィールドの長さは、括弧 () で囲んで指定されます。データベースでフィールド・タイプ CHAR が認識されない場合、フィールド・タイプとして適切なテキストを手動で指定して、<FIELDLENGTH> トークンを使用することができます。例えば、SQLSVR および SQL2000 の場合、SQLCHAR(<FIELDLENGTH>) を使用します。
<NATIVETYPE>	このトークンは、このフィールドのロード先である実際のデータベースのタイプに置換されます。
<xyz>	このトークンは、指定された文字を、データベース中にロードされているフィールドのうち、最後を除くすべてに配置します。典型的な使用方法としては、<,> があります。これは、最後を除くすべてのフィールドについてコンマを繰り返します。
<~xyz>	このトークンは、指定された文字を、反復の最後の行にのみ配置します。
<!xyz>	このトークンは、指定された文字 (不等号括弧 < > を含む) を、すべての行に配置します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

LoaderControlFileTemplateForAppend

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーは、IBM Campaign で構成されている制御ファイル・テンプレートの絶対パスとファイル名を指定します。テンプレートへのパスは、現行パーティションに対して相対的です。例: `loadappend.db2`

このプロパティーが設定されている場合、IBM Campaign は、指定されたテンプレートに基づいて、一時制御ファイルを動的に作成します。この一時制御ファイルのパスおよび名前は、**LoaderCommandForAppend** プロパティーから利用可能な `<CONTROLFILE>` トークンから利用可能です。

IBM Campaign をデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードで使用するには、その前に、このプロパティーによって指定される制御ファイル・テンプレートを構成することが必要です。制御ファイルで必要な正しい構文については、データベース・ローダー・ユーティリティーの文書を参照してください。

使用可能なトークンは、**LoaderControlFileTemplate** プロパティーのトークンと同じです。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

LoaderDelimiter

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーは、一時データ・ファイルが固定幅フラット・ファイルか、それとも区切りフラット・ファイルかを指定します。また、区切りファイルの場合には、IBM Campaign が区切り文字として使用する文字を指定します。

値が未定義の場合、IBM Campaign は、固定幅フラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

値を指定する場合、それは、ローダーが呼び出された時点で、空であると認識されているテーブルのデータを設定するために使用されます。 IBM Campaign は、このプロパティーの値を区切り文字として使用することにより、区切りフラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。その区切り文字は、ユーザー・データ・ソースにロードする一時データ・ファイルの各フィールドを区切るための文字 (コンマ (,) やセミコロン (;) など) です。

重要: **SuffixOnTempTableCreation**、**SuffixOnSegmentTableCreation**、**SuffixOnSnapshotTableCreation**、**SuffixOnExtractTableCreation**、

SuffixOnUserBaseTableCreation、**SuffixOnUserTableCreation** の各フィールドでは、**LoaderDelimiter** で指定した文字と同じ文字を使用する必要があります。

重要**:** Hadoop Hive や Amazon Redshift などのビッグデータの場合、この区切り文字の値は、ビッグデータ・データベース表の作成時に使用した ROW 形式区切り文字と一致していなければなりません。例えば、**ROW FORMAT DELIMITED FIELDS TERMINATED BY** `',' ;"` であれば、コンマを使用します。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

文字 (必要なら二重引用符で囲むことが可能)。 Hive ベースの Hadoop ビッグデータは、タブ (/t) 文字に対応していません。

LoaderDelimiterAtEnd

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

一部の外部ロード・ユーティリティーでは、データ・ファイルを区切る必要があります。また、各行は区切り文字で終わる必要があります。この要件を満たすためには、**LoaderDelimiterAtEnd** の値を `TRUE` に設定することにより、ローダーが起動して、空として認識されているテーブルのデータを設定する際に、IBM Campaign が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。例えば、UNIX 環境の DB2 では、各レコードが改行文字のみで終わることが期待されます。Windows 環境の Campaign Campaign では、復帰改行文字および改行文字が使用されます。各レコードの終わりに区切り文字を配置すると、データ・ファイルの最後の列が確実に正しくロードされます。

`FALSE`

デフォルト値

`FALSE`

有効な値

`TRUE | FALSE`

LoaderDelimiterAtEndForAppend

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

一部の外部ロード・ユーティリティーでは、データ・ファイルを区切る必要があります。また、各行は区切り文字で終わる必要があります。この要件を満たすためには、**LoaderDelimiterAtEndForAppend** の値を `TRUE` に設定

することにより、ローダーが起動して、空として認識されてはいないテーブルのデータを設定する際に、IBM Campaign が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。例えば、UNIX 環境の DB2 では、各レコードが改行文字のみで終わることが期待されます。Windows 環境の IBM Campaign では、復帰改行文字および改行文字が使用されます。各レコードの終わりに区切り文字を配置すると、データ・ファイルの最後の列が確実に正しくロードされます。

デフォルト値

`FALSE`

有効な値

`TRUE | FALSE`

LoaderDelimiterForAppend

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーは、IBM Campaign の一時データ・ファイルが固定幅フラット・ファイルであるか、それとも区切りフラット・ファイルであるかを指定します。また、区切りファイルの場合には、区切りとして使用する文字または文字の集合を指定します。

値が未定義の場合、IBM Campaign は、固定幅フラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

値を指定する場合、それは、ローダーが呼び出された時点で、空であるとは認識されていないテーブルのデータを設定するために使用されます。 IBM Campaign は、このプロパティーの値を区切り文字として使用することにより、区切りフラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

文字 (必要なら二重引用符で囲むことが可能)。

LoaderPostLoadDataFileRemoveCmd

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーは、Hive ベースの Hadoop データ・ソース (BigDataODBCHiveTemplate) でのみ使用します。このプロパティーは、LoaderPreLoadDataFileCopyCmd と一緒に使用します。LoaderPostLoadDataFileRemoveCmd プロパティーは、Campaign から Hive ベースの Hadoop システムの `/tmp` フォルダーにデータ・ファイルをコピーした後、SSH の「rm」コマンドを使用して一時データ・ファイルを削除します。

例えば、`ssh mapr@example.com "rm/tmp/<DATAFILE>"` のようにします。

Campaign から Hive ベースの Hadoop システムへのデータのエクスポートに関する資料を読んで、重要な情報を確認してください。

デフォルト値

なし

LoaderPreLoadDataFileCopyCmd

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーは、Hive ベースの Hadoop データ・ソース (BigDataODBCHiveTemplate) でのみ使用します。このプロパティーで SCP を使用して、IBM Campaign から Hive ベースの Hadoop システムにある `/tmp` という一時フォルダーにデータをコピーします。それは、Hive サーバー上の `/tmp` という場所でなければなりません (HDFS の場所ではなくファイル・システムの場所です)。 SCP コマンドを指定することも、その SCP コマンドを指定したスクリプトを呼び出すこともできます。

例 **#1:** `scp <DATAFILE> mapr@example.com:/tmp`

例 **#2:** `/opt/IBM/CampaignBigData/bin/copyToHive.sh <DATAFILE>`

このプロパティーに加えて LoaderPostLoadDataFileRemove を使用して、コピーした一時データ・ファイルを Hive サーバーから削除します。

Campaign から Hive ベースの Hadoop システムへのデータのエクスポートに関する資料を読んで、重要な情報を確認してください。

デフォルト値

なし

LoaderNULLValueInDelimitedData

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーを使用すると、データベース・ローダー (特に Netezza) の区切り形式のデータの NULL 値に対応できます。列の NULL 値を表すストリングを入力します。

デフォルト値

NULL

LoaderUseLocaleDP

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーは、IBM Campaign が、データベース・ロード・ユーティリティーによってロードされるファイルに数値を書き込む際に、小数点としてロケール固有の記号を使用するかどうかを指定します。

ピリオド (.) を小数点として指定するには、この値を FALSE に設定します。

ロケールにふさわしい小数点記号を使用することを指定するには、この値を TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

MaxItemsInList

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

IBM Campaign が SQL 中の単一リスト (WHERE 節の IN 演算子の後の値リストなど) の中に含めることのできる項目の最大数を指定します。

デフォルト値

Oracle の場合のみ 1000。その他のすべてのデータベースでは 0 (無制限)。

有効な値

整数

MaxQueryThreads

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、IBM Campaign の単一のフローチャートから、各データベース・ソースに対して同時実行可能な照会の数の上限を指定します。通常は、値が大きいほどパフォーマンスが向上します。

IBM Campaign は、独立した複数のスレッドを使用してデータベース照会を実行します。 IBM Campaign のプロセスは並列実行されるため、単一のデータ・ソースに対して複数の照会を同時に実行することが少なくありません。並列実行される照会の数が MaxQueryThreads を超えると、IBM Campaign サーバーは同時実行照会の数を指定された値に制限します。

最大値は無制限です。

注: maxReuseThreads は、ゼロ以外の値に設定する場合、MaxQueryThreads の値以上にする必要があります。

デフォルト値

データベースによって異なります。

MaxRowFetchRecords

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

パフォーマンス上の理由から、この数をできるだけ低い値に保つのが最善です。

選択された ID の数が MaxRowFetchRecords プロパティーによって指定された値よりも小さい場合、IBM Campaign は一度に 1 つずつ、別個の SQL 照会でデータベースに ID を渡します。この処理には、非常に長い時間がかかる場合があります。選択された ID の数がこのプロパティーによって指定された値よりも大きい場合、IBM Campaign は一時テーブルを使用する (データベース・ソースで許可された場合) か、不要な値を除くすべての値をテーブルから取り出します。

デフォルト値

100

MaxTempTableJoinPctSelectAll

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

照会が発行されると IBM Campaign は、その照会の結果として、ID の正確なリストを内容とする一時テーブルをデータベース上に作成します。すべてのレコードを選択する追加照会がデータベースに対して発行される場合、MaxTempTableJoinPctSelectAll プロパティーによって、一時テーブルとの結合が実行されるかどうかが指定されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が MaxTempTableJoinPctSelectAll プロパティーの値より大きい場合、結合は実行されません。まずすべてのレコードが選択された後、不要なレコードが破棄されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が MaxTempTableJoinPctSelectAll プロパティーの値以下の場合、まず一時テーブルとの結合が実行された後、結果としての ID がサーバーに取り出されます。

このプロパティーは、AllowTempTables プロパティーの値が TRUE に設定されている場合にのみ適用されます。 useInDbOptimization プロパティーが YES に設定されている場合、このプロパティーは無視されます。

デフォルト値

90

有効な値

0-100 の範囲の整数。値が 0 の場合、それは、一時テーブルの結合が決して使用されないことを意味します。値が 100 の場合、それは、一時テーブルのサイズには関係なく常にテーブルの結合が使用されることを意味します。

例

MaxTempTableJoinPctSelectAll が 90 に設定されているとします。まず、勘定残高 (Accnt_balance) が $1,000 より大きいカスタマー (CustID) を、データベース表 (Customer) から選択するとします。

対応する SQL 式として Select プロセスで生成されるものは、下記のようになります。

```
SELECT CustID FROM Customer
 WHERE Accnt_balance > 1000
```

Select プロセスでは、合計テーブル・サイズ 1,000,000 のうちの 10% に当たる 100,000 個の ID を取り出す可能性があります。一時テーブルが可能になっている場合、IBM Campaign は、選択された ID (TempID) をデータベース中の一時テーブル (Temp_table) に書き込みます。

次に、選択された ID (CustID) と現在の残高 (Accnt_balance) のスナップショットを取るとします。一時テーブル (Temp_table) の相対サイズは 90% (MaxTempTableJoinPctSelectAll) より小さいため、まず一時テーブルとの結合が実行されます。スナップショット・プロセスによって生成される SQL 式は、以下のようになります。

```
SELECT CustID, Accnt_balance FROM Customer, Temp_table WHERE CustID = TempID
```

Select プロセスで取り出すものが 90% を超える場合、それより後のスナップショット・プロセスでは、すべてのレコードが取り出され、最初の ID セットとそれらが突き合わされて、不要なものが破棄されます。

スナップショット・プロセスによって生成される SQL 式は、以下のようになります。

```
SELECT CustID, Accnt_balance FROM Customer
```

MaxTempTableJoinPctWithCondition

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

照会が発行されると IBM Campaign は、その照会の結果として、ID の正確なリストを内容とする一時テーブルをデータベース上に作成します。制限条件を伴うレコード選択の追加照会がデータベースに対して発行される場合、MaxTempTableJoinPctWithCondition プロパティーは、一時テーブルとの結合を実行するかどうかを指定します。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が MaxTempTableJoinPctWithCondition の値より大きい場合、結合は実行されません。これにより、不要なデータベースでのオーバーヘッドが回避されます。その場合、データベースに対する照会が発行され、結果として ID のリストが取り出された後、サーバー・メモリー内のリストに一致する不要なレコードが破棄されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が MaxTempTableJoinPctWithCondition の値以下の場合、まず一時テーブルとの結合が実行された後、結果として ID がサーバーに取り出されます。

このプロパティーは、AllowTempTables プロパティーの値が TRUE に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

20

有効な値

0-100 の範囲の整数。値が 0 の場合、それは、一時テーブルの結合が決して使用されないことを意味します。値が 100 の場合、それは、一時テーブルのサイズには関係なく常にテーブルの結合が使用されることを意味します。

MinReqForLoaderCommand

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、バルク・ローダーを使用するためのしきい値を設定するために使用します。入力セル中のユニーク ID の数がここで定義される値を超えると、IBM Campaign は、LoaderCommand プロパティーに割り当てられているスクリプトを呼び出します。このプロパティーの値は、書き込まれるレコードの数を表わすものではありません。

このプロパティーが構成されていない場合、IBM Campaign では、値としてデフォルト値 (ゼロ) が想定されます。このプロパティーが構成されているが、値として負または非整数の値が設定されている場合、値はゼロと想定されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

整数

MinReqForLoaderCommandForAppend

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、バルク・ローダーを使用するためのしきい値を設定するために使用します。入力セル中のユニーク ID の数がここで定義される値を超えると、IBM Campaign は、LoaderCommandForAppend パラメーターに割り当てられているスクリプトを呼び出します。このプロパティーの値は、書き込まれるレコードの数を表わすものではありません。

このプロパティーが構成されていない場合、IBM Campaign では、値としてデフォルト値 (ゼロ) が想定されます。このプロパティーが構成されているが、値として負または非整数の値が設定されている場合、値はゼロと想定されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

正整数

NumberOfRetries

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

NumberOfRetries プロパティーは、データベース操作での障害発生時に IBM Campaign が自動的に再試行する回数を指定します。IBM Campaign は、この回数だけ、データベースに対する照会を自動的に再サブミットします。この回数を超えると、データベース・エラーまたは障害が報告されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

ODBCTableTypes

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーはデフォルトでは空です。これは、現在サポートされているすべてのデータ・ソースに適しています。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

(空)

ODBCUnicode

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

ODBCUnicode プロパティーは、IBM Campaign ODBC 呼び出しにおいて使用されるエンコード方式のタイプを指定します。これは、ODBC データ・ソースでのみ使用されるものであり、Oracle または DB2 のネイティブ接続で使用される場合は無視されます。

重要: このプロパティーが UTF-8 または UCS-2 に設定されている場合、データ・ソースの StringEncoding 値は UTF-8 または WIDEUTF-8 に設定されていなければなりません。そうでない場合、ODBCUnicode プロパティーの設定値は無視されます。

デフォルト値

disabled

有効な値

このプロパティーで可能な値は、以下のとおりです。

- Disabled: IBM Campaign は、ANSI ODBC 呼び出しを使用します。
- UTF-8: IBM Campaign は、Unicode ODBC 呼び出しを使用し、SQLWCHAR が 1 バイトであると想定します。これは DataDirect ODBC ドライバーと互換です。
- UCS-2: IBM Campaign は、Unicode ODBC 呼び出しを使用し、SQLWCHAR が 2 バイトであると想定します。これは Windows および unixODBC ODBC ドライバーと互換です。

ODBCv2

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

ODBCv2 プロパティーは、IBM Campaign においてデータ・ソースのためにどの ODBC API 仕様を使用するかを指定するために使用します。

デフォルト値は FALSE であり、その場合、IBM Campaign は v3 API 仕様を使用します。 TRUE に設定した場合、IBM Campaign は v2 API 仕様を使用します。ODBC v3 API 仕様がサポートされていないデータ・ソースでは、ODBCv2 プロパティーを TRUE に設定します。

ODBCv2 プロパティーが TRUE に設定されている場合、IBM Campaign において ODBC Unicode API はサポートされず、ODBCUnicode プロパティーに関して disabled 以外の値は認識されなくなります。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

OwnerForTableDisplay

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明　このプロパティーは、IBM Campaign でのテーブル・マッピングの表示を、指定したスキーマのテーブルに制限する場合に使用します。例えば、スキーマ「dbo」のテーブルを指定するには、OwnerForTableDisplay=dbo と設定します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

PadTextWithSpaces

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

PadTextWithSpaces プロパティーが TRUE に設定されている場合、IBM Campaign は、ストリングがデータベース・フィールドと同じ幅になるまで、テキスト値にスペースを埋め込みます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

PostExtractTableCreateRunScript

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、抽出テーブルが作成されて、そのデータが設定された後に IBM Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostExtractTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostSegmentTableCreateRunScript

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|dataSourcename`

説明

Segment 一時テーブルの作成とデータ設定の後、IBM Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。

PostSegmentTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostSnapshotTableCreateRunScript

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|dataSourcename`

説明

PostSnapshotTableCreateRunScript プロパティーは、スナップショット・テーブルが作成され、そのデータが設定された後に Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostSnapshotTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostTempTableCreateRunScript

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

PostTempTableCreateRunScript プロパティーは、ユーザー・データ・ソースまたはシステム・テーブル・データベースの中で一時テーブルが作成され、データが設定された後、Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostTempTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

PostUserTableCreateRunScript

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

ユーザー・テーブルが作成されてデータが設定された後に Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。

`PostUserTableCreateRunScript` で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、ユーザー・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。

トークン	説明
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、ユーザー・テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PrefixOnSelectSQL

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

`PrefixOnSelectSQL` プロパティーは、Campaign によって生成される `SELECT` SQL 式のすべてに対して、自動的にその先頭に付加するストリングを指定するために使用します。

このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される未加工 SQL 式の SQL には適用されません。

このプロパティーは、構文チェックなしで自動的に `SELECT` SQL 式に追加されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

PrefixOnSelectSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。

トークン	説明
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

QueryThreadSleep

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

`QueryThreadSleep` プロパティーは、Campaign サーバー・プロセス (`UNICA_ACSVR`) の CPU 使用率に影響します。値が `TRUE` に設定されている場合、Campaign サーバー・プロセスが照会の完了をチェックするために使用するスレッドは、チェックとチェックの間でスリープします。値が `FALSE` の場合、Campaign サーバー・プロセスは、照会の完了を連続的にチェックします。

デフォルト値

`TRUE`

ReaderLogSize

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

`ReaderLogSize` パラメーターは、Campaign がデータベースからデータを読む際に、ログ・ファイル中の新しいエントリーをいつ作成するかを定義します。データベースから読み取られるレコード数が、このパラメーターによって定義される数の倍数に達するたびに、ログ・エントリーがログ・ファイルに書き込まれます。

このパラメーターは、プロセスの実行の進行状況を判別するのに役立ちます。この値の設定値が低すぎると、作成されるログ・ファイルが大きくなる場合があります。

デフォルト値

`1000000` (100 万レコード)

有効な値

整数

SegmentTablePostExecutionSQL

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

SegmentTablePostExecutionSQL プロパティーは、セグメント一時テーブルが作成され、データが設定された後に Campaign によって実行される、完成された 1 つの SQL ステートメントを指定するために使用されます。

SegmentTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、セグメント一時テーブル名によって置き換えられます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL ステートメント

SegmentTempTablePrefix

説明

このデータ・ソースにおいて、CreateSeg プロセスによって作成されるセグメント・テーブルの接頭部を設定します。このプロパティーは、複数のデータ・ソースが同じデータベースを指す場合に便利です。詳しくは、TempTablePrefix の説明を参照してください。

デフォルト値

UACS

SnapshotTablePostExecutionSQL

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

`SnapshotTablePostExecutionSQL` プロパティーは、スナップショット・テーブルが作成され、データが設定された直後に実行される、完成された 1 個以上の SQL ステートメントを指定するために使用します。このプロパティーは、スナップショット・プロセス・ボックスが抽出テーブルに書き出す場合のみ起動します。

SnapshotTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、スナップショット・テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL ステートメント

SQLOnConnect

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

SQLOnConnect プロパティーは、各データベース接続の直後に Campaign が実行する、完成された 1 個の SQL ステートメントを定義します。

このプロパティーによって生成される SQL ステートメントは、構文チェックなしで自動的にデータベースに渡されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

SQLOnConnect で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

StringEncoding

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

StringEncoding プロパティーは、データベースの文字エンコードを指定します。 Campaign がデータベースからデータを取り出す際、指定されたエンコード方式から、Campaign の内部エンコード方式 (UTF-8) にデータが変換されます。 Campaign がデータベースに照会を送信する際、内部エンコード方式 Campaign (UTF-8) から、StringEncoding プロパティーで指定されるエンコード方式に文字データが変換されます。

このプロパティーの値は、データベース・クライアントで使用されるエンコード方式に一致していなければなりません。

デフォルトとして未定義になっているのでない限り、この値をブランクのままにはしないでください。

ASCII データを使用する場合、この値は UTF-8 に設定します。

データベース・クライアントのエンコード方式が UTF-8 の場合、この値のための望ましい設定値は WIDEUTF-8 です。 WIDE-UTF-8 設定値は、データベース・クライアントが UTF-8 に設定されている場合にのみ有効です。

partitions > partition[n] > dataSources > data_source_name > ODBCUnicode プロパティーを使用する場合、StringEncoding プロパティーは UTF-8 または WIDEUTF-8 のいずれかに設定されます。そうでない場合、ODBCUnicode プロパティーの設定値は無視されます。

サポートされているエンコード方式のリストについては、「*Campaign* 管理者ガイド」の『*Campaign* での文字エンコード』を参照してください。

重要**:** 重要な例外および追加の考慮事項については、以下のセクションを参照してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

データベース固有の考慮事項

このセクションでは、DB2、SQL Server、または Teradata データベースの適切な値を設定する方法について説明します。

DB2

DB2 データベース・コード・ページおよびコード・セットを識別します。ローカライズされた環境の場合、DB2 データベースの構成を以下のようにする必要があります。

- データベース・コード・セット = UTF-8
- データベース・コード・ページ = 1208

Campaign の StringEncoding プロパティー値を DB2 データベース・コード・セット値に設定します。

DB2CODEPAGE DB2 環境変数を DB2 データベース・コード・ページの値に設定します。

- Windows の場合: 以下の行を Campaign リスナーの始動スクリプト (<CAMPAIGN_HOME>¥bin¥cmpServer.bat) に追加します。

  ```
  db2set DB2CODEPAGE=1208
  ```

- UNIX の場合: DB2 を開始した後、システム管理者は次のコマンドを DB2 インスタンス・ユーザーから入力する必要があります。

  ```
  $ db2set DB2CODEPAGE=1208
  ```

  その後、以下のコマンドを実行し、Campaign リスナーを開始します。

  ```
  ./rc.unica_ac start
  ```

この設定は DB2 のすべてのデータ・ソースに影響します。さらに、実行中の他のプログラムにも影響する可能性があります。

SQL Server

SQL Server の場合、iconv エンコード方式の代わりにコード・ページを使用します。SQL Server データベースにおける StringEncoding プロパティーの適切な値を判別するには、サーバーのオペレーティング・システムの地域設定値に対応するコード・ページを検索してください。

例えば、コード・ページ 932 (日本語 Shift-JIS) を使用するには、

```
StringEncoding=CP932
```

Teradata

Teradata の場合、デフォルトの動作の一部をオーバーライドする必要があります。 Teradata では列ごとに文字エンコードの指定がサポートされていますが、Campaign でサポートされているのはデータ・ソースごとのエンコードのみです。 Teradata ODBC ドライバーのバグのため、Campaign で UTF-8 を使用することはできません。 Teradata では、ログインごとにデフォルトの文字エンコードが設定されます。これは、Windows において ODBC データ・ソース構成に含まれるパラメーター、または UNIX プラットフォームにおいて odbc.ini に含まれるパラメーターを使用することにより、以下のようにしてオーバーライドすることができます。

```
CharacterSet=UTF8
```

Teradata テーブルのデフォルトのエンコード方式は LATIN です。Teradata の組み込みエンコード方式はごくわずかのみですが、ユーザー定義エンコード方式がサポートされています。

StringEncoding プロパティーのデフォルト値は ASCII です。

重要: UTF-8 データベースの関係する多くの状況では、WIDEUTF-8 疑似エンコード方式を使用してください。それについては、WIDEUTF-8 に関するセクションで説明されています。

WIDEUTF-8

通常、Campaign は、その内部エンコード方式 UTF-8 と、データベースのエンコード方式の間のトランスコーディングをそれ自身で処理します。データベースのエンコードが UTF-8 の場合、StringEncoding の値として UTF-8 を指定することができ (SQLServer を除く)、トランスコーディングは不要です。従来、データベース内の英語以外のデータに Campaign がアクセスするための可能なモデルは、それらのみでした。

Campaign のバージョン 7.0 では、StringEncoding プロパティーのための値として、WIDEUTF-8 という新しいデータベース・エンコード方式が導入されています。このエンコード方式を使用することにより Campaign では、データベース・クライアントとの通信に UTF-8 を使用しながら、UTF-8 と実際のデータベースのエンコード方式との間のトランスコーディングの作業をクライアント側で実行することが可能です。変換後のテキストに十分に対応できるよう、テーブル列マッピングの幅を変更するため、このように拡張されたバージョンの UTF-8 が必要になっています。

注: WIDEUTF-8 疑似エンコード方式を使用できるのは、データベース構成の中のみです。その他の目的では使用しないでください。

注: Oracle では、クライアントによるトランスコーディングはサポートされていません。

SuffixOnAllOtherSQL

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|dataSourcename`

説明

`SuffixOnAllOtherSQL` プロパティーは、Campaign によって生成されるあらゆる SQL 式のうち、`SuffixOnInsertSQL`、`SuffixOnSelectSQL`、`SuffixOnTempTableCreation`、`SuffixOnUserTableCreation`、そして `SuffixOnUserBaseTableCreation` のどのプロパティーによってもカバーされないものに自動的に付加するストリングを指定します。

このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される未加工 SQL 式の SQL には適用されません。

`SuffixOnAllOtherSQL` は、Campaign によって以下のタイプの式が生成される際に使用されます。

```
TRUNCATE TABLE table
 DROP TABLE table
 DELETE FROM table [WHERE ...]
 UPDATE table SET ...
```

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このパラメーターを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnAllOtherSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SuffixOnCreateDateField

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|dataSourcename`

説明

`SuffixOnCreateDateField` プロパティーは、`CREATE TABLE` SQL ステートメントで、`DATE` フィールドのすべてに Campaign によって自動的に付加されるストリングを指定します。

例えば、このプロパティーを以下のように設定することができます。

```
SuffixOnCreateDateField = FORMAT 'YYYY-MM-DD'
```

このプロパティーが未定義 (デフォルト) の場合、`CREATE TABLE` コマンドは未変更のままです。

注: `DateFormat` プロパティーの説明に含まれる表を参照してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SuffixOnExtractTableCreation

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|dataSourcename`

説明

`SuffixOnExtractTableCreation` プロパティーは、抽出テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。

SuffixOnExtractTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。

トークン	説明
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、抽出テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL

SuffixOnInsertSQL

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

`SuffixOnInsertSQL` プロパティーは、Campaign によって生成されるすべての `INSERT` SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される未加工 SQL 式の SQL には適用されません。

`SuffixOnInsertSQL` は、Campaign によって以下のタイプの式が生成される際に使用されます。

```
INSERT INTO table ...
```

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

`SuffixOnInsertSQL` で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SuffixOnSegmentTableCreation

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

セグメント一時テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。

SuffixOnSegmentTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、セグメント一時テーブル名によって置き換えられます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL

SuffixOnSelectSQL

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|dataSourcename`

説明

`SuffixOnSelectSQL` プロパティーは、Campaign によって生成されるすべての `SELECT` SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnSelectSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SuffixOnSnapshotTableCreation

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|dataSourcename`

説明

SuffixOnSnapshotTableCreation プロパティーは、スナップショット・テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用されます。

SuffixOnSnapshotTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、スナップショット・テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL

SuffixOnTempTableCreation

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、一時テーブルが作成される際に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。このプロパティーを使用するためには、AllowTempTables プロパティーが TRUE に設定されていなければなりません。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、このSQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (`<TABLENAME>` および `<KEYCOLUMNS>`) を使用することが望ましい場合があるかもしれません。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

注: Oracle データベースの場合、一時テーブル作成 SQL 式のうちテーブル名の後に構成パラメーターが付加されます。

`SuffixOnTempTableCreation` で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SuffixOnUserBaseTableCreation

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

`SuffixOnUserBaseTableCreation` プロパティーは、ユーザーがベース・テーブルを作成する際に (抽出プロセスなど)、Campaign によって生成される

SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (`<TABLENAME>` および `<KEYCOLUMNS>`) を使用することが望ましい場合があるかもしれません。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnUserBaseTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SuffixOnUserTableCreation

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

SuffixOnUserTableCreation プロパティーは、ユーザーが一般のテーブルを作成する際に (スナップショット・プロセスなど)、Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。このプロパティーは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnUserTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブルの名前に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SystemTableSchema

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

Campaign システム・テーブルで使用されるスキーマを指定します。

デフォルト値はブランクです。このパラメーターは、UA_SYSTEM_TABLES データ・ソースにのみ関係するものです。

このプロパティーは、SQL Server では不要です。他のデータ・ソースの場合、このプロパティーには、接続先とするデータベースのユーザーを設定します。

UA_SYSTEM_TABLES データ・ソースに複数のスキーマが含まれている場合 (例えば、複数のグループで 1 つの Oracle データベースを使用する場合など) 以外、この値はブランクのままでかまいません。この文脈で「スキーマ」という語は、X.Y という形式の修飾テーブル名の先頭部分のことを指します (X がスキーマで、Y が非修飾テーブル名)。例: dbo.UA_Folder。この構文に関しては、Campaign でサポートされているさまざまな異なるデータベース・システムの間で異なる用語が使用されています。)

システム・テーブル・データベースの中に複数のスキーマが存在する場合、この値は、Campaign システム・テーブル作成時のスキーマの名前に設定してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

TableListSQL

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

TableListSQL プロパティーは、マップに使用可能なテーブルのリストにシノニムを含めるために使用する SQL 照会を指定するために使用します。

デフォルト値はブランクです。データ・ソースが SQL Server の場合に、返されるテーブル・スキーマの中でシノニムをマップできるようにするためには、このプロパティーが必須です。その他のデータ・ソースにおいて、標準的な方法 (ODBC 呼び出しやネイティブ接続など) を使用して取り出したテーブル・スキーマ情報の代わりに (またはそれに加えて)、特定の SQL 照会を使用する場合、このプロパティーはオプションです。

注: キャンペーンにおいて SQL Server のシノニムが正常に動作するには、ここで説明されているこのプロパティーの設定に加えて、UseSQLToRetrieveSchema プロパティーを TRUE に設定する必要があります。

有効な SQL 照会でこのプロパティーを設定する場合、IBM Campaign により、マッピング用のテーブルのリストを取り出すための SQL 照会が発行されます。その照会から 1 個の列が返される場合、それは名前の列として扱われます。その照会から 2 個の列が返される場合、最初の列は所有者の名前の列であると想定され、2 番目の列はテーブル名の列であると見なされます。

SQL 照会がアスタリスク (*) で始まっていない場合、IBM Campaign は、通常の方法で (ODBC 呼び出しやネイティブ接続などにより) 取り出されるテーブルのリストとこのリストをマージします。

SQL 照会がアスタリスク (*) で始まる場合、その SQL から返されるリストは、通常のリストにマージされるのではなく、それを置き換える ものとなります。

デフォルト値

なし

有効な値

有効な SQL 照会

例

データ・ソースが SQL Server の場合、通常の環境では、IBM Campaign で使用される ODBC API 呼び出しから返されるのはテーブルとビューのリストであり、シノニムではありません。シノニムのリストも含めるには、TableListSQL を以下の例に示すように設定します。

```
select B.name AS oName, A.name AS tName
from sys.synonyms A LEFT OUTER JOIN sys.schemas B
on A.schema_id = B.schema_id ORDER BY 1, 2
```

ODBC API をまったく使用しないでテーブル、ビュー、およびシノニムのリストを取り出すには、TableListSQL を以下の例に示すように設定します。

```
*select B.name AS oName, A.name AS tName from
 (select name, schema_id from sys.synonyms UNION
select name, schema_id from sys.tables UNION select name,
schema_id from sys.views) A LEFT OUTER JOIN sys.schemas B on
A.schema_id = B.schema_id ORDER BY 1, 2
```

データ・ソースが Oracle の場合は、ALL_OBJECTS ビューを調べるネイティブ接続方式を使用してデータを取り出す代わりに、以下のような照会を使用することにより、テーブル、ビュー、およびシノニムのリストを取り出すことができます。

```
*select OWNER, TABLE_NAME from (select OWNER, TABLE_NAME
from ALL_TABLES UNION select OWNER, SYNONYM_NAME AS TABLE_NAME
FROM ALL_SYNONYMS UNION select OWNER,
VIEW_NAME AS TABLE_NAME from ALL_VIEWS) A ORDER BY 1, 2
```

TempTablePostExecutionSQL

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、ユーザー・データ・ソースまたはシステム・テーブル・データベースでの一時テーブルの作成直後に IBM Campaign によって実行される、完成された 1 つの SQL ステートメントを指定するために使用します。例えば、パフォーマンスを向上するために、一時テーブルを作成した直後に、その一時テーブルに索引を作成することができます (以下の例を参照)。データ・ソースで一時テーブルを作成できるようにするには、AllowTempTables プロパティーを TRUE に設定する必要があります。

トークンを使用して、SQL ステートメントのテーブル名 (<TABLENAME>) および列名 (<KEYCOLUMNS>) を置換できます。これは、キャンペーンの実行時に値が動的に生成されるためです。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーでは、セミコロンが、複数の SQL ステートメントを実行するための区切り文字として扱われます。SQL ステートメントにセミコロンが含まれていて、その全体を 1 つのステートメントとして実行するには、そのセミコロンの直前にエスケープ文字としてバックスラッシュ (円記号) を使用してください。

注: このプロパティーでストアード・プロシージャーを使用している場合は、データベースに対して正しい構文が使用されていることを確認してください。

TempTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

例

値 `CREATE INDEX IND_<TABLENAME> ON <TABLENAME> (<KEYCOLUMNS>)` は、一時テーブルの作成直後にその一時テーブルに索引を作成し、データ検索プロセスを向上します。

以下に示すのは、Oracle においてストアード・プロシージャーを呼び出す例ですが、セミコロンのエスケープにバックスラッシュ (円記号) を使用しています。 `begin dbms_stats.collect_table_stats()¥; end¥;`

TempTablePrefix

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーは、Campaign によって作成されるすべての一時テーブルの名前の先頭に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティーは、一時テーブルの識別や管理に役立ちます。また、このプロパティーを使用することによって、一時テーブルを特定の場所に作成することができます。

例えば、ユーザー・トークンがスキーマと一致している場合、次のように設定できます。

```
TempTablePrefix="<USER>"
```

そして、すべての一時テーブルが、データ・ソースに接続されているあらゆるユーザーのスキーマで作成されます。

複数のデータ・ソースが同じデータベースを指し示す場合は、フローチャートの実行時にエラーが発生して正しくない検索結果が生成されます。その理由は、さまざまなプロセス・ボックスやフローチャートが同じ一時テーブルを使用するからです。この状態は、抽出プロセス・テーブルや戦略的セグメント・テーブルの場合も発生します。この状態を避けるには、`TempTablePrefix` (抽出テーブルの場合は `ExtractTablePrefix`) を使用して、データ・ソースごとに異なるスキーマを定義します。このようにすると、名前の先頭部分が違うので、必ず違うテーブル名になります。

例えば、各データ・ソースに UAC_DS1 や UAC_DS2 などの固有の TempTablePrefix を付けて、データ・ソースごとに一時テーブルを区別します。データ・ソース・スキーマを共有する場合も、これと同じ概念が適用されます。例えば、以下の接頭部を使用すると、同じデータベースに一時テーブルを書き込む両方のデータ・ソースで一時テーブルが一意になります。

DS1 TempTablePreFix: schemaA.UAC_DS1

DS2 TempTablePreFix: schemaA.UAC_DS2

TempTablePrefix で使用できるトークンを以下の表に記載します。

注**:** トークンの解決後の最終一時テーブル名が、データベース固有の名前長の制限を超えていないことを確認する必要があります。

注**:** TempTablePrefix に使用されるトークンで、データベース表名のために有効でない文字があれば、それらはすべてスキップされます。トークンの解決後、結果として得られる一時テーブル接頭部は、先頭の文字が英字でなければならず、残りは英数字または下線文字でなければなりません。正しくない文字があれば、警告が出されることなく除去されます。結果として得られる一時テーブル接頭部の先頭文字が英字でない場合、Campaign は接頭部の前に U の文字を付加します。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

`UAC`

TempTablePreTruncateExecutionSQL

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

注**:** このプロパティーは、Teradata データ・ソースによってのみサポートされています。サポートされているその他のどのデータベースにおいても、このプロパティーを設定しないようにしてください。

このプロパティーは、一時テーブル切り捨ての前に実行する SQL 照会を指定するために使用します。指定する照会は、**TempTablePostExecutionSQL** プロパティーで指定される SQL ステートメントの効果を打ち消すために使用できます。

例えば、**TempTablePostExecutionSQL** プロパティーを使用することにより、索引作成のための以下の SQL ステートメントを指定できます。

```
CREATE INDEX <TABLENAME>Idx_1 (<KEYCOLUMNS>) ON <TABLENAME>
```

その上で、**TempTablePreTruncateExecutionSQL** プロパティーに、索引をドロップするための以下の照会を指定します。

```
DROP INDEX <TABLENAME>Idx_1 ON <TABLENAME>
```

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL 照会

TempTablePreTruncateRunScript

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

注: このプロパティーは、Teradata データ・ソースによってのみサポートされています。サポートされているその他のどのデータベースにおいても、このプロパティーを設定しないようにしてください。

このプロパティーは、一時テーブルの切り捨ての前に実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。指定するスクリプトは、**PostTempTableCreateRunScript** プロパティーで指定される SQL ステートメントの効果を打ち消すために使用することができます。

例えば、**PostTempTableCreateRunScript** プロパティーを使用することにより、索引作成のための以下の SQL ステートメントを含むスクリプトを指定することができます。

```
CREATE INDEX <TABLENAME>Idx_1 (<KEYCOLUMNS>) ON <TABLENAME>
```

その上で、**TempTablePreTruncateRunScript** プロパティーに、索引をドロップするための以下のステートメントを含む別のスクリプトを指定します。

```
DROP INDEX <TABLENAME>Idx_1 ON <TABLENAME>
```

デフォルト値

定義されていません

有効な値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

TeradataDeleteBeforeDrop

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーは、Teradata データ・ソースにのみ適用されます。これは、テーブルをドロップする前にレコードを削除するかどうかを指定します。

テーブルをドロップする前に、テーブルからすべてのレコードを削除する場合は、値を `TRUE` に設定します。

注: 何らかの理由で IBM Campaign がレコードを削除できなかった場合、テーブルはドロップされません。

最初にすべてのレコードを削除することなく、テーブルをドロップする場合は、値を `FALSE` に設定します。

デフォルト値

`TRUE`

TruncateSQL

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーは、DB2 データ・ソースで使用可能であり、テーブルの切り捨てのための代替 SQL を指定するために使用します。このプロパティーは、**DeleteAsTruncate** が TRUE の場合にのみ適用されます。**DeleteAsTruncate** が TRUE の場合、このプロパティーにカスタム SQL が指定されているなら、テーブルの切り捨てには、それが使用されます。このプロパティーが設定されていない場合、IBM Campaign は、TRUNCATE TABLE <TABLENAME> の構文を使用します。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

TruncateSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<TABLENAME>	このトークンは、IBM Campaign が切り捨てるデータベース表名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Type

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーは、このデータ・ソースのデータベース・タイプを指定します。

デフォルト値

デフォルト値は、データ・ソース構成を作成するために使用されるデータベース・テンプレートに応じて異なります。

有効な値

システム・テーブルで有効なタイプは、以下のとおりです。

- `DB2`
- `DB2ODBC`
- `ORACLE`
- `ORACLE8`
- `ORACLE9`
- `SQLServer`

顧客テーブルで有効なタイプは、以下のとおりです。

- `BigDataODBC_Hive`
- `DB2`
- `DB2ODBC`

- NETEZZA
- ORACLE
- ORACLE8
- ORACLE9
- PostgreSQL
- SQLServer
- TERADATA

UOSQLOnConnect

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

SQLOnConnect プロパティーは、各データベース接続の直後に Campaign が実行する、完成された 1 個の SQL ステートメントを定義します。UOSQLOnConnect プロパティーはこれによく似ていますが、それは特に Contact Optimization 適用されます。

このプロパティーによって生成される SQL ステートメントは、構文チェックなしで自動的にデータベースに渡されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

UOSQLOnConnect で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

UseAliasForPredicate

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明　このプロパティーは、Hive ベースの Hadoop データ・ソース (BigDataODBCHiveTemplate) でのみ使用します。 IBM BigInsight Hadoop インスタンスに接続する場合には、値を TRUE に設定します。その他の Hive ベースの Hadoop インスタンスに接続する場合には、値を FALSE に設定します。

注: バージョン 10.1 にアップグレードする場合に、Hive ベースの Hadoop データ・ソースをすでに構成して使用しているのであれば、既存のインスタンスで変更を行う必要はありません。

デフォルト値

`FALSE`

有効な値

`TRUE | FALSE`

UseExceptForMerge

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

IBM Campaign によりマージ・プロセスまたはセグメント・プロセスでの排他操作が実行される場合、デフォルトとして次のような `NOT EXISTS` の構文が使用されます。

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE NOT EXISTS
(SELECT * FROM ExcludeTable WHERE IncludeTable.ID = ExcludeTable.ID)
```

UseExceptForMerge が TRUE であり、(**UseNotInForMerge** が無効になっているため、またはオーディエンス・レベルが複数のフィールドで構成されておりデータ・ソースが Oracle ではないため) `NOT IN` を使用できない場合、構文は以下のように変更されます。

Oracle

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable
MINUS (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)
```

その他

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable
EXCEPT (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)
```

Hive ベースの Hadoop ビッグデータの場合は、このプロパティーを `FALSE` にする必要があります。 Hive は `EXCEPT` 節に対応していないので、`TRUE` に設定するとプロセスが失敗するおそれがあります。

デフォルト値

`FALSE`

有効な値

TRUE | FALSE

UseGroupByForDistinct

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

UseGroupByForDistinct プロパティーは、Teradata データ・ソース・テンプレートで使用できます。デフォルトでは、このプロパティーは FALSE です。このプロパティーを有効にすると、<select query> で、DISTINCT の代わりに GROUP BY ステートメントが使用されます。

このプロパティーの目的: テーブルが IBM Campaign の正規化されたテーブルとしてマップされていない場合、フローチャートは「select DISTINCT <audience id> from <table>」という照会を実行して固有のレコードを取得します。このような照会を Teradata に対して実行すると、データベースで追加のデータ・ソートが発生し、大量の CPU が消費されます。 Teradata DBA は DISTINCT の代わりに GROUP BY を使用することを推奨しています。GROUP BY は、Teradata のマルチ AMP 処理アーキテクチャーを利用できるからです。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

UseMergeForTrack

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、フローチャートのトラッキング・プロセスのパフォーマンス向上のために、SQL MERGE 構文を実装します。
DB2、Oracle、SQL Server 2008、および Teradata 12 では、このプロパティーを TRUE に設定できます。SQL MERGE ステートメントをサポートするその他のデータベースでも使用できます。

デフォルト値

TRUE (DB2 および Oracle) | FALSE (その他すべて)

有効な値

TRUE | FALSE

UseNonANSIJoin

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

UseNonANSIJoin プロパティーは、このデータ・ソースで非 ANSI の結合構文を使用するかどうかを指定します。データ・ソースのタイプが Oracle7 または Oracle8 に設定されている場合、UseNonANSIJoin の値が TRUE に設定されているなら、データ・ソースにおいて Oracle に該当する非 ANSI の結合構文が使用されます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

UseNotInForMerge

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

IBM Campaign によりマージ・プロセスまたはセグメント・プロセスでの排他操作が実行される場合、デフォルトとして次のような NOT EXISTS の構文が使用されます。

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE NOT EXISTS (SELECT *
FROM ExcludeTable WHERE IncludeTable.ID = ExcludeTable.ID)
```

UseNotInForMerge が有効であり、(1) オーディエンス・レベルが単一の ID フィールドで構成されている、または (2) データ・ソースが Oracle である場合、構文は以下のように変更されます。

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE IncludeTable.ID NOT IN
(SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)
```

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

UseNotInToDeleteCH

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、IBM Campaign システム・テーブル・データ・ソース (UA_SYSTEM_TABLES) に影響します。さらに、MailList プロセスと CallList プロセスがレコードを IBM Campaign システム・テーブルから削除する方法に関する SQL 照会構文に影響します。

通常、デフォルト値の FALSE を使用するとデータベースのパフォーマンスが向上します。デフォルトの動作では、コンタクト履歴レコードを削除する際に EXISTS / NOT EXISTS を使用します (実行の失敗後か GUI でのユーザー・アクションに対する応答のいずれかにおいて)。削除プロセスには、UA_OfferHistAttrib からの削除や UA_OfferHistory の更新が含まれます。

IN / NOT IN の SQL 構文を使用する場合は、この値を TRUE に変更できます。旧バージョンの IBM Campaign では IN / NOT IN が使用されていました。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

UserBaseTablePostExecutionSQL

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、「新規マップ・テーブル」 > 「ベース・レコード・テーブル」 > 「選択したデータベースに新規テーブル作成」に書き込むようにプロセス・ボックスが構成されている場合に起動します。このプロパティーは、作成プロセスやマッピング・プロセス中にテーブルが作成される場合のみ起動します。このプロパティーは、プロセス・ボックスの実行時には起動しません。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーでは、セミコロンが、複数の SQL ステートメントを実行するための区切り文字として扱われます。SQL ステートメントにセミコロンが含まれていて、その全体を 1 つのステートメントとして実行するには、そのセミコロンの直前にエスケープ文字としてバックスラッシュ (円記号) を使用してください。

注: このプロパティーでストアード・プロシージャーを使用する場合は、対象のデータベースに該当する正しい構文を使用する必要があります。以下に示すのは、Oracle においてストアード・プロシージャーを呼び出す例ですが、セミコロンのエスケープにバックスラッシュ (円記号) を使用しています。 `begin dbms_stats.collect_table_stats()¥; end¥;`

この SQL ステートメントでは、<TABLENAME> の代わりにトークンを使用できます。キャンペーンの実行時にその名前が動的に生成されるからです。使用できるトークンについては、**UserTablePostExecutionSQL** を参照してください。

UserTablePostExecutionSQL

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|*dataSourcename*

説明

このプロパティーは、ユーザー・データ・ソースまたはシステム・テーブル・データベースでのユーザー・テーブルの作成直後に IBM Campaign に

よって実行される、1 つの SQL ステートメント全体を指定するために使用します。このプロパティーは、プロセス・ボックスが以下のいずれかのテーブルに書き込む場合に起動します。

- 「新規マップ・テーブル」 > 「その他のテーブル」 > 「選択したデータ・ソースにテーブルを新規作成 **(Create new table in selected datasource)**」: このプロパティーは作成/マッピングのプロセスで呼び出されます。スナップショットの実行時には呼び出されません。
- 「新規マップ・テーブル」 > 「ディメンション・テーブル」 > 「選択したデータベースに新規テーブル作成」: このプロパティーは作成/マッピングのプロセスで呼び出されます。スナップショットの実行時には呼び出されません。
- データベース表: このプロパティーは、プロセス・ボックスの実行時に起動します。

このプロパティーは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティーを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーでは、セミコロンが、複数の SQL ステートメントを実行するための区切り文字として扱われます。SQL ステートメントにセミコロンが含まれていて、その全体を 1 つのステートメントとして実行するには、そのセミコロンの直前にエスケープ文字としてバックスラッシュ (円記号) を使用してください。

注**:** このプロパティーでストアード・プロシージャーを使用する場合は、対象のデータベースに該当する正しい構文を使用する必要があります。以下に示すのは、Oracle においてストアード・プロシージャーを呼び出す例ですが、セミコロンのエスケープにバックスラッシュ (円記号) を使用しています。 `begin dbms_stats.collect_table_stats()¥; end¥;`

この SQL ステートメントでは、`<TABLENAME>` の代わりにトークンを使用できます。キャンペーンの実行時にその名前が動的に生成されるからです。

UserTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM Marketing Software ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、ユーザー・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル名に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

UseSQLToProfile

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーは、(`SELECT` *`field`*`, count(*) FROM` *`table`* `GROUP BY` *`field`* を使用して) プロファイルを計算するのに、レコードを取り出す代わりに、データベースに対して SQL 照会 `GROUP BY` をサブミットするよう、IBM Campaign を構成するために使用します。

- 値が `FALSE` (デフォルト) の場合、IBM Campaign は、テーブル中の全レコードについてフィールド値を取り出してフィールドのプロファイルを作成し、異なる各値のカウントを追跡します。
- 値が `TRUE` の場合、IBM Campaign は、以下のような照会を発行することにより、フィールドのプロファイルを作成します。

```
SELECT field, COUNT(*) FROM table GROUP BY field
```

これは、データベースに負荷をかけることになります。

デフォルト値

`FALSE`

有効な値

`TRUE | FALSE`

UseSQLToRetrieveSchema

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

このプロパティーでは、このデータ・ソースのテーブル・スキーマとして使用するスキーマを取り出すために、Campaign で ODBC 呼び出しやネイティブ API 呼び出しではなく SQL 照会を使用するかどうかを指定します。

デフォルト値は FALSE です。これは、Campaign が標準的な方法 (ODBC やネイティブ接続など) を使用してスキーマを取り出すよう指示するものです。このプロパティーを TRUE に設定すると、Campaign は、テーブル・スキーマを取り出すために `select * from <table>` のような SQL 照会を準備することになります。

これは、各データ・ソース固有の利点を提供するものとなります。例えば、一部のデータ・ソース (Netezza、SQL Server) の場合、デフォルトの ODBC またはネイティブ接続では SQL のシノニム (`create synonym` 構文を使用して定義されるデータベース・オブジェクトの代替名) のレポートが正しく作成されません。このプロパティーを TRUE に設定することにより、Campaign 内でのデータ・マッピングのための SQL シノニムが取り出されます。

以下のリストは、いくつかのデータ・ソースに対するこのプロパティーの設定値の動作を説明したものです。

- Hive ベースの Hadoop ビッグデータ: デフォルト設定の FALSE を使用します。
- Netezza: このプロパティーを TRUE に設定して、SQL シノニムのサポートを有効にします。 Netezza データ・ソースにおいて、シノニム・サポートのために、それ以外の設定や値は必要ありません。
- SQL Server: シノニムのサポートを有効にするために、このプロパティーを TRUE に設定し、なおかつ、このデータ・ソースの `TableListSQL` プロパティーに有効な SQL を入力します。詳しくは、`TableListSQL` プロパティーの説明を参照してください。
- Oracle: このプロパティーを TRUE に設定すると、Campaign は、テーブル・スキーマを取り出すための SQL 照会を準備します。結果セットでは `NUMBER` フィールド (精度/有効桁数の指定がないため Campaign では問題が発生する) が、`NUMBER(38)` として識別されるため、問題発生を回避できます。
- その他のデータ・ソースの場合、このプロパティーを TRUE に設定することにより、前述のデフォルトの SQL select 照会を使用したり、またはデフォルトとして使用される ODBC API やネイティブ接続の代わりに (またはそれらに加えて) 使用する有効な SQL を `TableListSQL` プロパティーで指定したりすることができます。詳しくは、`TableListSQL` プロパティーの説明を参照してください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

`TRUE | FALSE`

例

Campaign で Netezza または SQL Server シノニムが正常に動作するためには、

```
UseSQLToRetrieveSchema=TRUE
```

UseTempTablePool

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|dataSources|`*`dataSourcename`*

説明

`UseTempTablePool` が `FALSE` に設定されている場合、一時テーブルはドロップされ、フローチャートが実行されるたびに毎回再作成されます。プロパティーが `TRUE` に設定されている場合、一時テーブルがデータベースからドロップされません。一時テーブルは、切り捨てられた上で、Campaign によって維持されているテーブルのプールから再利用されます。一時テーブル・プールは、フローチャートを何度も再実行するような環境で最も効果的です (設計フェーズやテスト・フェーズなど)。

デフォルト値

`FALSE`

有効な値

`TRUE | FALSE`

Campaign | partitions | partition[n] | systemTableMapping

systemTableMapping カテゴリーのプロパティーには、システム・テーブルを再マップしたり、コンタクト履歴テーブルまたはレスポンス履歴テーブルをマップしたりする場合に自動的にデータが追加されます。このカテゴリーのプロパティーは編集しないでください。

Campaign | partitions | partition[n] | server

このカテゴリーには、選択したパーティションの IBM Campaign サーバーを構成するプロパティーが含まれています。

Campaign | partitions | partition[n] | server | systemCodes

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign において可変長コードを許容するかどうか、キャンペーンとセル・コードの形式とジェネレーター、オファー・コードを表示するかどうか、さらにはオファー・コードの区切り文字を指定します。

offerCodeDelimiter

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|systemCodes`

説明

`offerCodeDelimiter` プロパティーは、複数のコード・パーツを連結する場合 (例えば、Campaign 生成済みフィールドの「OfferCode」フィールドを出力する場合) や、Campaign レスポンス・プロセスの着信オファー・コードを複数のパーツに分割する場合に内部的に使用されます。値は、単一文字のみでなければなりません。

旧バージョンの Campaign には `NumberOfOfferCodesToUse` パラメーターが組み込まれていました。しかし、最近のバージョンでは、この値はオファ

ー・テンプレートから取得されます (オファー・テンプレートそれぞれのオファー・コード数は異なる可能性があります)。

デフォルト値

-

allowVariableLengthCodes

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|systemCodes

説明

allowVariableLengthCodes プロパティーは、可変長コードが Campaign で許容されるかどうかを指定します。

値が TRUE で、コード形式の末尾部分が x の場合、コードの長さは可変になります。例えば、コード形式が nnnnxxxx の場合、コード長が 4 文字から 8 文字までのコードが可能です。これは、キャンペーン、オファー、バージョン、トラッキング、セルの各コードに適用されます。

値が FALSE の場合には、可変長コードは許容されません。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

displayOfferCodes

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|systemCodes

説明

displayOfferCodes プロパティーは、Campaign GUI でオファー・コードの名前の横にオファー・コードを表示するかどうかを指定します。

値が TRUE の場合、オファーコードは表示されます。

値が FALSE の場合、オファー・コードは表示されません。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

cellCodeFormat

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|systemCodes

説明

cellCodeFormat プロパティーは、キャンペーン・コード・ジェネレーターが、デフォルトのセル・コード・ジェネレーターによって自動的に作成され

るセル・コードの形式を定義するために使用されます。有効値のリストについては、campCodeFormat を参照してください。

デフォルト値

Annnnnnnnn

campCodeFormat

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|systemCodes

説明

campCodeFormat プロパティーは、キャンペーン・コード・ジェネレーターが、ユーザーによるキャンペーン作成時にデフォルトのキャンペーン・コード・ジェネレーターによって自動的に生成されるキャンペーン・コードの形式を定義するために使用されます。

デフォルト値

Cnnnnnnnnn

有効な値

指定できる値は、以下のとおりです。

- A から Z または任意の記号 - 定数として扱われます
- a - A から Z までのランダムな文字 (大文字のみ)
- c - A から Z までのランダムな文字または 0 から 9 までの数値
- n - 0 から 9 までのランダムな数字
- x - 0 から 9 または A から Z までの任意の単一の ASCII 文字。生成されたキャンペーン・コードを編集し、Campaign が「x」に関して置換した ASCII 文字をさらに任意の ASCII 文字に置き換えて、Campaign が代わりにその文字を使用するようにできます。

cellCodeGenProgFile

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|systemCodes

説明

cellCodeGenProgFile プロパティーは、セル・コード・ジェネレーターの名前を指定します。生成されたコードの形式を制御するプロパティーは、cellCodeFormat プロパティーで設定します。サポートされるオプションのリストについては、campCodeGenProgFile を参照してください。

独自のセル・コード・ジェネレーターを作成する場合、そのカスタム・プログラムの絶対パスでデフォルト値を置換してください。絶対パスには、UNIX の場合にはスラッシュ (/)、Windows の場合には円記号 (¥) を使用してファイル名と拡張子を含めます。

デフォルト値

uaccampcodegen (Campaign 提供のコード・ジェネレーター)

campCodeGenProgFile

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|systemCodes`

説明

このプロパティーは、キャンペーン・コード・ジェネレーターの名前を指定します。生成されたコードの形式を制御するプロパティーは、`campCodeFormat` プロパティーで設定します。

独自のキャンペーン・コード・ジェネレーターを作成する場合、そのカスタム・プログラムの絶対パスでデフォルト値を置換してください。絶対パスには、UNIX の場合にはスラッシュ (/)、Windows の場合には円記号 (¥) を使用してファイル名と拡張子を含めます。

デフォルトのキャンペーン・コード・ジェネレーターでは、以下のオプションを指定して呼び出す操作が可能です。

- `-y` 年 (4 桁の整数)
- `-m` 月 (1 桁または 2 桁の整数。値を 12 より大きくできません)
- `-d` 日 (1 桁または 2 桁の整数。値を 31 より大きくできません)
- `-n` キャンペーン名 (任意のストリング。64 文字を超えることはできません)
- `-o` キャンペーン所有者 (任意のストリング。64 文字を超えることはできません)
- `-u` キャンペーン・コード (任意の整数)。アプリケーションに生成させるのではなく、ユーザーが正確なキャンペーン ID を指定できます。
- `-f` デフォルトを指定変更する場合のコード形式。「`campCodeFormat`」で指定された値になります。
- `-i` 他の整数。
- `-s` 他のストリング。

デフォルト値

`uaccampcodegen` (Campaign 提供のコード・ジェネレーター)

cellCodeBulkCreation

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|systemCodes`

説明

値を TRUE にすると、セル・コード・ジェネレーターを 1 回呼び出すだけで複数のセル・コードが生成されるので、セル・コードの大量作成時のセル・コード生成ユーティリティーのパフォーマンスが向上します。これはより効率的であり、推奨される設定です。また、フローチャート、テンプレート、およびプロセス・ボックスをコピーする際にも、値を TRUE にするとパフォーマンスが向上します。

値を FALSE にすると、セル・コードを生成するたびに 1 回ずつセル・コード・ジェネレーターが呼び出されます。「セグメント」プロセス・ボックス、「サンプル」プロセス・ボックス、「決定」プロセス・ボックス、また

はターゲット・セル・スプレッドシートにおいて、セル・コードの生成に長時間かかっているようにみえる場合は、この値を TRUE に設定してください。

デフォルトの設定は、既存のカスタマイズ済みの実装をサポートするために FALSE になっています。既存のカスタム・セル・コード生成ユーティリティーを使用している場合は、新しいカスタム・ユーティリティーを実装するまでの間は、この設定をデフォルト値の FALSE のままにしておいてください。実装が行われた後、値を TRUE に変更できます。

カスタム・セル・コード生成ユーティリティーを使用していない場合は、値を TRUE に変更して、効率を改善してください。

デフォルト値

`FALSE`

有効な値

`TRUE | FALSE`

Campaign | partitions | partition[n] | server | encoding

このカテゴリーのプロパティーは、ファイルに書き込まれる値に関して、英語以外のデータをサポートするテキスト・エンコードを指定します。

stringEncoding

説明

`partition[n] > server> encoding > stringEncoding` プロパティーは、Campaign がフラット・ファイルを読み込む方法と書き込み方法を指定します。すべてのフラット・ファイルで使用するエンコードが同じでなければなりません。どこにも構成しないと、フラット・ファイル・エンコードのデフォルトの設定になります。

注: `WIDEUTF-8` はこの設定ではサポートされていません。

デフォルトでは、値は何も指定されず、出力テキスト・ファイルは Campaign のデフォルトのエンコードである UTF-8 としてエンコードされます。

使用する値が暗黙のデフォルトと同じ UTF-8 であっても、システムに適切なエンコードにこの値を明示的に設定するのがベスト・プラクティスとなります。

注: `StringEncoding` プロパティーの値を `dataSources` カテゴリーのデータ・ソースで設定しないと、この `stringEncoding` プロパティーの値がデフォルト値として使用されます。これにより、不要な混乱が生じる可能性があります。`dataSources` カテゴリーでは、必ず `StringEncoding` プロパティーを明示的に設定してください。

サポートされるエンコードのリストについては、「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

forceDCTOneBytePerChar

説明

forceDCTOneBytePerChar プロパティーは、Campaign が UTF-8 にトランスコーディングするための十分なスペースを確保するために予約済みの拡張可能なフィールド幅ではなく、出力ファイルの元のフィールド幅を用いるかどうかを指定します。

テキスト値の長さは、表記に使用するエンコードによって異なる場合があります。stringEncoding プロパティーが ASCII でも UTF-8 でもないデータ・ソースに由来するテキスト値の場合、Campaign は UTF-8 にトランスコーディングするための十分なスペースを確保するためにフィールド幅の 3 倍を予約します。例えば、stringEncoding プロパティーが LATIN1 に設定され、データベースのフィールドが VARCHAR(25) と定義されている場合、Campaign はトランスコーディングされた UTF-8 値を保持するために 75 バイトを予約します。元のフィールド幅を用いる場合には、forceDCTOneBytePerChar プロパティーを TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | partitions | partition[n] | server | timeout

このカテゴリーのプロパティーは、ユーザーが切断してすべての実行作業が完了した後に Campaign フローチャートが終了するまでに待機する秒数、および Campaign サーバー・プロセスがエラーを報告するまでに外部サーバーからの応答を待機する秒数を指定します。

waitForGracefulDisconnect

説明

waitForGracefulDisconnect プロパティーは、Campaign サーバー・プロセスではユーザーが切断するまでは確実に実行を継続するのか、ユーザーに切断する意思があるかどうかに関係なく終了するのかを指定します。

値がデフォルトの yes の場合、サーバー・プロセスは、ユーザーが終了する意思があるかどうかはっきりするまで実行を継続します。このオプションを使用すると、変更内容が失われることがなくなりますが、サーバー・プロセスが累積してしまう恐れがあります。

値が no の場合、サーバー・プロセスはシャットダウンするので累積することはありませんが、ネットワーク中断が生じたり、正常に終了するために推奨されている操作手順に従わなかったりする場合には、作業内容が失われる可能性があります。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE| FALSE

urlRequestTimeout

説明

urlRequestTimeout プロパティーは、Campaign サーバー・プロセスが外部サーバーからの応答を待機する秒数を指定します。現在、この設定は Campaign を使用して作動する IBM Marketing Software サーバーと eMessage コンポーネントに対する要求に適用されます。

Campaign サーバー・プロセスがこの期間内に応答を受け取らないと、通信タイムアウト・エラーが報告されます。

デフォルト値

60

delayExitTimeout

説明

delayExitTimeout プロパティーは、ユーザーが切断してすべての実行作業が完了した後に、Campaign フローチャートが終了するまでに待機する秒数を指定します。

このプロパティーを「0」以外の値に設定すると、後続の Campaign フローチャートでは新しいインスタンスを開始するのではなく、既存のインスタンスを使用できるようになります。

デフォルト値

10

Campaign | partitions | partition[n] | server | collaborate

このカテゴリーは IBM Distributed Marketing に適用されます。

collaborateInactivityTimeout

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|collaborate

説明

collaborateInactivityTimeout プロパティーは、unica_acsvr プロセスが、Distributed Marketing 要求にサービス提供を終了してから閉じるまでの待機時間を秒単位で指定します。この待機期間によって、フローチャートを実行する前に Distributed Marketing が一連の要求を行うという一般的なシナリオにおいて、このプロセスを使用可能な状態のままにしておくことができます。

最小値は 1 です。このプロパティーを 0 に設定すると、デフォルトの 60 になります。

デフォルト値

60

logToSeparateFiles

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|collaborate`

説明

このプロパティーは v8.6.0.6 で導入されました。デフォルトでは、このパラメーターの値は False です。アップグレードした場合も False になります。

True にすると、Distributed Marketing から開始されたフローチャートの実行ログが、個別のログ・ファイルに記録されます。 1 つのフォルダーに多数のログ・ファイルが生成されることを避けるため、ログ・ファイルは現在日付のフォルダーの下に作成されます。フォルダー名の形式は「FlowchartRunLogs_<YYYYMMDD>」です。

ログ・ファイル名の形式は、<CAMP_NAME>_<CAMP_CODE>_<FC_NAME>_<PID>_<LIST_CODE>_<DATE>_<TIMESTAMP>.log です。PID は、フローチャートを実行した Campaign サーバー・プロセス ID です。 LIST_CODE は、フローチャートを実行した Distributed Marketing リスト、ONDC、または企業キャンペーンのオブジェクト・コードです。

フローチャート実行プロセスに渡されたすべてのユーザー変数は、トラブルシューティングのために記録されます。

注: フローチャートを開いた最初は、従来のフローチャート・ログ・ファイルにログは記録されます。 logToSeparateFiles が True である場合は、フローチャートの実行が Distributed Marketing から開始されたときに、新しいディレクトリーおよびファイルへのログの記録が行われます。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

Campaign | partitions | partition[n] | server | spss

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Campaign の指定されたパーティションの IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition 統合に影響を与えます。

SharedDirectoryPathCampaign

説明

IBM Campaign と IBM SPSS Modeler Server の間のデータ転送に使用するディレクトリーへのパス (IBM Campaign から確認できる)。

- IBM Campaign は、入力データ・ファイルをこのディレクトリーの IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition に置きます。

- IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition は、 IBM Campaign が読み取って処理できるよう、出力データ・ファイルをこのディレクトリーに置きます。

デフォルト値

なし

有効な値

任意の有効な Windows パス (`Z:¥SPSS_Shared` など) またはマウント・ディレクトリー (UNIX の場合)。

SharedDirectoryPathSPSS

説明

IBM Campaign と IBM SPSS Modeler Server の間のデータ転送に使用するディレクトリーへのパス (IBM SPSS Modeler Server から確認できる)。これは、`SharedDirectoryPathCampaign` によって参照される同じ共有ディレクトリーです。ただし、IBM SPSS Modeler Server によって使用されるローカル・ディレクトリー・パスです。

例えば、IBM Campaign が `SharedDirectoryPathCampaign = Z:¥SPSS_Shared` で Windows にインストールされるとします。`Z:¥SPSS_Shared` は、マップされたネットワーク・ドライブです。一方、IBM SPSS Modeler Server は、`SharedDirectoryPathSPSS = /share/CampaignFiles` として定義されているそのディレクトリーへのマウントで UNIX にインストールされます。

デフォルト値

なし

有効な値

任意の有効な Windows パス (`Z:¥SPSS_Shared` など) または UNIX の場合はマウント・ディレクトリー (`/share/CampaignFiles` など)

C&DS_URL

説明

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services リポジトリーの URL。

デフォルト値

`http://localhost:7001/cr-ws/services/ContentRepository`

有効な値

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services リポジトリーの URL。

SPSS_Integration_Type

説明

このプロパティーによって、IBM Campaign と IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition の間の統合のタイプが決まります。

デフォルト値

なし

有効な値

- なし: 統合なし
- SPSS MA Marketing Edition: モデリングおよびスコア設定の完全統合。このオプションは、IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition がインストールおよび構成されている場合にのみ選択できます。
- スコア設定のみ (Scoring only): スコア設定は有効になりますが、モデリングは有効になりません。

Campaign | partitions | partition[n] | server | permissions

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign および UNIX グループによって作成されるフォルダーの権限、および「プロファイル」ディレクトリー内のファイルの権限を指定します。

userFileGroup (UNIX のみ)

説明

このプロパティーは、ユーザー生成 Campaign ファイルに関連付けるグループを指定します。このグループが設定されるのは、ユーザーが指定のグループのメンバーである場合のみです。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

createFolderPermissions

説明

createFolderPermissions パラメーターは、テーブル・マッピングの「データ・ソース・ファイルを開く」ダイアログの「フォルダーの作成」アイコンを使用して、Campaign サーバー (partition[n] の場所) 上の Campaign によって作成されるディレクトリーの権限を指定します。

デフォルト値

755 (所有者には読み取り/書き込み/実行アクセス権があり、グループとワールドには実行/読み取りアクセス権があります)

catalogFolderPermissions

説明

catalogFolderPermissions プロパティーは、「保管テーブル・カタログ」>「フォルダー作成」ウィンドウを使用して Campaign によって作成されるディレクトリーの権限を指定します。

デフォルト値

755 (所有者には読み取り/書き込み/実行アクセス権があり、グループとワールドには実行/読み取りアクセス権があります)

templateFolderPermissions

説明

templateFolderPermissions プロパティーは、「テンプレート」>「フォルダー作成」ウィンドウを使用して、Campaign によって作成されるテンプレート・ディレクトリーの権限を指定します。

デフォルト値

755 (所有者には読み取り/書き込み/実行アクセス権があり、グループとワールドには読み取り/実行アクセス権があります)

adminFilePermissions (UNIX のみ)

説明

adminFilePermissions プロパティーは、「**プロファイル**」ディレクトリーに入るファイルの権限ビット・マスクを指定します。

デフォルト値

660 (所有者とグループには読み取り/書き込みアクセス権のみがあります)

userFilePermissions (UNIX のみ)

説明

userFilePermissions プロパティーは、ユーザー生成 Campaign ファイル (例えば、ログ・ファイル、サマリー・ファイル、エクスポート済みフラット・ファイル) の権限ビット・マスクを指定します。

デフォルト値

666 (サーバーで Campaign によって作成されるファイルはすべてのユーザーが読み取りおよび書き込みできます)

adminFileGroup (UNIX のみ)

説明

adminFileGroup プロパティーは、「**プロファイル**」ディレクトリーに入るファイルと関連付ける UNIX 管理グループを指定します。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | server | flowchartConfig

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign 生成済みフィールドの動作、複製セル・コードが許可されるかどうか、および「コンタクト履歴テーブルに記録」オプションのデフォルトを有効にするかどうかを指定します。

allowDuplicateCellcodes

説明

allowDuplicateCellcodes プロパティーは、Campaign スナップショット・プロセスのセル・コードで複製値を許可するかどうかを指定します。

値が FALSE の場合、Campaign サーバーでは固有のセル・コードが強制されます。

値が TRUE の場合、Campaign サーバーでは固有のセル・コードは強制されません。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

allowResponseNDaysAfterExpiration

説明

allowResponseNDaysAfterExpiration プロパティーは、すべてのオファーの有効期限後に応答を追跡可能な最大日数を指定します。こうした戻りの遅い応答は、パフォーマンス・レポートに含められる可能性があります。

デフォルト値

90

agfProcessnameOutput

説明

agfProcessnameOutput プロパティーは、リスト、最適化、応答、スナップショットの各プロセスにおける Campaign 生成済みフィールド (UCGF) の出力動作を指定します。

値が PREVIOUS の場合、UCGF には着信セルに関連するプロセス名が入ります。

値が CURRENT の場合、UCGF は使用しているプロセスのプロセス名を保持します。

デフォルト値

PREVIOUS

有効な値

PREVIOUS | CURRENT

logToHistoryDefault

説明

logToHistoryDefault プロパティーは、Campaign コンタクト・プロセスの「ログ」タブにある「コンタクト履歴テーブルおよびトラッキング・テーブルに記録 (Log to Contact History and Tracking Tables)」オプションをデフォルトで有効にするかどうかを指定します。

値が TRUE の場合、このオプションは有効になります。

値が FALSE の場合、このオプションは新しく作成されるコンタクト・プロセスではすべて無効になります。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

overrideLogToHistory

説明　このプロパティーは、適切な権限を持つユーザーが、コンタクト・プロセスまたはトラッキング・プロセスを構成する際に「コンタクト履歴テーブルに記録」設定を変更できるかどうかを制御します。すべてのフローチャート実稼働実行がコンタクト履歴に常に書き込まれるようにするには、「logToHistoryDefault」を有効にし、「overrideLogToHistory」を無効にします。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

defaultBehaviorWhenOutputToFile

説明

ファイルへの出力時における、Campaign のコンタクト・プロセスの動作を指定します。このプロパティーが適用されるのは、現行パーティションのみです。設定時のデフォルトの動作の適用対象となるのは、フローチャートに新しく追加される際のプロセスのみです。プロセスがフローチャートに追加されると、出力動作はプロセス構成で変更が可能です。

デフォルト値

レコード置換

有効な値

- データ追記
- 新規ファイル作成
- レコード置換

defaultBehaviorWhenOutputToDB

説明

データベース表への出力時における、Campaign のコンタクト・プロセスの動作を指定します。このプロパティーが適用されるのは、現行パーティションのみです。設定時のデフォルトの動作の適用対象となるのは、フローチャートに新しく追加される際のプロセスのみです。プロセスがフローチャートに追加されると、出力動作はプロセス構成で変更が可能です。

デフォルト値

レコード置換

有効な値

- データ追記
- レコード置換

replaceEmbeddedNames

説明

replaceEmbeddedNames が TRUE である場合、Campaign は照会テキストに組み込まれているユーザー変数と UCGF 名を実際の値に置き換えますが、それらの名前はアンダースコアーなどの非英数字で区切られている必要があります (例えば、ABC_UserVar.v1 は置換されますが、ABCUserVar.v1 は置換されません)。 Campaign 7.2 以前との後方互換性を持たせるには、このプロパティーを TRUE に設定してください。

FALSE に設定すると、Campaign が実際の値に置換するのは識別可能なユーザー変数と UCGF 名 (IBM Marketing Software 式および未加工の SQL 式) のみです。 Campaign 7.3 以降との後方互換性を持たせるには、このプロパティーを FALSE に設定してください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

legacyMultifieldAudience

説明

ほとんどの場合、このプロパティーはデフォルト値の FALSE に設定されたままにしておくことができます。Campaign v8.5.0.4 以降では、マルチフィールド・オーディエンスの ID のフィールドの名前が、そのフィールドのソースに関係なく、オーディエンス定義に応じた名前になります。マルチフィールド・オーディエンスの ID のフィールドを使用するようにプロセスを構成する際は、マルチフィールド・オーディエンスの新しいオーディエンス ID 命名規則を参照してください。以前のバージョンの Campaign で作成されたフローチャート内の既に構成済みのプロセスは引き続き機能するはずです。しかし、この命名規則の変更のために古いフローチャートが失敗する場合は、このプロパティーを TRUE に設定することによって、Campaign の動作を以前の動作に戻すことができます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | partitions | partition[n] | server | flowchartSave

このカテゴリーのプロパティーは、新しい Campaign フローチャートの自動保存プロパティーとチェックポイント・プロパティーのデフォルトの設定を指定します。

checkpointFrequency

説明

checkpointFrequency プロパティーは、新しい Campaign フローチャートのチェックポイント・プロパティーのデフォルトの設定を分単位で指定します。これは、クライアント側の「詳細設定」ウィンドウからフローチャートごとに構成できます。チェックポイント機能により、リカバリーのために実行中のフローチャートのスナップショットを取得できます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

任意の整数

autosaveFrequency

説明

autosaveFrequency プロパティーは、新しい Campaign フローチャートの自動保存プロパティーのデフォルトの設定を分単位で指定します。これは、クライアント側の「詳細設定」ウィンドウからフローチャートごとに構成できます。自動保存機能によって、編集および構成中のフローチャートの強制保存が実行されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

任意の整数

Campaign | partitions | partition[n] | server | dataProcessing

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Campaign がフラット・ファイル内のストリング比較と空フィールドを処理する方法、およびマクロ STRING_CONCAT の動作を指定します。

longNumericIdsAsText

説明

longNumericIdsAsText プロパティーは、Campaign マクロ言語が、15 桁を超える数値 ID をテキストとして扱うかどうかを指定します。このプロパティーは、ID フィールドに影響を与えます。 ID ではないフィールドには影響を与えません。このプロパティーは、15 桁を超える数値 ID フィールドを保持しており、かつ、基準に ID 値を組み込みたい場合に役立ちます。

- 値を TRUE に設定すると、15 桁を超える数値 ID はテキストとして処理されます。
- 値を FALSE に設定すると、15 桁を超える数値 ID は数値として処理されるので、切り捨てや丸めが行われると精度や固有性が失われる可能性があります。 ID 値を数値として扱う任意の処理 (プロファイル作成

や、ユーザー定義フィールドで使用する場合など) を行う場合、テキストは数値に変換され、15 桁を超える精度は失われます。

注: ID ではない数値フィールドの場合、値を数値として扱う任意の処理 (プロファイル作成、丸め、またはユーザー定義フィールドで使用する場合など) を行う場合、15 桁を超える精度は失われます。

この設定は、対象のデータ・ソースに由来するフィールドで partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > ForceNumeric プロパティーを TRUE に設定すると無効になります。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

stringConcatWithNullIsNull

説明

stringConcatWithNullIsNull プロパティーは、Campaign マクロ STRING_CONCAT の動作を制御します。

値が TRUE の場合、STRING_CONCAT のいずれかの入力が NULL であると、NULL を戻します。

値が FALSE の場合、STRING_CONCAT は NULL 以外のすべてのプロパティーを連結した値を戻します。その場合、STRING_CONCAT のすべての入力が NULL であれば、NULL だけを戻します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

performCaseInsensitiveComparisonAs

説明

performCaseInsensitiveComparisonAs プロパティーは、compareCaseSensitive プロパティーが no に設定されている場合 (つまり、大/小文字を区別しない比較の場合)、Campaign がデータ値を比較する方法を指定します。compareCaseSensitive の値が yes の場合には、このプロパティーは無視されます。

値が UPPER の場合、Campaign はすべてのデータを大文字に変換してから比較を行います。

値が LOWER の場合、Campaign はすべてのデータを小文字に変換してから比較を行います。

デフォルト値

LOWER

有効な値

UPPER | LOWER

upperAllowsDate

説明

upperAllowsDate プロパティーは、 UPPER データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を TRUE に設定します。これらのデータベースでは、UPPER 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが DB2 または Teradata の場合には、値を FALSE に設定します。これらのデータベースでは、UPPER 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

compareCaseSensitive

説明

compareCaseSensitive プロパティーは、Campaign データ比較において英字の大/小文字 (UPPER と lower) を区別するかどうかを指定します。

値が FALSE の場合、Campaign では、データ値の比較の際に大/小文字の違いが無視され、バイナリーのテキスト・データは大/小文字を区別しない方法でソートされます。英語データを使用する場合には、この設定を強くお勧めします。

値が TRUE の場合、Campaign は大/小文字を区別してデータ値を識別し、それぞれの文字の実際のバイナリー値比較を行います。英語以外のデータを使用する場合には、この設定を強くお勧めします。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

lowerAllowsDate

説明

lowerAllowsDate プロパティーは、 LOWER データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を TRUE に設定します。これらのデータベースでは、LOWER 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが DB2 または Teradata の場合には、値を FALSE に設定します。これらのデータベースでは、LOWER 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。通常、顧客のサイトで使用されているデータベース・タイプは 1 つだけですが、複数のデータベース・タイプが使用されているインストール環境もあります。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

substrAllowsDate

説明

substrAllowsDate プロパティーは、 SUBSTR/SUBSTRING データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが Oracle または Teradata の場合には、値を TRUE に設定します。これらのデータベースでは、SUBSTR/SUBSTRING 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが SQL Server または DB2 の場合には、値を FALSE に設定します。これらのデータベースでは、SUBSTR/SUBSTRING 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

ltrimAllowsDate

説明

ltrimAllowsDate プロパティーは、 LTRIM データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server、Oracle、Teradata の場合には、値を TRUE に設定します。これらのデータベースでは、LTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが DB2 の場合には、値を FALSE に設定します。このデータベースでは、LTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。通常、顧客のサイトで使用されているデータベース・タイプは 1 つだけですが、複数のデータベース・タイプが使用されているインストール環境もあります。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

rtrimAllowsDate

説明

rtrimAllowsDate プロパティーは、 RTRIM データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server、Oracle、Teradata の場合には、値を TRUE に設定します。これらのデータベースでは、RTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが DB2 の場合には、値を FALSE に設定します。このデータベースでは、RTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

likeAllowsDate

説明

likeAllowsDate プロパティーは、 LIKE データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を TRUE に設定します。これらのデータベースでは、LIKE 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが DB2 または Teradata の場合には、値を FALSE に設定します。これらのデータベースでは、LIKE 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

注: これはグローバルの設定で、データ・ソース単位の設定ではありません。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

fileAllSpacesIsNull

説明

fileAllSpacesIsNull プロパティーは、フラット・ファイル内のすべてのスペース値を NULL 値と見なすかどうかを指定することによって、Campaign がマップ済みフラット・ファイル内の空フィールドをインタープリットする方法を指定します。

値が TRUE の場合、すべてのスペース値は NULL 値と見なされます。Campaign は <field> is null のような照会を突き合わせますが、<field> = "" などの照会では失敗します。

値が FALSE の場合、すべてのスペース値は NULL ではない空ストリングとして処理されます。Campaign は <field>= "" のような照会を突き合わせますが、<field> is null という照会では失敗します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | partitions | partition[n] | server | optimization

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Campaign サーバーの各パーティションの最適化を制御します。

注: このカテゴリーは、IBM Contact Optimization には関連しません。

maxVirtualMemory

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|optimization`

説明

このプロパティーは、フローチャートの実行時に使用するシステム仮想メモリーの最大量のデフォルト値を指定します。この値を大きくするとパフォーマンスが向上し、この値を小さくすると単一のフローチャートによって使用されるリソースを制限することができます。最大値は 4095 MB です。これより大きな値を入力すると、Campaign により自動的に 4095 MB に制限されます。

(80% x 使用可能メモリー) / (同時に実行されるフローチャートの予想数) と等しくなるように値を設定します。以下に例を示します。

サーバー上で使用可能な仮想メモリー = 32 GB

同時に実行されるフローチャートの数 = 10

設定する仮想メモリー = (80 % x 32) / 10 = 約 2.5 GB / フローチャート

デフォルト値

128 (MB)

maxVirtualMemory は、グローバル構成設定です。特定のフローチャートの値をオーバーライドするには、フローチャートを編集モードで開き、「管理」メニュー から「詳細設定」を選択し、「サーバー最適化」タブを選択し、「**IBM Campaign** による仮想メモリー使用量」の値を選択します。

useInDbOptimization

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|optimization`

説明

このプロパティーは、IBM Campaign が、Campaign サーバーではなくデータベースで可能な限り多くの操作の実行を試行するかどうかを指定します。

値を `TRUE` に設定することにより、フローチャートのパフォーマンスを向上させることができます。値が `TRUE` の場合、IBM Campaign では ID リストのプルを可能な限り行わないようにします。

値が「`FALSE`」の場合、IBM Campaign では、IBM Campaign サーバーにある ID のリストが常時維持されます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

maxReuseThreads

構成カテゴリー

Campaign | partitions | partition[n] | server | optimization

説明

このプロパティーは、サーバー・プロセス (unica_acsvr) が再使用するためにキャッシュに入れるオペレーティング・システム・スレッドの数を指定します。デフォルトでは、キャッシュは無効になっています。

スレッドの割り振りによって生じるオーバーヘッドを削減する場合や、アプリケーションの依頼に応じてスレッドを解放できないようにするオペレーティング・システムの場合には、キャッシュを使用するのがベスト・プラクティスと言えます。

maxReuseThreads プロパティーがゼロ以外の値の場合、設定値を **MaxQueryThreads** の値以上にしなければなりません。

デフォルト値

0 (ゼロ)。キャッシュが無効になります

threadStackSize

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|optimization

説明

このプロパティーは、各スレッドのスタックに割り当てられるバイト数を決定します。このプロパティーは、IBM からの指示がある場合以外には変更しないでください。最小値は 128 K です。最大値は 8 MB です。

デフォルト値

1048576

tempTableDataSourcesForSegments

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|optimization

説明

このプロパティーは、セグメント作成プロセスが永続セグメント一時テーブルを作成できるデータ・ソースのリストを定義します。コンマ区切りリストになります。デフォルトでは、このプロパティーはブランクです。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

doNotCreateServerBinFile

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|optimization

説明

パフォーマンスを向上させるには、このプロパティーを TRUE に設定します。このプロパティーが TRUE になっている場合、戦略セグメントは、IBM Campaign サーバーにバイナリー・ファイルを作成する代わりに、データ・ソースにセグメント一時テーブルを作成します。セグメント化プロセス構成ダイアログで、一時テーブルを収容するデータ・ソースを少なくとも 1 つ指定する必要があります。また、「AllowTempTables」プロパティーを TRUE に設定して、データ・ソースでの一時テーブルの作成を有効にすることも必要です。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

forceViewForPreOptDates

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|optimization

説明

デフォルト値 (TRUE) は、Optimize からオファーが割り当てられた「メール・リスト」プロセスで、パラメーター化されたオファー属性ビューを強制的に作成します。値 FALSE は、メール・リストが少なくとも 1 つのパラメーター化されたオファー属性をエクスポートする場合にのみ、パラメーター化されたオファー属性ビューを作成します。

この値を FALSE に設定すると、(ソースが最適化セッションである) 抽出プロセスから入力値を取得するよう構成された「メール・リスト」プロセスが、パラメーター化された開始日と終了日がオファーに組み込まれている場合であっても、UA_Treatment テーブルに対して EffectiveDate と ExpirationDate に NULL 値を書き込む可能性があります。この場合は、TRUE に設定し直します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

httpCompressionForResponseLength

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|optimization

説明

このプロパティーは、フローチャート固有のメッセージを対象に、IBM Campaign Web アプリケーションからクライアント・ブラウザーへの HTTP 応答の圧縮を有効にしたり構成したりします。 Campaign Web アプリケーションは、このプロパティーをパーティションごとに 1 度だけ読み取ります。このプロパティーを変更した場合、Web アプリケーションを再始動して、その変更を有効にする必要があります。

圧縮すると、HTTP を介して送信されるデータの量が減るので、ページ・ロードの時間や対話単位時間を改善できます。

データの長さが `httpCompressionForResponseLength` の値 (KB 単位) 以上の応答はすべて圧縮の候補になります。その他の応答はいずれも圧縮されません。

圧縮すると、ネットワーク転送は減りますが、サーバー・サイドのリソースは必要になります。したがって圧縮は、データが大量で、使用可能なサーバー・サイドのリソースが十分ある場合のみ意味があります。ネットワーク遅延が発生して大量のデータ転送が低速になることがよくある場合は、特定の量のデータのロードに要する時間の長さを分析することができます。例えば、HTTP 要求の一部のサイズが 100 KB 未満だが、ほとんどは 300 KB から 500 KB の間だと仮定します。この場合、このプロパティーの値を大きくして 500 KB にし、サイズが 500 KB 以上の応答のみ圧縮されるようにします。

圧縮を無効にするには、値を 0 に設定します。

デフォルト値

`100` (KB)

有効な値

`0` (圧縮は無効) 以上

cacheSystemDSQueries

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|optimization`

説明

パフォーマンスを向上させるには、この値を TRUE に設定します。 TRUE に設定すると、このプロパティーは、照会結果をキャッシュに入れることで、IBM Campaign システム・テーブルに対して照会が何度も実行されないようにします。 FALSE に設定すると、照会の結果はキャッシュに入れられません。

デフォルト値

`TRUE`

有効な値

`TRUE | FALSE`

Campaign | partitions | partition[n] | server | logging

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Campaign サーバーの、指定されたパーティションのフローチャート・ロギング動作に影響を与えます。

enableWindowsEventLogging

説明

このプロパティーは、Windows イベント・ログに対する IBM Campaign サーバー・ロギングを有効にするか無効にするかを指定します。

値が TRUE の場合、Windows イベント・ログへのロギングが有効になります。

値が FALSE の場合、Windows イベント・ログへのロギングは無効であり、**windowsEventLoggingLevel** および **windowsEventLoggingCategory** の設定は無視されます。

重要: Windows イベント・ロギングが原因で、フローチャートの実行に問題が発生する可能性があります。技術サポートから指示されない限り、このフィーチャーを有効にしないでください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

logFileBufferSize

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|logging

説明

このプロパティーは、**keepFlowchartLogOpen** が TRUE の場合に使用されます。ログに書き込まれる前に、バッファーに送られるメッセージの数を示す値を指定します。値が 1 の場合、すべてのログメッセージは即時にファイルに書き込まれ、バッファリングは事実上無効になりますが、パフォーマンスに悪影響があります。

keepFlowchartLogOpen が FALSE の場合には、このプロパティーは無視されます。

デフォルト値

5

keepFlowchartLogOpen

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|logging

説明

このプロパティーは、ログ・ファイルに行が書き込まれるたびに、フローチャート・ログ・ファイルを IBM Campaign が開いて閉じるかどうかを指定します。

値 TRUE は、リアルタイムの対話式フローチャートのパフォーマンスを向上する可能性があります。値が TRUE の場合、IBM Campaign はフローチャート・ログ・ファイルを一度だけ開き、フローチャート・サーバー・プロセ

スの終了時に閉じます。 TRUE の値を使用する副作用としては、ログに記録されたばかりのメッセージがログ・ファイルに直ちに表示されないことがあります。IBM Campaign がログ・メッセージをファイルにフラッシュするのは、内部バッファーが満杯になったか、ログ・メッセージ数が logFileBufferSize プロパティーの値と等しくなった場合だけであるためです。

値が FALSE の場合、IBM Campaign はフローチャート・ログ・ファイルを開いてから閉じます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

logProcessId

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|logging

説明

このプロパティーは、IBM Campaign サーバー・プロセスのプロセス ID (PID) をログ・ファイルに組み込むかどうかを制御します。

値が TRUE の場合、プロセス ID はログに記録されます。

値が FALSE の場合には、プロセス ID は記録されません。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

logMaxBackupIndex

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|logging

説明

このプロパティーは、Campaign サーバーのバックアップ・ログ・ファイルのうち最も古いものが削除される前に保持されるバックアップ・ログ・ファイルの数を指定します。

値が 0 (ゼロ) の場合、バックアップ・ファイルは作成されず、logFileMaxSize プロパティーで指定されたサイズに達するとログ・ファイルは切り捨てられます。

ゼロより大きい値である n の場合、ファイル {File.1, ..., File.n-1} は {File.2, ..., File.n} に名前変更されます。また File は File.1 と名前変更されて閉じられます。次のログ出力を受信する場合に備え、新しい File が作成されます。

デフォルト値

1 (バックアップ・ログ・ファイルが 1 つ作成されます)

loggingCategories

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|logging

説明

このプロパティーは、IBM Campaign サーバーのフローチャート・ログ・ファイルに書き込まれるメッセージのカテゴリーを指定します。このプロパティーは、選択したすべてのカテゴリーを対象にログに記録するメッセージの重大度を判別する **loggingLevels** と連動します。

コンマ区切りリストに 1 つ以上のカテゴリーを指定します。すべてのカテゴリーをログに記録することを簡単に指示するには、ALL を使用します。

指定した値により、すべてのフローチャートを対象にデフォルトでログに記録されるイベントが判別されます。ユーザーは、編集対象のフローチャートを開き、「オプション」 > 「ログ・オプション」を選択して、デフォルトの選択内容をオーバーライドできます。下記では、各構成値の後に、対応するログ・オプションを括弧の中に示します。

デフォルト値

ALL

有効な値

ALL

BAD_ORDER (ID の順序付けのエラーのログ)

CELL_ACCESS (セル・レベルの操作)

CONFIG (実行開始時の構成設定のログ)

DATA_ERRORS (データ変換エラーのログ)

DBLOAD (外部 DB ローダーの操作)

FILE_ACCESS (ファイル操作)

GENERAL (その他)

COMMANDS (外部インターフェース)

MEMORY (メモリー割り振り)

PROCRUN (プロセスの実行)

QUERY (ユーザー・テーブルに対する照会の発行)

SORT (データのソートの進行状況のログ)

SYSQUERY (システム・テーブルに対する照会の発行)

TABLE_ACCESS (テーブル・レベルの操作)

TABLE_MAPPING (実行開始時のテーブル・マッピング情報のログ)

TABLE_IO (データ入出力プロセスのログ)

WEBPROC (Web サーバー・インターフェース)

loggingLevels

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|logging

説明

loggingLevels プロパティーは、重大度に基づいて、Campaign サーバー・ログ・ファイルに書き込む詳細度を制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

LOW: 最も低い詳細度 (最も重大なエラーのみ) を表します。

MEDIUM

HIGH

ALL: トレース・メッセージを含み、主に診断を目的としています。

注**:** 構成およびテストの際には、**loggingLevels** を ALL に設定するとよいかもしれません。この値にすると大量のデータが生成されるので、実稼働操作にはお勧めできない場合があります。ロギング・レベルをデフォルトより高く設定すると、パフォーマンスに悪影響が及ぶ可能性があります。

「ツール」 > 「ログ・オプション」を使用して、フローチャート内からこれらの設定を調整できます。

windowsEventLoggingCategories

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|logging

説明

このプロパティーは、Campaign サーバーの Windows イベント・ログに書き込まれるメッセージのカテゴリーを指定します。このプロパティーは、すべての選択したカテゴリーの重大度に基づいてログに記録するメッセージを判別する **windowsEventLoggingLevels** と連動します。

複数のカテゴリーをコンマ区切りリストで指定できます。カテゴリー all を使用すると、すべてのロギング・カテゴリーを素早く指定できます。

デフォルト値

ALL

有効な値

ALL

BAD_ORDER

CELL_ACCESS

CONFIG

DATA_ERRORS

DBLOAD

FILE_ACCESS

GENERAL

COMMANDS

MEMORY

PROCRUN

QUERY

SORT

SYSQUERY

TABLE_ACCESS

TABLE_MAPPING

TABLE_IO

WEBPROC

logFileMaxSize

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|logging

説明

このプロパティーは、Campaign サーバー・ログ・ファイルに許可されるバイト単位の最大サイズを指定します。このサイズに達すると、バックアップ・ファイルにロールオーバーされます。

デフォルト値

10485760 (10 MB)

windowsEventLoggingLevels

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|logging

説明

このプロパティーは、IBM Campaign サーバーの Windows イベント・ログに書き込む詳細度を重大度に基づいて制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

LOW: 最も低い詳細度 (最も重大なエラーのみ) を表します。

MEDIUM

HIGH

ALL: トレース・メッセージを含み、診断を目的としています。

enableLogging

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|logging

説明

このプロパティーは、 IBM Campaign サーバー・ロギングをセッション始動時に有効にするかどうかを指定します。

値が TRUE の場合、ロギングが有効になります。

値が FALSE の場合、ロギングは無効です。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

AllowCustomLogPath

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|logging

説明

このプロパティーを使用すると、ユーザーは、実行時にフローチャート固有のロギング情報を生成する各フローチャートのログ・パスを変更できます。デフォルトでは、すべてのフローチャート・ログ・ファイルは Campaign_home/partitions/partition_name/logs 内に保存されます。

TRUE に設定すると、ユーザーは、ユーザー・インターフェースを使用して、あるいは unica_svradm を使用してフローチャートを実行する際に、パスを変更できるようになります。

FALSE に設定すると、ユーザーは、フローチャート・ログ・ファイルの書き込み先のパスを変更できなくなります。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | partitions | partition[n] | server | flowchartRun

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign スナップショットのエクスポートで許容されるエラー数、フローチャートの保存時に保存されるファイル、およびテスト実行の最上位プロセスごとの最大 ID 数を指定します。

maxDataErrorsAllowed

説明

maxDataErrorsAllowed プロパティーは、Campaign スナップショットのエクスポートで許容されるデータ変換エラーの最大数を指定します。

デフォルト値

0 (ゼロ)。エラーは許容されません。

saveRunResults

説明

このプロパティーを使用すると、Campaign フローチャートの実行結果を一時フォルダーやデータベース一時テーブルに保存できます。フローチャートの編集時に「管理」 > 「詳細設定」を使用して、個々のフローチャートに対するオプションを調整できます。

保存することが必要な成果物を作成するフローチャートの場合、**saveRunResults** を TRUE に設定しなければなりません。例えば、「セグメント化」プロセスを含むフローチャートがある場合、実行結果を保存しなければなりません。実行結果を保存しないと、戦略的セグメントは永続しません。

値が TRUE の場合には、フローチャート (アンダースコアー) ファイルが保存され、**useInDbOptimization** を使用するとデータベース一時テーブルが永続します。

値が FALSE の場合、保存されるのは .ses ファイルだけです。したがって、フローチャートを再ロードしても中間結果は表示できません。

IBM Campaign は一時ディレクトリー内に多数の一時ファイルを作成するので、ファイル・システムの使用率が高くなることがあり、いっぱいになることさえあります。このプロパティーを FALSE に設定すると、フローチャートの実行の完了後にこれらのファイルがクリーンアップされます。しかし、FALSE の設定を使用すると、フローチャートを一部だけ実行することはできなくなるので、常に適しているとは限りません。

ディスク・スペースを節約するには、独自のスクリプトを作成して一時フォルダー内のファイルを削除することができますが、現在実行中のフローチャートに関するファイルは決して削除しないでください。フローチャートが失敗ないようにするには、当日更新または作成された一時フォルダーからファイルを決して削除しないでください。保守の目的で、まる 2 日以上経過した一時フォルダーからファイルを削除できます。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

testRunDefaultSize

説明

testRunDefaultSize プロパティーは、Campaign テスト実行における最上位プロセスごとの最大 ID 数のデフォルトを指定します。値が 0 (ゼロ) の場合、ID 数に制限はありません。

デフォルト値

0 (ゼロ)

Campaign | partitions | partition[n] | server | profile

このカテゴリーのプロパティーは、数値およびテキスト値のプロファイル作成時に Campaign で作成される最大カテゴリー数を指定します。

profileMaxTextCategories

説明

profileMaxTextCategories プロパティーと profileMaxNumberCategories プロパティーは、テキスト値と数値のプロファイル作成時に Campaign で作成される最大カテゴリー数をそれぞれ指定します。

ユーザーに表示される bin 数の設定 (ユーザー・インターフェースで変更可能です) によって、これらの値は異なります。

デフォルト値

1048576

profileMaxNumberCategories

説明

profileMaxNumberCategories プロパティーと profileMaxTextCategories プロパティーは、数値とテキスト値のプロファイル作成時に Campaign で作成される最大カテゴリー数をそれぞれ指定します。

ユーザーに表示される bin 数の設定 (ユーザー・インターフェースで変更可能です) によって、これらの値は異なります。

デフォルト値

1024

Campaign | partitions | partition[n] | server | internal

このカテゴリーのプロパティーは、選択された Campaign パーティションの統合設定と internalID の制限を指定します。 Campaign のインストール済み環境に複数のパーティションがある場合は、反映させるパーティションごとにこれらのプロパティーを設定します。

internalIdLowerLimit

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|internal

説明

internalIdUpperLimit プロパティーと internalIdLowerLimit プロパティーは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。それらのプロパティーでは境界上の値が含まれるので、Campaign は上限と下限のどちらの値も使用できます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

internalIdUpperLimit

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|internal

説明

internalIdUpperLimit プロパティーと internalIdLowerLimit プロパティーは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。指定された値も範

囲に含まれます。すなわち、Campaign は、上限値と下限値の両方を使用できます。Distributed Marketing がインストールされている場合は、この値を 2147483647 に設定してください。

デフォルト値

4294967295

eMessageInstalled

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|internal

説明

eMessage がインストールされていることを示します。「**はい**」を選択すると、eMessage 機能が Campaign インターフェースで使用できます。

IBM インストーラーは、eMessage インストールのデフォルトのパーティションに関してこのプロパティーを「**はい**」に設定します。 eMessage をインストールした追加パーティションについては、このプロパティーを手動で構成する必要があります。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | **いいえ**

interactInstalled

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|internal

説明

Interact 設計環境をインストール後、この構成プロパティーを「**はい**」に設定し、Campaign で Interact 設計環境を有効にしてください。

Interact がインストールされていない場合、「**いいえ**」に設定してください。このプロパティーを「**いいえ**」に設定しても、Interact メニューとオプションがユーザー・インターフェースから削除されることはありません。メニューとオプションを削除するには、configTool ユーティリティーを使用して Interact を手動で登録抹消しなければなりません。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

使用可能性

このプロパティーは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

MO_UC_integration

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

「プラットフォーム」構成設定で統合が有効な場合、このパーティションで Marketing Operations との統合を有効にします。詳しくは、「*IBM Marketing Operations* および *Campaign* 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

MO_UC_BottomUpTargetCells

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

MO_UC_integration が有効な場合、このパーティションのターゲット・セル・スプレッドシートについて、ボトムアップのセルを許可します。「**はい**」に設定すると、トップダウンとボトムアップの両方のターゲット・セルが表示されますが、ボトムアップ・ターゲット・セルは読み取り専用です。詳しくは、「*IBM Marketing Operations* および *Campaign* 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

Legacy_campaigns

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

このパーティションで、Marketing Operations と Campaign が統合される前に作成されたキャンペーンへのアクセスを有効にします。
MO_UC_integration が「**はい**」に設定されている場合のみ、適用されます。レガシー・キャンペーンには、Campaign 7.x で作成され、Plan 7.x プロジェクトにリンクされたキャンペーンも含まれます。詳しくは、「*IBM Marketing Operations* および *Campaign* 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

IBM Marketing Operations - オファー統合

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

このパーティションで **MO_UC_integration** が有効な場合、このパーティションで Marketing Operations を使用してオファー・ライフサイクル管理タスクを実行できるようにします。「プラットフォーム」構成設定でオファー統合を有効にする必要があります。詳しくは、「*IBM Marketing Operations* および *Campaign* 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

UC_CM_integration

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

Campaign パーティションで Digital Analytics オンライン・セグメント統合を有効にします。この値を「**はい**」に設定すると、フローチャート内の選択プロセス・ボックスに入力として「**Digital Analytics** セグメント」を選択するオプションが表示されます。パーティションごとに Digital Analytics 統合を構成するには、「設定」>「構成」>「**Campaign | partitions | partition[n] | Coremetrics**」を選択します。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

numRowsReadToParseDelimitedFile

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

このプロパティーは、区切り記号付きファイルをユーザー・テーブルとしてマッピングする場合に使用します。このプロパティーは、スコア・プロセス・ボックスで IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition からスコア出力ファイルをインポートする際にも使用されます。区切り記号付きファイルをインポートまたはマップするには、Campaign でファイルを解析して、列、データ型 (フィールド・タイプ)、列幅 (フィールド長) を識別する必要があります。

デフォルト値の 100 は、区切り記号付きファイル内の最初の 50 行と最後の 50 行の項目を Campaign で調べることを意味します。 Campaign は

次に、これらの項目内で検出された最大値に基づいてフィールド長を割り当てます。ほとんどの場合、フィールド長を決定するにはデフォルト値で十分です。しかし、区切り記号付きファイルが非常に大きい場合、後のフィールドが Campaign で計算された推定の長さを超過することがあり、それによってフローチャートの実行時にエラーが生じることがあります。したがって、非常に大きなファイルをマップする場合、この値を大きくして、Campaign で調べる行項目の数を増やすことができます。例えば、値を 200 にすると、Campaign でファイルの最初の 100 行の項目と最後の 100 行の項目が調べられます。

値を 0 にすると、ファイル全体が調べられます。通常、最初と最後の数行を読み取っても長さを識別できない可変データ幅のフィールドがあるファイルをインポートまたはマッピングする場合に限り、これが必要になります。非常に大きなファイルでファイル全体を読み取ると、テーブル・マッピングとスコア・プロセス・ボックスの実行に必要な処理時間が長くなることがあります。

デフォルト値

100

有効な値

0 (すべての行) または任意の正整数

Campaign | partitions | partition[n] | server | fileDialog

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign の入力および出力のデータ・ファイルのデフォルトのディレクトリーを指定します。

defaultOutputDirectory

説明

`defaultOutputDirectory` プロパティーは、「Campaign File Selection」ダイアログを初期設定するために使用するパスを指定します。`defaultOutputDirectory` プロパティーは、出力データ・ファイルが Campaign にマップされる際に使用されます。値を指定しないと、パスは環境変数 `UNICA_ACDFDIR` から読み取られます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

defaultInputDirectory

説明

`defaultInputDirectory` プロパティーは、「Campaign File Selection」ダイアログを初期設定するために使用するパスを指定します。`defaultInputDirectory` プロパティーは、入力データ・ファイルが Campaign にマップされる際に使用されます。値を指定しないと、パスは環境変数 `UNICA_ACDFDIR` から読み取られます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | offerCodeGenerator

このカテゴリーのプロパティーは、オファー・コード・ジェネレーター、およびターゲット・セル・スプレッドシートのセルにコンタクト・プロセスを割り当てる際に使用するセル・コード・ジェネレーターのクラス、クラスパス、構成ストリングを指定します。

offerCodeGeneratorClass

説明

offerCodeGeneratorClass プロパティーは、オファー・コード・ジェネレーターとして使用するクラス Campaign の名前を指定します。クラスは、パッケージ名で完全修飾する必要があります。

デフォルト値

表示のために改行が追加されています。

com.unica.campaign.core.codegenerator.samples.
ExecutableCodeGenerator

offerCodeGeneratorConfigString

説明

offerCodeGeneratorConfigString プロパティーは、オファー・コード・ジェネレーターのプラグインが Campaign によってロードされる際にそのプラグインに渡されるストリングを指定します。デフォルトでは、ExecutableCodeGenerator (Campaign に同梱) によってこのプロパティーが使用され、実行する実行可能プログラムのパス (Campaign アプリケーションのホーム・ディレクトリーへの相対パス) が示されます。

デフォルト値

./bin

defaultGenerator

説明

defaultGenerator プロパティーは、セル・コードのジェネレーターを指定します。セル・コードはコンタクト・スタイル・プロセス・ボックスに表示され、ターゲット制御スプレッドシートのセルにセルを割り当てるのに使用されます。ターゲット制御スプレッドシートは、キャンペーンとフローチャートにおけるセルとオファーのマッピングを管理します。

デフォルト値

uacoffercodegen.exe

offerCodeGeneratorClasspath

説明

offerCodeGeneratorClasspath プロパティーは、オファー・コード・ジェネレーターとして使用するクラス Campaign のパスを指定します。絶対パスでも相対パスでも構いません。

パスの末尾がスラッシュ (UNIX の場合はスラッシュ / 、Windows の場合には円記号 ¥) になっていると、Campaign では、使用すべき Java プラグイン・クラスが含まれるディレクトリーのパスだと見なされます。パスの末尾がスラッシュではないと、Campaign では、Java クラスが含まれる jar ファイルの名前と見なされます。

相対パスの場合には、Campaign アプリケーションのホーム・ディレクトリーに対して相対であると Campaign は見なします。

デフォルト値

codeGenerator.jar (Campaign.war ファイルにパッケージ)

Campaign | monitoring

このカテゴリーのプロパティーは、操作モニター機能を有効にするかどうか、操作モニター・サーバーの URL、およびキャッシング動作を指定します。操作モニター機能ではアクティブなフローチャートが表示されて、それらを制御できます。

cacheCleanupInterval

説明

cacheCleanupInterval プロパティーは、フローチャート・ステータス・キャッシュの自動クリーンアップ間隔を秒単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

デフォルト値

600 (10 分)

cacheRunCompleteTime

説明

cacheRunCompleteTime プロパティーは、完了済み実行タスクがキャッシュに入れられて、「モニター」ページに表示される期間を分単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

デフォルト値

4320

monitorEnabled

説明

monitorEnabled プロパティーは、モニター機能を有効にするかどうかを指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

serverURL

説明

「キャンペーン」>「モニター」>「serverURL」プロパティーは、操作モニター・サーバーの URL を指定します。これは必須設定で、操作モニター・サーバー URL がデフォルト以外の場合には、値を変更してください。

Campaign が Secure Sockets Layer (SSL) 通信を使用するように構成されている場合には、HTTPS を使用するようにこのプロパティーの値を設定します。例えば、次のようにします。 serverURL=https://*host:SSL_port*/Campaign/OperationMonitor ここで、それぞれの意味は次のとおりです。

- *host* は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *SSL_Port* は Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL の https に注意してください。

デフォルト値

http://localhost:7001/Campaign/OperationMonitor

monitorEnabledForInteract

説明

TRUE に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーが Interact で使用可能になります。Campaign には JMX セキュリティーはありません。

FALSE に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーに接続できません。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

protocol

説明

monitorEnabledForInteract が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・プロトコルです。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

JMXMP

有効な値

JMXMP | RMI

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

port

説明

monitorEnabledForInteract が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・ポートです。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

2004

有効な値

1025 から 65535 までの整数。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | ProductReindex

オファーの作成者は、対象のオファーと関連付ける製品を指定できます。オファーと関連付けることのできる製品リストが変更される場合、オファー/製品の関連付けを更新する必要があります。Campaign > ProductReindex カテゴリーのプロパティーは、その更新頻度、および最初に更新を実行する時刻を指定します。

startTime

説明

startTime プロパティーは、オファー/製品の関連付けが最初に更新される時刻を指定します。最初の更新日付は Campaign サーバーを始動した後の日付となり、その後の更新は**間隔**パラメーターで指定した間隔で行われます。HH:mm:ss という形式で、24 時間クロックが使用されます。

Campaign を初めて始動する場合、以下の規則に従って、startTime プロパティーが使用されます。

- startTime で指定される時刻が将来の場合、最初のオファー/製品関連付けの更新は現在の startTime の日付で行われます。
- startTime が現在の日付で既に過ぎている場合、最初の更新は翌日の startTime か、現在時刻から**間隔**分経過した時刻のどちらか早い時刻に行われます。

デフォルト値

12:00:00 (正午)

間隔

説明

間隔プロパティーは、オファー/製品の関連付けの更新間隔を分単位で指定します。更新は、Campaign サーバーを開始した後の日付で、startTime パラメーターで指定された時刻が初めて来ると行われます。

デフォルト値

3600 (60 時間)

Campaign | unicaACListener

単一ノード・リスナー・クラスターを構成している場合は、他のカテゴリーを使用せずに、このカテゴリーのみを使用して、非クラスター化リスナーの構成設定を定義してください。クラスター化リスナーの場合、このカテゴリーのプロパティーは、クラスター内のすべてのリスナー・ノードに関連します。ただし、プロパティー serverHost、serverPort、useSSLForPort2、serverPort2 は例外で、無視されます。 (代わりに、Campaign|unicaACListener|node[n] の下で個々のノードごとにこれらのプロパティーを設定してください。)

これらのプロパティーを設定する必要があるのは、それぞれの Campaign インスタンスについて一度限りです。各パーティションに関して設定する必要はありません。

enableWindowsImpersonation

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成と非クラスター化リスナー構成の両方に適用されます。クラスター化構成の場合、このプロパティーはクラスター内のすべてのリスナー・ノードに適用されます。

enableWindowsImpersonation プロパティーは、Windows 偽装を Campaign で有効にするかどうかを指定します。

Windows 偽装を使用する場合には、値を TRUE に設定します。ファイル・アクセスのために Windows レベルのセキュリティー権限を利用する場合、Windows 偽装を個別に構成する必要があります。

Windows 偽装を使用しない場合には、値を FALSE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

enableWindowsEventLogging

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成と非クラスター化リスナー構成の両方に適用されます。クラスター化構成の場合、このプロパティーはクラスター内のすべてのリスナー・ノードに適用されます。

Campaign | unicaACListener | enableWindowsEventLogging プロパティーは、IBM Campaign リスナー・イベントに関する Windows イベント・ログのオンとオフを切り替えます。このプロパティーを TRUE に設定すると、Windows イベント・ログにログが記録されます。

重要: Windows イベント・ロギングが原因で、フローチャートの実行に問題が発生する可能性があります。技術サポートから指示されない限り、このフィーチャーを有効にしないでください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

serverHost

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

単一ノード・リスナー構成がある場合、このプロパティーはリスナーを指定します。クラスター化リスナー構成がある場合、このプロパティーは無視されます。 (代わりに、Campaign|unicaACListener|node[n] の下で個々のノードごとにこのプロパティーを設定してください。)

serverHost プロパティーは、Campaign リスナーがインストールされているマシンの名前または IP アドレスを指定します。Campaign リスナーが、IBM Marketing Software がインストールされているのと同じマシン上にインストールされていない場合、Campaign リスナーがインストールされているマシンのマシン名または IP アドレスにこの値を変更してください。

デフォルト値

localhost

logMaxBackupIndex

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成と非クラスター化リスナー構成の両方に適用されます。クラスター化構成の場合、このプロパティーはクラスター内のすべてのリスナー・ノードに適用されます。

logMaxBackupIndex プロパティーは、保持可能なバックアップ・ファイル数を指定します。このファイル数を超えると、最も古いバックアップ・ファイルが削除されます。このプロパティーを 0 (ゼロ) に設定すると、Campaign ではバックアップ・ファイルは作成されず、logMaxFileSize プロパティーで指定したサイズに達するとログ・ファイルでロギングが停止します。

このプロパティーに数値 (N) を指定すると、logMaxFileSize プロパティーで指定したサイズにログ・ファイル (File) が達すると、Campaign は既存のバックアップ・ファイル (File.1 ... File.N-1) の名前を File.2 ... File.N に名前変更し、現在のログ・ファイル File.1 も名前変更してから閉じ、File という名前の新しいログ・ファイルを開始します。

デフォルト値

1 (バックアップ・ファイルが 1 つ作成されます)

logStringEncoding

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成と非クラスター化リスナー構成の両方に適用されます。クラスター化構成の場合、このプロパティーはクラスター内のすべてのリスナー・ノードに適用されます。

logStringEncoding プロパティーは、すべてのログ・ファイルで使用するエンコードを制御します。この値は、オペレーティング・システムで使用するエンコードと同じでなければなりません。複数のロケールを使用する環境では、UTF-8 が優先設定となります。

この値を変更する場合、複数のエンコードが 1 つのファイルに書き込まれることがないように、空にするか、すべての関連するログ・ファイルを削除する必要があります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルト値

native

有効な値

「*Campaign* 管理者ガイド」の『Campaign の文字エンコード』を参照してください。

systemStringEncoding

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成と非クラスター化リスナー構成の両方に適用されます。クラスター化構成の場合、このプロパティーはクラスター内のすべてのリスナー・ノードに適用されます。

systemStringEncoding プロパティーは、オペレーティング・システムとの間で送受信する値 (ファイル・システムのパスやファイル名など) を解釈するために Campaign で使用するエンコードを示します。ほとんどの場合、この値を native に設定することができます。複数のロケールを使用する環境では、UTF-8 を使用します。

複数のエンコードをコンマで区切って指定することができます。以下に例を示します。

UTF-8,ISO-8859,CP950

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルト値

native

有効な値

「*Campaign* 管理者ガイド」の『*Campaign* の文字エンコード』を参照してください。

loggingLevels

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成と非クラスター化リスナー構成の両方に適用されます。クラスター化構成の場合、このプロパティーはクラスター内のすべてのリスナー・ノードに適用されます。

「Campaign」>「unicaACListener」>「loggingLevels」プロパティーは、ログ・ファイルに書き込む詳細度を制御します。

このプロパティーは、クラスター化構成と非クラスター化構成の両方に適用されます。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH

maxReuseThreads

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成と非クラスター化リスナー構成の両方に適用されます。クラスター化構成の場合、このプロパティーはクラスター内のすべてのリスナー・ノードに適用されます。

このプロパティーは、Campaign リスナー・プロセス (unica_aclsnr) が再使用するためにキャッシュに入れるオペレーティング・システム・スレッドの数を設定します。

スレッドの割り振りによって生じるオーバーヘッドを削減する場合や、アプリケーションの依頼に応じてスレッドを解放できないようにする可能性のあるオペレーティング・システムの場合には、キャッシュを使用するのがベスト・プラクティスと言えます。

このプロパティーは、クラスター化構成と非クラスター化構成の両方に適用されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)。キャッシュが無効になります

logMaxFileSize

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成と非クラスター化リスナー構成の両方に適用されます。クラスター化構成の場合、このプロパティーはクラスター内のすべてのリスナー・ノードに適用されます。

logMaxFileSize プロパティーは、ログ・ファイルの最大サイズをバイト単位で指定します。このサイズを超えると、ログ・ファイルはバックアップ・ファイルにロールオーバーされます。

このプロパティーは、クラスター化構成と非クラスター化構成の両方に適用されます。

デフォルト値

10485760 (10 MB)

windowsEventLoggingLevels

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成と非クラスター化リスナー構成の両方に適用されます。クラスター化構成の場合、このプロパティーはクラスター内のすべてのリスナー・ノードに適用されます。

windowsEventLoggingLevels プロパティーは、Windows イベント・ログ・ファイルに書き込む詳細度を重大度に基づいて制御します。

このプロパティーは、クラスター化構成と非クラスター化構成の両方に適用されます。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW

- MEDIUM
- HIGH
- ALL

ALL レベルには、診断のためのトレース・メッセージが含まれます。

serverPort

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

単一ノード・リスナー構成がある場合、このプロパティーはリスナー・ポートを指定します。クラスター化リスナー構成の場合は、このプロパティーは無視されます。 (代わりに Campaign|unicaACListener|node[n] の下で、各ノードに個別にこのプロパティーを設定します。)

serverPort プロパティーは、単一の (非クラスター化) Campaign リスナーがインストールされるポートを指定します。

デフォルト値

4664

useSSL

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成と非クラスター化リスナー構成の両方に適用されます。クラスター化構成の場合、このプロパティーはクラスター内のすべてのリスナー・ノードに適用されます。

useSSL プロパティーは、Campaign リスナーと Campaign Web アプリケーションの間の通信に Secure Sockets Layer を使用するかどうかを指定します。

このカテゴリーの serverPort2 プロパティーの説明も参照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

serverPort2

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーはオプションです。

このプロパティーは、単一ノード・リスナー構成のみに適用されます。クラスター化リスナー構成がある場合、このプロパティーは無視されます。 (代わりに、Campaign|unicaACListener|node[n] の下で個々のノードごとに serverPort2 を定義してください。)

serverPort2 プロパティーは、同じカテゴリーに属する useSSLForPort2 プロパティーと組み合わせると、Campaign のリスナーとフローチャート・プロセスとの間の通信に SSL を使用することを指定できます。これは、同カテゴリーの serverPort プロパティーおよび useSSL プロパティーによって指定される Campaign の Web アプリケーションとリスナーとの間の通信とは別個に指定されます。

Campaign コンポーネント間のすべての通信 (Web アプリケーションとリスナーの間の通信とリスナーとサーバーの間の通信) は、以下のいずれかの条件の下で useSSL プロパティーによって指定されるモードを使用します。

- serverPort2 がデフォルト値 0 に設定されている場合、または
- serverPort2 が serverPort と同じ値に設定されている場合、または
- useSSLForPort2 が useSSL と同じ値に設定されている場合

このような場合、2 番目のリスナー・ポートは有効にならず、Campaignのリスナーとフローチャート (サーバー) プロセスとの間の通信、およびリスナーと Campaign の Web アプリケーションとの間の通信は、useSSL プロパティーの値に応じて、同じモード (いずれも非 SSL、またはいずれも SSL) を使用します。

リスナーは、次の条件がいずれも満たされるときに、2 つの異なる通信モードを使用します。

- serverPort2 が serverPort の値と異なる 0 以外の値に設定されており、かつ
- useSSLForPort2 が useSSL の値とは異なる値に設定されている

この場合、2 番目のリスナー・ポートが有効になり、リスナーとフローチャート・プロセスは useSSLForPort2 で指定された通信モードを使用します。

Campaign Web アプリケーションは、リスナーと通信するとき、常に useSSL によって指定された通信モードを使用します。

SSL が Campaign のリスナーとフローチャート・プロセスとの間の通信に対して有効である場合、このプロパティー (serverPort2) の値を適切なポートに設定します。

デフォルト値

0

useSSLForPort2

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、単一ノード・リスナー構成のみに適用されます。クラスター化リスナー構成がある場合、このプロパティーは無視されます。 (代

わりに、Campaign|unicaACListener|node[n] の下で個々のノードごとに useSSLForPort2 を定義してください。)

情報については、このカテゴリーの serverPort2 の説明を参照してください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE|FALSE

keepalive

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成と非クラスター化リスナー構成の両方に適用されます。クラスター化構成の場合、このプロパティーはクラスター内のすべてのリスナー・ノードに適用されます。

keepalive プロパティーを使用して、Campaign Web アプリケーション・サーバーがキープアライブ・メッセージを送信する頻度を秒単位で指定します。その送信時以外は、Campaign リスナーへのソケット接続は非アクティブな状態になります。

keepalive 構成パラメーターを使用すると、Web アプリケーションとリスナー (例えば、ファイアウォール) との間で非アクティブな接続は閉じるように設定されている環境で、アプリケーションが非アクティブな状態にある期間であっても、ソケット接続を開いたままにすることができます。

ソケットにアクティビティーが存在すると、キープアライブ期間は自動的にリセットされます。 Web アプリケーション・サーバーの DEBUG ロギング・レベルの場合、campaignweb.log では、キープアライブ・メッセージがリスナーに送信する際にそのことが表示されます。

デフォルト値

0。キープアライブ機能は無効です

有効な値

正整数

loggingCategories

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener

説明

このプロパティーは、Campaign リスナーのログ・ファイルに書き込まれるメッセージのカテゴリーを指定します。

loggingCategories プロパティーを loggingLevels プロパティーと組み合わせて、選択したすべてのカテゴリーを対象に、ログに記録するメッセージの重大度を指定します。

コンマ区切りリストに 1 つ以上のカテゴリーを指定します。すべてのカテゴリーのログを含めるには、ALL オプションを使用します。

デフォルト値

ALL

有効な値

注: 下記では、各構成値の後に、対応するログ・オプションを括弧で囲んで示します。

ALL

GENERAL (その他)

COMMANDS (外部インターフェース)

SYS CALL (システム呼び出し)

UDB (udb)

XML (xml)

Campaign | unicaACListener | node [n]

非クラスター化リスナー構成では、このカテゴリーの下にノードを持つべきではありません。クラスター化リスナー構成でのみ、ノードが作成されて使用されます。クラスター化リスナー構成の場合、クラスター内のリスナーごとに個別の子ノードを構成します。

クラスター化が有効な場合、1 つ以上の子ノードを構成する必要があります。そうしない場合、始動時にエラーが発生します。

重要: クラスター化リスナー・ノードをすべて停止するまで、絶対に構成からノードを削除しないでください。削除した場合、削除したリスナー上にあったセッションは実行し続けますが、マスター・リスナーから削除したリスナー・ノードに接触できません。これは予期しない結果をもたらすことがあります。

serverHost

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener|node[n]

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成がある場合にのみ適用されます。このプロパティーは、クラスター内の各個別のリスナー・ノードを識別します。

各ノードにつき、Campaign リスナーがインストールされているマシンのホスト名を指定します。

デフォルト値

デフォルト値が割り当てられていません。

serverPort

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener|node[n]

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成がある場合にのみ適用されます。このプロパティーは、各クラスター化リスナー・ノードと IBM Campaign Web アプリケーション・サーバー間の通信に使用するポートを識別します。

指定されたポートは、リスナー・ノード間の通信にも使用されます。

デフォルト値

デフォルト値が割り当てられていません。

useSSLForPort2

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener|node[n]

説明

オプション。このプロパティーは、クラスター化リスナー構成がある場合にのみ適用されます。このプロパティーは、クラスター化リスナー・ノードごとに設定できます。このプロパティーの使用の詳細については、Campaign|unicaACListener|serverPort2 の説明をお読みください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE|FALSE

serverPort2

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener|node[n]

説明

オプション。このプロパティーは、クラスター化リスナー構成がある場合にのみ適用されます。このプロパティーは、クラスター化リスナー・ノードごとに設定できます。このプロパティーの使用の詳細については、Campaign|unicaACListener|serverPort2 の説明をお読みください。

デフォルト値

3

masterListenerPriority

構成カテゴリー

Campaign|unicaACListener|node[n]

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成がある場合にのみ適用されます。

クラスターには、必ずマスター・リスナーが 1 つ含まれます。 IBM Campaign Web サーバー・アプリケーション、Campaign Server Manager (unica_svradm)、および unica_acsesutil などのユーティリティーを含むすべてのクライアントは、masterListenerPriority を使用してマスター・リスナーを識別します。

クラスター内のノードは、いずれもマスター・リスナーとして動作できます。 masterListenerPriority は、どのノードが最初にマスター・リスナーとして振る舞うかを決定します。また、フェイルオーバー状態の際にどのリスナーがマスター・リスナーとして引き継ぐかも決定します。処理能力が最も高いリスナー・ノードが最優先順位に割り当てられるのが理想的です。

優先順位 1 が最も高い優先順位です。マスター・リスナーにするマシンに 1 を割り当てます。そのマシンがダウンしたり、ネットワーク問題などにより接続できなくなったりするまでは、そのマシンがマスター・リスナーとして稼働します。次のマシンに 2 を割り当て、それ以降も同様に行います。

クラスター内のすべてのリスナーに優先順位を割り当てる必要があります。マスター・リスナーとして使用したくないマシンは、優先順位を最下位 (10) に指定します。ただし、リスナーをマスターとして指定できないようにすることはできません。クラスター化リスナー構成の場合、1 つのリスナーは必ずマスターの役割を担います。

指定されたマスター・リスナーに接続できない場合、割り当てられた優先順位に基づいて次のマシンがマスター・リスナーになります。

複数のノードが同じ優先順位を持つ場合、システムはこのカテゴリーのノードのリストの中の最初のノードを選択します。

注: 優先順位を変更したら、`unica_svradm refresh` コマンドを実行して、マスター・リスナーに変更を通知します。

デフォルト値

デフォルト値が割り当てられていません。

有効な値

1 (高) から 10 (低)

loadBalanceWeight

構成カテゴリー

`Campaign|unicaACListener|node[n]`

説明

このプロパティーは、クラスター化リスナー構成がある場合にのみ適用されます。このプロパティーは、クラスター化ノード間のロード・バランシングを制御します。クラスター内の各ノードで、アプリケーション・トラフィック全体の一部を処理できます。各リスナー・ノードの重みを調整しながら、各ノードが担う負荷を決定します。高い数値を指定するほど割り当てられる負荷の割合が増えるので、そのリスナー・ノードにはより多くのトランザクションが割り当てられます。

処理能力がより高いマシンに高い値を割り当てます。処理能力の低いマシン、あるいは高負荷のマシンには低い値を割り当てます。値 0 を指定する

と、そのリスナーがトランザクションを処理することが禁止されます。通常は使用されません。複数のノードが同じ重みを持つ場合、システムはこのカテゴリーのノードのリストの中の最初のノードを選択します。

注: 重みを変更したら、`unica_svradm refresh` コマンドを実行して、マスター・リスナーに変更を通知します。

例

3 つの物理ホスト A、B、および C があり、ホスト A が処理能力の最も高いマシンでホスト C が最も低いマシンです。この場合、A=4、B=3、C=2 のように重みを割り当てます。どのように要求が割り振られるかを調べるには、重みの合計 4+3+2=9 をリスナーの数で割ります。このシナリオでは、リスナー A は 9 個中 4 個のトランザクションを処理し、リスナー B は 9 個中 3 個のトランザクションを処理し、リスナー C は 9 個中残りの 2 個のトランザクションを処理します。このクラスターのスケジューリングの順序は **AABABCABC** です。要求が到着すると、要求がノード間で正しく分配されるように順序どおりに進みます。

デフォルト値

デフォルト値が割り当てられていません。

有効な値

0 から 10 (最高優先順位)

Campaign | campaignClustering

クラスター化リスナー構成がある場合は、これらのプロパティーを設定します。これらのプロパティーは、Campaign のインスタンスごとに 1 回ずつ設定します。パーティションごとに設定する必要はありません。

enableClustering

構成カテゴリー

`Campaign|campaignClustering`

説明

単一のリスナーがある場合は、値を `FALSE` に設定されたままにしておきます。こうすると、このカテゴリーにある他のすべてのプロパティーは、単一ノード構成に当てはまらないため無視されます。

クラスター化リスナー構成の場合、値を `TRUE` に設定し、このカテゴリー内の他のプロパティーを構成し、`Campaign|unicaACListener|node[n]` の下のリスナー・ノードを構成します。この値が `TRUE` の場合、1 つ以上の子ノードを定義する必要があります。子ノードを 1 つも定義しない場合、始動時にエラーが発生します。

値が `TRUE` の場合、`Campaign|unicaACListener` のプロパティーである serverHost、serverPort、serverPort2、useSSLForPort2 は無視され、代わりに `Campaign|unicaACListener|node[n]` の下の個別の各ノードに対して定義されます。

デフォルト値

`FALSE`

有効な値

TRUE|FALSE

masterListenerLoggingLevel

構成カテゴリー

Campaign|campaignClustering

説明

このプロパティーは、enableClustering が TRUE の場合にのみ適用されます。このプロパティーは、マスター・リスナーのログ・ファイル (<campaignSharedHome>/logs/masterlistener.log) に書き込む詳細の量を制御します。

デフォルト値の LOW は、詳細の量が最も少なくなります (最重大エラー・メッセージのみが書き込まれます)。 ALL にはトレース・デバッグ・メッセージも含まれ、これは診断を目的としています。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

LOW|MEDIUM|HIGH|ALL

masterListenerHeartbeatInterval

構成カテゴリー

Campaign|campaignClustering

説明

このプロパティーは enableClustering が TRUE の場合のみ適用されます。このプロパティーは、マスター・リスナーに影響を与えます。マスター・リスナーが、使用可能かどうかを識別するために構成済みのすべてのリスナー・ノードへの接続を試行する頻度を指定します。使用可能かどうか識別するためにマスター・リスナーがノードに接続すると、マスター・リスナーが稼働していることを知らせるハートビート・メッセージも送信します。そのためこのプロパティーには、(1) マスター・リスナーからのハートビート (2) 各リスナー・ノードからの状況応答の 2 つの目的があります。

デフォルト値

10 秒

webServerDelayBetweenRetries

構成カテゴリー

Campaign|campaignClustering

説明

このプロパティーは enableClustering が TRUE の場合のみ適用されます。このプロパティーは、IBM Campaign Web アプリケーション・サーバーが IBM Campaign リスナーに接続を試みる際の各再試行の間の遅延時間を指定します。

デフォルト値

5 秒

webServerRetryAttempts

構成カテゴリー

Campaign|campaignClustering

説明

このプロパティーは、enableClustering が TRUE の場合にのみ適用されます。このプロパティーは、IBM Campaign Web アプリケーション・サーバーが IBM Campaign リスナーに接続を試みる回数を示します。

デフォルト値

3

campaignSharedHome

構成カテゴリー

Campaign|campaignClustering

説明

このプロパティーは、enableClustering が TRUE の場合にのみ適用されます。

クラスター化構成では、リスナー・ノードは以下に示すファイルおよびフォルダーを共有します。共有場所は、インストール時に指定されます。

```
campaignSharedHome
 |--->/conf
    |------> activeSessions.udb
    |------> deadSessions.udb
    |------> etc.
 |--->/logs
    |------> masterlistener.log
    |------> etc.
 |--->/partitions
    |------> partition[n]
       |----------> {similar to <Campaign_home> partition folder structure}
```

注: 各リスナーには、共有されないそれぞれのフォルダーおよびファイルのセットもあり、<Campaign_home> (IBM Campaign アプリケーションのインストール・ディレクトリー) にあります。

masterListenerloggingCategories

構成カテゴリー

Campaign|campaignClustering

説明

このプロパティーは、Campaign マスター・リスナーのログ・ファイルに書き込まれるメッセージのカテゴリーを指定します。

masterListenerloggingCategories プロパティーを masterListenerLoggingLevel プロパティーと組み合わせて、選択したすべてのカテゴリーを対象に、ログに記録するメッセージの重大度を決定します。

コンマ区切りリストに 1 つ以上のカテゴリーを指定します。すべてのカテゴリーのログを含めるには、ALL オプションを使用します。

デフォルト値

ALL

有効な値

注: 下記では、各構成値の後に、対応するログ・オプションを括弧で囲んで示します。

ALL

FILE_ACCESS (ファイル操作)

GENERAL (その他)

COMMANDS (外部インターフェース)

Campaign | unicaACOOptAdmin

これらの構成プロパティーは、unicaACOOptAdmin ツールの設定を定義します。

getProgressCmd

説明

内部で使用される値を指定します。この値を変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_optimizeSessionProgress.do

有効な値

optimize/ext_optimizeSessionProgress.do

runSessionCmd

説明

内部で使用される値を指定します。この値を変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_runOptimizeSession.do

有効な値

optimize/ext_runOptimizeSession.do

loggingLevels

説明

loggingLevels プロパティーは、Contact Optimization コマンド・ライン・ツールのログ・ファイルに書き込む詳細の量を、重大度に基づいて制御します。選択可能なレベルは、LOW、MEDIUM、HIGH、および ALL で、LOW が最小の詳細を提供します (つまり、最も重大なメッセージだけが書き込まれます)。 ALL レベルはトレース・メッセージを含み、主に診断を目的としています。

デフォルト値

HIGH

有効な値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

cancelSessionCmd

説明

内部で使用される値を指定します。この値を変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_stopOptimizeSessionRun.do

有効な値

optimize/ext_stopOptimizeSessionRun.do

logoutCmd

説明

内部で使用される値を指定します。この値を変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_doLogout.do

有効な値

optimize/ext_doLogout.do

getProgressWaitMS

説明

この値は、進行状況に関する情報を取得するための、Web アプリケーションに対する 2 回の連続したポーリングの間のミリ秒数 (整数) に設定します。この値は、getProgressCmd を設定しない場合は使用されません。

デフォルト値

1000

有効な値

ゼロより大きい整数

Campaign | server

このカテゴリーのプロパティーは、内部で使用される URL を指定し、変更する必要はありません。

fullContextPath

説明

fullContextPath は、アプリケーション・サーバーのリスナーのプロキシーと通信するために Campaign フローチャートで使用される URL を指定します。このプロパティーはデフォルトでは定義されておらず、その場合、システムは動的に URL を決定します。 IBM Marketing Platform が IBM

Tivoli® Web アクセス制御プラットフォームと統合される場合、このプロパティーを Tivoli の Campaign URL に設定する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

numRetryServerCommand

説明

numRetryServerCommand は、IBM Campaign Web アプリケーションが正常な結果を受け取るまで IBM Campaign 分析サーバー (リスナー) コマンドを呼び出せる最大回数を指定します。この最大試行回数に達した後も引き続き Campaign アプリケーションが正常でない応答を受け取る場合は、ユーザー・インターフェースに「**サーバーがビジー状態**」エラーが表示されます。

Campaign 分析サーバーの応答時間、ネットワークの速度、待ち時間に基づいてこのパラメーターを変更してください。

デフォルト値

5

Campaign | logging

このカテゴリーは、Campaign log4jConfig プロパティー・ファイルの場所を指定します。

log4jConfig

説明

Campaign Web アプリケーションは、構成、デバッグ、およびエラー情報をログに記録するために Apache log4j ユーティリティーを使用します。

log4jConfig プロパティーは、Campaign ログ特性ファイル campaign_log4j.properties の場所を指定します。 Campaign ホーム・ディレクトリーに対する相対パスを、ファイル名を含めて指定します。UNIX の場合にはスラッシュ (/) を使用し、Windows の場合には円記号 (¥) を使用します。

デフォルト値

./conf/campaign_log4j.properties

Campaign | proxy

Campaign、Engage、および UBX の統合は、アウトバウンド・プロキシー接続によってサポートされます。

これらのプロパティーを使用するには、「設定」 > 「構成」を選択します。

Proxy host name

説明　プロキシー・サーバーのホスト名または IP アドレスを指定します。

Proxy port number

説明　プロキシー・サーバーのポート番号を指定します。

Proxy type

説明　プロキシー・サーバーのタイプを選択します。

デフォルト値
HTTP

有効値
HTTP、SOCK5

Data source for credentials

説明　プロキシー・サーバーのユーザー名およびパスワードの詳細が含まれているデータ・ソース名を指定します。

Platform user with data source for proxy credentials

説明　「**Data source for credentials**」プロパティーに指定したデータ・ソースを所有する Marketing Platform ユーザーの名前を指定します。

注: Campaign を WebLogic サーバーに配置し、HTTP プロキシーを構成する場合、JAVA_OPTION の変数 `DUseSunHttpHandler=true` を `setDomainEnv.cmd` ファイルに追加する必要があります。

eMessage 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの eMessage 構成プロパティーについて取り上げます。

eMessage | serverComponentsAndLocations | hostedServices

IBM Marketing Software Hosted Services に接続するための URL を指定するプロパティーを定義します。eMessage では、受信者リストおよび受信者リストを記述したメタデータのアップロードと、ホストされた環境へ送信する一般的な通信に別々の接続が使用されます。

IBM が英国に設立したデータ・センターを通じて IBM Marketing Software Hosted Services に接続する場合は、デフォルト値を変更する必要があります。接続先のデータ・センターを判別するには、IBM にお問い合わせください。

uiHostName

説明

受信者リストとそれに関連するメタデータのアップロードを除いて、eMessage が IBM Marketing Software Hosted Services へのすべての通信に使用するアドレス。

デフォルト値

`em.unicaondemand.com`

英国のデータ・センターに接続している場合は、この値を `em-eu.unicaondemand.com` に変更します。

dataHostName

説明

受信者リストに関連するメタデータを IBM Marketing Software Hosted Services にアップロードするために、eMessage が使用するアドレス。

デフォルト値

`em.unicaondemand.com`

英国のデータ・センターに接続している場合は、この値を `em-eu.unicaondemand.com` に変更します。

ftpHostName

説明

受信者リストのデータ (リストのメタデータを除く) を IBM Marketing Software Hosted Services にアップロードするために、eMessage が使用するアドレス。

デフォルト値

`ftp-em.unicaondemand.com`

英国のデータ・センターに接続している場合は、この値を `ftp-em-eu.unicaondemand.com` に変更します。

eMessage | partition | partition[n] | hostedAccountInfo

このカテゴリーのプロパティーを定義することによって、IBM Marketing Software Hosted Services へのアクセスに必要なアカウント情報を格納するデータベース用のユーザー資格情報を定義します。ここで指定する値は、Marketing Platform 内でユーザー設定として定義されている必要があります。

amUserForAcctCredentials

説明

このプロパティーを使用して、IBM Marketing Software Hosted Services へのアクセスに必要なアカウント・アクセス資格情報を指定する Marketing Platform データ・ソースを含んでいる Marketing Platform ユーザーを指定します。

デフォルト値

asm_admin

有効な値

任意の Marketing Platform ユーザー。

amDataSourceForAcctCredentials

説明

このプロパティーを使用して、IBM Marketing Software Hosted Services のログイン資格情報を定義している Marketing Platform データ・ソースを指定します。

デフォルト値

UNICA_HOSTED_SERVICES

有効な値

`amUserForAcctCredentials` の中で指定するユーザーに関連付けられているデータ・ソース。

eMessage | partition | partition[n] | dataSources | systemTables

このカテゴリーには、ネットワーク環境内の eMessage システム・テーブルを含んでいるデータベースについて、そのスキーマ、接続設定、およびログイン資格情報を定義する構成プロパティーが含まれています。

type

説明

eMessage システム・テーブルをホストするデータベースのタイプ。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。このプロパティーを定義することは必須です。

有効な値

- `SQLSERVER`
- `ORACLE9`
- `ORACLE10` (Oracle 11 データベースを示すためにも使用される)
- `DB2`

schemaName

説明

eMessage システム・テーブルのデータベース・スキーマの名前。これは、Campaign システム・テーブルのスキーマ名と同じです。

スクリプト内でシステム・テーブルを参照するときは、このスキーマ名を含める必要があります。

デフォルト値

dbo

jdbcBatchSize

説明

JDBC がデータベース上で一度に実行する実行要求の数。

デフォルト値

10

有効な値

0 より大きい整数。

jdbcClassName

説明

Campaign Web サーバーで定義されている、システム・テーブルの JDBC ドライバー。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。このプロパティーを定義することは必須です。

jdbcURI

説明

Campaign Web サーバーで定義されている、システム・テーブルの JDBC 接続 URI。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。このプロパティーを定義することは必須です。

asmUserForDBCredentials

説明

このプロパティーを使用して、eMessage システム・テーブルへのアクセスを許可される IBM Marketing Software ユーザーを指定します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。このプロパティーを定義することは必須です。

有効な値

Marketing Platform で定義されている任意のユーザー。一般に、これは Campaign のシステム・ユーザーの名前にします。

amDataSourceForDBCredentials

説明

このプロパティーを使用して、eMessage システム・テーブルを含んでいるデータベースのログイン資格情報を定義しているデータ・ソースを指定します。これは、Campaign システム・テーブルのデータ・ソースと同じものにすることができます。

デフォルト値

UA_SYSTEM_TABLES

有効な値

`asmUserForDBCredentials` で指定する IBM Marketing Software ユーザーに関連付けられている Marketing Platform データ・ソース。

このデータ・ソースは、eMessage システム・テーブルへのアクセスに使用されるデータベース・ユーザーおよび資格情報を指定します。データベース・ユーザーのデフォルト・スキーマが、システム・テーブルを含んでいるスキーマでない場合は、システム・テーブルへのアクセスに使用する JDBC 接続の中で、システム・テーブル・スキーマを指定する必要があります。

poolAcquireIncrement

説明

データベース接続プールの接続を使い尽くしたときに、eMessage がシステム・テーブル用に作成する新規接続の数。eMessage は、`poolMaxSize` で指定された数を最大値として、新規接続を作成します。

デフォルト値

1

有効な値

0 より大きい整数。

poolIdleTestPeriod

説明

eMessage で、eMessage システム・テーブルへのアイドル接続のアクティビティーの有無をテストする間の待ち時間 (秒数)。

デフォルト値

100

有効な値

0 より大きい整数。

poolMaxSize

説明

eMessage がシステム・テーブルに対して作成する接続の最大数。値がゼロ (0) の場合、最大値はないということになります。

デフォルト値

100

有効な値

0 以上の整数。

poolMinSize

説明

eMessage がシステム・テーブルに対して作成する接続の最小数。

デフォルト値

10

有効な値

0 以上の整数。

poolMaxStatements

説明

eMessage で PrepareStatement キャッシュに保管される、システム・テーブルへの接続 1 つあたりの最大ステートメント数。poolMaxStatements をゼロ (0) に設定すると、ステートメント・キャッシュは無効になります。

デフォルト値

0

有効な値

0 以上の整数。

timeout

説明

eMessage で、アイドル状態のデータベース接続が除去されるまでに維持される秒数。

`poolIdleTestPeriod` が 0 より大きい場合、eMessage はプール内にあるチェックアウトされていないすべてのアイドル接続を、`timeout` 秒ごとにテストします。

`poolIdleTestPeriod` が `timeout` より大きい場合、アイドル接続は除去されます。

デフォルト値

100

有効な値

0 以上の整数。

eMessage | partition | partition[n] | recipientListUploader

この構成カテゴリーには、受信者リスト・アップローダーのアクションまたはステータスに対する応答として実行されるユーザー定義スクリプトの場所に関するオプション・プロパティーが含まれています。

pathToTriggerScript

説明

IBM Marketing Software Hosted Services への受信者リストのアップロードに対して、アクションをトリガーするスクリプトを作成できます。例えば、リストのアップロードが正常に完了したときにリスト・デザイナーに E メール・アラートを送信するスクリプトを作成できます。

このプロパティーの値を定義した場合、eMessage は Recipient List Uploader に関するステータス情報を、指定された場所に渡します。このプロパティーを空白のままにした場合、eMessage は何もアクションを実行しません。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

有効な任意のネットワーク・パス。

eMessage | partition | partition[n] | responseContactTracker

このカテゴリーのプロパティーは、Response and Contact Tracker (RCT) の動作を指定します。RCT は、E メール・コンタクト、E メール配信、および受信者のレスポンス (例えば、リンクのクリックとオープンなど) に関するデータを取り出し、処理します。

pauseCustomerPremisesTracking

説明

eMessage は、コンタクトとレスポンスのデータを IBM Marketing Software Hosted Services 内のキューに保管します。このプロパティーを使用すると、RCT に IBM Marketing Software Hosted Services からのデータの取得を一時的に停止するよう指示できます。トラッキングを再開すると、蓄積されたデータが RCT によりダウンロードされます。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

waitTimeToCheckForDataAvailability

説明

RCT は、E メール・コンタクトまたは受信者レスポンスに関して、新規データの有無を定期的に検査します。このプロパティーを使用すると、RCT が IBM Marketing Software Hosted Services 内の新規データの有無を検査する頻度を秒単位で指定できます。デフォルト値は 300 秒、つまり 5 分ごとです。

デフォルト値

300

有効な値

1 より大きい整数。

perfLogInterval

説明

このプロパティーを使用すると、パフォーマンス統計を RCT によってログ・ファイルに記録する頻度を指定できます。入力した値によって、ログ項目間のバッチの数が決まります。

デフォルト値

10

有効な値

0 より大きい整数。

enableSeparatePartialResponseDataTracking

説明

このプロパティーは、eMessage で、部分的な E メール・レスポンス・データをローカル eMessage インストール済み環境内のトラッキング・テーブルに転送するかどうかを決定します。

eMessage で E メール・レスポンスを正しく属性付けするには、メール配信インスタンス ID とメッセージ・シーケンス番号が必要です。enableSeparatePartialResponseDataTracking を True に設定すると、eMessage は不完全なレスポンスを別個のローカル・トラッキング・テーブルに入れます。このテーブルで、それらのレスポンスを確認するか追加の処理を行うことができます。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

enableExecutionHistoryDataTracking

説明

このプロパティーは、追加のメール配信の実行の履歴データを IBM Marketing Software Hosted Services からダウンロードできるかどうかを制御します。

デフォルトで、このプロパティーは追加データのダウンロードを許可しない **False** に設定されています。このプロパティーを **True** に設定すると、通常は eMessage システム・テーブルに入力されないメール配信の実行に関するデータをダウンロードできるようになります。この補足情報は、メール配信やデータベース管理を自動化するために使用できます。

このプロパティーは、デフォルトでは非表示になっています。この構成プロパティーは、`emessage¥tools` ディレクトリーにある `switch_config_visibility.bat` スクリプトを実行することで、ローカルの eMessage インストール環境で表示できます。

メール配信実行の履歴データに対するアクセスは、IBM から要求することによって可能となります。追加のメール配信実行の履歴データに対するアクセスを要求するには、`eacctsvc@us.ibm.com` で、IBM 担当者に連絡してください。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Interact 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Interact 構成プロパティーについて取り上げます。

Interact ランタイム環境の構成プロパティー

このセクションでは、Interact ランタイム環境のすべての構成プロパティーについて説明します。

Interact | general

これらの構成プロパティーは、ランタイム環境の一般的な設定を定義します。これには、デフォルトのロギング・レベルやロケールの設定が含まれます。

log4jConfig

説明

log4j プロパティーが含まれているファイルのロケーション。これは、`INTERACT_HOME` 環境変数からの相対パスにする必要があります。`INTERACT_HOME` は、Interact のインストール・ディレクトリーのロケーションです。

デフォルト値

`./conf/interact_log4j.properties`

asmUserForDefaultLocale

説明

`asmUserForDefaultLocale` プロパティーが定義する IBM Marketing Software ユーザーから、Interact はそのロケール設定を派生させます。

ロケール設定は、設計時の表示をどの言語で行うか、および Interact API からのアドバイス・メッセージをどの言語で表示するかを定義します。ロケール設定がそのマシンのオペレーティング・システムの設定と一致しない場合でも Interact は機能しますが、設計時の表示やアドバイス・メッセージは、別の言語で表示される可能性があります。

デフォルト値

`asm_admin`

Interact | general | learningTablesDataSource

これらの構成プロパティーは、組み込み学習テーブルのデータ・ソースの設定を定義します。Interact の組み込み学習を使用する場合は、このデータ・ソースを定義する必要があります。

学習 API を使用して独自の学習実装環境を作成する場合は、カスタムの学習実装環境を構成し、`ILearningConfig` インターフェースを使用してそれらの値を読み取らせることができます。

jndiName

説明

この `jndiName` プロパティーを使用して、アプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic) で Interact ランタイム・サーバーがアクセスする学習テーブル用に定義されている Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別します。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成されます。これには、UACI_AttributeValue や UACI_OfferStats などのテーブルが含まれます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

type

説明

Interact ランタイム・サーバーがアクセスする学習テーブルによって使用されるデータ・ソースのデータベース・タイプ。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成されます。これには、UACI_AttributeValue や UACI_OfferStats などのテーブルが含まれます。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティーは、学習テーブルへのデータベース接続要求が失敗した場合に、Interact によって自動的に再試行される時間を秒単位で指定します。Interact は、この長さの時間、データベースへの再接続を自動的に試行してから、データベース・エラーまたは失敗を報告します。この値を 0 に設定すると、Interact は無制限に再試行します。この値を -1 に設定すると、再試行は行われません。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成されます。これには、UACI_AttributeValue や UACI_OfferStats などのテーブルが含まれます。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティーは、Interact が学習テーブルへのデータベース接続に失敗した場合に、再接続を試行するまでの待ち時間を秒数で指定します。この値を -1 に設定すると、再試行は行われません。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成されます。これには、UACI_AttributeValue や UACI_OfferStats などのテーブルが含まれます。

デフォルト値

-1

schema

説明

組み込み学習モジュールのテーブルが含まれているスキーマの名前。Interact は、このプロパティーの値をすべてのテーブル名の前に挿入します。例えば、`UACI_IntChannel` は `schema.UACI_IntChannel` になります。

スキーマを定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者はスキーマと同じであると想定します。あいまいさを排除するには、この値を設定してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Interact | general | prodUserDataSource

これらの構成プロパティーは、実稼働プロファイル・テーブルのデータ・ソースの設定を定義します。このデータ・ソースは定義する必要があります。これは、配置した対話式フローチャートを実行する際に、ランタイム環境が参照するデータ・ソースです。

jndiName

説明

この `jndiName` プロパティーを使用して、アプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic) で Interact ランタイム・サーバーがアクセスする顧客テーブル用に定義されている Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

type

説明

Interact ランタイム・サーバーがアクセスする顧客テーブルのデータベース・タイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

aliasPrefix

説明

`AliasPrefix` プロパティーは、ディメンション・テーブルを使用していて、Interact ランタイム・サーバーがアクセスする顧客テーブルに新しいテーブルを書き込む際に、Interact により自動的に作成される別名を、Interact がどのように形成するかを指定します。

各データベースには、それぞれ ID の最大長があります。使用しているデータベースの文書を調べて、設定する値がデータベースの最大 ID 長を超えないものであることを確認してください。

デフォルト値

A

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティーは、ランタイム顧客テーブルへのデータベース接続要求が失敗した場合に、Interact によって自動的に再試行される時間を秒単位で指定します。Interact は、この長さの時間、データベースへの再接続を自動的に試行してから、データベース・エラーまたは失敗を報告します。この値を 0 に設定すると、Interact は無制限に再試行します。この値を -1 に設定すると、再試行は行われません。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティーは、Interact が Interact ランタイム顧客テーブルへのデータベース接続に失敗した場合に、再接続を試行するまでの待ち時間を秒数で指定します。この値を -1 に設定すると、再試行は行われません。

デフォルト値

-1

schema

説明

プロファイル・データ・テーブルが含まれているスキーマの名前。Interact は、このプロパティーの値をすべてのテーブル名の前に挿入します。例えば、UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります。

スキーマを定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者はスキーマと同じであると想定します。あいまいさを排除するには、この値を設定してください。

DB2 データベースを使用する場合は、スキーマ名を大文字にする必要があります。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Interact | general | systemTablesDataSource

これらの構成プロパティーは、ランタイム環境用システム・テーブルのデータ・ソースの設定を定義します。このデータ・ソースは定義する必要があります。

jndiName

説明

この jndiName プロパティーを使用して、アプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic) でランタイム環境テーブル用に定義されている Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別します。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime の各 dll スクリプトが取り込まれたデータベースで、例えば UACI_CHOfferAttrib や UACI_DefaultedStat などが含まれます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

type

説明

ランタイム環境のシステム・テーブルのデータベース・タイプ。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime の各 dll スクリプトが取り込まれたデータベースで、例えば UACI_CHOfferAttrib や UACI_DefaultedStat などが含まれます。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティーは、ランタイム・システム・テーブルへのデータベース接続要求が失敗した場合に、Interact によって自動的に再試行される時間を秒単位で指定します。Interact は、この長さの時間、データベースへの再接続を自動的に試行してから、データベース・エラーまたは失敗を報告します。この値を 0 に設定すると、Interact は無制限に再試行します。この値を -1 に設定すると、再試行は行われません。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime の各 dll スクリプトが取り込まれたデータベースで、例えば UACI_CHOfferAttrib や UACI_DefaultedStat などが含まれます。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティーは、Interact が Interact ランタイム・システム・テーブルへのデータベース接続に失敗した場合に、再接続を試行するまでの待ち時間を秒数で指定します。この値を -1 に設定すると、再試行は行われません。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime の各 dll スクリプトが取り込まれたデータベースで、例えば UACI_CHOfferAttrib や UACI_DefaultedStat などが含まれます。

デフォルト値

-1

schema

説明

ランタイム環境のテーブルが含まれているスキーマの名前。Interact は、このプロパティーの値をすべてのテーブル名の前に挿入します。例えば、UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります。

スキーマを定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者はスキーマと同じであると想定します。あいまいさを排除するには、この値を設定してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Interact | general | systemTablesDataSource | loaderProperties

これらの構成プロパティーは、ランタイム環境用システム・テーブルのデータベース・ローダー・ユーティリティーの設定を定義します。データベース・ローダー・ユーティリティーのみを使用している場合は、これらのプロパティーを定義する必要があります。

databaseName

説明

データベース・ローダーが接続するデータベースの名前。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

LoaderCommandForAppend

説明

LoaderCommandForAppend パラメーターは、Interact において、データベース・ロード・ユーティリティーを起動して、コンタクトとレスポンスの履歴ステージング・データベース表にレコードを付加するために発行するコマンドを指定します。コンタクトとレスポンスの履歴データに対してデータベース・ローダー・ユーティリティーを使用可能にするには、このパラメーターを設定する必要があります。

このパラメーターは、データベース・ロード・ユーティリティーの実行可能ファイルまたはデータベース・ロード・ユーティリティーを起動するスクリ

プトの絶対パス名として指定します。スクリプトを使用することで、ロード・ユーティリティーを呼び出す前に、追加のセットアップを実行することができます。

ほとんどのデータベース・ロード・ユーティリティーでは、正常に起動するために複数の引数が必要です。その中には、ロード元となるデータ・ファイルと制御ファイル、およびロード先となるデータベースとテーブルを指定するものが含まれることがあります。コマンドが実行されると、指定された要素によってトークンが置換されます。

データベース・ロード・ユーティリティー呼び出しで使用する正しい構文については、データベース・ロード・ユーティリティーの文書を参照してください。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

`LoaderCommandForAppend` で使用可能なトークンについて、以下の表で説明します。

トークン	説明
<CONTROLFILE>	このトークンは、`LoaderControlFileTemplate` パラメーターで指定されるテンプレートに従って、Interact によって生成される一時制御ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。
<DATABASE>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデータ・ソースの名前に置換されます。これは、このデータ・ソースのカテゴリー名で使用されるのと同じデータ・ソース名です。
<DATAFILE>	このトークンは、ロード・プロセスで Interact によって作成される一時データ・ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。このファイルは、Interact 一時ディレクトリー `UNICA_ACTMPDIR` に入っています。
<DBCOLUMNNUMBER>	このトークンは、データベース中の列順序に置換されます。
<FIELDLENGTH>	このトークンは、データベース中にロードされているフィールドの長さに置換されます。
<FIELDNAME>	このトークンは、データベース中にロードされているフィールドの名前に置換されます。
<FIELDNUMBER>	このトークンは、データベース中にロードされているフィールドの番号に置換されます。

トークン	説明
<FIELDTYPE>	このトークンは、リテラル CHAR( ) に置換されます。 () の中により、このフィールドの長さが指定されます。データベースでフィールド・タイプ CHAR が認識されていない場合、フィールド・タイプとして適切なテキストを手動で指定し、<FIELDLENGTH> トークンを使用することができます。例えば、SQLSVR および SQL2000 の場合、SQLCHAR(<FIELDLENGTH>) を使用します。
<NATIVETYPE>	このトークンは、このフィールドのロード先であるデータベースのタイプに置換されます。
<NUMFIELDS>	このトークンは、テーブル中のフィールドの数に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデータベース表名に置換されます。
<USER>	このトークンは、現在のフローチャート接続からデータ・ソースへのデータベース・ユーザーに置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

LoaderControlFileTemplateForAppend

説明

`LoaderControlFileTemplateForAppend` プロパティーは、Interact で以前に構成された制御ファイル・テンプレートの絶対パスとファイル名を指定します。このパラメーターが設定されている場合、Interact は、ここで指定されているテンプレートに基づいて一時制御ファイルを動的に作成します。この一時制御ファイルのパスおよび名前は、`LoaderCommandForAppend` プロパティーから利用可能な `<CONTROLFILE>` トークンから利用可能です。

Interact をデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードで使用するには、その前に、このパラメーターによって指定される制御ファイル・テンプレートを構成することが必要です。制御ファイル・テンプレートでは、以下のトークンがサポートされています。それらは、Interact によって一時制御ファイルが作成される際に動的に置換されます。

制御ファイルで必要な正しい構文については、データベース・ローダー・ユーティリティーの文書を参照してください。制御ファイル・テンプレートで利用可能なトークンは、LoaderControlFileTemplate プロパティーのものと同じです。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

LoaderDelimiterForAppend

説明

LoaderDelimiterForAppend プロパティーは、Interact の一時データ・ファイルが固定幅フラット・ファイルであるか、それとも区切りフラット・ファイルであるかを指定します。また、区切りファイルの場合には、区切りとして使用する文字または文字の集合を指定します。

値が未定義の場合、Interact は、固定幅フラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

値を指定する場合、それは、ローダーが呼び出された時点で、空であるとは認識されていないテーブルのデータを設定するために使用されます。Interact は、このプロパティーの値を区切り文字として使用することにより、区切りフラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

有効な値

文字 (必要に応じて二重引用符で囲むことが可能)。

LoaderDelimiterAtEndForAppend

説明

一部の外部ロード・ユーティリティーでは、データ・ファイルを区切る必要があります。また、各行は区切り文字で終わる必要があります。この要件を満たすためには、LoaderDelimiterAtEndForAppend の値を TRUE に設定することにより、ローダーが起動して、空として認識されてはいないテーブルのデータを設定する際に、Interact が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

LoaderUseLocaleDP

説明

LoaderUseLocaleDP プロパティーは、Interact が、データベース・ロード・ユーティリティーによってロードされるファイルに数値を書き込む際に、小数点としてロケール固有の記号を使用するかどうかを指定します。

ピリオド (.) を小数点として指定するには、この値を FALSE に設定します。

ロケールにふさわしい小数点記号を使用することを指定するには、この値を TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Interact | general | testRunDataSource

これらの構成プロパティーは、Interact 設計環境用テスト実行テーブルのデータ・ソースの設定を定義します。使用するランタイム環境の最低 1 つで、このデータ・ソースを定義する必要があります。これらは、対話式フローチャートのテスト実行を行う際に使用されるテーブルです。

jndiName

説明

この jndiName プロパティーを使用して、設計環境で対話式フローチャートのテスト実行を行う際にアクセスする顧客テーブル用にアプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic) で定義されている、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

type

説明

設計環境で対話式フローチャートのテスト実行を行う際にアクセスする顧客テーブルのデータベース・タイプ

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

aliasPrefix

説明

AliasPrefix プロパティーは、ディメンション・テーブルを使用していて、設計環境が対話式フローチャートのテスト実行を行うときにアクセスする顧客テーブルに新しいテーブルを書き込む際に、Interact により自動的に作成される別名を、Interact がどのように形成するかを指定します。

各データベースには、それぞれ ID の最大長があります。使用しているデータベースの文書を調べて、設定する値がデータベースの最大 ID 長を超えないものであることを確認してください。

デフォルト値

A

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティーは、テスト実行テーブルへのデータベース接続要求が失敗した場合に、Interact によって自動的に再試行される時間を秒単位で指定します。Interact は、この長さの時間、データベースへの再接続を自動的に試行してから、データベース・エラーまたは失敗を報告します。この値を 0 に設定すると、Interact は無制限に再試行します。この値を -1 に設定すると、再試行は行われません。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティーは、Interact がテスト実行テーブルへのデータベース接続に失敗した場合に、再接続を試行するまでの待ち時間を秒数で指定します。この値を -1 に設定すると、再試行は行われません。

デフォルト値

-1

schema

説明

対話式フローチャートのテスト実行のテーブルが含まれているスキーマの名前。Interact は、このプロパティーの値をすべてのテーブル名の前に挿入します。例えば、UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります。

スキーマを定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者はスキーマと同じであると想定します。あいまいさを排除するには、この値を設定してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Interact | general | contactAndResponseHistoryDataSource

これらの構成プロパティーは、Interact のクロスセッション・レスポンス・トラッキングに必要なコンタクトとレスポンスの履歴データ・ソースの接続設定を定義します。これらの設定は、コンタクトとレスポンスの履歴モジュールとは関係ありません。

jndiName

説明

この jndiName プロパティーを使用して、アプリケーション・サーバー (WebSphere または WebLogic) で定義されている、Interact のクロスセッション・レスポンス・トラッキングに必要なコンタクトとレスポンスの履歴データ・ソース用の Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別します。

デフォルト値

type

説明

Interact のクロスセッション・レスポンス・トラッキングに必要なコンタクトとレスポンスの履歴データ・ソースによって使用されるデータ・ソースのデータベース・タイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | DB2 | ORACLE

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティーは、Interact のクロスセッション・レスポンス・トラッキングへのデータベース接続要求が失敗した場合に、Interact によって自動的に再試行される時間を秒単位で指定します。Interact は、この長さの時間、データベースへの再接続を自動的に試行してから、データベース・エラーまたは失敗を報告します。この値を 0 に設定すると、Interact は無制限に再試行します。この値を -1 に設定すると、再試行は行われません。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティーは、Interact が Interact のクロスセッション・レスポンス・トラッキングへのデータベース接続に失敗した場合に、再接続を試行するまでの待ち時間を秒数で指定します。この値を -1 に設定すると、再試行は行われません。

デフォルト値

-1

schema

説明

Interact のクロスセッション・レスポンス・トラッキングのテーブルが含まれているスキーマの名前。Interact は、このプロパティーの値をすべてのテーブル名の前に挿入します。例えば、`UACI_IntChannel` は `schema.UACI_IntChannel` になります。

スキーマを定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者はスキーマと同じであると想定します。あいまいさを排除するには、この値を設定してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Interact | general | idsByType

これらの構成プロパティーは、コンタクトとレスポンスの履歴モジュールで使用される ID 番号の設定を定義します。

initialValue

説明

UACI_IDsByType テーブルを使用して ID を生成するときに使用される、ID の初期値。

デフォルト値

1

有効な値

0 より大きい任意の値。

再試行 (retries)

説明

UACI_IDsByType テーブルを使用して ID を生成するときの例外を生成する前に再試行する回数。

デフォルト値

20

有効な値

0 より大きい任意の整数。

Interact | フローチャート

このセクションでは、対話式フローチャートの構成設定を定義します。

defaultDateFormat

説明

Interact が日付からストリングへ、およびストリングから日付への変換に使用するデフォルトの日付形式。

デフォルト値

MM/dd/yy

idleFlowchartThreadTimeoutInMinutes

説明

Interact で、対話式フローチャートの専用スレッドをアイドル状態にしておける分数。その後、そのスレッドは解放されます。

デフォルト値

5

idleProcessBoxThreadTimeoutInMinutes

説明

Interact で、対話式フローチャート・プロセスの専用スレッドをアイドル状態にしておける分数。その後、そのスレッドは解放されます。

デフォルト値

5

maxSizeOfFlowchartEngineInboundQueue

説明

Interact がキューに保持するフローチャート実行要求の最大数。この要求数に到達すると、Interact は要求の受け入れを停止します。

デフォルト値

1000

maxNumberOfFlowchartThreads

説明

対話式フローチャート要求の専用スレッドの最大数。

デフォルト値

25

maxNumberOfProcessBoxThreads

説明

対話式フローチャート・プロセス専用スレッドの最大数。

デフォルト値

50

maxNumberOfProcessBoxThreadsPerFlowchart

説明

フローチャート・インスタンスごとの対話式フローチャート・プロセス専用スレッドの最大数。

デフォルト値

3

minNumberOfFlowchartThreads

説明

対話式フローチャート要求の専用スレッドの最小数。

デフォルト値

10

minNumberOfProcessBoxThreads

説明

対話式フローチャート・プロセス専用スレッドの最小数。

デフォルト値

20

sessionVarPrefix

説明

セッション変数の接頭部。

デフォルト値

SessionVar

Interact | フローチャート | ExternalCallouts

このセクションは、外部コールアウト API を使用して作成した、カスタムの外部コールアウトのクラス設定を定義します。

class

説明

この外部コールアウトによって表される Java クラスの名前。

これは、IBM のマクロ `EXTERNALCALLOUT` でアクセスできる Java クラスです。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

classPath

説明

この外部コールアウトによって表される Java クラスのクラスパス。クラスパスは、ランタイム環境サーバー上の JAR ファイルを参照する必要があります。サーバー・グループを使用しており、すべてのランタイム・サーバーが同じ Marketing Platform を使用している場合は、すべてのサーバーの同じロケーションに JAR ファイルのコピーが存在する必要があります。クラスパスは、JAR ファイルの絶対ロケーションで構成されている必要があります。そのロケーションは、そのランタイム環境サーバーのオペレーティング・システムのパス区切り文字 (例えば、Windows ではセミコロン (;)、UNIX システムではコロン (:)) で区切られます。クラス・ファイルが

含まれているディレクトリーは承認されません。例えば、Unix システムでは、`/path1/file1.jar:/path2/file2.jar` のようになります。

このクラスパスは、1024 文字未満でなければなりません。.jar ファイル内のマニフェスト・ファイルを使用して、他の .jar ファイルを指定することができます。そのため、クラスパス内に存在する .jar ファイルは 1 つのみにする必要があります。

これは、IBM のマクロ `EXTERNALCALLOUT` でアクセスできる Java クラスです。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

value

説明

外部コールアウトのクラスに必要な任意のパラメーターの値。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

例

外部コールアウトが外部サーバーのホスト名を必要とする場合は、「**ホスト**」という名前のパラメーター・カテゴリーを作成し、「**値**」プロパティーをサーバー名として定義します。

Interact | monitoring

この構成プロパティーのセットは、JMX モニター設定を定義できるようにします。これらのプロパティーを構成する必要があるのは、JMX モニターを使用する場合のみです。Interact 設計環境の構成プロパティーで、コンタクトとレスポンスの履歴モジュール用に定義される JMX モニター・プロパティーは、別に存在します。

protocol

説明

Interact メッセージング・サービス用のプロトコルを定義します。

JMXMP を選択する場合は、以下の JAR ファイルを、以下の順序でクラスパスに組み込む必要があります。

`Interact/lib/InteractJMX.jar;Interact/lib/jmxremote_optional.jar`

デフォルト値

JMXMP

有効な値

JMXMP | RMI

port

説明

メッセージング・サービスのポート番号。

デフォルト値

9998

enableSecurity

説明

Interact ランタイム・サーバーの JMXMP メッセージング・サービスのセキュリティーを有効または無効にするブール値。`true` に設定する場合は、Interact のランタイム JMX サービスにアクセスするためのユーザー名とパスワードを提供する必要があります。このランタイム・サーバー用のユーザー資格情報は、Marketing Platform によって認証されます。Jconsole では、空のパスワードでのログインは許可されていません。

プロトコルが RMI の場合、このプロパティーは無効です。Campaign の JMX では、このプロパティーは無効です (Interact の設計時)。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | monitoring | activitySubscribers

この一連の構成プロパティーは、Interact ランタイム環境の基本的なパフォーマンス・データの更新を定期的に受け取るリモート・サブスクライバーに関係するルート・ノードの設定を有効にします。

heartbeatPeriodInSecs

説明

各ランタイム・インスタンスがサブスクライバーに更新を送信する間隔 (秒単位)。

デフォルト値

60

Interact | monitoring | activitySubscribers | (target)

(target)

説明

サブスクライバーの設定のルート・ノード。

URL

説明

このサブスクライバーの URL。このエンドポイントは、HTTP で転送される JSON メッセージを受け入れることができなければなりません。

continuousErrorsForAbort

説明

何回連続して更新が失敗したら、このサブスクライバーへの更新の送信をランタイム・インスタンスが停止するか。

デフォルト値

5

timeoutInMillis

説明

このサブスクライバーに更新を送信中に送信プロセスがタイムアウトになる時間 (ミリ秒単位)。

デフォルト値

1000

有効な値

有効

説明

このサブスクライバーを有効にするか無効にするか。

デフォルト値

True

有効な値

True または False

type

説明

このデータ・ストアのタイプ。このオプションを選択する場合は、パラメーター **className** を追加し、この実装クラスの完全修飾名を値に指定する必要があります。 JAR ファイルの URI が Interact ランタイムのクラスパスに含まれていない場合は、**classPath** を、JAR ファイルの URI を指定して追加する必要があります。

デフォルト値

InteractLog

有効な値

InteractLog、RelationalDB、および Custom

jmxInclusionCycles

説明

詳細な JMX 統計をこのサブスクライバーに送信する間隔 (**heartbeatPeriodInSecs** の倍数)。

デフォルト値

5

有効な値

Interact | profile

この構成プロパティーのセットは、オファー非表示およびスコア・オーバーライドを含む、オプションのオファー配信機能の一部を制御します。

enableScoreOverrideLookup

説明

True に設定した場合、Interact はセッションの作成時に、スコア・オーバーライド・データを scoreOverrideTable からロードします。False の場合、Interact はセッションの作成時に、マーケティング・スコア・オーバーライド・データをロードしません。

true の場合は、「Interact | プロファイル | オーディエンス・レベル | (オーディエンス・レベル) | scoreOverrideTable」のプロパティーも構成する必要があります。定義する必要があるのは、必要なオーディエンス・レベルの scoreOverrideTable プロパティーのみです。オーディエンス・レベルの scoreOverrideTable をブランクにすると、そのオーディエンス・レベルのスコア・オーバーライド・テーブルは使用不可になります。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

enableOfferSuppressionLookup

説明

True に設定した場合、Interact はセッションの作成時に、オファー非表示データを offerSuppressionTable からロードします。False の場合、Interact はセッションの作成時に、オファー非表示データをロードしません。

true の場合は、「Interact | プロファイル | オーディエンス・レベル | (オーディエンス・レベル) | offerSuppressionTable」のプロパティーも構成する必要があります。定義する必要があるのは、必要なオーディエンス・レベルの enableOfferSuppressionLookup プロパティーのみです。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

enableProfileLookup

説明

新しくインストールした Interact では、このプロパティーは推奨されていません。アップグレードした Interact のインストール済み環境では、このプロパティーは最初の配置まで有効です。

テーブルのロードの動作は、対話式フローチャートで使用されますが、対話式チャネルではマップされません。True に設定した場合、Interact はセッションの作成時に、プロファイル・データを profileTable からロードします。

true の場合は、「Interact | プロファイル | オーディエンス・レベル | (オーディエンス・レベル) | profileTable」のプロパティーも構成する必要があります。

対話式チャネル・テーブル・マッピング・ウィザードの「訪問セッションの開始時にこのデータをメモリーにロードする」 設定は、この構成プロパティーをオーバーライドします。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

defaultOfferUpdatePollPeriod

説明

システムが、キャッシュに入っているデフォルト・オファー・テーブルのデフォルト・オファーを更新する前に待機する秒数。-1 に設定すると、システムは、ランタイム・サーバーの始動時に初期リストがキャッシュにロードされた後、キャッシュ内のデフォルト・オファーを更新しません。

デフォルト値

-1

Interact | profile | Audience Levels | [AudienceLevelName]

この構成プロパティーのセットは、Interact の追加機能に必要なテーブル名を定義できるようにします。テーブル名の定義が必要なのは、関連機能を使用している場合のみです。

新しいカテゴリー名

説明

オーディエンス・レベルの名前。

scoreOverrideTable

説明

オーディエンス・レベルのスコア・オーバーライド情報が含まれているテーブルの名前。このプロパティーは、enableScoreOverrideLookup を true に設定した場合に適用されます。このプロパティーは、スコア・オーバーライド・テーブルを使用可能にするオーディエンス・レベルに対して定義する必要があります。そのオーディエンス・レベルにスコア・オーバーライド・テーブルがない場合は、enableScoreOverrideLookup が true に設定されている場合でも、このプロパティーは未定義のままにすることができます。

Interact は、prodUserDataSource プロパティーによって定義されている Interact ランタイム・サーバーがアクセスする顧客テーブルから、このテーブルを探します。

このデータ・ソースの「**スキーマ**」プロパティーを定義した場合、Interact はそのスキーマをこのテーブル名の前に付加します。例えば、schema.UACI_ScoreOverride のようになります。例えば mySchema.UACI_ScoreOverride のような完全修飾名を入力した場合、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

UACI_ScoreOverride

offerSuppressionTable

説明

オーディエンス・レベルのオファー非表示情報が含まれているテーブルの名前。このプロパティーは、オファー非表示テーブルを使用可能にするオーディエンス・レベルに対して定義する必要があります。このオーディエンス・レベルに関するオファー非表示テーブルがない場合は、このプロパティーを未定義のままにすることができます。 enableOfferSuppressionLookup が true に設定されている場合は、このプロパティーに有効なテーブルを設定しなければなりません。

Interact は、prodUserDataSource プロパティーによって定義されているランタイム・サーバーがアクセスする顧客テーブルから、このテーブルを探します。

デフォルト値

UACI_BlackList

contactHistoryTable

説明

このオーディエンス・レベルのコンタクト履歴データのステージング・テーブル名。

このテーブルは、ランタイム環境テーブル (systemTablesDataSource) に格納されます。

このデータ・ソースの「**スキーマ**」プロパティーを定義した場合、Interact はそのスキーマをこのテーブル名の前に付加します。例えば、schema.UACI_CHStaging のようになります。例えば mySchema.UACI_CHStaging のような完全修飾名を入力した場合、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

コンタクト履歴ログを無効にしている場合は、このプロパティーを設定する必要はありません。

デフォルト値

UACI_CHStaging

chOfferAttribTable

説明

このオーディエンス・レベルのコンタクト履歴オファー属性テーブルの名前。

このテーブルは、ランタイム環境テーブル (systemTablesDataSource) に格納されます。

このデータ・ソースの「**スキーマ**」プロパティーを定義した場合、Interact はそのスキーマをこのテーブル名の前に付加します。例えば、schema.UACI_CHOfferAttrib のようになります。例えば mySchema.UACI_CHOfferAttrib のような完全修飾名を入力した場合、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

コンタクト履歴ログを無効にしている場合は、このプロパティーを設定する必要はありません。

デフォルト値

UACI_CHOfferAttrib

responseHistoryTable

説明

このオーディエンス・レベルのレスポンス履歴ステージング・テーブルの名前。

このテーブルは、ランタイム環境テーブル (systemTablesDataSource) に格納されます。

このデータ・ソースの「**スキーマ**」プロパティーを定義した場合、Interact はそのスキーマをこのテーブル名の前に付加します。例えば、schema.UACI_RHStaging のようになります。例えば mySchema.UACI_RHStaging のような完全修飾名を入力した場合、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

レスポンス履歴ログを無効にしている場合は、このプロパティーを設定する必要はありません。

デフォルト値

UACI_RHStaging

crossSessionResponseTable

説明

レスポンス・トラッキング機能からアクセス可能なコンタクトとレスポンスの履歴テーブルでのクロスセッション・レスポンス・トラッキングに必要な、このオーディエンス・レベルのテーブルの名前。

このデータ・ソースの「**スキーマ**」プロパティーを定義した場合、Interact はそのスキーマをこのテーブル名の前に付加します。例えば、schema.UACI_XSessResponse のようになります。例えば mySchema.UACI_XSessResponse のような完全修飾名を入力した場合、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

クロス・セッション・レスポンス・ログを無効にしている場合は、このプロパティーを設定する必要はありません。

デフォルト値

UACI_XSessResponse

userEventLoggingTable

説明

これは、ユーザー定義のイベント・アクティビティーのログ記録に使用されるデータベース・テーブルの名前です。イベントは、Interact インターフェースの「対話式チャネルのサマリー」ページの「イベント」タブでユーザーによって定義済みです。ここで指定するデータベース・テーブルには、イベント ID、名前、イベント・アクティビティー・キャッシュが最後にフラッシュされて以来このイベントがこのオーディエンス・レベルで発生した回数などの情報を格納します。

このデータ・ソースの「**スキーマ**」プロパティーを定義した場合、Interact はそのスキーマをこのテーブル名の前に付加します。例えば、schema.UACI_UserEventActivity のようになります。例えば mySchema.UACI_UserEventActivity のような完全修飾名を入力した場合、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

UACI_UserEventActivity

patternStateTable

説明

これは、パターン条件が満たされているかどうか、パターンの有効期限が切れているかどうか、あるいは無効になっているかどうかなど、イベント・パターンの状態のログ記録に使用されるデータベース・テーブルの名前です。

このデータ・ソースの「**スキーマ**」プロパティーを定義した場合、Interact はそのスキーマをこのテーブル名の前に付加します。例えば、schema.UACI_EventPatternState のようになります。例えば mySchema.UACI_EventPatternState のような完全修飾名を入力した場合、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

イベント・パターンを使用しない場合でも、オーディエンス・レベルごとに patternStateTable が必要です。 patternStateTable は、組み込まれている UACI_EventPatternState の DDL に基づきます。以下の例では、オーディエンス ID に ComponentNum と ComponentStr の 2 つのコンポーネントがあります。

```
CREATE TABLE UACI_EventPatternState_Composite
(
   UpdateTime bigint NOT NULL,
   State varbinary(4000),
   ComponentNum bigint NOT NULL,
   ComponentStr nvarchar(50) NOT NULL,
   CONSTRAINT PK_CustomerPatternState_Composite PRIMARY KEY
   (ComponentNum,ComponentStr,UpdateTime)
)
```

デフォルト値

UACI_EventPatternState

Interact | profile | Audience Levels | [AudienceLevelName] | Offers by Raw SQL

この構成プロパティーのセットは、Interact の追加機能に必要なテーブル名を定義できるようにします。テーブル名の定義が必要なのは、関連機能を使用している場合のみです。

enableOffersByRawSQL

説明

True に設定すると、Interact はこのオーディエンス・レベルの offersBySQL 機能を使用可能にします。これにより、ランタイムに SQL コードを実行して、必要なオファー候補のセットを作成するように構成することができます。False の場合、Interact は offersBySQL 機能を使用しません。

このプロパティーを true に設定する場合は、「Interact | profile | Audience Levels | (Audience Level) | Offers by Raw SQL | SQL Template」 のプロパティーを構成して、1 つ以上の SQL テンプレートを定義することも可能です。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

cacheSize

説明

OfferBySQL 照会の結果の保管に使用されるキャッシュのサイズ。照会の結果がほとんどのセッションに対して一意の場合、キャッシュを使用すると悪い影響が出る可能性がありますので、注意してください。

デフォルト値

-1 (オフ)

有効な値

-1 | 値

cacheLifeInMinutes

説明

キャッシュが有効な場合、これは、キャッシュの内容が古くなるのを避けるために、システムがキャッシュを消去するまでの分数を示します。

デフォルト値

-1 (オフ)

有効な値

-1 | 値

defaultSQLTemplate

説明

使用する SQL テンプレートの名前 (API 呼び出しで指定されていない場合)。

デフォルト値

なし

有効な値

SQL テンプレート名

名前

構成カテゴリー

`Interact | プロファイル | オーディエンス・レベル | [AudienceLevelName] | 未加工 SQL によるオファー (Offers by Raw SQL) | (SQL テンプレート)`

説明

この SQL 照会テンプレートに割り当てる名前。API 呼び出しでこの SQL テンプレートを使用する際に意味のある記述名を入力してください。offerBySQL 処理の「対話リスト」プロセス・ボックスで定義されている名前と同一の 名前をここで使用した場合、ここに入力した SQL ではなく、そのプロセス・ボックス内の SQL が使用されます。

デフォルト値

なし

SQL

構成カテゴリー

`Interact | プロファイル | オーディエンス・レベル | [AudienceLevelName] | 未加工 SQL によるオファー (Offers by Raw SQL) | (SQL テンプレート)`

説明

このテンプレートによって呼び出される SQL 照会が入ります。SQL 照会には、訪問者のセッション・データ (プロファイル) の一部になっている変数名への参照が含まれている場合があります。例えば、`select * from MyOffers where category = ${preferredCategory}` は、`preferredCategory` という名前の変数が含まれているセッションに依存します。

この機能で使用するために設計時に作成した特定のオファー・テーブルを照会するように、SQL を構成する必要があります。ここではストアード・プロシージャーはサポートされていませんので、注意してください。

デフォルト値

なし

Interact | profile | Audience Levels | [AudienceLevelName | Profile Data Services | [DataSource]

この構成プロパティーのセットは、Interact の追加機能に必要なテーブル名を定義できるようにします。テーブル名の定義が必要なのは、関連機能を使用している場合のみです。プロファイル・データ・サービスのカテゴリーによって、すべてのオーディエンス・レベルに対して作成される組み込みデータ・ソース (データベースと呼ばれる) に関する情報が提供されます。これは、事前構成で優先度 100 に設定されます。ただし、変更したり無効にしたりすることもできます。このカテゴリーには、追加の外部データ・ソース用のテンプレートも含まれています。「**External Data Services**」というテンプレートをクリックすると、ここに記載する構成設定を入力できます。

新しいカテゴリー名

説明

(デフォルトのデータベース項目には使用できません。) 定義しているデータ・ソースの名前。ここで入力する名前は、同一オーディエンス・レベルのデータ・ソース間で固有でなければなりません。

デフォルト値

なし

有効な値

任意のテキスト・ストリングを使用できます。

enabled

説明

`True` に設定されると、このデータ・ソースは割り当てられたオーディエンス・レベルで有効になります。 `False` の場合、Interact はこのオーディエンス・レベルでこのデータ・ソースを使用しません。

デフォルト値

`True`

有効な値

True | False

className

説明

(デフォルトのデータベース項目には使用できません。)
`IInteractProfileDataService` を実装するデータ・ソース・クラスの完全修飾名。

デフォルト値

なし。

有効な値

完全修飾クラス名を指定するストリング。

classPath

説明

(デフォルトのデータベース項目には使用できません。) オプションの構成設定で、このデータ・ソース実装クラスをロードするためのパスを指定します。省略すると、デフォルトで、収容アプリケーション・サーバーのクラスパスが使用されます。

デフォルト値

表示されません。ただし、ここで値を指定しない場合はデフォルトで、収容アプリケーション・サーバーのクラスパスが使用されます。

有効な値

クラスパスを指定するストリング。

priority

説明

このオーディエンス・レベル内でのこのデータ・ソースの優先度。各オーディエンス・レベルにおいて、すべてのデータ・ソース間で固有な値でなければなりません。(つまり、あるデータ・ソースで優先度を 100 に設定した場合、そのオーディエンス・レベルでは、他のどのデータ・ソースも優先度 100 にすることはできません。)

デフォルト値

デフォルト・データベースでは `100`。ユーザー定義データ・ソースでは `200`

有効な値

任意の負でない整数を使用できます。

Interact | offerserving

これらの構成プロパティーは、一般的な学習構成プロパティーを定義します。組み込み学習を使用する場合、学習実装環境をチューニングするには、設計環境の構成プロパティーを使用します。

offerTieBreakMethod

説明

`offerTieBreakMethod` プロパティーは、2 つのオファーのスコアが同等 (タイ) の場合のオファー配信の動作を定義します。このプロパティーをそのデフォルト値である Random に設定する場合、Interact は、同等のスコアを持つオファーの中からランダムに選択します。この構成を Newer Offer に設定すると、複数オファーのスコアが同じである場合に、Interact は、古いオファー (オファー ID の値がより小さいということに基づく) より先に新しいオファー (オファー ID の値がより大きい) を配信します。

注:

Interact にはオプションの機能があり、それを使用すると管理者はスコアに関係なくランダムな順序でオファーを返すようシステムを構成することができます。それは、`percentRandomSelection` オプション (`Campaign |`

partitions | [partition_number] | Interact | learning | percentRandomSelection) を設定することによって行います。ここで説明されている offerTieBreakMethod プロパティーは、percentRandomSelection がゼロ (無効) に設定されている場合にのみ使用されます。

デフォルト値

Random

有効な値

Random | Newer Offer

optimizationType

説明

optimizationType プロパティーは、オファーの割り当てを支援するために、Interact で学習エンジンを使用するかどうかを定義します。NoLearning に設定すると、Interact は学習を使用しません。BuiltInLearning に設定すると、Interact は Interact と共に組み込まれた Bayesian 学習エンジンを使用します。ExternalLearning に設定すると、Interact は指定された学習エンジンを使用します。ExternalLearning を選択する場合は、externalLearningClass プロパティーおよび externalLearningClassPath プロパティーを定義する必要があります。

デフォルト値

NoLearning

有効な値

NoLearning | BuiltInLearning | ExternalLearning

segmentationMaxWaitTimeInMS

説明

ランタイム・サーバーが、オファーを取得する前に、対話式フローチャートの完了を待つ最大ミリ秒数。

デフォルト値

5000

treatmentCodePrefix

説明

コードを処理するため、前に付加される接頭部。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

effectiveDateBehavior

説明

訪問者に提示されるオファーをフィルタリングで取り出す際に Interact がオファーの発効日を使用するかどうかを決定します。値は以下のとおりです。

- -1 に設定すると、Interact はオファーの発効日を無視するようになります。

  0 に設定すると、Interact は発効日を使用してオファーをフィルタリングするようになり、オファー発効日が現在日付以前であれば、オファーは訪問者に提供されます。

  effectiveDateGracePeriod 値が設定されている場合は、オファーを提供するかどうかの決定に猶予期間も適用されます。
- 正整数に設定すると、Interact は訪問者にオファーを提供するかどうかを決定する際に現在日付にこのプロパティーの値を加えた値を使用するようになり、オファー発効日が現在日付にこのプロパティーの値を加えた値よりも前の場合に、訪問者にオファーが提供されます。

  effectiveDateGracePeriod 値が設定されている場合は、オファーを提供するかどうかの決定に猶予期間も適用されます。

デフォルト値

-1

effectiveDateGracePeriodOfferAttr

説明

オファー定義内の発効日猶予期間を示すカスタム属性の名前を指定します。例えば、このプロパティーに `AltGracePeriod` の値を構成することもできます。その場合は、**effectiveDateBehavior** プロパティーで猶予期間として使用する日数を指定するための `AltGracePeriod` というカスタム属性をオファーに定義することになります。

発効日が現在日付から 10 日後の新規オファー・テンプレートを作成し、`AltGracePeriod` というカスタム属性を組み込むとします。このテンプレートを使用してオファーを作成する場合、`AltGracePeriod` の値を 14 日に設定すると、訪問者にオファーが提供されます。現在日付がオファー発効日の猶予期間内だからです。

デフォルト値

ブランク

alwaysLogLearningAttributes

説明

学習モジュールで使用される訪問者属性に関する情報を Interact がログ・ファイルに書き込むかどうかを指示します。この値を true に設定すると、学習パフォーマンスとログ・ファイルのサイズに影響を与える場合があります。

デフォルト値

False

Interact | offerserving | Built-in Learning Config

これらの構成プロパティーは、組み込み学習のデータベースへの書き込み設定を定義します。学習実装環境をチューニングするには、設計環境の構成プロパティーを使用します。

version

説明

1 か 2 を選択できます。バージョン 1 は、スレッドやレコードの制限を設定するパラメーターを使用しない基本構成バージョンです。バージョン 2 は拡張構成バージョンで、スレッドやレコードのパラメーターを設定してパフォーマンスを改善することができます。これらのパラメーターの制限に達すると、集約や削除が実行されます。

デフォルト値

1

insertRawStatsIntervalInMinutes

説明

Interact 学習モジュールが、学習ステージング・テーブルにさらに行を挿入する前に待機する分数。この時間は、ご使用の環境で学習モジュールが処理するデータ量に基づいて、変更が必要になる場合があります。

デフォルト値

5

有効な値

正整数

aggregateStatsIntervalInMinutes

説明

Interact 学習モジュールが待機する、学習統計テーブル内のデータの集約が行われる間隔 (分数)。この時間は、ご使用の環境で学習モジュールが処理するデータ量に基づいて、変更が必要になる場合があります。

デフォルト値

15

有効な値

ゼロより大きい整数。

autoAdjustPercentage

説明

集計の実行時に処理対象となるデータの割合を、前回の実行時の測定基準に基づいて決定するための値。デフォルトでは、この値はゼロに設定されます。この場合、統合機能はすべてのステージング・レコードを処理し、この自動調整機能は無効になります。

デフォルト値

0

有効な値

0 から 100 までの間の数値。

enableObservationModeOnly

説明

`True` に設定した場合、学習モードが有効になります。このモードでは、Interact が学習用にデータを収集して、そのデータを推奨やオファー調停には使用しません。これにより、推奨のためのデータが十分収集されたと判断するまで、開始モードで自習を実行できます。

デフォルト値

False

有効な値

True | **False**

excludeAbnormalAttribute

説明

これらの属性に無効のマークを付けるかどうかを決定する設定。`IncludeAttribute` に設定すると、異常な属性は除外されず、無効のマークが付きません。 `ExcludeAttribute` に設定すると、異常な属性は除外され、無効のマークが付きます。

デフォルト値

IncludeAttribute

有効な値

IncludeAttribute | **ExcludeAttribute**

Interact | offerserving | Built-in Learning Config | Parameter Data | [parameterName]

これらの構成プロパティーは、外部学習モジュールの任意のパラメーターを定義します。

numberOfThreads

説明

学習集約機能がデータの処理に使用するスレッドの最大数。有効な値は正整数です。学習データ・ソースで構成された最大接続数を超えてはなりません。このパラメーターは、集約機能バージョン 2 でのみ使用されます。

デフォルト値

10

maxLogTimeSpanInMin

説明

集約機能バージョン 1 が選択されている場合は、データベース・バッチが大きくなりすぎないように、ステージング・レコードの処理を反復実行することができます。この場合、それらのステージング・レコードは、単一の集約サイクル内で反復処理が行われるたびに、まとめて処理されます。このパラメーターの値は、集約機能が反復処理ごとに処理するステージング・レコードの最大の時間範囲を指定します。この時間範囲は、各ステージング・レコードに関連付けられた LogTime フィールドに基づくもので、最も早い時間枠に LogTime が入るレコードのみが処理されます。有効な値は、負でない整数です。値が 0 の場合は制限がなく、すべてのステージング・レコードが単一の反復処理で処理されることになります。

デフォルト値

0

maxRecords

説明

集約機能バージョン 2 が選択されている場合は、データベース・バッチが大きくなりすぎないように、ステージング・レコードの処理を反復実行することができます。この場合、それらのステージング・レコードは、単一の集約サイクル内で反復処理が行われるたびに、まとめて処理されます。このパラメーターの値は、集約機能が反復処理のたびに処理するステージング・レコードの最大数を指定します。有効な値は、負でない整数です。値が 0 の場合は制限がなく、すべてのステージング・レコードが単一の反復処理で処理されることになります。

デフォルト値

0

value

説明

組み込み学習モジュールのクラスに必要な任意のパラメーターの値。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Interact | offerserving | External Learning Config

これらの構成プロパティーは、学習 API を使用して作成する外部学習モジュールのクラス設定を定義します。

class

説明

`optimizationType` を `ExternalLearning` に設定している場合は、`externalLearningClass` を外部学習エンジンのクラス名に設定します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

使用可能性

このプロパティーは、optimizationType が ExternalLearning に設定されている場合にのみ適用されます。

classPath

説明

optimizationType を ExternalLearning に設定している場合は、externalLearningClass を外部学習エンジンのクラスパスに設定します。

クラスパスは、ランタイム環境サーバー上の JAR ファイルを参照する必要があります。サーバー・グループを使用しており、すべてのランタイム・サーバーが同じ Marketing Platform を使用している場合は、すべてのサーバーの同じロケーションに JAR ファイルのコピーが存在する必要があります。クラスパスは、JAR ファイルの絶対ロケーションで構成されている必要があります。そのロケーションは、そのランタイム環境サーバーのオペレーティング・システムのパス区切り文字 (例えば、Windows ではセミコロン (;)、UNIX システムではコロン (:)) で区切られます。クラス・ファイルが含まれているディレクトリーは承認されません。例えば、Unix システムでは、/path1/file1.jar:/path2/file2.jar のようになります。

このクラスパスは、1024 文字未満でなければなりません。.jar ファイル内のマニフェスト・ファイルを使用して、他の .jar ファイルを指定することができます。そのため、クラスパス内に存在する .jar ファイルは 1 つのみにする必要があります。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

使用可能性

このプロパティーは、optimizationType が ExternalLearning に設定されている場合にのみ適用されます。

Interact | offerserving | External Learning Config | Parameter Data | [parameterName]

これらの構成プロパティーは、外部学習モジュールの任意のパラメーターを定義します。

value

説明

外部学習モジュールのクラスに必要な任意のパラメーターの値。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

例

外部学習モジュールにアルゴリズム・ソルバー・アプリケーションのパスが必要な場合は、solverPath というパラメーター・カテゴリーを作成し、「値」プロパティーをそのアプリケーションのパスとして定義します。

Interact | offerserving | Constraints

これらの構成プロパティーは、オファー提供プロセスに適用する制約を定義します。

maxOfferAllocationInMemoryPerInstance

説明

オファーのブロックのサイズ。 Interact は、オファーが返されるたびにシステムがデータベースに照会しなくても済むように、メモリー内にオファーのプールを保持します。オファーが返されるたびに、プールは調整されます。プールが空になると、Interact はオファーのブロックをもう 1 つ取得して、プールをいっぱいにします。

デフォルト値

1000

有効な値

0 より大きい整数。

maxDistributionPerIntervalPerInstanceFactor

説明

ランタイム・サーバー間での分散をサポートするために、1 つのランタイム・サーバーに割り当てるオファー割り当ての割合の上限。

デフォルト値

100

有効な値

0 から 100 までの整数。

constraintCleanupIntervalInDays

説明

UACI_OfferCount テーブルの無効なカウントをクリーンアップする頻度。1 より小さい値にすると、この機能は無効になります。

デフォルト値

7

有効な値

0 より大きい整数。

Interact | services

このカテゴリーの構成プロパティーは、コンタクトとレスポンスの履歴データの収集や、レポートを作成し、ランタイム環境のシステム・テーブルに書き込むための統計の収集を管理する、すべてのサービスの設定を定義します。

externalLoaderStagingDirectory

説明

このプロパティーは、データベース・ロード・ユーティリティーのステージング・ディレクトリーのロケーションを定義します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

ステージング・ディレクトリーの絶対パス、または Interact のインストール・ディレクトリーからの相対パス。

データベース・ロード・ユーティリティーを使用可能にする場合は、contactHist カテゴリーおよび responstHist カテゴリーの cacheType プロパティーを、「External Loader File」に設定する必要があります。

Interact | services | contactHist

このカテゴリーの構成プロパティーは、コンタクト履歴ステージング・テーブルのデータを収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、コンタクト履歴データを記録するためにデータを収集するサービスが有効になります。false の場合、データは収集されません。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

cacheType

説明

コンタクト履歴用に収集されたデータを、メモリー (Memory Cache) またはファイル (External Loader File) に保持するかどうかを定義します。External Loader Fileは、データベース・ローダー・ユーティリティーを使用するように Interact を構成した場合にのみ使用できます。

Memory Cacheを選択する場合には、「**キャッシュ**」カテゴリーの設定を使用します。External Loader Fileを選択する場合には、fileCache カテゴリーの設定を使用します。

デフォルト値

Memory Cache

有効な値

Memory Cache | External Loader File

Interact | services | contactHist | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、コンタクト履歴ステージング・テーブルのデータを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

flushCacheToDB サービスが収集したコンタクト履歴データをデータベースに書き込む前に、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの書き込みを強制する間隔 (秒数)。

デフォルト値

3600

Interact | services | contactHist | fileCache

このカテゴリーの構成プロパティーは、データベース・ローダー・ユーティリティーを使用している場合に、コンタクト履歴データを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

flushCacheToDB サービスが収集したコンタクト履歴データをデータベースに書き込む前に、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの書き込みを強制する間隔 (秒数)。

デフォルト値

3600

Interact | services | defaultedStats

このカテゴリーの構成プロパティーは、インタラクション・ポイントのデフォルト・ストリングの使用回数に関する統計を収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

`true` の場合、`UACI_DefaultedStat` テーブルに対してインタラクション・ポイントのデフォルト・ストリングが使用された回数に関する統計を収集するサービスが有効になります。 `false` の場合、デフォルト・ストリングの統計は収集されません。

IBM レポートを使用しない場合は、データ収集は必要ないため、このプロパティーは `false` に設定できます。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | services | defaultedStats | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、インタラクション・ポイントのデフォルト・ストリングの使用回数に関する統計を収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

flushCacheToDB サービスが収集したデフォルト・ストリングの統計をデータベースに書き込む前に、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの書き込みを強制する間隔 (秒数)。

デフォルト値

3600

Interact | services | eligOpsStats

このカテゴリーの構成プロパティーは、対象となるオファーの統計を書き込むサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

`true` の場合、対象となるオファーの統計を収集するサービスが有効になります。`false` の場合、対象となるオファーの統計は収集されません。

IBM レポートを使用しない場合は、データ収集は必要ないため、このプロパティーは `false` に設定できます。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | services | eligOpsStats | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、対象となるオファーの統計を収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

flushCacheToDB サービスが収集した対象となるオファーの統計をデータベースに書き込む前に、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの書き込みを強制する間隔 (秒数)。

デフォルト値

3600

Interact | services | eventActivity

このカテゴリーの構成プロパティーは、イベント・アクティビティーの統計を収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

`true` の場合、イベント・アクティビティーの統計を収集するサービスが有効になります。`false` の場合、イベントの統計は収集されません。

IBM レポートを使用しない場合は、データ収集は必要ないため、このプロパティーは `false` に設定できます。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | services | eventActivity | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、イベント・アクティビティーの統計を収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

flushCacheToDB サービスが収集したイベント・アクティビティーの統計をデータベースに書き込む前に、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの書き込みを強制する間隔 (秒数)。

デフォルト値

3600

Interact | services | eventPattern

`eventPattern` カテゴリーの構成プロパティーは、イベント・パターン・アクティビティーの統計を収集するサービスの設定を定義します。

persistUnknownUserStates

説明

不明オーディエンス ID (訪問者) のイベント・パターンの状態をデータベースに保持するかどうかを決定します。オーディエンス ID が分かっている場合 (つまり、訪問者のプロファイルがプロファイル・データ・ソースに見つかる場合)、デフォルトで、セッションの終了時に、訪問者のオーディエンス ID と関連付けられているすべての更新されたイベント・パターンのステータスがデータベースに格納されます。

オーディエンス ID が不明な場合に発生するイベントは、`persistUnknownUserStates` プロパティーによって決定されます。デフォルトで、このプロパティーは `False` に設定され、不明オーディエンス ID の場合、イベント・パターンの状態は、セッションの終了時に破棄されます。

このプロパティーを `True` に設定する場合、不明ユーザー (構成されたプロファイル・データ・サービスでプロファイルが見つからない) のイベント・パターンの状態は継続します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

mergeUnknowUserInSessionStates

説明

不明オーディエンス ID (訪問者) のイベント・パターンの状態を保持する方法を決定します。オーディエンス ID がセッションの中盤で切り替わる場合、Interact は、データベース・テーブルから新規オーディエンス ID の保存済みのイベント・パターンの状態をロードしようとします。以前、オーディエンス ID が不明だった場合に、`mergeUnknowUserInSessionStates` プロパティーを `True` に設定すると、同じセッション内の以前のオーディエンス ID に属しているユーザー・イベント・アクティビティーは、新規オーディエンス ID にマージされます。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

enableUserEventLog

説明

ユーザー・イベント・アクティビティーをデータベースに記録するかどうかを決定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Interact | services | eventPattern | userEventCache

`userEventCache` カテゴリーの構成プロパティーは、データベース中に保持するためにキャッシュからイベント・アクティビティーを移動するタイミングを決定する設定を定義します。

threshold

説明

イベント・パターンの状態キャッシュに格納できるイベント・パターンの状態の最大数を決定します。制限に達すると、使用されていない時間が最も長い状態がキャッシュからフラッシュされます。

デフォルト値

100

有効な値

キャッシュに保持するイベント・パターンの状態の任意の数。

insertPeriodInSecs

説明

ユーザー・イベントのアクティビティーがメモリー内のキューに入れられる最大時間 (秒数) を決定します。このプロパティーによって指定される制限時間に達すると、それらのアクティビティーはデータベースに保持されます。

デフォルト値

3600 (60 分)

有効な値

任意の秒数。

Interact | services | eventPattern | advancedPatterns

このカテゴリー内の構成プロパティーは、Interact Advanced Patterns との統合が有効かどうかを制御し、 Interact Advanced Patterns との接続のタイムアウト間隔を定義します。

enableAdvancedPatterns

説明

`true` の場合、Interact Advanced Patterns との統合が有効になります。`false` の場合、統合は有効になりません。統合が以前に有効であった場合、Interact は Interact Advanced Patterns から受け取った最新のパターン状態を使用します。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

connectionTimeoutInMilliseconds

説明

Interact リアルタイム環境から Interact Advanced Patterns への HTTP 接続を確立するために許可される最大時間。要求がタイムアウトになった場合、Interact はパターンから最後に保存されたデータを使用します。

デフォルト値

30

readTimeoutInMilliseconds

説明

Interact リアルタイム環境と Interact Advanced Patterns との間に HTTP 接続が確立され、イベント・パターンの状態を取得するための要求が Interact Advanced Patterns に送信された後に、データを受信するために許可される最大時間。要求がタイムアウトになった場合、Interact はパターンから最後に保存されたデータを使用します。

デフォルト値

100

connectionPoolSize

説明

Interact リアルタイム環境と Interact Advanced Patterns との間の通信用の、HTTP 接続プールのサイズ。

デフォルト値

10

Interact | services | eventPattern | advancedPatterns | autoReconnect

このカテゴリー内の構成プロパティーは、 Interact Advanced Patterns との統合での、自動再接続機能のパラメーターを指定します。

enable

説明

Interact リアルタイム環境と Interact Advanced Patterns との間で接続問題が発生した場合に、システムが自動的に再接続を行うかどうかを決めます。デフォルト値の **True** は、この機能を有効にします。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

durationInMinutes

説明

このプロパティーは、 Interact リアルタイム環境と Interact Advanced Patterns との間で繰り返し生じる接続問題を、システムが評価する時間間隔を分数で指定します。

デフォルト値

10

numberOfFailuresBeforeDisconnect

説明

このプロパティーは、システムが Interact Advanced Patterns から自動的に切断される前に許可される、指定された期間内での接続エラーの数を指定します。

デフォルト値

3

consecutiveFailuresBeforeDisconnect

説明

自動再接続機能が Interact リアルタイム環境と Interact Advanced Patterns との間の連続した接続エラーだけを評価するかどうかを決めます。この値を **False** に設定した場合、指定の時間間隔内のすべてのエラーが評価されます。

デフォルト値

True

sleepBeforeReconnectDurationInMinutes

説明

システムは、このカテゴリーの他のプロパティーで指定された繰り返し障害のために切断した後、このプロパティーで指定された分数だけ待機してから再接続します。

デフォルト値

5

sendNotificationAfterDisconnect

説明

このプロパティーは、接続障害が発生したらシステムが E メール通知を送信するかどうかを決定します。通知メッセージには、エラーが生じた Interact リアルタイム・インスタンス名、および **sleepBeforeReconnectDurationInMinutes** プロパティーで指定された、再接続が行われる前の時間が含まれます。デフォルト値の **True** は、通知が送信されることを示します。

デフォルト値

True

Interact | services | customLogger

このカテゴリーの構成プロパティーは、テーブルに書き込むカスタム・データを収集するサービス (`UACICustomLoggerTableName` イベント・パラメーターを使用するイベント) の設定を定義します。

enableLog

説明

`true` の場合、テーブルへのカスタム・ログ機能が有効になります。`false` の場合、`UACICustomLoggerTableName` イベント・パラメーターは無効です。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Interact | services | customLogger | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、テーブルに入れるカスタム・データを収集するサービス (`UACICustomLoggerTableName` イベント・パラメーターを使用するイベント) のキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

flushCacheToDB サービスが収集したカスタム・データをデータベースに書き込む前に、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの書き込みを強制する間隔 (秒数)。

デフォルト値

3600

Interact | services | responseHist

このカテゴリーの構成プロパティーは、レスポンス履歴ステージング・テーブルに書き込むサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、レスポンス履歴ステージング・テーブルに書き込むサービスが有効になります。false の場合、レスポンス履歴ステージング・テーブルへのデータの書き込みは行われません。

レスポンス履歴ステージング・テーブルは、オーディエンス・レベルの responseHistoryTable プロパティーで定義されます。デフォルトは UACI_RHStaging です。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

cacheType

説明

キャッシュをメモリーに保持するか、ファイルに保持するかを定義します。External Loader Fileは、データベース・ローダー・ユーティリティーを使用するように Interact を構成した場合にのみ使用できます。

Memory Cacheを選択する場合には、「**キャッシュ**」カテゴリーの設定を使用します。External Loader Fileを選択する場合には、fileCache カテゴリーの設定を使用します。

デフォルト値

Memory Cache

有効な値

Memory Cache | External Loader File

actionOnOrphan

説明

この設定は、対応するコンタクト・イベントがないレスポンス・イベントに対して行う処理を決定します。 NoAction に設定すると、レスポンス・イベントは、対応するコンタクト・イベントが通知される場合のように処理されます。 Warning に設定すると、レスポンス・イベントは、対応するコンタクト・イベントが通知される場合のように処理されますが、警告メッセージが interact.log に書き込まれます。 Skip に設定すると、レスポンス・イベントは処理されず、エラー・メッセージが interact.log に書き込まれます。ここで選択した設定は、レスポンス履歴ログが使用可能かどうかにかかわらず有効になります。

デフォルト値

NoAction

有効な値

NoAction | Warning | Skip

Interact | services | response Hist | responseTypeCodes

このカテゴリーの構成プロパティーは、レスポンス履歴サービスの設定を定義します。

新しいカテゴリー名

説明　レスポンス・タイプのコードの名前。

code

説明

レスポンス・タイプのカスタム・コード。

デフォルト値

UA_UsrResponseType テーブルに追加されたカスタム・コード。

action

説明

レスポンス・タイプのカスタム・コードに対応するアクション。

通知されたイベントに対して定義されているアクションは、ここで定義するアクションをオーバーライドします。したがって、logAccept イベントが responseTypeCode なしで通知された場合、そのイベントは承認イベントとして扱われます。 logAccept イベントがこの構成に存在する responseTypeCode と共に通知された場合、ここに構成したアクションを使用して、承認イベントかどうかが決定されます。 logAccept イベントがこの構成に存在しない responseTypeCode と共に通知された場合、そのイベントは承認イベントとして扱われません。学習が有効になっている場合にイベントが承認イベントとして扱われると、適宜、学習統計が更新されます。このオファーの承認に基づくオファー式ルールがある場合は、そのルールが評価されます。

デフォルト値

なし

有効な値

LogAccept | LogReject | None

Interact | services | responseHist | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、レスポンス履歴データを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

flushCacheToDB サービスが収集したレスポンス履歴データをデータベースに書き込む前に、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの書き込みを強制する間隔 (秒数)。

デフォルト値

3600

Interact | services | responseHist | fileCache

このカテゴリーの構成プロパティーは、データベース・ローダー・ユーティリティーを使用している場合に、レスポンス履歴データを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

Interact がレコードをデータベースに書き込む前に、累積されるレコードの数。

`responseHist` - オーディエンス・レベルの `responseHistoryTable` プロパティーで定義されるテーブル。デフォルトは `UACI_RHStaging` です。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの書き込みを強制する間隔 (秒数)。

デフォルト値

3600

Interact | services | crossSessionResponse

このカテゴリーの構成プロパティーは、crossSessionResponse サービスと xsession プロセスの一般的な設定を定義します。これらの設定は、Interact のクロスセッション・レスポンス・トラッキングを使用している場合にのみ、構成する必要があります。

enableLog

説明

`true` の場合は、crossSessionResponse サービスが有効になり、Interact はクロスセッション・レスポンス・トラッキングのステージング・テーブルにデータを書き込みます。`false` の場合、crossSessionResponse サービスは無効になります。

デフォルト値

False

xsessionProcessIntervalInSecs

説明

xsession プロセスの実行間隔 (秒数)。このプロセスは、クロスセッション・レスポンス・トラッキングのステージング・テーブルから、レスポンス履歴のステージング・テーブルと組み込み学習モジュールにデータを移動します。

デフォルト値

180

有効な値

ゼロより大きい整数。

purgeOrphanResponseThresholdInMinutes

説明

crossSessionResponse サービスが、コンタクトとレスポンスの履歴テーブル内のコンタクトと一致しないすべてのレスポンスにマーク付けする前に待機する分数。

レスポンスと一致するものがコンタクトとレスポンスの履歴テーブル内に存在しない場合、`purgeOrphanResponseThresholdInMinutes` の分数が経過すると、Interact は xSessResponse ステージング・テーブルの `Mark` 列に -1 の値を書き込んで、そのレスポンスにマーク付けします。その後、これらのレスポンスを手動でマッチングするか、削除することができます。

デフォルト値

180

Interact | services | crossSessionResponse | cache

このカテゴリーの構成プロパティーは、クロスセッション・レスポンス・データを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

flushCacheToDB サービスが収集したクロスセッション・レスポンス・データをデータベースに書き込む前に、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

`XSessResponse` テーブルへの書き込みを強制する間隔 (秒数)。

デフォルト値

3600

Interact | services | crossSessionResponse | OverridePerAudience | [AudienceLevel] | TrackingCodes | byTreatmentCode

このセクションのプロパティーは、クロスセッション・レスポンス・トラッキングで、処理コードをコンタクトとレスポンスの履歴とマッチングする方法を定義します。

SQL

説明

このプロパティーは、Interact がシステムによって生成された SQL を使用するか、OverrideSQL プロパティーで定義されているカスタムの SQL を使用するかを定義します。

デフォルト値

システムによって生成された SQL を使用します。

有効な値

Use System Generated SQL | Override SQL

OverrideSQL

説明

処理コードとコンタクトとレスポンスの履歴のマッチングにデフォルトの SQL コマンドを使用しない場合は、SQL またはストアード・プロシージャーをここに入力します。

SQL が「Use System Generated SQL」に設定されている場合、この値は無視されます。

デフォルト値

useStoredProcedure

説明

true に設定する場合、処理コードをコンタクトとレスポンスの履歴とマッチングするストアード・プロシージャーへの参照が、OverrideSQL に含まれている必要があります。

false に設定する場合、OverrideSQL は (使用するのであれば) SQL 照会になっている必要があります。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Type

説明

ランタイム環境テーブルの UACI_TrackingType テーブルで定義されている、関連する TrackingCodeType。UACI_TrackingType テーブルを変更する場合を除き、Type は 1 にする必要があります。

デフォルト値

1

有効な値

UACI_TrackingType テーブルで定義されている整数。

Interact | services | crossSessionResponse | OverridePerAudience | [AudienceLevel] | TrackingCodes | byOfferCode

このセクションのプロパティーは、クロスセッション・レスポンス・トラッキングでオファー・コードをコンタクトとレスポンスの履歴とマッチングする方法を定義します。

SQL

説明

このプロパティーは、Interact がシステムによって生成された SQL を使用するか、OverrideSQL プロパティーで定義されているカスタムの SQL を使用するかを定義します。

デフォルト値

システムによって生成された SQL を使用します。

有効な値

Use System Generated SQL | Override SQL

OverrideSQL

説明

オファー・コードとコンタクトとレスポンスの履歴のマッチングにデフォルトの SQL コマンドを使用しない場合は、SQL またはストアード・プロシージャーをここに入力します。

SQL が「Use System Generated SQL」に設定されている場合、この値は無視されます。

デフォルト値

useStoredProcedure

説明

true に設定する場合、オファー・コードをコンタクトとレスポンスの履歴とマッチングするストアード・プロシージャーへの参照が、OverrideSQL に含まれている必要があります。

false に設定する場合、OverrideSQL は (使用するのであれば) SQL 照会になっている必要があります。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Type

説明

ランタイム環境テーブルの UACI_TrackingType テーブルで定義されている、関連する TrackingCodeType。UACI_TrackingType テーブルを変更する場合を除き、Type は 2 にする必要があります。

デフォルト値

2

有効な値

UACI_TrackingType テーブルで定義されている整数。

Interact | services | crossSessionResponse | OverridePerAudience | [AudienceLevel] | TrackingCodes | byAlternateCode

このセクションのプロパティーは、クロスセッション・レスポンス・トラッキングでユーザー定義の代替コードをコンタクトとレスポンスの履歴とマッチングする方法を定義します。

Name

説明

このプロパティーは、代替コードの名前を定義します。これは、ランタイム環境テーブルの UACI_TrackingType テーブル内にある「名前」の値と一致する必要があります。

デフォルト値

OverrideSQL

説明

代替コードをコンタクトとレスポンスの履歴のオファー・コードまたは処理コードとマッチングする、SQL コマンドまたはストアード・プロシージャー。

デフォルト値

useStoredProcedure

説明

true に設定する場合、代替コードをコンタクトとレスポンスの履歴とマッチングするストアード・プロシージャーへの参照が、OverrideSQL に含まれている必要があります。

false に設定する場合、OverrideSQL は (使用するのであれば) SQL 照会になっている必要があります。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Type

説明

ランタイム環境テーブルの UACI_TrackingType テーブルで定義されている、関連する TrackingCodeType。

デフォルト値

3

有効な値

UACI_TrackingType テーブルで定義されている整数。

Interact | services | threadManagement | contactAndResponseHist

このカテゴリーの構成プロパティーは、コンタクトとレスポンスの履歴ステージング・テーブルのデータを収集するサービスのスレッド管理設定を定義します。

corePoolSize

説明

コンタクトとレスポンスの履歴データの収集用に、プール内に保持するスレッドの数 (アイドル状態のものも含む)。

デフォルト値

5

maxPoolSize

説明

コンタクトとレスポンスの履歴データの収集用に、プール内に保持するスレッドの最大数。

デフォルト値

5

keepAliveTimeSecs

説明

コンタクトとレスポンスの履歴データを収集するためのスレッドの数がコアよりも多い場合に、超過しているアイドル状態のスレッドが新規タスクを待機する最大時間。この時間が経過すると、それらのスレッドは終了します。

デフォルト値

5

queueCapacity

説明

コンタクトとレスポンスの履歴データを収集するためのスレッド・プールによって使用されるキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs

説明

ランタイム・サーバーのシャットダウン時に、コンタクトとレスポンスの履歴データを収集しているサービス・スレッドの完了を待機する秒数。

デフォルト値

5

Interact | services | threadManagement | allOtherServices

このカテゴリーの構成プロパティーは、オファーの資格統計、イベント・アクティビティー統計、デフォルト・ストリングの使用統計、およびカスタム・ログを収集してテーブル・データにするサービスのスレッド管理設定を定義します。

corePoolSize

説明

オファーの資格統計、イベント・アクティビティー統計、デフォルト・ストリングの使用統計、およびカスタム・ログを収集してテーブル・データにするサービス用に、プール内に保持するスレッドの数 (アイドル状態のものも含む)。

デフォルト値

5

maxPoolSize

説明

オファーの資格統計、イベント・アクティビティー統計、デフォルト・ストリングの使用統計、およびカスタム・ログを収集してテーブル・データにするサービス用に、プール内に保持するスレッドの最大数。

デフォルト値

5

keepAliveTimeSecs

説明

オファーの資格統計、イベント・アクティビティー統計、デフォルト・ストリングの使用統計、およびカスタム・ログを収集してテーブル・データにするサービス用のスレッドの数がコアよりも多い場合に、超過しているアイドル状態のスレッドが新規タスクを待機する最大時間。この時間が経過すると、それらのスレッドは終了します。

デフォルト値

5

queueCapacity

説明

オファーの資格統計、イベント・アクティビティー統計、デフォルト・ストリングの使用統計、およびカスタム・ログを収集してテーブル・データにするサービスのスレッド・プールによって使用されるキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs

説明

ランタイム・サーバーのシャットダウン時に、オファーの資格統計、イベント・アクティビティー統計、デフォルト・ストリングの使用統計、およびカスタム・ログを収集してテーブル・データにするサービスのサービス・スレッドの完了を待機する秒数。

デフォルト値

5

Interact | services | threadManagement | flushCacheToDB

このカテゴリーの構成プロパティーは、キャッシュ内にある収集されたデータをランタイム環境のデータベース表に書き込むスレッドの、スレッド管理設定を定義します。

corePoolSize

説明

キャッシュに入れられたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのスレッド用に、プール内に保持するスレッドの数。

デフォルト値

5

maxPoolSize

説明

キャッシュに入れられたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのスレッド用に、プール内に保持するスレッドの最大数。

デフォルト値

5

keepAliveTimeSecs

説明

キャッシュに入れられたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのスレッドの数がコアよりも多い場合に、超過しているアイドル状態のスレッドが新規タスクを待機する最大時間。この時間が経過すると、それらのスレッドは終了します。

デフォルト値

5

queueCapacity

説明

キャッシュに入れられたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのスレッドのスレッド・プールによって使用されるキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs

説明

ランタイム・サーバーのシャットダウン時に、キャッシュに入れられたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのスレッドについて、サービス・スレッドの完了を待機する秒数。

デフォルト値

5

Interact | services | threadManagement | eventHandling

このカテゴリーの構成プロパティーは、イベント処理に関するデータを収集するサービスのためのスレッド管理設定を定義します。

corePoolSize

説明

イベント処理データを収集するために、アイドル状態であってもプール内に保持するスレッドの数。

デフォルト値

1

maxPoolSize

説明

イベント処理データを収集するサービスのためにプール内に保持するスレッドの最大数。

デフォルト値

5

keepAliveTimeSecs

説明

スレッド数がコアよりも多い場合に、超過分のアイドル状態のスレッドが、イベント処理データを収集する新規タスクを待機する最大時間。この時間が経過すると、それらのスレッドは終了します。

デフォルト値

5

queueCapacity

説明

イベント処理データを収集するためにスレッド・プールで使用するキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs

説明

ランタイム・サーバーのシャットダウン時に、イベント処理データを収集しているサービスのサービス・スレッドの完了を待機する秒数。

デフォルト値

5

Interact | services | configurationMonitor

このカテゴリー内の構成プロパティーにより、Interact リアルタイムを再始動しなくても、Interact Advanced Patterns との統合を有効または無効にすることができます。また、これらのプロパティーは、統合を有効にするプロパティー値のポーリングの間隔を定義します。

enable

説明

`true` の場合、 **Interact | services | eventPattern | advancedPatterns enableAdvancedPatterns** プロパティーの値を更新するサービスが有効になります。 `false` の場合、 **Interact | services | eventPattern | advancedPatterns enableAdvancedPatterns** プロパティーの値を変更するとき、 Interact リアルタイムの再始動が必要になります。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

refreshIntervalInMinutes

説明

Interact | services | eventPattern | advancedPatterns enableAdvancedPatterns プロパティーの値をポーリングする時間間隔を定義します。

デフォルト値

5

Interact | cacheManagement

この構成プロパティーのセットは、EHCache など、Interact のパフォーマンスを改善するために使用可能な、サポートされない各キャッシュ・マネージャーを選択して構成するための設定を定義します。 EHCache は、オプションのアドオンである Interact インストール環境の WebSphere eXtreme Scale キャッシングや、別の外部キャッシング・システムに組み込まれています。

Interact | cacheManagement | Cache Managers 構成プロパティーを使用して、使用するキャッシュ・マネージャーを構成します。 **Interact | cacheManagement | caches** 構成プロパティーを使用して、パフォーマンスを改善するために Interact が使用するキャッシュ・マネージャーを指定します。

Interact | cacheManagement | Cache Managers

Cache Managers カテゴリーは、Interact で使用する予定のキャッシュ管理ソリューションのパラメーターを指定します。

Interact | cacheManagement | Cache Managers | EHCache

EHCache カテゴリーは、EHCache キャッシュ管理ソリューションのパラメーターを指定します。これにより、そのソリューションをカスタマイズして Interact のパフォーマンスを改善することができます。

Interact | Cache Managers | EHCache | Parameter Data

このカテゴリー内の構成プロパティーは、EHCache キャッシュ管理システムが機能する方法を制御します。これにより、Interact のパフォーマンスを改善することができます。

cacheType

説明

マルチキャスト・アドレスを使用してキャッシュ・データを共有するように、サーバー・グループ内の Interact ランタイム・サーバーを構成できます。これは、分散キャッシュ と呼ばれます。 cacheType パラメーターは、組み込みの EHCache キャッシュ・メカニズムを、ローカル (スタンドアロン) モードまたは分散 (ランタイム・サーバー・グループで使用するときなど) のどちらで使用するかを指定します。

注:

cacheType に対して **Distributed** を選択する場合、キャッシュを共有するすべてのサーバーが、同じ単一のサーバー・グループの一部でなければなりません。さらに、マルチキャストを有効にして、サーバー・グループのすべてのメンバー間で機能するようにしなければなりません。

デフォルト値

Local

有効な値

Local | Distributed

multicastIPAddress

説明

cacheType パラメーターを「distributed」に指定した場合、キャッシュは Interact ランタイム・サーバー・グループのすべてのメンバー間でマルチキャストを介して機能するように構成されます。 multicastIPAddress 値は、サーバー・グループのすべての Interact サーバーが listen するために使用する IP アドレスです。

IP アドレスは、使用するサーバー・グループの中で一意でなければなりません。

デフォルト値

230.0.0.1

multicastPort

説明

cacheType パラメーターを「distributed」に指定した場合、**multicastPort** パラメーターは、サーバー・グループのすべての Interact サーバーが listen するために使用するポートを示します。

デフォルト値

6363

overflowToDisk

説明

EHCache キャッシュ・マネージャーは、使用可能なメモリーを使用してセッション情報を管理します。プロファイルが大きいためにセッション・サイズが大きくなっている環境では、メモリー内でサポートされるセッションの数が不足して、顧客のシナリオをサポートできないことがあります。このような状況のとき、EHCache には、メモリー内に保持できる量を超えたキャッシュ情報を代わりに一時的にハード・ディスクに書き込むことを可能にする、オプションの機能があります。

overflowToDisk プロパティーを「yes」に設定した場合、各 JavaJava 仮想マシン (JVM) は、メモリー単独で処理できる数よりも多くの並行セッションを処理できます。

デフォルト値

いいえ

有効な値

No | Yes

diskStore

説明

構成プロパティー **overflowToDisk** を `Yes` に設定した場合、この構成プロパティーは、メモリーからオーバーフローしたキャッシュ項目を保持するた

めのディスク・ディレクトリーを指定します。構成プロパティーが存在しないか、その値が無効の場合には、ディスク・ディレクトリーがオペレーティング・システムのデフォルトの一時ディレクトリーに自動的に作成されます。

デフォルト値

なし

有効な値

Interact ランタイムをホスティングする Web アプリケーションが書き込み特権を持つディレクトリー。

(Parameter)

説明

キャッシュ・マネージャーで使用するカスタム・パラメーターを作成するために使用できるテンプレート。任意のパラメーター名、および必要となる値をセットアップできます。

カスタム・パラメーターを作成するには、「***(Parameter)***」をクリックして、名前とそのパラメーターに割り当てる値を入力します。「変更の保存」をクリックすると、作成したパラメーターが Parameter Data カテゴリーのリストに追加されます。

デフォルト値

なし

Interact | cacheManagement | Cache Managers | Extreme Scale

Extreme Scale カテゴリーは、WebSphere eXtreme Scale キャッシュ管理ソリューションを使用するようにアダプターのパラメーターを指定します。これにより、それをカスタマイズして Interact のパフォーマンスを改善することができます。

ClassName

説明

Interact を WebSphere eXtreme Scale サーバーに接続するクラスの完全修飾名。これは `com.unicacorp.interact.cache.extremescale.ExtremeScaleCacheManager` でなければなりません。

デフォルト値

`com.unicacorp.interact.cache.extremescale.ExtremeScaleCacheManager`

ClassPath

説明

ファイル `interact_wxs_adapter.jar` の場所の URI。`file:///IBM/IMS/Interact/lib/interact_wxs_adapter.jar` や `file:///C:/IBM/IMS/Interact/lib/interact_wxs_adapter.jar` など。ただし、この JAR ファイ

ルがホスティングするアプリケーション・サーバーのクラスパスに既に含まれている場合、このフィールドは空白のままにする必要があります。

デフォルト値

ブランク

Interact | Cache Managers | Extreme Scale | Parameter Data

このカテゴリー内の構成プロパティーは、Interact インストール環境にオプションで組み込まれている、WebSphere eXtreme Scale アダプターを制御します。これらの設定は、eXtreme Scale サーバー・グリッドのクライアントとなっている Interact ランタイム・サーバーごとに構成する必要があります。

catalogPropertyFile

説明

WebSphere eXtreme Scale カタログ・サーバーの始動に使用される、プロパティー・ファイルの場所の URI。カタログ・サーバーの始動に Extreme Scale アダプターを使用する場合には、このプロパティーを設定する必要があります。設定しない場合、そのアダプターは使用されません。

デフォルト値

```
file:///C:/depot/Interact/dev/main/extremescale/config/
catalogServer.props
```

containerPropertyFile

説明

WebSphere eXtreme Scale コンテナー・インスタンスの始動に使用される、プロパティー・ファイルの場所の URI。WebSphere eXtreme Scale コンテナー・サーバーの始動に組み込みサーバー・コンポーネントを使用する場合には、このプロパティーを設定する必要があります。それ以外の場合、これは使用されません。

デフォルト値

```
file:///C:/depot/Interact/dev/main/extremescale/config/
containerServer.props
```

deploymentPolicyFile

説明

WebSphere eXtreme Scale カタログ・サーバーの始動に使用される、配置ポリシー・ファイルの場所の URI。WebSphere eXtreme Scale カタログ・サーバーの始動に組み込みサーバー・コンポーネントを使用する場合には、このプロパティーを設定する必要があります。それ以外の場合、これは使用されません。

デフォルト値

```
file:///C:/depot/Interact/dev/main/extremescale/config/
deployment.xml
```

objectGridConfigFile

説明

WebSphere eXtreme Scale カタログ・サーバーと、同じ Java 仮想マシン (JVM) で Interact ランタイム・サーバーと共に実行されるニア・キャッシュ・コンポーネントとの始動に使用される、オブジェクト・グリッド構成ファイルの場所の URI。

デフォルト値

`file:///C:/depot/Interact/dev/main/extremescale/config/objectgrid.xml`

gridName

説明

すべての Interact キャッシュを保持する WebSphere eXtreme Scale グリッドの名前。

デフォルト値

InteractGrid

catalogURLs

説明

ホスト名または IP アドレスと、WebSphereeXtreme Scale カタログ・サーバーが接続を listen しているポートとを含む URL。

デフォルト値

なし

(Parameter)

説明

キャッシュ・マネージャーで使用するカスタム・パラメーターを作成するために使用できるテンプレート。任意のパラメーター名、および必要となる値をセットアップできます。

カスタム・パラメーターを作成するには、「***(Parameter)***」をクリックして、名前とそのパラメーターに割り当てる値を入力します。「変更の保存」をクリックすると、作成したパラメーターが Parameter Data カテゴリーのリストに追加されます。

デフォルト値

なし

Interact | caches

この構成プロパティーのセットを使用して、 Interact のパフォーマンスを改善するために Ehcache や WebSphere eXtreme Scale キャッシングなどのサポートされているキャッシュ・マネージャーのどれを使用するかを指定し、構成しているランタイム・サーバーのために特定のキャッシュ・プロパティーを構成します。

これには、セッション・データ、イベント・パターンの状態、およびセグメンテーション結果を保管するためのキャッシュが含まれます。それらの設定を調整することで、各タイプのキャッシングに使用するキャッシュ・ソリューションを指定し、キャッシュが機能する方法を制御する個別の設定を指定できます。

Interact | cacheManagement | caches | InteractCache

InteractCache カテゴリーは、プロファイル・データ、セグメンテーション結果、最新の配信済み処理、API メソッドによって受け渡されるパラメーター、 Interact ランタイムで使用される他のオブジェクトなど、すべてのセッション・オブジェクトのキャッシングを構成します。

InteractCache カテゴリーは、Interact が適切に機能するのに必要です。

外部 EHCache 構成を使用して、**Interact | cacheManagement | Caches** でサポートされない設定用に InteractCache カテゴリーを構成することもできます。EHCache を使用する場合は、InteractCache が適切に構成されていることを確認しなければなりません。

CacheManagerName

説明

Interact キャッシュを処理するキャッシュ・マネージャーの名前。ここに入力する値は、`EHCache` や `Extreme Scale` など、 **Interact | cacheManagement | Cache Managers** 構成プロパティーで定義したいずれかのキャッシュ・マネージャーでなければなりません。

デフォルト値

EHCache

有効な値

Interact | cacheManagement | Cache Managers 構成プロパティーで定義された任意のキャッシュ・マネージャー。

maxEntriesInCache

説明

このキャッシュに保管するセッション・データ・オブジェクトの最大数。セッション・データ・オブジェクトの最大数に達し、追加のセッション用のデータを保管する必要があるときには、最後に使われてから最も長い時間が経ったオブジェクトが削除されます。

デフォルト値

100000

有効な値

ゼロより大きい整数。

timeoutInSecs

説明

セッション・データ・オブジェクトが使用または更新されてから経過した時間 (秒数) であり、オブジェクトをいつキャッシュから削除するかを決めるために使用されます。

注: 9.1 より前のバージョンからアップグレードした場合、`timeoutInSecs` プロパティーは移動されているため、再構成する必要があります。

デフォルト値

300

有効な値

ゼロより大きい整数。

Interact | Caches | Interact Cache | Parameter Data

このカテゴリー内の構成プロパティーは、 Interact インストール環境によって自動的に使用される Interact のキャッシュを制御します。これらの設定は、Interact ランタイム・サーバーごとに個別に構成する必要があります。

asyncIntervalMillis

説明

キャッシュ・マネージャー EHCache が、変更を他の Interact ランタイム・インスタンスに複製する前に待機する必要のある時間 (ミリ秒)。正の値でない場合には、これらの変更が同期的に複製されます。

この構成プロパティーは、デフォルトでは作成されません。このプロパティーを作成する場合、それは EHCache がキャッシュ・マネージャーで、ehCache **cacheType** プロパティーが `distributed` に設定されているときにのみ使用されます。

デフォルト値

なし。

(Parameter)

説明

Interact Cache で使用するカスタム・パラメーターを作成するために使用できるテンプレート。任意のパラメーター名、および必要となる値をセットアップできます。

カスタム・パラメーターを作成するには、「***(Parameter)***」をクリックして、名前とそのパラメーターに割り当てる値を入力します。「変更の保存」をクリックすると、作成したパラメーターが Parameter Data カテゴリーのリストに追加されます。

デフォルト値

なし

Interact | cacheManagement | caches | PatternStateCache

PatternStateCache カテゴリーは、イベント・パターンとリアルタイムのオファー非表示ルールの状態をホストするために使用されます。デフォルトでは、Interact がキャッシュ優先のイベント・パターンおよびオファー非表示データの使用を試行す

るように、このキャッシュはリードスルーおよびライトスルーのキャッシュとして構成されます。要求されたエントリーがキャッシュ内に存在しない場合、キャッシュの実装は、JNDI 構成を介してまたは JDBC 接続を直接使用することにより、それをデータ・ソースからロードします。

JNDI 接続を使用するために、Interact は、 JNDI 名、URL、その他を使用して指定のサーバーを介して定義された既存のデータ・ソース・プロバイダーに接続します。 JDBC 接続では、JDBC ドライバーのクラス名、データベース URL、認証情報を含む、JDBC 設定のセットを指定する必要があります。

複数の JNDI および JDBC ソースを定義した場合には、最初の有効な JNDI ソースが使用されること、そして有効な JNDI ソースがなければ最初の有効な JDBC ソースが使用されることに注意してください。

PatternStateCache カテゴリーは、Interact が適切に機能するのに必要です。

外部 EHCache 構成を使用して、**Interact | cacheManagement | Caches** でサポートされない設定用に PatternStateCache カテゴリーを構成することもできます。EHCache を使用する場合は、PatternStateCache が適切に構成されていることを確認しなければなりません。

CacheManagerName

説明

Interact パターン状態のキャッシュを処理するキャッシュ・マネージャーの名前。ここに入力する値は、`EHCache` や `Extreme Scale` など、 **Interact | cacheManagement | Cache Managers** 構成プロパティーで定義したいずれかのキャッシュ・マネージャーでなければなりません。

デフォルト値

EHCache

有効な値

Interact | cacheManagement | Cache Managers 構成プロパティーで定義された任意のキャッシュ・マネージャー。

maxEntriesInCache

説明

このキャッシュに保管するイベント・パターン状態の最大数。イベント・パターン状態が最大数に達し、追加のイベント・パターン状態用のデータを保管する必要があるときには、最後に使われてから最も長い時間が経ったオブジェクトが削除されます。

デフォルト値

100000

有効な値

ゼロより大きい整数。

timeoutInSecs

説明

イベント・パターンの状態オブジェクトがイベント・パターンの状態キャッシュでタイムアウトになる時間 (秒数) を指定します。そのような状態オブジェクトが `timeoutInSecs` 秒間、キャッシュでアイドリング状態になっていると、最長未使用時間のルールに基づき、キャッシュから排出される場合があります。このプロパティーの値は、`sessionTimeoutInSecs` プロパティーで定義されている値より大きくなければなりません。

注: 9.1 より前のバージョンからアップグレードした場合、`timeoutInSecs` プロパティーは移動されているため、再構成する必要があります。

デフォルト値

300

有効な値

ゼロより大きい整数。

Interact | Caches | PatternStateCache | Parameter Data

このカテゴリー内の構成プロパティーは、イベント・パターンとリアルタイムのオファー非表示ルールの状態をホストするために使用される Pattern State Cache を制御します。

(Parameter)

説明

Pattern State Cache で使用するカスタム・パラメーターを作成するために使用できるテンプレート。任意のパラメーター名、および必要となる値をセットアップできます。

カスタム・パラメーターを作成するには、「***(Parameter)***」をクリックして、名前とそのパラメーターに割り当てる値を入力します。「変更の保存」をクリックすると、作成したパラメーターが Parameter Data カテゴリーのリストに追加されます。

デフォルト値

なし

Interact | cacheManagement | caches | PatternStateCache | loaderWriter

loaderWriter カテゴリーには、イベント・パターンの検索とパーシスタンスのために外部リポジトリーと相互作用するローダーの構成が含まれます。

className

説明

このローダーの完全修飾クラス名。このクラスは、選択されたキャッシュ・マネージャーの要件に準拠している必要があります。

デフォルト値

com.unicacorp.interact.cache.ehcache.loaderwriter.
PatternStateEHCacheLoaderWriter

有効な値

完全修飾クラス名。

classPath

説明

ローダーのクラス・ファイルへのパス。この値を空白のままにした場合や入力値が無効の場合には、Interact の実行に使用されたクラスパスが使用されます。

デフォルト値

なし

有効な値

有効なクラスパス。

writeMode

説明

新規または更新済みイベント・パターンの状態を、作成者がキャッシュ内に保持するためのモードを指定します。有効なオプションは、以下のとおりです。

- WRITE_THROUGH。新規のエントリーがあるか、既存のエントリーが更新されるたびに、そのエントリーが即時にリポジトリーに書き込まれます。
- WRITE_BEHIND。キャッシュ・マネージャーはバッチにより、複数の変更を収集するために幾らかの時間待機してから、それらをリポジトリー内に保存します。

デフォルト値

WRITE_THROUGH

有効な値

WRITE_THROUGH または WRITE_BEHIND。

batchSize

説明

作成者がバッチにより保持する、イベント・パターン状態オブジェクトの最大数。このプロパティーは、**writeMode** が `WRITE_BEHIND` に設定された場合にのみ使用されます。

デフォルト値

100

有効な値

整数値。

maxDelayInSecs

説明

イベント・パターン状態オブジェクトが保存される前にキャッシュ・マネージャーが待機する最大時間 (秒数)。このプロパティーは、**writeMode** が `WRITE_BEHIND` に設定された場合にのみ使用されます。

デフォルト値

5

有効な値

整数値。

Interact | Caches | PatternStateCache | loaderWriter | Parameter Data

このカテゴリー内の構成プロパティーは、Pattern State Cache ローダーを制御します。

(Parameter)

説明

Pattern State Cache ローダーで使用するカスタム・パラメーターを作成するために使用できるテンプレート。任意のパラメーター名、および必要となる値をセットアップできます。

カスタム・パラメーターを作成するには、「***(Parameter)***」をクリックして、名前とそのパラメーターに割り当てる値を入力します。「変更の保存」をクリックすると、作成したパラメーターが Parameter Data カテゴリーのリストに追加されます。

デフォルト値

なし

Interact | cacheManagement | caches | PatternStateCache | loaderWriter | jndiSettings

jndiSettings カテゴリーには、ローダーがバッキング・データベースとの通信に使用する JNDI データ・ソースの構成が含まれます。 JNDI 設定の新しいセットを作成するには、**jdniSettings** カテゴリーを拡張して、 ***(jndiSetting)*** プロパティーをクリックします。

(jndiSettings)

注**:** WebSphere Application Server が使用される場合、loaderWriter は **jndiSettings** に接続されません。

説明

このカテゴリーをクリックすると、フォームが表示されます。 JNDI データ・ソースを定義するには、以下の値を完成させてください。

- 「新しいカテゴリー名」は、この JNDI 接続の識別に使用する名前です。

- 「有効」で、この JNDI 接続を使用可能にするかどうかを指定できます。新しい接続については、これを `True` に設定してください。
- **jdniName** は、セットアップ時にデータ・ソース内に既に定義されている JNDI 名です。
- **providerUrl** は、この JNDI データ・ソースを検索するための URL です。このフィールドを空白のままにした場合、Interact ランタイムをホスティングする Web アプリケーションの URL が使用されます。
- 「初期コンテキスト・ファクトリー」は、JNDI プロバイダーに接続するための初期コンテキスト・ファクトリー・クラスの完全修飾クラス名です。 Interact ランタイムをホスティングする Web アプリケーションが **providerUrl** に使用される場合、このフィールドは空白のままにしてください。

デフォルト値

なし。

Interact | cacheManagement | caches | PatternStateCache | loaderWriter | jdbcSettings

jdbcSettings カテゴリーには、ローダーがバッキング・データベースとの通信に使用する JDBC 接続の構成が含まれます。 JDBC 設定の新しいセットを作成するには、**jdbcSettings** カテゴリーを拡張して、 ***(jdbcSetting)*** プロパティーをクリックします。

(jdbcSettings)

説明

このカテゴリーをクリックすると、フォームが表示されます。 JDBC データ・ソースを定義するには、以下の値を入力してください。

- 「新しいカテゴリー名」は、この JDBC 接続の識別に使用する名前です。
- 「有効にしました」は、この JDBC 接続を使用可能にするかどうかを指定できます。新しい接続については、これを `True` に設定してください。
- 「**driverClassName**」は、JDBC ドライバーの完全修飾クラス名です。このクラスは、ホスティングするキャッシュ・サーバーの始動用に構成されたクラスパス内に存在しなければなりません。
- **databaseUrl** は、この JDBC データ・ソースを検索するための URL です。
- **asmUser** は、この JDBC 接続でデータベースに接続するための資格情報によって構成された、 IBM Marketing Software ユーザーの名前です。
- **asmDataSource** は、この JDBC 接続でデータベースに接続するための資格情報によって構成された、 IBM Marketing Software データ・ソースの名前です。
- **maxConnection** は、この JDBC 接続でデータベースに許可される同時接続の最大数です。

デフォルト値

なし。

Interact | triggeredMessage

このカテゴリーの構成プロパティーは、トリガーされたすべてのメッセージの設定を定義し、チャネル配信を提供します。

backendProcessIntervalMin

説明

このプロパティーは、バックエンド・スレッドが遅延オファーの配信を読み込み、処理する時間を分数で定義します。この値は整数でなければなりません。値がゼロ以下の場合、バックエンド・プロセスは無効になります。

有効な値

正整数

autoLogContactAfterDelivery

説明

このプロパティーが true に設定されている場合、このオファーがディスパッチされるか、このオファーが遅延配信のキューに入れられるとすぐにコンタクト・イベントが自動的に通知されます。このプロパティーが false に設定されている場合、アウトバウンド・オファーに対してコンタクト・イベントが自動的に通知されることはありません。これはデフォルトの動作です。

注:

- アウトバウンド・メッセージがトリガーされた場合にコンタクト履歴に追加の属性を取り込むには、その追加のカスタム属性をコンタクト履歴の列として追加します。アウトバウンド・メッセージをトリガーするイベントをポストするときに、`postEvent` メソッドで、それらの属性の値を、名前と値のパラメーターとして渡すことができます。
- アウトバウンド・チャネルへのオファーをパラメーター化するには、関連付けられた方法でオファーを割り当て、チャネルを配置し、オファーをパーソナライズし、トリガー・メッセージで「次善のベスト・オファーを自動的に選択」を選択します。

有効な値

True | False

waitForFlowchart

説明

このプロパティーは、現在実行中のセグメンテーションが終了するのをフローチャートが待つかどうかと、その待機時間が過ぎた場合の動作を決定します。

DoNotWait: セグメンテーションが現在実行中かどうかにかかわらず、トリガー・メッセージの処理が開始されます。ただし、セグメントが資格ルール

で使用されている場合、および/または NextBestOffer がオファー選択メソッドとして選択されている場合は、TM の実行はまだ待機します。

OptionalWait : トリガー・メッセージの処理は、現在実行中のセグメンテーションが終了するかタイムアウトするまで待機します。待機時間が過ぎると、警告が記録され、このトリガー・メッセージの処理は続行されます。これはデフォルトです。

MandatoryWait: トリガー・メッセージの処理は、現在実行中のセグメンテーションが終了するかタイムアウトするまで待機します。待機時間が過ぎると、エラーが記録され、このトリガー・メッセージの処理は異常終了します。

有効な値

DoNotWait | OptionalWait | MandatoryWait

Interact | triggeredMessage | offerSelection

このカテゴリーの構成プロパティーは、トリガー・メッセージのオファー選択の設定を定義します。

maxCandidateOffers

説明

このプロパティーは、配信する最良のオファーを取得するためにエンジンが返す適格なオファーの最大数を定義します。返されたこれらの適格なオファーのいずれも、選択されたチャネルに基づいて送信できない場合もあります。候補となるオファーの数が多ければ多いほど、こうした状況が発生する可能性は低くなります。ただし、オファーの候補が多くなると処理時間が長くなることがあります。

有効な値

正整数

defaultCellCode

説明

配信されるオファーが方法ルールまたはテーブル駆動型レコードの評価の結果である場合は、それに関連付けられたターゲット・セルがあり、このセルの情報は関連するすべてのロギングで使用されます。ただし、特定のオファーのリストがオファー選択の入力として使用される場合は、どのターゲット・セルも使用できません。その場合、この構成設定の値が使用されます。このターゲット・セルおよびそのキャンペーンが配置に含まれていることを確認する必要があります。これを実行する最も簡単な方法は、配置された方法にセルを追加することです。

Interact | triggeredMessage | dispatchers

このカテゴリーの構成プロパティーは、トリガー・メッセージのすべてのディスパッチャーの設定を定義します。

dispatchingThreads

説明

このプロパティーは、エンジンが非同期でディスパッチャーを呼び出すために使用するスレッド数を定義します。この値が 0 または負数の場合は、ディスパッチャーの呼び出しが同期的に行われます。デフォルト値は 0 です。

有効な値

整数

Interact | triggeredMessage | dispatchers | <dispatcherName>

このカテゴリーの構成プロパティーは、トリガー・メッセージの特定のディスパッチャーの設定を定義します。

カテゴリー名

説明

このプロパティーは、このディスパッチャーの名前を定義します。この名前は、すべてのディスパッチャーの中で一意であることが必要です。

type

説明

このプロパティーは、ディスパッチャーのタイプを定義します。

有効な値

InMemoryQueue | JMSQueue | Custom

注: JMSQueue または Custom を使用する場合、Interact を IBM MQ と統合するには、JDK 1.7 を持つアプリケーション・サーバーに Interact ランタイムが必要です。 WebSphere および WebLogic の場合、提供されている最新の JDK フィックスパック・バージョンを使用することをお勧めします。

JMSQueue では WebLogic のみがサポートされます。 WebSphere Application Server を使用する場合、JMSQueue は使用できません。

className

説明

このプロパティーは、このディスパッチャー実装の完全修飾クラス名を定義します。タイプが InMemoryQueue の場合、この値は空でなければなりません。タイプが custom の場合、この設定には値 `com.unicacorp.interact.eventhandler.triggeredmessage.dispatchers.IBMMQDispatcher` が必要です。

classPath

説明

このプロパティーは、このディスパッチャーの実装が含まれている JAR ファイルの URL を定義します。

タイプが custom の場合、この設定には値 `file://<Interact_HOME>/lib/interact_ibmmqdispatcher.jar;file://<Interact_HOME>/lib/com.ibm.mq.allclient.jar;file://<Interact_HOME>/lib/jms.jar` が必要です。

Interact | triggeredMessage | dispatchers | <dispatcherName> | Parameter Data

このカテゴリーの構成プロパティーは、トリガー・メッセージの特定のディスパッチャーのパラメーターを定義します。

次の 3 タイプのディスパッチャーから選択できます。 InMemoryQueue は Interact の内部ディスパッチャーです。 Custom は IBM MQ に使用されます。 JMSQueue は、JNDI 経由で JMS プロバイダーに接続するために使用されます。

カテゴリー名

説明

このプロパティーは、このパラメーターの名前を定義します。この名前は、そのディスパッチャーのすべてのパラメーターの中で一意であることが必要です。

value

説明

このプロパティーは、このディスパッチャーで必要とされるパラメーターを、名前と値のペアの形式で定義します。

注: トリガー・メッセージのすべてのパラメーターは大/小文字の区別があり、次に示すように入力する必要があります。

タイプが InMemoryQueue の場合、次のパラメーターがサポートされます。

- queueCapacity: オプション。ディスパッチのためにキューで待機できるオファーの最大数です。これを指定する場合、このプロパティーは正整数にする必要があります。指定しない場合、または値が無効な場合は、デフォルト値 (1000) が使用されます。

タイプが Custom の場合、次のパラメーターがサポートされます。

- providerUrl: <hostname>:port (大/小文字の区別あり)
- queueManager: IBM MQ サーバーで作成されたキュー・マネージャーの名前。
- messageQueueName: IBM MQ サーバーで作成されたメッセージ・キューの名前。
- enableConsumer: このプロパティーは true に設定する必要があります。
- asmUserforMQAuth: サーバーにログインするためのユーザー名。サーバーが認証を実行する場合に必要です。その他の場合、指定する必要はありません。

- authDS: サーバーにログインするユーザー名に関連付けられたパスワード。サーバーが認証を実行する場合に必要です。その他の場合、指定する必要はありません。

タイプが JMSQueue の場合、次のパラメーターがサポートされます。

- providerUrl: JNDI プロバイダーの URL (大/小文字の区別あり)。
- connectionFactoryJNDI: JMS 接続ファクトリーの JNDI 名。
- messageQueueJNDI: トリガー・メッセージが送受信される JMS キューの JNDI 名。
- enableConsumer: これらのトリガー・メッセージのコンシューマーを Interact で開始するかどうかを指定します。このプロパティーは true に設定する必要があります。指定しない場合、デフォルト値 (false) が使用されます。
- initialContextFactory: JNDI 初期コンテキスト・ファクトリー・クラスの完全修飾名。 WebLogic を使用する場合、このパラメーターの値は `weblogic.jndi.WLInitialContextFactory` でなければなりません。

Interact | triggeredMessage | gateways | <gatewayName>

このカテゴリーの構成プロパティーは、トリガー・メッセージの特定のゲートウェイの設定を定義します。

Interact は、同じゲートウェイの複数インスタンスをサポートしていません。すべてのゲートウェイ構成ファイルが、すべての Interact ランタイム・ノードからアクセス可能でなければなりません。分散セットアップの場合は、必ず、ゲートウェイ・ファイルを共有ロケーションに置いてください。

カテゴリー名

説明

このプロパティーは、このゲートウェイの名前を定義します。この名前はすべてのゲートウェイの中で一意であることが必要です。

className

説明

このプロパティーは、このゲートウェイ実装の完全修飾クラス名を定義します。

classPath

説明

このプロパティーは、このゲートウェイの実装が含まれている JAR ファイルの URI を定義します。空のままにすると、ホストする Interact アプリケーションのクラスパスが使用されます。

例えば、Windows システムでゲートウェイ JAR ファイルがディレクトリー `C:¥IBM¥EMM¥EmailGateway¥IBM_Interact_OMO_OutboundGateway_Silverpop_1.0¥lib¥OMO_OutboundGateway_Silverpop.jar` にある場合、classPath は `file:///C:/IBM/EMM/EmailGateway/`

IBM_Interact_OMO_OutboundGateway_Silverpop_1.0/lib/OMO_OutboundGateway_Silverpop.jar にする必要があります。 UNIX システムでは、ゲートウェイ JAR ファイルがディレクトリー /opt/IBM/EMM/EmailGateway/IBM_Interact_OMO_OutboundGateway_Silverpop_1.0/lib/OMO_OutboundGateway_Silverpop.jar にある場合、 classPath は file:///opt/IBM/EMM/EmailGateway/IBM_Interact_OMO_OutboundGateway_Silverpop_1.0/lib/OMO_OutboundGateway_Silverpop.jar にする必要があります。

Interact | triggeredMessage | gateways | <gatewayName> | Parameter Data

このカテゴリーの構成プロパティーは、トリガー・メッセージの特定のゲートウェイのパラメーターを定義します。

カテゴリー名

説明

このプロパティーは、このパラメーターの名前を定義します。この名前は、そのゲートウェイのすべてのパラメーターの中で一意であることが必要です。

value

説明

このプロパティーは、このゲートウェイで必要とされるパラメーターを、名前と値のペアの形式で定義します。すべてのゲートウェイで次のパラメーターがサポートされます。

注: トリガー・メッセージのすべてのパラメーターは大/小文字の区別があり、次に示すように入力する必要があります。

- validationTimeoutMillis: このゲートウェイを通過したオファーの妥当性検査がタイムアウトした所要時間 (ミリ秒)。デフォルト値は 500 です。
- deliveryTimeoutMillis: このゲートウェイを使用したオファーの配信がタイムアウトした所要時間 (ミリ秒)。デフォルト値は 1000 です。

Interact | triggeredMessage | channels

このカテゴリーの構成プロパティーは、トリガー・メッセージのすべてのチャネルの設定を定義します。

type

説明

このプロパティーは、特定のゲートウェイに関連した設定のルート・ノードを定義します。 Default では、トリガー・メッセージの UI で定義されたチャネル・リストに基づく組み込みのチャネル・セレクターが使用されます。 Default が選択されている場合、className および classPath の値は空白のままにする必要があります。 Custom では IChannelSelector のカスタマー実装が使用されます。

有効な値

Default | Custom

className

説明

このプロパティーは、チャネル・セレクターのカスタマー実装の完全修飾クラス名を定義します。この設定はタイプが Custom である場合は必須です。

classPath

説明

このプロパティーは、チャネル・セレクターのカスタマー実装の実装が含まれている JAR ファイルの URL を定義します。空のままにすると、ホストする Interact アプリケーションのクラスパスが使用されます。

Interact | triggeredMessage | channels | <channelName>

このカテゴリーの構成プロパティーは、トリガー・メッセージの特定のチャネルの設定を定義します。

カテゴリー名

説明

このプロパティーは、オファーが送信されるチャネルの名前を定義します。この名前は、設計時に **Campaign | partitions | <partition[N]> | Interact | outboundChannels** で定義された名前と一致する必要があります。

Interact | triggeredMessage | channels | <channelName> | <handlerName>

このカテゴリーの構成プロパティーは、オファーを送信するために使用されるトリガー・メッセージの特定のハンドラーの設定を定義します。

カテゴリー名

説明

このプロパティーは、オファーを送信するのにチャネルが使用するハンドラーの名前を定義します。

dispatcher

説明

このプロパティーは、このハンドラーがゲートウェイにオファーを送信するために使用するディスパッチャーの名前を定義します。この名前は、**interact | triggeredMessage | dispatchers** で定義されたいずれかの名前でなければなりません。

gateway

説明

このプロパティーは、このハンドラーが最終的にオファーを送信したゲートウェイの名前を定義します。この名前は、**interact | triggeredMessage | gateways** で定義されたいずれかの名前でなければなりません。

mode

説明

このプロパティーは、このハンドラーの使用モードを定義します。 Failover が選択された場合、このハンドラーが使用されるのは、これより高い優先順位がこのチャネル内で定義されたすべてのハンドラーがオファーの送信に失敗した場合のみです。 Addon が選択された場合、他のハンドラーが正常にオファーを送信したかどうかにかかわらず、このハンドラーが使用されます。

priority

説明

このプロパティーは、このハンドラーの優先度を定義します。エンジンはまず、オファーの送信のために最上位の優先度を持つハンドラーを使用します。

有効な値

任意の整数

デフォルト

100

Interact | triggeredMessage | channels | Parameter Data

このカテゴリーの構成プロパティーは、トリガー・メッセージの特定のチャネルのパラメーターを定義します。

カテゴリー名

説明

このプロパティーは、このパラメーターの名前を定義します。この名前は、そのチャネルのすべてのパラメーターの中で一意であることが必要です。

value

説明

このプロパティーは、チャネル・セレクターで必要とされるパラメーターを、名前と値のペアの形式で定義します。

チャネルに「**Customer Preferred Channels**」を使用する場合は、作成する必要があります。

Interact | activityOrchestrator

アクティビティー・オーケストレーターのカテゴリーでは、Interact インバウンド・ゲートウェイ・アクティビティーのレシーバーとゲートウェイを指定します。

Interact | activityOrchestrator | receivers 構成プロパティーを使用して、Interact レシーバーを構成します。 **Interact | activityOrchestrator | gateways** 構成プロパティーを使用して、Interact で使用するゲートウェイを構成します。

Interact | activityOrchestrator | gateways

アクティビティー・オーケストレーター・ゲートウェイのカテゴリーでは、Interact インバウンド・ゲートウェイ・アクティビティーのゲートウェイを指定します。

カテゴリー名

説明

ゲートウェイの名前。

className

説明　このプロパティーは、このゲートウェイ実装の完全修飾クラス名を定義します。

classPath

説明　このプロパティーは、このゲートウェイの実装が含まれている JAR ファイルの URI を定義します。空のままにすると、ホストする Interact アプリケーションのクラスパスが使用されます。これは、タイプが `Custom` である場合にのみ使用されます。

Interact | activityOrchestrator | gateways | Parameter Data

`OMO-conf_inbound_UBX_interactEventNameMapping` や `OMO-conf_inbound_UBX_interactEventPayloadMapping` などの、ゲートウェイ構成ファイルのゲートウェイ・パラメーターを追加できます。

Interact | activityOrchestrator | receivers

アクティビティー・オーケストレーター・レシーバーのカテゴリーでは、Interact インバウンド・ゲートウェイ・アクティビティーのイベント・レシーバーを指定します。

カテゴリー名

説明

レシーバーの名前。

Type

説明　レシーバーのタイプ。 `IBM MQ` と `Custom` のいずれかを選択できます。`Custom` を選択する場合、`iReceiver` の実装を使用する必要があります。

有効

説明　レシーバーを有効にする場合は `True` を選択し、レシーバーを無効にする場合は `false` を選択します。

className

説明　このプロパティーは、このレシーバーの実装の完全修飾クラス名を定義します。これは、タイプが Custom である場合にのみ使用されます。

classPath

説明　このプロパティーは、このレシーバーの実装が含まれている JAR ファイルの URI を定義します。空のままにすると、ホストする Interact アプリケーションのクラスパスが使用されます。これは、タイプが Custom である場合にのみ使用されます。

Interact | activityOrchestrator | receivers | Parameter Data

レシーバー・キューを定義するレシーバー・パラメーター (queueManager、messageQueueName など) を追加できます。

Interact 設計環境の構成プロパティー

このセクションでは、Interact 設計環境のすべての構成プロパティーについて説明します。

Campaign | partitions | partition[n] | reports

Campaign | partitions | partition[n] | reports プロパティーは、さまざまなタイプのレポートのフォルダーを定義します。

offerAnalysisTabCachedFolder

説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上にリストされる満杯の (拡張された) オファー・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific
Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']
```

segmentAnalysisTabOnDemandFolder

説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、セグメントの「分析」タブにリストされるセグメント・レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific
Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']
```

offerAnalysisTabOnDemandFolder

説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、オファーの「分析」タブにリストされるオファー・レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']

segmentAnalysisTabCachedFolder

説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上にリストされる満杯の (拡張された) セグメント・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']

analysisSectionFolder

説明

analysisSectionFolder プロパティーは、レポート仕様を格納するルート・フォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']

campaignAnalysisTabOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティーは、キャンペーンの「分析」タブにリストされるキャンペーン・レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']

campaignAnalysisTabCachedFolder

説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティーは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上にリストされる満杯の (拡張された) キャンペーン・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティーは、キャンペーンの「分析」タブにリストされる eMessage レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage Reports']

campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

Interact レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールする場合のみ適用可能です。

interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

説明

「対話式チャネル」分析タブ・レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='interactive channel']

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールする場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking

これらの構成プロパティーは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュールの設定を定義します。

isEnabled

説明

「はい」に設定すると、Interact のコンタクトとレスポンスの履歴を Interact ランタイムのステージング・テーブルから Campaign のコンタクトとレスポンスの履歴テーブルにコピーする、Interact のコンタクトとレスポンスの履歴モジュールが有効になります。プロパティー interactInstalled も「はい」に設定する必要があります。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

runOnceADay

説明

コンタクトとレスポンスの履歴 ETL を 1 日 1 回実行するかどうかを指定します。このプロパティーを「はい」に設定すると、`preferredStartTime` および `preferredEndTime` で指定され、スケジュールされた時間間隔内に ETL が実行されます。

ETL の実行時間が 24 時間を超過し、次の日の開始時間にかかる場合は、その日の実行はスキップされ、翌日のスケジュールされている時間に実行されます。例えば、ETL が午前 1 時から午前 3 時の間に実行されるように構成されている場合に、月曜日の午前 1 時に処理が開始され、火曜日の午前 2 時に完了すると、本来火曜日の午前 1 時にスケジュールされていた次の実行はスキップされ、次回の ETL は水曜日の午前 1 時に開始されます。

ETL スケジューリングは、夏時間調整による変更には対応していません。例えば、午前 1 時から午前 3 時までの間に実行するようにスケジュールされている ETL は、夏時間調整による変更があると、午前 0 時または午前 2 時に実行される可能性があります。

デフォルト値

いいえ

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

processSleepIntervalInMinutes

説明

Interact ランタイムのステージング・テーブルから Campaign のコンタクトとレスポンスの履歴テーブルにデータをコピーする間、Interact のコンタクトとレスポンスの履歴モジュールが待機する分数。

デフォルト値

60

有効な値

ゼロより大きい任意の整数。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

preferredStartTime

説明

毎日の ETL 処理用に設定済みの開始時間。このプロパティーを preferredEndTime プロパティーと組み合わせて使用すると、ETL をその間に実行する時間間隔が設定されます。ETL は、指定された時間間隔の中で開始され、最大で `maxJDBCFetchBatchSize` を使用して指定された数のレコードを処理します。形式は HH:mm:ss AM または PM で、12 時間クロックを使用します。

デフォルト値

12:00:00 AM

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

preferredEndTime

説明

毎日の ETL 処理用に設定済みの完了時間。このプロパティーを preferredStartTime プロパティーと組み合わせて使用すると、ETL をその間に実行する時間間隔が設定されます。ETL は、指定された時間間隔の中で開始され、最大で `maxJDBCFetchBatchSize` を使用して指定された数のレコードを処理します。形式は HH:mm:ss AM または PM で、12 時間クロックを使用します。

デフォルト値

2:00:00 AM

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

purgeOrphanResponseThresholdInMinutes

説明

Interact のコンタクトとレスポンスの履歴モジュールが、対応するコンタクトがないレスポンスをパージする前に待機する分数。これにより、コンタクトのログ記録がないレスポンスがログに記録されないようにします。

デフォルト値

180

有効な値

ゼロより大きい任意の整数。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

maxJDBCInsertBatchSize

説明

照会をコミットする前の JDBC バッチ・レコードの最大数。これは、単一の反復の中で Interact のコンタクトとレスポンスの履歴モジュールが処理するレコードの最大数ではありません。それぞれの反復の間は、Interact のコンタクトとレスポンスの履歴モジュールは、ステージング・テーブルから使用可能なすべてのレコードを処理します。ただし、それらのレコードはすべて `maxJDBCInsertSize` のチャンクに分割されます。

デフォルト値

1000

有効な値

ゼロより大きい任意の整数。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

maxJDBCFetchBatchSize

説明

ステージング・データベースから取り出す JDBC バッチ・レコードの最大数。コンタクトとレスポンスの履歴モジュールのパフォーマンスを調整するために、この値を大きくする必要がある場合があります。

例えば、1 日に 250 万個のコンタクト履歴レコードを処理するには、`maxJDBCFetchBatchSize` を 250 万より大きな数に設定して、1 日分のレコードがすべて処理されるようにする必要があります。

その後、`maxJDBCFetchChunkSize` と `maxJDBCInsertBatchSize` を、それよりも小さな値 (この例の場合は、それぞれ 50,000 と 10,000 など) に設定します。翌日のレコードの一部も処理される可能性がありますが、その後は翌日まで保持されます。

デフォルト値

1000

有効な値

ゼロより大きい任意の整数

maxJDBCFetchChunkSize

説明

ETL (抽出、変換、ロード) 中に読み取られるデータの JDBC チャンク・サイズの最大数値。チャンク・サイズを挿入サイズより大きくすることで、ETL 処理の速度が向上する場合もあります。

デフォルト値

1000

有効な値

ゼロより大きい任意の整数

deleteProcessedRecords

説明

処理後にコンタクト履歴とレスポンス履歴のレコードを保持するかどうかを指定します。

デフォルト値

はい

completionNotificationScript

説明

ETL の完了時に実行するスクリプトの絶対パスを指定します。スクリプトを指定すると、5 つの引数 (開始時刻、終了時刻、処理された CH レコードの合計数、処理された RH レコードの合計数、および状況) が完了通知スクリプトに渡されます。開始時刻と終了時刻は、1970 年から経過したミリ秒数を表す数値です。状況引数は、ETL ジョブの成功または失敗を示します。 0 は ETL ジョブが成功したことを示します。 1 は、ETL ジョブで何らかのエラーが発生して失敗したことを示します。

デフォルト値

なし

fetchSize

説明

ステージング・テーブルからレコードを取り出す場合に JDBC fetchSize を設定できるようにします。

特に Oracle データベースでは、この設定は、ネットワークの往復ごとに JDBC が取得する必要があるレコード数に合わせて調整してください。100K 以上の大きな規模の場合には、10000 で試行してください。この値は大きくしすぎないように注意してください。使用する値が大きすぎると、メモリーの使用量に影響するのに対し、効果はほとんどありません。

デフォルト値

なし

daysBackInHistoryToLookupContact

説明

レスポンス履歴照会の際に検索されるレコードを、過去の指定された日数間のレコードのみに制限します。多数のレスポンス履歴レコードがあるデータベースの場合は、これによって検索対象期間が指定の日数に限定されることにより、照会の処理時間が短縮される可能性があります。

デフォルト値の 0 は、すべてのレコードが検索されることを示します。

デフォルト値

0 (ゼロ)

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking | runtimeDataSources | [runtimeDataSource]

これらの構成プロパティーは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュールのデータ・ソースを定義します。

jndiName

説明

systemTablesDataSource プロパティーを使用して、アプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic) で Interact ランタイム・テーブル用に定義されている Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別します。

Interact ランタイム・データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime の各 dll スクリプトが取り込まれたデータベースで、例えば UACI_CHOfferAttrib や UACI_DefaultedStat などのテーブルが含まれます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

databaseType

説明

Interact ランタイム・データ・ソースのデータベース・タイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効な値

SQLServer | Oracle | DB2

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

schemaName

説明

コンタクトとレスポンスの履歴モジュールのステージング・テーブルが含まれているスキーマの名前。これは、ランタイム環境テーブルと同じにする必要があります。

スキーマを定義する必要はありません。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking | contactTypeMappings

これらの構成プロパティーは、レポート作成または学習目的で「コンタクト」にマップするキャンペーンからのコンタクト・タイプを定義します。

コンタクト済み

説明

Campaign システム・テーブル内の UA_DtlContactHist テーブルの ContactStatusID 列に割り当てられる、オファー・コンタクト用の値。この値は、UA_ContactStatus テーブルの有効なエントリーである必要があります。コンタクト・タイプの追加について詳しくは、「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

デフォルト値

2

有効な値

ゼロより大きい整数。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking | responseTypeMappings

これらの構成プロパティーは、レポート作成または学習を承認するか拒否するかというレスポンスを定義します。

承認

説明

Campaign システム・テーブル内の UA_ResponseHistory テーブルの ResponseTypeID 列に割り当てられる、承認済みオファー用の値。値は、UA_UsrResponseType テーブルの有効なエントリーでなければなりません。CountsAsResponse 列に、レスポンスを意味する値 1 を割り当てる必要があります。

レスポンス・タイプの追加について詳しくは、「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

デフォルト値

3

有効な値

ゼロより大きい整数。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

拒否

説明

Campaign システム・テーブル内の `UA_ResponseHistory` テーブルの `ResponseTypeID` 列に割り当てられる、拒否済みのオファー用の値。値は、`UA_UsrResponseType` テーブルの有効なエントリーでなければなりません。`CountsAsResponse` 列に、拒否を意味する値 `2` を割り当てる必要があります。レスポンス・タイプの追加について詳しくは、「*Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

デフォルト値

8

有効な値

ゼロより大きい任意の整数。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | report

これらの構成プロパティーは、Cognos と統合した場合のレポート名を定義します。

interactiveCellPerformanceByOfferReportName

説明

オファー別の対話式セル・パフォーマンス・レポートの名前。この名前は、Cognos サーバー上のこのレポートの名前と一致している必要があります。

デフォルト値

オファー別の対話式セル・パフォーマンス

treatmentRuleInventoryReportName

説明

処理ルール・インベントリー・レポートの名前。この名前は、Cognos サーバー上のこのレポートの名前と一致している必要があります。

デフォルト値

チャネル処理ルール・インベントリー

deploymentHistoryReportName

説明

配置履歴レポートの名前。この名前は、Cognos サーバー上のこのレポートの名前と一致している必要があります。

デフォルト値

チャネル配置履歴

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | learning

これらの構成プロパティーによって、組み込み学習モジュールを調整できます。

confidenceLevel

説明

学習ユーティリティーがどの程度確実と判断してから、調査から利用に切り替えるかを、パーセンテージで示します。値 0 は、調査を事実上シャットオフします。

このプロパティーは、Interact ランタイムの「Interact」>「offerserving」>「optimizationType」プロパティーが BuiltInLearning に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

95

有効な値

0 から 95 までの間の 5 で割り切れる整数、または 99。

validateonDeployment

説明

これを No に設定すると、デプロイ時に学習モジュールが Interact によって検証されません。これを yes に設定すると、デプロイ時に学習モジュールが Interact によって検証されます。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

maxAttributeNames

説明

Interact 学習ユーティリティーがモニターする学習属性の最大数。

このプロパティーは、Interact ランタイムの「Interact」>「offerserving」>「optimizationType」プロパティーが BuiltInLearning に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

10

有効な値

任意の整数。

maxAttributeValues

説明

各学習属性について、Interact 学習モジュールがトラッキングする値の最大数。

このプロパティーは、Interact ランタイムの「Interact」>「offerserving」>「optimizationType」プロパティーが BuiltInLearning に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

5

otherAttributeValue

説明

maxAttributeValues を超えるすべての属性値を表すために使用される属性値のデフォルトの名前。

このプロパティーは、Interact ランタイムの「Interact」>「offerserving」>「optimizationType」プロパティーが BuiltInLearning に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

その他

有効な値

ストリングまたは数値。

例

maxAttributeValues が 3 に設定されており、かつ otherAttributeValue が「その他」に設定されている場合、学習モジュールは最初の 3 つの値をトラッキングします。その他の値はすべて「その他」カテゴリーに割り当てられます。例えば、訪問者の属性である髪色をトラッキングするとします。最初の 5 人の訪問者の髪色が黒、茶、ブロンド、赤、およびグレーの場合、学習ユーティリティーがトラッキングする髪色は、黒、茶、およびブロンドです。赤およびグレイの各色は、otherAttributeValue の「その他」にグループ化されます。

percentRandomSelection

説明

学習モジュールがランダムにオファーする回数のパーセント。例えば、percentRandomSelection を 5 に設定することは、スコアに関係なく、学習モジュールによるランダム・オファーの提示頻度が 5% (100 件の推奨ごとに 5 件) であることを意味します。 percentRandomSelection を有効にすると、offerTieBreakMethod 構成プロパティーがオーバーライドされます。percentRandomSelection を有効にすると、学習がオン/オフのどちらになっているか、また組み込み/外部のどちらの学習が使用されるかにかかわらず、このプロパティーが設定されます。

デフォルト値

5

有効な値

0 (percentRandomSelection 機能を無効にする) から 100 までの任意の整数。

recencyWeightingFactor

説明

recencyWeightingPeriod によって定義されているデータのセットのパーセンテージを表す 10 進表記。例えば、デフォルト値の .15 は、recencyWeightingPeriod が示す学習ユーティリティーによって使用されるデータの 15% を意味します。

このプロパティーは、Interact ランタイムの「Interact」>「offerserving」>「optimizationType」プロパティーが BuiltInLearning に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

0.15

有効な値

1 より小さな 10 進数値。

recencyWeightingPeriod

説明

学習モジュールによって recencyWeightingFactor のパーセンテージの重みが付与されたデータの期間 (時間単位)。例えば、デフォルト値の 120 は、学習モジュールによって使用されるデータの recencyWeightingFactor が、過去 120 時間以内のものであることを意味します。

このプロパティーは、optimizationType が builtInLearning に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

120

minPresentCountThreshold

説明

データが計算に使用され、学習モジュールが調査モードに入る前に、オファーされる必要がある最小回数。

デフォルト値

0

有効な値

ゼロ以上の整数。

enablePruning

説明

「はい」に設定する場合、Interact 学習モジュールは、学習属性 (標準または動的) が予測ではないときをアルゴリズムによって判別します。学習属性

が予測ではない場合、学習モジュールはオファーの重みを決定するときにその属性について考慮しません。これは、学習モジュールが学習データを集約するまで継続します。

「**いいえ**」に設定すると、学習モジュールは常にすべての学習属性を使用します。予測ではない属性のプルーニングを行わないと、学習モジュールの正確性は本来よりも低くなります。

デフォルト値

はい

有効な値

はい | いいえ

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | learning | learningAttributes | [learningAttribute]

これらの構成プロパティーは、学習属性を定義します。

attributeName

説明

各 `attributeName` は、学習モジュールがモニターする訪問者属性の名前です。これは、セッション・データ内の名前と値のペアの名前と一致している必要があります。

このプロパティーは、Interact ランタイムの「`Interact`」> 「`offerserving`」> 「`optimizationType`」プロパティーが `BuiltInLearning` に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | deployment

これらの構成プロパティーは、配置の設定を定義します。

chunkSize

説明

各 Interact 配置パッケージのフラグメントの最大サイズ (KB 単位)。

デフォルト値

500

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | serverGroups | [serverGroup]

これらの構成プロパティーは、サーバー・グループの設定を定義します。

serverGroupName

説明

Interact ランタイム・サーバー・グループの名前。これは、対話式チャネルの「サマリー」タブに表示される名前です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | serverGroups | [serverGroup] | instanceURLs | [instanceURL]

これらの構成プロパティーは、Interact ランタイム・サーバーを定義します。

instanceURL

説明

Interact ランタイム・サーバーの URL。サーバー・グループにはいくつかの Interact ランタイム・サーバーを含めることができますが、それらのサーバーはそれぞれ新しいカテゴリーの下に作成する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

例

`http://server:port/interact`

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | フローチャート

これらの構成プロパティーは、対話式フローチャートのテスト実行に使用される Interact ランタイム環境を定義します。

serverGroup

説明

Campaign がテスト実行に使用する Interact サーバー・グループの名前。この名前は、`serverGroups` の下に作成するカテゴリー名と一致する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

dataSource

説明

dataSource プロパティーを使用して、対話式フローチャートのテスト実行時に使用する Campaign の物理データ・ソースを識別します。このプロパティーは、Interact の設計時用に定義されているテスト実行データ・ソースの 「Campaign」>「partitions」>「partitionN」>「dataSources」プロパティーで定義されるデータ・ソースと一致している必要があります。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

eventPatternPrefix

説明

eventPatternPrefix プロパティーは、対話式フローチャート内の選択プロセスまたは決定プロセスの中の式でイベント・パターン名を使用できるようにするために、イベント・パターン名の前に付加するストリング値です。

この値を変更した場合、その更新された構成を有効にするためには、対話式チャネルに一括変更を配置する必要があります。

デフォルト値

EventPattern

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | whiteList | [AudienceLevel]

これらの構成プロパティーは、さまざまな特殊な状況で使用するデフォルトのセル・コードを定義します。

DefaultCellCode

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|Interact | whiteList | [AudienceLevel] | defaultOffers

説明

デフォルトのオファー・テーブルでセル・コードを定義していない場合に、Interact が使用するデフォルトのセル・コード。

これらのプロパティーを構成する必要があるのは、グローバルなオファーの割り当てを定義する場合のみです。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

Campaign で定義されているセル・コードの形式と一致するストリング。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

DefaultCellCode

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|Interact | whiteList | [AudienceLevel] | offersBySQL`

説明

OffersBySQL テーブル内のセル・コード列に NULL 値が入っている (または、セル・コード列が完全に存在しない) 任意のオファーに Interact が使用する、デフォルトのセル・コード。この値はセル・コードとして有効な値にする必要があります。

これらのプロパティーを構成する必要があるのは、SQL 照会を使用して必要な候補オファーのセットを取得する場合のみです。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

Campaign で定義されているセル・コードの形式と一致するストリング。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

DefaultCellCode

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|Interact | whiteList | [AudienceLevel] | scoreOverride`

説明

スコア・オーバーライド・テーブルでセル・コードを定義していない場合に、Interact が使用するデフォルトのセル・コード。

これらのプロパティーを構成する必要があるのは、個々のオファーの割り当てを定義する場合のみです。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

Campaign で定義されているセル・コードの形式と一致するストリング。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | eventPatterns

この構成プロパティーは、Interact を Interact Advanced Patterns に統合した場合に使用します。

enableAdvancedPatterns

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|Interact|eventPatterns`

説明

Interact を Interact Advanced Patterns に統合した場合は、この値を **True** に設定してください。

デフォルト値

False

使用可能性

このプロパティーは、Interact を Interact Advanced Patterns に統合した場合にのみ使用します。

Campaign | partitions | partition[n] | Interact | Simulator

これらの構成プロパティーは、API シミュレーションを実行するために使用するサーバー・グループを定義します。

serverGroup

説明

API シミュレーションの実行に使用するランタイム・サーバー・グループを指定します。

デフォルト値

defaultServerGroup

Campaign | partitions | partition[n] | server | internal

このカテゴリーのプロパティーは、選択された Campaign パーティションの統合設定と internalID の制限を指定します。 Campaign のインストール済み環境に複数のパーティションがある場合は、反映させるパーティションごとにこれらのプロパティーを設定します。

internalIdLowerLimit

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

`internalIdUpperLimit` プロパティーと `internalIdLowerLimit` プロパティーは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。それらのプロパティーでは境界上の値が含まれるので、Campaign は上限と下限のどちらの値も使用できます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

internalIdUpperLimit

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|internal

説明

internalIdUpperLimit プロパティーと internalIdLowerLimit プロパティーは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。指定された値も範囲に含まれます。すなわち、Campaign は、上限値と下限値の両方を使用できます。Distributed Marketing がインストールされている場合は、この値を 2147483647 に設定してください。

デフォルト値

4294967295

eMessageInstalled

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|internal

説明

eMessage がインストールされていることを示します。「はい」を選択すると、eMessage 機能が Campaign インターフェースで使用できます。

IBM インストーラーは、eMessage インストールのデフォルトのパーティションに関してこのプロパティーを「はい」に設定します。 eMessage をインストールした追加パーティションについては、このプロパティーを手動で構成する必要があります。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

interactInstalled

構成カテゴリー

Campaign|partitions|partition[n]|server|internal

説明

Interact 設計環境をインストール後、この構成プロパティーを「はい」に設定し、Campaign で Interact 設計環境を有効にしてください。

Interact がインストールされていない場合、「いいえ」に設定してください。このプロパティーを「いいえ」に設定しても、Interact メニューとオプションがユーザー・インターフェースから削除されることはありません。メニューとオプションを削除するには、configTool ユーティリティーを使用して Interact を手動で登録抹消しなければなりません。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

使用可能性

このプロパティーは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

MO_UC_integration

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

「プラットフォーム」構成設定で統合が有効な場合、このパーティションで Marketing Operations との統合を有効にします。詳しくは、「*IBM Marketing Operations* および *Campaign* 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

MO_UC_BottomUpTargetCells

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

MO_UC_integration が有効な場合、このパーティションのターゲット・セル・スプレッドシートについて、ボトムアップのセルを許可します。「**はい**」に設定すると、トップダウンとボトムアップの両方のターゲット・セルが表示されますが、ボトムアップ・ターゲット・セルは読み取り専用です。詳しくは、「*IBM Marketing Operations* および *Campaign* 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

Legacy_campaigns

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

このパーティションで、Marketing Operations と Campaign が統合される前に作成されたキャンペーンへのアクセスを有効にします。
MO_UC_integration が「**はい**」に設定されている場合のみ、適用されま

す。レガシー・キャンペーンには、Campaign 7.x で作成され、Plan 7.x プロジェクトにリンクされたキャンペーンも含まれます。詳しくは、「*IBM Marketing Operations* および *Campaign* 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

IBM Marketing Operations - オファー統合

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

このパーティションで **MO_UC_integration** が有効な場合、このパーティションで Marketing Operations を使用してオファー・ライフサイクル管理タスクを実行できるようにします。「プラットフォーム」構成設定でオファー統合を有効にする必要があります。詳しくは、「*IBM Marketing Operations* および *Campaign* 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

UC_CM_integration

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

Campaign パーティションで Digital Analytics オンライン・セグメント統合を有効にします。この値を「**はい**」に設定すると、フローチャート内の選択プロセス・ボックスに入力として「**Digital Analytics** セグメント」を選択するオプションが表示されます。パーティションごとに Digital Analytics 統合を構成するには、「設定」>「構成」>「**Campaign | partitions | partition[n] | Coremetrics**」を選択します。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

numRowsReadToParseDelimitedFile

構成カテゴリー

`Campaign|partitions|partition[n]|server|internal`

説明

このプロパティーは、区切り記号付きファイルをユーザー・テーブルとしてマッピングする場合に使用します。このプロパティーは、スコア・プロセス・ボックスで IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition からスコア出力ファイルをインポートする際にも使用されます。区切り記号付きファイルをインポートまたはマップするには、Campaign でファイルを解析して、列、データ型 (フィールド・タイプ)、列幅 (フィールド長) を識別する必要があります。

デフォルト値の 100 は、区切り記号付きファイル内の最初の 50 行と最後の 50 行の項目を Campaign で調べることを意味します。 Campaign は次に、これらの項目内で検出された最大値に基づいてフィールド長を割り当てます。ほとんどの場合、フィールド長を決定するにはデフォルト値で十分です。しかし、区切り記号付きファイルが非常に大きい場合、後のフィールドが Campaign で計算された推定の長さを超過することがあり、それによってフローチャートの実行時にエラーが生じることがあります。したがって、非常に大きなファイルをマップする場合、この値を大きくして、Campaign で調べる行項目の数を増やすことができます。例えば、値を 200 にすると、Campaign でファイルの最初の 100 行の項目と最後の 100 行の項目が調べられます。

値を 0 にすると、ファイル全体が調べられます。通常、最初と最後の数行を読み取っても長さを識別できない可変データ幅のフィールドがあるファイルをインポートまたはマッピングする場合に限り、これが必要になります。非常に大きなファイルでファイル全体を読み取ると、テーブル・マッピングとスコア・プロセス・ボックスの実行に必要な処理時間が長くなることがあります。

デフォルト値

100

有効な値

0 (すべての行) または任意の正整数

Campaign | monitoring

このカテゴリーのプロパティーは、操作モニター機能を有効にするかどうか、操作モニター・サーバーの URL、およびキャッシング動作を指定します。操作モニター機能ではアクティブなフローチャートが表示されて、それらを制御できます。

cacheCleanupInterval

説明

`cacheCleanupInterval` プロパティーは、フローチャート・ステータス・キャッシュの自動クリーンアップ間隔を秒単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

デフォルト値

`600` (10 分)

cacheRunCompleteTime

説明

cacheRunCompleteTime プロパティーは、完了済み実行タスクがキャッシュに入れられて、「モニター」ページに表示される期間を分単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

デフォルト値

4320

monitorEnabled

説明

monitorEnabled プロパティーは、モニター機能を有効にするかどうかを指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティーは使用できません。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

serverURL

説明

「キャンペーン」>「モニター」>「serverURL」プロパティーは、操作モニター・サーバーの URL を指定します。これは必須設定で、操作モニター・サーバー URL がデフォルト以外の場合には、値を変更してください。

Campaign が Secure Sockets Layer (SSL) 通信を使用するように構成されている場合には、HTTPS を使用するようにこのプロパティーの値を設定します。例えば、次のようにします。 serverURL=https://*host:SSL_port*/Campaign/OperationMonitor ここで、それぞれの意味は次のとおりです。

- *host* は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *SSL_Port* は Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL の https に注意してください。

デフォルト値

http://localhost:7001/Campaign/OperationMonitor

monitorEnabledForInteract

説明

TRUE に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーが Interact で使用可能になります。Campaign には JMX セキュリティーはありません。

FALSE に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーに接続できません。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

protocol

説明

monitorEnabledForInteract が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・プロトコルです。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

JMXMP

有効な値

JMXMP | RMI

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

port

説明

monitorEnabledForInteract が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・ポートです。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

2004

有効な値

1025 から 65535 までの整数。

使用可能性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Contact Optimization 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページにある IBM Contact Optimization 構成プロパティーについて説明します。

Campaign | unicaACOListener

これらの構成プロパティーは、Contact Optimization リスナーの設定用です。

serverHost

説明

Contact Optimization インストール済み環境のホスト・サーバー名に設定します。

デフォルト値

`localhost`

serverPort

説明

Contact Optimization インストール済み環境のホスト・サーバー・ポートに設定します。

デフォルト値

なし

useSSL

説明

SSL を使用して Marketing Platform サーバーに接続するには、`True` に設定します。それ以外の場合は、`False` に設定します。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

keepalive

説明

Campaign Web アプリケーションが、接続をアクティブにしておくために Contact Optimization Listener へメッセージを送信してから、次に送信するまでに待機する秒数。`keepalive` を使用すると、非アクティブな接続を閉じるようにネットワークが構成されている場合に、接続が開いたままになります。

`0` に設定した場合、Web アプリケーションは何もメッセージを送信しません。

この `keepalive` プロパティーは、Java ソケットの keepAlive とは別のものです。

デフォルト値

0

有効な値

正の整数

logProcessId

説明

Contact Optimization リスナー・プロセスの ID を Contact Optimization Listener ログ (Contact Optimization インストール済み環境の logs ディレクトリーにある unica_acolsnr.log) に記録するには、yes に設定します。それ以外の場合は、no に設定します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

loggingLevels

説明

ログに記録する Contact Optimization リスナーのデータの詳細を設定できます。

この設定は、Contact Optimization Listener ログ (Contact Optimization インストール済み環境の logs ディレクトリーにある unica_acolsnr.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

logMaxFileSize

説明

この整数は、ログファイルの最大サイズ (バイト単位) に設定します。Contact Optimization は、ログ・ファイルがこのサイズに達すると、ファイルを作成します。この設定は、Contact Optimization Listener ログ (Contact Optimization インストール済み環境の logs ディレクトリーにある unica_acolsnr.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

20485760

enableLogging

説明

ログへの記録を有効にするには、True に設定します。それ以外の場合は、False に設定します。この設定は、Contact Optimization Listener ログ (Contact Optimization インストール済み環境の logs ディレクトリーにある unica_acolsnr.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

logMaxBackupIndex

説明

この整数は、保管するバックアップファイルの数に設定します。この設定は、Contact Optimization Listener ログ (Contact Optimization インストール済み環境の logs ディレクトリーにある unica_acolsnr.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

5

loggingCategories

説明

ログに記録するデータのカテゴリーを、コンマ区切りリストとして指定できます。この設定は、Contact Optimization Listener ログ (Contact Optimization インストール済み環境の logs ディレクトリーにある unica_acolsnr.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

all

有効な値

all | bad_order | cell_access | commands | config | data_errors | dbload | file_access | general | memory | procrun | query | sort | sysquery | table_access | table_io | table_mapping | webproc

defaultFilePermissions (UNIX のみ)

説明

生成されるログ・ファイルの権限レベル (数値形式)。例えば、777 は、読み取り、書き込み、および実行の権限を表します。

デフォルト値

660 (所有者とグループは、読み取り権限と書き込み権限だけを持ちます)

Campaign | unicaACOOptAdmin

これらの構成プロパティーは、unicaACOOptAdmin ツールの設定を定義します。

getProgressCmd

説明

内部で使用される値を指定します。この値を変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_optimizeSessionProgress.do

有効な値

`optimize/ext_optimizeSessionProgress.do`

runSessionCmd

説明

内部で使用される値を指定します。この値を変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_runOptimizeSession.do

有効な値

`optimize/ext_runOptimizeSession.do`

loggingLevels

説明

`loggingLevels` プロパティーは、Contact Optimization コマンド・ライン・ツールのログ・ファイルに書き込む詳細の量を、重大度に基づいて制御します。選択可能なレベルは、LOW、MEDIUM、HIGH、および ALL で、LOW が最小の詳細を提供します (つまり、最も重大なメッセージだけが書き込まれます)。 ALL レベルはトレース・メッセージを含み、主に診断を目的としています。

デフォルト値

HIGH

有効な値

`LOW | MEDIUM | HIGH | ALL`

cancelSessionCmd

説明

内部で使用される値を指定します。この値を変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_stopOptimizeSessionRun.do

有効な値

`optimize/ext_stopOptimizeSessionRun.do`

logoutCmd

説明

内部で使用される値を指定します。この値を変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_doLogout.do

有効な値

`optimize/ext_doLogout.do`

getProgressWaitMS

説明

この値は、進行状況に関する情報を取得するための、Web アプリケーションに対する 2 回の連続したポーリングの間のミリ秒数 (整数) に設定します。この値は、`getProgressCmd` を設定しない場合は使用されません。

デフォルト値

1000

有効な値

ゼロより大きい整数

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | sessionRunMonitor

これらの構成プロパティーは、sessionRunMonitor 設定用です。

progressFetchDelay

説明

この整数は、Web アプリケーションがリスナーからの進捗情報を入手する前に待つミリ秒数に設定します。

デフォルト値

`250`

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | MemoryTuning

これらの構成プロパティーは、MemoryTuning 設定用です。

MaxRamUsage

説明

コンタクト履歴をキャッシュに入れるために使用する最大メモリーを、MB 単位で定義します。この値は、少なくとも 1 つのコンタクト履歴レコードと同じ大きさでなければなりません。

デフォルト値

`128`

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | AgentTemplateTables

これらの構成プロパティーは、Agent Capacity Optimization 用のテンプレート・テーブルを定義します。

AgentInfoTemplateTables

説明

Agent Information テンプレート・テーブルのテーブル名をコンマ区切りリストで入力します。各テーブルには、エージェントの固有の識別値 (ID) とエージェントの容量が含まれています。これらのテーブルは、Campaign システム・データベースに存在する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

AgentCustomerRelTemplateTables

説明

Agent Customer Relationship テンプレート・テーブルのテーブル名をコンマ区切りリストで入力します。Agent Customer Relationship テーブルには、エージェントの固有の識別値 (ID) と、関連する顧客のオーディエンス ID が含まれています。このテーブルは、Campaign システム・データベースに存在する必要があります。オーディエンス ID のオーディエンス・レベルは、Contact Optimization セッションのオーディエンス・レベルと同じである必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | userTemplateTables

このプロパティーは、PCT および OCT によって使用されるテンプレート・テーブルを定義します。

tablenames

説明

Contact Optimization テンプレート・テーブルのテーブル名をコンマ区切りリストで入力します。これらのテンプレート・テーブルは、推奨コンタクト・テーブル (PCT) または最適化済みコンタクト・テーブル (OCT) にユーザー固有のフィールドを追加するために使用できます。

デフォルト値

`UACO_UserTable`

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | TestRun

このプロパティーは、Contact Optimization セッションのテスト実行を行うときに使用するオプションを定義します。

TestRunSamplePercent

説明

テスト実行の抽出割合は、Contact Optimization セッションのテスト実行を行うときに PCT から使用する顧客の割合です。

デフォルト値

`10`

有効な値

`1 から 100`

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | AlgorithmTuning

これらの構成プロパティーは、最適化のチューニングに使用できる設定を定義します。

MaxAlternativesPerCustomerEvaluated

説明

顧客に最適の選択肢を見つけるために、提案されたトランザクションまたは選択肢の組み合わせを Contact Optimization でテストする最大回数。

例えば、以下が真である場合:

- 推奨コンタクト・テーブル (PCT) で顧客に関連付けられているオファーが A、B、C、D であり、これらのオファーのスコアが A=8、B=4、C=2、D=1 である
- MaxAlternativesPerCustomerEvaluated プロパティーが 5 である
- 最大オファー数 =3 のルールが存在する

この場合、試行される選択肢は、以下のようになります。

- ABC スコア = 14
- ABD スコア = 13
- AB スコア = 12
- ACD スコア = 11
- AC スコア = 10

テストする選択肢の数が多くなる場合があるため、この値を使用して、Contact Optimization が PCT 内の次の顧客に移動する前に、コア・アルゴリズムが 1 人の顧客に対して費やす作業量を制限します。

デフォルト値

`1000`

CustomerSampleSize

説明

最適化する対象の顧客の数が `CustomerSampleSize` を超える場合、Contact Optimization は `CustomerSampleSize` 以下のグループに顧客を分割します。その後、Contact Optimization は、それぞれのサンプル・グループを

別々に最適化します。それでも、グループ間にまたがるルール、例えばカスタム・キャパシティー・ルールなどは遵守されます。この数を大きくすると、最適性は向上してもパフォーマンスを損なう場合があります。

最大限に最適な `CustomerSampleSize` は、顧客の数と同じです。しかし、大きなデータ集合の処理には、多大な時間を要する場合があります。Contact Optimization で一度に処理するために、顧客をより小さなグループに分割することにより、最適性の損失を最小にしてパフォーマンスを向上させることができます。

デフォルト値

`1000`

有効な値

正の整数

MaxIterationsPerCustomerSample

説明

Contact Optimization が 1 つの顧客グループに対して処理する反復の最大数。Contact Optimization は、最適性が達成されるか、反復が `MaxIterationsPerCustomerSample` と同じになるまで、1 つの顧客グループを処理します。

セッション・ログ内の次の情報を検索し、`MaxIterationsPerCustomerSample` の設定変更の効果を観察します。

- 1 顧客チャンクあたりの最大、最小、および平均反復回数
- 作成された、1 顧客あたりの最大、最小、および平均選択肢数
- 試行された、1 顧客あたりの最大、最小、および平均選択肢数
- イテレーションの標準偏差

デフォルト値

`1000`

有効な値

正の整数

CustomerRandomSeed

説明

ランダム・シードは、Contact Optimization が `CustomerSampleSize` によって定義されたサンプル・グループにデータを設定する前に、Contact Optimization でレコードのランダムな選択に使用される開始点を表します。顧客の数が `CustomerSampleSize` より少ない場合、このプロパティーは最適化に効果はありません。

現行のランダム・サンプルで生成される結果に大きな偏りがあると思われる場合は、ランダム・シードを変更できます。

デフォルト値

`1928374656`

有効な値

正の整数

MaxCustomerSampleProcessingThreads

説明

Contact Optimization で最適化アルゴリズムの処理に使用するスレッドの最大数。一般に、`MaxCustomerSampleProcessingThreads` を大きく設定するほど、パフォーマンスを向上させることができます。ただし、パフォーマンスの向上は、使用する最適化ルールのタイプと数、使用するハードウェアなど、いくつかの要因によって制限されます。Contact Optimization の実装のチューニングに関する詳しい手順については、IBM 営業担当員にお問い合わせください。

デフォルト値

1

有効な値

正の整数

ProcessingThreadQueueSize

説明

PCT から顧客サンプルを読み取るために Contact Optimization で使用できるスレッド数。このスレッド数を増やすと、Contact Optimization セッションのパフォーマンスが向上する場合があります。Contact Optimization の実装のチューニングに関する詳しい手順については、IBM 営業担当員にお問い合わせください。

デフォルト値

1

有効な値

正の整数

PostProcessingThreadQueueSize

説明

OCT のステージング・テーブルに顧客サンプルを書き込むために、Contact Optimization で使用できるスレッドの数。このスレッド数を増やすと、Contact Optimization セッションのパフォーマンスが向上する場合があります。Contact Optimization の実装のチューニングに関する詳しい手順については、IBM 営業担当員にお問い合わせください。

デフォルト値

1

有効な値

正の整数

EnableMultithreading

説明

true の場合、Contact Optimization は最適化アルゴリズムを処理するときにマルチスレッドの使用を試みます。スレッドの数は、`MaxCustomerSampleProcessingThreads`、`ProcessingThreadQueueSize`、および `PostProcessingThreadQueueSize` 構成プロパティーで構成できます。false の場合、Contact Optimization は最適化アルゴリズムを処理するときに単一のスレッドを使用します。

デフォルト値

`True`

有効な値

`True | False`

EnableMaxCapacityConsumption

説明

チャネル・キャパシティーを十分活用していない Contact Optimization の結果を受け取った場合、EnableMaxCapacityConsumption を有効にしてチャネル・キャパシティーのロスを削減します。それから、Contact Optimization セッションを再実行します。パラメーターが true に設定されている場合、Contact Optimization は、「顧客間」ルール (「最小/最大オファー数キャパシティー」ルールと「カスタム・キャパシティー」ルール) で設定された最大制約を満たすために拡張アルゴリズムを使用します。ただし、これが使用される場合、セッションに提供するデータによってはセッションの実行時間が長くなる可能性があります。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

EnableBufferingHistoryTransactions

説明

true の場合、Contact Optimization はコンタクト履歴トランザクションを、Contact Optimization セッションの実行のときに読み取るために、ファイルに書き込みます。false の場合、Contact Optimization は Campaign システム・テーブル内の `UA_ContactHistory` テーブルから読み取ります。

false の場合、Contact Optimization は Contact Optimization セッションの間、`UA_ContactHistory` テーブルに対して読み取りロックを作成します。このロックにより、データベース・ロード・ユーティリティーを使用している場合に、テーブルへの書き込みが失敗することもあります。true の場合、Contact Optimization は照会をファイルに書き込むために要する時間の間だけ、テーブルに対する読み取りロックを作成します。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

MinImprovementPercent

説明

この構成プロパティーを使用して、最適化の割合が指定のレベルに到達した時点で、顧客のグループの処理を停止します。 `MinImprovmentPercent` プロパティーには、反復処理を続けるスコアの改善率 (単位はパーセンテージ) を設定します。デフォルト値はゼロで、これは可能な反復の数に制限がないことを意味します。

デフォルト値

`0.0`

UseFutureContacts

説明

どの最適化ルールの中でも時間枠を使用していない場合は、パフォーマンス向上のための Contact Optimization によるコンタクト履歴テーブルに対する照会を防止できます。この動作は、`UseFutureContacts` 構成プロパティーで制御できます。

`UseFutureContacts` を false に設定した場合、しかも Contact Optimizationセッションの最適化ルールで時間枠を使用していなければ、Contact Optimization はコンタクト履歴テーブルに対する照会を行いません。この設定により、Contact Optimization セッションを実行するために必要な時間が改善されます。ただし、Contact Optimization セッションで時間枠を使用する場合は、コンタクト履歴テーブルに対する照会が行われます。

潜在的な将来のコンタクトをコンタクト履歴に記録する場合は、`UseFutureContacts` を true に設定する必要があります。例えば、次の週に特定の顧客に特別なプロモーションに関する E メール・コミュニケーションを送信することが分かっている場合は、それらのコンタクトをあらかじめプレースホルダーとしてコンタクト履歴テーブルに入れておくことができます。この場合、`UseFutureContacts` を true に設定し、Contact Optimization がコンタクト履歴テーブルを必ず照会するようにします。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

ContinueOnGenerationLoopError

説明

`False` に設定すると、以下の理由で顧客のセットを処理できなくなる場合に、 Contact Optimization は Contact Optimization セッションを停止します。

- 外部アルゴリズムが、そのいずれかの代替解決策でキャパシティー・ルールを満たすことができない。
- コア・アルゴリズムが代替解決策を作成していない。

Contact Optimization は、この条件を以下のエラーでログに記録します。

生成ループは、遊び変数および余剰変数を全部は除去できませんでした
(The generation loop was unable to eliminate all slack and surplus variables)

True に設定すると、Contact Optimization は、生成ループ・エラーをトリガーしたセット内のすべての顧客をスキップします。その後、Contact Optimization は、Contact Optimization セッション内の次の顧客セットの処理を続行します。 Contact Optimization が一部のルールに違反し、すべてのルールとデータを適用せずにこの結果を生成した可能性があります。Optimize|logging|enableBailoutLogging プロパティーも TRUE に設定した場合、スキップされた顧客は Contact Optimization インストール・ディレクトリーの partition/partition[n]/logs ディレクトリーの unprocessables_*10-digit-session-ID*.csv に記録されます。生成ループ・エラーが原因でスキップされた顧客の理由は SkippedOnGenerationLoopError になります。

生成ループ・エラーを回避する方法について詳しくは、「*Contact Optimization Troubleshooting and Tuning Guide*」を参照してください。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | Debug

このプロパティは、PCT を処理するためのデバッグレベルを定義します。

ExtraVerbose

説明

推奨コンタクト・テーブル (PCT) の処理された行に関する詳細なログが必要な場合は、この値を yes に設定します。デフォルトでは、この値を yes に設定すると、すべての行がログに記録されます。

PCT の処理された行をログに記録しない場合は、この値を no に設定します。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | DatabaseTuning

これらの構成プロパティーは、データベースのチューニングのためのものです。

UpdateSessionTableStatistics

説明

UpdateSessionTableStatistics パラメーターは、Contact Optimization セッションの実行中に PCT テーブル、RC テーブル、および POA テーブルの統計を更新するための照会を追加します。他のセッションに影響を与えることなくこのパラメーターをセッション・レベルでチューニングすることができます。最新の索引統計を保持することは、これらのテーブルに対する照会のパフォーマンスを向上させる上で役立ちます。このパラメーターは、Contact Optimization のグローバル構成設定にも存在します。

照会を作成して統計を更新する方法は、データベースによって異なります。

DB2 テーブルの統計を更新するには、以下の値を使用します。

```
CALL SYSPROC.ADMIN_CMD('RUNSTATS ON TABLE <TABLENAME>')
```

注: DB2 8 以前を使用する場合、SYSPROC.ADMIN_CMD に類似する機能を実装するための独自のカスタム・ストアード・プロシージャーを作成する必要があります。また、統計を更新するための独自のストアード・プロシージャーを記述して、実行時にそれを UpdateSessionTableStatistics パラメーターを指定して開始し、統計を更新することができます。

Oracle テーブルの統計を更新するには、以下の値を使用します。

```
analyze table <TABLE> compute statistics
```

SQL Server テーブルの統計を更新するには、以下の値を使用します。

```
UPDATE STATISTICS <TABLE>
```

重要: この照会を実行する場合、UA_SYSTEM_TABLES のデータベース・ユーザーに、照会を実行するための特権が必要です。これについては、この UpdateSessionTableStatistics パラメーターで言及されています。セッションを正常に実行するには、正しい値を渡すか、ブランクのままにする必要があります。渡された値が正しくないと、セッションの実行は失敗します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

AllowTempTables

説明

AllowTempTables パラメーターは、データベース・ビューの代わりに一時テーブルを作成して、Contact Optimization セッションの実行時にそのデータを設定します。このパラメーターを有効にすると、Contact Optimization セッション実行の実行時パフォーマンスを改善するのに役立ちます。このパラメーターについて詳しくは、「*IBM Contact Optimization Troubleshooting and Tuning Guide*」の『*Optimize a transaction query for performance improvements*』を参照してください。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

Campaign | partitions | partition[n] | Optimize | logging

このプロパティーは、Contact Optimization のログ設定を定義します。

logMaxBackupIndex

説明

この整数は、保管するバックアップファイルの数に設定します。これは、Contact Optimization サーバー・ログ (Contact Optimization インストール済み環境の partitions/partition[n]/logs ディレクトリーにある unica_acosvr_*SESSIONID*.log) に影響を及ぼします。.

デフォルト値

5

logProcessId

説明

Contact Optimization サーバー・プロセスの ID を Contact Optimization サーバー・ログ (Contact Optimization インストール済み環境の partitions/partition[n]/logs ディレクトリーにある unica_acosvr_*SESSIONID*.log) に記録する場合は、True に設定します。それ以外の場合は、False に設定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

loggingCategories

説明

ログに記録するデータのカテゴリーを、コンマ区切りリストとして指定できます。この設定は、Contact Optimization サーバー・ログ (Contact Optimization インストール済み環境の partitions/partition[n]/logs ディレクトリーにある unica_acosvr_*SESSIONID*.log) に影響を及ぼします。.

デフォルト値

all

有効な値

all | bad_order | cell_access | commands | config | data_errors | dbload | file_access | general | memory | procrun | query | sort | sysquery | table_access | table_io | table_mapping | webproc

loggingLevels

説明

ログに記録するサーバデータの詳細を設定できます。

この設定は、Contact Optimization サーバー・ログ (Contact Optimization インストール済み環境の partitions/partition[n]/logs ディレクトリーにある unica_acosvr_*SESSIONID*.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

enableBailoutLogging

説明

True に設定すると、Contact Optimization は、コンマ区切り値 (CSV) 形式で別個のファイルを生成します。CSV ファイルには、Contact Optimization が処理できない顧客の詳細情報が含まれています。以下のいずれかが当てはまる場合、Contact Optimization は顧客を処理できません。

- Contact Optimization が MaxAlternativesPerCustomerEvaluated で設定された限度を超え、顧客に有効な選択肢がない場合。
- ContinueOnGenerationLoopError が True に設定され、Contact Optimization で生成ループ・エラーが発生する場合。

1 行が 1 人の顧客に対応します。最初の列は顧客 ID で、2 番目の列は Contact Optimization がその顧客を処理できなかった理由です。このファイルは unprocessables_*sessionID*.csv という名前で、Contact Optimization インストール済み環境の partitions/partition[n]/logs ディレクトリーにあります。

False に設定した場合、Contact Optimization は、処理できない顧客のリストを生成しません。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

logMaxFileSize

説明

この整数は、ログファイルの最大サイズを表すバイト数に設定します。Contact Optimization は、ログ・ファイルがこのサイズに達すると、ファイルを作成します。この設定は、Contact Optimization サーバー・ログ (Contact Optimization インストール済み環境の partitions/partition[n]/logs ディレクトリーにある unica_acosvr_*SESSIONID*.log) に影響を及ぼします。.

デフォルト値

10485760

enableLogging

説明

ログへの記録を有効にするには、`True` に設定します。それ以外の場合は、`False` に設定します。この設定は、Contact Optimization サーバー・ログ (*Optimize_installation_directory*/partitions/partition[n]/logs/unica_acosvr_*SESSIONID*.log) に影響を及ぼします。

デフォルト値

`True`

有効な値

`True | False`

defaultFilePermissions (UNIX のみ)

説明

生成されるログ・ファイルの権限レベル (数値形式)。例えば、777 は、読み取り、書き込み、および実行の権限を表します。

デフォルト値

`660` (所有者とグループは、読み取り権限と書き込み権限だけを持ちます。)

Distributed Marketing 構成プロパティー

このセクションでは、構成ページの Distributed Marketing 構成プロパティーについて説明します。

追加の構成プロパティーは、Distributed Marketing インストール・ディレクトリーの下にある XML ファイルの中に存在します。

Collaborate | navigation

これらの構成プロパティーは、ナビゲーション設定のためのものです。

welcomePageURI

説明

Distributed Marketing 索引ページの Uniform Resource Identifier。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

`affiniumcollaborate.jsp?cat=home`

projectDetailpageURI

説明

Distributed Marketing 詳細ページの Uniform Resource Identifier。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

`uapprojectservlet?cat=projectabs&projecttype=CORPORATE&projectid=`

seedName

説明

Marketing Operations アプリケーションによって内部で使用されます。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

`Collaborate`

type

説明

Marketing Operations アプリケーションによって内部で使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

`Collaborate`

httpPort

説明

アプリケーション・サーバーによって Distributed Marketing アプリケーションへの接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

`7001`

httpsPort

説明

アプリケーション・サーバーによって Distributed Marketing アプリケーションへのセキュア接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

`7001`

serverURL

説明

Distributed Marketing インストールの URL。

ユーザーが Chrome ブラウザーを使用して Distributed Marketing にアクセスする場合は、URL に完全修飾ドメイン・ネーム (FQDN) を使用します。FQDN を使用しない場合は、Chrome ブラウザーで製品 URL にアクセスできません。

デフォルト値

`http://localhost:7001/collaborate`

displayName

説明

内部的に使用されます。

デフォルト値

`Distributed Marketing`

timeout_redirection

説明

タイムアウト URL が表示されます。空の場合、Distributed Marketing のログアウト・ページが表示されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Collaborate | UDM Configuration Settings

これらの構成プロパティーは、構成設定のためのものです。

serverType

説明

使用している Web アプリケーション・サーバーのタイプ。有効値は `WEBLOGIC` または `WEBSPHERE` です。

デフォルト値

userManagerSyncTime

説明

Marketing Platform と同期するための時間を表すミリ秒数。デフォルト値は 3 時間に相当します。

デフォルト値

`10800000`

showServerLiveClock

説明

この構成パラメーターは、サーバーのクロックとタイム・ゾーンの情報を示します。このパラメーターの値を `True` に設定すると、サーバーのタイム・ゾーンと共にサーバー時間を示すライブ・クロックを表示するメッセージが、「サマリー」タブと「ワークフロー」タブ (表示モードと編集モードの両方)、「スケジューラー」ポップアップ、およびタスク後のポップアップ・ページである「リスト」、「オンデマンド・キャンペーン」、「企業キャンペーン」に表示されます。

デフォルト値

`False`

有効値

`TRUE | FALSE`

firstMonthInFiscalYear

説明

会計年度の最初の月。デフォルトは 0 で、1 月を表します。

デフォルト値

`0`

systemUserLoginName

説明

システム・タスク (システム・タスク・モニターやスケジューラーなど) で使用するための、 Marketing Platform ユーザーのログイン名。 IBM は、システム・ユーザーを通常の Distributed Marketing ユーザーとしないように強くお勧めします。

デフォルト値

`[CHANGE-ME]`

searchModifiedTasksForSummaryFrequencyInSeconds

説明

「サマリー」タブを最新表示するために、タスク実行での変更を検索する頻度 (秒単位)。

デフォルト値

`10`

collaborateFlowchartStatusPeriod

説明

フローチャート・ステータス検査の間隔 (ミリ秒単位)。

デフォルト値

`100000`

collaborateFlowchartStatusPeriodRunning

説明

フローチャートの実行中にフローチャート・ステータス検査を行う間隔 (ミリ秒単位)。

デフォルト値

`2000`

enableEditProjectCode

説明

`true` に設定されている場合、「新規リスト (New List)」ウィザードの「サマリー」ページでリスト・コードを編集できます。`false` に設定されている場合、リスト・コードを編集できません。

デフォルト値

`TRUE`

有効値

`TRUE | FALSE`

minimumDelayForExecutionMonitoring

説明

オプション。「フローチャート実行のモニター」ページに表示されるまでの実行の最小遅延 (秒単位) を定義します。

デフォルト値

`10800`

validateAllWizardSteps

説明

ウィザード中の未表示のステップにある必須フィールドを Distributed Marketing に検査させるかどうかを決めます。プロジェクト・ウィザードで「完了」をクリックした後に生じる動作を、このパラメーターで変更します。

- `true`: ウィザードを使用してプロジェクトを作成する際、ウィザード中の未表示の全ステップ (ワークフロー、トラッキング、添付ファイルを除く) にある、すべての必須フィールドを Distributed Marketing に検査させます。空白の必須フィールドがある場合、ウィザードはそのページにジャンプして、エラー・メッセージを表示します。
- `false`: Distributed Marketing は、ウィザード中の未表示のステップにある必須フィールドを検査しません。

注: Distributed Marketing は、現在のページに空白の必須フィールドがないかを自動的に検査します。このパラメーターは、「完了」がクリックされた後に、 Distributed Marketing がすべてのページを検査して空白の必須フィールドの有無を調べるかどうかを制御します。

デフォルト値

`True`

有効値

`TRUE | FALSE`

Collaborate | UDM Configuration Settings | Attachment

これらの構成プロパティーは、添付ファイル設定のためのものです。

collaborateModeForAttachments

説明

Distributed Marketing は、フローチャートの実行によって生成された添付ファイルを、Campaign サーバーから以下のモードで取得できます。

- Directory (デフォルト)
- HTTP
- FTP
- TFTP
- SFTP

デフォルト値

`True`

有効値

True | False

collaborateAttachmentsDIRECTORY_directory

説明

モードがデフォルト値の Directory に設定されている場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得する Campaign サーバー内のアドレスを示します。

デフォルト値

¥Affinium¥Campaign¥partitions¥partition1

collaborateAttachmentsDIRECTORY_deletefile

説明

値 True は、元のファイルがコピー後に削除されることを示します。モードが Directory に設定されている場合、デフォルトは false です。

デフォルト値

False

有効値

True | False

collaborateAttachmentsFTP_server

説明

モードが FTP に設定されている場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得するサーバーを示します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_username

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が FTP の場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得する FTP サーバーにログインするためのユーザー名を示します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_password

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が FTP の場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得する FTP サーバーにログインするためのパスワードを示します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_account

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が FTP の場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得する FTP サーバーにログインするためのアカウントを示します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_directory

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が FTP である場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得する FTP サーバー上のディレクトリーを示します。 Windows オペレーティング・システムの場合に Distributed Marketing が添付ファイルを取得できる FTP デフォルト・ディレクトリーに関する相対ディレクトリー・パスを受け入れます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_transfertype

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が FTP の場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得するために使用する FTP サーバーのファイル転送タイプを示します。値は ASCII または BINARY とすることができます。デフォルトは ASCII です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_deletefile

説明

オプション。値 True は、元のファイルがコピー後に削除されることを示します。パラメーター collaborateModeForAttachments が HTTP の場合、デフォルトは false です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsHTTP_url

説明

パラメーター collaborateModeForAttachments が HTTP の場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得する HTTP URL を示します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsHTTP_deletefile

説明

オプション。値 `True` は、元のファイルがコピー後に削除されることを示します。パラメーター collaborateModeForAttachments が `HTTP` の場合、デフォルトは `false` です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsTFTP_server

説明

パラメーター collaborateModeForAttachments が `TFTP` の場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得するサーバーを示します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsTFTP_port

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が `TFTP` の場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得するポートを示します。

デフォルト値

`69`

collaborateAttachmentsTFTP_transfertype

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が `TFTP` の場合、 Distributed Marketing が添付ファイルを取得するために使用するサーバーのファイル転送タイプを示します。有効値は `ASCII` または `BINARY` です。デフォルトは `ASCII` です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_server

説明

SFTP サーバー名 (または IP)。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_port

説明

オプション。 FTP サーバー・ポート。

デフォルト値

22

collaborateAttachmentsSFTP_username

説明

SFTP サーバーにログインするためのユーザー名。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_password

説明

オプション。 SFTP サーバーにログインするための SFTP パスワード。これは、サーバーによって必要とされる場合で、usepassword=true のときに使用されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_usekey

説明

オプション。認証ユーザーのために秘密鍵ファイルを使用します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

collaborateAttachmentsSFTP_keyfile

説明

オプション。 SFTP サーバーにログインするための SFTP 鍵ファイル名 (サーバーによって必要とされる場合で、usekey=true のときに使用されます)。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_keypassphrase

説明

SFTP サーバーにログインするための SFTP パスフレーズ。これは、サーバーによって必要とされる場合で、usekey=true のときに使用されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_knownhosts

説明

オプション。既知のホストのファイル名 (サーバーによって必要とされる場合に使用されます)。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_directory

説明

オプション。 Windows オペレーティング・システムの場合に Distributed Marketing が添付ファイルを取得できる FTP デフォルト・ディレクトリーに関する相対ディレクトリー・パスを受け入れます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_deletefile

説明

オプション。可能であれば元のファイルをコピーの後に削除します。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True | False`

mergeEnabled

説明

文書のマージを使用可能にするかどうかを決めます。

- true: マージを使用可能にします (デフォルト)。
- false: マージを使用不可にします。

デフォルト値

`True`

有効な値

`True | False`

mergeFullWritePath

説明

マージ機能が使用可能のとき、このパラメーターは、ローカル・マシン上のマージ済みデータ・ファイルへの絶対パスを示します。

デフォルト値

c:/temp

mergeDataLimitSize

説明

Microsoft Word でマージするデータのサイズの上限を示します。サイズは行数で示されます (例えば、値 100 はマージ済みファイルの内容が 100 行を超えてはならないことを示します)。つまり、ファイル内の行数がこのパラメーターの値よりも大きい場合、このファイルではマージを使用できません。

デフォルト値

1000

validateFileUpload

説明

validateFileUpload プロパティーは、ご使用のシステムがアップロードされるファイル・タイプを検証するかどうかを確認するために使用されます。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

upload_allowedFileTypes

説明

Distributed Marketing でアップロード可能なファイルのタイプを示します。

デフォルト値

doc ppt xls pdf gif jpeg png mpp

upload_fileMaxSize

説明

アップロード可能なファイルの最大サイズの制限を示します。

デフォルト値

5000000

Collaborate | UDM Configuration Settings | Attachment Folders

これらの構成プロパティーは、添付ファイル・フォルダー設定のためのものです。

uploadDir

説明

Distributed Marketing アップロード・ディレクトリーの絶対パス。このパスを編集して、Distributed Marketing アップロード・ディレクトリーへの

絶対パスが含まれるようにします。例えば、`c:¥DistributedMarketing¥projectattachments` と指定します。 UNIX をご使用の場合、このディレクトリー内のファイルを読み取り、書き込み、および実行する権限が Distributed Marketing のユーザーに与えられていることを確認してください。

デフォルト値

`projectattachments`

taskUploadDir

説明

Distributed Marketing タスク・アップロード・ディレクトリーの絶対パス。このパスを編集して、Distributed Marketing アップロード・ディレクトリーへの絶対パスが含まれるようにします。例えば、`c:¥DistributedMarketing¥taskattachments` と指定します。 UNIX をご使用の場合、このディレクトリー内のファイルを読み取り、書き込み、および実行する権限が Distributed Marketing のユーザーに与えられていることを確認してください。

デフォルト値

`taskattachments`

Collaborate | UDM Configuration Settings | Campaign Integration

これらの構成プロパティーは、Campaign Integration の設定用です。

defaultCampaignPartition

説明

デフォルトの Campaign パーティション。プロジェクト・テンプレート・ファイルで *<campaign-partition-id>* タグを定義しない場合、Distributed Marketing はこのパラメーターを使用します。

デフォルト値

`partition1`

defaultCampaignFolderId

説明

デフォルトの Campaign フォルダー ID。プロジェクト・テンプレート・ファイルで *<campaign-partition-id>* タグを定義しない場合、Distributed Marketing はこのパラメーターを使用します。

デフォルト値

`2`

Collaborate | UDM Configuration Settings | Datasource

これらの構成プロパティーは、データ・ソース設定用です。

jndiName

説明

Distributed Marketing データベースのデータ・ソース名。

デフォルト値

`collaborateds`

asmJndiName

説明

Marketing Platform データベースのデータ・ソース名。ユーザーの同期化のためだけに使用されます。

デフォルト値

`UnicaPlatformDS`

Collaborate | UDM Configuration Settings | Flowchart

これらの構成プロパティーは、フローチャート設定のためのものです。

enableFlowchartPublishEvent

説明

フローチャートが公開されるとき、Distributed Marketing が Campaign によって送信されるイベントを受け取るかどうかを指定します。

デフォルト値

`True`

flowchartRepublishOverwriteUserVarPrompt

説明

フローチャートが再公開されるとき、「ユーザー変数」プロンプトが上書きされるかどうかを指定します。

デフォルト値

`False`

flowchartRepublishOverwriteProcParamPrompt

説明

フローチャートが再公開されるとき、「プロセス・パラメーター」プロンプトが上書きされるかどうかを指定します。

デフォルト値

`False`

flowchartServiceCampaignServicesURL

説明

フローチャートの実行、フローチャート・データの取得、その他のために使用する CampaignServices Web サービスの URL。

デフォルト値

`http://[server-name]:[server-port]/Campaign/services/CampaignServices30Service`

flowchartServiceCampaignServicesTimeout

説明

タイムアウト・エラーを発行する前に、Distributed Marketing が Campaign サービスとの通信を待機する時間 (ミリ秒数)。

デフォルト値

`600000`

flowchartServiceNotificationServiceURL

説明

Campaign からの通知を受け取る、 Distributed Marketing の通知サービスの URL。 Distributed Marketing を動作させるには、このパラメーターを設定する必要があります。

注: 非標準のコンテキスト・ルートを使用する場合、このパラメーターを指定する必要があります。

デフォルト値

`http://[server-name]:[server-port]/collaborate/flowchartRunNotifyServlet`

flowchartServiceCampaignServicesAuthorizationLoginName

説明

すべてのデータ・ソースへのアクセス権限を含む管理権限を持つ Campaign ユーザー。 asm_admin など。

デフォルト値

`[CHANGE-ME]`

flowchartServiceScheduleServices10Timeout

説明

タイムアウト・エラーを発行する前に、Distributed Marketing が Marketing Platform スケジューラーとの通信を待機する時間 (ミリ秒)。

デフォルト値

`600000`

flowchartServiceScheduleServices10MaxRetries

説明

エラーを発行する前に、Distributed Marketing が Marketing Platform スケジューラーとの接続を試行する回数。

デフォルト値

3

flowchartServiceScheduleServices10RetryPollPeriod

説明

Marketing Platform スケジューラーとの通信を再試行する前に、Distributed Marketing が待機する秒数。

デフォルト値

60

flowchartServiceScheduleServices10ThrottleType

説明

スケジュール設定されたフローチャート実行の制限のタイプ。有効な値は以下のとおりです。

- 0: 制限なし (制限の値は無視されます)
- 1: フローチャート・インスタンスごとの制限
- 2: すべてのフローチャートの制限 (デフォルト)

デフォルト値

2

flowchartServiceScheduleServices10ThrottleValue

説明

同時に実行できるスケジュール設定されたフローチャートまたはフローチャート・インスタンスの最大数。

デフォルト値

10

flowchartServiceSchedulerMonitorPollPeriod

説明

オプション。スケジューラー・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

10

flowchartServiceSchedulerMonitorRemoveSize

説明

オプション。一度にキューからの削除を試みるジョブの数を設定します。スケジューラー・モニターは、この値で指定された増分を単位として、イベント・キューから何もなくなるまでイベントを削除し続けます。

デフォルト値

10

flowchartServiceIsAliveMonitorTimeout

説明

フローチャート実行の開始から、isAlive モニターの Campaign に対する定期的な照会まで待機する期間 (秒数)。

デフォルト値

900

flowchartServiceIsAliveMonitorMaxRetries

説明

isAlive モニターで Campaign に送信される照会の最大数であり、この数を超えるとフローチャート実行エラーがスローされます。

デフォルト値

10

flowchartServiceIsAliveMonitorPollPeriod

説明

isAlive モニターが Campaign に照会を行ってから、次の照会まで待機する時間 (秒数)。

デフォルト値

600

Collaborate | UDM Configuration Settings | History

これらの構成プロパティーは、履歴設定のためのものです。

enableRevisionHistoryPrompt

説明

ユーザーがプロジェクト、要求、または承認を保存するときに変更コメントを追加するよう求めるプロンプトが出るようにします。

デフォルト値

False

有効な値

TRUE | FALSE

runHistoryKeep_LIST

説明

LIST プロジェクト用に保持する実行履歴レコードの数。値が <=0 の場合、Distributed Marketing はすべての実行履歴レコードを保持します。

デフォルト値

-1

runHistoryKeep_LOCAL

説明

ローカル・プロジェクトを保持するための、(リストまたは Campaign フローチャート用の) 実行履歴レコードの数。値が <=0 の場合、Distributed Marketing はすべての実行履歴レコードを保持します。

デフォルト値

-1

runHistoryKeep_CORPORATE

説明

企業プロジェクトを保持するための (実行フローチャート・タスクごとの) 実行履歴レコードの数。値が <=0 の場合、Distributed Marketing はすべての実行履歴レコードを保持します。

デフォルト値

-1

Collaborate | UDM Configuration Settings | Integration Services

これらの構成プロパティーは、統合サービス設定のためのものです。

enableIntegrationServices

説明

この構成プロパティーは、カスタム・フォーム検証を有効または無効にします。

デフォルト値

integrationProcedureDefintionPath

説明

この構成プロパティーは、procedure-plugins.xml の場所を指定します。

デフォルト値

[udm-home]/devkits/integration/examples/src/procedure/procedure-plugins.xml

integrationProcedureClasspathURL

説明

この構成プロパティーは、procedure-plugins.xml ファイルに定義されたカスタム検証クラスのコンパイル済みバイナリー・ファイルの場所を指定します。

デフォルト値

file://[udm-home]/devkits/integration/examples/classes/

Collaborate | UDM Configuration Settings | Listing Pages

これらの構成プロパティーは、リスト・ページ設定のためのものです。

listItemsPerPage

説明

1 つのリスト・ページに表示する項目 (行) の数を指定します。この値は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

10

listPageGroupSize

説明

リスト・ページのリスト・ナビゲーターに表示されるページ番号のサイズを指定します。例えば、ページ 1 - 5 は、ページ・グループです。この値は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

5

maximumItemsToBeDisplayedInCalendar

説明

システムがカレンダーに表示するオブジェクトの最大数。このパラメーターを使用して、ユーザーに対するカレンダーの表示を、特定のオブジェクト数だけに制限します。 0 (デフォルト) を設定した場合、制限がないことを示します。

デフォルト値

0

Collaborate | UDM Configuration Settings | List Manager

これらの構成プロパティーは、リスト・マネージャーの設定用です。

listManagerEnabled

説明

オプション。マーケティング担当者のために「サマリー」タブにリスト・マネージャー・セクションを表示するかどうかを決めます。

- true: リスト・マネージャー・セクションが表示されます (デフォルト)
- false: リスト・マネージャー・セクションが非表示になります

リスト・マネージャーを無効にする場合、リスト・マネージャー構成ファイルを構成する必要はありません。

注: 生成した後にリスト・サイズを更新するためには、リスト・マネージャー・テーブルへのデータ・ソースがアクティブになっている必要があります。

デフォルト値

True

有効な値

TRUE | FALSE

listManagerSearchscreenMaxrow

説明

検索画面に返される行の最大数を示します。

デフォルト値

1000

listManagerListPageSize

説明

リスト・マネージャーのページに表示される行数。

デフォルト値

20

listManagerListsMaxrow

説明

リストに表示される行の最大数。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

listManagerResetToValidateIsAllowed_list

説明

デフォルトで、このプロパティーが false に設定されていると、リストからの推奨コンタクトを検証する際に以下のアクションが可能です。

- 検証する (To Validate) > 承認済み (Approved)
- 検証する (To Validate) > 削除済み (Removed)
- 追加済み (Added) > 削除済み (Removed)
- 承認済み (Approved) > 削除済み (Removed)
- 削除済み (Removed) > 承認済み (Approved)

このプロパティーを true に設定した場合、以下のアクションの追加でエラーが生じたときに、選択をリセットすることもできます。

- 削除済み (Removed) > 検証する (To Validate)
- 承認済み (Approved) > 検証する (To Validate)

デフォルト値

False

有効な値

TRUE | FALSE

listManagerResetToValidateIsAllowed_local

説明

デフォルトで、このプロパティーが false に設定されていると、オンデマンド・キャンペーンからの推奨コンタクトを検証する際に以下のアクションが可能です。

- 検証する (To Validate) > 承認済み (Approved)
- 検証する (To Validate) > 削除済み (Removed)
- 追加済み (Added) > 削除済み (Removed)
- 承認済み (Approved) > 削除済み (Removed)
- 削除済み (Removed) > 承認済み (Approved)

このプロパティーを true に設定した場合、以下のアクションの追加でエラーが生じたときに、選択をリセットすることもできます。

- 削除済み (Removed) > 検証する (To Validate)
- 承認済み (Approved) > 検証する (To Validate)

デフォルト値

False

有効な値

TRUE | FALSE

listManagerResetToValidateIsAllowed_corporate

説明

デフォルトで、このプロパティーが false に設定されていると、企業キャンペーン・リストからの推奨コンタクトを検証する際に以下のアクションが可能です。

- 検証する (To Validate) > 承認済み (Approved)
- 検証する (To Validate) > 削除済み (Removed)
- 追加済み (Added) > 削除済み (Removed)
- 承認済み (Approved) > 削除済み (Removed)
- 削除済み (Removed) > 承認済み (Approved)

このプロパティーを true に設定した場合、以下のアクションの追加でエラーが生じたときに、選択をリセットすることもできます。

- 削除済み (Removed) > 検証する (To Validate)
- 承認済み (Approved) > 検証する (To Validate)

デフォルト値

False

有効な値

TRUE | FALSE

Collaborate | UDM Configuration Settings | Lookup Cleanup

これらの構成プロパティーは、ルックアップ・クリーンアップ設定のためのものです。

lookupCleanupMonitorStartDay

説明

未使用のルックアップ・テーブルまたはビューが自動的にクリーンアップされる日を示します。パラメーターは数値で表される曜日で、日曜日 = 1、月曜日 = 2、などとなります。頻度は週ごとです。

デフォルト値

2

lookupCleanupMonitorStartTime

説明

未使用のルックアップ・テーブルまたはビューが自動的にクリーンアップされる時刻を示します。頻度は週ごとです。

デフォルト値

09:30 am

enableLookupCleanup

説明

有効にすると、構成で指定したスケジュールに従ってルックアップ・モニターが実行されます。

デフォルト値

無効

Collaborate | UDM Configuration Settings | Notifications

これらの構成プロパティーは、通知設定のためのものです。

notifyCollaborateBaseURL

説明

Distributed Marketing の URL。 Distributed Marketing をインストールしたコンピューター名および使用するポート番号を入力することにより、URL を編集します。

デフォルト値

http://[server-name]:[server-port]/collaborate/affiniumcollaborate.jsp

notifyDelegateClassName

説明

オプション。サービスによってインストールされる代理実装の完全修飾 Java クラス名を指定します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

notifyIsDelegateComplete

説明

代理実装が完了していることを示します。

デフォルト値

`true`

有効な値

`TRUE | FALSE`

notifyEventMonitorStartTime

説明

オプション。現行ロケールの `java.text.DateFormat` クラスに応じて書式設定される、イベント・モニターを開始する時刻 (SHORT バージョン)。例えば、米国英語の場合、有効なストリングは HH:MM A/PM です。モニターが作成された直後に開始するようにデフォルトが設定されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

notifyEventMonitorPollPeriod

説明

オプション。イベント・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

`33`

notifyEventMonitorRemoveSize

説明

オプション。キューから一度に削除を試みるイベントの数を定義します。

デフォルト値

`10`

Collaborate | UDM Configuration Settings | Notifications | Email

これらの構成プロパティーは、E メール設定用です。

notifyEmailMonitorJavaMailSession

説明

オプション。 E メール通知に使用する、既存の、初期化された JavaMail セッションの JNDI 名を指定します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

notifyEmailMonitorJavaMailHost

説明

組織の SMTP サーバーのマシン名または IP アドレス。

デフォルト値

[なし]

notifyEmailMonitorJavaMailProtocol

説明

オプション。 E メール通知に使用する、E メール・サーバーのトランスポート・プロトコル。

デフォルト値

`smtp`

notifyDefaultSenderEmailAddress

説明

通知 E メールを送信するために使用できる他の有効な E メール・アドレスがない場合、 Distributed Marketing が E メールの送信に使用できる有効な E メール・アドレス。

デフォルト値

`[CHANGE-ME]`

notifySenderAddressOverride

説明

オプション。通知の REPLY-TO および FROM E メール・アドレスに使用する E メール・アドレス。デフォルトで、イベント番号所有者の E メール・アドレスが使用されます。このパラメーターが宣言されないか、空の E メール・アドレスが指定された場合には、デフォルトのアドレスが使用されます。

notifyEmailMonitorStartTime

説明

オプション。 E メール・モニターを開始する時刻。現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスに従って書式設定されます (SHORT バージョン)。例えば、米国英語の場合、有効なストリングは HH:MM A/PM です。デフォルトで、モニターが作成された直後に開始する設定となります。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

notifyEmailMonitorPollPeriod

説明

オプション。 E メール・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

60

notifyEmailMonitorRemoveSize

説明

オプション。キューから一度に削除を試みるイベントの数を定義します。

デフォルト値

10

notifyEmailMonitorMaximumResends

説明

オプション。送信問題が検出された後に E メールの再送信を試行する最大回数。

デフォルト値

1440

emailMaximumSize

説明

E メールの最大サイズ (バイト数)。

デフォルト値

2000000

Collaborate | UDM Configuration Settings | Notifications | Project

これらの構成プロパティーは、プロジェクト設定用です。

notifyProjectAlarmMonitorStartTime

説明

オプション。プロジェクト・アラーム・モニターを開始する時刻。設定しない場合、モニターが作成された直後に開始します。

デフォルト値

10:00 pm

notifyProjectAlarmMonitorPollPeriod

説明

オプション。プロジェクト・アラーム・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

86400

notifyProjectAlarmMonitorScheduleStartCondition

説明

オプション。プロジェクトの開始日の何日前に、Distributed Marketing でユーザーへの開始通知の送信を開始するか。プロジェクトが保留中で、その開始日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに PROJECT_SCHEDULED_START 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

1

notifyProjectAlarmMonitorScheduleEndCondition

説明

オプション。プロジェクトの終了日の何日前に、Distributed Marketing でユーザーへの通知の送信を開始するか。プロジェクトがアクティブになっていて、その終了日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに PROJECT_SCHEDULED_END 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorScheduleCutoffCondition

説明

オプション。プロジェクトが終了するようにスケジュールされていることをユーザーに通知し始めるまでの日数。プロジェクトがアクティブになっていて、その終了日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに CORPORATE_CAMPAIGN_TO_REVIEW 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledStartCondition

説明

オプション。タスクの開始日の何日前に、Distributed Marketing でユーザーへの通知の送信を開始するか。タスクが保留中で、その開始日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_SCHEDULED_START 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

1

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledEndCondition

説明

オプション。タスクの開始日の何日前に、タスクが開始していないことについて、Distributed Marketing でユーザーへの通知の送信を開始するか。タ

スクがアクティブになっていて、その終了日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_SCHEDULED_END 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskLateCondition

説明

オプション。タスクの開始日の何日後に、タスクが開始していないという通知を Distributed Marketing からユーザーに送信し始めるか。タスクが保留中で、そのスケジュールされた開始日が過去の条件日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_LATE 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskOverdueCondition

説明

オプション。タスクの終了日の何日後に、タスクが終了しなかったという通知を Distributed Marketing からユーザーに送信するか。タスクがアクティブになっていて、そのスケジュールされた終了日が過去の条件日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_OVERDUE 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledMilestoneCondition

説明

オプション。タスク・マイルストーンの開始日の何日前に、Distributed Marketing でユーザーへの通知の送信を開始するか。マイルストーン・タスクがアクティブになっていて、そのスケジュールされた終了日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_SCHEDULED_MILESTONE 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

1

Collaborate | UDM Configuration Settings | Notifications | System Task

これらの構成プロパティーは、システム・タスク設定用です。

systemTaskMonitorStartTime

説明

オプション。システム・タスク・モニターを開始する時刻。

- このパラメーターに値 (例えば、11:00 pm) が入っている場合、これは、タスク・モニターが開始される開始時刻です。
- このパラメーターが未定義の場合、モニターは作成された直後に開始されます。

デフォルト値

3

systemTaskMonitorPollPeriod

説明

オプション。システム・タスク・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になる期間 (秒単位)。

デフォルト値

3600

Collaborate | UDM Configuration Settings | Performance

これらの構成プロパティーは、パフォーマンス設定のためのものです。

commonDataAccessLayerFetchSize

説明

このパラメーターは、パフォーマンスに依存する一部の照会のバッチ・サイズを設定するパフォーマンス最適化です。アプリケーションに一度に返される結果セットのレコードの数を決定するために取り出しサイズが使用されます。

デフォルト値

500

commonDataAccessLayerMaxResultSetSize

説明

このパラメーターは、指定された値より長いすべてのリスト・ページ結果を切り抜きます。

デフォルト値

1000

ssdorSearchResultLimit

説明

SSDOR 検索画面によって返される行の最大数。この数値を高い値に増やすと、パフォーマンスが低下する可能性があります。

デフォルト値

500

Collaborate | UDM Configuration Settings | Read Only Lookup Tables

これらの構成プロパティーは、ルックアップ・テーブル設定のためのものです。

lookupTableName

説明

オプション。読み取り専用のルックアップ・テーブルの名前。ルックアップ・テーブル名の末尾に、ワイルドカードであるアスタリスク (*) を含めることができます。フローチャートを再公開するときに、ルックアップ・テーブルはフォーム・エディターで更新されません。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

新しいカテゴリー名

説明

オプション。ルックアップ・テーブルのリストを追加するテンプレートは、フォームのマージ中に更新されません。フローチャートを再公開するときにフォームの属性がルックアップ・テーブルに関連付けられている場合、ルックアップ・テーブルとその内容は更新されません。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Collaborate | UDM Configuration Settings | Reports

これらの構成プロパティーは、レポート設定用です。

reportsAnalysisSectionHome

説明

分析セクション・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Collaborate']
```

reportsAnalysisTabHome

説明

オブジェクト (企業キャンペーン、リスト、またはオンデマンド・キャンペーン) の分析タブ・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Collaborate - Object Specific
Reports']
```

reportsAnalysisCorporateSectionHome

説明

企業のマーケティング担当者の分析セクション・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

`/content/folder[@name='Affinium Collaborate']`

reportsAnalysisCorporateTabHome

説明

企業のマーケティング担当者オブジェクト (企業キャンペーン、リスト、またはオンデマンド・キャンペーン) の分析タブ・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

`/content/folder[@name='Affinium Collaborate - Object Specific Reports']/folder[@name='Corporate Marketer']`

reportsAnalysisFieldMarketerSectionHome

説明

フィールドのマーケティング担当者の分析セクション・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

`/content/folder[@name='Affinium Collaborate']/folder[@name='Field Marketer']`

reportsAnalysisFieldTabHome

説明

フィールドのマーケティング担当者オブジェクト (企業キャンペーン、リスト、またはオンデマンド・キャンペーン) の分析タブ・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

`/content/folder[@name='Affinium Collaborate - Object Specific Reports']/folder[@name='Field Marketer']`

Collaborate | UDM Configuration Settings | Siblings

これらの構成プロパティーは、兄弟設定用です。

siblingService

説明

オプション。他の Distributed Marketing インスタンスへのリンクを作成してイベントを伝搬するために使用します。

デフォルト値

http://[server-name]:[server-port]/collaborate/services/CollaborateIntegrationServices/1.0

新しいカテゴリー名

説明

オプション。現行の Distributed Marketing ベース・インスタンスの兄弟 URL サービスの URL の仕様を提供するテンプレート。他の Distributed Marketing インスタンスへのリンクを作成してイベントを伝搬するために使用します。例えば、http://collaborateserver:7001/collaborate/services/CollaborateIntegrationServices/1.0 などです。この構成ファイルが Distributed Marketing ベース・インスタンスのファイルではない場合、兄弟 URL を指定しないでください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Collaborate | UDM Configuration Settings | Templates

これらの構成プロパティーは、テンプレート設定用です。

templatesDir

説明

すべてのテンプレートが入るディレクトリー。ベスト・プラクティスとして、これを IBM-Home¥DistributedMarketing¥templates への絶対パスに設定することをお勧めします。

デフォルト値

templates

projectTemplatesFile

説明

リスト、オンデマンド・キャンペーン、企業キャンペーンなど、さまざまなプロジェクトを記述したファイルを指定します。

デフォルト値

project_templates.xml

templateAutoGenerateNameEnabled

説明

新規テンプレートのテンプレート名を生成する必要があるかどうかを示します。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

defaultListTableDSName

説明

データ・ソース名が定義されていない場合に、テンプレートのインポート中にテンプレートのデータ・ソース名を割り当てるために使用します。

デフォルト値

ACC_DEMO

templateAdminGroup_Name

説明

複数のグループを指定します。これらのグループに属するユーザーは、Distributed Marketing でテンプレート構成リンクにアクセスすることができます。同じ名前を持つグループが Marketing Platform に存在している必要があります。複数のグループはコンマで区切ってください。

デフォルト値

Template Administrators

Collaborate | UDM Configuration Settings | Workflow

これらの構成プロパティーは、ワークフロー設定用です。

daysInPastRecentTask

説明

Distributed Marketing が最新のタスクを検索する過去の日数。

デフォルト値

14

daysInFutureUpcomingTasks

説明

Distributed Marketing が最新のタスクを検索する今後の日数。

デフォルト値

14

beginningOfDay

説明

午前 0 時から正午を表す有効値で、作業日の開始時間を示します。この設定は、ワークフローにおける作業の完了度のパーセンテージを計算する際の基準として使用されます。

デフォルト値

9

有効な値

0 - 12

numberOfHoursPerDay

説明

1 日当たりの時間数を示します。デフォルトは、標準の 1 日 8 時勤務を示します。この設定は、ワークフローにおける作業の完了度のパーセンテージを計算する際の基準として使用されます。

デフォルト値

`8`

有効な値

`0 - 24`

automaticallyRestartFailedRecurrentTasks

説明

失敗した反復タスクを自動的に再始動するかどうかを決めます。パラメーターの値が false に設定される場合、ユーザーはワークフローまたはタスク後の更新ポップから、失敗したタスク状況を手動で「保留中」に更新する必要があります。スケジュールは、実行保留状態にあるタスクだけを選出します。

値が `True` に設定されている場合、このタスクを再始動するための手操作による介入は必要ありません。

デフォルト値

`True`

有効な値

`True | False`

projectWorkflowRefreshPeriodInSeconds

説明

システム全体のワークフローのリフレッシュ期間 (秒単位)。

デフォルト値

`180`

IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition 構成プロパティー

このカテゴリーのプロパティーは、IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition でのシングル・サインオン用の IBM Marketing Software の構成に使用される値を指定します。

IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition でのシングル・サインオンのセットアップについて詳しくは、「*IBM Campaign* および *IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition* 統合ガイド *(IBM Campaign and IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition Integration Guide)*」を参照してください。

SPSS | 統合

このカテゴリーのプロパティーは、IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition でのシングル・サインオン用の Marketing Platform の構成に使用されます。

IBM SPSS アカウントの Platform ユーザー

説明

IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition でのシングル・サインオン用に作成または特定した IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition アカウントのログイン名を入力します。

デフォルト値

`asm_admin`

使用可能性

このプロパティーは、IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition でのシングル・サインオン用の Marketing Platform の構成にのみ使用されます。

IBM SPSS アカウントのデータ・ソース

説明

このプロパティーは、IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition でのシングル・サインオンを構成したときのシステム・ユーザー用に作成したデータ・ソースの名前に設定します。データ・ソース名として **SPSS_MA_ADMIN_DS** を使用した場合、このプロパティーのデフォルト値を保持することができます。

デフォルト値

`SPSS_MA_ADMIN_DS`

使用可能性

このプロパティーは、IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition でのシングル・サインオン用の Marketing Platform の構成にのみ使用されます。

これはスコアのみの統合ですか?

説明

サポートされていません。

デフォルト値

`FALSE`

使用可能性

このプロパティーは、IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition でのシングル・サインオン用の Marketing Platform の構成にのみ使用されます。

SPSS | integration | partitions | partition [n]

このカテゴリーのプロパティーは、IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition でのシングル・サインオン用の Marketing Platform の構成に使用されます。

IBM SPSS の有効

説明

IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition でのシングル・サインオンを有効にするには、このプロパティーを `TRUE` に設定します。

シングル・サインオンをする必要があるユーザーを持つ各パーティションについては、**SPSS MA EMM Edition | Integration | partitions | partitionTemplate** を使用して、そのパーティションの **enableSPSS** 構成プロパティーを作成する必要があります。テンプレートを使用して作成したカテゴリーの名前は、対応する Campaign パーティションの名前と完全に一致する必要があります。デフォルトの partition1 には既に「**IBM SPSS の有効**」構成プロパティーがあるため、その作成にテンプレートを使用する必要はありません。

デフォルト値

`FALSE`

使用可能性

このプロパティーは、IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition でのシングル・サインオン用の Marketing Platform の構成にのみ使用されます。

SPSS | ナビゲーション

このカテゴリーのプロパティーは、IBM Campaign との IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition の統合に影響します。これらのプロパティーは、Decision Management サーバーと IBM SPSS Collaboration and Deployment Services サーバーの場所を定義します。

IBM SPSS Decision Management のサーバーの URL

説明

IBM SPSS Decision Management サーバーの URL。この URL は、サーバー名またはサーバー IP アドレスの後ろに、サーバー上で IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition がホストされているポートを付加したもので構成します。

デフォルト値

以下のいずれかの形式です。

- `http://<server name>:<port>/DM`
- `http://<server IP address>:<port>/DM`

有効な値

IBM SPSS Decision Management サーバーの URL。

コラボレーションおよび配置サービスのホスト

説明

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services サーバーの名前。

デフォルト値

なし

有効な値

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services がインストールおよび構成されているサーバーの有効なサーバー名またはサーバー IP アドレス。

コラボレーションおよび配置サービスのポート

説明

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services サーバーが配置されているポート。

デフォルト値

なし

有効な値

IBM SPSS Collaboration and Deployment Services がホストされている有効なポート番号。

Opportunity Detect および Interact Advanced Patterns 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Opportunity Detect および Interact Advanced Patterns 構成プロパティーについて取り上げます。

IBM Opportunity Detect and Interact Advanced Patterns | ナビゲーション

このカテゴリー内のプロパティーは、IBM Marketing Software 製品間をナビゲートするのに内部的に使用する値を指定します。

welcomePageURI

説明

IBM Opportunity Detect 索引ページの Uniform Resource Identifier。この値は、IBM Marketing Software アプリケーションによって内部的に使用されます。この値を変更することは勧められていません。

デフォルト値

`/index.jsp`

seedName

説明

IBM Marketing Software アプリケーションによって内部的に使用されます。この値を変更することは勧められていません。

デフォルト値

`Detect`

type

説明

IBM Marketing Software アプリケーションによって内部的に使用されます。この値を変更することは勧められていません。

デフォルト値

`Detect`

httpPort

説明

アプリケーション・サーバーによって Opportunity Detect アプリケーションへの接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

`7001`

httpsPort

説明

アプリケーション・サーバーによって Opportunity Detect アプリケーションへのセキュア接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

`7001`

serverURL

説明

Opportunity Detect インストールの URL。HTTP または HTTPS のいずれかのプロトコルを受け入れます。クラスター環境において、配置にデフォルトのポート `80` または `443` とは異なるポートを使用する場合は、このプロパティーの値にポート番号を使用しないでください。

ユーザーが Chrome ブラウザーを使用して Opportunity Detect にアクセスする場合は、URL に完全修飾ドメイン・ネーム (FQDN) を使用します。FQDN を使用しない場合は、Chrome ブラウザーで製品 URL にアクセスできません。

重要: IBM Marketing Software 製品が分散環境にインストールされている場合、スイートに属するすべてのアプリケーションのナビゲーション URL では IP アドレスではなく、マシン名を使用する必要があります。

デフォルト値

[server-url]

logoutURL

説明

内部的に使用されます。この値を変更することは勧められていません。

ユーザーが IBM Marketing Software 内のログアウト・リンクをクリックすると、IBM Marketing Platform は、この値を使用して、登録済みの各アプリケーションのログアウト・ハンドラーを呼び出します。

serverURLInternal

説明

内部的に使用されます。この値を変更することは勧められていません。

displayName

説明

内部的に使用されます。この値を変更することは勧められていません。

デフォルト値

`Opportunity Detect`

IBM Opportunity Detect and Interact Advanced Patterns | システム | Streams リモート制御 Web サービス (Streams Remote Control Web Service)

このカテゴリーのプロパティーは、IBM InfoSphere Streams リモート制御 Web サービスの URL を指定します。 Opportunity Detect 設計時環境は、このサービスを介して Opportunity Detect ランタイム環境と通信します。

ServerURL

説明

このプロパティー値は、製品のインストール担当者がインストール時に設定します。デフォルトのポート番号は 8080 です。

デフォルト値

`http://[SRCSHost]:[SRCSPort]/axis2/services/RemoteControl`

IBM Opportunity Detect and Interact Advanced Patterns | システム | Real Time Connector

このカテゴリーのプロパティーは、Interact を Interact Advanced Patterns と統合する際か、入力データ用に Web サービス・コネクターを使用する際に使う Web サービスの URL を指定します。

ServerURL

説明

このプロパティー値は、製品のインストール担当者がインストール時に設定します。デフォルトのポート番号は 8282 です。

デフォルト値

http://[RealTimeConnectorHost]:[RealTimeConnectorPort]/servlets/StreamServlet

IBM Opportunity Detect and Interact Advanced Patterns | システム | Monitoring

このカテゴリーのプロパティーは、モニタリング・ツールに影響する値を指定します。

ポーリング間隔 (秒数)(Poll Interval (In Seconds))

説明

モニター・サービスが統計を取得するためにストリーム・サーバーに対してポーリングを行う間隔 (秒数)。デフォルトは 300 秒、つまり 5 分です。

デフォルト値

300

保存時間 (日数) (Retaining Time (In Days))

説明

ポーリングしたデータをモニタリング・サービスがデータベースに保持する日数。デフォルトは 10 日です。ここで指定した時間より古いデータは消去されます。

デフォルト値

10

IBM Opportunity Detect and Interact Advanced Patterns | システム | 処理オプション (Processing Options)

このカテゴリーのプロパティーは、モニタリング・ツールに影響する値を指定します。

キャッシュ・プロファイル・レコード (Cache profile records)

説明

Opportunity Detect は、プロファイル・データをキャッシュに入れて、最適なパフォーマンスを得られるようにします。プロファイル・データのキャッシングを有効にするには、このプロパティーの値を True に設定します。

大量のプロファイル・データ・セットがある場合は、このプロパティーをデフォルト値 (False) のままにすることもできます。その場合は、プロファイル・データのキャッシングが無効になるため、大量のプロファイル・データのキャッシングによってメモリー不足の問題が発生するのを防止できます。

このプロパティー値を変更する場合、Web アプリケーション・サーバー、Streams インスタンス、および StreamsRCS サービスを再始動し、影響を受けるすべての配置をやり直す必要があります。

デフォルト値

False

IBM Opportunity Detect and Interact Advanced Patterns | ロギング

このカテゴリーのプロパティーは、Opportunity Detect ログ・ファイルの場所を指定します。

log4jConfig

説明

Opportunity Detect がログを記録するために使用する構成ファイルの場所。この値はインストール中に自動的に設定されますが、このパスを変更する場合には、変更を適用するために Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

デフォルト値

`[absolute-path]/conf/detect_log4j.properties`

IBM Interact Advanced Patterns | システム | Interact Design Service

このカテゴリーのプロパティーは、Interact を Interact Advanced Patterns と統合した場合に、Interact で拡張パターンを自動的に作成し、配置するための Web サービスの URL を指定します。

ServerURL

説明

この Web サービスが、Interact と Interact Advanced Patterns 設計環境の間の統合ポイントになります。このプロパティー値は、製品のインストール担当者がインストール時に設定します。デフォルトのポート番号は 8181 です。

デフォルト値

`http://[InteractServiceHost]:[InteractServicePort]/axis2/services/InteractDesignService`

第 22 章 IBM Marketing Software ユーザー・インターフェースでのスタイル・シートおよびイメージのカスタマイズ

ユーザー・インターフェースにはほとんどの IBM Marketing Software 製品ページが表示されますが、このユーザー・インターフェースの外観をカスタマイズできます。カスケーディング・スタイル・シートを編集して、独自のグラフィックスを指定することによって、ユーザー・インターフェースのイメージ、フォント、および色の多くは変更できます。

IBM のロゴと配色を会社のロゴと配色でオーバーライドできるため、これは、再ブランド設定とよばれることがあります。

スタイル・シート

IBM HTML フレーム・セットは、`unica.war` ファイルの中の `css` ディレクトリーの中にある多数のカスケーディング・スタイル・シートによってフォーマットされます。これらのスタイル・シートのいくつかは、`css¥theme` ディレクトリーの中の `corporatetheme.css` というスタイル・シートをインポートします。デフォルトでは、この `corporatetheme.css` ファイルはブランクです。このブランク・ファイルを独自の色とイメージを使用するファイルと置き換えると、フレーム・セットの外観が変わります。

IBM では、`unica.war` ファイルの `css¥theme¥DEFAULT` ディレクトリーの中に、例となる `corporatetheme.css` ファイルも用意されています。このスタイル・シート例には、カスタマイズ可能な指定がすべて含まれ、各指定がフレーム・セットのどの領域に影響を及ぼすのかを説明するコメントも含まれています。このセクションで説明されている方法で、このファイルを独自の変更を加えるためのテンプレートとして使用することができます。

イメージ

使用できるイメージは、PNG、GIF、または JPEG のいずれかです。

IBM は、一部のボタンとアイコンにスプライトを使用しています。スプライトの使用により、サーバーに送られる HTTP 要求の数が減り、フリッカーが発生する可能性も減らすことができます。IBM がスプライトを使用する個所では、イメージの名前に `_sprites` が含まれています。これらのイメージを置き換える場合は、同じディメンションのスプライトを使用してください。それが、スタイル・シートへの変更が最も少なくて済むからです。スプライトについてあまり経験がない場合は、インターネットの情報を参照してください。

企業テーマの作成

このガイドラインに従って、IBM Marketing Software フレーム・セットの企業テーマを作成します。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

手順

1. Marketing Platform をインストール済みの場合、unica.war ファイルが含まれた EAR ファイルを作成してあるか、unica.war ファイルをインストールしてある可能性があります。いずれの場合も、必要に応じてインストール済みファイルを解凍して、unica.war ファイルに含まれているファイルおよびディレクトリーにアクセスします。
2. css¥theme¥DEFAULT ディレクトリーの下位にある corporatetheme.css ファイルを見つけます。
3. 各スタイル・シート指定が影響を及ぼすフレームワークの領域について詳しくは、corporatetheme.css ファイルの中のコメントを参照してください。
4. 独自のイメージを作成する際のガイドとして、css¥theme¥img ディレクトリー内のイメージを参照してください。
5. テーマを好みのグラフィックス・プログラムで作成し、イメージ名、フォント、およびフォントと背景色の 16 進数指定をメモします。
6. corporatetheme.css ファイルを編集して、独自のフォント、色、およびイメージを使用できるようにします。

関連タスク:

『企業テーマの適用』

企業テーマの適用

この手順に従って、企業テーマを IBM Marketing Software ユーザー・インターフェースに適用します。

手順

1. 使用したいイメージ (例えば独自のロゴ、ボタン、アイコン) を、Marketing Platform がインストールされているマシンからアクセス可能なディレクトリーに入れます。イメージをどこに配置するかを決定する際は、『企業テーマの作成』で説明されている方法で作成した、変更済みの corporatetheme.css ファイルを参照してください。
2. Marketing Platform が配置されている場合は、配置解除してください。
3. Marketing Platform をインストール済みの場合、unica.war ファイルが含まれた EAR ファイルを作成してあるか、unica.war ファイルをインストールしてある可能性があります。いずれの場合も、以下のようにしてください。
   - WAR ファイルまたは EAR ファイルのバックアップを作成し、そのバックアップを別の名前 (例えば original_unica.war) で保存します。こうすることで、必要な場合には変更をロールバックすることができます。
   - インストール済みのファイルを必要に応じて解凍して、unica.war に含まれているファイルおよびディレクトリーにアクセスします。
4. 『企業テーマの作成』で説明されている方法で作成した変更済みの corporatetheme.css ファイルを、css¥theme ディレクトリーに入れます。

   これにより、すでにそこに入っているブランクの corporatetheme.css ファイルが上書きされます。

5. `unica.war` ファイル、および必要な場合にはそのファイルが含まれている EAR ファイルを再作成します。
6. WAR ファイルまたは EAR ファイルを配置します。
7. ブラウザーのキャッシュを消去して、IBM Marketing Software にログインします。

   新規テーマが適用されるはずです。

関連タスク:

713 ページの『企業テーマの作成』

IBM 技術サポートへのお問い合わせの前に

資料を調べても解決できない問題に遭遇した場合、貴社の指定の窓口担当者は IBM 技術サポートとの通話を記録することができます。問題を効率的かつ正しく解決するために、以下のガイドラインを使用してください。

貴社の指定の窓口担当者でない方は、社内の IBM 管理者にお問い合わせください。

注: 技術サポートは、API スクリプトの書き込みまたは作成を行いません。 API オファリングの実装で支援が必要な場合は、IBM 専門サービスにお問い合わせください。

収集する情報

IBM 技術サポートへのお問い合わせの前に、以下の情報をご用意ください。

- 問題の性質についての簡単な説明。
- 問題が生じたときに表示される詳細なエラー・メッセージ。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデータ・ファイル
- 製品およびシステム環境に関する情報 (この情報は「システム情報」の説明に従って取得できます)。

システム情報

IBM 技術サポートにお問い合わせいただいた際に、お客様の環境に関する情報の提供をお願いすることがあります。

問題がログインの妨げになっていない場合、この情報の多くは「バージョン情報」ページから得られます。このページでは、インストール済みの IBM アプリケーションに関する情報が提供されています。

「バージョン情報」ページにアクセスするには、「ヘルプ」>「バージョン情報」を選択します。「バージョン情報」ページにアクセスできない場合、 `version.txt` ファイルをご確認ください。このファイルはアプリケーションのインストール・ディレクトリーの下にあります。

IBM 技術サポートの連絡先情報

IBM 技術サポートへのお問い合わせ方法については、IBM 製品技術サポート Web サイト (http://www.ibm.com/support/entry/portal/open_service_request) を参照してください。

注: サポート要求を入力するには、IBM アカウントを使用してログインする必要があります。このアカウントは IBM カスタマー番号とリンクしていなければなりま

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

せん。アカウントを IBM カスタマー番号に関連付ける方法については、サポート・ポータルの「サポート・リソース」>「ライセンス付きソフトウェア・サポート」を参照してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。 IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

© Copyright IBM Corp. 1999, 2017

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
B1WA LKG1
550 King Street
Littleton, MA 01460-1250
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。 IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があり、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式

においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態で提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。 IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

プライバシー・ポリシーおよび利用条件に関する考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品 (「ソフトウェア・オファリング」) では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。Cookie とは Web サイトからお客様のブラウザーに送信できるデータで、お客様のコンピューターを識別するタグとしてそのコンピューターに保存されることがあります。多くの場合、これらの Cookie により個人情報が収集されることはありません。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項をご確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie および持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無効にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を活用することはできません。

Cookie およびこれに類するテクノロジーによる個人情報の収集は、各国の適用法令等による制限を受けます。この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人情報を収集する機能を提供する場合、 お客様は、個人情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンド・ユーザーへの通知や同意取得の要求も含まれますがそれらには限られません。

お客様は、IBMの使用にあたり、 (1) IBM およびお客様のデータ収集と使用に関する方針へのリンクを含む、お客様の Web サイト利用条件 (例えば、プライバシー・ポリシー) への明確なリンクを提供すること、 (2) IBM がお客様に代わり閲覧者のコンピューターに、 Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置

することを通知すること、ならびにこれらのテクノロジーの目的について説明すること、および(3) 法律で求められる範囲において、お客様または IBM が Web サイトへの閲覧者の装置に Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置する前に、閲覧者から合意を取り付けること、とします。

このような目的での Cookie を含む様々なテクノロジーの使用の詳細については、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』(http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』を参照してください。

Printed in Japan

日本アイ･ビー･エム株式会社
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21